日本戲曲全集
第四十八卷

岸田國士　水木京太
佐藤春夫　關口次郎
犬養健
田島淳

現代篇第十六輯

東京
春陽堂版

「葉櫻」水谷八重子の娘

「命を弄ぶ男ふたり」
金平軍之助の（眼鏡）

「驟雨」の舞臺面

「紙風船」夏川靜江・御橋公

「屋上庭園」澤田正二郎一座

「能祇」の守田勘彌

「殉死」主水・井上正夫

「嫉妬」伊勢子・村田美禰子　松井・伊志井寛

「母親」舞臺面　尾上菊五郎・喜多村綠郎

岸田國士

犬養健　　佐藤春夫

田島淳

關口次郎

水木京太

日本戲曲全集　第四拾八卷　目次

岸田國士篇

佐藤春夫篇

犬養健篇

田島淳篇

水木京太篇

關口次郎篇

岸田國士篇

古い玩具（六場）

時
千九百××年の夏より秋にかけて
所
佛蘭西
人物
白川留雄
ルイーズ・モオブレ
手塚房子
手塚正知
ポオレット
マルセル
ルイーズの下女
手塚の下女
ホテルの女中
無言役――老婦人、若い男二人、勞働者風の男女。

プロロオグ

フオンテエヌブロオの古城――池のほとり――日盛り過ぎ。
白川留雄、池の欄干に倚り、鯉にパンをやつてゐる。長い間。
ポオレットとマルセル、腕を組みながら、留雄の後ろを通り過ぎる。

マルセル　それから、どうしたのさ。
ポオレット　（留雄のゐるのに氣づき）お待ちよ、いつかのあれがゐるから……（留雄の肩に手をかけ、馴れ馴れしく）何してるの。
留雄　（振り向いて、さほど驚いた樣子もなく、心もち眉をよせて、ポオレットの顔を見る）
ポオレット　あたしよ、忘れたの。
留雄　（素氣なく背を向けて）何か用か。
ポオレット　（ちらとマルセルに笑ひかけ）久しぶりね。
留雄　久しぶりだ。
ポオレット　それでおしまひなの。
留雄　（遠くへパンを投げる）
マルセル　駄目よ、行かう。
ポオレット　あんた、その後、西村さんに會つた。

留雄　會つたらどうした。
ポオレット　怒つてた。
留雄　怒つてると思ふなら、あやまりに行け。金が返せなければ、ほかの方法で話をつけるさ。（正面を向く）
ポオレット　いやなこつた、あんな猿。
マルセル　（留雄の顔を見つめ、何か思ひ出したやうに吹き出す）
ポオレット　（マルセルに）何がをかしいんだよ。（留雄の顔を見て、これも何か思ひ出したやうに、吹き出さうとして）およしよ、くだらない。（マルセルの背をたたく）
マルセル　（大袈裟に）あいた。あたしをモデルに使つてくれない。
留雄　君は猿が好きと見えるね。（强ひて笑はうとする）
マルセル　あんたは、そんなでもないわ。
留雄　（背を向けて）ありがたう、さ、向うへ行つた。（パンを投げる）
ポオレット　（マルセルをにらむ眞似して）マルセルがね、あんたと何處かへ行きたいつて。
留雄　殘念だが今日は先約がある。
マルセル　誰かを待つてるの。
留雄　（默つてパンを投げる）

ポオレット　この娘、支那語で「ありがたう」つて云へるのよ。
留雄　うるさいなあ。
ポオレット　うるさいなあ。うるさけりや、勝手におしよ。（マルセルの手を引き遠ざかりながら）野蠻人。
留雄　（ポオレットの方をにらむ）
マルセル　（留雄を見返り）あの顔。
（兩人姿を消す。長い間。）
（老婦人、手眼鏡を持ち、書物を讀みながら通りすぎる。）
（若い男二人、舞踏の足取りにて、口笛を吹きながら通り過ぎる）
（勞働者風の男女抱き合ひながら通る。しばらくして、手塚房子現る。）
房子　よく根氣が續くわね。
留雄　來て御覽なさい。面白いから……。白鳥がね、麵麭を食ふのに、鯉の頭が邪魔になるもんだから、もぢもぢしてるんですよ。
房子　（留雄に寄り添ひ）あなた暑くない。
留雄　いゝえ。（間）手塚君たちは。
房子　もう來るわ、寫眞で大騷ぎ。ルイーズさんを、あづまやに立たせるんですつて。あの人の趣味よ。

留雄　森へ行くんぢやないんですか。もう日が暮れるのに……。
房子　ほんと。立ち通しぢやたまらないわ。
留雄　手塚君はあしたからでしたね、ジュネエヴの會議は。
房子　えゝ。だからお遊びにいらつしやいね。
留雄　だからつて云ふこともないけれど……一週間でせう。
房子　えゝ。（間）あゝ、さう、さう、昨日、時子さんからお手紙をいたゞいたわ。
留雄　僕の所へも來ました。
房子　あなたのところへ、いくどお手紙を上げても返事を下さらないつて……わるいわ。妹さんに、なにも罪はないぢやないの。
留雄　嫁入りするつて、あなたのところへも云つて來ましたか。
房子　えゝ。軍人さんですつてね。感心だわ。あの方。
留雄　何が感心です。
房子　それよりね、あたし大事な役目を云ひつけられたの。
留雄　へえ。
房子　へえぢやないのよ。あなた、何かお父さんのところへ云つてお上げになつたでせう。そのことで大へん心配していらつしやるんですつて、みなさんが。
留雄　だつて、勝手に僕を呼び戻さうたつて、さうは行きませんよ。それも下らない女を押しつけられるんぢやね。
房子　下らなかないんだつて云ふぢやありませんか。時子さんの御話しぢや。
留雄　あいつ、餘計なことを云ふんだなあ。
房子　それで、あなたどうなさるおつもり。
留雄　どうもかうもないぢやありませんか。
房子　お父さんが怒つていらつしやるんですつて。
留雄　おやぢがね。僕んところへは、母が泣いてるつて云つて來ました。
房子　さうでせうとも。
留雄　あなたまでが……僕を說き伏せるつもりですか。
房子　說き伏せるなんて、そんな力はあたしにはないでせうけれど、時子さんが、お父さまとあなたとの間に立つて、一人で氣を揉んでいらつしやるから、それがお氣の毒ですわ。
留雄　あいつには、僕の心が丸でわかつてないんです、あなたにさう云ふ御親切があるなら、こんだ、御序の時、よく云つて聞かしてやつて下さい。僕は、日本で暮すよりこつちで暮す方が幸福なんだつて……。
房子　あなたはさうおつしやるけれど……。
（此の時、ルイーズ、火箸にて笑ひながら走り來る。）

房子　どうなすつたの。

ルイーズ　だつて、きりがないんですもの。あづまやがすんだと思つたら、こんだは噴水の前、それがすんだら橋の上、もういゝのかと思つたら、またあの階段の上へあがれつておつしやるの。あたし、それで逃げて來たの。

房子　寫眞機を持つと全くおしまひ、あの人は。（笑ふ）

ルイーズ　（留雄の方を見て）まだ鯉と遊んでるの。あの方。

留雄　あなたのやうに飽きつぽくはありません。

ルイーズ　あしたから見ていらつしやい。

留雄　あさつてになつたらわかります。

房子　なに、あしたとか、あさつてとか。

ルイーズ　あしたから白川さんにポーズして頂くの。白川さんのお描きになるこつちの女が、みんなどこか知ら日本の女になるんでせう。だから、あたしが、その逆に、日本人を描いて見ようと思ふの。あたしなら大丈夫、どこから見ても日本人つて云ふ日本人が描けると思ふわ。

房子　そりやねえ、日本人つて日本人は顔の色が……。

ルイーズ　いゝえ、さうぢやないの。眼よ、大事なのは。

留雄　（小聲にて歌ひ出す）

　Viens, tout est si doux,

　Si plein promesse !

　……………………

ルイーズ　（その後をうけて）

　Un sourir en très grands yeux

房子　（ルイーズと合唱）

　Me révèle un coin des cieux

　……………………

手塚　（寫眞機を三人の方に向け、歌が終つてルイーズと房子とが正面を向きたる刹那を寫し撮り）ブラヴオオ！

房子　寫眞はこれから一人で撮りにいらつしやいね、どこへでも。

手塚　まあ、さう云ふな、ルイーズさんが來て下すつてよかつた。背景と完全に調和するんでね。

留雄　もう出掛ける。

手塚　（留雄に）君、一寸そこをどいて下さい。（ルイーズも去らうとするのを止めて）いゝえ、あなたにはどうぞそのまゝ。

ルイーズ　（遠ざかりながら、房子に）あなた、いらつし

やいよ

房子　いや、あたし。

手塚　ぢや、白川君でもいゝや。成る可く、そつちを向いて……さう、もつと、うつむいて（寫す）よろしい。

留雄　僕の背中は、よほどフォトヂェニックと見えるなあ。（一同笑ふ。）

手塚　さ、行きませう（先に立つて歩き出す）

ルイーズ　あたし、喉がかわいた。（歩き出す）

手塚　ビイルでもひつかけませう。

房子　留雄さん、いらつしやい。（ほかのものをやり過して、留雄に近づき）つまらないでせう。

第一場

ルイーズのアトリエ。午後四時。

ルイーズ　かまはないわ。あたしはあなたの肖像を描いてるんぢやないから。さ、しばらくこつちを向いてゝ頂戴。

留雄　ぢや、誰の肖像です。たゞ日本人の肖像だと云ふんでせう。地理の插繪か。

ルイーズ　何んとでもおつしやい。

留雄　（皮肉に）「人間の魂の微妙な旋律」はいゝな。

ルイーズ　なんですつて。

留雄　そんなにじろじろ見ないで下さい。僕の顔の中に、あなたのおつしやるやうな面白いものはありつこはないんだから。

ルイーズ　モデルは理窟を云はないのね。（間。）

留雄　あなたは日本人が好きだつて云ひましたね。

ルイーズ　（筆を止めずに）それがどうしたの。

留雄　それでは、或る一人の日本人を、佛蘭西人と同じやうに愛することが出來ますか。

ルイーズ　（筆を止めて）愛するつて、どんなに。

留雄　どんなにでも……、男として。

ルイーズ　（繪具を溶きながら）それならば、あなた、何處人だからと云ふ問題ぢやなくなるわ。

留雄　さうでせう。寧ろ、何處人だから愛することが出來ないと云ふやうな場合があるでせう。

ルイーズ　さあ、そりやどうですかね。兎に角、日本人はあんまり西洋の女を好かないつて云ひますわね。西洋の男が日本の女を好くほど……。

留雄　好き方にも色々あるでせうが。

ルイーズ　西洋の男が日本の女に惹きつけられる理由は、男として、そんなに名譽にならないつて或る人が云つてますね。

留雄　その反對の場合は。

ルイーズ　日本の男が西洋の女を好かない理由。
留雄　それも、男の名譽にはならないわけですね。
ルイーズ　（笑ひながら）まあ、さうでせうね。
留雄　こんどは、女の方から云つたらどうなるでせう。日本の女は西洋の男が……。
ルイーズ　好きらしくないわね。
留雄　近頃は、さうでもありませんよ。なかなか。
ルイーズ　駄目よ。西洋の男なんか。優しいやうでしつかりしてゐる日本の女が、なんだつて、女の御機嫌ばかり取つてるやうな男を……。理想が違ふんですからね。
留雄　そんなことはありませんよ。誰だつて踏みつけにされるよりは、ちやほやされた方がいゝにきまつてゐる。
ルイーズ　あたしは、さうは思はないわ。日本の男は、ほんたうに女の味方だと思ふの、ほんたうに女の愛し方を知つてゐるんぢやなくつて。日本の男は、薄くつて温かい服みたいなものね。外から見ると寒さうだけれど、それにくるまつてゐる本人は、結構、温かいんだから文句はないわ。
留雄　薄くつて暖かいなんて云ふことは例外ですよ。薄けれや大概寒いんだ。
ルイーズ　厚ぼつたくつて寒いよりは、輕いだけましだわ。
留雄　重いと暖かいやうな氣がしますよ。
ルイーズ　長く着てゐられないから同じよ。
留雄　なんだ。
（兩人笑ふ。）
ルイーズ　然し、西洋の女が日本の男と結婚するのは考へものね。それも、日本の男つて云ふものが、ほんたうにわかつてゐれば別だけれど、さもないと、とんだ不幸な目に遭ふわね。その例がいくらもあるわ。
留雄　そりや、さうですとも。殊に日本へ行つて暮しちやおしまひです。
ルイーズ　ある人の書いた本に、それもなかなか日本をよく見てゐる人なのよ、その本にね、西洋に來てゐる日本の青年はみんな行儀がよくつて、物わかりが早く、控へ目で、親切で、辛抱強い。殊に、西洋の女が悦びさうな可愛らしいお土産を、いつもポケットの中に忍ばせてゐて、たまには、絹絲の結び目をほどく手品や、紙ぎれで動物の形をこしらへる藝當をやつて見せる誠に頼母しい青年だ。が、決して油斷をしてはならないつて。（笑ひながら）ね、もうその先きはわかつてるでせう。
留雄　（苦笑しながら）わかつたやうな、わからないやうな……。
ルイーズ　まあ、それはわかつたとして、あたしに云はせれば、日本の男のほんたうの値打は、西洋風の生活でな

しに、やつぱり純日本式の生活をして、始めてわかるんだと思ふの。洋服よりも羽織袴、椅子よりも座蒲團、ステッキよりも扇子、握手よりも此のお辭儀。（頭を下げて見せる。）

留雄　シルクハットよりもチョン髷。

ルイーズ　（眞面目に）さうよ。西洋人の眞似なんかして、どんなにあなた方は男振りを下げていらつしやるかわからないわ。

留雄　全く僕達は見つともないでせうね、あなた方の眼から御覽になると……。

ルイーズ　見つともないよりも、お氣の毒だわ。

留雄　ひどいなあ。どうも然し、これぱかりは……。

ルイーズ　そこなのよ。なにもわざわざ西洋くんだりまで來て、折角の男振りを下げなくつても、ちやんとお國にいらつしつて、お花さんや、お雪さんに……。

留雄　（相手の云ひ終らないうち）眞面目な話は眞面目にしませう。

ルイーズ　（パレットを置き、留雄を見る）眞面目よ、あたし。（笑ひ出す）何んでしたつけね、話しの起りは、（考へて）さうさう、どうしてまた、あなた、そんなことを云ひ出したの。

留雄　そんなことつて。

ルイーズ　西洋の女が日本の男を愛することが出來るかつて云ふやうなこと……。

留雄　（ためらひながら）一寸、聞いて見たゞけです。

ルイーズ　（意地わるく）あなたが、そんな問題にぶつかつてらつしやるんぢやないのね。

留雄　實は、ぶつかりさうなんです。

ルイーズ　あら、さうなの。で、相手の方の心持ちを疑つていらつしやるのね。

留雄　まだ疑ふところまでも行つてないんです。

ルイーズ　ぢや、その方には、あなたの心持ちはわかつてるの。

留雄　さあ、どうですか。わかつてゐるだらうと思ふんですが。勿論、さう云ふ話しにはまだ觸れずにゐるんです。

ルイーズ　ぢや、いつまでたつたつて、わかりつこないわ。

留雄　さうでせうかね。大概さう云ふ場合には、どちらかで、もう大丈夫だと云ふ時機を發見するものだと思ひますがね。

ルイーズ　どちらかでつて……兩方共、同じ心持ちでゐればね、それはさうね。ぢや、まだ其の時機が來ないんでせう。

留雄　そんな時機は永久に來ないんぢやないかと思ふんです。

ルイーズ　（再び畫布に向ふ。落着かぬ樣子）
留雄　またはじめるんですか。（立ちかけて）　僕はもういいでせう。
ルイース　どうして。もう少し……ね。
留雄　（腰をおろす）
ルイーズ　（それとなく留雄の方を盜み見ながら）　相手の方はどんな方。
留雄　（探るやうに）　それはまだ云へません。
ルイーズ　いゝぢやないの。あたしに隱さなくつたつて…。
留雄　あなたにだから隱すんです。
ルイーズ　（笑ひながら）　まあ、あたし、そんなに信用がないのか知ら。（間）　その方とどうしてお近づきにおなりになつたの。
留雄　友達のうちで……。
ルイーズ　お友達つて、日本の方。それとも……。
留雄　そんなこと、どうでもいゝぢやありませんか。
ルイーズ　あたしも知つてるうち。
留雄　多分。
ルイーズ　手塚さんとこぢやないのね。
留雄　さうです。
ルイーズ　あら、手塚さんとこなの。あそこへ來る娘さんで……。あたし、會つたことがあるか知ら……その方。

留雄　それは、どうだか知りません。僕が行くときには、その人か、あなたか、どつちか一人にしか會はないから。
ルイーズ　（強ひて笑ふまいとして）　變だわね。あたしもよく行くんだけど。
留雄　何がそんなに可笑しいんです。だからあなたには云ひたくないんだ。
ルイーズ　笑つちやいけないの。ぢや、まじめ。（間）　あなた、その方をほんとに愛していらつしやるの。
留雄　僕は一つしか愛し方を知りません。
ルイーズ　一度しか愛することが出來ないつておつしやらないわ。
留雄　それはどう云ふことです。一度愛を失つた人間が、他に愛を求めることは許されないんですか。
ルイーズ　そんな六ケ敷いことぢやないの。
留雄　（立ち上り、ルイーズに近く）　ルイーズさん。あなたに是非お尋ねしたいことがあるんですけれど……。
ルイーズ　（いくらか平靜を失つて）　なあに、そのことで、（筆を止める）
留雄　今、假に、あなたが、日本の男から、直接にかう云ふ話を持ち出されたらどうします。どう思ひます。
ルイーズ　（驚いたやうに）　あたしが。
留雄　そうら、そんなに吃驚りなさるぢやありませんか。

ルイーズ　だつて、だしぬけにそんなこと聞いたつて。

留雄　だから、同じことです。その人にしても、僕がだし抜けに、こんなことを云ひ出したら、きつとびつくりするに違ひありません。それだけでも、二人の間に大きな障碍があるんです。（間）これが若し、佛蘭西人の口からだつたら、なんでもないことぢやありませんか。或る感動は與へるにしても、意外でも、不思議でもない戀愛の告白ぢやありませんか。

ルイーズ　それは違ふわ。（間）氣にも留めてないやうな男の口から……。

留雄　氣にも留めてない。その女がですか。

ルイーズ　その方と云ふわけぢやないのよ。（間）あなたの尋ね方がわるいんだわ。（無心に繪を見つめてゐる）

留雄　（せき込んで）ぢや、どうお尋ねすればいゝんです。

ルイーズ　（笑ひながら）どんなことが聞きたいの、あなたは……。

留雄　（少しぢれて）もういゝんです。わかりました。（ルイーズから離れて、長椅子に腰をかける）

ルイーズ　（パレットを置き）何がわかつたの、をかしな方。（留雄と並んで掛ける）

（長い沈默。）

留雄　ルイーズさん、僕は駄目です。どうか察して下さい。あなたがおつしやるやうに、まだその時機ではないかも知れません。然し、もう默つてはゐられないんです。默つてゐるのが、云ひ出すのと同じ位、いや、それ以上恐ろしいやうな氣がするんです。どうせ望みがないものなら、それを早く知つて、永久に來ないものを待つ苦しさから逃れたいんです。望みを失ふ悲しみは、どんなに大きくつても、大きければ大きい程、自分を強くするものです。自分を支配する力を與へてくれます。このまゝでは、自分の存在を否定することさへ出來ないのです。

ルイーズ　あなたは隨分取越苦勞をなさる方ね。その方だつて、はつきり御自分の心持ちがわかつてゐないかも知れないぢやありませんか。あなたが、今、たつてそれを知らうとなさるのは、どんなものでせう。

留雄　そんならそれでいゝのです。それだけのことでもわかれば、僕は滿足します。（次第に晴やかな面持になる）ルイーズさん、あの人は、僕を少しでも愛してくれてゐるでせうか。

ルイーズ　まあ、そんなこと、あたしに聞いたつて……。

留雄　（返事を待たないで）愛してくれることがあるでせうか。（留雄、ルイーズに近づく）

ルイーズ　そんなことがわかるもんですか。

（いきなり立ち上り、呼鈴を押す。）

下女　（現る）
ルイーズ　帽子屋へは行つてくれた。
下女　はい、あの……四時までには、是非お屆けするつて申しましたんですけれど……。
ルイーズ　（時計を見て）だつて、もう四時よ。
下女　ほんとに、どうして……。
ルイーズ　御苦勞だけれど、もう一度催促して來てくれない。
下女　畏こまりました。一方だけでも出來てをりましたら、わたくしが貰つて參りませうか。
ルイーズ　さうね。さうしておくれ。白い羽根の附いたのが、急ぐんだけれど……。でも、少し位なら待つてゝ、兩方とも貰つておいでよ。もう一度くらべて見ないと、……（留雄の方を見て、媚びのある笑ひ方をする）
下女　さう致しませう。
ルイーズ　（留雄に）あなた、お茶はいらない。
留雄　いりません。（畫架に近づき、繪を見る）
ルイーズ　（下女に）ぢや、大急ぎでね。
下女　はい。（退場）
（長い沈默。）
ルイーズ　何にしていらつしやるの、そんなとこで。
留雄　繪を見てるんです。（浮かぬ調子）

ルイーズ　（快活に）どう。
留雄　どうつて、別に……。
ルイーズ　お氣に入らない。
留雄　僕の氣に入る必要はないでせう。
ルイーズ　（いくらか氣まづげに）もちろん。
留雄　（率直に、而し、氣がとがめるらしく）しかし、繪としては、なかなか面白い。
ルイーズ　いゝのよ、そんな褒め方をして下さらなくつても。
留雄　でも、實際なんだから……。
（外で、呼鈴が鳴る。續いて小走りに廊下を傳ふ跫音。）
下女の聲　あら、今、あたしが行かうと思つてゐたとこなの。お孃樣がそりやお待ち兼ね……さつきからお出ましのお支度をすつかりなすつて……ぢや、兩方ともね、それでよかつた。一寸待つて頂戴。
ルイーズ　（立ち上り、戸口に近き）御免なさい。すぐ來るから……（出で去る）
留雄　どうぞ。（空想に微笑みながら、室内を歩きまはる）
（長い間。）
ルイーズ　（髮を手で押へながら入り來る）どうも失禮。
留雄　ちつとも。そろそろ出掛けなくつてもいゝんですか。
ルイーズ　まだ早いわ。歩いたつてぢきなんですもの、こ

こから。今日はどんな人が來てるか知ら。

留雄　僕は、あの人が來ると思ひます。まあ一度、見て下さい。僕がこれほど想つてゐる相手が、どんな人か、あなたに是非知つて頂きたいんです。

ルイーズ　(笑ひを抑へて)　綺麗な方。

留雄　あなたのやうに。(溜息)

ルイーズ　(天井を見たまゝ)　髮は。

留雄　ブロンド。

ルイーズ　(眼をつぶつて)　眼は。

留雄　(ルイーズの方につめ寄り)　空色、どうかすると紫。

(ルイーズの手を取らうとする)

ルイーズ　(靜かに立ち上り)　聲は。

留雄　(慌てゝ)　聲。聲はね……(苦しまぎれに)　銀の鈴。

(かう云つて頭をかゝへる)

ルイーズ　オホ、、、、あなたもなかなか話せるわね。

(戶口に近づき)　待つてゝ頂戴、支度をするから。(出て去らうとする)

留雄　ルイーズさん。

ルイーズ　(振り返つて)　なあに。

留雄　その人はね、僕を愛してゐてくれるんなら、きつと、今日、あそこへ、白い羽根のついた帽子を冠つて來ます。

ルイーズ　(ギョッとして)　白い羽根のついた帽子。(戲談のやうに)　そんなことわかるもんですか。(急ぎ去る)

留雄　(ぼんやり考へ込む)

(間。)

下女　(笑ひながら入り來る)　あの、お孃樣は、少し、お支度に手間がお取れになるさうで御座いますから、すみませんが一足お先きへどうぞ……。

留雄　(驚いて)　御一緒に出掛けることになつてるんです。

下女　はい、それはもう。たゞ、あんまり長くお待たせするのもつておつしやいますんで……。

留雄　よう御座んす、いくらでもお待ちしますつて、さう云つて下さい。どうぞ、御ゆつくりつて……。

下女　(しかたがなしに去る)

留雄　(滿足げに笑ふ)

下女　(再び現はれ)　甚だ失禮で御座いますけれども、あの、探しものをなすつていらつしやいますから、それが出ませんうちは……。

留雄　出るまで待ちます。

下女　(當惑さうに)　でも……。

留雄　出るまで待ちますよ。どうせ出ないものぢやないんでせう。

下女　それはさうで御座いますけれど……。
留雄　一寸、お孃さんにお顏をお見せ下さいつて、さう云つて下さい。御話しがあるからつて……。
下女　（笑ひながら去る）
留雄　子供だなあ。
下女　（手で顏を押へながら入り來る）　只今、お召替の最中で、當分、こちらへはおいでになれませんさうで御座います。
留雄　探しものは出たんですか。
下女　さあ、どうで御座いますか。伺つて參りませうか。
留雄　いゝんですよ。（思ひ切つて）　ぢや、僕は歸ります。お孃さんにね、僕は歸りますつて云つて下さい。（下女の方に近づき、小聲で何か云はうとして、それをやめ、出口に近づく）
ルイーズの聲　何をぐづぐづしてるの。早く行かないと遲くなつてよ。
留雄　（努めて平氣に）　ぢや、向うでお待ちしてゐます。
（退場）
下女　（胸を撫で下ろし、靜に戸を開める）

第　二　場

手塚の家の應接間。午後五時。

房子　（獨りで本を讀んでゐる、時々、戸口の方に眼をやる）
留雄　（下女に案内されて入り來る）　おや、まだだれも來ないんですか。
房子　（立ち上り）　今日はどなたもいらつしやらないかと思つてましたの、ようこそ。
留雄　先達ては失禮。
房子　わたくしこそ。（改まつた調子に氣がついて笑ふ）
留雄　手塚君は。
房子　（留雄に椅子をすゝめながら）　今朝、歸つて參りましたの、今、一寸役所へ顏を出して來るつて出掛けましたが、もう戻つて來る頃なんですよ。
留雄　ルイーズさんも後から來るさうです。
房子　今日もお會ひになりまして。
留雄　毎日會つてます。
房子　ほんとにさうでしたわね。お仕事は進みますか。
留雄　こつちの仕事は一向進みません。近頃は、モデルが專門で……。
房子　あたしも誰かモデルに使つてくれないか知ら。
留雄　いゝ畫家のモデルにならなつてもよう御座んすね。
房子　あなたならいゝわ。（かう云つてあわてゝ）　モデルも樂な商賣ぢやなささうね。
留雄　苟も外交官夫人がへつぽこ畫家のモデルになつたと

あつてはね。

房子　さう云へば、外交官のところなんか、懲り懲りだわ。

留雄　一度で澤山ですか。

房子　まあ、ひどい。（間）　あゝ、さうさう、お妹さんからのお手紙、お目にかけませうね。（立ち上る）

留雄　（腰を浮かせて、半ば戯談の如く）　ぢや、僕は歸ります。

房子　どうして。いけないの。あなた、ほんとに見たくないの。（責めるやうに留雄の顏を見つめる）

留雄　許してください。僕は年寄りが可哀相だと思ひます。然し、それは、どうすることも出來ないんです。僕は、過ぎ去つたことを一切忘れてしまふ爲めに、また、これからつまらないことで内輪揉めを起さないやうに、こんな放浪生活をしてゐるんです。日本に歸つて、おやぢと顏をつき合せてゐたら、きつと双方で面白くないことがあるに違ひありません。そればかりでなく、僕の周圍には、誰一人僕の氣持ちがわかつてくれるものがないんです。僕のすることは何んでも邪魔をしようとかゝつてゐるんです。そこへ行くと外國にゐれば自由が利きます。人が自分に注意してゐないと云ふことは、それほど苦しいことぢやありません。

房子　外國でなら……あなたはさうおつしやるけれど、佛蘭西なら佛蘭西にいらつして、こつちの習慣になれてしまひになつたとしたところで、ほんたうの幸福が、ここで求められるかどうか、それはなんだか當てにならないやうな氣がしますわね。早い話が、いつぞや、あなたは、もう外國人の家へ行くのがいやになつたつておつしやつたでせう。

留雄　さう云ふ外國人の家もあると云つただけです。

房子　それから、第一に、町やなんかでキョロキョロ顏を見られるのがいやだつておつしやらなかつた。

留雄　さう云ふ場合もあると云つただけです。

房子　あなたが、いつか、日本人の惡口を、さんざん聞かせて下すつた時に、あたしが、戯談半分に、それぢや、なぜ、そんなにお嫌ひな日本人の家へなんぞいらつしやるんですつて、さう伺つたら、あなたは、かうおつしやつたわ。それは、好奇心の滿足と、お世辭の安賣を、唯一の接待法と心得てゐる、外國人の家よりもましだつて……。（笑ふ）

留雄　僕がそんなことを云ひましたか。（笑ふ）

房子　えゝ、おつしやつてよ。だから、あたしが、それでは、やつぱり、日本人がましなのねえつて云ふと、日本人の家だから來るんぢやない、自分を外國人扱ひにしない人間の家だからだつて、そんな苦しい理由があるもん

ですか。（笑ふ）

留雄　全くさうなんだから……。

房子　そんな痩せ我慢はおよしになつた方がいいわ。

留雄　そりや勿論、手塚君とあなたとお二人で作つてをられる或る特殊な雰圍氣、手塚君からだけでもなく、あなたからだけでもなく、僕の氣持ちに觸れて來る或る温かい感じが、此の家の中にあつて、それが僕には懷かしいと云ふ理由もあります。あなた方お二人が、此の部屋の中で靜かに話しをしておいでになる……それを僕が、どこか隅の方で、默つて聞いてゐる、と云ふよりも、それを感じてゐれば、それでもう、のどかな氣持ちになれるのです。かう云ふ氣持ちは、あなたにわかるか知ら。

房子　そりやわかるわ。つまり、あなたの生活に、どこか缺けた所があるのね。一口に云へば、物足らないんでせう。淋しいつて云つちやいけないかも知れないけれど。

留雄　その缺けてゐるものは、何んだと思ひます。なぜ物足らないんでせう。（間）僕はしたいことをしてゐるんです。したいと思ふことで、出來ないことはないんだけれど……。

房子　（相手の不誠實を責めるやうに、また、その高慢さを憐れむやうに、默つて、留雄を見据ゑてゐる）

留雄　（相手の視線を避けるやうに）わかつた。あなたは、僕の生活に温か味が缺けてゐるとおつしやるんでせう。

房子　温か味ね。それから落ち着き。

留雄　落ち着きがね。（考へ込む。何か思ひ出したやうに、あらはではないが、そはそはしはじめる）然し、生活と云ふものが、そんなに落ち着いたものぢやないんでせう。戰ひだとも云へ、お祭りだとも云へるんぢやないんですか。

房子　そりやさうだわ、だから、なほ、落ち着いて、疲れたからだと魂とを、休めることが必要なんぢやなくつて。あなたは、戰ひとお祭に疲れていらつしやるんだわ。

留雄　ぢや、どうすれば、その落ち着きが得られるんです。

房子　そんなことは、あたしが云はなくつたつてわかるでせう。

留雄　わかるやうな氣もします。

（稍長い沈默。）

房子　温かい心に觸れて、それを、温かいと感じることが出來ないやうになれば、もうおしまひよ。

（長い間。）

留雄　僕は、まだ、望みがありますか。

房子　そろそろあぶないわね。（淋しく笑ふ）

（呼鈴が鳴る。）

留雄　（思はず立ち上り、戸口の方を見る）

房子　歸つたやうだわ。
手塚　（慌たゞしく入り來る）や、失敬。君一人。（房子に）今日はまた晩飯に呼ばれちやつてね。お前も一緒につて云ふことだつたが、（一寸留雄の方を見て）もう遲いから困るか。
房子　どなた。
手塚　なに、大使さ、僕は留守のつもりで、横田夫婦を入れてあつたのが、また細君が急病でね、お鉢の逆戻りさ。僕一人なら、誰かもう一人都合するつて云ふから、今日はやめてもいゝよ。
房子　さう、ぢややめるわ。（留雄の方を見て笑ふ。手塚に）あなた、それで、もうすぐお出かけ。
手塚　うん、だつて返事をしなくつちや。まあ、もう少し話して行くか。（腰を卸ろす）房さん、白川君に夕食でも何したらどうだ。
留雄　いゝえ、僕はすぐ御暇します。
手塚　まあ、いゝぢやありませんか。僕もおつき合ひが出來るといゝんだけれど……。
房子　（手塚に）ルイーズさんもいらつしやる さうだから、（留雄に）御差支がなかつたらあの方も御一緒に、ね。
手塚　さうか、それや丁度いゝ。

留雄　まあ、先生が來てからのことにしませう。
房子　さう云へば隨分遲いわね。いらつしやり方が。
留雄　（無言のまゝ時計を出して見る）
手塚　（思ひ出したやうに）君は御存じでせう、西村と云ふ繪かき。
留雄　知つてます。どうして。
手塚　（事もなげに）なに、今日役所へ警察から問ひ合はせに來たんですがね、何んでも、女を毆つたとか、蹴つたとかで調べられてゐるらしいんです。そんな人ですか。
房子　まあ。
留雄　そんな人かどうか知りませんが……。怪我でもさせたんですか。
手塚　頤がはづれたつて云ふんだから、まあ問題にはなりますね。
房子　ひどいことをしたのね。
留雄　勇敢だなあ、先生。
房子　ちつとも勇敢ぢやないわ。
留雄　勇敢ですよ。毛唐になら、唾をひつかけられても默つてゐさうな手合が多いんだから……。（間）
房子　でも、相手が女なんですもの。
手塚　言葉が通じないんで困るつて云つてました。まだ來たてと見えますね。

留雄　一年位にはなるんでせう。さうだなあ。うまく云ひ開きが出來るか知ら。誰か通辯に行つたんですか。

手塚　役所の方ぢや、そんなことを一々かまつてゐられませんからね、どうかなるでせう。それに、相手の女が女だし、うつかり手出しをすると卷きぞへをくひますしね、まあ、さう云ふ事件には、あんまり關係しないことにしてるんです。迷惑ですよ。

房子　迷惑なんですつて。（留雄の方を見て笑ふ）

留雄　僕なんかも迷惑をかけさうだな。

房子　どうして。

手塚　こつちへ來て、日本人の體面にかゝはるやうなことをしてくれるとね、それが一番困るんです、われわれが。

房子　それやほんとね。だけど、日本人の體面も、いゝ加減なものよ。一とかど立派な日本人のつもりでゐる人が、一も西洋、二も西洋なんですからね。そのくせ、それが、取つて附けの西洋で、隨分滑稽なすまし方をしてゐるんですもの。

手塚　お前にそれがわかるか。

房子　あたしにわかる位だから、こつちの人が見たら、とても……。

手塚　然し、そんな事は大した問題ぢやないさ。

房子　問題よ。西洋人の前に出ると、先づどうしたら相手に笑はれないで濟むかつて云ふ心配で、胸をわくわくさせてゐるんでせう。丸で、自然な所がなくなつてゐるの。笑はれまいと努めれば努めるほど、ぎごちなくなるのはあたり前だわ。（間）此の人なんか、それがひどいんですからね。

手塚　（まごついて）馬鹿云へ。

留雄　（笑ひながら）そこへ行くと日本の女は得だなあ。

房子　なあぜ。

留雄　自分のものを自分のものとして、どこへ行つても發表が出來、それがそのまゝ、完成された生活樣式になつてゐるんですからね。これに反して、日本の男は、完全に西洋人の眞似も出來ず、さうかと云つて、個有の生活樣式からも遠ざかつてゐるんだから、どつちにしても、殺風景なわけです。全然日本風に洗錬された女はあつても、全然日本風に洗錬された男は、今時まづ無いと云つてもいゝでせう。それだけ日本の男は、今、非藝術的な活き方をしてゐるんです。

房子　そりや、女だつて大部分は、調和も統一もない生活をしてゐますけれど、あたしの云ふのは、西洋人の前だからつて、何もびくびくしたり、まごまごしたりする必要はないつて云ふことなの。

手塚　成る程、お前の云ふことも尤もだ。默つて小さくな

つてゐれば、それで濟まないこともないんだらうがね。（房子の方をチラリと見、復讐的な笑ひ方をする）

房子　その方がよつぽどましよ。

手塚　さうかも知れん。（戸口の方を振り返つて）誰か來たやうだぜ。

房子　ルイーズさんよ。

（長い沈默。）

下女　（茶器を運び來り）あの、マドムアゼル・モープレからのお使ひで、お嬢さまは、今日急にお差支が出來まして、こちらへ伺へませんから、どうか皆樣によろしくつて、さうお斷りで御座いました……。

留雄　差支が出來たんですつて、たゞそれだけ。

下女　はい。それだけで御座います。

留雄　うまいこと云つてら……。

房子　どうしたの。

留雄　人を馬鹿にするもんぢやありませんつて。……（間）あ、僕がさう云はう、女中さんでせう。（立ち上る）

下女　はい、でも、もう歸りまして御座います。

留雄　さうですか、ぢや、仕方がない。

房子　およしなさいよ。そんなこと云ふのは。差支は差支よ。（下女に）いゝわ。

下女　（退場）

留雄　氣まぐれだなあ。

房子　さうとばかり云へないわ。あなたもわからない方ね。

手塚　（房子に）お前の方がわからないのかも知れないぜ。白川君の待ち方は、お前の待ち方と違ふんだらう。

房子　ほんと。（留雄の方に笑ひかける）

留雄　（笑ひながら）來ると云つて來ない法があるもんですか。

房子　行くと云つて行けない時があるわ。

留雄　ありません。來ようと思つたら、どうしてでも來られる筈です。

房子　こゝへ來ることより以上に、あの方を惹きつける何かがほかにあれば仕方がないぢやありませんか。（留雄の心を探るやうにその顏を見据ゑる）

留雄　そりやさうだけれど……。

手塚　それぢや濟まない譯があるんでせう。

房子　（留雄に）そんな譯なんかあるものですか。

留雄　あるかも知れませんよ。（さりげなく笑ふ）

手塚　さあ、それやまあ、あるとして置いて、僕はぽつぽつ出掛けます。

房子　あなた、それでいゝの。

手塚　いゝんだ、ぢや、ごゆつくり。（立ち上る）

留雄　いや、僕もそろそろ……（立ち上る）

房子　あなた一寸待つて頂戴、御話しがあるから、ね。（立ち上る）
留雄　急ぐお話し。
房子　えゝ。
留雄　（默つて立つてゐる）
手塚　（穩やかに）用事のある人を無暗に引留めるんぢやないぜ、いくら淋しくつたつて……。
房子　（笑ひながら）えゝ、わかつてゝよ。
手塚　いづれまた、そのうち。（退場）
房子　（手塚と共に退場）
留雄　（待ち遠しさうに室内を步きまはる）
房子　（いそいそと入り來り）留雄さん、ほんとにまだいいんでせう。御飯を召上つていらつしやいね。
留雄　駄目です、今日は。このつぎにして下さい。
房子　（留雄の傍に寄り添ひ、しんみりと）どうして。（間）あたし、今日は、ゆつくりあなたに聞いて頂きたいことがあるんだけれど……。
留雄　ゆつくり、ぢや、それも此のつぎにして頂けませんか。今夜は、どうしても行かなければならないところがあるんです。
房子　今夜何時から。
留雄　今、すぐ。

房子　（しばらく留雄の顏を見つめ、訴へるやうに）ぢや、もう一時間。ね、後生だから。
留雄　一時間。（間）一時間ならよござんす。（着席）
房子　うれしい。（留雄に近く座を占める）
（長い沈默。）
留雄　どうしたんです。
房子　あたし、手塚と別れようと思ひますの。
留雄　（驚いて）手塚君と。（間）理由は。
房子　理由。あたし、あの人を愛することが出來ないから。
留雄　それで。
房子　それで……（間）獨りで日本へ歸らうと思ひますの。
留雄　日本へ。（間）さうして、どうなさるんです。
房子　（低く）どうするかわかりません。（間）どうにかなりますわ。
留雄　手塚君はあなたを愛してゐるんでせう。
房子　愛してゐるつもりでせう。
留雄　つもりとは。
房子　あの人から愛されてゐることが、あたしには苦痛なの。恥しいとさへ思ふわ。
留雄　さう云ふことがあるでせうね。然し、手塚君が可哀さうだとは思ひませんか。
房子　可哀相なやうな氣もするんですの。

留雄　（暫く考へた後）あなたが、さう云ふ決心をなさるについて、別段僕の意見をお求めになるわけではないでせう。
房子　（相手の心持ちを讀みかねて）伺つて置きますわ。
留雄　さうぢやないんです。僕は、あなたの一身上の問題に喙を容れる資格はないんです。若し意見を求められゝば、自分の考へだけは云ひますけれど。
（稍長き沈黙。）
房子　かう云ふ問題はもともと理論外ですからね。（間）直接此の問題についてゞなく、もつと將來の問題で、あなたの御意見を承りたいとは思つてゐるんですの。
留雄　手塚君と別れてから後のことですか。
房子　えゝ。
（長い沈黙。）
留雄　將來の問題と云ふと、生活問題ですか。
房子　（急に調子をかへて、快活に）まあ、それは今日でなくつていゝのよ。今はたゞ、このことをお耳に入れて置くだけ、ね。びつくりなすつた。
留雄　別にびつくりもしません。僕は夫婦關係と云ふものを、隨分あやふやなものだと思つてゐるんですから、大かたはね。
房子　ほんとに、あやふやなものよ。（間、脣を噛む）
留雄　成る程、むづかしいもんだなあ。
房子　なに、結婚。
留雄　結婚でも、戀愛でもね。
房子　むづかしいんぢやないわ。運よ。
（長い沈黙。）
留雄　運か。
房子　あなた西洋の女をどうお思ひになつて。
留雄　どうとは。
房子　女として。（間）男は幸福でせうか。
留雄　男によりますね。
房子　女にもよるでせうけれど……。（笑ふ）
留雄　だから、そんなことは一概に云へませんね。
房子　ぢや、男はあなたとして、典型的な西洋の女はどう。もつと限つて、佛蘭西の女。その女が、あなたを愛するとしたら、どんな愛し方をするでせう、その愛し方に、あなたは滿足なされる。
留雄　つまり、西洋の女が一般に有つてゐる戀愛觀念に、僕が同感出來るかどうかと仰しやるんですね。
房子　さうよ。
留雄　出來さうですね。あなたは例外かも知れないが、僕は日本の女の大部分が考へてゐるやうに、男の爲なら、どんなことでもすると云つたやうな愛し方を、そんなに

偉いものだとは思つてゐません。

房子 「愛する男の爲めになら」でなければ駄目だわ。さう云ふ心持ちならいゝんでせう。

留雄 その「どんなことでもする」が、いけないんです。

房子 どうして。

留雄 與へると云ふ態度は戀愛には禁物です。欲しいものを與へられる前に、相手から思ふまゝつかみ取るんでなければ戀愛の陶醉境にははひれないんです。與へたいものを與へる前に、相手がそれをつかみ取りに來なければ、相手の愛は完全でない、まあ、さう見ても差支ないでせう。

房子 （痛ましげに留雄の顏を見つめる）

留雄 お互にしたいことをして、それが偶然にお互の氣に入るやうな、さう云ふ二人だけが、ほんたうに愛し合つてゐるんです。

房子 そんなうまいことがあるもんですか。

留雄 だから、滅多に戀は出來ないんです。

房子 お互に望んでゐるものを、進んで與へ合ふ、それでも立派に愛が成り立つと思ふわ。與へることが、與へられるのと同じ悅びなんだから……。

留雄 戀愛は宗敎でも道德でもありません。與へることが相手を悅ばすと思ふのは、人間の本性を無視した考へ方です。そこに投げ出されたものを、與へられたものだと思ふ人間があれば、僕はその人間を馬鹿だと云ひます。

（稍長い沈默。）

房子 あたし、實を云ふと、あなたはお氣の毒な方だと思つてゐましたの。それが、なぜだか、急に、あなたが羨ましいやうな氣がして來ましたわ。

留雄 （いくらか、たじろいて）さうですか。

房子 ぢや、日本の女を愛するなんて云ふことは、とてもあなたにはお出來にならないわね。

留雄 （笑ひながら）それやどうだかわかりません 現に、僕は日本の女を熱烈に愛したことがあります、六七年前に。

房子 （顏を伏せて）知つてますわ。然し、それは昔のことでせう。（間）その女は、あなたの愛に背いた冷酷な女でした。その頃のあなたは、また、相手から與へられるまで、それを待つておいでになるあなたでしたわね。（淋しく笑ふ）あなたから愛されてゐることをはつきり感じながら、その女は、それに酬いる方法さへ知らなかつたんですもの。（長い沈默）

留雄 （靜かに立上つて窓ぎはに近づく）

房子 その女は、あなたのお口から、たゞの一度も、期待してゐた言葉を聞かされないうちに、氣まぐれな運命の

手に浚はれて行きました。（そつと涙をふく）

留雄　房子さん、もうその話はよして下さい。僕達の友情は、もつと以前の、もつと樂しい思ひ出で繋がつてゐるんぢやありませんか。（間）あれは何時頃のことだつたか、僕がブランコから落ちて額に怪我をした時、そばで、風船をついて遊んでゐたあなたが、あわてゝ、その紙の風船で、僕の額を押へながら「お馬鹿さんねえ」かう云つて、僕をうちへ連れて行つて下すつたのを覺えておいでゞすか。今のあなたは、その頃のあなたなんです。僕に取つて……。ね、さうでせう。

房子　いゝえ、違ひます。その頃のあたしは、どんなことでも平氣であなたに云へたのが、今のあたしは、思つてゐることの半分も、あなたに云へなくなつてゐるんですもの。

留雄　それや、人間が年を取れば、分別と云ふ變なやつが、心臓の鍵を握るやうになりますからね、お互に。

（重苦しい沈默。）

房子　（溜息をついて）分別ばかりぢやないのね。

留雄　（笑ひながら）分別顔をした無分別と云ふ奴もありますね。僕なんかには、大分それがありさうです。

房子　ほんとよ。

留雄　あなたにどうしてそれがわかります。

房子　（しみじみと）しばらくの間に、隨分あなたも變つておしまひになつたわね。

留雄　どう變つたんです。（房子に近づく）

房子　どうつて、そりや、もとからさうだとおつしやればそれまでだけれど、なんだかあなたとお話しをしてゐると、あたしの云ふことが、いちいち的から外れるやうな氣がしますの。（間）また、實際、外れてしまふんですわ。（笑ひながら）よくねらつたつもりでも……。

留雄　そりや困りましたね。（間。聲をおとして）その的とはなんです。

房子　何に限らずですわ。

留雄　例へば……。

房子　例へば……（間）例へば……（抑へきれないものをうつちやるやうに）留雄さん、お願ひだからあたしをそんなにいぢめないで頂戴。えゝ、あたしが馬鹿なの、こんなことを云ひ出すなんて……。でも、あなたはあたしの苦しい告白をもつと素直に聞いて下さるだらうと思つたんです。（泣きながら）あたしはどうしたらいゝんでせう。（兩手で顏を覆ふ）

留雄　（房子の肩に手をかけ）もつと早くあなたに云つて置けばよかつた、僕は、或る女を愛してゐるのです。

房子　（極く低く）ルイーズさんでせう。

留雄　その愛は遂げられない愛かもわかりません。あの人

から愛の保證を得ることさへまだ出來ずにゐるのです。しかし、僕の心は囚はれてゐます。あなたが僕を想つてゐて下さる、さう知つて、心が……亂れはしても、僕はあなたから差し延べられた手を……すぐ取ることが出來ない、それはわかつて下さるでせうね。

房子 （默つて肯く。長い沈默）

留雄 話しをわき道にそらさうとした僕の態度は、たしかに卑怯でした。僕の取るべき道を敎へて下さい。

房子 （淋しく笑ひながら）いゝのよ、そんなこと。あたしにはかまはないで、あなたはあなたの道をお歩きなさい。ぢや、今日はこれでお別れしませうね。（靜かに立ち上り）あなたが昔お苦しみになつただけ、あたしも苦しみますわ。（戶を開ける）

留雄 （頭を垂れ、力なく退場）

房子 （送つて出ながら）やつぱり、每週金曜日には、いらしつて下さいね。（やがて、兩手にて額をおほひ、入り來り、急いでピヤノを開け、靜にセレナタを彈く）

第三場

前場と同じ場面

ルイーズ （白い羽根のついた帽子。いくらか落ちつかぬ樣子にて）ぢや、使が來てからすぐね、白川さんのおかへりになつたのは。

下女 すぐでも御座いませんでした、旦那樣がお出掛けになつてからも、しばらく奧樣とお話しをなすつていらつしやいましたから。

ルイーズ おや、さう。（間）使をよこした時、白川さんはなんとか云つてらつしやらなかつた。

下女 （笑ひながら）いゝえ、別になんとも。

ルイーズ （信じないやうに）怒つてらしつたでせう。（輕く笑ふ）ぢや、奧さんにさうおつしやつて頂戴ね、すぐお暇しますからつて。（傍の椅子にかける）

下女 はい、畏こまりました。（退場）

房子 （靜かに扉を開き、强ひて笑顏を作りながら、ルイーズの方に近づく）

ルイーズ （立ち上り）今日は。

房子 （日本風に會釋して）いらつしやいませ。もう、御用はおすみになりましたの。（ルイーズに椅子をすゝめ、自分もかける）

ルイーズ えゝ。今日はもう遲いからと思ひましたけれど……（間）まだ、どなたかいらつしやるかと思つて……。

房子 白川さんは、たつた今、お歸りになりましたわ。

ルイーズ さうですつてね。お約束をしといて、すまなかつたけれど……。これからどこへいらつしやるつて云ふ

やうなことをおつしやつてませんでしたか。

房子　いゝえ、伺ひませんでした。

ルイーズ　今日はどなたか珍しい方が御見えになりましたの。

房子　いゝえ、どなたも。

（稍長い沈默。）

ルイーズ　先達はどうもありがたう。御蔭で愉快な日を過しましたわ。

房子　却つて御迷惑だつたでせう、暑くつて。

ルイーズ　あ、それから、あの時の寫眞、わざわざ。お上手ですわ、ほんとに。

房子　なんですか、あんなことばかりに凝つて……。

（稍長い沈默。）

ルイーズ　あなた、白川さんのおうちの方とも御懇意になすつていらつしやるんでせう。

房子　えゝ、ずつと以前から。

ルイーズ　お父さまは宮内省とかに務めていらつしやるんですつてね。

房子　お家柄なんですの、なかなか。

ルイーズ　まあ。ぢや、立派なお暮しをなすつていらつしやるのね、おうちでは。

房子　さうですとも。

ルイーズ　お父さまと仲たがひをしていらつしやるつて云ふぢやありませんか。

房子　仲たがひつて云ふわけぢやないんでせう。詳しいことはなんですけれど、やつぱりあの方がおうちの相續はなさるんでせうから。

ルイーズ　御長男ですわね。

房子　さうですよ。

ルイーズ　おうちのことはちつともおつしやらないのね、あの方。

房子　お身分を鼻にかけるやうな方ぢやありませんわ。

ルイーズ　えゝ、そりやわかつてますわ。（間）さうですか。

（稍長い沈默。次第に暗くなる。）

ルイーズ　變なことを伺ふやうですけれど、白川さんはまだお一人なんでせうね。

房子　え。

ルイーズ　いゝえね、お國の方に奥さんでもいらつしやるんぢやないかと思つて……。そんなことはありませんわね。

房子　さあ、（長い間）あたしはたゞ、あの方が結婚していらつしやらないことは知つてゐます。

ルイーズ　とおつしやると……。

房子　そのことなんでせう、お尋ねになつたのは。
ルイーズ　えゝ、さうですの。
（間。）
房子　立派な方ですわ、白川さんは、
（長い沈默。）
ルイーズ　何かあの方がおつしやつたんでせう、あたしのことについて。
房子　あなたを愛しておいでになるつて云ふことだけ……
（聲がかすかにふるへる）
ルイーズ　まあ、今日。
房子　いゝえ、もうずつと前のことですわ、そのお話しがあつたのは。（ルイーズの方に近づく）あの方は、あなたから早くいゝ御返事を聞きたがつていらつしやるんですわ。
（房子、そつと電燈をつける。ルイーズの夢みるやうな眼を、房子の悩ましげな眼が見据ゑてゐる。二人は急に、笑顔を作る。）
ルイーズ　びつくりした。
房子　暗い方がよござんしたわね。

第四場

サヴワ地方。ホテルのバルコニイ。午後一時。

留雄　昨夜、雨が降つたんですか。
女中　いゝえ、時々、夜露でこんなになることが御座います。（欄干を拭く）
留雄　今朝は隨分寒かつた。
女中　お天氣のよろしい日には、夏でも、きまつて、朝は寒う御座います。（間）先月は、ずつと雨で御座いましたから、今月はきつとお天氣が續きませうと思ひます。お客様も、今月になつて急に殖えたんで御座いますからね。
留雄　冬は淋しいでせうね、此の邊は。
女中　どう致しまして、却つて冬の方が賑ひますの、スケートで。
留雄　あゝ、さうか。（間）春秋は靜でせう。雪もまだ積らず、木の葉も出揃はないつて云ふ頃は。
女中　さうで御座いますね。十月と四月はひまな月として御座いますけれど、日和さへよければ、手前どもなんかは、お客様が絶えません、溫泉も御座いますし……。（掃除を終りて）あの、お晝から、お二人とも、またお出掛けで御座いませうか。
留雄　多分。どうして。
女中　いゝえ、まだ御部屋がそのまゝになつてをりますから……。今日はつい手が廻りませんで……。
留雄　かまはないから、後にして下さい。どうせ晩までに

は散歩に出るから。
女中　畏こまりました。（カクシより髮ピンを取り出し）こゝにこれが落ちてをりました。奥さまので御座いませう。（留雄に渡さうとする）
留雄　その邊に置いといたらいゝでせう。
女中　では、こゝへ。（テーブルの上に置く）御免下さいませ。（退場）
留雄（急に暗い顏をして欄干に倚る）
ルイーズの聲　あなたそこにゐるの。
留雄（聞えないふりをしてゐる）
ルイーズ（毛絲のジヤケツトに手を通しながら出て來り）どうして置いてきぼりにするの。
留雄（背を向けたまゝ）話しが長くなると思つたから……。
ルイーズ　あなたを紹介しようと思つてゐたのに、いつの間にかゐなくなつてゐるんですもの。
留雄（ルイーズの方を向いて）それは失禮。誰です。あれは。
ルイーズ　あたしの學校友達よ。綺麗でせう。（間）もう結婚して五年になるの。旦那さんは田舍の大地主だけれど、ずつと巴里にゐて、交際社會にも顏の賣れた人。あれでもう四十なのよ。氣取つてるから若く見えるわね。
留雄　今日來たんですね。
ルイーズ　此の土地へは一週間前から來てるんですつて。パラースに泊つてるの。こゝへかはつて來るらしいわ。食事を褒めてたから……。
留雄　僕のことは知つてるんですか。
ルイーズ　それがね、詳しい話をしようと思つてるうちに、何だか、變な工合になつて……（間）でも、日本の畫家で、あたしの親しいお友達だつて、さうは云つて置いたんだけれど……。
留雄　さうですか。（ぷいと背を向ける）
ルイーズ　今日お茶に呼ばれてるから、その時よく話をするわ。
（長い沈默。）
留雄（ルイーズに背を向けたまゝ、スケツチブツクを取り出して、寫生をしはじめる）
ルイーズ（留雄により添ひ、なだめるやうに）少し歩いて見ない。
留雄　僕はもうこゝにゐるのがいやになつた。
ルイーズ　どうして。
留雄　だんだん人がやつて來て、うるさいぢやありませんか。
ルイーズ　今時分は、何處へ行つたつてこれ位の人はゐる

わ。避暑地で、こんなにひつそりした處は、めつたにないことよ。（間）こゝなら、ホテルを一足出れば、殆ど誰とも顔を合はせなくつていゝんぢやありませんか。（間）深い靜かな森もあるし……（間）これから、あの谷を越えて、向うの丘に登つて見ない。あの丘の麓に美しい湖水があるんですつて。道が惡いから、あんまり人が行かないつて、昨日の馬車屋が云つてたわ。

留雄　あなたも人と顔を合はすのがいやなんですか。

ルイーズ　あたしはかまはないけれど……あなたが……

（椅子に掛ける）

留雄　えゝ、僕はいやです。殊に、さつき晝飯の時に出くはしたやうな眼附は、たまらなくいやです。

ルイーズ　どんな眼附よ。

留雄　さつき、食堂で、あなたが向うに行つて話しをしてゐる間、あの連中が、どんな眼附をして僕の方を見てゐたか、あなたは知つてゐますか。

ルイーズ　あの人達が。

留雄　どんな立派な人達か知らないが、あの眼附はなんです、無禮きはまる。（寫生帳をしまひ、成る可くルイーズを見ないやうに歩きまはる）

ルイーズ　人の眼附なんぞ、どうだつていゝぢやありませんか。珍しいから見てるんだわ。

留雄　珍らしいから見る、成る程ね。あの人達に限らず、僕一人の時なら、まあ、さう取れないこともない。さうとばかりも云へませんがね。（間）然し、あなたと一緒の時は、僕だけが見られてゐるんぢやないんですからね。あなたと一緒にゐる僕と云ふものが興味の中心になる。（間）興味だか何だか知らないけれど……。（間）西洋の女を連れてゐる東洋の男が、どう云ふ意味で人の注意を惹くかゞ問題です。

ルイーズ　注意を惹くのは男の方と限つてゐないでせう。あたし達の場合なら……。

留雄　そこなんです。冷靜に考へて見ようぢやありませんか。

ルイーズ　そんなこと考へたつて何んにもならないわ。

留雄　なつてもならなくつてもいゝんです。世の中に不釣合な夫妻と云ふやつがありますね。なんだつてあんな男を、さう云はれる女も、好い氣持はしますまいが、あれでよく女の方が、から云はれる男こそ、いゝ面の皮ですからね。（間）僕達の方に注がれてゐる眼附が、たゞ珍らしいものを見る眼附だと思ふのは、どうですかね。（間）僕の方には、少くも、その眼附が、「こん畜生、黄色いくせに生意氣な」から云つてゐるのが明かにわかるんです。

ルイーズ　留雄さん、つまらないことを云ふのはよしませ

うね。（間）今だから云ふけれど、あたしと一緒に人前に出ることを、あなたが、何だか憚つていらつしやるやうな樣子が見えて來たので、あたし、不思議に思つてゐたの。それも、こゝへ來てからよ。

留雄　つまり二人がかうなつてからでせう。さうです、僕は、自分自身がさう云ふ眼で見られることよりも、あなたが、僕と一緒にゐる爲に、氣まづい思ひをなさりはしないかと、その方が氣になるんです。それから惹いて、あなたの僕に對する心持に、暗い影がさすつて云ふやうなことが、ないとも限りませんからね。

（長い沈默。）

ルイーズ　人の思惑や、世間の口の端で、心がはりをするやうな女なら、棄てゝしまつても惜しくはないぢやありませんか。（間）實を云へば、あたしも、はじめの二三日は、人からじろじろ顔を見られるのが、何だか氣恥しいやうな心持がしましたけれど、あたしがあなたのものであり、あなたがあたしのものだと云ふ氣持が、だんだんはつきりして來るにつれて、今迄は、自分を世間のうちに置いて、いくらか人ごとのやうにあたし達の關係を見てゐたのが、こんどは、自分を全く二人きりの世界に置いて、そこから、平氣で世間が眺められるやうになつたの。だから、人がどんな眼で見ようと、こつちからさう云ふ人達の眼を嗤つてやるだけの餘裕が出來てゐるわ。（間）あなたはあんまり考へ過ぎるのよ。あたし達が不釣合だとすれば、あたしの方に寧ろ足らない處があるんだわ。

留雄　戲談をおつしやい。あなたに缺點があれば、それは美し過ぎると云ふ缺點でせう。

ルイーズ　そんなことはまあ別として、第一日本の女でないことが缺點よ。

留雄　僕が佛蘭西人でないと云ふことはどうなるんです。

ルイーズ　それがあたしの望みなんだからいゝぢやないの。

留雄　僕もあなたが日本の女でないことを幸ひに思つてゐるんです。

ルイーズ　そんなら、それでいゝぢやありませんか。

留雄　あなたは、僕を日本人だから愛するんぢやないと云ひましたね。

ルイーズ　それは、あなたが、日本人だから愛すると云ふ愛し方ならいやだとおつしやつたからだわ。

留雄　さうでしたね。あなたが、日本と云ふ國に對して有つておいでになる執着が、日本人である僕に對する好意、更に愛情になつたのではないかと、僕はたゞそれを恐れてゐました。あなたの空想で築き上げられた殿堂が、ど

んなに美しいものであつても、僕がその殿堂の庭に生えた草かなんぞのやうに、あなたの感傷的な氣まぐれを滿たす爲めに摘み取られることだけはいやだと思ひました。(間)

ルイーズ　まあ、そんな……。

留雄　僕の云ふことを終ひまで聽いて下さい、處が、近頃になつて、やつとさう云ふ氣持ちが薄らいで來たのです。それと云ふのも、近頃のあなたには、僕を透して日本を見ようと云ふやうな態度が、殆どなくなつたからです。少くとも、かうして二人きりでゐるやうな時は、僕は、あなたが佛蘭西人だと云ふことも、僕が日本人だと云ふことも全く忘れてゐます。(間)たゞ、どうかしたはずみに、僕が外國人であること、殊に、色々な點で隔りの多い人種に屬してゐる人間であることに氣がついた時、二人の間には、今迄知らなかつた大きな溝が、今迄感じなかつた大きな空虚が出來てゐるのです。さう云ふ時、あなたの顔は、まあ、賴りなさとでも云ふやうな感情で、ひとりでに暗くなる。いゝえ、それはほんたうです。(間)かうなつたら何もかも云はして下さい。あなたが僕と話しをしてゐて、例へば日本人のことを呼ぶのに、もう例の「あなた方」と云ふ呼び方はなさらなくなつた。然し、そのかはり、第三者と僕の話しをなさる時のあなたは、決して、僕の腕に抱かれてゐる時のあなたではありません。あなたの心のうちに、或る戰ひが起る。その戰ひがどんな戰ひか、僕にはわかつてゐます。その戰ひを默つて見てゐる僕は、自分の身を燒かれるよりもつらいのです。(間)今更こんなことを云ふのも馬鹿げてゐますが、黄色人種に對して有つてゐる白人の感情は、一般に、われわれが甘んじて受け容れられる性質のものではありません。たゞ、どうすることも出來ないのは、肉體的の弱點です。猿のやうな顔面の骨格や、土のやうな皮膚の色は勿論、あなたが、よく、頸の短い、肩の怒つた、尻の細い、脚の曲つた男の後姿を見て、あれは日本人ぢやないかとおつしやるほど見すぼらしい體格、それは白人でない僕自身でさへも、全く滑稽に感じ、輕蔑さへしたくなるほどの醜さです。(間)さう云ふ男の一人と腕を組んで歩くだけでも、白人の女にとつては、大きな屈辱であるべき筈です。

ルイーズ　(キッとなり)屈辱ですつて。(間)あなたは、御自分をどんなに卑下なすつても、まあそれはかまはないとして、あたしが夫を選ぶ爲に、總ての自由を與へられてゐることだけは忘れないで下さい。(間)あなたが、どう云ふわけで、そんなことをおつしやり出したか、あたしにはよくわかりませんけれど、若し二人の結婚に何

か不滿をもつておいでになるなら、はつきり、さうおつしやつて頂戴ね。（間）あたしが普通の女だつたら、世間並に、たゞ女好きのする男、さう云ふ男にでもからだを委せたかも知れません。成るほど、異人種間の結婚は、餘程愼重に考へなければならない問題に違ひありませんけれど、あたし達二人は、お互に、先づそれぞれ相手の國を理解し、二人の間には、しつかりした心のつながりが出來てゐる以上、少し位の障碍はこれから立派に取り除けられるものと思つてゐました。あなたのおつしやるやうなことは、ほかの女ならいざ知らず、少くとも、日本人の美しさ、精神的ばかりでなく、肉體的にも特殊な美しさを認めてゐるあたしには、丸で縁の遠いことですわ。そりや、いくらか人の前で、あなたにも氣づかれるほどの……心の戰ひは大袈裟だけれど、まあ、努力と云へば努力をすることもあります。然し、それは、決して、あなたに對する不滿から生れるのではなく、あなたがさつきおつしやつたやうな、白人の偏見から、どうかして、あなたを救ひたい、――言葉は惡う御座んすよ――どうかして、日本人であるあなたの眞價に尊敬を拂はせたい、まあ、これもつまらない自尊心からでせうけれど、さう云つた心づかひが、ついふだんの落ち着きを失はせるのかも知れません。そんなことを、あなたが一々氣に留めていらしつたら、それこそ、人前には出られないわ。それもあたしがそんなことを苦にしてゐれば別だけれど、さう云ふ一種のヴアニテは、誰にだつてあるんですからね。――（優しく笑ひながら）殊に女にはね。

留雄　（いく分おだやかに）あなたの心持がそれだけわかれば、何も云ふことはありません。

ルイーズ　さ、もう何も云ふことがなけりや此處へいらつしやい。（別の椅子を引き寄せ、くつゝけるやうに竝べる）

留雄　（間の惡るさうに腰を下ろす）

ルイーズ　散歩に出る。

留雄　僕はよしませう。（顏をそむける）

ルイーズ　またそんな……（留雄の手を取つて）こつちを見て御覽なさい。

留雄　（そつとルイーズの方を見る）

ルイーズ　（留雄の兩手を取り、笑ひながら）さ、それで笑つて御覽なさい。

留雄　（しかたがなさゝうに微笑む）

ルイーズ　（滿足げに）さう、その通り。（留雄の方に顏を近づけ、聲をひそめて）一寸よ。

留雄　（極めて輕くルイーズの頰に脣をあてる）

ルイーズ　駄目、そんな。（更に顏を近づけ、留雄の眼を

見上げる）

第五場

前場と同じ場面。月夜。

留雄　（椅子に倚り、瞑想に耽つてゐる）

（オーケストラの舞踏曲が止むと、笑聲、拍手の音が交々聞える。）

ルイーズ　（夜會服にて現はれ、留雄を見つけて）いや、また置いてきぼりにして。くたびれたの。（後ろより留雄の頸に腕を捲きつける）

留雄　僕はもうあんな場所へ出るのはいやです。

ルイーズ　わかつてゝよ。あたしだつて好きで出るんぢやないわ。（間）ぢや、もうこゝにゐませう、ね。（留雄の傍に座を占める）好い月だこと。

（長い沈默。）

留雄　僕にかまはないで、あなた踊つてらつしやい。あの連中に惡いでせう。

ルイーズ　いゝのよ。（間）蟲が鳴いてる。

（稍長い沈默。）

留雄　寒くはありませんか。

ルイーズ　えゝ、少し。（肩をすぼめる）

留雄　（立ち上り奥に入る）

ルイーズ　何處へ行くの。

（オーケストラの音が再び起る。）

留雄　（ルイーズのマントを持ちて出で來る）これでいゝんですか。

ルイーズ　えゝ、ありがたう。（立ち上る）

留雄　（マントをルイーズに着せかける）

ルイーズ　（着終りて、留雄の手を握る）熱い手、熱があるんぢやない。（腰を下ろす）

留雄　（立つたまゝ）チョコレートはまだあつたか知ら。

ルイーズ　あたしがみんな食べた。（間）おなかゞすいたの。（間）何か取つたら。

留雄　ねむい。

（稍長い沈默。）

ルイーズ　これぢやねられないわね。（間）どうして、そんな處に立つてるの。

留雄　（腰を下ろす）

ルイーズ　踊れるんでせう。あなた。

留雄　馬鹿々々しくつて。

ルイーズ　でも、たまには面白いことよ。考へちや出來ないわ、あんなこと。（間）やつぱり生活次第ね、なぐさみなんて云ふものは。

留雄　一時、努めてやつて見ようと思つたこともあります

けれど、こればかりは、どうしても氣がひけて……。
ルイーズ　日本人獨特の自己批判ね。いゝことだけれど……損もするわね。
留雄　或る程度まで自分を忘れることによつて、却つて自分の存在をはつきり掴むと云ふやうなことも、考へて見たことがあります、パラドクサルな云ひ方だけれど。
ルイーズ　それはほんとね。
留雄　強く活きる爲めに、生活意識ほど邪魔になるものはないと思ひます。
ルイーズ　さうとも云へないわ。日本人の有つてゐる鋭敏な生活意識は、歐羅巴の生活に織り込まれてゐるやうな強烈な刺激には堪へられないのよ。
留雄　さうかと云つて、日本人の多くが今でも棄てられないでゐる概念的な感情の遊戯には、僕だつて、あきたらないんですがね。
ルイーズ　つまり、古い玩具を棄てゝ、新しい玩具の方に手は出したものゝ、扨て、その玩具で遊ぶ段になると、どうも勝手が違つて、面白くないつて云ふわけね。(間)あたしは、その二つの玩具で面白く遊ぶことを知つてゐるの。
(オーケストラの音止み、一としきり、拍手、笑聲が聞える。)
留雄　日本には、御存じの通り、和洋折衷と云ふ言葉があります。
ルイーズ　折衷と云ふことは、必ずしも、ちぐはぐと云ふことではないでせう。(間)怒つちやいやよ、折衷主義をけなすあなたが、現在一番ちぐはぐな生活をしていらつしやるんぢやなくつて。(間)西洋の生活を肯定なさるあなたの思想は、日本人としてあなたが有つておいでになる傳統的な感情、それは恐らく世の中で最も洗錬された感情よ――その感情と背中合せをしてゐるんだと思ふわ。日本人の美しい感情生活を土臺にして、西洋の論理的な思想生活を築き上げることは、あたし達にはそんな六ケ敷いことぢやないでせう。たゞ、それには、一方の生活を全然棄てゝしまふと云ふやうな間違つた考へを、起してはならないのよ。(間)それからまた、さう云ふ新しい生活が、比較的動きつゝある日本の社會に、生れる可能性が多いと云ふことも考へて見る必要があるわ。
留雄　それで、日本に行かうとおつしやるんでせう。(相手の心中を見破つた誇り、さういふ誇りを示した笑ひ方をする)
ルイーズ　(ためらひながら)まあ、さう云ふことになるわね。(間)あなた、どう思つて。
留雄　僕達はどこへ行つても、此處に居る以上の自由は得

られないと思ひます。自分を脅かし束縛する社會に、どんな優れたものが潜んでゐようと、その社會は全體として自分を活かしはしません。あなたが憧れておいでになる日本と、僕が惜しげもなく棄てた日本との間に、どれだけの隔りがあるか、それは、僕だけが知つてゐて、あなたには分らないんです。舊い日本の事は云ひますまい。又、將來の日本がどうならうと、そんな事は僕達の知つた事ぢやない。僕達は、たゞ、現在の日本が、どの點から見ても、矛盾と破綻に滿ちた住み心地の惡い社會であることを知つてゐるだけで澤山です。あなたの美しい空想をぶちこはすだけでも、今日本に行くことは考へものです。現實の日本が、あなたにどんな印象を與へるか、それを思ふと、僕は、自分が日本人であることを情けなく思ひます。目のあたり赤裸々な日本人の生活を御覽になつて、あなたは、きつと、日本人を夫に有つた事を後悔なさるに違ひありません。その時、此の僕はどうなるんです。

ルイーズ　（笑ひながら）大丈夫よ、留雄さん。あたしは、現在の日本を最も正しく視る方法を父から教はつてゐます。その點は誰よりもあたしを信じて下さい。

留雄　われわれは、學者や藝術家のやうな態度で、常に自分の周圍に接することは出來ませんからね。

ルイーズ　出來ない筈はないでせう。

留雄　出來ません。

ルイーズ　出來ます。（挑むやうに留雄の顏を見つめて笑ふ）出來てよ。

留雄　あなたが日本に行かうとおつしやるのは、外に理由があるんでせう。

ルイーズ　どんな理由。

留雄　あなたはやつぱり、こゝで僕達に注がれてゐる世間の眼を怖れてゐるんですね。日本に行けば、さう云ふ眼から遁れることが出來ると思つておいでになるんでせう。

ルイーズ　あなたはさうお思ひにならない。

留雄　あなたは、僕と一緒に此處にゐるのが、そんなに辛いんですか。（立ち上つて、ルイーズの側を離れる）

ルイーズ　まあ驚いた。あなたはさう云ふものゝ考へ方をなさるの。（間）あたしが怖れてゐるのは、世間の眼ではなくつて、それを怖れておいでになるあなたの眼よ。（間）だから、あなたが、御自分と親しい周圍に取卷かれると云ふことが、あなたに取つても、あたしに取つても、結局幸福ぢやないかと思ふんだわ。

留雄　僕にとつて自分と同じ周圍が、あなたに取つてはどうか、それはわかつておいでせうね。

ルイーズ　日本に居る外國人は、みんな日本人の愼み深い

待遇に滿足してゐます。あたしは、日本に行つて、あなたが歐羅巴で遭遇なさるやうな——それもいくらか、あなたの思ひ過しがあるにはあるけれど——さう云ふ眼附で見られるやうなことは先づないと思ひますわ。

留雄　成る程、さうでせう。白人種の優れた特質が、黄色人種の社會で、一層光つて見えるのは當り前ですからね。

ルイーズ　（嘆願するやうに）留雄さん。

留雄　僕は日本に行きません。（間）行くのはいやです。（間）僕は佛蘭西の、自由な生活だけが、人として、また藝術家としての僕を寬大に育てゝくれることを信じてゐるのです。さうして、その生活の中で、佛蘭西人であるあなたの濃やかな情熱が、僕の魂を燒きつくしてくれることを望んでゐるのです。

（オーケストラの音、更に起る。）

ルイーズ　（瞬きもせずに、遠くの何ものかを見つめてゐる）

留雄　（ルイーズの傍らに腰を下し）ルイーズさん、日本に行くことだけは思ひ止つて下さい。

ルイーズ　ぢや、しばらくでいゝから、兎も角日本を見せて頂戴。永住しなくつてもいゝから、旅行者として、日本を訪ねるだけ、ね、それならいゝでせう。いやになつたら何時でもこつちへ歸つて來ることにして、一と先づ、此の土地を離れて見ませう。

留雄　どう云ふ理由があつても、僕は日本の土を踏みたくありません。（間）そんなに行きたければ、あなた一人で行つたらどうです。

ルイーズ　あたし一人で。（かう云つて、殆ど脅迫的な身構へをする）

留雄　だつて、さうするよりしかたがないぢやありませんか。

ルイーズ　（憤りを抑へて）よう御座んす。さうしませう。（唇を嚙む）

留雄　僕の云ひ方が惡かつたかも知れません。一人で行けと云つたのは、勝手にしろと云ふ意味ぢやなかつたんです。日本を見たいと云ふあなたの御望みは、早晩實現させなければならない。僕は色々の事情で一緒に行くことは出來ないけれど、幸ひあなたは旅行にも慣れておいでになるし、時機を見て、長くとも一年か二年、……

ルイーズ　いゝえ。（間）あなたが日本に行くのがいやだとおつしやるなら、あたしは佛蘭西にゐるのがいやだとも云へるんですからね。二人の違つた欲望を同時に滿たすことが出來ないとすれば、道理に道を讓る外はないと思ひます。あなたは御自分のかたくなな自尊心で、二人の生活を破壞しようとなさるんですね。

留雄　さうでせうか。あなたこそ、御自分の見榮と氣まぐれで、二人の愛を傷けようとなさるんぢやありませんか。

ルイーズ　（努めて冷やかに）さあ、どうでせう。（間）あなたも、わからない方ね。

（長い沈默。）

留雄　此の問題は僕達二人だけで解決できる問題ではないと思ひます。

ルイーズ　第三者に相談のできる問題でもないでせう。

留雄　だから、此の問題はそのまゝにしておいて、もつと根本から二人の立場をはつきりさせて置かうぢやありませんか。

ルイーズ　立場と云ふと……。

留雄　僕達は自由なんですからね。

ルイーズ　（息づまるやうに）それはわかつてるわ。（間）ぢや、やつぱり、勝手にしろとおつしやるのね。（涙ぐむ）

留雄　さう云ふものゝ云ひ方はよしませう。お互に自由を尊重することは、お互のすることに無關心であるのとは違ひます。二人の愛が、しつかりした根柢の上に築かれてゐるものなら、離れてゐる二人を何時かまた結び附けるでせう。僕達は先づ信じ合はなければなりません。

ルイーズ　（泣きながら）その愛がほんたうの愛なら、今二人を引離す筈はないと思ひますわ。愛よりも強い何ものかゞ、あなたを支配してゐるんです。信じ合はなければならないとおつしやるけれど、あたしは、あなたをどう信じていゝのかわからないぢやありませんか。

留雄　あなたも少し蟲がよすぎはしませんか。假に、僕があなたに讓歩するとします。あなたはそれを愛の實證となさるでせうが、僕は何によつてあなたの愛を確めることが出來るのです。

ルイーズ　（情けなさうに）だから、あなたはわからないつて云ふの。あなたは、あなた御自身のことばかりしか考へていらつしやらないけれど、あたしは、あたし達二人、殊にあなたの爲めに考へてゐるんだわ。

留雄　それが實際、僕達の爲にも僕の爲にも、ならなかつたらどうします。（間）あなたもやつぱり、そんなことで人が悦ぶと思つてゐるんですね。

ルイーズ　なんの意味、それは。

留雄　なんでもありません。

ルイーズ　（むつとして）あたしは、それがきらひ、ちやんと云つたらいいぢやないの。

留雄　（默りこくつてゐる）

ルイーズ　（脅かすやうに）なによ。（間）云はないの。

留雄　僕の爲だなどと云はずに、あなた御自身の爲に、日

本に行くなら、やつぱり一人でいらつしやい。（間）一時でも二人が別れてゐることは、僕達にとつて尊い試錬です。僕だけは、甘んじて、その試錬を受ける覺悟をしました。

ルイーズ　あなたの冷たい覺悟で、どうやらあたしの決心も眼をさましたやうです。この決心が鈍らないうちに、早く旅の支度をしませう。（立ち上つて、欄干に倚る）

（オーケストラの音止み、更に激しい拍手と、けたゝましい笑聲が起る。）

第六場

留雄の書室。午後十時。

留雄、寢臺に寢てゐる。

留雄　（房子の差し出す茶碗を受け取り）ありがたう、あなたは。

房子　あたし、あとで。濃すぎやしない。

留雄　（茶を飲みかけて）熱い。

房子　あら、ごめんなさい。（笑ふ）

留雄　もう遅いでせう。

房子　まだいゝわ。どうせ歸つたつて、なんにもすることはないんだから……。

留雄　手塚君が心配するといけない。

房子　いゝのよ。こゝに來てることがわかつてるんだから……。

（稍長き沈默。）

留雄　何時です。

房子　十時よ。ルイーズさんは今頃どの邊か知ら……船があしたの朝だから忙しいわね。でも元氣ね、あの方。やつぱり西洋の女はえらいと思ふわ。どこへでも一人で平氣で行けるんだから……（間）あかり、もつと小さくしませうか。

留雄　あかりもあかりだけれど、窓掛をしめて下さい。いやに暗い空だなあ。

房子　月が無いんですもの、今夜は。（立ち上り、窓掛を引き、ランプを細めて座に着く）

留雄　ほんとに、僕にかまはないで、もう歸つて下さい。

房子　（默つて氷嚢に手をのせる）

留雄　僕の心は今、落ちつく處に落ちついてゐます。孤獨と云ふ深い洞穴がそれです。自分の聲だけが自分の耳に響いて來る、それをぢつと聽きすましてゐるほど、安らかな生活がどこにあります。

房子　さ、もうそんなことは考へないで、靜かにおやすみなさい。

留雄　僕の心はもうあの女から離れてゐます。僕は誰から

も可哀さうだと思はれるやうな人間ではありません。

房子　わかつてゝよ。駄目よ、そんなに興奮なすつちや。

留雄　僕は女を戀する力もなく、女から戀される資格もない男です。

房子　（たしなめるやうに）をかしいわ、そんなことおつしやつちや。

留雄　あなた、日本に歸ることはどうなりました。

房子　（默つて顔を伏せる）

留雄　こんなことを聞くんぢやなかつた。

房子　もう、何にも云ひつこなし、ね。あなたは熱があるんだから・話をなすつちやいけないの。

留雄　僕、もう寢ますから、通りが賑かなうちにお歸りなさい。タクシイがなくなりますよ。

房子　えゝ、おやすみになつたら歸るわ。（傍らの書物をひろげて讀む。時々、留雄の汗を拭いたり、氷嚢の位置を直したりする）

留雄　房子さん。

房子　え。

留雄　僕は、あなたの前に跪いて、宥しを乞ひたいやうな氣がします。（間）なんにもならないでせうか。

房子　（極く低く）そんなことをなさらない方がいゝわ。

（長い沈默。）

留雄　僕はかうして、あなたの親切を受けてゐるのが苦しいんです。あなたの氣高さを氣高さとして享け容れることが、どうしてもできないんです。さう云ふ僕の心持は、不純なものでせうか。

房子　さあ、それはあたしにはわかりませんわ。こんな場合に、友情がどんな役目をつとめるか、あなたはそれを御存じないのね。

留雄　その友情が、普通の友情から見て、もつと運命的なものだとは思ひませんか。

房子　さう思はなくつたつていゝわ。

留雄　思つても差支へないでせう。

房子　いゝえ、それはいけません。

留雄　どうしていけないんです。

房子　あたしは、女としてあなたに會はせる顔はないんですからね。あなたも、男として、あたしに物をおつしやることはできない筈よ。いゝえ、意地ぢやないの。さう云ふものよ。

留雄　だから僕はあやまつてゐるんです。もう遲いとおつしやるんでせう。あなたは、僕が昔苦しんだだけ苦しむとおつしやつた。こんだはまた僕が苦しむ番ですか。

房子　あなたのおつしやることがほんとなら、あたしも一緒に苦しみますわ。どつちの苦しみが永く續くか、こん

どこそほんとにそれがわかるわけ。さ、もうおしまひ、この話は。
留雄　待つて下さい。あなたは苦しむために苦しむと云ふことが、つまらないことだと思ひませんか。
房子　だからいゝのよ……あなたに此の氣持がわかる筈はないし……。（間）それに、まだルイーズさんのことをお忘れになるのは早いわ。そんなものぢやなくつてよ。ルイーズさんは、今日、あなたが停車場へいらつしやらないことを不思議に思つていらしつたわ、汽車が出るまで、改札口の方ばかり見て……。
（稍長き沈黙。）
留雄　もうなんにも云ひますまい。此の問題は時が解決してくれるでせう。たゞ、僕が一人ぽつちだと云ふことだけ信じて下さい。
房子　あたしも一人ぽつち……。
留雄　（憐みを求めるやうに房子の顔を見る）
房子　だけど、あたしは、一月前のあたしぢやなくつてよ、どんなことがあつても……。
留雄　房子さん。（泣いてゐる）
房子　さ、何んにも云はないで寝ておしまひなさい……。涙なんか出して……お馬鹿さんね。（留雄の涙を拭いたハンカチで、そつと自分の涙を拭く）

チロルの秋（一幕）

時
一九二〇年晩秋

處
墺伊の國境に近きチロル・アプスの小邑コルチナ。

人
アマノ
ステラ
エリザ

ホテル・パンションの食堂。午後七時。
ストーブの火が燃えてゐる。
ステラ、喪服、ヴエールで眼を覆つてゐる。珈琲を飲みながら、書物の頁を繰る。
エリザ、珈琲注ぎを持ちたるまゝ、傍らに立つ。
ほかに誰もゐない。

エリザ　明日はあなたがおたち、明後日はアマノさん……。さうすると……あとは、此のホテルも空つぽ……
（沈默。）
ステラ　汽車の時間はわかつて。
エリザ　まだ伯父さんが歸つて來ませんの。もう一日お延ばしになつたら……
ステラ　だつて、もう荷物ごしらへをしてしまつたんですもの……（間）それに……雪でも降り出すと厄介だし……。
エリザ　大丈夫ですわ、まだ……牧場のサフランが咲いてゐるうちは……（間）でも……急に寒くなりましたわね。
ステラ　折角、いゝ落ち着き場所を見つけたと思つてゐたのに……。
エリザ　あなたのやうに、夏はどこ、冬はどこつて、自由に旅行がなされる方は、おしあはせですわ。
ステラ　あたしも、出來ることなら、一と處に落ちついて暮したいの……（間）これでもう、一人ぼつちの旅を二年……何處へ行つても何か知ら氣に入らないことがあつて、かうやつて方々を歩き廻つてるんだわ。
エリザ　アマノさんも、そんなことをおつしやつてました

わ……

あの方も、お國をお出になつてから、隨分になるんですつてね。

寒いのは、かまはないから、こゝに置いてくれつておつしやるんですけど、あの方お一人の爲に、このホテルを開けて置くわけにも行きませんし……

ステラ　(書物に眼を落として)フロレンスへいらつしやるんですつて、あの方……?

エリザ　さあ……。

それもまだ、はつきりお決めになつたわけぢやないんでせう。

あなたが、シシリイへいらつしやるつていふお話をしたら……

ステラ　(笑ひながら、眼をあげて)なんて?

(此の時、アマノ、手にサフランの花束を持ちて入り來る。)

エリザ　御ゆつくりでしたわね。

アマノ　遲くなつて濟みません。(ステラの方に花束を差し出し)

綺麗でせう。

ステラ　(花束を受け取り、香ひを嗅ぎながら)あたしに?

まあ。御深切ね、あなたは。

アマノ　(食卓に着き、エリザ)今日はなに……?

エリザ　(皿を運びながら)鮎ですの。そのあとが、羚羊と栗……。

アマノ　奧さんは、もうおすみですか。

ステラ　(書物から眼を離さずに)えゝ、お先へ……。ごゆつくり召上れ。

アマノ　(食事をしはじめる)うまい。

ステラ　どこへいらしつたの、今日は。

アマノ　(やゝ皮肉な微笑を泛べ)例のところ……。

ステラ　(努めて氣輕に)お城……?

アマノ　よく御存じですね。

ステラ　別に不思議はないでせう。……(間)

さういふことがお好きね、あなたは。

アマノ　どういふこと……?

ステラ　人に見られないやうに、人のすることを見たりなんか……。

アマノ　見られてるから世話はない。

それに、あそこは公園です。

あなたも、見られてゐるいやうなことはなさらない。

ステラ　よしあしに拘らずよ。

あたし、あの山に映る夕陽の色が好きなの……。

アマノ　壯嚴ですね、あの眺めは。

ステラ　ミスチツクなところがあるでせう。祈りの美しさね……。
アマノ　一體、チロルの自然は——生活もさうだが——宗教的な美しさを有つてゐます……。
ステラ　あなたはクリスチヤンでせう。
アマノ　あたし、無宗教……。
ステラ　無信仰ぢやないでせう。
アマノ　どう違ふの……結局。
ステラ　僕は、まだ、あなたがほんたうに何處の方だか知らないんですよ。
アマノ　宿帳を御覽になればわかるわ。
ステラ　宿帳は宿帳ですよ。
アマノ　あなたは、アメリカ人ぢやない（相手を見据ゑる）……
ステラ　さう？（かう云つて、珈琲の最後の一口を飲み干す）
アマノ　僕は、自分が日本人であることに、それほど注意してゐない。それだけ、人が何處人だといふことにも、あんまり興味がないんです。
われ〳〵は、それほど、かけ離れた生活はしてゐないと思ひます。
ステラ　それはさうね。（席を立ち、長椅子に投げかゝる）
エリザ　そりやさうだわ。

（沈默。）
アマノ　奧さん、たうとうお別れしなければなりませんね。
ステラ　（言葉を用意してゐたやうに）一生の御別れかも知れないわね。
エリザ　お二人とも、また春になつたら、こゝへいらつしやるんでせう。
いつか、さうおつしやつたわ。
ステラ　（笑ひながら）あたしは、あなたにさう云つたのよ。
アマノ　僕はどうだつたかなあ……。
何れにしても、一生の別れ……さういふ氣がしますね。
わるい氣持ぢやないな……お互にさうなら……。
ステラ　（半ば微笑を以て）ほんと……。
アマノ　旅をする人間の心持は、變なものですね。
友情に對しては、恐しいほど敏感になる……
そのくせ、情熱の前には、可笑しいくらゐ臆病です。
さうお思ひになりませんか。
ステラ　さあ。……情熱つて……。
アマノ　えゝ……。
僕は今日、つく〴〵さう思ひました。
ステラ　（耳を澄まして）エリザさん、聞えない…窓…
エリザ　（急いで、一方の窓に馳せ寄り、カーテンを細目

にあけ）どこ……。

アマノ（面白がつて）こつちだ。

エリザ（もう一方の窓に行き）うそ。

ステラ（笑ひながら）やつぱり、こつちよ、そら……。

エリザ（そつちへ行き、今度は思ひ切つて窓を開け）

こゝよ、ルナアト……。

どうしたの。

え、伯父さん？

町へ行つたの……。

まだいゝのよ。

あら……

ぢや、どこで……？ 今すぐ？ ぢき行くから待つてゝ。

（窓を閉める）

ステラ こゝへ連れていらつしやいよ、一度……。

エリザ（そは／＼しながら、アマノに）ゆつくり召上つていゝわ。

アマノ ゆつくり……？ 不思議だなあ……。

ぢや、食ふものは、みんな、こゝへ出しといて……

勝手に食ふから……。

エリザ（次の皿と珈琲を運び）ほんとにいゝこと……？

アマノ 伯父さんに云ひつけようかな。

エリザ さうしたら、逃げ出すばかりだわ、あたし……

（くるりと廻る）

ステラ さう／＼……。

早く行つておあげなさい。

じれつたがつてゐるわ、あなたの少尉さん……剱をがちや／＼云はせて……。

エリザ（もぢ／＼して）たまにはいゝのよ。

ステラ おや……今頃から。

エリザ（髪に手をあてながら、戸口に近づき）伯父さんが歸つて來たら、もう寝てるつて云つて頂戴ね。

アマノ 何處で……？

エリザ（走り去りながら）いやな方。

アマノ 此の夏、或る獨逸の士官に聞いたんですがね……

戰爭中、佛蘭西の田舍を占領してゐた先生たちの中隊が、いよ／＼引上げるつていふ日、村ぢうの若い娘たちが、道ばたで、聲を立てゝ泣いたつて云ひますからね。

ステラ いやな話ね。

アマノ さうか知ら……。

ステラ それに……（何か云はうとして急に口を噤む）

アマノ あなたは、人間の情熱といふやうなものを、わりに、甘く見ておいでのやうですね。

ステラ わりに……ですか。

アマノ さうでせう。

ステラ　あなたこそ、日本の方らしくないのね。
アマノ　どうしたと云ふんです。
ステラ　いゝえ、何んでもないの。
もつと日本の話を聞かして下さらない。
アマノ　（笑って答へない）
ステラ　ちつとも、お國の話をなさらないのね、あなたは。
アマノ　あなたは……？
ステラ　長崎つて、佳いとこでせう。
アマノ　そんなことを聞いて、どうなさるんです。
ステラ　どうもしないけれど……。
アマノ　それより、あなたは、ほんたうは何處の方です。
ステラ　さつき、なんておつしやつて？
アマノ　僕がなぜ、それを知りたがるかつていふと、あなたは、ことさらに隱しておいでになるからです。
僕はあなたが、墺太利人であるよりも、伊太利人であることを望んでやしませんよ。
ステラ　知つてますわ。（間）
それはどうだか、わかるもんですか。
ぢや、あてゝ御覽なさい。
アマノ　あてますから、一度、あなたの御眼を拜見……
（起ち上つて、ストーブのそばに行く）
ステラ　どうぞ……いくらでも……。

アマノ　ヴエールをどけて……。
ステラ　いけません、それは……。
アマノ　それ御覽なさい。
あなたも、そんなことが、お好きなんですね。
ステラ　駄目よ、そんなことおつしやつたつて……。
アマノ　（ステラに背を向けたまゝ）ヴエールを透して見るあなたの御眼は……物を言はない口のやうなものです。
あなたの眼の中には、きつと、僕が今迄知らなかつたものが、あるに違ひない。
ステラ　もの好きね、あなたも……。
アマノ　いけませんか……（間）
あなたは、よく泣いておいでゝすね。
（沈默。）
ステラ　……。
アマノ　あなたの涙は、夢から夢を傳はる涙でせう。
ステラ　（溜息）あたしの夢……それは、どんな夢だか御存じ。
アマノ　（振り向いて）あなたの夢ですか……。
それは、現實のすべてを包む霧のやうな夢です。
あなたが、旅をなさる……それも、あなたに取つては、
一つの夢……

讀書をなさる……それも夢……。
戀をなさる……それも一つの夢……。
ステラ　待つて頂戴……。
かうして、あなたとお話しをしてるのは……。
・うそ……。
アマノ　第一、あたしは生きてゐます。
あなたは、あなたの夢は生きておいでになる。
ステラ　そんなら……一つの夢をね。
アマノ　思ひ出でせう……悲しい、華やかな……。
よくあるやつだ。
ステラ　うれしさうね。
アマノ　ちつとも……（眞面目に）
僕が、やつぱり、さうなんです。
（沈默。）
ステラ　さうおつしやるだらうと思つてゐました。
アマノ　云はなくつてもよかつたんです。
ステラ　ぢや、何かもつと、ほかの話しをしませう。
アマノ　ほかの話し……それもいゝでせう。（間）
あなたが、いつも讀んでいらつしやる本……あれはなんです。
ステラ　これ？（手に持ちたる本を見せようとして、慌て後ろへ隱し）
なんでもいゝぢやありませんか。
もう、あたしに、何んにも訊かないで頂戴、ね。
質問は、一切、受け附けないことよ。
アマノ　それぢや、お話しができない。
今迄、かういふ機會がなかつたんです。
食事がすむと、あなたは、いつも人を避けて、讀書と瞑想に耽つておいでになる。
此の食堂以外、僕は、あなたに近寄ることすら出來なかつたんです。（間）
今日は、最後の晩ぢやありませんか。
ステラ　最後の晩……。
それも、空想の遊戲ね。
アマノ　さうです……。
その空想の遊戲を、もつと面白くする方法はありませんか……二人で……。
お斷りして置きますが……。
あしたの朝、あなたの馬車があの峠を越えたら、僕は永久にあなたの夢から消えてしまふ男です。
ステラ　あなたは、眞面目に、そんなことをおつしやるの。
アマノ　さういふものぢやないでせうか。
旅人同志の心は、約束に縛られない友情で結びつけられるものです。

また揺れるかどうか、わからない、さう思ひながら揺る
手に、旅らしい自由な力が籠るんぢやないでせうか…。
(間)
このチロルの山奥で、お互に身の上話しさへしたことの
ない二人が……
二度と再び會はないといふ誓ひを立てた上で、
久しく別れてゐた戀人のやうな一夜を明かして見たら…
どんなに、面白いでせう。（間）
よう御座んすか……
あなたは、夢を見ておいでになる。
もう一人、夢を見てゐる男がゐる……
二人の夢が、重なり合ふ……
たゞ、それだけ……(間)
夢で遇つた二人が、夢で戀をする。
どうです……
さういふ戀を、一度、して見たいとは思ひませんか。
ステラ　あたしは、一人で夢を見てゐる方がいゝの。
アマノ　あなたはあなたで、好きな夢を御覽なさい。
僕は僕で、好きな夢を見ます。
ステラ　それで、どうするの。
アマノ　あなたが愛していらつしやる男が、僕だとします。
ステラ　あなたが愛しておいでになる女が、あたし……？

アマノ　僕とあなたとではない……
あなたの戀人と、あなた……
僕の戀人と、僕……
とが、今、こゝにゐるわけです。
ステラ　(笑ひながら)　それから……？
アマノ　それからは、云はなくつてもおわかりでせう。
ステラ　それぢや、飯事ね……
お芝居ね……。
アマノ　眞劍なまゝごとです。
眞劍なお芝居です。
さ、
あなたは、僕を愛してゐる……。
ステラ　だつて……。
アマノ　さうして置くんです。
ステラ　あなたは、あたしを愛してるの？
アマノ　えゝ……。
下手な經驗よりは、合理的な想像の方がいゝんですよ。
さ、かうして、
あなたの戀人が、あなたの足許に跪いてゐます。(跪かない)
ステラ　(笑ふ)
アマノ　笑つちやいけません。

ステラ　薪をくべませう。
アマノ　（薪をストーブにくべながら）僕は、あなたの心臓に耳を當てゝ、微な響きを聞き漏すまいとしてゐます。あなたの唇から漏れる吐息を……（ステラの傍に近づき）胸一つぱい吸ひ込まうとしてゐます。
あなたは、それを感じておいでになる。それは、夢です。さ、
その夢の先を見ませう。（ステラの傍に寄り添ひて腰をおろす）
ステラ　（やゝ聲をふるはせて）をかしいわ。
アマノ　をかしい……
をかしいと思ふから可笑しいんです。
子供の遊びを、大人が見てゐてはいけません。
（ステラの耳に口を寄せ）僕はあなたを愛してゐます……
心の底から愛してゐます。
僕は、あなたの美しさに、魂を奪はれてゐる男です……
月並だなあ……
然し、まあ、いゝ……聞いて下さい……
僕は、あなたの夢を亂したくない。
僕も、僕の夢を亂したくない……。
戀を遂げた刹那の歡びは、永久に續くものではありません。
僕は、あなたを獲た瞬間に、あなたを失ひたいんです。
わかりますか、僕の云ふことが……。
わからない。
僕が、あなたに愛されてゐると思ふ瞬間……
あなたの唇が、僕の唇に觸れる瞬間、
その瞬間は、
僕の生涯を通じて、最も幸福な夢なのです……
先づ、僕の手を強く握り締めて下さい……（ステラの手を取る）
ステラ　（身ぶるひして）お芝居よ……
ほんとにお芝居よ……。
アマノ　（兩手を取らうとして）怖はがつちや駄目……。
ステラ　（アマノの手を拂ひのけて）いゝえ、いゝえ、いけません。
あなたといふ方が、あたしの夢の中へ出て來てはいけません。
あたしは、それが一番……
あなたのやうな方なの……あたしの夢をさますのは……
アマノ　僕は、通りすがりの男です。
道ばたで、あなたの靴を磨いた男です。
汽車の中で、あなたに席を讓つた男です。
劇場で、あなたが、ハンケチを拾はせた男です……。

ステラ（しんみり）あなたは、女の心を御存じないのね。
アマノ（ステラの手を取り）無關心な女の心は讀みやうがありません。
ステラ（思ひ返したやうに、アマノの手を握り締め）いいわ……
ぢや、一緒にお芝居をしませう。
その代り、約束を忘れちやいやよ。
今夜だけ……
ね、よくつて……
今夜だけ……
（醉つたやうに）さ、もつと、何か云つて頂戴……
あたしは、淋しいの……
今夜は、どうしてだか、淋しいの……
今まで、見つゞけてゐた夢が、これでおしまひになるのではないかと、思はれるほど、淋しいの……。
さ、
早く、何か云つて頂戴……。
アマノ　その前に、あなたの眼を、一度……
ね、ヴエールをどけて……（ステラの肩に手をかけ、引き寄せる）
おや……
どうして、泣くんです。

（沈默。）
ステラ（ヴエールを外し、涙をふく）
アマノ　何が、そんなに、悲しいんです。
ステラ　悲しくはないのよ……
癖なの……。（アマノの方を見て微笑む）
アマノ　あゝ、これ、これ……
この眼……（ステラを抱く）
ステラ　もつと、しつかり、抱き締めて頂戴。
あたしは、あの人に抱かれてるのよ。
（だん／＼熱を帶びて來る）あなたは、あたしの大好きな、大好きな人よ。
さ、もつと、強く……
なんて靜かな晩でせう。
丁度、あの晩のやうね……
――昔だわ――。
あなた、ふるへてるの……（間）
あたしを騙しちや、いやよ。
あなたは、ひどい方……
今夜ぎりだなんて……
アマノ（氣がついたやうに）あなたは、いつまでも僕のものです。
此の腕が、骨になるまで、あなたを放しません。

ステラ　いや……そんな氣味のわるいことを云つちや……
それより、あなたのブロンドの髮が灰色になるまで……
あたしの黑い瞳が、鳶色になるまでつておつしやい。
アマノ　僕の髮の毛は、ブロンドぢやありません。
ステラ　そんなことは、どうでもいゝのよ。
――どうせ、形容ですもの。
怒らないでね。
あなたは、日本の方ね。
あたしのお母さん、長崎で生れたの……
ハマつていふ名……
アマノ　（驚いて、ステラの顔を見る）
ステラ　どうして、そんなに吃驚なさるの。
あたしの眼が黑いから……？
それや、しかたがないわ。
あなた、黑い瞳は、おきらひ……？
アマノ　（あらたまつて）ステラさん、僕に、ほんとのことを云つて下さい。
今、おつしつやつたことは、常談ぢやないでせうね。
ステラ　いやよ……そんな、怖い顏をしちや……
アマノ　（固くなつて）もうお芝居はよしませう。
僕は、更めてあなたにお願ひがあります。
あなたの身の上を打ち明けて下さい。

ステラ　あなたは、變な方ね。
アマノ　あなたには、僕の氣持ちがわからないんですか。
ステラ　わかつても、わからなくつても、おんなじよ……
どうせ、お芝居ですもの……
（沈默。）
さ、そんな眞面目くさつたことは、云はないで、
夢の續きを見ませう。
あたしの氣が變つたら、もうおしまひよ。
アマノ　誤解しないで下さい。
僕には、ほんたうのあなたが、今わかつたやうな氣がするんです。
今まで知らなかつたあなたの眼の中に、僕は、自分の全生涯を見出したやうな氣がするんです。
幸福な一瞬間では、滿足ができないんです。
ステラ　（アマノの頸に腕を投げかけ）いゝから、もつと、こつちへお寄んなさい。
何時だつたか知ら……
あの、イイン河の流れを見下ろす。
ヴィラ……何んでしたつけね……
いゝの……
あたしが、始めて、あのヴィラに泊つた晩ね……
船遊びをした日よ　遲くまで……

あの晩……
あなたは、あんなに醉つてさ……
どうして、あんなに醉つたの?
あら、あたしが醉はせたの……（いきなり、アマノを抱き寄せて、唇をあてる）
駄目よ、そんなに默つてちや。（間）
あたしの寢室は、あなたの隣りだつたわね……
あたしが、窓を開けると、あなたも窓をおあけになつたわね。
それから、どうしたつけ……?

アマノ　（しかたなしに）　それから、僕が咳拂ひをしたんです。

ステラ　あ、さう、さう……
さうしたら……?　あたしは……?

アマノ　あなたは、窓を閉めておしまひになつた。

ステラ　うそばつかし……
あたし、唄を歌つたんぢやありませんか……（小唄の一節を口吟む）

アマノ　その唄なら、覺えてゐます。

ステラ　ね。
それからが、あのバルコニーよ。
靜な晚だつたわね……
……星が出て……。
あなたが、そら、をかしいの、子供みたいに……
覺えてる……。

アマノ　それからが、チロルの旅……
コルチナの秋の夜。
星のかはりに、こら、ストーブの火が燃えてゐます……

ステラ　あんまり早すぎてよ……
あなたは、昔から、せつかちね。

アマノ　その途中は、もうたくさん。
あした、僕も、あなたと一緒に、シシリイへ行きます。

ステラ　シシリイへ……
蛇がゐてよ。

アマノ　蛇、蛇もゐるでせう。
あなたは、冷たい大理石の床を、素足で歩くことが、お好でしたね、

ステラ　オレンヂ畑を吹いて來る風に、髮をなぶらせることも、好き……
さう、さう……
あなたは、笛がお上手ね。

アマノ　（暗い表情）　笛ですか……
笛も吹きませう。
（沈默。）

ステラ　どうしたの、
あたし、何か云つたか知ら……。
アマノ　いゝえ。（間）
（冷やかに）誰と話しをしてゐるんです、あなたは……。
誰です。一體、その笛の上手なのは。
（氣がついたやうに）馬鹿でせう、こんなことを訊くのは……
ぢや、それは、もう訊きますまい。（間）
然し、何んとでも、返事をして下さい……
此の僕に返事をして下さい。
眠くはありませんか。
ステラ（笑ひたさうに）まだ疑つていらつしやるのね、
あなたは。
ぢや、いゝから、あたしを、何處へでも連れて行つて頂戴。
さうして、あなたの氣の濟むやうに……。
アマノ　いゝえ、いゝえ、そんなことぢやないんです。
僕は、あなたの夢をさましたくなつたのです。
夢を見てゐないあなたの心に、なんとか、ものを云はせて見たいんです。
さうら、
もう、あなたは、そつちを向くでせう。

（ステラの肩に手をかけ）どら……あなたの眼は、今何を見てゐるんです。
誰を見てゐるんです。
ステラさん……
僕の聲が聞えますか。
ステラ（微かに）しばらく、默つて頂戴……。
（沈默）
あたし、どうして、かうなんだらう。
アマノ　ね、をかしいでせう。
何を探してゐるんです。あなたは。
ステラ　なんにも、探してなんぞゐませんわ。
アマノ　ぢや、僕に用はないんですね。
ステラ　あなたに……？
あなたは、どなた……？
いゝえ、あなたは、默つていらつしやい。
……獨りで考へるから。
アマノ　あなたは、ものを考へてはいけない。
あなたは、あなたの情熱が命ずるまゝに、からだを投げ出せばいゝ。
遠い幻を、いつまでも追ふことが、どれだけあなたを苦しめてゐるか、それにお氣がつきませんか。
ステラ　ちつとも、苦しんでやしません……あたしは。

（沈默。）

（殆ど悲痛な調子で）――さうよ。あなたさへ、あたしの眼に觸れないところにゐて下されば……

默つてゐて下されば……

それより、

あなたといふ方さへ、全く識らなければ……（聲がだんだん微かになる）

アマノ　それなら、僕に、どうしろと、おつしやるんで。

（勝ち誇るやうに）死んでしまへと、おつしやるんですか。

ステラ　（きつぱり）えゝ、死んでおしまひなさい。

アマノ　（ステラの手を取り、飛び立つやうに）

ありがたう……

僕の命は、あなたに差上げます。

その代り、

あなたの心は、僕が……

ステラ　（遮るやうに、起ち上り）持つて行けるなら、持つていらつしやい。

（沈默。）

アマノ　ステラさん……。

ステラ　もう、何時頃でせう。（窓ぎはに行き、カーテンを開けて、外を見る）

また、ひどい霧……

アマノ　ストーブの火も消えました。

ステラ　ぢや、ぼつ／＼引上げませう。

（沈默。）

アマノ　ステラさん……（起ち上る）

ステラ　さうね……

やつぱり、獨りぼつちの方が、いゝわね。

……夢だけ見てゐるんなら……。

アマノ　（苦笑しながら）眼が覺めた時です、遊び相手が欲しくなるのは。

ステラ　あなたも、折角の夢をさまさないやうになさい。

それでは、おやすみなさい。

アマノ　僕の夢はすぐさめさうです。

ステラ　（笑ひながら）さうしたら、また、「夢ごつこ」をしにいらつしやい。

道は、御存じね。

アマノ　あんまり遠くへ行かないで下さい。

ステラ　（アマノに近づき）では、また、あしたの朝……

（手の甲を差し出す）

さよならを云ひに、起きていらつしやい……きつと。

アマノ　さあ……（ステラの手に接吻し）

それは、夢次第です。
ステラ　（笑ひながら）　えゝ、えゝ、よう御座んすとも…
…（用心深く手を引く）
おやすみ。
アマノ　おやすみなさい。
ステラ　（後を見ずに出で去る）
アマノ　（ぢつとステラを見送る）
（室外にて、エリザ、エリザと呼ぶ嗄れ聲。）
（沈默。）

——幕——

命を弄ぶ男ふたり（一幕）

人物
眼鏡をかけた男
繃帶をした男

鐵道線路の土手――その下が、材木の置場らしい僅かの空地、黒く濕つた土の、ところ〳〵に、踏み躙られた雜草。
遠くに、シグナルの赤い灯。
どこかに、月が出てゐるのだらう。
眼鏡をかけた男――二十四五ぐらゐに見える――が、ぽつねんと、材木に腰をかけてゐる。考へ込む。溜息をつく。洟をかむ。眼鏡を外して拭く。髪の毛をむしる。腕組みをする。服の皺を伸す。舌を出す。
繃帶をした男が現れる。つまり、顏中繃帶で包んでゐるわけであるが、兩方の眼と、鼻の孔と、口の全部、それだけが切り拔いてある。
眼鏡をかけた男の前を行つたり來たりする。そこに人がゐるのを知らないやうにも思はれる。土手の上にあがるが、すぐ降りて來る。

眼鏡　君、君、踏切はもつと先ですよ。
繃帶　（別段驚いた樣子もなく）さうですか。踏切はもつと先ですか。（獨言のやうに）踏切はもつと先……と
（眼鏡をかけた男と竝んで腰をかける）
眼鏡　どこかへいらつしやるんですか。
繃帶　行かうと思ふんですがね。君も、どつかへいらつしやるんですか。
眼鏡　行かうか、どうしようかと思つてるんです。
繃帶　なるほど。行くのもいゝが、どんなもんですかね。うまく、一と思ひに、行けますかね。
眼鏡　さあ、行つて見ないことにや、わかりませんな。
（長い沈默。）
繃帶　君は、どう思ひます。此の邊ぢや、やつぱり、此處でせうな。
眼鏡　さうですな、まあ、此處らあたりでせうな。
繃帶　迷ふことはないんだが、さて、迷ひますな。
眼鏡　いろ〳〵考へるからですな。どうにもしやうがないといふ場合に、これですからな。
繃帶　僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男ですがね。書置一つしてないんです。それといふのが、理由ははつきりしてゐるし、これがまた、至極、散文的

でしてね。

眼鏡　いや、その點では、僕なども同様ですよ。それや、人によつては、別の道を選ぶかも知れませんが、結局、癒らない疵は癒らないんですからね。

繃帶　君の云はれることは、どうもよくわかりませんが、さういふ意味でなく、僕は、死といふことによつて、或る問題を解決しようとしてゐるのではなく、既に死人に等しい自分のからだを、自分で始末しようとしてゐるだけなのです。だから、何も、今更、英雄的な覺悟や、非現實的な空想で、此の一瞬間を、悲壯な物語りに作り上げる必要はないのです。

眼鏡　僕も、それを云ふのです。どうせ自分は意氣地なしだ。人生の敗殘者だ。運命の犧牲者だ。さう思へばこそ……。

繃帶　いや、いや、君はわかつてゐないんです。それや、その筈だ。君は、かう云つちやなんだが、一時の出來心でせう。戀人に捨てられたとか、會社の金を遣ひ込んだとか、誤つて人を殺したとか……

眼鏡　はゝゝゝ。さう見えますかね　いや、もう何んにも云ひますまい。人の苦しみを、一人の男の苦しみを、さう簡單に片づけられちや、たまらない。

繃帶　ちがひますか。まあ、それならそれでいゝ。お互に、かうして、偶然、同じ死に場所を選んで、そこへ同時刻に落ち合つた、たゞそれだけの事實に、さうこだはることはない。どうぞ、僕にはおかまひなく……。

眼鏡　いや、君の方こそ、どうぞ……。然し、僕もまだ血の通つてゐる人間です。眼の前で、勝手なことをされては迷惑です。踏切りも、そんなに遠くはない、どうです。人を呼びませうか。

繃帶　人を呼ぶ……。呼んでどうするんです。（間）邪魔はしつこなしにしようぢやありませんか。

眼鏡　かう見えて、僕は、人一倍、物事を考へる方なんです。輕卒だとか、向う見ずだとか云はれることが、一番不愉快なんです。

繃帶　あゝ、それだからですね。ぢや、一つ、その理由といふやつを、伺ふことにしませうか。

眼鏡　それはお話してもよござんすがね。それより、君は一體、どういふんです。さう深い事情も、おありにならないやうだが……。

繃帶　さう見えますか。それならそれでかまひませんがね。はゝゝゝ、此の繃帶がわかりませんか。

眼鏡　火傷でもなすつたんですか。

繃帶　さうあつさり云つてのけられたんぢやね……。まあ、よしませう。

眼鏡　火傷には、實によく效く藥があるんですがね。
繃帶　火傷なら、火傷として置きませう。それが癒つたら、どうなるんです。
眼鏡　いゝぢやありませんか。
繃帶　顏中にひッつりが出來ても……。二た眼とは見られない顏になつても。
眼鏡　御商賣は。
繃帶　僕は商賣人ぢやないんです。應用化學の研究をしてゐる、つまり、學者なんです。人造ダイヤモンドの發明に沒頭してゐたんです。もう九分九厘まで成功しかけてゐたんです。處が、一寸したことから、藥品が爆發しましてね。
眼鏡　それなら、猶更ぢやありませんか。折角九分九厘まで出來上つてゐる、その研究の方を續けておやりになれば、それが出來ないことはないんでせう。顏がなんです。男振りがなんです。元來、君のやうな仕事をやつてをられる方は、却つて……。
繃帶　まあ、お待ちなさい。僕は、これで、まだ獨り者なんです。
眼鏡　丁度いゝぢやありませんか。
繃帶　許嫁があるんです。
眼鏡　その人はどう云ふんです。
繃帶　かまはないと云ふんです。
眼鏡　そんなら。何も云ふことはないぢやありませんか。なあんだ、それぢや、君、第一……。
繃帶　それと云ふのが、その女は、僕を愛してゐるんです。
眼鏡　さうでせうとも。
繃帶　僕は、或る時、思ひきつて、繃帶を取つて、此の顏を見せてやつたんです。
眼鏡　それでもいゝつて云ふんでせう。
繃帶　（うなづいて）さうして、僕の胸に顏を押しあてゝ、泣くんです。悲しくはないつて云ひながら泣くんです。
眼鏡　わかりますね、その氣持は。
繃帶　僕にはわからない。

（やゝ長い沈默。）

眼鏡　わかるぢやありませんか。
繃帶　わかるとすれば、彼女が嘘をついてゐるといふことです。

（やゝ長い沈默。）

僕は、決心しました。決心したといふよりも諦めました。さうです、諦めたんです。
眼鏡　さう、諦めたんですなあ。
繃帶　ね、さうでせう。頗る簡單です。（間）僕は、かう見えて、センチメンタルなことが、嫌ひな男なんです。

眼鏡　僕も、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。僕は俳優です、まあ名前を云へば、御承知かも知れませんが、それはいひますまい。僕は俳優なんです。八歳の時に兩親を失くして、伯父にあたる――これも名前を云へば御承知かも知れませんが、まあ、云はずに置きませう――その伯父の家に引取られたのですが、そこに、一人、娘がありましてね。

繃帶　もうその先は、何はなくつてもわかるやうな氣がしますが、それぢや、たゞの戀愛事件ですね。

眼鏡　たゞのとは、どういふんです。ぢや。君のは何んです。そんな、つまらない義理立てぐらゐで、人が參ると思ふんですか。

繃帶　參るとか參らんとかは問題ぢやないでせう。それで、結局どうなつたんです。

眼鏡　その先がわかつてゐるなら、云ふ必要はないでせう。

繃帶　まあ　さう怒り給ふな。

眼鏡　話を始めるか始めないうちに、それで結局どうなつたなんて聞く法がありますか。張合ひもなにもあつたもんぢやない。

繃帶　さうまた、張合ふこともないわけですね、話が話なんだから。つまり、その娘さんと添ひ遂げられなくなつた。それで悲觀の末、と、かういふところらしいな。

眼鏡　何が、ところらしいんです。違ふも違ふも大違ひだ。はゝは、人のことつていふものはわからんもんだなあ。その娘は、たうとう病氣で死んだんです。（涙ぐんで）可哀さうなことをしました。その病氣も、僕が種をつくつたやうなものなんです。僕が、或る女優と、どうのかうのつていふ噂が立つた。そんなことは絶對にないんです。それを苦にして、つまり、ほんとだと思つて、日夜煩悶したんです。一人で、小さな胸を痛めたんです。その女優が、一座の座頭と、名を云へば御承知でせう、然し、それは云ひますまい、その座頭と結婚した、そのことが新聞に出るまで、その女は僕の云ふことを信用しなかつたのです。然し、疑ひが晴れた時は、もう遲かつた。彼の女は、病院のベットの上に、痩せ衰へたからだを横たへてゐたのです。（涙を拭き、鼻を啜り）僕は馬鹿でした。意氣地なしでした。今から考へると、なぜ、その時、すぐに、役者なんか止して、これ御覽と云つてやらなかつたか。それを思ふと、なまじ、藝術がどうのかうのと夢中になつて、下らない臺詞なんかばかり、覺えようとしてゐた、あの時の自分が、情けなくもあり、憎らしくもあり……僕は、遲まきながら、死んだ女の心持ちを、自分の中に活かさう、さうして、その女の後を追は

うと決心したのです。

繃帶　そいつは、つまらない考へだな。君が死んだら、どうなるんです。その娘さんのそばに、行けるとでも思つてるんですか。まさか、さういふわけぢやないでせう。なるほど、君の悲しみは、十分察しられる。然し、決して、永久に忘れることの出來ない悲しみぢやない。今は、それや、さうは考へられないでせう。そこがまた、君の美しい處なんだ。處で、君はいくつです。

眼鏡　いくつに見えます。（間）

繃帶　いくつでもいゝ。君はまだ若い。人生の花は、これからぢやありませんか。

眼鏡　君はいくつです。

繃帶　僕ですか。あてゝ御覧なさい、と云つたら、君は困るだらう。三十五ですよ。だが、僕の場合、年は問題ぢやない。

（やゝ長い沈默。）

眼鏡　誰か來たやうですよ。見つかると厄介だ。（起ち上る）

繃帶　線路巡視ですね。どれ、隱れるかな。

（兩人、姿をかくす。）

（土手の上を、人が通る。安全燈の火影が、さつと、舞臺をかすめる。）

（汽笛。）

（汽車の音近づく。）

眼鏡　（姿を現し）もう、大丈夫ですよ。

繃帶　（續いて現れ）下りですね。

眼鏡　神戸行の急行です。

繃帶　（腰を下し）君こそ、思ひ止まるんですね。早まつたことはしないがいゝ。

（汽車が土手の上を通る。兩人、それを見送る。）

眼鏡　込んでるやうですね。

繃帶　込んでましたが。夜汽車は陰氣だなあ。

眼鏡　あなたこそ、立派な仕事がおありなんだから、それだけで、生きてゐる甲斐がありさうなもんですがなあ。

繃帶　生存の意義なんかどうでもいゝ。仕事は仕事、人生は人生です。君なんか、まだこれから、どんな仕事でも出來る。どんな戀でもできる。殊に、藝術家と云へば、仕事そのものが戀人ぢやないんですか。まあ　さう云つたやうなもんぢやないんですか。僕らにや、よくは飲み込めないが、かう、なんと云ふか、一種のヴォルルストと云ふかな、さういふもんがあるんぢやないんですか。からだのすくむやうな、ぞく〳〵するやうな、融け込むやうな、さういふ狀態に、何時でもなれるんぢやないんですか。

眼鏡　そんなことなら、あなた方のお仕事でも、やつぱり、戀人に對するやうな心持になれるでせう。食ふことや寢ることを忘れてまで、仕事に熱中するなんていふこと……世間の事や、家庭のことを全く棄てゝ顧みないつていふことや、よくそんな話を聞くぢやありませんか。

繃帶　そりや違ひますよ。それはなるほど、學者の一面には、さういふところもある。もう一面を見ないとわからない。つまり、人間の問題ですよ。理窟ぢやない。さうでせう、君と同じ境遇にある、もう一人の青年に聞いて御覽なさい。その青年は、君と同じ悲しみ、君と同じ惱みを、君のやうな方法で解決するかどうかわからない。いや、寧ろさうしないのが普通でせう。しない方が正しいんだ。

眼鏡　正しいとは限りません。

繃帶　僕は飽くまで反對するな。（間）どうです、警察へ引渡しませうか。

眼鏡　警察へ……。さうして、どうするんです。（間）お互に、邪魔をしつこなしにしようぢやありませんか。僕こそ、あなたの不心得を諭してあげたいくらゐなんだ。

繃帶　諭す諭さないは別として、君こそ、家へ歸つたらどうです。惡いことは云ひませんよ、年長者の言葉を信用し給へ。

（汽笛、汽車の音。）

眼鏡　（起ち上り）もう、何んにも云はないで下さい。（土手の上に駈け上らうとする。）

繃帶　（その袖をとらへ）よし給へ、君。それや、なんにもならんよ。

眼鏡　（振り放さうと藻搔きながら）放して下さい。僕のからだは僕のものです。勝手にさして下さい。

繃帶　それや、君のものさ、君のからだは。だから、つまらんことは止せと云ふんだ。僕は、かう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。死なしていゝものなら死なせるさ。（突然、聲を荒らげて）馬鹿！　しつかりしろ！（引摺りおろす）

眼鏡　（此の語勢に氣を挫かれて）それぢや、あなたは、どうなさるんです。

繃帶　（此のひまに、相手を突き退け）僕は、かうする。（土手の上に走り上る）

（此の刹那、汽車が通る。繃帶した男の姿が消える。）

眼鏡　あッ　やつたな。（間）たうとう、やりやがつた。畜生。

（さう云つてゐると、土手の上から、繃帶をした男がのつそりと降りて來る。）

眼鏡　なあんだ、やらなかつたのか。

繃帶　やつたさ、やつたけれど、早すぎたんだ。正確に云へば、勢をつけ過ぎたんだ。線路の向うへ飛び込んだんだ。しくじつた。此の次だ。（息をはずませてゐる）

眼鏡　だから、僕に先へやらせればいゝのに。

繃帶　さうはいかんさ。君に先へやらせちや、僕の顔が立たん。君の自殺には、僕は反對なんだ。見て見ないふりは出來ない。僕は、自分のことさへどうでもよけりや、君を家へ送り屆けるなり、警察へ引渡すなりする處だ。然し、それができない。君が僕の言ふことを聞かない以上、君のやりたいことは、僕のゐない處でやり給へ。場所も此處と限つたわけぢやないんだらうから。

眼鏡　此處を先へ見つけたのは僕なんだ。

繃帶　あと先の話をしてるんぢやない。僕が生きて居る間、君を殺すわけには行かないから、さう思ひ給へ。

眼鏡　ぢや、僕を生かす爲めに、あなたも生きることを考へたらどうです。それなら、話はわかる。

繃帶　さうか、君は、ほんとに死ぬ氣はないんだな。さうだらう。それでわかつた。それならそれで、こんな處に、何時までもゐるのはよし給へ。もう、君、遲いぜ。今のが十時の濱松行だ。

眼鏡　死ぬ氣がないのは、あなたのことでせう。鐵道自殺のやり損ひなんていふのは、あんまり流行ないからな。

（この時、また汽笛が響く、と、やがて、列車の近づく音。）

繃帶　よし、そんなら、見てろ。（土手を登りかける）

眼鏡　今度は、僕だ。（繃帶した男を引摺りおろす）

繃帶　なにするんだ。

眼鏡　（この間、素早く土手の上に馳け上る。汽車が通る）

繃帶　たうとう、やりやがつた。ほんとに、やりやがつた。畜生、こいつは、やつぱり、後ぢや、工合が悪い。

（かう呟く、が、不圖、土手の上を見ると、眼鏡をかけた男が、眼をこすりながら、とぼ〱と降りて來る。）

繃帶　おや、こいつも擦れ違ひか。

眼鏡　駄目だ、貨物列車だ。

繃帶　貨物……？

眼鏡　あゝ、痛え（眼をこする）煤がはひりやがつた。こいつはいかん。とても痛い。あいた、た、た……（間）すみませんが、ちよつと、見て下さい。

繃帶　（見ながら）見るのはいゝが、此の明りぢや、君……。どら、もつと、上を向き給へ。さう、瞼に力を入れちや駄目だよ。

眼鏡　（瞼を兩手で引きあげるやうにして）ありましたか、右の方ですよ。

繃帶　見えるもんか。これぢや。

(汽笛、汽車の音。)

さ、來た。一人でゆつくり取り給へ。(土手の上にあがらうとする)

眼鏡　痛い、痛い。(繃帶をした男に縋りつき)　後生だから、こいつを取つてからにして下さい。

繃帶　だつて、君……(もう一度、眼の中をのぞき込みながら)　見えないものをとれつたつて、それや無理だらう。

(汽車の音近づく。)

痛いついでに、それぢや、一と思ひにやつて來たまへ、丁度いゝや。

眼鏡　そんな無茶なことを云はないで、どうかして下さい。これぢやどうすることもできやしない。

(汽車が土手の上を通り過ぎる。辨當の空が二人の傍に飛んで來る。)

繃帶　(それを拾ひあげて中を見る)　綺麗に食つてあら。

眼鏡　あいたゝ、あいたゝ……。さ、早く……。

繃帶　(辨當の空を棄て)　どら、厄介な男だなあ、ハンケチかなんか出し給へ。

眼鏡　ポケットにはひつてるやつを出して下さい。

繃帶　(ポケットからハンケチを引き出す)　これでいゝの。(そのはずみに、寫眞のやうなものが落ちる)　おや、何か出たぜ。(あたりを探す。一枚の寫眞を拾ひあげる)　寫眞だな。どれ……(明りにすかしながら)　なるほど、これか。桃割れだね。や、これや素敵だ。どうだい、この笑ひ方は……。

眼鏡　さ、そんなことは後にして……。

繃帶　まあ、待ち給へ、これが第一ぢやないか。しかし、いゝ眼だなあ。これだけの眼は、君、一寸ないよ。

眼鏡　さうでせうか。(間)　その眼は、もう永久に眠つてるんです。

繃帶　この眼がね、惜しいことをしたもんだなあ。此の口許だつて、大したもんだよ。此の年にしちや、珍しく蠱惑的だね。

眼鏡　その口が、堪忍して頂戴つて云つたんです。(泣聲になる)　それが最後でした。

繃帶　この口がね。

眼鏡　えゝ、さう云つたんです。

繃帶　それから、此の手を見たまへ。何んといふ、あどけなさだ。お手玉を握るためにできてゐる手だ。

眼鏡　いゝえ、それが、僕の手を握つたんです。(聲をあげて泣く)　か、か、堪忍、堪忍、して頂戴、かう云ひながら、兩、兩手で、僕の手を、に、握り締めるんです。もう、もう、力が、な、ないんです。(泣き崩れる)

繃帶　この手でね。(かう云つたかと思ふと、手に持つたハ

ンケチで、自分の眼をおさへ）　畜生、涙みたいなものが出て來やがる。（間）

眼鏡　僕は、かう見えて、人一倍、物事を考へるたちなんです。この決心をするには、それだけの理由があるんです。

繃帶　これぢや、なるほど、無理もない。君に取つちや、生きてゐるといふことは無意味だ。そこへ行くと、僕なんかは、なんと云つても、まだ、問題はこれからなんだ。つまり、僕は、自分の立場を悲觀的に解釋してゐる。そこなんです、事の起りは。僕が、許嫁の心持を忖度するにしても、考へやうによつては、もつと、積極的に、有利に、素直に、考へて見ることも出來るわけなんです。自分の存在が、相手の幸福を妨げるといふ考へ、これや、もう、理窟ぢやない　自分がさう思つても、相手はさう思つてゐないかも知れない。現に、この手紙です。（ポケツトから一通の手紙を取り出し）　まあ、讀んで御覽なさい。

眼鏡（それを受け取る。開いて讀まうとするが、よく見えない）

繃帶　見えませんか。（手紙を見ずに）　かう書いてあるんです。「お手紙拜見いたしました。あなたは誤解をしていらつしやるんです。それや、あのときは、たゞ何となく涙が出ました。泣くといふことが、それほど單純な氣持からだと思つていたゞいては困ります。一番心配してゐたあなたの御眼が、元の通り完全に見える、さうなつたことだけでも、泣きたいほどうれしいのです。お顏の疵がなんです。あなたの肉體が、若し、わたくしに取つて大切なものであるなら、それは、たゞ、あなたのお心が、そこにあるといふ目印としてなのです。」

「お別れしてゐた五年間、二十の春から二十五の秋まで、わたくしは、あなたの御寫眞を一度も出して見ませんでした。今だから申します。それは、物を言はない影、心に觸れられない姿が、どんなにつまらないものかといふことを知つてゐたからです。あなたは、やつぱり獨逸にいらつしやる、伯林大學の研究室で、せつせと勉強していらつしやる、さう思つてゐるだけが、せめてもの慰めだつたのです、時たま下さる、あの電報のやうな、あのお端書、あれが、あなたのお聲、あなたからの愛の言葉だつたのです。あなたと云ふ方は、わたくしには、一つの神祕な存在です。いつでも、何か考へておいでになる、あのお顏は、決して、女に親しみを感じさせる顏ではありません。ですから、わたくしは、あなたが、あなたのお書齋で、何かお仕事をなさる、その時を選んで、あなたの後姿を、いつも見に行くことにしてゐました。兩手

で頭をかゝへて、本を讀んでおいでになる、その頸筋から肩へ、肩から腰へ、その餘念のない後ろ姿の、そこから感じられる落ちついた息づかひ、お笑ひになつてはいやですわ、たゞそれだけが、わたくしのものといふ氣がしたのです、それと、あのお聲、今もちつとも變らないあのお聲『美いちやん、お茶』つておつしやるあのお聲……『あれもわたくしのものよ。』（だん／＼聲がうるんで來る）こゝだけ、「よ」で結んである。

眼鏡　實に感心な方ですね、その方は。然しどんなものですかね、そいつをそのまゝ受け取るのは、なるほど、蟲がよすぎますね。聞いてゐても胸がつまる。それだけ、その手紙の一句一句には苦しい努力が匿されてゐる。あなたとしては、やつぱり、その方を自由にしてあげる義務がありますね。それでよく事情がわかりました。あなたは、生きてゐちやいけない。

繃帶　（その邊を歩きまはりながら）どうして、世の中の女は、もつと冷酷に出來てゐないんでせう。君の、此の娘さんにしても、僕の、此の許嫁にしても、あんまり溫かすぎる。僕たちを苦しめるのは、その溫かい心なのです。少くとも、その思ひ出なのです。

眼鏡　さうとばかりも云へません。隨分冷たい心をもつた女もゐます。

繃帶　さういふ女は男を惱まさない。男がなやまされない。一度或る女の、溫い心に觸れたら、その女が、どんなに冷酷な態度を示さうと、男の心は、その女から離れきることが出來ない、それはつまり、女といふものが、優しすぎるんです。生れつき溫い心の持主なんです。僕はつくづくさう思ひました。さうして、その女のうちでも、僕の許嫁は特別な女なんです。まあ、此の手紙をしまひまで讀んで御覽なさい。

眼鏡　えゝ、もうわかつてます。

繃帶　わかつてるでせう。わからなければ嘘だ。何と書いてあります。「あなたが御自分の姿を、それほど醜いと思召すなら、わたくしも、自分が醜くなるやうに努めます。世間に對してならば、どんなことでもします。炭を顏に塗つて外へも出ます。しかし、わたくしは、女です。少しでも美しく、さう思つて大事にする見目かたちは、たゞあなたへのさゝやかな心盡しなのです。わたくしが美しくないといふことは、あなたに才能がないといふことほど、恐しいことなのです。二人にとつて恐しいことなのです。それ以外のことは、たゞ心と心との問題です。わたくしの、空つぽな頭を、あなたは輕蔑もしずにゐて下さる。あなたのお顏や、お姿が、それがわたしに敵意を、示したものでさへなければ、何んで、美しいとか醜

いとか申しませう。」どうです。こゝに至つて、僕はもう返す言葉がない。僕は、これでも不幸でせうか。僕は何を苦しんでゐるのだ。僕は、なせ死なゝければならないんだ。

眼鏡　そこが、男の意地ですよ。與へるといふものを、受け取つてはならないことがある。あなたは、世間の男のやうに、エゴイストではない。エゴイストでありたくない。さういふ信念をもつてをられゝばこそ、かういふ決心ができたのです。しかし、實に偉大ですよ、そのへんは。

繃帶　だが、君のやうに、純な氣持ぢやない。そこが、僕自身も不滿なんです。「堪忍して頂戴」……桃割の少女が、死に臨んで、若い戀人の胸もとに囁いたこの一句は、男一人の命には代へられない。君が――それは何時のことだか知らないが――今夜まで生きのびてゐたこと、そのことが既に不思議なくらゐだ。幻を追ふものは山を見ず、谷を見ず……まして汽車くらゐなんだ。

眼鏡　そんなことはありませんよ。僕なんかこそ、云はゞ自由なんですからね。その幻なら幻を、絶えずかうして頭の中に描いてゐること、それがもう、一つの意義のある生き方なんですからね。僕達二人の間には、例の一件を除いては、何も暗い思ひ出といふものはない。最後までの一と月は、その中でも、樂しい、そして靜かな、初戀の思ひ出に應はしい朝夕でした。ミルクをかけた苺を、あの、小さな心臓のやうな苺を、僕が、一つ一つ、匙であの脣にはさませてやりました。さうすると、例の、あの眼を細くして『サンキユー』といふのです。『サンキユー』あゝ、サンキユー、サンキユー、こればかりは、幾度聞いても聞き飽きません。あの苺一つで、口が一杯になるらしいんです。『サンキユー』が、時とすると『チヤンピユー』と聞えたり『シヤンチユー』と聞えたりするんです。それから、また、それを云ふ口つきです。あゝ、たまらない、たまらない。僕は、それが面白さに、どれだけ苺を食べさせたでせう。

繃帶　（獨言のやうに）無茶しよる……。

（長い沈默。）

眼鏡　さう、云はゞ僕は自由なんです。たゞ自分の氣持たけなんですからね。それが、あなたの場合だと、苟くも一人の女を、これから幸福にするか、不幸にするかの問題なんだから、まるで、決心のつけ方が違ひますよ。さう云ふ風なら、事は早い方がいゝですね。

繃帶　やらうと思や、いつでもやれることなんだから。

（やゝ長い沈默。）

眼鏡　然し、やつぱり、話は聞いて見ないとわからんもん

ですね。

繃帶　處で、眼の方は、もういゝんですか。

眼鏡　さつき、泣いたもんですから、どつかへ行つちまひました。

（間。）

繃帶　今夜は、偶然、君といふ人に會つて、いろ／＼話をしたが、兎に角、死ぬといふことは理窟ぢやいかんのだし、これから次の汽車を待つにしても、また後先の爭ひが起るにきまつてゐるんだから、どうです、その邊で一杯やつて、何れそのうち、別々にやることにしようぢやありませんか。

眼鏡　別々にね。（間）なんなら、今夜は、あんたがおやりになつて、僕が見屆け役になつてもいゝな。

繃帶　見屆け役か、そいつはいゝな。どうです、君が先にやつちや。

（間。兩人笑ふ。）

眼鏡　しかし、笑ひごとぢやない。

（長い沈默、兩人、また笑ふ。）

繃帶　こんなことをするのにや、見物はない方がいゝでせう、いくら御商賣が御商賣でも。

眼鏡　つまらんことになるもんだなあ。

繃帶　かうなると命なんていふものは、誰のもんだかわからなくなりますね。

眼鏡　人のものでないことは慥だ。

繃帶　たしかですか、それが。（間）たしかなら、それでいゝ。

眼鏡　まあ、もう少し考へさせて下さい。（間）一體、僕は、何にしに此處に來たんです。

繃帶　さあ、自分の命が人の命よりも大事だといふことを知りに來たんですかね。

眼鏡　僕はどうしても自分の命が、そんなに大事なものだとは思へない。

繃帶　君にとつて、それよりもつと／＼大事でない命が、もう一つ此處にあるわけなんです。

眼鏡　さうか知ら。しかし、僕は、あれほど決心してゐたんです。

（汽笛。つゞいて汽車の音が聞える。）

繃帶　ぢや、その決心を斷行し給へ。さ、僕がゐて邪魔なら、僕は歸りますよ。それとも、元氣をつけてあげませうか。（汽車の音、次第に近づく。）

眼鏡　（しみ／＼と起ち上り）その寫眞を下さい。（寫眞を受け取つて、つく／＼眺めながら）さうだ、こんな意氣地のないことぢや駄目だ。（急に繃帶をした男の手を取り）さあ、あなたも一緒に來て下さい。一緒に死にま

せう。

繃帯　（引張られながら）さう云はずに、まあ君からやり給へ。僕は急ぐ必要はないんだ。いろ／＼計畫もあるしするから……。

眼鏡　（無理矢理に相手を引き上げようとして）なんです、今になつて、卑怯な。

繃帯　卑怯なのは君のことだ。（相手の手を振りはらつて、後ろへ廻り、腰に手をかけて土手の上に押し上げながら）愚圖々々しないで、さつさと行き給へ。

眼鏡　（押し上げられようとするからだを手と足で突つ張り）それや無茶だ。そんな法はない。

繃帯　（かまはずに、どん／＼押し上げる）

眼鏡　そ、そ、そんな馬鹿な……そこは痛いんだ、痛い。痛い、痛いつたら……。

（汽車の音、いよ／＼近づく。）

繃帯　手を放し）さ、今だ。

眼鏡　（轉がるやうに駈け降り）あんまり亂暴ぢやありませんか。

繃帯　（どつかと材木に腰を下し）失敬、失敬。

（汽車が、土手の上を通過する。）

眼鏡　（默つて、うつむいたまゝ、材木の上に腰をかける）

（長い沈默。）

繃帯　もういゝだらう、君。（起ちあがり、促すやうに）さ、そろ／＼引上げよう。

眼鏡　（機械的に起ち上り、ふら／＼と歩き出す）

繃帯　（その後を追ふやうに、眼鏡をかけた男に寄り添ひ）僕はかう見えて、センチメンタルなことは嫌ひな男だ。（しんみり）しかし、なんですよ。今、君を死なせるくらゐなら、僕が先へ死にますよ。ほんとですよ。

——幕——

ぶらんこ（一幕）

夫
妻
夫の同僚

茶の間　朝

妻　（チャブ臺の上に食器を並べながら）あなた、さ、もう起きて下さい。
夫　（奥より）起きてるよ。一體何時だい。
妻　毎朝、わかつてるぢやありませんか。
夫　そんな時間か。
妻　いやね、どんな時間だと思つてらつしやるの。
夫　（跳ね起きるらしく）さうか。（間）カマキリは、まだ來ないだらう。
妻　（あたりに氣を兼ね）およしなさいよ、そんな大きな聲で……。
夫　（現れる）昨夜はね、素敵もなく面白い夢を見たよ。
妻　（相手にならずに）齒磨のチューブが破れてるから、氣をつけて頂戴。
夫　（臺所へ行きながら）鼠は出なかつたかい、昨夜は。
妻　（相變らず膳の上に氣を取られて）あなた、昨日の朝、何處へお置きになつたの。昨夕お湯へはいらつしやらなかつたし……。
夫　（楊子を使ひながら）今日は、一つ、風呂へはひるかな。
妻　もう駄目ね、一昨日の牛蒡は……。
夫　さあ、おれも、今迄、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。
（間。）
實に愉快な夢なんだ。
妻　手拭はあつたの。
夫　あつた。
夢だからつて馬鹿にはできない。
おれが、かう云ふと、お前はすぐに、夢があてになるもんですかと來る。
そりやあ、夢で金持ちになつたからつて、何も、ほんとに、金持ちになると限つちやゐないさ。そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。
（間。）
夢は、どこまでも夢さ。
それでいいんだ。

ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。夢は、やつぱり、一生のうちで、實際に在つたことなんだ。
眠つてゐる間に、ちやんと起つたことなんだ。

妻　葱が煮え過ぎても知りませんよ。

夫　葱…今日は、葱の汁か……。
さうか。
（額を洗ふ音。やがて、手拭で額を拭きながら現る。）
（妻は、入れ違ひに、臺所から釜を提げて來る。）

妻　お櫃をもう一つ買ふのね。

夫　（手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり）煙草を一つぷく喫ひたいな。

妻　いいわ、時計と相談してね。

夫　（煙草に火をつけながら）まだ大丈夫。（外を見るやうにして）好い天氣だな。
（間。）
つまり、夢に對するおれの興味は、夢そのものの面白さに在るんだ。

妻　（飯をよそふ）

夫　夢は、おれを退屈さから救つてくれる。夢は、おれに、人生の木蔭を敎へてくれる。

妻　（汁をつける）

夫　昨日と今日……今日と明日……その間に、おれは金のかからない旅をする。
樂しい旅だ。
おれに取つて、夢は、現實の一部なんだ。
希望だとか、理想だとか……そんな空虚なもんぢやない。

妻　（箸を取り上げ）あなたは、よくさう、夢が見られるのね。

夫　羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが……（箸を取る）

妻　その前に、此の間の出張手當を、早く取つて來て頂戴。

夫　ああさうさう。九圓七十錢……こいつこそ、夢でもいい……と、思ふのは間違ひで、今日は、是非、取つて來る。
（沈默。）

妻　今朝は、卵なしよ。

夫　どうして。

妻　買つとくのを忘れたの。

夫　よし、さう出なくつちや……。
「忘れた」
何んといふ好い言葉だ。
一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐ろしさを覆ふ言葉だ。
忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてくれ。

妻　（きまりわるさうに）あら、ほんとに忘れたのよ。
夫　ますますいい。（間）それに、今日の飯は、上出來だ。
妻　（强ひて笑顏を作り）淚がね……。
夫　（妻の顏を見て）あ、ほんとだよ。
妻　さう？……（淚ぐむ）
夫　馬鹿　馬鹿……お前は、夢を見ないから、いけないんだ。
たまに見れば下らない夢しか見ない。
妻　だつて、どんな夢が面白いんだか、わからないんですもの。
夫　なるほど、いつか話した夢は、あんまり込み入つてて
お前にはわからなかつた。わからなかつたから、面白く
なかつたんだ。
昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話してやる。
お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見たか。
それくらゐのことは、知つてなけりや。
妻　（夫の茶碗を取り、飯をつける）たくさんつけてよ。
夫　おい、おい。
妻　また、お晝までに、お腹が空くわよ。
夫　（茶碗を受け取りながら）それは、まだ、おれが小さ
い時分のことらしい。
小さいと云つても、十六か十七……

變に世の中が寂しい頃だ。
（間。）
いつも云ふ通り
おれには、友達といふものが無かつた。
遊ぶと云へば
一人で
蜻蛉を捕るか
冬なら
日の當る裏山の斜面で
遠くの森を
毎日毎日
繪にかく——
それが樂しみだつた。
妻　いやよ、そんなに、お醬油（したぢ）をかけちや。
夫　おれは、子供の時分、よく醬油を、飯にかけて食つた
よ。
妻　毒だわ。
夫　お前は、何んでも、毒にしちまふね。
そこで、その夢だ。
おれは、あてもなく
その森の中へ、はひつて行つた。
毎日、繪にかいた、その森さ。

夜なんだよ、それがね。
妻　それより、こつちのが潰かり加減よ。
夫　夜なんだ、それが……
奥へはひつて見ると
森は――その繪にかいた森は
とてつもなく、大きな森なんだ。
露西亞か、南米か……
そんな處に在りさうな
人跡未到の大森林さ。
妻　（何か云はうとする）
夫　まあ、默つて聽いてろ。
夜なんだぜ、それが……
おれは怖いとは思はなかつた。
ちつとも怖いとは思はなかつた。
ただ、むやみに、悲しかつた。
おれは、不圖、自殺を思ひ立つた。
妻　もう澤山、そんな話は……いいの、あなた、そんなに
ゆつくりしてゐて……。
夫　いいから、しまひまで聽け。
自殺を思ひ立つた。
そこで
一本の樹の枝を見つけて、

それへ帶をひつかけた
頭の上で、その兩端を結びつけ
いよいよ
首を吊らうとしたんだ。
妻　（顏をそむけ）あなた！
夫　いいか
するとだよ……
すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩くぢやないか。
妻　人がゐたの。
夫　人なもんか。可愛い娘さ、それがね、十二三の……。
笑ひながら、おれの顏を見てるぢやないか。
（間。妻は夫が膳に置いた茶碗を取つて再び手に持たせる。）
見てるんだよ。
どつかで會つたことがあるなあ――
さう思ひはしたが、どうしても思ひ出せない。
妻　あとで、わかつたの。
夫　待て待て
（急いで飯をかきこみ。）
すると、向うから、馴れ馴れしく
――何にしてるの……つて訊くんだ。
おれは

ブランコをこしらへてるんだつて云ふと
——ぢや、一緒に乘つて、遊びませう——つて云ふから
おれは
帶が、これぢや、短か過ぎるつて云つたんだ。

妻　（吹き出す）　そんな……。

夫　（眞面目に）　さう云つたんだ。

（間。）

すると
——そんなら、あたしのを繫ぎませう——つて
メリンスの、赤い帶をほどくんだ。

妻　（笑ふ）　いやよ。

夫　ほどくんだよ。

（間。）

仕方がないから
ブランコをこしらへて
二人で乘つたよ。

（間。）

木の幹がぐらぐらッと搖れる。
頭の上で、だしぬけに、けたたましい羽ばたきが聞えたと思ふと……森中の鳥が、一どきにガヤガヤと鳴き出した。
二人は
思はず、ブランコの上で抱き合つたさ。

妻　（やや暗い顏になり）　もう、お茶……？

夫　お茶だ。

（間。）

お茶だけれど……
それから先さ、面白いのは……。

妻　ぢや、その先は、今夜ね。もう、靴を穿く時間よ。

夫　今日は、ブルドックにしよう。磨いてあるね。

妻　（起ち上つて洋服を出す）

夫　（それとなく、妻の方を見ながら）　その時だよ、その娘の顏を、よくよく視たのは。わからない。が……誰かに似てるんだ。
どこかで見たか、會つたか、話しをしたか……。

妻　（靴下を檢めながら）　今日は、何處へも上らないでせう。

夫　上らない……つもりだ。む、待つてくれ……よし、上らない。
兎に角
何時か、何處かで、どうかした女なんだ。
誰だと思ふ。

妻　わかつてますよ、そんなこと、さ、また、待つて頂くのは、お氣の毒ですわ。

夫　誰だと思ふ。
妻　誰でもよござんすよ。
あなたは、いつでもよ……朝の忙しい時に限つてそれなんですもの。
晩なら、もつと、ゆつくりするでせう。
夫　ゆつくりする。
しかし、もう、印象が新鮮でない。
頭の後ろの方が、まだ、夢に漬かつてゐるやうな朝の氣持……
こいつは、晩まで、もたないよ。
事務所の、埃臭い空氣を吸ふと、もう駄目だ。
恐ろしいものさ。
歸つて來て、お前の顏を見ると、そりやあ、元氣は出る。
元氣は出る……が、ただそれだけだ。
お前は、あんまりはつきり見えすぎるよ。
（間）
しかし、もう着換へる。
カマキリの奴、今日は遲いぢやないか。
（茶を一息に飮み干し、起ち上つて、着物を脱ぎ始める。）
妻　（手傳ひながら）もう、これぢや暑いわね。
夫　（喉の奥から妙な聲を出して唄ふ）

タラ　ラ　ラ　ラ　ラ　ラア
タララ　タララ　タララア
タララ　ラ　ラ
タララ　ラ　ラ
タラ　ラ　ラ　ラ　ラ　ラア
妻　（服の塵を拂ひながら、優しく投げ出すやうに）
何を無茶苦茶歌つてるの！
夫　無茶苦茶だ？
自分が知らない歌はなんでも無茶苦茶か、
（間。）
處で、お前は、わかつてると云つたね。
その娘が、似てゐるといふ女は、誰だ。
をかしいぢやないか……
だつて、おれが、お前を始めて見たのは、お前が幾歳（いくつ）の時だ。
十九か……
いや、二十か……
さうだね。
お前が十二三の頃は、どんな顏をしてゐたか、それが、おれに、わかる筈はないぢやないか。
妻　寫眞を見たでせう。
夫　さうか……

なるほどね。
お前は、また、恐ろしく、落着き拂つてるね。
痛快だよ……しかし……
疑ひも、そこまで、無くなれば。
次手に、おれが、どんなに幸福かといふことも信じてほしいね。
妻　あたしも……幸福よ。
夫　うまい、うまい、その調子……。
（間。）
いいかい
その娘が、どこか、お前に似てるんだよ。
いいや、それより、お前そつくりなんだ。
つまりお前なんだ。
しかし、そこが、夢の面白い處さ。
おれは、さう氣がついて、驚きもしなければ、まごつきもしない。
十六のおれは
十二のお前を抱いて
悠々
ブランコの上で夜を明かした。
妻　はい、チヨツキ。
夫　ブランコは。

力を入れないでも、樂に漕げた。
（間。）
房々したお前の髪の毛が、前にかがむ度に、おれの顔に、もつれかかる。
お前は、それが面白いと云つて、わざわざ顔を近づけて來るんだ。
妻　（笑ひながら）まあ……。
夫　ブランコは
ひとりでに、揺れてゐるやうだつた……。
（間。）
木の葉を漏れて來る薄明りが
仰向くたんびに
今度は
お前の顔を銀色に染めるんだ。
おれは
貪るやうにお前の眼を見つめた。
……お前は、やつぱり、笑つてゐるんだ。
妻　（夫の肩に頭をもたせかける）
夫　が、やがて、お前は、うとうとと眠り出した。
おれも、うとうとと眠り出した。
（長い沈默。）
それから先は、お前が知つてゐる通りなんだ。

勿論、世界は、丸で違ふさ。
（間。）
さうさう、覺えてるかい……
あの翌朝、おれたちは、すぐ、この家へ引越して來たね。
なんだ、こりや（部屋ぢうを見廻す）
これでも、人間の住む家か……
人間が愛し合ふ家か。
（間。）
處が、昨夜はさうぢやないんだ。
森だと思つたのは、宮殿さ。
ブランコのつもりでゐたのは、やはらかな、あたゝかい、
天鵞絨の吊床なんだ。

妻　吊床つて、なあに
夫　吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寝る搖籃さ。
妻　宮殿なの……？
夫　うん……。
その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。
（外の格子戸が開く音。）
聲　おい、まだか。
妻（慌てて夫の肩より離れ）それ御覧なさい、また遲れたわ。
夫（慌ててチョッキの釦をはめながら）いやいや、遲れない。（大聲にて）なんだ、やつぱり行くのか。今日は休むのかと思つてた。
聲　どら……。
（聲の主、茶の間に首を出す。）
妻　あら、いけません、こんなとこへ……。
同僚　おや、もう、歸つて來たのか。や、奥さん、お早う。
妻　いくらせかしても、これですの。
夫　丁度いい。まあ、話の先を聽け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやないんだ。
妻（上着を着せながら）そこは違ひますよ。もつと上………。
夫　宮殿といふ言葉は悪いかも知れない。一切の装飾が、ただ、住むものの爲めの装飾なんだ。
同僚　面白いぢやないか。しかし、さういふ装飾があり得るかね。
夫　あり得るさ、第一、吊床が奇抜なんだ。そのブランコさ、つまり……。
同僚　どのブランコ……。
夫　どのつて……。
妻　いやな片桐さん、ほん氣になつて聞いてらつしやるわ。

（夫に）およしなさいよ、もう、あなた。

同僚　一體、何の話だい。

妻　夢なんですよ、この人の……。そら、例のですよ。

（夫にハンケチ、時計、金入などを渡す。）

同僚　なあんだ、さうか。

夫　君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚　見ない。處で、奥さん……。

夫　君は、ブランコに乗つたことがあるか。

同僚　ないよ。實はね……。

夫　よしよし　その話は後で聽く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

（卷煙草に火を點けながら。）

おれが、まだ、十六七の頃、……世の中が、變に、かう、寂しい頃だ。

（玄關の方に行きながら。）

それでゐて、いろ／＼の事を、知るともなしに、覺える頃だ。

（妻が消える。）

同僚　實はね、君、弱つたことになつたんだ。

夫の聲　弱ることはないぢやないか。

妻　（玄關に出る）

同僚　（起き上らうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた工合に）いや。それがね、急に、國から、おやぢがやつて來るつて云ふんでね。やつて來るのは、かまはないが……。

夫の聲　さ、行かう、行かう。

同僚　行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晩だけ……。

夫の聲　いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……（同僚の手を引張るらしく）おれの夢を聽いてからにしろ。

同僚　（起き上る。妻がかくれる）それがね、奥さん……。

夫の聲　よし、よし、こいつの知つたことぢやない。さ、出ろ、出ろ。

妻の聲　まあ……（と、何かに驚いて）行つてらつしやい。

（格子の閉まる音。）

妻　（現る。長火鉢に向ひ頰杖をつく。ひとりでに、微笑がうかぶ）

夫の聲　（やや遠く）そこで、おれは十六の少年だ……。
世の中が
變に……
おい、何處へ行くんだ。

同僚の聲　一寸、待て……急用だ。

夫の聲　こん畜生……早く、しちまへ。人が來るぞ。

（どちらから始めるともなく、二人の調子外れな口笛が、一つ時、縺れるやうに聞えてくる。）

――幕――

紙風船（一幕）

晴れた日曜の午後――庭に面した座敷。

夫　（緣側の籐椅子に倚り、新聞を讀んでゐる）

「米國フラー建材會社のターナー支配人が一日目白文化村を訪れて、おゝロスアンゼルスの縮圖よ！　と申しましたやうに、目白文化村は今日瀟洒たる美しい住宅地になりました。」

妻　（緣側近く座蒲團を敷き、編物をしてゐる）なに、それは。

夫　（讀み續ける）「四萬坪の地區には、整然たる道路、衞生的な下水水道電熱供給裝置テニスコート等の設備があり、多くの小綺麗なバンガローや莊重なライト式建築、さては、優雅な別莊風の日本建築などが、富士の眺めや樹木に富む高臺一帶の晴れやかな環境に包まれて……」（新聞を投げ出し）おい、散歩でもして見るか。

妻　いゝから川上さんとこへ行つてらつしやいよ。

夫　是非行かなくつてもいゝんだよ。

妻　あたしは、思ひ立つた時すぐでなけれやいやなの。

夫　散歩か。

妻　散歩でもなんでも……。

（間。）

夫　散歩でもなんでもつたつて、ほかに何かすることがあるかい。

妻　ないから、それでいゝぢやないの。

夫　あ。

妻　川上さんとこへいらつしつたらどう、そんなこと云つてないで。

夫　もう行きたくないよ。

妻　行つてらつしやいよ、ね。

夫　行かないよ、お前のそばにゐたいんだよ。わからない奴だなあ。

妻　わかつてますよ、憚りさま。

（間。）

夫　あゝあ、これがたまの日曜か。

妻　ほんとよ。

夫　（また新聞を拾ひ上げ、讀むともなしに）かういふ場合の處置なんていふことを、新聞で懸賞募集でもして見たら、面白いだらうな。

妻　あたし出すの。

夫　（新聞に見入りながら、興味がなさゝうに）何んて出

す。
妻　問題はなんて云ふの。
夫　問題か……問題はね、結婚後一年の日曜日を如何に過すか……。
妻　それぢや、わからないわ。
夫　わからないことはないさ。ぢや、お前云つて見ろ。
妻　日曜日に妻が退屈しない方法。
夫　そして、夫も迷惑しない方法……。
妻　いゝわ。
夫　名案があるのか。
妻　あるの。先づ女は、朝起きたら、早速お湯に行つて、ちやんとお化粧をすまして、着物を着替へて、一寸お友達の處へ行つて來ますつて云ふの。
夫　すると……。
妻　すると、男は、きつといやな顔をするにきまつてるでせう。
夫　きまつてやしないさ。
妻　あなたのことよ。
夫　おれが何時いやな顔をした。
妻　しないの。
夫　まあいゝ、それからどうする。
妻　いやな顔をするでせう。さうしたら、かう云ふの――

實は、あんまり行きたくもないんだけれど、うちでぶらぶらしてたつていふことが後でわかると工合が惡いから……それが、會ふたんびに、一度遊びに來い、日曜なら主人もゐるし、一緒に芝居にでもつて、さう云はれるんでせう、今日は、どうせあなたもうちにゐて下さるんだし、一寸行つて來ようと思ふの。それとも、何か御都合でもあればつて、優しく聞いて見るの、それとなくよ。
夫　それとなくね。いや、別に、おれの方はかまはないが、お前がゐなくつて、晝飯はどうする。
妻　お晝は、お茶漬の用意をして置きました。
夫　晩は。
妻　晩は、出がけに「あづまや」へ寄つて、親子でもさう云つて置きませう。
夫　また親子か。歸りは遅くなるだらう。
妻　さうね、まあ、はつきりわからないけれど、十時になつたら、お床を敷いて寢てゝ頂戴。
夫　金は持つてるかい。
妻　それがもう、すつかりなの。
夫　ぢや、これを渡しとかう。さ、十圓。
妻　ありがたう。
夫　夜風はもう寒いよ、襟巻を持つてけ。
妻　えゝ。

夫　さて、おれは、これからゆつくり本でも讀まう。湯だけ沸くやうにしといてくれ。客が來たら、ビスケットの殘りがまだあると……。髭も今日は剃るまい。あゝあ、長閑な日曜だ。
妻　（默つて下を向いてゐる）
夫　どうしたい。
妻　あなた、もう駄目
夫　どうして。
妻　どうしてゞも。
夫　（新聞を投げだし）さうか。それぢや、お前が若し男だつたら、さういふ時、どうする。
妻　さういふ時つて……。
夫　とめるかい。
妻　とめるわ、なんとか云つて。
夫　何んて云つてとめる。
妻　是非行かなくつても濟むんなら、今日は、おれと芝居を附合はないか、とか何んとか……
夫　なるほど。附合はうつて云はれたらどうする。
妻　行けばいゝわ。
夫　行けばいゝさ。しかし、行きたくなかつたらどうする。行きたくつても、事情が許さなかつたらどうする。今日見たいに。
妻　ぢや、芝居が活動になつたつていゝぢやないの。
夫　活動か……あれや、お前、夫婦で見に行くもんぢやないよ。
妻　なぜ。
夫　誰にでも訊いて見ろ。
妻　それがいけないの、あなたは。あたしは、ほかの女と違ひますよ。
夫　違ふだらう。違ふから、なほあぶない。
妻　何を云つてるの。
夫　やつぱり出るといふものは、とめない方がいゝやうだな。
妻　さうね、だから行つてらつしやい、川上さんのとこへでもなんでも。
夫　しつゝこいな。今朝お前は何んて云つた。おれが、川上の處へ行つて來るつて云つたら、――川上さん川上さんつて、毎日社で顔を合せてる人を、なんだつてさう戀しがるんでせうね。日曜ぐらゐ一日うちにいらつしつたつて損はないでせう。何んの爲にあたしがかうしてゐるんです――さう云つたね。
妻　それがどうしたの。
夫　どうもしないさ。問題は、お前が、何んの爲にかうしてゐるかつていふことだ。

妻　（やゝむきになり）　あら、かうしてゐてはいけないの。

夫　かうしてゐるにも、かうしてゐやうがあるぢやないか。おれが新聞を讀む。お前は編物をしはじめる。おれが溜息を吐く。お前も溜息を吐く。おれが欠伸をする。お前も欠伸をする。おれが……

妻　だから、どつかへ行きませうて云へば、あなたが、なんとか、かんとか云つて……。

夫　よし、それはわかつた。だが、おれたちは、日曜にどつかへ行く爲に、夫婦になつたわけぢやあるまい。うちにゐたつて、もう少し陽氣な生活ができる筈だ。

妻　あなたが話をなさらないからよ。

夫　話……どんな話がある。

妻　話は「する」ものよ。「ある」もんぢやないわ。

夫　なんだ、それや……哲學か。よし、話は「する」ものとして置かう。お前だつて話をしないぢやないか。

妻　うるさいつておつしやるからよ。

夫　何かしてる時に喋舌るからさ。

妻　うそよ、寢てからでもよ。

夫　ねむいからさ。

妻　（しんみり）　ほんとを云ふと、あたしは、默つてあなたのそばにゐさへすれば、それで滿足なの。あなたが、もう少しあたしに氣をつけて下さると、それこそ、どんなにいい方だか知れないんだけれど……。

夫　（小鼻をうごめかし）　晩飯の菜はなんだい。

妻　（快活に）　未定よ、今日の成績次第。

夫　（その氣持に乘り兼ねて）　お前はいつまでも女學生だね。

妻　どういふ意味。あたし、何時でもさう思ふの、日曜なんか、それや餘裕がある時は、お芝居を見に行くなり、何かおいしいものを食べに行くなり、さういふこともあつていゝけれど、そんなことは第二として、もつと家庭らしい樂しみが、いくらだつてあると思ふの。庭だつても、これぢやあんまりだわ。あなたが手傳つて下されば一寸した花壇ぐらゐこしらへるのは、それこそなんでもないわ。今頃、コスモスなんかゞいつぱい咲いてゝ御覽なさい。外から見ても綺麗ぢやないの。

夫　だからお前は女學生だよ。

妻　そんなら、あなたは小學校の生徒よ。

夫　（笑ひながら）　さういふところがあるかい。

妻　あつてよ。

夫　おい、散歩しよう。

妻　もう遲いわ。

夫　その邊でもいゝや。

妻　どこ、井の頭。

夫　多摩川でもいゝ。

妻　そんならもつとゆつくりした時にしませうよ。どつかでお晝でも食べるつていふやうにしなくつちやつまらないわ。

夫　お前の處にいくらある。

妻　もういや、今日は、そんな話は。

夫　（指を折りながら）十六、十七、十八、十九……。

妻　それこそ、朝から用意をして、朝御飯を食べたらすぐ出掛けるくらゐでなけれや……。

夫　前の晩に話をきめといてね。

妻　さうよ、何處なら何處へ行くつて。

夫　日歸りで鎌倉あたりへ行くのもいゝな。

妻　行きたい處があるわ。

夫　さうするつていふと、東京驛を八時何分かに出る汽車がある。

妻　二等よ。

夫　當り前さ。早くあの窓ぎはの向ひ合つた席を占領するんだなあ。おれのステッキとお前のパラソルとを、おれが、かう網の上にのせる……。

妻　あたし、持つてゐる方がいゝの。

夫　さうか。後からはひつて來る奴らは、おれ達を見て、はゝあ、やつてるなと思ひながら、成るべく近くに席を取るに違ひない。

妻　馬鹿ね。

夫　汽車が動き出す。

妻　窓を開けて頂戴。

夫　煤がはひるよ。あれ御覽、濱離宮の跡だ。

妻　まあ。

夫　品川、品川、山手線乘換。

妻　早いのね。あたし、キヤラメルを買ふの。

夫　よし、おい、キヤラメル。

妻　あなたはいかゞ。

夫　もらはう。大森は通過、もうぢき社長の家が見える。

妻　あれがさう、けちな家ね。

夫　けちな家だ。蒲田、川崎は飛ばして横濱と。こんな處にも用はない。程ケ谷、戸塚、さあ大船へ來た。

妻　あたし、サンドウヰッチを買ふの。

夫　よし、おい、サンドウヰッチ。

妻　あなたはいかゞ。

夫　うむ、もらはう。

妻　いやよ、一人でたべちや。

夫　さ、降りる用意をした。下駄を穿いて……。

妻　坐つてなんかゐません。そんな……。

夫　先づ行くとすると八幡宮だらうな。知つてるか。

妻　知つてますよ。それより、海岸へ行つて見ませうよ。
夫　それもよからう。えゝと……。
妻　自動車を呼べばいゝわ。
夫　さうか、おい、タクシー。さあ、お前先へ乘れ。
妻　ぢや、御免遊ばせ。
夫　そこで、煙草に火をつけると。
妻　その前に、行先をおつしやいよ、運轉手に。
夫　海岸でいゝぢやないか。
妻　をかしいわ、海岸までなんて。一寸、運轉手さん、海濱ホテル。
夫　海濱ホテルは閉まつてやしないか。
妻　うそおつしやい。
夫　しやうがない。行つちまへ。ブウ、ブウ、ブウ……。
妻　何よ、そりや。もう來たのよ。
夫　やれ／＼。ぢや。見晴らしのいゝ部屋へ通してくれ給へ。
妻　食堂でいゝぢやないの。
夫　さうさ、だから、お前、何か註文しろ。
妻　あなたは。
夫　おれはなんでもいゝ。
妻　ぢや、カルピスを二つ、冷たいのね。
夫　おい、君、君、晝まではまだ間があるから、少しその邊を歩いて來よう。十二時には歸つて來るから。何か美味いものを食はして呉れ。
妻　さう。
夫　それから當分滯在したいんだが、いゝ部屋があいてるかい。バス・ルームのついた……。
妻　バス・ルームつて……お風呂場ね。
夫　シツ。あ、さう。ぢや、それにしよう。いや、見ないでもいゝ。それから君のうちに飛行機はないの。
妻　あなた。
夫　ない。それぢや仕方がない。歩いて行かう。さ、おれのステッキは……。
妻　また汽車の中に忘れて來やしない。
夫　いや、ボーイに渡した。あゝ、それだ。
妻　どつちへ行くの。
夫　向うに見えるのが江の島だ。
妻　いゝ景色ね。
夫　氣をつけないと轉ぶよ、どら、手を曳いてやらう。
妻　人が見るわよ。
夫　見る奴が損をする。草臥れたか、ぢや、この邊で一と休みしよう。なんなら、海へはひつてもいゝよ。
妻　あたし、はひるわ。
夫　はひれ。うむ、お前も裸になると、なか／＼好い體格

だ、あんまり遠くへ行くな。
妻　大丈夫よ。
夫　待て待て、そこで、さうしてゝ見ろ。寫眞を一枚取つて置かう。さ、いゝかい。うむ、これや素敵だ。（だんだん興奮して來る）今迄、お前が、こんなに美しく見えたことはない。どうだい、その形は……。なんといふ素晴らしい色だ。さう〳〵、やあ、お前の髮の毛は、そんなに長かつたのか。お前の胸は、そんなにふつくらしてゐたのか。あ、笑つてるね。こつちを向いて御覽。うん。それがお前の眼だつたのか。あゝその口は……（われを忘れたやうに叫ぶ）
妻　（はじめて顏を上げ、たしなめるやうに）あなた。
（長い沈默）
夫　こゝへ來て見ろ。
妻　（笑つてゐる）
夫　（兩手を差出し）來て御覽。
妻　いや。
夫　來て御覽つてば。
妻　（起ち上り、夫の兩手を取り、それを振りながら）あなたには、丁度いゝつていふところがないのね。
夫　どういふ風に。（妻を引寄せようとする）
妻　いや、そんなことしちや。
夫　（妻の手を取りたるまゝ）お前は、ほんとに、おれがいやになりやしないか。おれとかうしてゐるのが……。
妻　あなたはどうなの。
夫　おれは、お前とかうしてゐることが、だん〳〵うれしくなくなつて來た、それは事實だ。しかし、お前がゐなくなつた時のことを考へると、立つても坐つてもゐられないやうな氣がする。それも、ほんとだ。
妻　どつちがほんとなの。
夫　どつちもほんとだ（間）だから、おれは、こんなことぢやいけないと思ふ。が、どうにもならないんだ。（間）お前が、さうして、おれのそばで、默つて編物をしてゐる。お前は一體、それで滿足なのか。そんな筈はない。おれの留守中に、お前は、どこか部屋の隅つこで、たつた一人、ぼんやり考へ込んでゐるやうなことがあるだらう。おれは外にゐて、お前のその淋しさうな姿を、いくども頭に描いて見る。百圓足らずの金を、毎月、如何にして盛大に使ふか、さういふことにしか興味のないおれたちの生活が、つく〴〵いやになりやしないか。今更そんなことを云つてもしかたがないと諦めてゐるかも知れない。しかし、お前は決して理想のない女ぢやないからね。おれは、今のお前がどんなことを考へてゐるか、それが知りたいんだ。かういふ生活を續けて行くうちに、

おれたちはどうなるかつていふことだらう。違ふか。それとも、お前が、娘時代に描いてゐた夢を、もう一度繰り返して見るのか。

妻　あなたは馬鹿よ。（笑はうとしてつい泣顔になる）

夫　人間はみんな馬鹿さ。自分のことがわからずにゐるんだ、さ、もうよさう、泣いたのは。

妻　でも久しぶりよ、こんな話は。

夫　おれが、日曜日にお前をはふつて外へ遊びに出る。それをお前が不滿に思ふのは當り前だ。たまには氣晴らしもしたいだらう。活動ぐらゐなんでもない。夕飯でも食つたら、出掛けるか。

妻　（うなづく）

夫　行かう。そんならそれで、早く風呂へでもはひつて來い。

妻　（涙を拭きながら）　今日はいゝの。

夫　どうして。

妻　あなたこそ、今日で三日目よ。

夫　うむ、少し風邪氣味なんだけれど……まあ、今日はよさう。それより、今が三時半だから……さうだ、夕飯まで一寸出て來るからね。

妻　（元の座に着き、恨めしげに）　どこへいらつしやるの。

夫　なに、ぢき歸つて來る。

妻　（夫の顔を見つめ、何か云はうとして、急にうつむき）えゝ、いゝわ。

夫　（もぢ〳〵しながら）　川上んとこぢやないよ。

妻　（氣まづげに）　何處だつていゝことよ。

夫　（妻の傍にしやがみ）　玉突だと思つてるんだらう。

妻　（その方は見ずに）　いゝから、行つてらつしやいよ。

夫　怒つたのか。

妻　（また泣いてゐる）

夫　（途方に暮れて）　どうしたんだい。一體。

妻　あたしが惡かつたの。

夫　いゝも惡いもないぢやないか。だから、後で活動へ行くんだよ。

妻　（溜息を吐き）　もう、わかつたの。

夫　何がわかつたんだい。

妻　もういゝ加減に諦めるわ。

夫　なにを……

妻　御免なさい。

夫　變だぜ。

妻　をかしなものね。よその奥さんたちは、旦那さんがお留守だと、けつく氣樂だつてよろこんでゐるの。だけど、あたし、それが不思議だつたの。

夫　それや、不思議なのが當り前さ。

妻　それが今日、やつと不思議でなくなつたの。
夫　え。
妻　男つていふものは、やつぱり、朝出て、晩歸つて來るやうに出來てゐるのね。
夫　（苦笑する）
妻　男つていふものは、家にゐることを、どうしてさう恩に着せるんでせう。女は、それがたまらないのね。
夫　何も恩に着せるわけぢやないさ。
妻　だから、行く處があつたら、さつさと行つて頂戴。その方が、ずつと氣持がいゝわ。
夫　（また椅子にかけて、新聞を讀み始める）
妻　あたし、日曜がおそろしいの。
夫　おれもおそろしい。
（間。）
妻　あなたは、あんまり、あたしを甘やかし過ぎるのよ。
（編物をし始める）
夫　さうでもあるまい。
妻　いゝえ、さうなのよ。
夫　むづかしいもんだな。
妻　よそのうちを御覽なさいよ。
夫　見てるよ。
妻　あの通りになさいよ。
夫　出來ないよ。
妻　女はつけ上るものよ。
夫　知つてるよ。
妻　それぢやいゝわ。
（長い沈默。）
夫　おれたちは、これで、うまく行つてる方ぢやないかなあ。
妻　もう少しつていふ處ね。
夫　金かい。
妻　さうぢやないのよ。
（長い沈默。）
夫　犬でも飼はうか。
妻　小鳥の方がよかない。
（長い沈默。）
夫　（欠伸をする）
妻　（欠伸をする）
（間。）
夫　おい、話をしてやらうか。
妻　えゝ。
夫　昔々ある處に、男と女とがあつた。男は學校を出るとすぐ會社に勤めた。女は、まだ女學校に通つてゐた。二人は毎朝、同じ時刻に、郊外の同じ停車場で顔を合せた。

そのうちに、二人は、お辭儀をするやうになつた。男が早く來た時には、男は女の來るのを待つた。女が早く來た時には、女は……

妻　（引取つて）先へ行つてしまつた。

夫　（極めて自然に）さういふこともあつた。

（此の時「あらつ」といふ女の子の叫び聲が聞える。庭の中に、大きな紙風船が轉がつて來る。）

夫　（新聞を投げ出し、庭に降りて風船を拾ふ）

妻　（獨言のやうに）千枝子ちやんは、おうちにゐるの、今日は。

夫　（默つて風船をつきはじめる）

妻　およしなさいよ、あなた……（大きな聲）千枝子ちやん、いらつしやい。をばちやんと風船をついて遊びませう。

夫　（相變らず一生懸命に風船をつく）

妻　（立ち上り、玄關から下駄を持つて來て庭に下り）あなた、駄目よ、そんなに力を入れちや……（子供が垣根の向うにゐるらしい、それに）さ、をばちやんとつきませう。（かう云ひながら、夫のついてゐる風船を奪ひ取るやうにしてつく）千枝子ちやん、あつちから廻つていらつしやい。

夫　（妻の後を追ひながら、じれつたさうに）どら、貸して見ろ、おい……

―― 幕 ――

麵麭屋文六の思案（一場）

人物

文六（五十五歳）
おせい　その妻（四十五歳）
廉太　その伜（二十三歳）
おちか　その娘（十七歳）
常吉　丁稚（十六歳）
京作　止宿人（四十二歳）
萬鐵　新聞記者（三十八歳）

時

大正×十×年の冬

處

首都の場末

第一場

麵麭屋の店に續きたる茶の間。

文六、おせい、廉太、おちか、食卓を圍み、常吉は少しはなれて別の膳につき、何れも食事をしてゐる。

午後六時。

文六　（汁を啜りたる後）おせい、また生姜を忘れたな。淺蜊に生姜、豆腐に葱、臺所に貼り付けとけ。

おせい　（飯を頰張りたるまゝ）あれだけおちかに云つといたけれど……。緣の取れた目笊の中に、いつかのがまだありやしないかい。

おちか　（指で口から髮の毛を拔き取りながら）常公、お前忘れたね、いやだ。（おせいに）もうないの。

常吉　生姜もでしたか、そいつあ聞きませんでしたぜ。

おちか　この人に用を賴むと、いつでもこれ、しやうがあれや……

廉太　（むきになつて）馬鹿。（空の茶碗をおちかの方に突き出す）下らない洒落はよせ。

おちか　（あつけに取られて、廉太の顏を見る。飯をつけ終るや、投げ出すやうに茶碗を下に置き、わつと泣き出す）

おせい　（廉太に）お前もまたなんだね、それくらゐのことを……。

文六　よせよせ、泣くのは。洒落るつもりでもなかつたらう。おれが贅澤を云つたのが惡かつた。此の寒空に溫かいものも食べられない人間がいくらもあるんだ。

おせい　お父ッつあん、御飯は。

文六　うむ、まあ待て。（盃を口に當てる）

（此の時、階段の途中より、梶本京作、薬罐を持ちたる手を差出し、半身を見す。）

京作　お湯を一杯どうぞ。

おせい　はい只今。おちか。

おちか　（薬罐を受け取りに行き）すぐ持つて行くわ。（湯を注ぎて、二階に上る。）

文六　先生は近頃、一向下へ降りて見えんな。

廉太　先生なんて呼ぶのはおよしよ、お父ッつあん、小學校の教員ぢやないか。

文六　だから先生ぢやいけないのか。

廉太　つけ上がるからさ。

おせい　（たしなめるやうに）廉ちやん。

廉太　あんな氣に喰はない奴はない。

常吉　ほんとですね、こなひだも、あつしのことを……。

文六　お前は默つてろ。まあいゝさ。世間にや色々の人がゐる。

おせい　廉ちやん、どうかしてるよ、今夜は。

（長き沈默。）

廉太　（二階の方を見ながら）おッ母さん、駄目だよ、おちかを呼ばなくつちや。

おせい　（常吉に）お前、すんだら早く片づけて、（時計を見て）夜學へ行くならさつさとおいでよ。

常吉　（默つて膳を片づけ、勝手の方に去る）

おせい　あの子はなにしてるんだらうね、御飯も食べないで……。（角の立たないやうに）おちか。おちかや。

廉太　何してるつて、わかつてるぢやないか。

文六　（茶碗をおせいの方に差出し）廉坊、飯を食つたら、また將棋でもさすか。

廉太　今夜は教會で丸尾先生の話があるんだ。お父ッつあん行かない。

おちか　（膳と薬罐とを持つて二階より降り来る）なにか用、おッ母さん。

おせい　しまつてからにおしよ。

おちか　だつて、まだお茶を飲んでゐらしつたんですもの。

おせい　いゝから早くおあがり。（獨言のやうに）いつまでも片づかなくつて……。

文六　おれもまだ食ふぜ。

おせい　あんたはいゝのよ。ゆつくりおあがんなさい。

（店先で客の聲がする。）

文六　（おせいを頭で指す）

おせい　いらつしやい。（かう云つて立上つて行く）食パンを一斤、へい。バタ附とジヤミ附とを半斤づゝ、へい。ジヤミは苺のが生憎切れまして、左樣で御座いますか、どもお氣の毒さま。

文六　丸尾さんはどんな話をなさるんだい、今夜。

廉太　どんな話か聞いて見なきやわかるもんか。人類の使命と宇宙の神祕つて云ふ題なんだ。

文六　何んだつて。あの人の云ふこた六ヶ敷くつて、おれなんかにやわからん。そこへ行くと根津さんの話はくだけたもんだな。學問の點ぢやどうか知らんが、成る程と云はせるだけえらいな。

廉太　僕らが成程つて云はないから同じこつた。あんな說教なら聞かない方がましだ。

文六　なか〳〵さうぢやあるまい。あの人はお前、丸尾さんなんかよりや、イエス樣に近い人だね。云ふことは兎も角、第一することが違ふ。あの人には見榮を飾ると云ふところがない。丸尾さんは、親の仇でも討つたやうな顏をして懺悔をするぢやないか。

廉太　懺悔をすると云ふことが愉快なことだからさ。

文六　さあ、そいつはどうかな。

廉太　まだそんなことがわからないのか。

文六　お前はもうわかつてるのか。

おせい　（入り來る）をかしなお客さん。店先で面白い話をするの。奥さんが病氣なんだつて。それで毎晩パンを買つて歸るの。ハイカラな奥さんと見えるわね。處が、バタ附を買つて歸ると、ジヤム附がいゝつて云ふんですつて。それから、ジヤム附を買つて歸るとバタ附でなくつちやならないんですつて。だから、今晩は、兩方買つて歸るつて云ふの。それもね、一緒に出しちや面白くないから、初め一方を出して……

廉太　（ぷいと立ち上り）面白かないよ。そんな話。

おせい　（むつとして）おや、この子は氣でも狂つたのかい。

文六　（まあ〳〵、うつちやつとけと云ふ合圖をする）

廉太　（鳥打帽と頸卷とを取りて）一人で行くよ。（出て去る）

文六　廉坊。

廉太　（姿を見せず）あゝ。

文六　一寸。

おせい　（默つて膳を片附け出す）

おちか　（臺所に立ち去る）

廉太　なんだい。（閾のところに立ちたるまゝ、返事を待つ）

（稍長い沈默）

文六　說教は七時からだらう。（間）機嫌を直して出て行け。（間）まあ、すわれ。

廉太　（しぶ〳〵火鉢の側にすわる）

文六　顫へてるぢやないか。（間）ぢや、今年もう一度受

けて見ろ。三度目の正直つて云ふこともある。

廉太　學校なんか、行かないだつていゝや。その代り、僕のやりたいことをやらしてもらはぁ。

文六　何をやるんだい。神學か。

（長い沈默。）

廉太　お父ッつあん、僕、書生に行つてもいゝかい。

文六　書生。

廉太　丸尾先生が勉强さしてやるつて云ふんだけれど……（間）何んだか、かうしてると、わからないことだらけで、いやになつちまふんだもの。

文六　だから、大學で、そのわからないことを教はるんぢやないか。

廉太　大學なんて駄目だとさ、僕のわからないことつて云ふのは、そんなことぢやないんだ。學問つて云や學問だけれど、本で覺える學問ぢやないんだ。人生問題なんだから……。

文六　人生問題か。さうか、そいつは困つたなあ。

廉太　自分の哲學、自分の宗教と云ふものがなくつちや、なんにもならないんだからなあ。

文六　自分のね。ぢや、キリスト教は誰の宗教なんだい。

廉太　だからよ。人のキリスト教ぢやいけないんだ。自分のキリスト教といふものがなくつちや。

文六　そんならキリスト教でなくつたつていゝぢやないか。

廉太　聖書より立派な教はないよ。

文六　そんなら、その通りにすれやいゝぢやないか。みんなが。

廉太　解釋のしかたが違ふんだ。どうにでも解釋が出來るんだ。だから、そこよ、自分のいゝと思ふ解釋でなければ値打がないわけさ。

文六　自分でいゝと思つても、どうだかわかりやしない。

廉太　そこは信念よ。自分でいゝと思つたことは、神が命じることなんだ。

文六　さう思つてれや世話はないな。お前、神樣つて云ふものが、ほんとにあると思ふかい。

廉太　神がなけれや、宇宙はどうしてできたんだい、人類はどこから生れたんだい。

文六　猿からつて云ふぢやないか。

廉太　なんだ、それや一世紀前の學說ぢやないか。ぢや、その猿は、何から生れたんだい。

文六　猿か、猿はお前、猿よ。

廉太　（横を向き）馬鹿な。

文六　ぢやお前に聞くがね、人間がみんな死んでしまつたら、神樣はどうするんだい。

（長い沈默。）

廉太　神様か、神様はそんなことはしないよ。神は創造者だ。破壊者ぢやない。

文六　さうとばかりは云へないぜ。

廉太　戰爭か、地震か、それや、新しい世界を建設する爲めの破壊よ。

文六　だからさ、人間なんて奴をみんな殺してしまつて、それよりましなものを造らうなんて云ふ氣を起さないとも限るまい。

廉太　（兩手で頭をかゝへ、しばらく考へ込む）

（おせい、おちか、縫物をし始める。）

文六　それは神様が人間を造つたものとしてだよ。（間）處が、神様は人間が造つたのかもしれない。神は人間の心に宿るとまで云ふぢやないか。すると、人間がみんな死んでしまへば、神様なんて云ふものもなくなつてしまふわけだ。

廉太　それはさうよ。（間）む、待てよ。丸尾さんに聞いて見ら、そいつあ。

文六　聞いて見な。

廉太　おつ母さん、本を買ふんだから貳圓おくれ、來月は何にも買はないよ。

おせい　本、本つてお前、こなひだから幾册買ふの。

文六　出してやれ。

おせい　お二階の先生が本ならいくらでも貸してやるとおつしやるんだから……（帶の間より金を出して渡す）

廉太　駄目だい、あいつの持つてるやうな本は……（おちか、反感を含んだ眼で廉太を見上げる。廉太、之には氣づかず）「結婚と戀愛」か。そんなものは讀みたかねえ。（おちか、ハッとして再び廉太を見上げる）ぢや行つて來ら。（立ち上り、出て去る）お客さまだよ。（廉太の聲が聞える）

おちか　（立つて行く）いらつしやいまし。

おせい　（文六のそばに躙り寄り）今晩はね、お父さんに少し相談したいことがあるの、（店の方を顎で指し）おちかのことでね。

文六　おちかがどうしたんだい。

おせい　（うつむいて）實はね、お父さんに濟まないことが出來ちやつたの。

（文六の不安と云ふよりも寧ろ悲痛な表情、長い沈默。）

文六　（暗い想念を追ひ拂ふやうに）なんだい。

おせい　おちかは、まだお父ッつあんに云つてくれるなつて云ふけれど、はふつて置くわけにも行かないし、尤もまだ、はつきりさうとは云へないんだけれど——まあ、

あたしの見たところでは、やつぱりさうらしいの。
文六　(恐る恐る)　さうらしいか。
おせい　え丶。
(沈默。)
文六　(二階を顎で指し)　先生か。
おせい　まさかと思つたけれど……。
(おちかの影が障子に映つてゐる。動かない。)
文六　(それを見て、荒々しく)　おちか。こゝへ來い。
おせい　もう出來たことは仕方がないんだから、あんまり
ひどいことを云はないでね。腹も立たうけれど、あの娘
ばかりが惡いんぢやない、あたしにも重々罪があるんに
から……。
文六　(その言葉が耳にはひらないやうに)　おちか、來い
と云つたら、來ないか。
(おちかの啜り泣く聲が聞える。)

——幕——

第　二　場

前と同じ。
文六とおせいは長火鉢に向ひ合つてゐる。
おちかは、母親の傍らに、泣き崩れてゐる。
前の場から、時間はさう經つてゐない。

文六　おれには出來ん、どうあつても出來ん、そんな眞似
は。それぢや、お前、子供の仕業ぢやなくなるぜ。いゝ
かい、見てろ、おれのやることが、いゝか、わるいか、
まあ、見てろ。
(此の時、京作、決然たる面もちにて階段を降りて來
る。四十を越したる風貌。帽子を手にもち、外出の服
裝をしてゐる。)
文六　(慌てゝゐずまひを正し)　やあ、先生、お出掛です
か。寒うごわすぜ。(おせいに、どうかせよと云ふ眼く
ばせをする)
おせい　(あんたおつしやいよと云ふ眼くばせをする)
京作　一寸出て來ます。(かう云ひながら店先へ出る)
文六　(片唾を飲んで)　あの、先生。
京作　(引き戻されるやうに後戻りをして)　は。
文六　お急ぎでなければ、一寸只今お話いたして置きたい
ことが御座いますんですが、御都合は如何でせうか。
京作　いえ、伺ひませう。(座につく。努めて平靜を裝つ
てゐる。時々おちかの方を盗み見る)
文六　(おせいに、お前云へと云ふ合圖をする)
おせい　(そんなことがあるもんですかと云ふ顏附)
文六　今夜はまた格別冷えますやうですな。
京作　(夢からさめたやうに)　え丶。

文六　どうもその……（かう云つたものゝあとが續かず、おせいを見て、泣き出すのかと思ふやうな笑ひ方をする。そして、咳拂ひを一つして、京作にお辭儀をする）

京作　（なんのことかわからずに、これも、頭をちよつと下げてお世辭笑ひをする）

おせい　（困つたやうな顏をして火鉢に火をつぎ足す）

文六　（思ひ切つて）實はその……此の度、おちかを（一寸おちかの方を見る）わきへやることになりましたんで……（一同それぞれ思ひがけぬ話がもち上つたと云ふやうな顏をして、文六の方を見る）さういたしますと、自然、お世話も行屆かないやうになりますし、家內も（一寸おせいの方を見る）なかなかまめなやうには見えますが、これがまた至つて無精者で（おせい、しかたがなしに、不滿と同意とを併せたやうな作り笑ひをする）このあひだも、見てをりますと、先生に差上げる吸物の椀で、隣のブルドックに飯を食はせてゐるやうな次第で……

……（京作、眼をみはる）

おせい　（何か云はうとする）

文六　お前は口を出すな。おちかが居りますと、これでまあ、いくらか家の中がきちんと致しますが、これが居りませんやうになりますと、先生のお居間の掃除も、ろくに出來ないと云ふやうなことになつて、穢いお話しですが……。

おせい　お父ッつあん。

文六　え、もうゐるのか。

おちか　（哀願するやうに）お父ッつあん。

文六　（どぎまぎして）早い話が、まあ、先生の方でも御迷惑だらうと、かう存じますんで、それにまた……。

京作　わかりました。つまり、出てくれと仰しやるわけですね。（間）さう遠まはしにおつしやられるとお話がしにくゝなりますが、事情はほゞ御察しゝて居ります。わたくしの方からこそ、お指圖を仰がなければならなかつたのです。どう云ふお考か、一番大事な點に觸れることをお避けになるやうですが、これは是非、わたくしの責任として、解決をつけて置きたいと思ひます。その前に、云はゞわたくしの不始末について、先づ御兩親にお詫びを致さなければなりません。（兩手をついて恭しく禮をする）おちかさんの將來について、わたくしが望んでゐたやうに、充分の責任を持たせて頂くこともできず、處女の矜りを奪つたまゝ、おちかさんの生活から、わたくしが卑怯にも姿を消すと云ふことは、實に苦痛です。それと同時に、わたくしの愛、男としての誓に信頼して、身も魂も捧げて下さつたおちかさんの純潔な心に對して今更申しわけがありません。（おちかの方に向き直つて

丁寧に頭をさげる）

おちか（啜り泣きながらお辭儀をする）

京作　實を申せば、如何なる事情も二人の仲を裂くことが出來ないやうな、一つの結果を、わたくしは待ち望んでゐたのです。その結果は、二人の愛に勝利を與へるものだと思つてゐたからです。その勝利を見ることが出來ないのはかへすがへすも殘念です。然し、その望みは、まだ全く棄てなくともいゝ、さう云ふ氣がします。おちかさんのからだに、萬一、わたくしの愛の形見が殘されてゐたら、それを知るときが來たら、おちかさんはわたくしのものです。わたくしは、おちかさんのものです。（だん〳〵興奮して來る）わたくしは現に結婚してゐる身です。それを否認はしません。しかし、その結婚は名のみの結婚です。わたくしが妻と呼ぶべき女は、病身と云ふ名目で鄕里に歸してはありますが、岩のやうなからだと、氷のやうな心の持主です。彼女は、一匹の魚を買ひ、自身は背中のもり上つた肉をさらへ、わたくしには、あばら骨と腸とをあてがふ女です。彼女は、わたくしの職務上必要缺くべからざる時計を質に入れ、隣家の大學生と共に、子安海岸へ海水浴をしに行く女です。それだけならまだよろしい。彼女は、一月分の俸給を受け取るや、月末の拂ひも濟さずに、それを懷に入れて鄕里へ歸つてしまつた女です。（文六、おせい、だん〳〵この話に引き入れられて、大きくうなづいたりなどする）

文六　お國は。

おせい　紀州だつておつしやつたぢやないの。

京作　さうです、紀州です。蜜柑の產地です。さう云ふわけですからして、つまり……さうです、蜜柑の產地です。

（長い沈默。京作、涙を拭ふ。）

おせい　だん〳〵お話を伺つて見ると、何とか、もつとどうにか出來さうなもんですがね、お父ッつあん。

文六　しかしお前、かう云つちや何んだが、どんな彼女にしても、きまつた奧さんがあるところへ、娘をおしつけるわけに行かんぢやないか。

おせい　だからお前さん、その奧さんの方をどうにか……

文六　おい〳〵、何を云ふんだ。先生はまだそんなことをおつしやりはしない。

京作　さう云ふわけですからして、さうです、申しおくれましたが、その方を成る可く早く片をつけまして、更めて御相談を致しますから、それまでどうぞこのまゝで、御厄介になつてゐたいと思ふのですが……。

文六　わたくしは、自分の主義としまして、さう云ふことを默つてゐることが出來ませんので、成る程、伺つて見れば、御夫婦仲もあまり睦じくないやうなお話しですが、

それとこれとは、また問題が違ひますんで。かりにも人の娘をなになさるのに、狐が鷄を浚つて行くやうな、まあ、たとへて見ればですな、（調子が次第に激しくなる。）相手を呑んでかゝると云ふところが見え出す）さう云ふ法はありませんな。それぢや何の爲に親がついてゐるのかわからないぢやありませんか。

京作　（恐縮して）いや、そこを重々お詫びするわけです。たゞ、考へていたゞきたいのは四十の坂を越したわたくしが、まだ十七と云ふおちかさんを、妻に欲しいなどゝ、どの面を下げてお願ひできませう。

文六　できないとお思ひになつたら、お諦めになるのがほんとうでしたな。

京作　痛み入ります。しかし、そこが買物などゝ違ふわけで、欲しいと思つたら懷算段などはしてをられないのです。世間の親は、娘の婿にと思ふ男のほかは、どんな男でもみんな狐だと見做してゐます。同じ狐の中にも、稻荷大明神のお使もゐるわけです。取られたと思つてゐた鷄が、何羽にもなつて歸つて來たと云ふ傳説が、わたしの國にもあります。（文六とおせい顏を見合はせる）

文六　何羽にもして返して貰ふのが却つて迷惑なものもあるでせうからな。いや、これもたとへですが。どちらにしても、わたくしどもの娘は、鷄とは違ふんですから、どうぞそのおつもりで。今夜と申すわけにも行きますまいが、明日は早速他へお遷りを願ひます。

おちか　（母親の方を見たゐ後、また、しく〳〵泣き出す）

京作　おちかさん、あなたはなんにもおつしやらないのですか。先生はもう行くんですよ。

文六　おちかは何も云ふことはありません。お出かけのところをお引留めしてすみませんでした。さあ、どうぞ御自由に。

京作　さうおつしやられゝば致し方ありません。荷物ごしらへをします。（力なく立ち上り二階に上る。）

おちか　（母親の膝に縋り、おろおろ聲にて）おつ母さん。

文六　（京作の姿がかくれるのを待つて、がつかりしたやうに）あれぢやどうにもしやうがない。すつかり見損つたわい。おちか、あきらめろ。いくら髭ばかり生やしてゐても、あんな男なら亭主に持つな、おせい、お前はどう思ふ。

おせい　さうねえ。今更なんと云つても仕方がないけれど、あゝまで想つて下さるものを……。

文六　お前までなんだ、おせい。男のくせに魚の腸ばかり食はされて默つてゐるやつが何になる。おちか、お前そんな男がすきか、そんな亭主がいゝか。

おちか　（はつきりうなづく）

文六　いゝことはない。

おちか　（聲をあげて泣き出す。時々母の顏を見上げて懇願するやうな眼附をする）

（此の時、表の方が騷がしくなる。常吉、臺所より走り入る。一同、不安と恐怖におそはれて、常吉の方を見、表の方に耳を傾ける。）

常吉　聞きましたか。

文六　（無意識に立ち上り）何だ。

常吉　（舌をこはゞらして）地球がつぶれてしまふんださうです。

文六　なんのこつた、それや。

（此の時、表の方より、康太が飛び込んで來る。一同立ち上る。）

康太　お父ッつさん、聞いた。

文六　一體どうしたんだ。

康太　地球が慧星と衝突するんだつて。あしたの晩、十一時頃だつて、慥かなんだとさ。電車も止つちやつたし、巡査なんか一人も居やしない。中央天文臺で今望月博士が發表したんだとさ。

（店の前に群集の叫び聲が聞える。一同、店先に出る。二階より梶本京作、麻繩と新聞紙とを手に持ちたるまま恐る恐る降り來る。）

聲　吾輩は、發行部數僅かに六百部を有する都下最小の新聞「吾等の存在」社會部記者、濱木萬籟と云ふものである。流言蜚語を弄するものでないことを證明するため特に名乘りをあげて置く。諸君、吾輩は茲に、新聞「吾等の存在」の報道が、人類史の最後の頁を語るべき運命に遭遇したることを衷心誇りとするものである「早く先を云へ」と叫ぶものがある）本日午後一時、中央天文臺長望月博士は突如天空の一角に一大彗星の出現せるを發見し、其の進路が正しく吾人の地球に向ひつゝあるを知り、助手と共に鋭意速力の算定に努めた結果、同彗星は一分間に二萬八千哩を突進し明日即ち大正×十×年二月三十一日午後十一時、吾が地球と衝突すべき必然性を有することを確證したのである。その衝突によつて當然吾が地球が滅亡すべきことは、同彗星の大きさが地球の約七倍であることから推斷するに難くない。諸君、學識經驗共に豐富にして、人格高き望月博士の專門的見地は、ヘブライの豫言者にも優る確かさをもつてゐる。博士は此の空前絶後の凶變を世人に公表すべきか否かについて熟考した。科學者たる博士の信念は、次の如く問題を解決した。（「もうそれでわかつた」と叫ぶものがある。）曰く「人類最後の一日を因襲の羈絆より脱せしめよ。」と（二三の拍手が起る。）博士は直ちに都下の新聞記者を招集して彼

等に彼等の最後の役目を果たさせようとしたのである。悲しい哉、自覺なき彼等新聞記者は、博士の言の終るを待たずして倉皇姿を消し、爾來、一の新聞社も號外の發行を企てるものがない有様である。宜なるかな、諸官省、諸會社殊に軍隊さへ一令なくして解散し、通信交通機關は忽ち杜絕し。囚人は脫獄し、僕婢は遁走し、飲食店は掠奪に遭ひ、恨みを受くるものは殺され、見目よきものは犯され、（群集の聲次第に高まりて後の句を聽き取り難し）

文六　みんな、こちらへ來い。

（おせい、おちか、常吉之に從ひ座にもどる。）

おちか　どうしよう。もう死ぬのね。

おせい　地球がどうなるつて云ふの。

文六　大丈夫だ、騷ぐな。（うろうろする。京作にぶつかりなどする）騷ぐことはない。さて、それではと……みんな騷ぐことはない。

（廉太、濱木萬籟を伴ひて入り來る。）

廉太　此の人だよ、今演說をしたのは。

萬籟　水を一杯飮ませて下さい。（汗を拭ひ一同に會釋する）

文六　さあどうぞ、おちか、早く水をあげろ。おせい、表の戸は…　廉太、お前締めて來い。（廉太、店の方に行く）

常吉　旦那、おつかの處へやつて下さい。

文六　默つて逃げろ、こんな時は。

常吉　（丁寧に手をついて）ぢや行つて參ります。（出で去る）

萬籟　（どつかと尻をおろし）みなさんも、立つてないで坐つたらどうです。

（一同、思ひ出したやうに坐る。）

おちか　（コップに水を汲んで來て、萬籟に渡す）

萬籟　あゝ、やつと疲れが出て來た。（柱にもたれる）僕は何のためにこんなことをやつてると思ひます。これが新聞記者の務めだと思つてやつてるんでもなければ、勿論名前を賣らうと思つてやつてるんでもありません。人類が滅亡して何が義務です。何が名聲です。わからないでせう。（淋しく笑ふ）僕は獨身です。八ッ山に女がありました。云ふまでもなく賣笑婦です。僕はあの女に惚れてゐたのですが、自分だけのものにすることが出來ない。向うもその通りだつたのです。僕は今、その女の家に駈けつけました。あすの晩十一時には、その女と抱き合つて、天の灰にならうと思つたんです。その女の家は、固く戸が締つてゐました。戸の外には百人からの男が、茫然と二階を見上げてゐます。時々誰かれの口から、絕

望的に、色々な女の名が呼ばれるのです。同じ名が、違つた男の口から呼ばれるのです。家の中では物音一つしません。僕が會はうとしてゐた女の名が、少くとも十人の口から呼ばれました。僕は、それらの男を一々見る勇氣はありませんでした。そのうちに格闘が始まりました。戸を破つて家の中に雪崩れ込む有様を見ました。女の悲鳴を聞きました。僕は逃げ出しました。（沈默）

廉太　お父ッつあん、僕、一寸出て來るよ。

文六　何處へ行くんだ。

廉太　丸尾さんとこ。

文六　丸尾さんとこへ行つてどうするんだ。

廉太　あのことを聞いて來るんだ。說教の途中でこんなことになつたもんだから、まだ聞いてないんだ。若し、神がゐなくなるんなら、僕、このまゝ死ぬのはいやだ。

文六　早く聞いて來い。

（廉太出て去る。）

萬籟　神はあるかないかではない。信じるか信じないかだ。僕は信じない。信じないと云ふことが一つの信仰だ。僕は人類が神を信ずる爲めに向上したとは思はない。神を信ずる爲めに幸福であり得たとも思はない。最も高い文化、最も樂しい生活は、人類が、自己の力に最も大きな期待を持つた時に生れるのだ。死に瀕して神を祈る心は靜かには違ひないが、死に面して己れを讃美する華やかな瞬間に及ばない。生への執着は時間的觀念を超越してゐる。生命の最後の幕が、歡喜と陶醉の中に閉ぢられるならば、死は一つの休息である。否、寧ろ歡喜と陶醉との連續である、延長である。吾人は、殘された一日を如何に過すべきかを考へなければならない。樂しかつたことは繰り返せ。求めて得なかつたものを求めよ、好きな酒は飲め、歌ひたきものは歌へ、踊りたきものは踊れ。

おせい　（酒の用意をする）

萬籟　戀なきものは新しき戀を撰べ。

京作　（おちかの方に躙り寄る）

萬籟　愛するものは何ものも怖れずして進め。

京作　（おちかの手を取る）

文六　（それを見て見ぬふりをする）

萬籟　愛さるゝものは、はにかむことなく一切を與へよ。

おちか　（京作の肩にもたれかゝる）

文六　（それを見ぬふりをする）

おせい　（萬籟と文六とに酒を注ぐ）

萬籟　（それを飲み干して）二日の糧を貯ふるものは一日分を頒ち與へよ。

文六　（立ちて店の方に行き、次いで、箱を戸外に出す音がする）

萬籟　二人の妻を有するものは一人を放ち譲れ。
京作（おせいの顔を見る。おせい、きよろきよろ、あたりを見まはす）
萬籟（酔ひたるらしく）人類よ、汝等は今、自ら最後の審判を行はんとするなり。人類よ、汝等の歴史をして光輝あらしめよ。（かう云ひ終りて、あふむけに寝ころがる）
京作（そつと、その顔をのぞく）
文六（歸り來りて、此の有様を見て驚く）
おせい　廉坊は大丈夫か知ら。
文六（何かしら、思ひ當つたやうに、慌てゝ妻に飛び出し）廉坊、廉太、おうい、廉坊……（聲がだんだん遠くなる）
おちか（京作の方にすり寄る）
京作（遂におちかを抱きかゝへる）
おせい（逃げるやうに走り出で）お父ッつあん……（泣き聲になる）
文六の聲（遠くの方にて）廉坊……

――幕――

葉櫻

母
娘

四月下旬の眞晝。

母の居間――六疊。

開け放された正面の丸窓から、葉櫻の枝が覗いてゐる。

母は、縫ひものをしてゐる。

娘は、その傍らで、雜誌の頁を繰つてゐる。

――間。

娘　（顏をあげ、無邪氣らしく）あたし、どうでもいゝわ。

母　（わざと素氣なく）母さんもどうでもいゝ。（間）どうでもいゝことはないよ。（間）お前も少しは考へたら……？

娘　考へるつて……。だから、あたし、母さんのいゝやうにするわ。

母　母さんは別に異存はないよ。たゞお前の氣持さ、大事なのは……。

娘　……………。

母　それと、あの人の態度……、わからないのはね……。見合をした、氣に入つた、貰はう、それで、こつちにすぐ返事をしろ……これぢや、お前、あんまりお手輕すぎるからね。あれから、もう一月にもなるんだし、なんとか、本人から……話がありさうなもんぢやないか、そのことについてさ……。それとも、直接お前に何か云ふことは云つたのかい。お前の氣持を聞いて見るつていふやうなことはしたの……。

娘　（首を振る）

母　ぢや、お前と二人つきりの時は、どんな話をするの。

娘　どんな話つて……默つてる時の方が多いわ。それよりね、變なのよ、あの人。それや、可笑しいの。

母　何が？

娘　それがね、二人つきりの時は、まあ、いゝのよ。あたり前なの……。ところが、あの人のうちへ行くと、急に態度を變へちまふの。お母さんや妹さんのそばだとよ、丸で、あたしに素氣なくするの。

母　どういふ風に……。

娘　第一、口を利かないの。それから、顏も見ないの。

母　へえ。

娘　何ていつていゝかしら……、とてもつまらなさうな樣

子をするの。すぐ欠伸なんかして……。

母　へえ。

娘　一昨日だつてさうだわ。ダリヤの球根を持つて行つてあげた時ね、あん時なんか、みんなお庭にゐたのよ、それに、あの人だけ、あたしの方を振り向きもしないの、おまけに、云ふことが云ふことなのよ。「そんなものを貰つたつて、植ゑるところがないや。」――かうなの。あたし、泣きたくなつたわ。

母　隨分をかしな人だね。でも、二人つきりの時は、そんなでもないんだらう。

娘　（うなづく）

母　優しくすることはするんだらう。

娘　優しくつて……。

母　いゝえさ、いくらかお前の機嫌を取るやうにしやしないかい。

娘　機嫌を取るやうにつて……。

母　つまり、お前が好きだとか嫌ひだとか云ひさうなもんぢやないか。

娘　そんなこと、云はないわ。

母　云はないことがあるもんか。

娘　だつて、云はないんですもの……。

母　それぢや、お前、どうにもならないぢやないか。

娘　だから、それでいゝわ。（雜誌に顔を近づける）

母　なにがいゝのさ。

娘　どうにもならなくつても……。

（沈默。）

母　是非つて云はれたところで、向うのお母さんばかりがその氣になつてゐて、肝腎の本人がそれぢや、賴りなくつてしやうがないぢやないか。（間）ぢや、いゝから、あの人がお前にどんなことを云つたか、それを殘らず云つて御覽、云つた通りにだよ。お前たち二人つきりで話をしたのは、一度、二度……、それから、一昨日、歸る途中と、それだけだね。さ、初めの日は……。

娘　待つて頂戴よ、あん時は、たつた五分かそこらなんですもの……。話す暇なんかありやしないわ、（考へながら）さうさう、でも、こんなことを云つたわ――「學校生活が懷しくはありませんか。」つて。「えゝ。」つて云つたら、「はゝゝゝ。」つて笑ふの。

母　なぜ。

娘　なぜだか……。それから、あたしが、「此の邊はお靜かでよろしう御座いますわね。」つて云つたら、「よその家へ行くとさういふ氣がするんですよ。」だつて……。それから、「ラヂオをお引きになりませんの。」つて訊いたら、誰でもする事はしたくないんですつて　。少し……？

（と云つて、頭の横へ指で旋毛を書く）

母　さう云ふ處があるかも知れないね。それだけかい。

娘　初めの日は、それだけよ。その次ぎは、こゝでよ、母さんが、そら、買ひ物にいらしつたお留守よ。歸る歸るつて云ひながら、二時間もゐるの。

母　それで、大分話しができたわけだね。

娘　さうでもないの。あたしの方から何か云はれなけれや、默つてるの、煙草ばつかり喫つて……。（笑ひをこらへて）あの人、一つ癖があるの。かういふ癖……（と云ひながら、人さし指で鼻の頭を撫で）それが、たゞさうするだけならいゝのよ。さうしたあとで、きつと、鼻の頭をかう摘んどくの。

母　馬鹿だね、お前は。それより、あの人の云つたことをすつかり云つて御覽。

娘　あの人はね、かういふの――「僕はまだ結婚なんかしたくないんだけれど、お袋が――さうさう、お袋つていふのよ――お袋がやかましく云ふものだから……」つて。

母　それぢや、お前……。

娘　えゝ、だからよ、それぢや、あたし、いやだつて云はうかと思つたの。

母　思つたゞけぢやしやうがないぢやないか。（間。獨語のやうに）やつぱりさうなんだね。

娘　そのくせ、あたしに、ぶらぶら遊んでる男は嫌ひだらうつて訊くから、嫌ひつていふこともないけれど、自分で働いて、自分の力で生活できる人の方が頼み甲斐があるつて云つたら　。

母　そんなことを云つたのかい。

娘　えゝ、さうしたら……。

母　さうしたら　。

娘　さうしたら、僕もそのうち、何か仕事を見つけようかなあつて、誰についていふことなしに云つて見たりするの。

母　さういふ處を見ると、萬更でもないんだね。（縫物の一端を娘の方に差出し）さ、一寸こゝを持つてゝおくれ。だけど、をかしいぢやないか、もう、その氣でゐるのか知ら……返事を聞かないうちから。

娘　さうよ。

母　まだ何か云つたの。

娘　日本間が好きか、西洋間が好きかつてあたしに訊くから、それや西洋間が好きだつて云つたら、そんなら離れを西洋間にしようかなあつて云ふの。

母　何んでも、なあぢやないか、あの人は。

娘　さうよ。

（間。）

母　どうしたもんだらうね。別に相談をするつていふ人も

ないし……。何しろお前がしつかりしてゐてくれなくつちや困るよ。（間）貰つてやらうぢや、いやだ、あたしは、本人が是非異れと云ふんでなくつちや……。そこがどうもはつきりしないね。
娘　そのことは母さんに委してあるらしいのよ。
母　さうして安心してるのかい。
娘　安心してるかどうか知らないけれど……。
母　自分はどうでもいゝつていふやうな顔がしたいんだらう。
娘　あたしだつて、母さんがいゝつていふやうにするんぢやないの。
母　お前は違ふよ。（間）だからさ、こんだ、お前から訊いて御覧よ――一體、あたしを異れつておつしやるのは、あなたなのですか、それとも、あなたのお母さんなのですかつて……。
娘　いやよ、あたし、そんなこと訊くのは。
（沈默。）
母　ね、お前も女ぢやないか。母さんの云ふことはわかるだらう。（間）男の御機嫌を取つて一生を暮すやうなことは、お前だけにはさせたくない、ね、いゝかい。どんな女でも、生涯に一度は、自分をほんたうに愛してくれる男に出會ふ筈だ……。その男は、お前の爲めにお前を愛してくれる男でなけれや……。（間）今日は、お前に、あたしの昔噺をして聽かせよう。――あたしが、お前のお父さんのところへ來たのは、丁度お前と同い年、十九の春だつた。もちろん、その時分だから、結婚前の交際なんていふことは、誰も考へてゐやしなかつた。あたしは、夢うつゝでお嫁入をさせられてしまつたのさ。見合ひね……それや、したにはしたけれど、形ばかり……。婚禮の日に、始めて知つたくらゐだもの、お父さんのお眼が、片一方、あんな風だつていふことを……。それだけならまだいゝのさ。その晩、お父さんは、お酒に醉つて、お友達と一緒に、どつかへ行つておしまひになるつていふ騷ぎ……。なに、それが、わざとなのさ、見榮なのさ……。つまらないお芝居さ……。（間）そして、そのお芝居が、最後まで續いたんだからね。こんな奴は眼中にないんだ、さういふところを、人に見せたくつてしやうがない、その爲めに、誰かゐる時に限つて、あたしと口を利くことを避けようとなさる、そればかりか、用があつておそばにゐると「いゝいゝ、あつちへ行つてろ……」かうなのさ……。何か伺つても返事もろくになさらないつていふ始末なの。あたしも、初めのうちは、どうしても諦めがつかなかつた。別に亂暴な取あつかひを受けるといふではなし、ゐたゝまらないほど苦しい目に遭

ふといふんではないけれど、これでは何んの爲めに夫と名のつく人のそばにゐるのかわからなかつた……。幾度、里へ歸らうと思つたか知れない……。それでも、たうとう辛棒したよ……お前ができたからさ。

娘　そんなだつたの…。あたし、ちつとも知らなかつたわ。

母　お前には、それでも、優しいお父さんだつたよ。だから、今でも、惡い方だとは思つてやしない。たゞ、お前に、あたしのやうに苦勞をさせたくない、それだけさ。（間）あれが、おほかた男の病氣かも知れない……。

娘　でも、それは昔のことでせう。今の男の人は、そんなぢやないわ。そんなぢやないと思ふわ。活動だつて見てるんですもの……。

母　活動か……西洋はいゝね。

娘　いゝわね。あゝいふ風にされゝば、女だつて悧巧になるわ。

母　いや、もつと、ちやんと引張つてなくつちや……。

娘　あの人ね、あたしのことを母さんそつくりだつて云つたわよ。

母　さう云つときや間違ひはないからね。

娘　……………。

母　母さんの理想を云へば、あの人がぢかにあたしんところへ來てさ、「どうか美彌子さんを僕に下さい、きつと世の中で一番幸福な女にして見せます。」つて云ふのさ。そこで、あたしが「あれは御覽の通り我儘で、遊ぶことだけしか知らない娘ですから。」つて云ふと、「それは百も承知です、僕は奴隷のやうに從順な女はいやなんです。遊ぶことさへ知つてゐて下されば、働くことは僕がします。女が働いて男が遊んでゐる社會は呪ふべき社會です。」——と、かういふだらう。それで、あたしも、「さうまでおつしやるなら差上げないこともありませんが、たとへ、あなたのところへ伺つても、あの子はやつぱりあたくしの娘なんですから、あたくしが會ひたいと思ふ時には何時でも會へるやうに、あんまり遠方へ連れて行かないで下さい。」つていふと、「それや勿論、さうなれば、あなたは僕達の大事なお母さんなんですから、おろそかにするもんですか。美彌子さんは、僕と一緒に散歩に行く時のほかは、片時もお母さんのおそばを離れないでせう。」つて云つてくれるの。（涙聲になる）

娘　いやな母さん。

母　をかしいかい、こんなこと云つちや……？　ぢや、よさう。よすかはり、今度の緣談は、一と思ひに斷つてしまはうぢやないか。ね、いゝだらう。

娘　さうしてどうするの。

母　もう少し待つて見るさ……。

（沈默。）

娘　（だんだん顔を伏せる）

母　此の間だつて、あたしや、もう少しで云つてやるところだつた……。何さ、一體、あの返事は……。ちつとでも親みがつくと思つて、人が折角芝居を誘へば、家で寢てた方がましだなんて……。そんなら行かないのかと思へば、あの通りついて來るぢやないか。（間）それに、なにさ、あの顏は……。此處へ來るのにも髭を剃つて來たことはないぢやないか。若い娘のゐる家へ、それも、かういふ話のある家へ來るのに、いくらかまはないつたつて、あんまり人を馬鹿にしてゐるぢやないか。若い男には、若い男らしい嗜みつていふものがある。失禮だよ、第一……。お前は、あゝいふところを見ても、何ともないかい。だから、男が好い氣になるんだ。およし、およし、思ひ切つておしまひ……あたしや眞平だ、あんな男は……。

（長い沈默。）

娘　母さんは、あの人、嫌ひなんでせう。

母　母さんはどうだつていゝぢやないか。お前さへよければ。どんな人だつてかまはないよ。行く氣があるなら、行けばいゝぢやないか。

娘　（あつけに取られて）母さん。

（間。）

母　（氣を鎭めようと努めてゐるらしい。大きな溜息）あたしは、どうだつていゝのよ。

娘　ぢや、斷るよ、いゝかい、後でかれこれ云ふまいね。

母　（默つてうつむく）

娘　（いくぶん穩かに）それとも、何か、母さんの納得するやうな――つまり、お前がこの人ならと思ふやうな、さういふところが、あの人のどこかにあるなら云つて御覽。（間）ぢや、あの人のどういふ處がお前の氣に入つたのか、それを云つて御覽。お前に對する素振りやなにかを考へて見てだよ……。

娘　何處つて……別に……。

母　ぢや、たゞ、あの人が好きか嫌ひか、どつちなの。

娘　（低く）嫌ひぢやないわ。

（長い沈默。）

母　（娘を見つめながら）さうか、そんなら好きなんぢやないか。

娘　（雜誌で顏をかくすやうにして）好きつていふんでもないけれど……。

母　まあ、好きなんだらう。（疊についた物差がぐいぐいとしなふ）

娘　はつきり云へないわ、そんなこと……。

母　それがはつきり云へなけれや、しかたがない。斷るんだね。

娘　………。

母　母さんに何んにもかくしてやしまいね。

娘　どんなこと……。

母　かくしてなけれや、それでいゝ。（間）たかがあんな男一人の爲めに、お前の心がもう母さんから離れて行くかと思ふと……。いゝえ、お前はそんな理想の低い女ぢやない、ね、さうだらう。此の人ならと思ふ男の手に、お前の生涯を委ねることができたら、母さんはその日から、お前に棄てられてもかまはない。

娘　……。（雜誌の口絵の上に涙が一滴落ちる。それを慌てゝ手で拭き取る）

母　どうして泣くのさ……。何がそんなに悲しいのさ。ただ話をしてるんぢやないか。（沈默）窓を閉めておいで。

娘　（窓を閉めに行く）

母　さ、あたしの云ひ方がわるかつた。もつと、こちらへお寄り……。途中から變なことになつてしまつたけれど、もつと詳しく聞いて置きたいことがあるの。母さんは、決して、お前の爲めにならないやうなことはしないんだから、なんでも、本當のことを云ふんですよ、いゝかい。お前にはわからないことでも、母さんはわかることがある。その代り、母さんの知らないことを、お前は知つてゐるんだから、いろいろ話をして見ないとわからない、さうだらう。（間）處で、男が、女に向つて、かういふ話を持ち出した時が、一番、その女によく思はれようとする時だ、普通から云へばね……。ところが、その時から、もう向うの出方に不滿があるとすると、これから先、その不滿は、いつ滿たされるだらう……。さうぢやないか。

娘　不滿つて……たゞ、うちの人がそばにゐる時だけなのよ、素氣なくするのは……。恥かしいからよ、きつと………。

母　さう云つてしまへば、それまでさ。ぢや、あの人が、お前を想つてくれてるといふ證據がどこにある。さういふことについて、あの人がお前に何か云つたかい。二人が一緒になれたら幸福だとか、何時までもお前を可愛がるとか、なんとか、さういふやうなことを云つたかい。

娘　それが、さういふやうなことは、ちつとも云はないの。

母　ぢや、なんて云ふのさ。さうさう、一昨日の晩、送つてくれる途中、どんな話をしたのさ。

娘　二人さへ信じ合つてゐれば、どんなことでも恐れる必要はないつて……。

母　何時さ、それは……。
娘　送つてくれる途中で……。
母　なんだつて……。どんな話をしてたの、それまで……。
娘　よく覺えてないけれど、やつぱり、さういふ話をしてたの……。それから、あたしを、お嫁さんなんかになれさうもないつて……。
母　なぜ ……。
娘　可哀さうだつて ……。
母　………？
娘　色んなことをさせるのは勿體ないつて……。だから、あたし、うちで何んでも御用をしてるつて云つたの。さうしたら、うちの御用とは違ふつて云ふの……。
母　（首をふり）　さつぱりわからない……お前たちの話は……。
（沈默）
娘　あたし、そんなにいやぢやないの、あの人なら……。
母　まあ、お待ち……。もつと色んなことを云つて御覽。それから、どんな話をしたの。向うの家を出てからのことを詳しく云つて御覽。
娘　向うのお母さんが、あの人に、お前送つて行つてお上げつておつしやつたら、それや、變な顏をするの、泣きたいやうな笑ひたいやうな……。

母　（笑ふ）
娘　あたし、氣の毒でしやうがなかつたわ。でも、外へ出たら、そんなでもないの。もう日が暮れかゝつてたでせう……。停車場へ來るまでの、あの櫻の並木ね、花は散つてしまつてるの、だけど、そら、トンネルのやうな青葉ね、あの下を歩いてる時、何時までも、此處に、かうしてゐたいなあつて云ふのよ……。（間）をかしいつたらないの ……。
母　それから……。
娘　あたし、なんとも云はなかつたわ。（母の肩に縋るやうにして）　眞暗になりさうなんでせう。あたし、氣が氣ぢやないの。それに、あの人、ゆつくりゆつくり歩くの。……深呼吸なんかしながら……。
母　（息を吸ひ込む眞似をして）　……つてかい？
娘　えゝ。そのうち、たうとう、日が暮れちまつたわ。停車場の燈火が、まだ遠くに見えるの。それでも、いくらか、人通りはあつたわ…… 間）水溜や、石ころがあるたんびにさう云つて氣をつけてくれるの。子供だと思つてるのね。
母　………。
娘　だつて……。（間）切符を、どうしても人に買はせないのよ。（間）狡いの。それや ……。

母　それだけかい、途中の話は……。
娘　えゝ、それだけ……。あゝ、それから、あの人、帽子を被らずに來たの……。それに、あたしが、左樣ならつてお辭儀をしたら、帽子を取らうとするの、そしたら……ね、氣まりが惡かつたんでせう、走つて逃げてつたわ……。
母　逃げなくつたつていゝぢやないか。妙だね。
娘　さういふところがあるのよ、あの人……あたし、ちやんとわかるの。
母　しかし、もつと、その途中で、何か、から優しい、お前のよろこびさうなことを云ひさうなもんぢあないか。それより、先づ第一に、お前の心持ちを知らうとしさうなもんぢやないか。丸でそんな話には觸れようとしないんだね。
娘　（うなづく）
母　二人で、さうして、靜かな道を歩いてゐるのが、樂しいことは樂しさうなんだね。
娘　（知らないわといふやうなからだのゆすぶり方をする）
母　それぢや、なんだらう、どうかした拍子に、向うから、お前の……手を……握つたりなんか、それくらゐのことはしたんだらう。
娘　（頭をふる）

母　ほんとのことをお云ひよ、それで、すつかり向うの出方がわかるんだから……。お前をほんとに想つてゐるかどうかゞわかるんだから……。ね、手を握つたらう、一寸ぐらゐ……（聲が微かにふるへる）
娘　（力なく頭をふる）
母　母さんはそんなことを怒りはしないよ。却つて安心するんだから……。さ、お云ひ……。そんなら、手がさはつたことはあつたね……。
娘　（決心したやうにうなづくと、そのまゝ、顏を母の胸に押しあてる）
母　さうだらう、さうだらうと思つた。お前は、それで、なにかい……（語調がわれ知らず亂れる）さうされて、默つてゐたのかい……。ぢつと、されるまゝにしてたのかい……。
娘　（からだを母の方に摺り寄せる）
母　（それを邪慳に突きのけて）あゝ、馬鹿だよ、お前は……。
娘　（その聲をまともに浴びながら、母の膝に取り縋り、訴へるやうに）うそよ、母さん、今のは、うそ……。
（間。）
母　（娘の視線を避けながら）うそなもんか。
娘　（泣聲になり）いゝえ、うそなの……。あれはね……。

母　（急に、今度は、娘を抱くやうに膝の上に引寄せ）よし、よし、いゝんだよ……。母さんは、もう、なんにも云はない……。そんなつもりぢやなかつたの。なにをしたつていゝんだよ……ね、母さんは、とうから、お前をあの人に……お前たち二人を一緒にするつもりでゐたんだ……。（泣いてゐる）
娘　（母の胸に顔をうづめ）母さん……。
母　いゝとも、いゝとも、なんにも心配することはない……。さ、あつちへ行つて、顔をなほしておいで……。
娘　（咽び泣く）
　（間。）
母　母さんがわるかつた。ね、堪忍しておくれ……。どら、母さんが直してあげよう。（立ち上つて、鏡臺の前に行く）さ、こゝへ來て御覧。
娘　素直に立つて行くが、母の手より刷毛を受け取ると、今度は、いつまでも、それに白粉を含ませてゐる）
母　（しばらく娘のすることを見てゐたが、それからぷいと眼を反らすと、やゝ荒々しく座を起ち、丸窓をいつぱいに引開け、ぐつたりと片肱を窓によせて、そこへ坐る。勿論娘には背を向けてゐる）
娘　（此の間、ぢつと、鏡を見つめてゐる）
　（長い沈默。）

母　お前も、何か習つとくんだつたね……。あの人は三味線が好きだつて云つてたぢやないか。
娘　………。
母　ほんとに、どうして今迄、ぶらぶらしてたんだらう……。近頃は、お花にも行かないしさ……。
娘　………。
母　お針は嫌ひと……。（間）あゝあ、なんて蒸すんだらう。今日は……。（間）あの毛蟲……。
娘　（靜かに顔をなほしはじめる）
母　式は、この秋にするんだね……。それとも、向うぢや、すぐにつて云ふか知ら……。（間）秋がいゝよ　同じことなら……、それから、新婚旅行は、京都かい。（間）伊豆あたりの溫泉もいゝね……。熱海には、母さんも、娘時代に一度行つたことがある……お前のお祖父さんと……。まあ、處なんか何處だつていゝ……。あんまり騷騷しくないやうな……。だが、淋し過ぎても困るだらう、二人つきりぢやね……。（間）ほんとを云ふと、序に、西洋へでも行つて來るといゝんだけれどね……。あの人は、英語は駄目なのか知ら……。
娘　獨逸語よ。
母　え、あゝ、さうか、獨法だつたね……、獨逸だつていいさ……。（間）あたしも一緒に行かうか知ら……。違

れてつてくれるかい……。（間）憲二が學校を出て、一人でフランスへでも行く事になつたら、あたし、ついて行かうと思ふの、どうだらうね……。夫婦で洋行するのもいゝだらうけれど、親子同志は親子同志でまた、いゝぢやないか……。息子の留學に母親が附添つて行くなんてことは、人が聞いたつて、そんなに可笑しくはないだらう。可笑しくたつていゝさ、憲二さへ迷惑でなかつたら……。（間）あゝあ、母さんが、巴里へでかけるなんて、もうそんな世の中になつたのかね……。（娘の方を振り返る。娘は、相變らず鏡に向つて丹念に化粧をし直してゐる。そして、時々、手を休めて、自分の姿に見惚れる）お前、その襟の白粉はどう……その附け方は……。

娘　だつて、よく伸びないんですもの……。

母　濃すぎるのさ、第一……。

娘　うそよ、さうぢやないのよ……。（かう云ひながらなほす）

母　十九か……。しつかりしなくつちや……。（沈默）お前もこれから……母さんも、これからだ……（溜氣をつく）

娘　…………。

母　（淋しく）これで大丈夫といふのは、何時のことやら……。

娘　あたし……？

母　（力なく）さうさ……。（間）いけない、いけない、こんなことぢや……。何もかも、これからだのに……。

娘　（靜かに立ち上つて、そのまゝ母の後に佇む）

母　（背後に近づくものゝ氣配を感じて、それとなく、その方に不安な眼を向ける）

（沈默。）

娘　（思ひ出したやうに、袖で顏を蔽ふ。そして、いきなり母の傍に泣き伏す）

――幕――

屋上庭園（一幕）

並　木
その妻
三　輪
その妻

或るデパアトメントストアの屋上庭園。
九月半ばの午後。

二組の夫婦が一團になつて、雜談を交してゐる。一方は裕福な紳士令夫人タイプ、一方は、貧弱なサラリイマン夫婦を代表する男女である。

男同志は極めて親しげな樣子を見せてゐるに拘はらず、女同志は、互に打解け難い氣持を强ひて笑顏に包んでゐるといふ風が見える。

三輪　それで買物は濟んだのかい。
並木　買物……？　買物なんかどうだつていゝんだよ。
三輪　此の店へは、ちよいちよい來るの。
並木　ちよいちよい來る。しかし、滅多に買物はしない。此處は、君、屋上庭園でもなかつたら、僕達の來るところぢやないよ。
三輪　僕達も、あんまり此處へは來ないんだが、そら何時か此處から飛び降りて自殺した奴がゐたね、新聞に出てたらう、あれを思ひ出して、今日は一寸上つてみる氣になつたんだ。
並木　ああ、あれね……。
（一同は、今更の如く、下をのぞいて見る。）
三輪の妻　こつからぢや、たまりませんわね。
並木の妻　ほんとに……。
並木　萬引をして見つかつたからと云ふんだが、これは確に一條の活路だね。
三輪の妻　活路ですつて……。死ぬのが活路なの。
三輪　さうさ。しかし、僕はかういふ處へ始めて上つて見たが、なるほど、これは一寸變つた處だね。
並木　僕は此の頃、街を歩いてゐても、これと云つて眼を樂しませるやうなものにぶつからないが、此處へ上つて見ることだけは、殆ど日課のやうにしてゐる。
三輪　君らしい道樂だね。
並木　それやさうだ。
三輪　いや、さういふ意味ぢやなくさ……。ねえ、奥さん、今日は久し振りで並木君とも會つたんですし、奥さんと

は初めてお近附きになつたんだから、一つ、御一緒にゆつくり食事でもしようぢやありませんか。
三輪の妻　賛成ですわ。
三輪　お前が賛成なこたわかつとる。どうです。御差支はありますまい。
並木の妻　（夫の方を見ながら）でも……。
並木　さうさなあ。
三輪　いゝぢやないか、君……。
並木の妻　このなりぢや、あたくし……。
三輪の妻　あら、あたくしを御覽遊ばせ……。
三輪　着物なんかかまふもんですか。ぢや、どこか氣の張らない處へ御案内しますよ。
並木　しかし、僕達はなんだよ……。
三輪　まあ、まかしときたまい。（妻に向ひ）ぢや、お前買ひ物があるなら、さつさと濟ませて來ないか。おれはこゝで並木君と大に談じてるから……。
三輪の妻　（夫の耳に口を寄せて何か云ふ）
三輪　さうさ、あたり前さ。
並木　（妻に　お前も何か見るつて云つてたぢやないか。見て來いよ。
並木の妻　（夫の耳もとで何か囁く）
並木　かまふもんか、そんなこと……。
（女どもは互に顏を見合ひ、笑ひながら退場。）
三輪　なかなか可愛らしい細君ぢやないか。
並木　先手を打たれたか。君のこそ、逸物だね。どこかで見たことがあると思ふんだが、雜誌の口繪かな。
三輪　そんな代物ぢやない、子供はまだかい。
並木　短兵急だね。不幸にして二人目だよ。
三輪　目とは……？
並木　（にやにや笑つてゐる）
三輪　ああ、さうか、氣がつかなかつた。
並木　そんなことはどうでもいゝが、君は、いつまでも若いね。幸福かい。
三輪　幸福でないこともないが、さういふ君は、見かけほどでもないのかい。
並木　見かけはどうだか知らんが、一向パッとしないよ。
三輪　迂濶な話だが、君は、今……？
並木　住んでる處かい。
三輪　あゝ、それも聞きたいが、一體、今、何をしてるんだい。
並木　何つて、何も出來やしないよ。
三輪　學校を出てから、何か書いてるつていふ話は聞いてたが……。
並木　その頃は、あれでも、何かしてゐたよ。今ぢや君、

仕事つていふ名のつく仕事は、向うから逃げて行くんだ。
三輪　そんなこともあるまい。
（やゝ長い間）
並木　（突然、感慨めいた口調で）實際此處は面白い處だよ。あれを見たまへ――向うに見えるのが帝國ホテルだ。僕は、あすこの部屋に一度も寢たことはない。しかし、こゝへ上つて、あの屋根を見下ろすと、帝國ホテルがなんだといふ氣になる。あれを見たまへ。あれが日本銀行だ。あの中には、さぞ大きな金庫があることだらうが、そんな金庫なんか埃溜と同じことだ、さう思へる。これも、變な負け惜しみぢやない。つまり、此處へ上つて見ると、現實が現實として此の眼に映つて來ないんだね。一種のカリケチュアとして映るだけなんだ。
三輪　どうして、また、そんなことを云ひ出したんだい。
並木　それから、あの自動車を見たまへ。僕は、タクシイといふものに乘つたことは生れて二度しか無いんだが――一度は社長を東京驛へ送つて行つた時。家へ判を忘れたから取つて來いと云はれて、實用とか云ふ奴を呼んでくれた、その時と、もう一度は、これも社長の知合とかで、市會議員の候補に立つた男の選擧事務所へ手傳ひにやらされて、何をするのかと思つたら、自動車へ乘つてビラを撒いて歩けと云ふんだ、そん時と……。
三輪　へえ、君はそんなこともやつたのか。
並木　やつたさ。自動車、あれを見たまへ。僕は、自動車といふものは、大體に於て、われわれに泥をぶつかけて通る怪物だと思つてゐる。そいつが、こゝから見ると、如何にも無邪氣な玩具だ。不器用で、あわて者で、そのくせ、氣取屋で、神經質だ。これは誠に愛すべき動物ぢやないか。
三輪　君は、今、社長つて云つたが、どこか會社へでも勤めてゐるの。
並木　會社といふわけぢやないんだ。小さな本屋さ。それでも、店の名前に社といふ字をくつゝけてゐるもんだから、店のものだけは、社長だとか、社員だとか、まあさう云つてるわけなんだ。
三輪　本屋といふと、出版の方だね。
並木　まあさうだ。
三輪　そいつは面白いだらう。
並木　面白いもんか。それに、ここにかうして立つてゐると、自分の足の下に、一つの美しい世界が感じられる。勿論、それは、贅澤な織物や、高價な裝飾品が陳列されてあるといふ意味ぢやない。僕はね、下から上つて來る時に、いつでも、見當をつけて來るんだ。と云つただけではわかるまいが、今、僕が、かうして立つてゐる、丁度此の足の眞下に、五階を通じてだよ、一體、何々が陳

列してあると思ふ。

三輪　………。

並木　先づ階下には、羽根蒲團がある。二階には姿見がある。三階には一重帶……。四階には……よさう。だがね、それがみんな、僕等には手が出せないやうなものばかりだのに、それを眼の前に見てゐる時とは違つて、かうして、さういふものの上に自分が立つてゐると思ふとだね、なんとなく、花やかな氣持ちになるんだ。所有慾といふものから全く離れてだよ。可笑しいもんだね。僕んとこの奴も、やつぱり、さうらしいんだ。

三輪　それや、さうかも知れんね。それがつまり、浩然の氣といふんだよ。

並木　何の氣だか知らんが、こいつは便利なもんだよ。早い話が、その一重帶なんかでもさ、去年の夏からせがまれてゐるんだが、どうにもしやうがない。だが、女なんて馬鹿なものさ。見るだけでいいから、見ときませうつて云ふぢやないか。見るだけ見るんだね。さうして、此處へ上るんだ。一重帶の話はそれつきりさ。今年もどうやら、そいつを締めてみないうちに夏が過ぎさうだ。しかし、彼女は、朗らかな顏をして、よその女の着物なんか批評してるよ。

三輪　いいとこだね。

並木　何がいいとこだい。（前の方を顎で指し）あれ、誰だか知つてるかい、あの夫婦連れさ。

三輪　知らない。

並木　大村侯爵の息子さ、あの寫眞道樂で有名な……。

三輪　ああ、さうか……。あの細君だね……。

並木　シャンだらう。

三輪　シャンといふ點ぢや、君の細君に敵はないよ。

並木　慰めるのはよしてくれ。僕だつて、女の値打ぐらゐわかるよ。處で、君はまだお父さんのうちにゐるの。

三輪　いいや、別になつた。と云つても、近處は近處だがね。遊びに來ないか。

並木　ありがたう。今になつちや、どうも行きにくいね。むかし通りのつきあひは出來ないね。

三輪　そんなこと云ふ奴があるかい。こつちはちつとも變つてやしないぜ。

並木　こつちが變つてるから駄目だ。貧乏は昔からの貧乏だが、世の中へ出ると、自分のゐるところがはつきりわかつて來るね。

三輪　自分で世間を狹くしちやいけないよ。僕なんか、その點ぢや、隨分我武者羅を通してるんだ。

並木　さうかなあ。

（長い沈默。）

三輪　立ち入つたことを訊くやうだが、今ゐる處は、さきざき見込みがあるのかい、君の仕事としてさ。
並木　僕の仕事つて、今ぢや、君、食ふことが仕事だよ。それ以外に何もないよ。
三輪　でも、何か書いてることは書いてるんだらう。
並木　もう止めたよ。誰も讀んでくれないことがわかつてゐるのに、こつこつ下らないことを書いたつて始まらないぢやないか。一時は、あれでも、未來の文豪を夢見たさ。それに、おだてる奴なんかがゐたりしてね……。變なもんだよ、君たちにはわかるまいが、ああいふ社會には、明日にでも好運が廻つて來ると思つて、雨蛙が木の葉の上で雨を待つてゐるやうにだね、ぢつと一點を見つめてゐる手合がうぢようぢよしてゐるんだ。僕もその一人だつたさ。處が、その頃は、自分で力を落さない爲めに、せめて人のものでもいいところはわかるやうな顏をしてゐたいんだね。だから、さういふ人間同志は、お互に、對手をかつぎ上げるんだ。しかし、長い間には、自分も疲れる。向うも疲れる。會つても、自分達の問題には觸れたくなくなる。それでおしまひさ。何のことはない、店に竝んでゐるものを、飾窓に出てゐるものを、見るだけ見て來たと云ふやつさ。
三輪　それなら、僕だつて同じだよ。何一つ仕事らしい仕事はしてやしない。
並木　それとは、また、話が違ふよ。しかし、今ぢやもう、そんなことを悔んでなんかゐやしないよ。落ちついたんだからね。云はば、どん底さ、と云ひたいが、自分だけは、あべこべに高い處にゐるつもりなんだ。
三輪　………。
並木　それがね、いやに超然と構へてゐるわけぢやないよ。ただ、割合に、あくせくしないだけの覺悟がついてゐるといふまでさ。
三輪　つまり大悟徹底したわけか。
並木　大袈裟に云へばね。君はさつきから、僕の帽子を見てるが……。
三輪　うそつけ、そんなもの、見てやしないよ。
並木　見たつていいよ。――この帽子はなるほど古い。今年買つたんぢやない。だからつて、別に、これを被つてゐるのが氣恥かしいといふやうな見榮もなくなつてゐる。
三輪　そんなことは、當り前ぢやないか。君らしくもない辯解だね。君から、いろいろ打明け話を聽くのはうれしいが、そんな餘計な威張り方はして貰ひたくないね。
並木　威張るんぢやない。
三輪　威張るんでなけりや、なんだい。勿論、卑下をしてゐるんぢやあるまい。僕はね、並木君……。

並木　……君はよさうぢやないか。
三輪　………。
並木　並木と呼んでくれ、昔通り……
三輪　いやにこだはるなあ。ぢや、ねえ、並木、おれは久し振りで君に會つて、こんなことを云ふのはいやだが、君は、自分でも云つてる通り、すつかり人間が變つてるぞ。變つてるのはかまはないが、なんだつて、さう、おれに、見榮を張らなければならないんだ。貧乏を恥かしがる必要もないが、貧乏を吹聽して、獨りで力み返る必要がどこにある。貧乏を自慢にすることは、近頃流行するやうだが、默つてゐても貧乏なことぐらゐはわかるよ。
並木　（對手の顏を見上げる。眼が異樣に光る）
三輪　侮辱されたと思ふのか。おれは他人を侮辱して愉快になる程、まだ快樂に渇ゑてはゐないよ。云ふことがあるなら云つて見ろ。自然に遠ざかつて行つたのには、何か理由もあるだらうが、おれの方は、少くとも、最後まで、變らない友情を示したつもりだ。
並木　おい、そんなに大きな聲を出すな。
三輪　大きな聲を出すさ。君には、おれの心の聲が聞えないぢやないか。
並木　聞えたよ。
三輪　何が聞えた。ぢや、今日、おれたちと一緒に、夕飯を食ふか。
並木　食ふよ。（涙を溜めてゐる）
（長い沈默。）
三輪　金持は罪人だといふ君の主張は、今でも變るまいが、まさか、昔の友達を敵扱ひにするほど、突きつめた考へ方をするやうになつてるんぢやあるまい。（間）それにおれなんか、金持の部類にはいらないよ。
（長い沈默。）
三輪　どうしたい、そんなに悄氣ちや、駄目だよ。
並木　悄氣てやしないよ。
三輪　悄氣てもゐまいが、元氣がないぢやないか。さうさう、からだの方は、大丈夫なのか。
並木　ああ、その方は……。
三輪　それや、いいね。その點ぢや、おれの方が慘めだ。相變らず寢てばかりゐるよ。
並木　神經痛か。
三輪　それと、例の……。
並木　ああ……。まだいけないのか。
三輪　益よいけないよ。
並木　そんな風には見えないぜ。
三輪　それがいけないんだ。

並木　（間。）降りようか。
三輪　入れ違ひになると厄介だから、もう少し待たう。腰かけるか。（腰かけを探す）
並木　ねえ、君、久し振りで會つて、こんなこと頼むのは厚顔しいやうだが、都合がよかつたら二十圓ばかり貸してくれないか。
三輪　（一寸氣まづげに相手の顔を見るが、すぐに懐に手をやつて）ああ、いいとも。それくらゐならあるよ。（紙入れを出して、紙幣を抜き出し、並木に渡す）
並木　ありがたう。（そのまま袂にしまふ）
（重苦しい沈默。）
三輪　風が無くなつたね。
並木　氣を悪くしやしないかい。
三輪　君こそ、そんなことを苦にしてるんぢやないか。僕は今日君に會つたことをよろこんでゐるんだ。お互に昔通りものが言へるのはうれしいよ。
並木　少し興がさめやしないか。
三輪　そんなことを云ふと興がさめるよ。
並木　さうかなあ。やつぱり僕は駄目だね。（袂からさつきの紙幣を取り出し）君、折角だが、返すよ。こんなことしちやいかん、どうも……。

三輪　なにを云つてるんだ。君の方で都合のいい時返してくれればいいぢやないか。今日は何か買物があるんだらう。金が少し足らなくなつたんだらう。さういふことは僕だつてあるよ。運よく友達にでも會へばいいと思ふことがある。さういふ時には、なかなか會はないもんだ。處が、君は運がよかつた。ただ、それだけぢやないか。
並木　さういふ考へは、僕なんかには浮ばない。
三輪　まあ、いいから取つときたまへ。急にいる金ぢやないから、急いで返して貰はなくつてもいいよ。
並木　（苦笑しながら）實はね。家内に一重帶を買つてやらうと思ふんだが……。
三輪　（笑ひながら）君の細君は果報者だ。僕は今少し餘分な金があるんだが、君達の結婚祝ひといふと遲蒔きだから、今日舊交を温めた記念に、僕から君の細君に一つ贈物をさせて貰はう。その代り、今の金で、君から、僕の家内に何か買つてやつてくれ。
並木　御厚意は有難いが、それぢや、なほ、僕がつらい。餘計なことを云つてしまつて、どうも、納まりがつかなくなつたが、それだけは赦してくれ。今日は全く失敗した。近頃こんなに苦しい思ひをしたことはないよ。人間は惰力で活きてゐるものだとは思つてゐたのだが、反抗反抗で活きてゐる人間が、ばつたり手應へのない處へぶ

つかると、かうまで間誤つくものとは知らなかつた。さつきから話したことも、あれや、つまり、僕の反抗心が云はせた嘘八百だ。そんなことにも、氣がつかない君ぢやあるまいが、あんな大鉢を叩いて置いて、そのまま別れたんでは寢醒めが惡いからなあ。

三輪　まあ、さう、自分だけを責めなくつてもいいさ。人一倍自尊心の强さうな君に、金を貸せと云はせた僕にも、いくらか德があるんだ、ねえ、さう自惚れさせてくれよ。奴さんたちが歸つて來るまでに、その話をきめとかうぢやないか。

並木　いや、それだけは斷る。今日は斷る。これも取つて置いてくれ。なにもかも、やり直しだ。五年後にもう一度會ひ直さう。少しは人間ができてるかも知れん。

三輪　相變らず强情だなあ。それなら氣のすむやうにしたまへ。（金を受け取る）

（三輪の妻と並木の妻とが連れ立つて歸つて來る。）

三輪の妻　隨分かかつたでせう。氣に入つた柄がないの。奧さまにも見て頂いたんだけれど……まるで好みが違ふの。

並木　こいつは惡趣味ですからね。

三輪の妻　いいえ、さうぢやございませんの。そら、（夫の方をちらと見て）あたしは、どつちかつて云へば、粹好みでせう、自分で云ふのは可笑しいけれど――それに、奧さまは、お上品なお好みでいらつしやるから……。

並木の妻　あら、あたくし、そんな、お上品なんて……。

三輪　いや、どうもさうらしい。それで、やめたのかい。

三輪の妻　兎に角、きめたんですけれどね、あなたのお氣に召すかどうか……。一度見て下さるといいんだけれど……。いいのよ。わるかつたら、また取り換へるわ、うちで見て……ね。それより、御一緒に、一重帶を見たのよ。こちらの奧さまが御覽になりたいつておつしやつたから……。よくお似合になるのがあつたの。（並木の妻に向ひ）あれをどうしておきめにならなかつたんですの。

三輪　お前みたいに、獨りでおきめにならないんだよ。

三輪の妻　あら、だつて……。

三輪　どら、出掛けよう。君達は、もう用はないんだらう。それぢやと……（妻に）何處がいいかね。

並木　あ、僕達は、ちよつと寄るところがあるから、今日は失禮しよう。（三輪の妻に）折角ですが、此のつぎに……。

三輪の妻　まあ、そんなことおつしやらずに……。よろしいんでせう、奧さま……。

並木　今、思ひ出したんだ。弱つたなあ……。ほんとに、今日は許して下さい。

三輪　それぢや無理にお引止めしない方がいい。何れそのうち……。
並木の妻　（默つて會釋する）
三輪の妻　でも、殘念ですこと……。それではむさくるしいところですけれど、近々に是非……。あの、御一緒にですよ。
三輪　さよなら。
（三輪夫婦去る。）
並木の妻　どうなすつたの……。
並木　どうもしやしないよ。襦袢の袖、あつたの。
並木の妻　それや、あるわ。でも、困つたのよ、安いのを買はうとすると、傍から、三輪さんの奥さんが、こつちがいいつて、高いのを撰るんですもの……。
並木　…………。
並木の妻　あの人達、隨分あるらしいのねえ。
並木　……　……。
並木の妻　素敵な金紗を買つたわよ。
並木　金紗がなんだい。
並木の妻　始まつたわね。（間）どこへ寄るの、これから
並木　……
並木　……　……。
並木の妻　一重帶ね、今、ずつと値が下つてるんだけれど……どうかできないか知ら……。
並木　一重帶なんか締めてる奴は、殆どゐないぢやないか、三輪の細君だつて……。
並木の妻　さうよ、絽の丸帶よ。
並木　絽の丸帶がなんだい。
並木の妻　だから欲しいつて云ふやしないわよ。
並木　欲しいつて云つたつていいよ。
並木の妻　どうせ買へないからでせう。
並木　馬鹿。それを云はずにはをられないのか。一口つつしめば、一口だけ利口に見えるんだぞ。
並木の妻　（あつけに取られて夫の顏を見守る）
並木　あゝあ、たまにこんな處へ出て來ると餘計な奴に會ふわい。
並木の妻　餘計な奴つて……よささうな方ぢやないの。でも、あたしたちのゐない間に何かあつたんぢやない？　さう云へば、少し變だつたわよ、挨拶の調子が……。始めはもつと打ち解けた調子だつたのに……。
並木　そんなことはないよ。同じこつたよ。（間）今、何してるつて訊きやがつた。
並木の妻　なんて云つたの。
並木　本屋にゐるつて云つといた。
並木の妻　どこの本屋かつて訊きやしなかつた？

並木　訊かない。あいつは、そんなことに興味はないんだ。しかし、お前のことは訊いたぜ。

並木の妻　どんなこと?

並木　學校は何處だとかなんとか……。それに、氣味の惡いほど褒めてたぜ。

並木の妻　なんて?

並木　いろんなことさ。それはさうと、あいつ失敬な奴だよ。金がいるならいつでも云へつて云やがつた。

並木の妻　まあ……。でも察してるのね。

並木　久しぶりで會つて、そんなこと云ふ奴があるかい。馬鹿云へつて怒鳴つてやつた。

並木の妻　およしなさいよ、折角深切で云つてくれるのに……。だから食事を一緒につて云ふのも斷つたの?

並木　さうさ。(間)あいつに金を借りて、その金で一重帶を買はうか。

並木の妻　あなたにできる、それが……。

並木　できるさ、しようと思へば……。

並木の妻　うそばつかし……。

並木　どうしてさ。どうしてできない?

並木の妻　あなたに、そんなことまでさせたくないわ、いくらなんだつて……。

並木　(眞顏で)するよ、お前の爲めなら……。

並木の妻　(しんみり)さう云つて下さるだけで澤山。……(急に調子を變へて)ねえ、あなた、ほんとに無理なことはしないで頂戴ね。あたし、なんだか怖くなつたわ。

並木　……?

並木の妻　あなたが、あゝいふお友達にまで、そんなことの爲めに、肩身の狹い思ひをなさりやしないかと思ふと、あたし、ぢつとしてゐられないわ。

並木　だから、何も云ひ出しやしないよ、そんなことは……。ただ、向うが……。

並木の妻　ええ、それはわかつてるわ。だから、そんな時、きつぱりと、斷わつて頂戴……。氣を惡くさせないやうにね。(間)もう、これから、何か欲しいなんて決して云はないわ。

並木　それとこれとは話が違ふよ。都合がつけばいいぢやないか。

並木の妻　いいえ、だから、お友達とだけは、綺麗なおつき合ひをして頂戴ね。どんな場合でも卑下をしないですむやうな……。

並木　お前はそんなこと心配しないだつていいよ。

並木の妻　いいえ、心配よ、あたし……。ほんとに、今迄、氣がつかなかつたの、そのことだけは……。

並木　そのことつて……。

並木の妻　あなたも、何時までもぶらぶらしてないで、早く仕事をして頂戴ね。今度、お金がはひつても、一重帶なんか買はないで、少しでも貯金しませうね。

並木　可笑しいぜ、急にそんなこと云ひ出したりなんかして……。

並木の妻　（涙ぐんで）さうよ、きつと、何かわけがあるんだわ……。だつて、だつて、あなたは、だんだんいいお友達が減つてくぢやないの……（急に夫の胸に顏を埋めて泣く）

――幕――

驟雨（一幕）

朋　　子
讓
恒　　子
家 政 婦

六月の午後

洋風の客間を兼ねた書齋

朋子が割烹着を脱ぎながら、慌ただしくはひつて來る。その後から、家政婦が、何か云ひたさうにしてついて來る。

朋子　さうよ、あれはあれでいいの。（割烹着を家政婦に渡し、机の前に坐る）あと、ハンケチだけでせう。暇を見て、しといて頂戴。こがさないやうにね。ああ、それから……その前に一寸お使ひに行つて來てくれない。その八百屋に苺が出てるかどうか見て、若し、出てても良いのがなかつたら、驛の前まで行つてね、上等のを一箱取つて來て……。

家政婦　おいくらぐらゐのを……。

朋子　いくらでもいいことよ、良いのでさへあれや……。（ペンを取り上げ、引出をさがしながら）あたし一寸、端書を書くから、それも序に入れて來るのよ。さ、支度をして頂戴。（端書を書く）ええと……。

（家政婦去る。長い間。）

朋子　あ、芳澤さん……、今朝來た端書を此處へ一寸……。狀差に差してあるでせう、繪端書よ。

家政婦　（端書を持つて來る）これで御座いますか。

朋子　（見ずに受け取り）ええ、それ……。（見て）これぢやないの。今朝來たのがあるでせう。（笑ひながら）いやね、これは……。

（家政婦、これも笑ひながら去る。）

海岸の寫眞よ、蒲郡つて書いてある……

家政婦　（繪端書を見ながら現る）

朋子　（引つたくるやうに）どら……。ええ、これよ。（間）――「二人とも、大層氣に入り、四五日逗留の豫定……」か。

家政婦　は？

朋子　こつちのこと……。早く支度して頂戴。

（家政婦去る。）

朋子　（書きながら）「……それでは、今のうちゆつくり遊

んでお置きなさい。旦那様によろしく……」と。芳澤さん、さ、これを持つてつて……。まだなの、支度は……？あ、さうさう、お風呂を見といてね、行く前に……。もうお歸りになる時分だから……。

家政婦　（奥から）もうちやんと沸いてをります。

朋子　さう。（間）そいぢや、なにしてるの、あんた。

家政婦　一寸帶をし直してをりますんです。

朋子　帶なんか、いいぢやないの、いちいち……すぐそこなんだもの……。

（玄關の戸が開く音、朋子出て行く。間。——）

讓　（現れる。機械的に机の上の繪端書を取り上げ、それを讀む）

朋子　（續いて現れる）すぐお風呂になさいます？

讓　（返事をしない。そのまま、奥に去る）

朋子　（やや暗い表情。ぐつたりして椅子による。が、すぐに氣を取り直して起ち上る）

讓の聲　おい。

朋子　（默つて奥にはひる）

（長い間。）

（玄關で「御免なさい」といふ女の聲。續いて、朋子の「あら……」といふさも意外らしい叫び聲。）

朋子の聲　どうしたの……。どうして歸つて來たの。ひとり？（間）今朝見たわ。（間）ええ、四五日逗留するつていふから、まだなかなかだと思つてたのに……。（間）さう、まあお上んなさいよ。（間）うちぢや今歸つたとこ。（間）いいのよ、そんなこと……。

（朋子、續いて恒子現る。——恒子は、やや疲れてゐるらしい。）

朋子　どうかしたんぢやない。いやね、笑つてばかしゐて……。

恒子　（腰かけながら）まあ、一寸休まして頂戴。今着いたとこなの。

朋子　そいで……？

恒子　あの人？（意味ありげな微笑）今云ふから待つてて。（溜息）ほんとにお邪魔ぢやなくて……。

朋子　（訝かしげに）いや、あたし。そんなに笑つてばかしゐちや……。恒ちやん……。

恒子　せつかちね、姉さまは……。（かう云ふと、急に、姉の視線を避け、ハンケチを取り出す。眼に涙が溜つてゐる。それが、われながら可笑しいといふ風に、また笑はうとするが、もう我慢ができない。ハンケチを眼にあてると、いきなり肩をゆすつて泣く）

朋子　（途方に暮れて）可笑しなひとね……。どうしたつていふの。（妹の肩に手をかける）

恒子　…………。

朋子　泣いてたんぢや分らないぢやないの。あの人がどうかしたの。早くおつしやいよ。

恒子　御免なさい。姉さまの顔を見たら、つい悲しくなつたの。(間)　あたし、よつぽど默つてようかと思つたの。默つて、辛抱しようかと思つたの……。だけど、もう駄目……。あんまりなんですもの……。あたし、あたし、うちへ歸るわ。(間)　どうしても、いやなの。

朋子　どういやなの。

恒子　どうつて……何もかも。

(長い沈默。)

(姉は、うなだれた妹の横顔を、まじまじと見入つてゐる。)

朋子　喧嘩したんでせう。

恒子　いいえ、そんなことぢやないの。(間)　やつぱり、いけなかつたわ。

朋子　やつぱりいけないつて……前から何か……。

恒子　さうぢやないけど、そら、行儀が惡いつて云つてたでせう。

朋子　そんなこと……？

恒子　そればかりぢやないの。ええ、つまりさうだけど、それが、ただ行儀が惡いんぢやないの、あたし、つくづく愛想がつきたわ。

朋子　男つてみんなさうよ。

恒子　そら、何時かうちへ來た時、母さまの前で欠伸をしたつて、母さまがあとで怒つてたでせう。ああいふことが、のべつ幕なしなの。それや、欠伸なんか、あたしの前でしたつてなんとも思やしないけど、他人がゐる時に、そばではらはらするやうなことを平氣でするのよ。

朋子　どんなこと……。

恒子　一々云へないの、あんまりいろんなことで……。汽車へ乘つてからだつてさうだわ。いきなり、腰掛の上へ脚をのつけて、ぐうぐう眠るのよ。それが、發つた日からさうよ。

朋子　話もしないで……？

恒子　話なんかするもんですか。まるで何の爲めに旅行するんだかわかりやしないわ。みんなが變な顏して見てるの。さうでせう、ハンケチもかけないで、口をあいて眠つてるんですもの。

朋子　(笑ひをこらへて)　式やなんかで草臥れたんだわ。

恒子　そいぢや、あたしはどう……久しぶりで、あんな帶を締めてさ。

朋子　あなたは違ふわよ、女ぢやないの。

恒子　もう、姉さまも、さういふことを云ふやうになつて

らしやるのね。

朋子　………。

恒子　それから宿屋についてからでも、女中なんかにばかり話しかけて——常談を云つたり……それや變なの。御飯をたべる時なんて、あたし、お給仕してゐる女中に恥かしくつて……。だつて、云ふことが下司なの、——ネヱさん、東京だらう。どうも田舍の女(ひと)にしちや、様子がイキだと思つた——かうなの。女中の云ふことがいいわ。——旦那も東京ですか——だつて。さうすると、變な手つきをして頭を掻くの。——いや、いや、逆襲は恐れ入るなあ——つて。どうでせう、いやね。

朋子　恒ちやんも六ケ敷いわね。さういふことを云ふもんよ、男つて……相手次第ではね。

恒子　兄さまもおつしやつて……？

朋子　ええ……さあ、兄さまはどうだか……。

恒子　おつしやらないわよ。それからもつとひどいことがあるの。昨夜なの、それは……。——蒲郡つて、何縣？つて訊いたら——何縣だと思ふつて聞きかへすの。姉さま知つてらつしやる？　知らならわねえ。だから、いい加減に三重縣？つて、ただ云つてみたの。さうしたら、笑ひながら、——そいぢや、どの邊にあるか、日本の地圖を書いて、圓をつけて見ろつて云ふの。あたし、そんな女學校の試験みたいなこと、いやだつて云つてやつたの。さうしたら、紙と鉛筆とを出して、どうしても書けつてきかないの。しまひに、日本地圖も書けないのかつて、それや、しつつこく云ふの。だから、あんまり癪でせう。日本の地圖ぐらゐ書けますわつて、そら、よく書いたわね、あの通り書いてやつたの。さうすると、本州だけしか書かないうちに、——なんだ、それや胡瓜かつて……（笑ひながら泣き出す）

朋子　え？

恒子　胡瓜かつて云つたわよ。（また泣く）

朋子　（腹立たしさと、可笑さとを制しながら）　隨分、失禮ね。

恒子　あんな人のところへ、どうして嫁く氣になつたか知ら……。デリカシイつていふものがちつともないの。（間）朝、顔を洗ふ時、どういふ風にするか知つてて……（溜息）　それから、服を着る時……手を前後左右に振り廻すの……。洋服を着るなら、洋服の着方ぐらゐ覺えればいいのに、そのざまつたら、見てゐられないの。

朋子　さも憎らしさうね。さう云つたもんぢやないわ。變に氣取つてる男なんかよりは、さつぱりしてていいぢやないの。

恒子　處が、さつぱりなんかしてないの。なぜつて云へば、

その氣取らないところを氣取つてるわけなの。わかる？おれは氣取つてなんかゐないぞつていふところを見せるつもりなんでせう。それが、もう一種の氣取りだつていふことを知らずにゐるの。だから、すること云ふことに一々こだはりがあつて、そばにゐると、ぢれつたくなるの。ふんて云ひたくなるの。

朋子　さうか知ら……。

恒子　さうさう、式ん時だつてわかるわ。どう、あの、なんでもないやうな風のしかたは……。さもこんなことは面倒臭いつていふやうな樣子をして、そのくせ、あれで、固くなつてるのよ。ほら、よくしらばくれた顏をするぢやないの。あれが、てれかくしよ。――へえ、僕があの女と結婚するんですか。へえ、僕が此のお酒を飲むんですか。へえ、一緒に旅行をするんですか。まるでさういふ顏よ、あの顏は……。第一、停車場へ行くまで、行先を決めないなんて、あんまり人を馬鹿にしてるわ。母さんなんか、隨分氣を揉んでいらしつたわ。いくど母さんが訊いても、――さあ、まだ決めてありませんがね。まあ、行き當りばつたり、汽車の止つた處へ降りるんですな。どこつて別段見たい處があるわけぢやなし……。ハハハハハ……。かうなんでせう。母さまはむろんだけど、赤羽の伯父さまなんか、横を向いて苦い顏をしていらしつたわ。それも氣取りよ。無頓着振るのよ。却つて可笑しいのに……。

朋子　あたしも、それは覺えてる。さう云へば、變な人だと思つた。

恒子　それから、まだあるわ。東京驛で、みんな送つて來て下すつたでせう、あん時、姉さまが、汽車の中へ花束を持つて來て、二人に下すつたでせう。それを見て、なんて云つたか覺えてらつしやる。

朋子　（キッパリ）ええ。――これどうするんですかつて……。そして、――厄介だなあ、持ちものになつて……どうせすぐ萎れちまふんでせうつて……。

恒子　ね。わかるでせう、バツが惡いのを誤魔化さうと思つて、わざと素氣ないことを云ふのね。それが、氣が利いてればいいけれど、それだけの頭はなし、つい、人を氣惡くするやうなことを云つてしまふのね。

朋子　困つた人ね。しにくいわね。

恒子　輕蔑したくなるわ。可哀さうになるのが本當かも知れないけれど……。

朋子　さう云つちまつちや、また、なんだけれど……。

恒子　いいえ、いいのよ、姉さま、あたしはもう決心してるんだから……。

朋子　決心つて……？

恒子　だから、あたし、歸るのよ、うちへ……。

（長い沈默。）

朋子　それや、あなた、思ひ切りが早すぎてよ。そんなものぢやないわ。（間）男つていふものは……。

恒子　もう澤山、その御說敎なら……。男つていふ者はどうなの……。誰がさうきめたの。姉さまも、やつぱりさうなのね。ぢや、こんなこと、御相談するんぢやなかつたわ。

朋子　恒ちやん。まあ、もつと考へてみませうよ。それや、恒ちやんの想像してたやうなものぢやなかつたかも知れないけれど、今聞いた、ただそれだけの話なら、そんなに、あなたが思つてるほど、重大なことぢやなくつてよ。第一あの人が、あなたを愛してゐないつていふ證據にはならないぢやありませんか。

恒子　それがどうなの、愛されてゐるか、ゐないかは第二の問題よ。

朋子　え？

恒子　第一の問題は、愛されて幸福な相手かどうかつていふことだわ。

朋子　だつて、恒ちやん、それはもう……。

恒子　初めからわかつてたつて云ふんでせう。ええ、わかつてたわ。それが間違つてたらどうするの。間違つてなくつても、望んでゐたことが駄目だつたらどうするの。姉さまは幸福だから、あたしのことなんかおわかりにならないんだわ。（泣く）

（沈默。）

朋子　（キツとなり）何云ふの、恒ちやん。こんなことを、あたしの口から云ふのはいやだけれど、一番あなたのことを心配してるのはあたしよ。だからこそ、かうして、何處よりもあたしの處へ相談に來てくれたんでせう。だから、相談に乘るわよ。いろいろなことを云つたり云はれたりしてみませうよ。怒つちや駄目よ、すぐ、あなたのやうに……。

恒子　姉さま、あたし、どうしても、このまま歸るのはいやよ。これだけはと思つて、云はずにゐたけれど、姉さまがさうおつしやるなら、みんな云つてしまふわ。きつとびつくりなさるわ。あたしも、これだけは我慢ができないの。

朋子　一寸待つて頂戴。落ちついてものをおつしやいよ。云つてしまつたら、もう取り返しのつかないことがあるわよ。もちろん、姉さんに云つたからつて、それをまた誰に云ふつてわけぢやないけれど、あたしは、ただ、あなたが、自分の矜りを自分で傷けるやうなことをしないやうに、それだけのことを云つて置きたいの。あなたに、

今、冷靜になれつて云ふのは無理かも知れないけれど、あたしだけは、せめて、度を失はないでゐなくつちやならないでせう。あなたの爲めによ。さ、しつかりして頂戴。さうして、出來るだけ感情を交へないで、事實だけを聞かして頂戴。若し云つていいことなら……。

（長い沈默。）

恒子　さうおつしやられると、云へなくなるわ。

朋子　やつぱり、云はない方がいいんでせう。

恒子　だつて、それを云はずにゐれば、姉さまに、あたしの氣持がわかつて頂けないんですもの。それに……云つたつてかまはないわ。どうせ圓く治まることなんかありつこないんですもの……。それはね、かうなの。

朋子　（起ち上り）すぐ來るわ。あなた、お腹がすいてやしない。

恒子　いいえ。

朋子　でも、兎に角、あり合せでね。

恒子　いいのよ、姉さま……。あたし、これから、大久保へ歸るから……。

朋子　大久保へ……。どうして……。まあ、もう少しあたしの云ふことを聽いてから、ね。（出て去る）

（長い間。）

家政婦　（茶を運んで來る）いらつしやいませ。

恒子　（默つて會釋する）

家政婦　ちつとも存じませんで……（茶を進める）もうお歸りになつたんで御座いますか。

恒子　ええ。

（家政婦去る。）

讓　（現る）やあ、失敬。もう歸つて來たんですか。早いぢやありませんか。

朋子　（挨拶に困つて）東京が戀しくなつたもんですから……。

讓　新婚旅行なんてものも、これでだんだん形式的になつて行くんですね。まあ、云つてみれば、人がするからするつていふ程度の興味しかありませんね。しかし、それは、あとから感じることで、それをやつてる最中は、いささか夢中で、といふのが本當かも知れないな。

朋子　（現る）何を獨りで饒舌つてらつしやるの。あのね、あなた……（と、夫の耳に口を寄せるやうにして、小聲で何か云ふ）

讓　（快活に）さうか。それはお邪魔をした。ぢや、まあ、ごゆつくり……（起ち上る）しかし、飯は一緒に食ふんだらう。

朋子　ええ、むろんよ。

恒子　あら、兄さま、よろしいんですのに……。姉さま、

ほんとに、兄さま、いらしつてもかまはないことよ。その方が却つていいわ。兄さまにも、一緒に聞いて頂くわ。そして、御意見を伺はせて頂くわ。

朋子　さう……。あたしは、どうでもいいけれど……（二人の顔を見比べて）ぢや、兄さまにもゐて頂きませう。どうせ、いざつていふ場合には、相談に乘つて頂かなくつちやならないんだから……。

讓　（わざと落ち着きを見せて）何事です、一體、そんなに改まつて……。（腰をおろす）

朋子　どう、あらましのことを先に云つといたら……？

恒子　………。

朋子　でも、一寸、一口には云ひにくいわね。何んて云つたらいいか知ら……。

讓　簡單に云へばわかるよ。何か間違ひでも起つたのかい。

朋子　（恒子の方を見ながら）間違ひつていふわけぢやないんですけれど……。そいぢや、あたしから云ふわ。ね、いいでせう。かうなの。やつぱり、今度の問題なの。（間）恒子の話では、どうもうまく行かないらしいんですの。それが、取り立てて、かういふことがあつたつていふよりも、性格的に合はないんでせうね。第一、若い女の氣持が、ちつともわからない人らしいわね。

讓　それや、しかし、お前……。

朋子　ええ、それを、今、あたしも、恒子に云つたんですけれど……まさか、こんなでもあるまいと思つてたらしいのね。母さまなんかも、陰で心配してたんですし、あたしもそれとなく、恒子に注意したことがあつたくらゐですからね。でも、程度の問題になると、これやね、やつぱり、見損ひ……殊に、恒ちやんの前でなんだけど、さう悪い方にばかり取れないつていふ場合もあるし……。一概に恒子を責めるわけにも行かないと思ふんですけれど……。あたしにも幾分の責任はあると思つてゐるんですわ。

恒子　そんなことありませんわ。姉さまはなにも……。

朋子　まあ、聽いてらつしやい。それで、恒子は、今になつてこんなことを云ひ出すのは不嗜みのやうだけれど、將來のことを、もう一度考へ直してみたいつて云ふんですの。

讓　もつと具體的な說明を聽かうぢやないか。

恒子　でも……（姉の顏を見る）

朋子　いろんなことが重つてゐるらしいんですけれどね、それが……。さうね、どういふことから云つたらいいか知ら……。ねえ、恒ちやん、あなた、一番いやだと思つたことはなに？　一番辛抱ができないと思つたこと……。

恒子　それが、さつきお話しようと思つたことなの。それ

を云はなければわからないから、やつぱり云ふわ。（間）それが昨夜なの。（間）宿屋で、偶然、あの人のお友達つていふ人に遇つたのよ。今迄聞いたこともない人なの、それが、晩方から來て、一緒にお酒を飲み出したの。それだけなら、まだいいの。二人共醉拂つて、何時までも大きな聲で饒舌つてるんでせう。あたし、あんまりだと思つたから、お隣の方の御迷惑になりやしないかつて、さう云つてみたのよ。さうしたら、「餘計な心配をするなッ。」て怒鳴るの。さうして、いきなり、何處かへ行かうつて、二人で出て行つたきり、いつまで待つても歸つて來ないの。一晩中、まんじりともしないで、あたし、待つてたわ。夜が明けてからよ、變な顔して歸つて來るの。さうして、あたしの顔を見て、にやにや笑つてるの。

（長い沈默。）

（朋子は、これも眼に涙を溜めて夫の顔を見てゐる。）

恒子　それでも、あたし、しばらくは默つてゐたの。ただ、もう東京へ歸りませうつて、おとなしく云ひ出してみたのよ。すると、怒つたのかつて聞くの。いいえ、ただ、あたし、東京へ歸りたくなりました、なんなら、一人で歸していただきます、さう云つてやつたの。

（沈默。）

恒子　――歸りたけれや歸らう、しかし、あんなことはなんでもないんだよ。つき合ひなんだからねえつて。さも、あたり前のやうに云ふの。あたしは、あの人がどんなにあやまつたつて、これぱかりは免せないと思つてゐるんでせう。そこへもつて來て、あんまりな云ひ草だから、――あなたは、あたくしに恥かしいとはお思ひになりませんかつて、思ひきつて云つたの。（間）さうすると、おれは何も後ろ暗いことをした覺えはない。それをお前が疑ふのは、お前の勝手だ、かうなの。だから、あたしは、――いいえ、疑ふ疑はないぢやありません。ああいふなさり方は、あたくしを侮辱なさるばかりでなく、あなた御自身を侮辱なさるものですつて、まあ、さうむづかしくは云はなかつたけれど、さういふ意味のことを云つたつもりなの。そん時は、もう、聲が出なかつたかもしれないわ。（間）だつて、胸が一杯なんですもの。

（長い沈默。）

朋子　それだけ……云ふことは。

恒子　（うなづく）

朋子　あなた、どうお考へになつて……？

讓　少し亂暴だね。

朋子　少しどころぢやありませんわ。それから、あの人はどうしたの。

恒子　どうもしないわ。それから、ひと口も口を利かない

の。東京驛へ着くまで、二人とも、默つたまゝよ……。ただ、うちへ寄つて來るつて、さう云つて別れたきり……。

朋子　ぢや、あなたが、ここへ來たことは知らないのね。

恒子　どうせ察してるでせう。

讓　しかしね、恒ちやん、男つて云ふものは、……。

朋子　そのお說敎なら、もう澤山……。

讓　どうして……。

朋子　あたしが、さつき、恒子から云はれたんですの。なるほど、さういふことがあつたのでは、男つて云ふものはぐらゐぢや承知ができない筈ね。（間）でも、まあ、兄さまの御意見を伺はうぢやありませんか。

讓　（少し固くなつて）さう開き直られても困るが、僕は、何も、男の辯護をするんぢやない。しかし、しかしだね、さういふ問題は、もう少し、動機から穿鑿してかからないと、表面に現れた事實だけでは、あんまり嚴しい批評はできないものなんだ。

朋子　だつて、あなた……。

讓　まあ、待て。それでだね、僕が、一つ、先生に代つて、云ひ開きをしてみようか。（間）――實はだね、あの時はだ、その友達に會つてさ、やあ、お榮しみとかなんとか云はれてだね、少しテレ氣味になつてゐたんだ。友達に會つても、ろくに話しもしないで、始終細君のそばかりにくつついてゐたなどと、あの男のことだから、みんなに云ひふらさないものでもない。少し露骨だが、まあ、夜なんかでもだね、早くから二人つきりになりたがつてなどと、どうせ惡口を云ふに違ひないとね。それも少しいまいましい。よし、やつにはさつぱりしたところを見せてやらう。それには、晩飯でも一緒にゆつくり食つて、酒でも飲んで……細君ばかりに興味をもつてゐるわけぢやない、といふところを見せる爲めには……。

恒子　（何か云はうとする）

讓　まあ、お聽きなさい。そこは頗る細君を信用し、また細君の信頼を利用して、どんどん事を運んだ。始めてみると、細君は、あまり御機嫌がよくない。そこで、涙を呑んでですね、細君に一喝を食はせた。えらいぞ！と友達の眼は叫んだ。あたり前よ。と鼻をうごめかしながら、實は眼つきで細君に詫びたのだが、一向通じない。

朋子　およしになつたら、そんな常談口は……。

讓　常談は云つてやしない。ねえ、恒ちやん、僕の話は、決して不眞面目ぢやないでせう。調子でものを判斷しちやいかんよ。どうせ理窟で解決のつく問題ぢやないんだ。早く云へば、その時の氣分がわかればいいんだ。さうでせう、恒ちやん。

恒子 （うつむいたままでゐる）

讓 愚図愚図してゐると、九仞の功を一簣にかく憚れがある。これは一層、此場を立ち退いた方が安全だ。なに、それも後でわかる話だ。よく話せばわかる。話さないでも、考へればわかつてくれる筈だ。聰明な彼女のことだから……。そこで、大に前後不覺を裝つて、細君の前から姿を消したんです。もうそのくらゐでいい筈なんだが、相手の男が、どうもうるさい男で、なんだ、もう歸るのか、そんなに寂しいのか、とかなんとか云ひ出すので、どうせここまで來たならと、惡く度胸を据ゑてしまつたんですね。さて、翌朝、友達をやうやく納得させて、やれやれと云ふ譯で、細君のそばに飛んで歸ると、案じた通り、ぽつねんと、彼女は、眼をはらして待つてゐる。その時、西洋の男なら、――おお、わが愛する妻よ、いとしき者よ、さぞびつくりしただらう、悲しかつただらう、腹が立つただらう。わたしがお前を大事にしてゐるといふ證據には……などと、いろいろ優しさうな言葉を捜すんですが、日本の男は、それだけの心持ちを、ただその、なんでしたつけ……あ、そのにやにやで現し得るんです。西洋の女なら、又そこで――お前さんはどんなにわたしを悲しませたでせう。もうこれから、あんなことをしてはなりません。若しまた、これが最後でなかつたら、わたしは、どんな男のところへ走つて行くかわかりませんよ、てなことを云つて、亭主を脅迫する處ですが、日本の女は、そこは心得たもので、顔を襟へうづめたまま、默つて、疊のへりを見つめてゐる。それが、どれほど亭主を恥ぢ入らせることでせう。口を開いたところで、まあ、東京へ歸りませうぐらゐな、極めて婉曲なね……。

朋子 あなたは、今日はよくそんなにお饒舌りがおできになるのね。もういい加減になさらない？ たいがい解りましたわ。ねえ、恒ちやん、兄さまの、その先はもう伺はなくたつて、わかるわね。

恒子 （うなづく）

讓 どうわかつたの。そこで切られては皮肉のやうに聞えるが、さうぢやないんだよ。僕の云はうとしてることはですね。つまり、あそこまでは、無事なんだ。問題はない。面倒になつたのは、ただその先へ行つてからだ。――怒つたの。いいえ……云々からです。しかしながら、それもですね、僕の解釋に從へば、ただ、一時の、感情のもつれと云ふか、云はばお互にすね合つてゐるだけの話ですな。

朋子 （ムキになり） 今おつしやつたことは、あなた、ほんたうにさう考へていらつしやることなの。

讓　と云ふと、どういふことになるかね。僕は、さつきお前から、ぢやない、恒ちやんから聞いた話に基いてだね、最も常識的な考へ方をしてみたまでだ。それでだね、若し恒ちやんが、その時の事情やなにかを綜合してみてだ、今僕が云つたやうなわけに違ひないと思へばだね、それはそれで、大した問題にしなくつてもいいぢやないか。ただ、どういふ風にして、これから仲直りをするかといふ問題が殘つてゐるわけだが……それは、至極平凡な問題だ。

朋子　だからそんなことを御相談してゐるんぢやありませんわ。恒ちやん、あなた、どう思ふ、今のお話……。

恒子　（遠慮深く）姉さま、あたし、思つたことを云つていいこと？

朋子　ええ、よう御座んすとも……（さう云つて夫の方を見る）

讓　僕には遠慮はいりませんよ。云ひ給へ、しかし、腹がすいて來たな。

朋子　御飯はもういいんですけど、一寸、まあ、切りをつけてからにしませうね。その方がよくはありません？

讓　よからう。さ、恒ちやんは、どういふの……。

恒子　今のお話ね、あれが男の方に取つては、立派な……云ひぬけかも知れませんけれど、あたしたち女、といふと大袈裟ね、あたしだけの問題にしてもよう御座んすわ。あたしにしてみれば、それはちつとも、ありがたいことぢやありませんわ。男の、さういふ見榮は――女を踏みつけにして平氣でゐるといふ誇りなんかは、どつちみち、尊敬の出來る習慣ぢやないと思ひますの。

朋子　それやさうね。

恒子　ですから、あたし、やつぱり、決心をしますわ。

讓　決心はまあ、もつと後でもできますよ。ぢや、どういふ理由があるにしても、それは免されないつていふわけですね。

恒子　免す免さないぢやありませんわ。生活態度の違ひなんですもの……。

朋子　さうね、全く……。

恒子　それが、そのことだけに現はれてゐるんぢやないんですもの、その違ひが……。すること、なすこと、一一、あたしには見てゐられないんですもの……。

讓　それは、何時からです。

恒子　その日からですわ、式を擧げてから、……。

讓　急にですか。

恒子　急に目立つて來ましたわ。

朋子　それは、向うの態度が急に變つたといふよりも、恒ちやん、あなたの氣持ちに、その時から、ある句切りが

できたからぢやないの。さういふことはあつてよ。さあ、これからこの人と一緒に新しい生活をはじめるんだ、さう思ふと、その人を、また新しい眼で見直すつていふ風になるんぢやなくつて。その時、はじめて、夫としての、いろいろな細かい心づかひなんかが、一一、自分の氣持を明るくしたり、暗くしたりするんだと思ふわ。それは、まあ、あたしの經驗……(と云ひながら、夫の方に輕く笑ひかける)

讓　(しきりに、うなづいて見せる。甚だ嚴肅な顏をしてゐる)

恒子　それもあるでせうね。

讓　それは、しかし、お互ひだよ。男の方から云つても、それと同じことが云へるんだ。それや、女ほど、そのことばかり氣にしてゐないだらうけれどね……。結婚してみると、やつぱりさうだつたのかと思ふことや、こんなだとは思はなかつたと感じることが、男の眼にだつて、ざらに映るんだ。

朋子　(一寸テレて)　つまり幻滅ね。でも、女の方は、なんと云つても、愼み深いし……。

讓　どうだか……。

朋子　男の生活に自分を從はせるといふ努力だけは……。

讓　それやするさ　表面だけはね……。

朋子　いいえ、その爲めに、いろいろな犧牲まで拂つてゐます。

讓　どんな犧牲……。

朋子　夫の趣味に合はなければ、自分の趣味も犧牲にしてゐます。

讓　音樂のことを云ふんだらう。

朋子　いいえ、それぱかりぢやありません。

讓　そればかりでなけれや、なんだ。ああ、さうか、あのことを云ふのか。(笑ひたさうな、皮肉な眼つきをして天井を見上げる)

朋子　なんですの。なんのことですの。

讓　人に訊く奴があるか。

朋子　(笑ひながら)　あれは、昔のことですわ。兎に角、あたしにさういふことをおつしやる資格は、あなたにはありませんわ。恒子の前で、あんまり變なことをおつしやらないで下さい。

恒子　姉さま……。

朋子　いいのよ、兄さまは、すぐあれなの、誰の前でも……。

讓　(笑ひながら)　ぢや、恒ちやんの旦那さんとおんなじだ?

恒子　うそよ、兄さまは好い方よ。第一、新婚旅行で、姉

さまの寫眞を八十枚もお取りになつた方ですもの……。

讓　よく覺えてるなあ。恒ちやんの旦那さんは取らなかつたかい。

恒子　寫眞機なんて、洒落たものを持つてるもんですか。ステッキだつて持つてやしませんわ。

朋子　あら、ステッキを持つて歩かないの。ぢや、何を持つて歩くの……？　蝙蝠傘……？

恒子　それと、鞄よ。兩手で、大きな鞄を提げて歩くの。赤帽なんかに持たせないの。だつて、自分で持てるつていふんですもの……。

讓　力は強いんだね。

恒子　（曖昧に）ええ。汽車から降りる時なんか、人の荷物までおろしてやるのよ。

朋子　さういふ處は、なかなか深切ぢやないの。

恒子　それでゐて、あたしが乘つたり降りたりする時は、手も貸してくれないの。自分一人、どんどん先へ行つちまふの。

朋子　東京驛から、ずつと眠り通しなんですつて……。

讓　だれ？

朋子　あの人がですよ。恒子なんかにはかまはずに、グウグウ、高鼾をかいてるんですつて……。口をあけて……。

讓　鼻が惡いんぢやない。

朋子　行儀が惡いんですよ。宿屋なんかにゐても、ずゐぶん、そばでハラハラするやうなことがあるんですつて……。この人の前で、女中に常談を云ふことなんか平氣らしいのね。御飯のたべ方だつて、それや下品なんですつて。まるで紳士らしいところがないつて云ふの。（夫の顏を見つめる）

讓　そんなことは、まあいいさ。（妻の視線を避け）別に大したことぢやない。

朋子　一番見てていやなのは、何でも、わざとつまらなさうな顏をすることなんですつて……。いくら景色がよくつても、景色がいいつていふではなし、何か食べれば、きつと不味さうにして食べるし、お土産を買ふつて云へば、荷物になるつて變な顏をするし、それや張合がないらしいのね。

讓　（自分のことを云つてゐるのではないかといふやうな、くすぐつたい微笑）

朋子　その上、不精なんですつて……。お湯から上つても、髮は解かず……（夫の櫛をあててない髮を見上げ）爪がのびたらのびたまま……（讓、それとなく、自分の爪を見る）少し散歩しませうつて云へば、海なら此處に寢ころんでたつて見える、散歩なんて草臥れるばかりだ、かうなんですつて……。

讓　（いよいよ、自分に思ひ當ることがあるらしく、小鼻をふくらませて、恒子の方を見る）

恒子　（これはまた、姉の驚くべき想像力にやや不審を抱くと同時に、いくらか、尊敬をさへ拂ひたい氣持になる）

朋子　（益々雄辯に）そのくせ、つまらないところで威張つて見せるのね……。蒲郡つて何縣だつて訊くから、そんなわかりきつたことと思つて、返事をせずにゐたんですつて……。さうしたら、いい氣になつて、日本地圖を書いて、何處の處か圓をつけて見ろつて、學校の先生みたいなことを云ふんですつて……。出來ないんだと思つて、あんまりしつッこく云ふから、さつさと日本地圖を書いてやつたんですつて……。さうしたら、本州だけしか書いてないのに、なんだ、それや茄子かつて……。

恒子　胡瓜よ、姉さま。

朋子　さうさう。胡瓜かつて訊くんですつて……。

讓　なるほどね。（笑ふ）

朋子　隨分失禮ね。（間）それやこれや、ちつとも新婚らしい氣持になれないんでせう、あんまり殺風景で……。はじめからそれぢや、少し可哀さうね。

讓　それで、お前は、どう思ふんだい。恒ちやんに贊成なのか。（間）さう簡單には行くまい。（間）第一、お前だつたらどうする。

朋子　恒子とあたしとは違ひますよ。自分の立場からでは判斷できませんわ。恒子は、あたしなんかよりは理想も高いんですし……。

恒子　そんなことはありませんわ。でも、こんなことを御相談するつていふのが間違つてゐるのかもしれませんわね。自分では迷つてなんかゐないつもりなんですけれど、あとで、なぜ一言あたしたちの耳に入れなかつたつて、さうおつしやられるにきまつてると思つたもんですから、兎に角、お話ししてみたんですの。でも、いろいろ參考になりましたわ。

朋子　ぢや、やつぱり別れるつもり。

恒子　ええ。

讓　しかし、恒ちやん、それ以上の幸福が、先に待つてゐると思つたら間違ひだよ。もう一度結婚するやうなことがあるとしてだね、その結婚が、より不幸な結婚かもしれないと云ふことだけは考へて置く必要があるね。そんな結婚ならしないと云ふかもしれないが、結婚といふものは、今度でもわかる通り、實際してみないとわからないものだ。さうでせう。尤も、あてにならない幸福を探り當てるために、自分の運命を切り開いて行く決心なら別だ。倒れては起き、倒れては起き、さうして、たうとう行き着く處へ行きつかないで力が盡きる、さういふ生

活をすら意義のある生活だと思へば、これや、また別だ。ね。理想的の夫を見つけ出すまで、つぎつぎと、男から男にうつつて行くつていふやうなことは、これやできないでせう。果して、恒ちやんが、これならと思ふやうな男に出會ふチヤンスが、確實にありますか、あるとは云へませんね。さうすると、若しチヤンスが無い場合にどうするか、そのことも一應かんがへて置かなければなりませんね。離婚と云ふ問題は、これやなかなかむづかしい。(間)だつて、やつぱり離婚でせう、結婚してるんだから……。

朋子　さうね。たつた一週間やそこらだけれど……。

讓　それは、一緒にゐる期間が短かければ、それだけ、まあ、損失は少いわけです。しかし、一番大事なものは失つてゐるんだ。

朋子　(痛ましげに恒子の方を見る)

讓　月並な議論だけれど、普通の貞操觀念に從へば、あんたはもう、處女として夫を選擇する資格はないんですからね。それで、假令、やや理想的な再婚ができたとしてもです、新しい夫婦關係は、全く純粹なもんぢやない。何か、こだはりがあるに違ひない。二人が愛し合へば愛し合ふだけ、そのこだはりが目立つて來るものなんです。さういふ關係を、それや、相方の努力によつて、非常に美しいものにすることもできる。しかし、それは先づ例外だ、と云つていいですね。

恒子　あたくし、別に再婚しようとも思つてゐませんし、今別れれば、明日から幸福に生活ができるとも思つてゐませんけれど、いやいやながら、ああいふ人と一緒にゐるといふことが、全く無意味に思へてならないんですの。さういふ夫を選んだ輕卒さは、別の方法で罰せられてもいいと思ふんですの。例へば、一生獨身で暮すといふやうなことなら、甘んじて忍べるだらうと思ひますわ。それだけの覺悟があるなら、今ひと思ひに別れてしまつた方が、却つて自分に忠實ぢやないかと思ふんですけれど……。

讓　自分にだけ忠實でも仕方がないでせう。

朋子　さうよ。自分のことだけ考へてちや駄目よ。

恒子　ぢや、誰のことを考へるの。

朋子　みんなのこと……。第一に、母さまのことよ。どんなに心配なさるか知れないわ。

讓　いや、それより第一に、旦那さんのこと考へてみようぢやありませんか。あなたは、先生を取り返しのつかない不幸に陷れるかもわからないんですよ。さういふ時はどうします。平氣でをられますか。向うはどうなつてもかまはないんですか。

恒子　そんなことおつしやつたつて、兄さま、あの人は、あたくしのことを考へてはくれないんですもの……。それよりも、二人の幸福を、平氣で蹂み躙つてゐるんですもの……。二人の生活を樂しいものにするつていふ希望が、あの人のどこにも現れてゐないんですもの……。さうしてみれば、あたくしの方ばかり、ああもしよう、かうもしよう、つて骨を折つてみても無駄ぢやありません？

讓　無駄かどうか、まだわかりませんよ、一週間やそこらぢや……。

恒子　（涙聲で）兄さまは、飽くまでも、あたくしに、忍從生活をおすすめになるのね。二人が力をあはせてすべきことを、あたくし一人にしろとおつしやるのね。姉さま、あたくしはいやよ、それは……（涙を拭く）

（沈默。）

それや、向うにする意志はあつても、力が足らなくて、それができないなら、一人でやつてみますわ。どこまでもやつてみますわ。しかし、する力があつて、しないのなら……する意志がないのなら、あたし、どうしても、そんな元氣は出ませんわ……。さうする興味もありませんわ。いやです。いやです、死んでもいやです……（聲を忍んで泣く）

朋子　（貰ひ泣きをしながら、聲だけは快活に）しつかりなさいよ、泣いてなんかゐる時ぢやなくてよ。困るわね、かういふのは。……別段、あなたを不幸にしようと思つてるわけぢや、勿論ないでせうし、どうかすると、自分はあたり前のつもりでやつてることが、あなたの氣に入らない……まあ、それや、あなただけでなく、どんな女の氣に入る筈もないでせうけれどね――氣に入らないばかりでなく、それが、あなたの生活まで暗くするつてんでせう。ありさうなことね。だけど、向うにわる氣はないとすれば、どうでせう、ぼつぼつ、氣長に、直してみることはできないか知ら、……。

恒子　性格だから駄目よ……。

朋子　さうね、ただ無作法つていふのと違ふんだから……。

讓　やつぱり程度の問題だね。男つていふものは、多少、さういふ缺點をもつてゐるよ、女から見ればね。性格とかなんとか云つたところで、結局、習慣さ。無責任なことは云へないが、恒ちやんが若し、男の我儘を許さないといふ主義で行くなら、男の從屬物たる地位を潔く棄てることだ。さうして、文字通り愛し合ふ爲めには、文字通り對當の能力を示すべきです。

朋子　對當の能力つて云ひますと、經濟的に獨立することをおつしやるんでせう。

讓　經濟的とは限りません、例へば僕が學校の教師をする。

（妻を見返り） こいつが商店の事務員になる。

（朋子と恒子とは顏を見合はせる。）

朋子　（心外らしく） こいつとはなに……？

讓　親密な關係をあらはす呼び方だよ。併し、それで決して、女が獨立してゐるとは云へません。こいつは、何かつていふと、僕の處へ來て、ねえ、あなた、どうしませう……。

朋子　うそばつかし……。

讓　うそなもんか。ねえ、これぢや對當の能力とは云へますまい。

朋子　でも、お互にさういふ風にすればいいんですわ。どんなことでも相談し合つて……。

讓　――ねえ、あなた、どうしませう……。

朋子　もう澤山ですよ。

讓　うるさい話ですな。どうも……。恒子さん、兎に角、今日はお歸んなさい、旦那さんのそばへ……。さうして、知らん顏をして芝居をおねだりなさい。僕達もお伴をしますつて……。

朋子　（陽氣に） それがいいわ。 （しんみり） ね、さうなさい。

恒子　（その氣持に乘りかねて、何か遠くのものを見つめてゐる）

讓　（靜かに立ち上り） 僕は、一寸、食事までに、頭を直して來ます。序に爪も剪つて來ます。マダム・ツネコ・サイトウの陪食を仰せつかつてゐるんだから……。

恒子　（姉の顏をちらと見て、輕く笑ひかけるが急に眞顏になり） 姉さま、あたし、今日は歸して頂くわ。折角ですけれど、なんだか落ちつかなくて……。

朋子　歸るつて、どつちへ……？

恒子　（低く） 大久保……。

朋子　（これも低く） やつぱり……。

（長い沈默。）

恒子　ぢや、兄さま （起ち上り） お免遊ばせ。つまらない事をお耳に入れて、ほんとに……。

讓　もつとよく考へて御覽なさい。（間に） お前、なんなら、送つて行かないか。

朋子　ええ。ぢや、どう、恒ちやん、今から向うへ行つたつて、どうせ……。

恒子　ええ、でもいいのよ、心配しないで頂戴……。ぢや、さよなら……。またうかがはせて頂くわ、明日にでも……。

朋子　さう。でも、一寸送つて行くから待つてて頂戴。

恒子　いいのよ、姉さま、ほんとに……大丈夫よ……。

（一同が座を起つた時、驟雨沛然として到る。）

（三人は、無言のまま、窓越しに外を見つめる。）

朋子　（恒子。大きな溜息をつく。）なんていふお天氣でせう。

讓　すぐ止むだらう。もう少し休んでいらつしやい。

（長い沈默。）

——幕——

村で一番の栗の木（五　場）

亮　太　郎
あ　や　子
その他無言の人物數人

第　一　場

山間の小驛――待合室。
眞夏の拂曉。

發車の直後といふ氣配。

二三の旅客に交つて、都會のものらしい夫婦連れが、改札口の方から現れる。一隅を選んでそこに手荷物を置き、汗を拭ひ、左右を顧み、やがて、女が先に、男がそれに續いて腰を下ろす。

他の旅客は、待合室を通り過ぎるだけである。

男は出來合ひらしい白の洋服、女は現代風の可なり整つた身じまひ――手荷物は、服裝の割に野暮な信玄袋と行李鞄、それに、中型のシユーツケース。

亮太郎　疲れたらう。

あや子　やつぱり眠れなかつたわ。どつかに顏洗ふところないか知ら……。

亮太郎　朝飯を食へば、前の宿屋で洗へるけれど……まだ早すぎるだらう。それとも輕便を一つ待つて、六時のに乘つたつていいや。

あや子　六時のだと、何時に着くの。

亮太郎　七、八、九、まあ、九時だね。

あや子　それでもいいわね。折角買つたお辨當が無駄になるけど……。

亮太郎　お土産に丁度いいよ。

あや子　お辨當のお土産つて、あるか知ら……。（間）あたし、さうする。

亮太郎　待てよ、一寸、見て來よう、もう起きてるかどうか。（出て行く）

あや子　（待つてゐる間、信玄袋の上に兩腕を托し、それに額を當ててゐる）

亮太郎　（首を振りながら入つて來る）駄目。駄目だ。あと一時間かかるつて……。それぢや六時のに間に合はない。

あや子　その次は何時？

亮太郎　（時間表を見ながら）六時の次が、七時三十分……その次が九時三十分……。

あや子　ぢやいいわ。まだおなかはすいてないし、それに、顔なんかどうだつていいんでせう。見る人なんかゐやしないわね。

亮太郎　見る人はゐるよ。みんな見るよ。それこそ、通る奴通る奴、みんな振り返つて見るよ。君のやうな女は、開闢以來、あの村に現れた例しはないんだから……。

あや子　いやな方……でも、お化粧なんか氣をつけて見る人はないでせう。これでいいのよ。

亮太郎　でも氣持がわるかないかい。

あや子　いいの、面倒臭いわ。

亮太郎　そんならいいさ。輕便一時間半、馬車一時間、谷を下り、坂を上ること二十分、橋を渡ること二度、梯子段十七段、門から玄關までざつと十間、廊下二十歩、それでやつと座敷へ通ると、おやぢとお袋の口上が短く見積つて滔々十五分、着物を着替へて風呂へはひり、昨夜は寢てないからと云つて一休みするまで、なかなか暇がかかるぜ。

あや子　いくらなんだつて、着く早々寢られやしないわ。お母さんは優しい方？

亮太郎　だから不斷さう云つてるぢやないか――お袋は、僕の云ふことならなんでも聽く。恐らくお嫁さんにも同様だらう。うちには女の子がゐないから、きつと珍しがるよ。甘えてやり給へ。

あや子　甘えられるお母さんだといゝわね。(間) ねむいのよ、あたし……。(また信玄袋の上に突つ伏す)

亮太郎　寢てろよ。まだ三十分ばかりある。(間) 恐ろしい霧だ。

(間。)

あや子　あれ　霧なの。さうだわ、變ね、あたし、さつきから、なぜ煙みたいなものが一杯あるのかと思つてたの。やつぱり氣候のせゐね。

亮太郎　氣候のせゐさ。海拔二千九百尺、これからまだ登りになるんだ。君は白樺と云ふ木を見たことはないだらう。それから、落葉松、えぞ松と云ふやつ……。(間) 眠れるかい。

あや子　ええ。

亮太郎　話はやめようか。

あや子　いいのよ。聽きながら眠るから……。

亮太郎　洒落たこと云つてらあ……。君に、栗の木のこと話したか知ら……。

あや子　なに？

亮太郎　栗の木さ……。屋敷にある大きな栗の木さ。

あや子　ええ。

亮太郎　話したかい。

あや子　ええ。
亮太郎　なんて話したつけな。
あや子　村で一番の栗の木だつて……。
亮太郎　あれや、全く見ものだよ。二た抱へある栗の木つて云ふのは珍しいだらう。栗が落ちる頃は、毎朝、うちぢゆうの女が出て拾ふんだが、朝の間だけでは拾ひきれないほどなんだ。
あや子　……。
亮太郎　此の秋は、東京へ送らせることにしよう。獨りぢや、栗を燒いて食ふ氣にもならないからね……。(間) だけど、家ん中が穢いのをびつくりしちや駄目だよ。田舍の家なんていふものは、古いのを自慢にしてるんだからね。煤けてるほど値打があると思つてるんだ。その代り、風が吹いたつてぐらぐらするやうなことはない。
あや子　もうあと幾分?
亮太郎　三十分。
あや子　まだ三十分?　さつきとおんなじね。
亮太郎　おんなじだ。
あや子　時計が止つてやしない?
亮太郎　止つてやしないよ。
あや子　……。
亮太郎　輕便まで誰か迎へに來てるかも知れないよ。弟が來てるか、おやぢが來てるか。
あや子　お父さん、そんなにお達者なの。
亮太郎　達者もなにも、急ぐ時でなきや、馬車なんかへ乘りやしないよ。
あや子　お歩きになるの、馬車で一時間の處を……?
亮太郎　あたり前さ。田舍者つて、そんなものだよ。畑だつて、自分でするんだよ。
あや子　あら……。だつて、人を使つていらつしやるんでせう。
亮太郎　使つてるさ。使ふもんも一緒になつて働くんだよ。
あや子　そんなもんなの。
亮太郎　そんなもんさ。
あや子　さうでせうね。あたし、早くお父さんが見たい。
亮太郎　おやぢの方で腰をぬかすか、君の方で眼をまはすか、僕も早くそれが見たいよ。
あや子　なぜ?
亮太郎　なぜつて、お互に意外だらうからね。君が想像してる僕のおやぢと、おやぢが想像してる僕の家内と、その兩方とも、僕にはどうやら見當がついてる。實際と違ふ程度が、どつちも同じやうなものだよ。
あや子　さうか知ら……。お父さん、お髭を生やしてらつしやる?

亮太郎　さあ、髭つていふより、毛に近いものを生やしてたかも知れない。どうして？

あや子　髪は分けてらつしやる？　それとも……。

亮太郎　禿げてるかつて云ふんだらう。まだ禿げてやしなかつたらう。薄いには薄いがね。だが、分けてるなんと思ふと大間違ひだぜ。第一……もう止さう、そんな馬鹿な話……。君は、駄目だよ。わからないかなあ、田舎の百姓爺がどんな恰好をしてるか……。

あや子　百姓爺つたつて、普通のお百姓ぢやないんでせう。

亮太郎　その差大ならず。僕が櫛を使つてたら、息子が女の眞似をするやうになつたつて村中云ひふらしやがつた。

あや子　まさか。

亮太郎　（笑ひながら）　まあ、そんなもんだよ。（間）　今のうちに寢とけよ。

あや子　もうねむくなくなつたわ。少し寒いか知ら……。

亮太郎　自分はどうなんだい。羽織はすぐ出せるやうにしてあるんだらう。朝晩はこの調子だよ、これから……。

あや子　夏涼しいと變ね。

亮太郎　夏だと思はなけりやいいさ。なにしろ、裏の森ぢや鶯が啼いてるんだからね、今頃……。

あや子　さうですつてね。去年の夏、輕井澤へ行つた友達がさう云つてたわ。輕井澤とそんなに違はないんでせう。

亮太郎　もつといいとこだよ、變な毛唐なんかうろうろしてなくつて……。

あや子　あなたは西洋人が嫌ひね。

亮太郎　嫌ひだよ、あんな化物みたいなもの……。それはさうと、僕の方の田舍にね、初めて毛唐がやつて來たことがあるんだ。もう二十年も前だけれどね。それが、今で云へば山岳旅行をやつたんだね、毛唐のことだから……。すると、一人の百姓が、山の中でその毛唐に出くはしたらしいんだ。その百姓、びつくり仰天して、山を駈け降りて來たのさ。さうして天狗がゐた、天狗がゐたと、村の者に注進に及んだからたまらない、その頃は青年團なんていふものはなかつたから、屈強な若いものが、手に手に得物を携へて天狗退治に出かけた、と云ふのは嘘らしいが、兎に角、あとで、それが毛唐だとわかり、なるほど鼻は高かつたと、みんなが……。

あや子　うそばつかし、そんな話……。だけど、ありさうなことね。（と云つて、今度は、腹を抱へて笑ひ初める）

亮太郎　それ見ろ、面白いだらう。君、毛唐好きか。

あや子　好きでも嫌ひでもないわ。

亮太郎　そんならいいや。

あや子　何がいいのよ。

亮太郎　なんだか忘れた。
あや子　……。
亮太郎　兎に角、栗の木は見ものだよ。花が咲いてれば、一里手前から見える。
あや子　あたし、お辨當たべようか知ら……。お茶がないわね。さうだ、お茶がない。どうするつもりだつたのか知ら……。
亮太郎　飲まないつもりだつたんだらう。水で我慢するさ。此の邊の水はいいよ。それに藥かも知れないよ。ラヂウムなんか含んでて……。
あや子　そんなら、濟まないけど、汲んで來て頂戴。
亮太郎　何へ？
あや子　何かへよ、きまつてるぢやないの。その邊に空壜か何か落ちてないこと？
亮太郎　よし、君が、それだけ徹底して呉れりや、水も汲んで來甲斐がある。待つて給へ。（出て行く）
あや子　（辨當を開いて食ひ始める）
（此の間に、温泉廻りの上方者らしい男が、藝者か仲居風の女を連れて、汽車の時間表を見に來る。が、しばらくすると、また何處へか行つてしまふ。）
亮太郎　（ビール罎を提げて歸つて來る）
あや子　（片手でそれにさはつてみて）あら、熱いのね。お茶を貰つてらしつたの。
亮太郎　男子意氣に感ずれば、お茶ぐらゐ貰つて來るよ。僕も食ふぜ。（腰をおろし、辨當を食ひはじめる）此の魚、大丈夫か。
あや子　お茶、どうして飲むの。
亮太郎　自分で考へろ。
あや子　かうすんの？（と云ひながら、喇叭飲みをしようとするが、思はしく行かない。徒らに唇を尖らすばかり）
亮太郎　（素知らぬ顔で）飲んだら、こつちへよこせ。
あや子　（すぐに）ぢや、はい。
亮太郎　何だ。飲んでないぢやないか。（流石に、手際よく罎を傾ける）
あや子　これで、折角の、紳士旅行も臺なしね。
亮太郎　臺なしなもんか。
あや子　だつて、あの汽車の中の澄まし方はどう。あたし可笑しくつて……。不斷のみもしない葉卷なんかふかしてさ……。脚をかう組んで、額に八の字をよせて、そして文藝春秋を讀んでる光景は、たしかに歴史的よ。
亮太郎　君はどうだ。……止さう、顔が赧くなる。
あや子　おつしやいよ。あたしのどこが可笑しい？
亮太郎　可笑しいさ、あんなに何遍も時計を見ちや……。

あや子　時計？　あら……。（笑ひながら）汽車に時間はつきものよ。

亮太郎　驛長ぢやあるまいし……。しかし、君は案外可愛らしいところがあるよ。四十圓の腕時計で、たうとう一晩の睡眠を棒に振るなんて。

あや子　（もう相手にならない）おいしくないのね、此のお辨當……　（一寸顏をしかめ）どら、お茶を飲まして……。

亮太郎　おやぢより、弟を見てびつくりしやしないかなあ。

あや子　なぜ。

亮太郎　無愛想な奴だからさ。

あや子　そんな？

亮太郎　いつか、模範青年つて云ふんで縣で表彰されたんだがね、なんでも、そん時、知事なんかゐる前で、此の免狀みたいなものは、なんにもならないから返すつて云つて、問題を起しやがつたんだ。

あや子　でも、痛快な方ね。

亮太郎　痛快でないこともないが、誰にでもその調子だからね。君なんかにも、平氣でどんなことを云ふかも知れないよ。

あや子　それがわかつてればいいわ。でも……。

亮太郎　亂暴なことはしやしないよ。ゐるかゐないかわからないやうな男だからね。十日も口を利かないことがあるよ。

あや子　まあ。

亮太郎　だから、こつちから、あんまり話なんかしかけない方がいい。うるさいと思ふと、返事をしないんだ、誰にでも……。

あや子　あなたにでも……。

亮太郎　（曖昧に）うん。（間）自然、みんなとの折合が悪くつてね。それはまあ、近頃のことなんだがね。

あや子　みんなつて、おうちの方と……？

亮太郎　それより、村の顏役なんかとね。そのくせ傭人にはいいらしいんだ。變なもんだね。使つてるものの評判は馬鹿にいいんだ。

あや子　社會主義ぢやない？

亮太郎　さうかも知れんよ。（間）そんなこともあるまいがね。

あや子　ずつと、おうちにいらつしやるのね。

亮太郎　師範を中途でよしてね、嫌ひなんだ學校が……。本はなかなか讀むらしい、何處で探して來るか。

あや子　でも、さういふ方も面白いわね。あたし、朴訥な方、好きよ。

亮太郎　馬鹿ぢやないんだよ。

あや子　馬鹿なんて、そんな……。ぢや、東京の者なんかはお嫌ひでせう。

亮太郎　都會といふものを輕蔑はしてるね。あれで、なかなか、理窟を云はせると、云ふらしいね。

あや子　油斷がならないわね。兄さんを負かしやしない。

亮太郎　こつちは、理窟は苦手だからね。農村問題なんか眞平だ。

あや子　あなたは、もうすつかり都會人ね。

亮太郎　さうでもないが、所謂「根こぎにされたもの」の一人には違ひない。その點、弟の偉いところも、わかるにはわかるんだ。

あや子　それやさうだわ。生れた土地を離れないつて云ふことは、善し惡しは別として、美しいことだわね。

亮太郎　（妻の顏をつくづくと見つめ）君にしてその言あり、世は擧げて郷土主義に靡くかと思はれるね。あゝあ山川にして情あらば、嘗て一と度志を立てて郷關を出でたる我れ、今、身に錦は飾らずとも、美しき妻を携へて再び汝の懷に還り來れるを喜び迎へよか。ブウブカドンブウドンドンだ。

あや子　おや、おや、おや……。

亮太郎　（やけに茶を飲む）

（長い沈默。）

あや子　霧が霽れてよ。

亮太郎　霽れた。（時計を見て）さ、出掛けよう。もうあと十分で出る。

あや子　輕便までは遠かないんでせう。

亮太郎　一と足だよ。そこに見えてるぢやないか。あれの一時間は優に汽車の五時間草臥れる。大丈夫か。

あや子　大丈夫よ。

亮太郎　大丈夫か。そいぢや、辨當の空なんかいつまでも持つてないで、そいつを一つ持つた。（シユーツケースを顎で指し、自分は信玄袋と行李とを兩手に提げる）

あや子　（慌てて辨當の空を椅子の下に投げ込み、起ち上る）

亮太郎　（歩き出しながら）旅行といふものは不思議なもんだね。動くことが苦にならん。

あや子　（これも歩き出し）ねえ、あなた、一寸待つて頂戴、（と云つて脊中を夫の方に向け）帶、ちやんとなつてる？

亮太郎　なつてる。

（兩人、再び歩き出す。）

第　二　場

山の中腹にある農家の庭前。

日盛り――

大きな栗の木の根もとに、蓆が敷いてある。亮太郎が蓆の上に腰をおろして、ぼんやり遠くを見てゐる。

そこへ、あや子が現れる。

あや子　もうおすみになつて。隨分長いお話ね。

亮太郎　……。

あや子　あたし、あゝいふ時、何處にゐていいかわからないから、困るわ。お母さんは、どうしても、あたしに、お仕事のお手傳ひをさして下さらないの……。

亮太郎　長くゐるんぢやないからいいけれど、もう少し、「うちのもの」になれないかなあ……。

あや子　あたし？

亮太郎　君が務めてるつていふことはわかるよ。務めたつて無理だつていふこともわかつてるんだが、どういふか一々、いろんなことにこだはらずに、平氣でやれないもんかなあ。

あや子　どんなこと？

亮太郎　どんなことつて……例へば、芋の皮をむくんだつてさうだ。やれ、お手傳ひしませうとか、やれ上手にむけるか知らとか、やれ、何んだとか、かんだとか、わざわざ、自分を自分で特別扱ひにしてるところがあるよ。

あや子　保次郎さんが、何か、あたしのこと、おつしやつたんでせう？

亮太郎　保はなんにも云やしないよ、君のことなんか……まあ、あんまり、あれこれと氣を遣はない方がいいよ。どうせ、しつくりは行かないにきまつてるんだし、しつくり行つたところで、どうにもならない話なんだ。もつと、呑氣にして給へ、呑氣に……。その方が、お互に樂だよ。

あや子　あたしだつて、何も、それほど氣を遣つてるわけぢやないのよ。かういふ生活に慣れようと思へば、それや、もつと、どうにかしやうがあると思ふわ。だけど、やつぱり、お客さん氣分なんだから……。

亮太郎　それや、さうさ。僕が第一、さうなんだ。これが自分の家だと思つてみたところで、これをどうしようつていふ氣にはなれない。そのことで、今、保とも話をしたんだが、さしづめ、あいつから、無責任呼ばはりをされても仕方がないわけさ。

あや子　無責任だつておつしやるの。

亮太郎　まあ、さういふ意味なんだらう。それが、家運隆盛なら、僕が知らん顔をしてゐたつて、問題は起らないわけさ――。餘程苦しいらしいんだ。

あや子　……。

亮太郎　君は、こんな田舎で暮さうとは思はないだらう。

あや子　事情によつては、そんなこと云つちやをられないわ。

亮太郎　その覺悟があるか。

あや子　だけど、あなたがここにいらつしやれば、どうにかなるつていふの。

亮太郎　それや、わからないさ。保の言ひ分は、はつきりしてる。――ただ自分たちが働いただけでは追つ附かない、人の物を搾り取らなければ……と云ふんだ。物事をさういふ風に考へるやうになつてるんだよ、あいつはね。

あや子　何時でも何か考へてらつしやるやうね。――あの眼はとても素敵だわ。此の間も、草鞋を作りながら、本を讀んでらつしやるのよ。あたしがそこへ行つたら、ぢいつと眼をあげて、こつちを見てゐるの。その眼の美しさつたらなかつたわ――澄んでゐて、深みがあつて、そのくせ、冷たい感じはしないの。

亮太郎　馬鹿に褒めるね。あいつは、案外、角が取れてゐるよ。もつとゴツゴツしてるかと思つたら……君なんかには、なかなか優しさうぢやないか。

あや子　ええ、それや優しいの。あなたのお話ぢや、どんなこはい方かと思つたわ。ただ、物を言ふのがお嫌ひね。どうかすると唖みたい。何を云つても、首を振るだけなの。張合ひがないつたら……。少し、恥かしいのね。まだ、子供よ。

亮太郎　さうか知ら……だけど、何か君、見たつて云つてたぢやないか、二三日前……。

あや子　あれは、あなた……それや、子供つて云つたつて丸つきり子供ぢやないんですもの……。それくらゐのこと……。でも、あれを見て、あたし、ほんたうに綺麗なものを見たやうな氣がしたわ。

亮太郎　綺麗なものか……。つまり、ロマンスにしてゐるのさ、君の方で……。

あや子　それはどうでもいいの。なんだか、あたしたちのさういふやうなものと、全く違つた種類の……別の世界にでなければないやうな、――だと思つたわ。

亮太郎　そんな大袈裟なものぢやないんだらう。――二十三にもなれば、男の戀愛は空想でなくなるよ。――誰もゐない川つ緣で、魚の泳ぐのを見てるやうなふりをしてそこへ來かかつた女の子を、呼び止めて見るぐらゐの度胸はついて來る。そればかりぢやない。何か手渡ししてたつていふぢやないか。

あや子　もう止しませう、そんな穿鑿は……。あたし、そんなつもりで云つたんぢやないの。ただ、さういふところを見て、自分でハッと顏を赧めるやうな、そんな印象

を受けなかつたことが不思議に思へたからなの。つまりそれほど、現實ばなれがしてたんだわ。あの女の子、なんていふ名かしら……。何處の子かしら……。落葉掻きの歸りらしいのよ。

亮太郎　益ゝ詩的ぢやないか。パストラルだね。

あや子　さうよ……。なに、そんな笑ひ方して……。いやな方ね。（間）また少し歩いてみないこと、その邊……さうさう、あたしと一緒に歩くのは、何んとかつて云つてらしつたわね。

亮太郎　目立つんでね。

あや子　（溜息をつき）窮屈ね。

亮太郎　窮屈だが、仕方がないさ。强ひて周圍の感情と鬪ふ必要もないさ。

あや子　さつきは、もつと平氣になれつておつしやつたくせに……。

亮太郎　だからさ、もつと平氣で土地についた生活をすればいいんだよ。わざわざ、都會人ぶらなくつたつて……。

あや子　變なことをおつしやるのね。もう、わからない、あたし……。あなたは、もつと、人の氣持のわかる方だと思つてゐたわ。丸で無茶よ、この頃、あなたのおつしやることは……。どうかしませうよ。このままぢや、お互につまらないでせう。あなたは、何かの不滿を、あたしの處へばかり持つていらつしやるんぢやない。

亮太郎　さうか……。さういふ處があるかも知れない。わるかつたよ。どうもいけないね、かういふ生活をしてると……。頭がすつかり惡くなる。感覺が鈍くなる。精神に潑剌としたところがなくなるよ。田舍の生活が必ずしもわるいんだとは思はないが、自分の生活でなくなるからいけないんだ。君は、今日は顏色が惡いね。氣分がわるいんぢやない。

あや子　今、おつしやつたこと、あなたも氣がついてらつしやるなら、あたし、安心だわ。でも、ほんとに氣をつけて頂戴ね。ここにゐる間だけなら、まだいいけれど、あなたが、ずつとさういふ風になつておしまひになるんぢやないかと思ふと、あたし、泣きたくなるわ。（間）さう云へば、あなたも、今日は、お顏色がよくないのね。さつきのお話で、また心配がふえたからでせう。（間）でも、保次郎さんは、あなたのことを惡くは思つていらつしやらないんでせう、そんなに……。

亮太郎　好く思つてるとも云へなからうね。

あや子　困るわね。

亮太郎　別段困りもしないさ。こつちが向うをわかつてやるほど、向うぢや、こつちがわからずにゐるだけさ。弟なんていふものは、そんなもんだよ。

あや子　あたしから、よくお話してみても駄目かしら……。
亮太郎　話すつて、何を話すんだい。
あや子　あなたの氣持なり何なり……。
亮太郎　僕の氣持を話したつてしやうがないさ。あいつにどうして貰はうといふわけぢやないんだから……。
あや子　でも、誤解があつちや……。
亮太郎　面白くないといふのかい。しかし、それもね、時機の問題だと思ふんだ。今は何と云つたつて駄目だよ。僕が、家の金を使つて、都會に出て、學問をして、そして鄕里のことは顧みないで、下らない仕事をしてゐるといふのが、あいつの氣に喰はないんだ。そいぢや、自分は、どれだけ鄕里のために盡し、どれだけ有意義な仕事をしてゐるかといふと……(首をふり) いけない、どうも、頭が惡い。しかし、あいつはなんと云つたつて、子供ぢやないよ。なるほど、油斷のならないところがある。さつき云つたやうなことばかりでなく、僕自身が、なんだか、あいつに脅かされてゐるやうな氣がしてしやうがない。
あや子　それはあなたのひがみよ。
亮太郎　それが君にどうしてわかる。――いや、僕の云ふのはね、あいつに、何か企みがあるといふやうな、そんなことぢやないんだ。もつと運命的な、どうすることも出來ない二人の關係によることらしい。はつきり云ひ表すことはできないがね。(間) 以前はそんなことはなかつたんだよ。二人とも小さい時はね、どつちかつて云へば仲のいい兄弟だつた。(空を見上げ) よく此處で遊んだもんだ。此の栗の木の下で……。ある日、學校ごつこをしようつていふんで、僕が先生になつたわけさ。勿論年上のものが先生になるのを當然と心得てゐたわけだが、あいつは、いきなり、ぢや、兄ちやんが先生ならおらは校長さんだと云ひ出しやがるんだ。それで學校ごつこはおじやん……。今度は、兵隊ごつこさ。その頃、松本の聯隊かなんかが村へ演習に來てね、子供たちは、盛んに兵隊ごつこをやつたもんだ――そこで、僕が軍曹になると云ひ出した。――可笑しいだらう、それはね、うちへ泊つた兵隊の頭が軍曹だつたんだ。さうすると、やつはどうしてさういふ氣になつたか、いきなり、ぢや、おらは斥候だ、と云つて駈け出したまま、何處へ行つたのか、晩まで歸つて來ないんだ。これには僕も閉口したよ。やつはどうも、兄きを兄きと思はないところがあつた。
あや子　それより、想像力があなた以上に發達してたわけよ。
亮太郎　想像力がね。うん、それはたしかにさういふところはあつた。(間) しかし、此の栗の木の下は懷しいよ。

(また空を見上げ) 五六年前に比べても、氣のせゐか、葉の茂り工合が、一層物々しくなつてゐる。東京附近にこんな栗の木は一寸ないだらう。何しろ、此の村で一番大きいんだからね。樹なんていふものも、これくらゐになると、どことなく靈的な偉大さといふか、一種犯すべからざる威嚴を備へて來る。神秘的でさへある。それにいろいろな思ひ出が結びつき、家といふものの傳統的な觀念が加はつて、今の僕の生活に、何か大きな力で働きかけて來るやうな氣がするんだ。考へやうによつては、氣味がわるい。

あや子　あなたは、東京にいらつしやる時と、まるで違つておしまひになつたわね。

亮太郎　どういふ風に……。

あや子　物事を妙に考へ込むやうになつてらつしやるわ。そんなぢやなかつたんだけれど……。

亮太郎　(强ひて快活に) なに、考へてる最中のことを口へ出して云ふのと、考へてしまつたあとで、何か別のことを云ふのとの違ひさ。新しい刺激がないと、同じことばかり考へるやうになる。ああ考へてみたり、かう考へてみたりするんだ。同じ頭で、同じ事をひねくつてゐるほど馬鹿げたことはないよ。(間) 處で、今晩はね、一寸長野まで行かなきやならん用事ができたんだ。寂しいだらうけど、留守番をしててくれる?

あや子　どんな御用なの……。あたし、行つちや、いけない?

亮太郎　中學の同級會なんだよ。別に行つたつてしやうがないんだが、家のことで、また何かと世話になる奴も來るしするから、顔だけ出しとかうと思ふんだ。遲くなつても泊らずに歸つて來る。終列車で、あすの晝は歸れるから……。

あや子　さう……。ぢや、しかたがないわね。そいで、もうすぐお出かけになるの。

亮太郎　今、馬車を呼びにやつてある。(間) 洋服にしようか。

あや子　どちらでも……。白いのなら、洗濯をしなくつちや駄目でせう。着てらつしたままよ。ああいふもんの洗濯なんか、一體どうするの、——さうさう、訊いとかうと思つてて……。

亮太郎　ぢや、和服にしよう。

あや子　でも、袴がいるでせう。

亮太郎　いらないさ。いるもんか。(間) ぢや、出してくれ。(起ち上る)

あや子　(やや聲を落して) 昨夕ね、お母さんがおつしやつたのよ——あのね、保次郎さんの單衣が、もう着られ

るのがないんですつて……。だから、古いんでいいから、亮太郎のを一枚やつてくれつておつしやるの。

亮太郎　やつたらいいぢやないか。

あや子　ええ、それがね、浴衣なら二枚あるけど、單衣はちよいちよい着と、よそ行と、一枚づつきや持つて來なかつたでせう。どうしようか知ら……。

亮太郎　よそ行をやつたらいいだらう。

あや子　でも……あなたが……。

亮太郎　いいから、やれよ。今日は、ぢや、少し暑いけどもう一つの洋服を着てから。

あや子　さうなさる？

亮太郎　さうするより、しやうがないだらう。

あや子　今日は、いい方を着てらしつて、それを、あした、なにしたらどう……。一日ぐらゐのびたつて……。

亮太郎　それぢや、まづいよ。すぐ出してやり給へ。

あや子　お母さんは、やつぱり、保次郎さんが可愛いのね。

亮太郎　だから僕が可愛くないつていふわけぢやないよ。

あや子　いいえ、少し變だと思ふわ。あたし、そんなこと云はれてするのは、いやよ。だつて、あの方、着物なんて召すことがある？　ないぢやないの。あたしが、行李を開けてるのを御覽になつて、急にそんなことおつしやるのよ、お母さんは……。ちやんとわかるわ。年寄りつていやなものね。

亮太郎　おい。

あや子　はい……。御免なさい……。（間）あ、あの馬車でせう。あんなに埃を立てて……。

（兩人去る。）

（舞臺、しばらく空虛。）

（保次郎、うつむき加減に、鍬を肩にかついで、ゆるやかに歩を運んで來る。彼は、古い紺のズボンに卷脚絆をつけ、上はシャツ一枚、無帽で髮の毛を長く伸ばしてゐる。一寸立ち止つて、あたりを見まはす。また歩き出す。栗の木の根もとに、鍬を投げ出し、兩腕を腰にあてて、一つ時、眼を細くして遠くの方を見入つてゐる。不圖、何か考へ込むやうに、空を仰ぐ。溜息をつく。どつかと、蓆の上に腰をおろす。小型の書物を取り出して、頁を繰るが、それを讀み續けるでもなく、下に置いて、また溜息をつく。首をやけに振る。頭を木の幹にもたせかける。）

第　二　場

前場と同じ。

月夜。

遠くで太鼓の音がする。

あや子が栗の木の下にしやがんでゐる。

　亮太郎が現れる。

あや子　何處を歩いてらしつたの……、こんなに遲くまで……。みんな心配してたのよ。

亮太郎　心配することはないさ。まさか自殺もすまいからね。

あや子　そんな心配ぢやないのよ。あなたは、すぐそれね……。(間) 途で、保次郎さんにお遇ひにならなかつた？

亮太郎　保は、今、そこにゐたぢやないか。違ふかい。いや、遇はなかつたよ。月夜で道を迷ふ心配はないし、水車を拔けて、釣橋のところまでぶらぶら歩いて行つたよ。頭の痛いのもなほつた。

あや子　それやよかつたわね。あたし、また、何處へいらしつたのかと思つて……。散歩の時は、何時でもさう云つて出てらつしやるのに……。

亮太郎　その邊を一寸ひと廻りして來るつもりだつたのが、つい、引張られて行つてしまつたんだ。

あや子　……。

亮太郎　月の光にさ……。月の光といふものは、人をどこまでも引張つて行くものだよ。あれや、確に變だ。吸ひ込まれて行くとでもいふか、自分が歩いてゐるんぢやない自分のまはりにある空氣が、からだを包んだまま流れて行くやうな氣がするんだ。

あや子　もう遲いのよ。何時だと思つてらつしやる？　やすみませうよ。

亮太郎　まあ聽けよ。此處に立つてゐると、此の栗の木の下は暗いやうだらう……。葉が茂つてゐて、此處だけが影になつてゐるせゐだ。處が、遠くから見ると、そら、あの道の曲つてるところね、あの邊から見ると、此處のところだけが、うつすらと、妙に光つて見えるんだ。木の葉を透して來た月の光は、やつぱり青くなるのかね。青く、しかも、濡れたやうな光り方がする。その光の中に、無論、君のさうしてゐる姿が浮き出してゐたよ。誰かもう一人ゐたやうだつたが、それははつきり見えなかつた。おほかた、君の影だらう。それとも、木の枝の影か……。さうだ、此の枝だ……(頭の上の枝を仰いで見る) なるほど、此處にかうしてゐると、自分のゐるところさへわからないね。(間) をかしな木だよ、此の栗の木は……夜見るとなほ不思議だ。まるで、木の下にゐるといふ氣持はしない。何か、かう、覆ひかぶさつて來るね。この二三日殊にさう思ふんだが、この木は、何か考へてゐるよ。何かしようと思つてるよ。人が此處へ來ると奇妙に葉が垂れ下つて來る。さうして、頭の上に重たい

ものを積み上げるんだ。すると、なんだか、からだがしびれるやうな風になる。呼吸がつまつて來る。ぢつと立つてゐられなくなる。(間) そら、もう、脚がふるへて來た。こら、(と云つて心臓に手をあて) ここがこんなに……(さう云ひながら、ぐつたりと、そこへ腰をおろしてしまふ)

あや子　(あつけに取られて、そこに立ちすくむ。が、氣を取り直して) あなたは、たしかにおつむが疲れていらつしやるのよ。神經衰弱つていふんだわ。一度お醫者さんに見ておもらひになつたら……?

亮太郎　大丈夫だよ。(間) そのくせ、此處へはよく足が向くんだ。そればかりぢやない。おやぢに用がある。——おやぢはよく此處で仕事をしてゐる。靜かに本を讀まうと思ふ。——此處が一番靜かだ。話相手が欲しい。——此處へ來れば誰かゐる。殊に、君の側に行きたいと思へば、此處に來さへすればいい。——君は、此處よりほか氣に入つた場處はないらしい。

あや子　そんなことはないんですけれど……。

亮太郎　別に惡いことぢやないからいいさ。だが、僕はもう、この木は御免だ。今日限り、此處へは來ないよ。(間) どうしてそんな處に立つてるの……。もつと側へ寄れよ。誰も見てやしないよ。さ、ここが平でいい。

あや子　(云はれるままに腰をおろす)

亮太郎　そろそろ東京へ歸りたくなつたらう。それより、もうとつくに此處がいやになつてるかも知れない。よく辛抱してくれたね。

あや子　どうしてそんなことおつしやるの。ちつともいやになんかなりやしませんわ。ただね……?

亮太郎　ただ……?

あや子　ただ、あなたが、あんまり鬱いでばかりいらつしやるから……。

亮太郎　さうか、それぢやもつと愉快にならう。君、今日は、午前中、何をした。

あや子　今日はね、此間から溜つてる新聞を讀んでしまつたの。

亮太郎　何か面白いことがあつたか。

あや子　あなた、御覽になつたんぢやない。

亮太郎　笑話だけさ。それと漫畫……。「ダブとドフ」ね、時事の附錄さ、あれは傑作だね。

あや子　さう? あたし見ない。

亮太郎　お話にならん、あれを見ないなんて……。

あや子　どういふ話なの?

亮太郎　どういふ話つて……いろいろあるさ。それから、笑話にもなかなかいいのがある。近頃感心したのにこん

なのがある——男が、女を自分の横に坐らせて自動車を走らせて來る。奴さん、片手にハンドルを握り、もう一方の手で女を抱いてゐるんだ。それで、お巡りさんが「こら、こら、兩手で持たにやいかん」と注意したもんだ。すると「自動車がどつちへ行くかわかりません」とやつたね。

あや子　（ぽかんとしてゐる）

亮太郎　わからんのか。

あや子　（やつとわかり）ああ、さう……。面白いわね。

亮太郎　面白くなささうな面白がり方だな。そいぢや、これはどうだ。（間）おい、聽いてるのか。

あや子　聽いてますわ。（間）でも、あなた御自身が、無理に面白がつてらつしやるんぢやない、今日は……。お加減が惡いなら、もう家の中へおはひりになつたらいかが……？　だんだん冷えて來ましたわ。また風邪でもめすと……。

亮太郎　もう少し、ね、いいだらう。もう少し饒舌らしてくれ。面白くなければ、默つてほかのことを考へてゐてもいい。饒舌りたいといふ本能は死も恐れないといふ話がある。このまま默つて寝ろと云はれれば、僕は、潔く死を選ぶ。そこでだ、ええと、なんだつけな、君は、僕のうちを、もう少しどうかしたうちだと思つてたらう。から聞くと君は、なんと答へていいか解るまい。ぢや、言ひ直さう。僕がどうして君をこの家に連れて來たかと云へばだね、勿論、こんなぼろ家を見せたいからでもなければ、おやぢやお袋に君を引合はせて、大に孝行振りを示さうとしたわけでもない。君はどう思つてるか知らんが、それは發つ前にも云つた通り、おやぢもだんだん年を取るし、弟は家の身代を固めるといふことに興味も希望ももつてゐないし、やつぱり僕が一度歸つて、おやぢが死ぬまで相當に暮して行くだけのことはして置かなければならんと氣がついたからなんだ。そこで、歸つて見ると、もう遲い。少しばかりあつた山も畑も、大方は人手に渡らうとしてゐる。君は、その時だね、ある失望を感じやしなかつたか。

あや子　……。

亮太郎　この栗の木も、そのうちに、誰かが來て、伐り倒して行くかも知れない。さういふ日が來るやうな氣がするんだ。

あや子　あなたの心配してらつしやることは、あたしには、ちつともわかりませんわ。あなたのおうちの財産がどうであらうと、それが、あなたに取つてどうもなければ、あたしだつてどうもありませんわ。あなたは、そんなことを氣に病んでいらつしやるの。

亮太郎　そんならいいさ。ぢや、もうなんにも云ふことはないよ。（頭を抱へて、かすかに身悶えする）僕は、やつぱり東京へ歸らうと思ふ。その方がほんとだといふ氣がする。つまらんと云へばつまらんが、あんなものの研究も、しかけてみれば、續けてやりたい氣もするしね。さう云へば、此の邊には、蝙蝠が多いんだよ。そら、昨夕も臺所にゐたぢやないか。今、巢を見つけてゐるんだ。

あや子　ぢや、毎日、森の中を歩いていらつしやるのは、それなの……？　お父さんが笑つてらしつたわ。子供の時分は、あんなぢやなかつたつて……。いやね、默つて……。

亮太郎　（妻の意外にも快活な調子に惹き入れられて）云ふとまた五月蠅いからさ。子供の時分つて、僕が子供の時分は、おやぢはうちにゐた例しはないんだからね、祖父がうちにゐて畑をする、おやぢは材木を伐り出しちや、車に積んで町へ運んだもんだ。その頃が萩原家も得意の絶頂だつたらしい。おやぢは、何か君にこぼしやしないかい。

あや子　いいえ、別に……でも、お父さんは面白い方ね。時々人を笑はせるやうなことをおつしやるのね。

亮太郎　どんなこと……？

あや子　をかしいからよすわ。

亮太郎　いいから云つてみ給へ。

あや子　あたしが歸つて來たので……よしませう、つまらないことだから……。

亮太郎　そんなこと云つてるひまに云つたらいいぢやないか。君が歸つて來たので……？

あや子　村中の男がおめかしをし出したつて……。

亮太郎　馬鹿な……。

あや子　それ御覽なさい。

（長い沈默。）

亮太郎　そんなこと云ふもんかい。君がさう思ふから云つたんだらう。白狀しろ。

あや子　いいわ、そんなら……。

亮太郎　怒らなくつたつていいさ。（間）さつきから太鼓の音がしてるね。お祭の稽古だな。

（長い沈默。）

第四場

前場と同じ。

朝――霧が降つてゐる。

遙かに騒々しい聲が聞える。その中で、亮太郎の怒氣を含んだ喚聲が一段高く耳につく最後に、「馬鹿ッ。」と一聲、あとは寂寞。

あや子が、亮太郎を抱くやうにして、素足のまま、後ろを振り返りながら現はれる。栗の木の根もとに亮太郎を寢かし、髮の毛を撫で上げ、その額をのぞき込む。亮太郎は、眼をつぶつて、苦しさうに呼吸をしてゐる。

——あや子の絶望に近き表情。

あや子　あなた、しつかりして下さい。お苦しかありません。大丈夫ですか。おつむり冷やしませうか。待つてて頂戴……。（起ち上り、その邊を見まはす）誰か、一寸來て下さい。（返事がないので、自分で母屋の方へ走つて行く）

（やや長い間。）

亮太郎（かすかに眼を開いて、手を額のへんに當ててみる。それから、喉をさする）

あや子（金盥に水を入れて持つて來る）いますぐ……（かう云ひながら、甲斐々々しく手拭を絞り、それを額に當て）いやよ、あなた、あんなことなすつちや……（夫の胸に泣き伏す）

亮太郎（割合にはつきり）保を見て來い。

あや子　いいえ、あの人は大丈夫……。

亮太郎　怪我はさせやしなかつたか。

あや子　いいえ、大丈夫……。でも、あぶな御座んしたわ、兩方とも……。（間）あなたがおわるいのよ、あんなことをおつしやるから……。もつとひどい怪我でもなすつて御覽なさい……それこそ……。どうしてまた、あんな亂暴をなすつたの……。いや、いや……。

亮太郎　少し亂暴だつたな。（間）保を呼んで來てくれ。

あや子　まだいけません。もつとあとにしませう。（額を手でさはつてみて）此處、お痛いでせう……、お氣分はどうもありません、もう……？

亮太郎　どうもない……。さつき、少しふらふらしただけだ。

あや子　さうですとも、あんな太いもので……。だけど、當りどこがよかつたんですわ。

亮太郎（苦笑しながら）うまく當ててくれたんだらう。こつちは夢中だつたが……。

あや子　あなたのは、そんなにひどく當つてません。だつて、丁度あん時、手でよけたの、あの人……。

亮太郎　詳しく見てたね。

あや子　さうぢやないけど……。あぶなくつて留められないんですもの。それに、あの人たち、見てる人も見てる人ですわ。

亮太郎　あの人たちは、自分でやりたい人たちだ。人のでも、止めるのは、勿體ないと思つてる。（急に跳ね起き）もういい。（さう云つたものの、ぐらぐらと眩暈が來て

思はず妻の肩に手をかける）

あや子　あぶない。だから、もつと靜かにしてらつしやいね、もうしばらくの間……。（そつと亮太郎を寢させる）ひどいわね、見舞にも來ないで……。このままうつちやらかしとくなんて……。

亮太郎　おやぢは？

あや子　向うにいらつしやるでせう。

亮太郎　お袋が心配してるといけないから、一寸、もう何でもないつて云つて來てくれ。

あや子　あつちからいらつしやるのが當り前ですわ。

亮太郎　外のもんの手前、來られないんだよ。一寸行つて來てくれ。それから、保にも、氣の鎭まるやうに、僕がわるかつたつて謝つて來てくれ。

あや子　あたし、いや、そのお使ひは……。

亮太郎　おい、そんなこと云つてないで……。あそこへ來てる奴等には、さうした方がいいんだ。おれは、弟と喧嘩をして、此の家を出て行く氣にはなれない。まして親類の奴等から後ろ指をさされるのはいやだ。あとになると具合がわるいから、今のうち、あつさり下手に出て置かう。おれもよつぽど馬鹿だよ。

あや子　それぢや、あなた、あんまり、御自身つていふものが無さすぎますわ。かうなつたらかうなつたで、理窟はありますもの……。

亮太郎　あつても、それはまづいよ。保が僕に向つてああ云つた。——百姓の子は百姓をしろと云つた。それをむきになつて怒れば怒る方がわるい。

あや子　でも、あんな云ひ方をしなくつたつて……。

亮太郎　そこだよ。あいつの腹は解つてゐる。こつちを侮辱することは、自分の主張を燃え立たせる手段なんだ。あの時代には考へさうなことだ。あん時は、どういふものか相手が弟だといふ氣はしなかつた。なんだか、仕事の敵といふやうな氣がした。いや、それより、不思議なことには……自分の生活を脅す……惡魔のやうな氣さへしたのだ。

（長い沈默。）

あや子　また興奮なさりやしない？

亮太郎　僕は、かう見えて、臆病なんだよ、（また起き上らうとする）もうよからう。

あや子　（抑へつけるやうにして）後生だから、もう少し横になつてて頂戴。

亮太郎　（笑ひながら）だつて、ここはお前、寢るやうにできてないんだぜ。（頭を振つてみて）どうもないよ。こら、どうもない。ぢや、少しもたれさせてくれ。（半身を起し、妻の方に倚りかかる）をかしなもんだね、か

うしてるのも……。

あや子　あたし、もう、ここ、いや……。なんて違つた生活なんでせう。二人つきりでゐれば、どんなに苦しんだつて苦しみ甲斐があるわ。道は一筋といふ氣がするんですもの……。

亮太郎　だから、東京へ歸るよ。明日にでも歸るよ。（不圖耳をそばだて）また向うが騷がしいぜ。どうしたんだか、見て來て御覽。（間）あれ、保の聲だらう。何んと云つてる？　誰だい、あの聲は……。おやぢぢやないか。これや、いかん。早く見て來い。

あや子　（夫から離れ、用心深い足取りで奥に去る）

（長い間。――此の間に、亮太郎は、靜かに起ち上り、栗の木に手を支へながら、首を伸すやうにして奥の様子に聽き耳を立てる。）

（再び騷々しい喚き聲が聞える。それが一としきり鎮まると、今度は、年を取つた女の、かき口說くやうな泣き聲が、手に取るやうに聞えて來る。）

あや子　（足音を忍ばせて來る）

亮太郎　なんだ。

あや子　保次郎さんが、またお父さんと……。

亮太郎　なんだつて……。

あや子　よくわからないけど、お父さんは、今すぐに出て行け、貴樣こそなんとかつて大變な劍幕なの。保次郎さんの方は、變に皮肉な笑ひ方をしながら、勿論、なんとかとなんとかは兩立しないんだから、こんな家にはゐられないつて、さつさと脚絆を穿かうとしてるの。それをお母さんが泣いて止めてらつしやるとこ……。

亮太郎　耳を傾けながら、（制するやうに）よし、よし……。

第五場

第一場と同じ。

深夜――

あや子が腰かけてゐる。その前を亮太郎が行つたり來たりしてゐる。

やゝ長い間。

あや子　あなた、腰かけていらしつたら……。何んだか、氣がせかせかして、なほ時間がたつのが遲いやうだわ。

（間。）

亮太郎　靜かになつたね。雨も止んだやうだ。

あや子　もつとひどい嵐になるかと思つてたのに……。

亮太郎　ああいふ時、君はなかなか勇敢だね。雷が鳴るたんびに、眼の色は變つてたが、あれツとかなんとか云つて、人に抱きつかないところは、たしかに女丈夫の面影

がある。

あや子　おだてないで頂戴。

亮太郎　おだてるんぢやないが、あれでは、側についてる男は物足らないよ。こつちは、一と通り壯烈な氣持になつて、君の出方一つでは、僕がついてるから安心し給へツてなことを、涙ぐらゐ眼にためてだね、あれでも、云つてみたかつたんだ。

あや子　馬鹿にしてるわ。

亮太郎　僕には、どうも近頃、さういふ欲求があるやうだ。

あや子　あたしが、勝氣すぎるつておつしやるんでせう。

亮太郎　さういふわけぢやない。

（長い沈默。）

あや子　あしたの朝、着いたら、すぐ髮を洗ふの。

亮太郎　君はもうさういふことを考へてゐるのか。（間）保の奴、きつと東京へ出て來るぜ。

あや子　……。

亮太郎　保のことを云ふと、君はすぐ變な顏をするが、あれでも、僕に取つては一人きりの弟だ。ああして家を出ては行つたものの、今頃、何處で何をしてるかと思ふと、一寸暗い氣持になるよ。同じ家を出るのにしても、僕たちのやうに、ほかに生活の基礎があれば、また別だがね。（間。突然、窓の外に向ひ）誰だ、そこに立つてるのは……。

あや子　（ギヨツとして。そつちの方を見る）

亮太郎　なあんだ、電柱か……。

（長い沈默。）

あや子　あなたは、ほんとに、どうかしてらしつてよ。

亮太郎　どうかしてるね、確に……。あの栗の木の下がいけないと思つてゐたんだが、此停車場もよくない。ああ眼が眩みさうだ。（どつかと腰をおろし、頭を兩手でかかへる）

あや子　靜かにさうしてらつしやい、默つてね……。つまらないことばかりおつしやるからいけないの。なんでもないことを變にお取りになるからいけないのよ。

亮太郎　それやさうだ。君はなんでも知つてる筈だ。早く東京へ歸らう。

あや子　ええ、歸りませう。

（間）

亮太郎　田舍つていふところは、どうして、かう、總てが陰氣に出來てるんだらう。山も陰氣だ。森も陰氣だ。谷も陰氣だ。家も木も草も、動物も人間も、みんな陰氣だ。陰氣なばかりぢやない。毒氣を含んでゐる。僕だけか知ら、さう思ふのは……？

あや子　あなただけよ。あなたのさういふ氣持が、あたし

にもうつつたといふだけよ。

亮太郎　君にもうつつたつてね。それぢや、君は、なにかあの家を、初めは陰氣だと思はなかつたかい。

あや子　陰氣だとは思はなかつたわ。

亮太郎　それぢや、どう思つた。

あや子　どうつて別に……。

亮太郎　あの栗の木だつてさうだ。

あや子　また栗の木……。

亮太郎　さうだ、よさう。(間)だがね……。さうだ、よさう。

(長い沈默。)

あや子　東京はまだ暑いでせうね。

亮太郎　暑いだらうね。(間)どうして、そんな暗い方ばかり向いてるの。誰かそこにゐるの？

あや子　(哀願するやうに)あなた……。

亮太郎　馬鹿なことを云ふもんぢやない。(起ち上り、またその邊を歩き廻る)おやぢはね、おれが死ぬまで歸つて來んでもいいつて云ふんだ。それはどういふ意味だと思ふ。君には、あまり口を利かないやうだつたね。

あや子　ええ。

亮太郎　しかし、君のことを感心してたよ、よく氣がつくつてね。田舍者が感心するつて云へばそれくらゐのとこさ。(間)お袋は、君を人間扱ひにはしてなかつたね。いや、ほんとだよ。少くとも、ただの人間だとは思つてなかつたよ。お辭儀ばかりしてたぢやないか。あれも、變な婆さ。笑ふつていふことを忘れてしまつたんだね。

あや子　ほんとに……。

亮太郎　昔から、あの村では、村で一番の何々つていふ具合に、いろんな名物を數へ上げて、それを事毎に噂し合つたもんだ。村で一番の金持が何處の誰、村で一番の年寄が何處の誰つていふ、それをまた、子供達までが聞き覺えてね。隨分滑稽な話さ。僕なんか、小さいくせに、その頃村で一番の美人だつたお初さんといふ娘を見に、そつと、その家の庭へ忍び込んで行つたもんだ。勿論、一人でぢやないよ。(間)今ぢやもう、そんなことを問題にしなくなつたらしいね。世間が廣くなつたんだ。(間)村で一番の栗の木つて云へば、だから、その時分は、相當自慢の種さ。どうして笑ふの。だから、今ぢや自慢にもならないつて云つてるぢやないか。(間)君は今度、僕の家つてものを見て、がつかりしたらう。

あや子　また、そんなこと……。

亮太郎　やつぱり、あの栗の木だけかな、さうしてみると、君に見せるつて云へば……。

(間。)

あや子　それを枯らしてしまひになるのは惜しいわ。

亮太郎　どうせおやぢが承知しやしないよ。そこで、もうこつちは、栗の木なんかに用はないんだから、さつさと、こんな處は引上げて、もつと氣の利いた生活を始めると、それでいいぢやないか。（間）さ、もう少し愉快な話をしよう。

あや子　……。

亮太郎　僕はね、今度東京へ歸つたら、どつかで借金をして、家を一軒建てるよ。自分で設計をしてさ。此の間うちから、それを考へてるんだが、庭はどういふ風にしよう。木を植ゑるとすると、どんな木がいいかね。

あや子　サルスベリつていふ木ね、あの木、あたし好き……。

亮太郎　サルスベリか、あれもいいね。

あや子　栗の木は……？

亮太郎　おい、よせ。

（長い沈默。）

あや子　なによ、そんなに大きな聲を出して、見つともないぢやありませんか。

亮太郎　やつぱり云つてしまはう。いいか、君は、僕にかくしてることがあるだらう。栗の木が何んだ。どうして君は、そんなことを云ひ出すんだ。栗の木の下でどうしたと云ふんだ。それを云つてみ給へ。

あや子　なにをおつしやるの、あなたは……。

亮太郎　なんにも云やしないよ。君が云ひ出すのを待つてるんだ。今日まで、どんなに我慢をしたか。もうよからう、この邊で、解決をつけよう。

あや子　なんの解決……？

亮太郎　駄目だ。君にさう出られると、やつぱりこつちの負けだ。なんでもない、其處で、その庭だ。サルスベリを一本と……。

あや子　なによ、はつきりおつしやいよ。栗の木つて云つたのがわるかつたの。

亮太郎　惡かないよ。まあ僕の云ふことを聽け。庭にはサルスベリを一本と……。僕はね、伊太利風の庭園にしようかと思つてるんだが、どうだらう。

あや子　どうも變だと思つたら、やつぱり、さうなのね。そんならさうと、どうしてもつと早くおつしやらなかつたの。

亮太郎　なんでもないつて云つてるぢやないか。それとも少し植木に金をかけて、純日本風の庭をこさへようか。サルスベリだつて植ゑられるよ。

あや子　ねえ、あなた、今のお話、ちやんとして下さらない。何時までも、そんな風に思つてらつしやるといやだ

から……。

亮太郎　もういいんだよ。僕が惡かつたよ。家の方は、そんなに嚴くなくつてもいいね。

あや子　そんなこと、いや、誤魔化さうとなすつちや……あたし、聽かないから……。(首を振る)

亮太郎　だから、僕がわるかつたつて云つてるぢやないか。もうわかつたよ。何とも思つてやしないよ。

あや子　ほんとね。

亮太郎　ああ、ほんとだよ。

あや子　きつとね。

亮太郎　きつとだよ。そんなにむきになる奴があるかい。常談なんだよ、あれや……。

あや子　また、そんな……。

亮太郎　だから、それでいいつて云ふのに……。うるさいなあ。(いきなり、急ぎ足で外に出る。が、しばらくして、戻つて來る) 綺麗に晴れてる。星が一杯だよ、空は……。此處へ着いた時は朝だつたね。さうさう、そこで辨當を食つたつけな。あん時は、それでも、大いに歸省氣分かなんかで、輕便の時間を待ち遠しがつたもんだ。一と月のうちに、變れば變るもんだね、氣持なんていふものは……。しかし、人間には、ほんたうに故鄕といふものが必要なのかねえ。君なんかどうだい。東京が戀しいといふのは、故鄕だからといふよりも、都會だからといふ理由の方が主だらう。僕が東京を戀しがるのと同じわけに違ひない。都會は住んでみないと、ほんたうの有難味がわからない。田舍の生活は、想像してゐる方が樂しいといふのは眞理だね。

あや子　それも、人によりはしないこと?

亮太郎　人によるかも知れないが、田舍はもう懲り懲りだ。

あや子　やつぱり、家といふものが中心にならなければ……。

亮太郎　それや、さうだ。結局、情愛の問題だね。親とか兄弟とか――君はまあ、さういふものはないからいいけれど――煩はしい關係といふ以外に意味のないものかも知れないよ、どうかするとね。

あや子　それが不思議よ、あたし……。

亮太郎　僕だつて、不思議でないことはないさ。こんな筈ぢやないと思ふこともあるが、さう思つても、やつぱりどうすることもできないんだからしやうがない。

あや子　不幸ね。

亮太郎　フカウ……?

あや子　ふしあはせね。

亮太郎　ああ、さうさね……。まあ、しかし、それもどうだかわからないさ。肉親の愛だけが、人間を育てて行く

わけのものぢやないからね。
あや子　夫婦の愛は……？
亮太郎　それは口に出すべきことぢやない。
あや子　あら、どうして……？
亮太郎　さういふものなんだよ。（時計を見ながら）もう
ぽつぽつ、切符を賣りさうなものだね。（切符賣場の方
へ近づく）
あや子　秋みたいね。今夜は……。
亮太郎　……。
あや子　全く秋だわ。
亮太郎　しみじみとかい？
あや子　ええ、しみじみと……。
亮太郎　駄目ぢやないか、先を云はなけれや……。
あや子　だつて、何にも云ふことはないわ。
亮太郎　ぢや、しかたがない。（朗吟するやうに）

けふつくづくと眺むれば
悲みの色口にあり
たれもつらくはあたらぬを
なぜに心の悲める。
…………。

あや子　それ、なんの歌……
亮太郎　知らないのか。秋の歌さ。――秋風わたる青木立
――と續くんだが、それはまあ、それとして、向うから
誰か提灯をつけてやつて來た。
あや子　この汽車に乘るんでせう。
亮太郎　提灯は二つだ。發つ人、送る人か。
あや子　……。
亮太郎　（あや子の傍に座を占め）此の停車場も、これで
しばらく見納めだ。
あや子　さう思ふと、やつぱり、一寸變でせう。
亮太郎　變なもんかい。（間）しかし、君はうれしさうだ
ね。ほんとにうれしいのかい。東京へ歸るのが、そんな
にうれしいか。
あや子　ええ、うれしいわ。
亮太郎　もう、二度と此處へは來たくないか。
あや子　來たくない。
亮太郎　どんなことがあつてもか。
あや子　どんなことがあつても……。
亮太郎　そんなら、いつまでも、僕のそばを離れないか。
あや子　離れない。
亮太郎　どんなことがあつてもか。
あや子　（うなづく）

亮太郎　（起ち上り）　よし……。

あや子　（顏をそむけ、指の先で、そつと涙をふく）

亮太郎　（その邊を歩きまはりながら）　村で一番の栗の木よ、今年もうんと實が生れ。

——幕——

温室の前（三場）

大里貢
同　牧子
高尾より江
西原敏夫

東京近郊である。
一月中旬の午後五時――

第一場

大里貢の家の應接間――石油ストーブ――くすんだ色の壁紙――線の硬い家具――正面の廣い硝子戸を透して、温室、グリーン・ハウス、フレム及び花壇の一部が見える。
硝子戸に近く、高尾より江――二十五六歳に見える――が、ぢつと外を眺めてゐる。さつぱりした洋裝――
――間――
大里牧子――二十八九歳ぐらゐの目立たない女――小走りに現れる。

牧子　どうも、お待たせしました。兄がなんにも云つてつてくれないもんですから、間誤ついちまつて……。（雨人腰をおろす）普段から、兄は兄、あたくしはあたくしでせう。何一つ手傳はせないんですの。あたくしも、また、それをいいことにして、自分勝手なことばかりしてゐるんです。けれど……ですから、かういふ時、困りますの。でも、留守にすることなんか、滅多にないんですものね。さうですわ、ここへ引込んでから、今日が初めてぐらゐですわ、東京へなんぞ出ましたのは……。
より江　もう、おからだの方は、すつかりおよろしいんですの。
牧子　だらうと思ふんですけれど……その後、風邪一つ引きませんし……。あの顔色ですもの、大丈夫でせう。
より江　ほんとに、長らくお患ひになつたなんて思へませんわ。でも、まあ、あなたが、よく……。
牧子　ええ、これも、仕方がありません――。なんていふと、えらく悟つたやうですけれど、あたくしたちは、御承知の通り、珍らしく身よりつていふものがないんですからね。物心のつく頃から、兄一人妹一人で、育つて來てるんですから、かうして一生、お互の世話になつて暮すなんていふことが、それほど不自然には思へないんで

すの。(間) それや、兄さへその氣になつてくれゝば、兄の世話は、「その人」に委せて、あたくしは、外へ出るなりなんなり出來ないこともありませんけれど――その爲に、一通り覺えることだけは覺えておいたんですのよ――さあ、それが、何時の役に立ちますやら……。

より江　タイプライタアもなすつたんですつて……。

牧子　タイプライタアは邦文の方だけですけれど、速記も序に習ひましたし……。それに、何時ぞや、神田でお目にかかりましたわね、あの頃は、ミシンをやつてましたのよ。

より江　さうですつてね。あれから、もう四五年になりますかしら……。逗子からお通ひになつてたんでせう。

牧子　ええ。兄の病氣が、まだひどい頃でした。晝間だけ看護婦について貰つて……。(間) それでもあの頃は若う御座んしたわ。

(沈默。)

より江　でも、不思議ですわね、こんなところで、お目にかかるなんて……。標札を見ると、大里貢……なんだか聞いたことのある名前だとは思つてましたの。毎日通るんでせう。あなたのお兄樣だと知つたら……。それでもあなたが御一緒にいらつしやるかどうかわからないし……。あれで、昨日、停車場であなたに御目にかからなかつたら、今頃は、まだ知らずに、あの前を通り過ぎてるんですわね。

牧子　あたくしを御覽になつて、どうお思ひになつて……(間) 女も、かういふ生活をしてるとおしまひですわ。(間) さう云へば、あなたは、いま……なんて云つたらいいかしら……どういふ方のところへ……。

より江　あたくし……獨りなの。(間) いやですわ、そんな顏して御覽になつちや……。

牧子　でも……。

より江　そんな筈ないつておつしやるんでせう。さうね、御存じなのね。學校を出ると、すぐ、行くには行つたんですけれど、ぢきに出ちまひましたの。出されちまつたのかも知れませんわ。それから、ずつと、かうして働いてるんですの。

牧子　働いてらつしやるつて……。まだ、そのお話、伺つてませんわ。

より江　銀座の、ピリエつていふ、フランス人の經營してる化粧品店、御存じない。あの店にゐるんですのよ。

牧子　まあ。

より江　母と二人、結構暮して行けますわ。男の厄介にならないだけましですわ。

牧子　ほんとに……。

より江　それはさうと、兄さまの、此の御商賣も、なかなか面白さうですわね。御繁昌で結構ですわ。

牧子　ところが、商賣つていふのは名ばかりで、ほんとは道樂なんですの。ですから、流行らないのは我慢ができるとして、根が無愛想なたちでせう。一度來たお客様は大概二度と來なくなつてしまふんですの。（間）でも、あなたのやうなお客様があると、それや、よろこびますわ。いゝえ、それがね、お交際がまるでないんですからね。口に出しては云ひませんけれど、やつぱり寂しいんでせう。學校時代のお友達も、ここへ來てから、訪ねて下さる方はただの一人もなし、あたくしがまた、引込思案なもんですから、御近所づきあひさへ、ろくにしない方で……。（間）それに、また、いろいろお話もあるでせう。ほんとに、時々いらしつて下さいましね。毎日でもよう御座んすわ。今晩は、ゆつくりしていらつしやれるんでせう。もうぢき歸つて來ますわ。

より江　ええ、ありがたう。昨日、一寸御目にかかつただけですけれど、なんだか、親しみのもてさうな方つていふ氣がしましたわ。不思議ねえ、以前のことを、それでも、いろいろ思ひ出しましたわ。それに、やつぱり、草花なんか作つておいでになる方は、どこか、自然と同じ呼吸をしていらつしやるのね。これからちよいちよいお話ができるのは樂しみですわ。

牧子　ちつとも覺えてらつしやらないつて、不思議ですわね。兄は、あれで學校時代には法律をやつたり、文學をやつたりしたんですけれど、法律は始めから嫌ひでしたし、文學は、物事を複雜にするからつて、買ひ集めた本を、みんな賣つてしまひましたの。でも、時々、歌なんか作つてるらしいんですのよ。

より江　あたくしなんか、本が讀みたくつても、暇がありませんもの。

（長い沈默。）

（此の時、硝子戸越しに、大里貢がフレムを見廻つてゐる姿が見える。）

より江　（貢のゐるのに氣づき）お兄さまがお歸りになつたやうですわ。あたくし、お暇しようかしら……

牧子　（外をふり返り）あら、何時の間にか……。（立つて行つて、硝子戸に近づき、それを細目に開け）兄さまもうお歸りになつたの。

貢　（腰をかがめたまま）誰か來なかつたかな。

牧子　學校の前の花屋さんから、いつもの人が來て、チュリツプの球根を少し分けてくれつて云ふんですの。わからないから、今夜出直して來てくれつて、さう云つて置きました。それから、去年、一度來た、あのお爺さんね、

露西亞人みたいな帽子を被つた、あのお爺さんが來ましたよ——ほら、何時か、生意氣なことを云ふつて、あなた、お怒りになつた運轉手みたいな男ね、あれを伴れて……。

貢　なんて。

牧子　グリーン・ハウスを見せろつて……。

貢　そいで……。

牧子　あたくしにはわからないつて、斷りましたの。

貢　どなたか、お客さん？

牧子　いま？　ええ。どなたかあてて御覽なさい。

貢　高尾より江さん。

牧子　あら、御存じなの。まあ、あきれた……。ぢや、どうして、早く御挨拶をなさらないの。

貢　今、行くよ。一寸、手を洗つて……。

牧子　（より江に笑ひかけ）知つてたんですつて……。きまりが惡かつたんでせう。

より江　（これも面白がつて）そんな？

貢　（現る）やあ、失禮……。

より江　昨日は……。

貢　ようこそ……。僕達は、お客さんのもてなし方を忘れてるかも知れませんが、しばらく辛抱して遊びにいらしつて下さい。そのうちに、また慣れると、いくらか殺風景でなくなるでせう。ええと、紅茶でも入れたらどうだ

より江　もう、どうぞ、おかまひなく……。

牧子　おかまひができればいいんですけれど……。すつかりお話に夢中になつて……。ねえ、兄さま、より江さんはね、あの……（頭に兩手をやり）いろんなことが、ごつちやになつて……。（起ち上る）

貢　まあ、ゆつくり聞かう。それより、お菓子があつたかなあ。

牧子　さあ……。（奧に去る）

より江　横濱は、棧橋までいらしつたんで御座いますか。

貢　ええ、船の着く處を見て來ました。ポルトスとかいふ佛蘭西メールですが、なかなか立派ですね。

牧子　（茶の道具を持つて現る）すぐおわかりになりました。

貢　わかつたさ。西原の奴、五年の間に、すつかりハイカラになつて來たよ。あの方ぢや、なかなか出世してるらしいね。出迎人が大したものだ。やれ、何々會の總代、やれ何々新聞の記者、さういふ連中に取り卷かれて、おれなんか、眼と眼とで、一寸挨拶しただけだ。

牧子　何を研究にいらつしつたんですか。勞働問題ですか。

貢　まあ、さうさ。あの男は、しかし、なかなか才人だからね。なんでも、芝居なんかのことも調べて來たらしい

よ。そんなことを新聞記者に話してたぞ。大いに民衆劇の運動を起すんださうだ　どうです、高尾さん、僕の友人のやる民衆劇を、一つ、見に行つてやつて下さい。

より江　お芝居なら、あたくし、大好きですの。

貢　芝居も、長く觀ないなあ。

牧子　（茶を薦めながら）より江さんに案内して頂いて、何時か行かうぢやありませんか。

貢　お前がさういふ氣を起してくれればありがたい。高尾さんは、われわれの生活に、何か非常に鋭い――例へば光りのやうなものを與へに來て下すつたんだね。失禮ですが、御主人は何處かへお勤めにでも……。

牧子　それが、今、お一人なんですつて……。お母さんと御一緒は御一緒なんだけれど……。

貢　へえ、さうですか。

（長い沈默。）

牧子　より江さんがね、一度、温室を見たいつておつしやるの。兄さま、あとで御案内してね。

貢　ああ、いいとも……。今、あんまり花は咲いてません　よ。ぢや、暗くならないうち、一廻りして來ませうか。

より江　でも、お疲れになつてやしませんかしら……。今日に限りませんわ。

貢　ちつとも疲れてなんかゐません。（起ち上る）

牧子　（制して）まあ、お茶を召上つてからになすつたら……。そんなに慌くもないんですから……。

貢　（腰をおろし）それやさうだ。

より江　今、どういふ花が咲いて居りますんですの。

貢　今はね、さうですね……シクラメン、ヘリオトロオプ、シネラリヤ……。

より江　へえ、シネラリヤが……。

牧子　そんなに感心なさる程ぢやありませんのよ。ほんの申譯に咲いてるんですの。

貢　そんなこと云ふなら、此の春來て御覽なさい。チユリツプがどんなに咲いてるか、まるで和蘭へ行つたやうですよ。それからヒヤシンス、これは東京中で一番見事な花を咲かして見せます。

牧子　效能書はもう澤山……。それだけのことを、他のお客樣におつしやれたら、えらいんだけれど……。

貢　云つてるよ、みんなに云つてるよ。

より江　あたくしも、花の作り方を教へて頂かうかしら……。

貢　あなた、さういふこと、お好きですか。かういふ世話をしてみたいとお思ひになりますか。

より江　ええ、食べてさへ行ければ……（笑ふ）

牧子　さあ、それが問題ですわ。

貢　（起ち上り）ぢや、お伴しませう。

より江　（これも釣り込まれるやうに起ち上り）どうぞ……。

（兩人出て去る、やがて、硝子越しに、二人の後姿が見える。牧子、一つ時、ぼんやりその方を見てゐるが、思ひ出したやうに、くるりと正面を向くと、兩肘をテーブルの上に突き、兩手で顎を支へながら、何事か瞑想に耽る。此の間、貢とより江の姿は、現れたり隱れたりする。長い間。牧子は、突然、テーブルを離れるが、何となくそはそはした樣子で、茶器を片づけたり、窓から外を見たり、鏡の前に立つて髮を直したり、つくづく手の甲を眺め入つたりなどする。再び長い間。やがて、また、彼女は、書架の間より寫眞帖を取り出し、その頁を繰り始める。そして、低く、「西原」「西原」と云つて見る。それは、消えかけた記憶を呼び覺まさうとするものの如くである。また寫眞帖を繰る。一つの寫眞を長く見てゐる。外の足音に驚いて、寫眞帖を元の處にしまふ。貢、續いて、より江現る。）

牧子　外は寒いでせう。

より江　溫室から出るのがいやでしたわ。さあ、もうお暇しなくつちや……。

貢　まあいいでせう。

牧子　ほんとに、おうちさへよければ……。

より江　いいえ、遲くなると、やつぱし母一人ですから、それに、あの邊は、それや、寂しいんですのよ。

貢　お送りしませうか。

より江　まだ大丈夫ですわ。ぢや、御免遊ばせ。また、いづれ近いうちにお邪魔させて頂きますわ。

牧子　そんなこと仰しやらないで、毎日、是非……。

より江　（笑ひながら）お兄さまのお留守の時を見はからつてね……。

貢　どうしてです。え、どうして……。

（より江を送つて、貢、牧子、出づ。）

貢の聲　さよなら。

より江の聲　さよなら。

（やがて、貢現る。）

貢　（あたりを見廻しながら）此の應接間も役に立つたね。

（間）おい、牧子、一寸來て御覽。（ポケットから、色々の化粧品を取り出しながら）來て御覽つてば……。

牧子　（現れ）お腹が空いてらつしやるでせう。

貢　腹は空いてない。これ、どうだい。

牧子　（不審さうに貢のすることを見ながら）それ、なんですの、一體……。そんなもの、どうなさるおつもり……。

貢　おれがどうするわけもないぢやないか。お前に買つて來たんだよ。

牧子　あたくし、眉墨や頬紅なんか、もう使ひませんよ。

貢　使はなくつてもいいから、しまつとけ。

牧子　何を思ひ出して、こんなもの買つてらしつたの。

貢　いろんなことを思ひ出してさ。それはさうと、お前、西原は一人で歸つて來たよ。金髪美人を連れて來るだらうなんて云つてたけれど……。

牧子　まだ、どうだかわかるもんですか。後から追つかけて來ることだつてありますわ。

貢　疑ひ深い奴だなあ。しかし、あいつ、おれんとこなんかへ遊びに來るかねえ、久し振りでゆつくり話さうつて今日、手紙を出しとかうと思ふんだが……。當分、神田の鳳仙閣つていふホテルにゐるらしい。一人ぢや、家を持つわけにも行くまいしね。奴さん、お前がかうしてるのを見たら、きつとびつくりするぜ。

牧子　（そんな話に興味はないといふやうに）ぢや、御飯の支度をして來ますわ。

貢　まだ早いよ。もう少し話をしようぢやないか。今日はなんだか、いろんなことが新しく始まるやうな日だよ。今日まで、世間から離れて、たつた二人つきりで送つて來た暗い生活の中へ、思ひがけなく、同時に、二人まで華やかな――さうだ――二人の華やかな友達が訪れて來るんだ。來たと云つてもいい。あいつは、きつと來るよ。

牧子　兄さま。より江さんをどうお思ひになつて……？

貢　氣持のいい人だね、何してるの？

牧子　外國人の商店に働いてるんですつて……。賣子みたいなもんかしら……？　でも、下品なところはないわね。

貢　さうか、職業婦人だね。なんでもいいさ。お嫁に行つたつて云ふのはどうしたの。お前、昨夜、さう云つたらう。間違ひだつたの。

牧子　一度行つたんだけれど、うまく行かなかつたらしいの。

貢　はあ。なに、かまふもんか、そんなこと……。友達として交際（つきあ）ふ分にや、一度目だつて、二度目だつてかまやしない。

牧子　友達としてなんて仰しやらなくつてもいいぢやないの。

貢　まあ、さう、つけつけ云ふなよ。おれは、しかし、駄目だ。そんな氣は起さない方がいい。それよりも、おれは、何時も云ふ通り、お前のことを心配してゐるんだ。それも、今までの生活では、何時どうといふ望みはなかつた。しかし、かうなつて來ると、お前の周圍にも、明るい、和やかな空氣が漂ひ出すんだ。それを、お前も、

感じるだらう。感じなければうそだ。感じるやうにしなくちやいけないよ。さうなれば占めたものさ。お前は、まだ若い。いや、若いんだよ。あの人を見ろ。より江さんを……。お前と同い年だらう。あれが、つまり、周圍の空氣を感じてゐる證據だ。お前も、あの通りになれ――笑ふ奴があるか。

牧子　男つて呑氣なものですわね。いくつになつても空想があつて……そして、その空想に相應した興奮があつて……。

貢　何を云ふか。おれは、今日、自分でも少しはしやぎすぎるなと思つてゐる。だからつて、別に、さういふ氣持を抑へる必要はないぢやないか。これはほんの譬へだがね、今、より江さんがおれの細君になり、西原がだよ、お前の旦那さんになつてくれてさ、さういふ二組の新しい生活が始まるとしたら、お互に、よろこんでもいいぢやないか。それはあり得ないことかも知れない。しかし、一昨日よりは、あり得べきことだらう。さういふ今日に廻り會つたことだけでも幸福ぢやないか。希望は逃げて行くもんだ。しかし、希望が一つ時でも、こつちを向いて笑つてくれれば、こつちも、大いに笑つてやればいいぢやないか。

牧子　そんな理窟は成り立つかどうか知りませんけれど、兄さまの、さういふ元氣なお顔を見るだけでも、晴れ晴れしますわ。より江さんは、いろいろ事情はあるでせうけれど、きつと、そのうちに兄さまを好きになると思ひますわ。兄さまさへ、今のやうなお氣持でいらしつたら、話は、とんとん拍子できまると思ひますわ。さうなつたら、あたくしも安心ですわ。ここのお勝手をあの方にお預けして、あたくしは、どつかへ働きに出ますわ。できれば、あの方の今の仕事を讓つて頂くやうにしますわ。

貢　そんなことをしなくつてもいいよ。お前はお前で、ちやんと、結婚をして、此の近所に家を持つさ……。さうするまでは、そんな、働きになんぞ出なくつたつて、一緒に家の仕事をすればいいぢやないか。あの人は、花をいぢるのが好きだつていふから、そつちの方を手傳つて貰つてもいいし……。

牧子　とにかく、もう少し、おつきあひしてみないとわかりませんわね。

貢　それもさうだ。急ぐことはないさ、下手に切り出してもうここへ來ないなんて云はれちや、なんにもならないからね。それくらゐなら、始めからなんにも云はずにゐて、いつまでも、友達として出入をして貰つた方がいいよ。ああいふ友達は　是非、必要だ。われわれの生活には……。さつき、温室の中で、おれの手を見て、まるで

木の根みたいな手だと云ふんだ。觸つて御覽なさいつて、手を出したら、面白がつて、指で撫でたりなんかするんだよ。ああいふ友達は是非必要だね、われわれの生活には……。

第二場

同じ應接間。

三月下旬――午後一時頃。

鉢木植の草花――新しい裸體畫――輕快な臺ランプなど。

貢と西原とが話をしてゐる。

貢　かうして、君が遊びに來てくれることは、僕らに、まだ生甲斐があるといふことを教へられるやうなものだ。ああして、君が、僕の健康の爲めに乾杯してくれたのを見て、牧子は泣いてたよ。今も、どつかへ行つて、まだ泣いてるだらう――あいつは、どうしてあんなに氣が弱いのか、近頃泣いてばかりゐるんだ。(大きな聲で)おい、牧子……。

西原　まあ、もう少し靜かにさせておいてあげたらいいぢやないか。かうしてゐると、いろんなことに氣を遣ふだらうからね。

貢　なにしろ、僕達は、あんまり世間から離れ過ぎてゐたよ。

西原　もうわかつたよ。いつまでもそんなことを云つてたつてしやうがない。これからは、大いに交際を廣くするさ。君も、早く細君を貰つたらいいぢやないか。

貢　(狼狽して)　いや、なにしろ、あいつから片づけなくつちやね。

西原　君は、それで、食ふに困らない財産はあるんだし、早く妹さんを片づけて、一度西洋へでも行つて來るんだね。さうすると、人をあんまりこはがらなくなるよ。早く云へば圖々しくなるよ。おれみたいに……。

貢　いや、その點ぢや、牧子なんかは、女だからでもあるが、久し振りで會つた君にさへ、あの通り、ろくに口が利けないんだからね。今日はこれで、四度目かい。まだ昔通りにはいかないらしい。

西原　七年も別れてゐると、さうだらうな。こつちは、割合に、變つてないつもりなんだけれど……。

貢　だから、思つてることが云へない。云はうと思つてることを、みんな相手に云はれちまふんだ。

西原　それや、どうだか……。

貢　(云ひ直して)　みんなでもないが、どうでもいいやうなことはさ。(苦笑する)

(牧子が盆にコップをのせて現れる。なるほど、泣い

た後とは察せられるが、見違へるほどの若々しさである。)

牧子　こんなもの、お口にあひますか、どうですか……。

西原　今日は、あの方、見えないんですか。

牧子　あ、より江さん……。さあ、もう見えるかも知れませんわ。日曜の午後は、たいがい、見えますから……。

貢　君に會つたら、いろんなことを云はうと思つてたんださうだ。

西原　だれ？

貢　いや、こいつがね、ところが、君の顏を見たら、なんだか、氣おくれがして……。

牧子　あら、氣おくれなんて、そんな……。

西原　僕はね、牧子さん、向うに行つてる間、何處へも手紙を出さなかつたんですが、一度だけ、あなたの處へ繪端書をあげようと思つたことがあるんですよ。思つただけぢや仕方がありませんが、それは、そん時、丁度切手を買ふ金がなかつたんですよ。その繪端書つていふのは多分、今でも何處かへしまつてある筈ですから、此のつぎ、持つて來ます。

牧子　まあ、なんの繪端書でせう。

西原　あなたに似た女優の繪端書ですよ。(貢に)　よく似てるんだよ。佛蘭西の女は、そんなに毛唐臭くないからね。

牧子　まあ、あたくしに似た女優なんて、ゐますでせうか。

西原　女優つて云へば、牧子さん、一つ、女優になつてみませんか。

牧子　あたくしがですか。女優にですか。人が笑ひますわ。

西原　處が、笑ひません。なぜ笑はないかつて云へば、職業俳優には出來ない芝居をやるんです。僕たちは、今度市民劇場つていふ遊動劇團をこしらへるんですよ。どうです、晩、七時から十時まで、暇はありませんか。

牧子　さあ……。でも、あたくし、舞臺なんぞへ出たら、足がすくんぢまひますわ。

西原　さういふ役を振らうぢやありませんか。足のすくむ役を……(一同笑ふ)　男はいくらもゐるが、女がゐないんでね。

貢　君は、どうして、あつちの女と結婚しなかつたの

西原　どうしてつて、そんな無理なこと云つたつてしやうがないぢやないか。

貢　さうかなあ。やつぱり、日本の女がいいかね。

西原　いや、さういふ意味ぢやなくね。しかし、今では、さう云つとくよりほかあるまいね。

貢　君は、日本の女の、どういふ女がいい。

西原　さあ、そいつは、見てみないとわからん。

貢　見てみたうちでは、どんなのがよかつた。
西原　さういふつもりで見てみないとね。
貢　さういふつもりで見てみろよ。
牧子　（たまり兼ねて）兄さま、西原さんさへおよろしかつたら、少しその邊を御一緒に散歩でもしてらしつたら……。
貢　食後、少しづつ、歩くことにしてるんだ。なに、今日はどうでもいいんだ。
西原　歩くなら歩かう。
貢　此の邊は、森がいいんだ。ああ、さうさう、家はまだ見つからないの。
西原　それがね、市中はやつぱり駄目だよ。と云ふのが、客が多くつてね。
貢　そんなら、此の邊へ來たらいいぢやないか。家はいくらも空いてるよ。そんなに廣くなくつてもいいんだらう。あの家はどうかね、尼寺の隣の家さ。此の間まで札が出てたぜ。
牧子　あそこは道ばたてやかましいでせう。それより、あれはどうですかしら……。少し不便ですけれど、より江さんの御近所に、なんでも、畫かきが建てた家が、建てたつきりになつてるんですつて……。借手があれば貸すらしいんですよ。

貢　アトリエづきだね。それやいいぢやないか。
西原　いいね。見せて貰へないかしら……。
牧子　より江さんのお母さんにお話すれば、わかりませう。一寸、行つて、伺つて來てみませうか。
西原　なんなら、散歩かたがた一緒に行つてもいいね。
貢　それや、それでもいいが……（獨言のやうに）家を空つぽにするわけにや、いかんし、おれがいきなり、より江さんの家へ行くのは、初めてなんだから、一寸、工合がわるいしと……。
牧子　そんなこと、かまひませんけれど、とても、わかりにくい家ですから……。
西原　ぢや、僕が牧子さんについて行かう。
貢　ああ、さうしたまへ。それがいい。

（貢は、西原と牧子とを送り出してから、やがて、その姿を、硝子戸の向うに現す。しばらく、立つたまま、ぢつと一點を見つめてゐる。晴れやかな微笑。それから、上着を脱ぐ。煙草に火をつける。その煙を、空に向つて、大きく吹く。煙草を喫ひ終ると、温室の中から、鉢を二つづつ運び出して、花壇に竝べはじめる。
長い間。
此の時、より江の姿が、また硝子戸の向うに現れる。貢を見つけて、その方に近づいて行く。二人は立話を

する。より江の快活な笑ひ聲。貢は、また仕事にかかる。より江は、それを見てゐる。そのうちに、彼女も手傳ひはじめる。仕事の句切がつくと、二人は、應接間にはひつて來る。)

貢　今の家を借りたつていふのは、やつぱり畫かきですか。

より江　ええ、さういふ話ですけれど……。でも、畫かきらしくないんですの。その人が……。

貢　それがほんとかもしれませんね。ぢや、西原君が畫かきだつて云つて、はひつてもいいわけですね。先生たちがつかりして歸つて來るでせう。

より江　家なら、ほかに、いい家がありますわ、いくらでも……。

貢　僕たちは、あんまり外へ出ないから、わからないけど、一つ、心掛けといて下さい。不便なのは、いくら不便でもかまはないつて云つてましたから……。

より江　西原さんつて、西原敏夫さんておつしやる方でせう。此の間、報知講堂で講演をなさいましたわね。

貢　さうですか。僕は、近頃、新聞なんか見ないもんだから……。

(長い沈默。)

より江　隨分活動していらつしやるやうですわね。

貢　さうでせう。

(長い沈默。)

より江　近頃は、お忙しかありませんの。

貢　僕ですか。いいや。(間) 僕、かういふ歌を作つたんですが、どうでせう。——呼吸もつかず、足音も立てず、何者か、忍び寄る如し、綻びを縫ふ——つて云ふんです。實感なんです。

より江　(考へて) さあ……。あたくし、歌なんかわかりませんけど……。でも、あなた、御自分で綻びなんかお縫ひになるんですの。

貢　あなたの前で、かういふことを云ふのは可笑しいですけれど、妹なんていふものは、あれで、やつぱり、兄きの身のまはりの世話なんか、十分にできないものなんですね。どうも、自分のうちつていふ氣がしないらしいんです。あれで亭主の面倒が見られるかと思ふくらゐですよ。横着でしないわけぢやないでせうが、さういふ張合がないんでせうね。これ御覽なさい (上着の釦が取れかけてゐるのを見せ) これだつて、氣がついてゐるのか、ゐないのか、一週間前から、このままですよ。かうして(釦を引きちぎり) とれてゐたつて、こつちから云ひつけるまで直しやしませんよ。

より江　でも、それは、お兄さまが、ずつとおうちにいらつしやるからですわ。外へお出ましになるやうな御商賣

なら、きつと、氣をおつけになるんですわ。

貢　そんなら、うちの中は、どうでもいいつていふわけですね。さうなんですよ。此の部屋だつて、あなたがたが見えるやうになるまで、額一つかけようとしないんですから……。さういふことは、女の氣持でどうでもなるんですからね。さういふ、うちの中の飾り方なんていふものは……。

より江　さうですかしら……。

貢　僕は、自分で別段に、趣味のある人間だとは思つてゐませんが、相當、生活に趣味らしいものをつけてくれるやうな人間が、そばにゐてくれればいいと、いつでも思ふんです。さもなければ、活氣です。こいつが欲しい。實に、だれきつてゐるんですから、僕達の生活は……。

より江　さうは見えませんわ。

貢　近頃でせう。それは……。あなたがたのお陰ですよ。殊に、あなたのお陰です。いいえ、ほんとです。僕は、今、かうして元氣よく働いてゐるのも、あなたの爲めになるべく美しい花を咲かせようといふ希望があるからですよ。あなたが見に來て下さらなくなつたら、僕の温室の花は、みんな色がさめてしまふでせう。

より江　（戲談に取つて）あら、そんな……。

貢　うそだと思ひますか。そんならもつとお話をしませう。僕たちが――まあ、僕がと云つてもいいわけですが――かういふ仕事を始めたのは、別に、それで生活しなければならないからぢやないんです。なにか、健康的な、そして、人手を煩はさずに自分の生活を明るくするやうな仕事はないかと、あれこれ考へた末、花を作つてみようと思ひ立つたんです。牧子には、物をこしらへ上げるといふ樂しみがわからないんです。物を大切にしまつて置くことはできる。しかし、育てて行くことに興味がもてないらしいんです。おわかりになりますか。これは、たしかに、あいつの生涯を暗くしてゐます。從つて、僕の……。また愚痴を云ふやうですが、僕の生活を、半面に於て不幸にしてゐる。

より江　でも、牧子さんは、どなたの爲めにああして、今迄、お獨りでいらつしやるんですの。牧子さんの生涯が、まあ、假りに暗い生涯だとすれば、その責任は、どなたにあるんですの。

（長い沈默。）

貢　（だんだん憂鬱になる）

より江　さういふことおつしやるもんぢやありませんわ。あたくしさう思ひますわ。

（長い沈默。）

貢　僕の責任もないことはありません。だから、どうすれ

ばいいんです。僕の力で、それがどうかなるんですか。

より江　早く牧子さんを自由にしておあげになることですわ。

貢　自由に……？　あいつは自由です。

（長い沈默。）

より江　あたくし、かういふお話をしに來たんぢやありませんわね。

貢　いいえ、かまひません。僕に間違つたところがあつたら、云つて下さい。僕は、さつき、あんなことは云ひましたけれど、實際は、牧子のことを一ばん心配してゐるんです。あなたが自由にしてやれつておつしやる意味は、どういふ意味だかはつきりわかりませんが、あいつを幸福にしてやることなら、どんな犧牲でも拂ふつもりでゐます。あいつが、今、どつかにいい口があつて、嫁入りでもするやうなことがあれば、僕は、勿論、自分の不自由ぐらゐは忍ぶつもりです。

より江　（笑ひながら）　それは、あたり前ですわ。それは犧牲とは云へませんわ。

貢　ああ、さうですか。なるほど、それはまづい譬でした。そんなら、どうしたらいいでせう。

より江　そんなこと、あたくしにお訊きになつたつて存じませんわ。また、お答へすべきことぢやないと思ひますわ。その事は、牧子さんが一番よく考へていらつしやる筈ですもの。

貢　あいつには、意志がないんです。したくないことはあつても、したいことはないんですからね。それだけは、僕が一番よく知つてゐますよ。

より江　全くお氣の毒ですわ。

貢　あなたの力で、どうか、あいつに、前へ踏み出すことを敎へてやつて下さい。あいつは、今、自分の眼の前に大きな幸福が待つてゐることを知つてゐるんです。それを知つてゐながら、どうすることもできずにゐるんです。

より江　でも、さういふことは、誰にだつてありますわ。

（長い沈默。）

より江　あたくし、また伺ひますわ。今日は少し急ぎますから……。お晝までに歸るつて云つてありますの。

貢　それぢや、御飯はまだでせう。

より江　いいえ、それを濟ませて來たものですから、遲れてしまひましたの。一寸した用事でも、なかなか午前中には片づきませんのね。またお邪魔させて頂きます。（起ち上り）途中で、牧子さんなんかにお遇ひするかも知れませんわね。

貢　まだ、いろいろお話ししたいこともあるんだけれど、御都合が悪るければ、また此のつぎにしませう。（これ

も起ち上り、より江を迯つて出る。長い間）
より江の聲　もう、よろしんですのよ。ほんとにもう……
あら、ここが、こんなに濡れてますわ。
貢の聲　ははあ、バケツが漏るんだな。チヨッ、しやうがないな。
（長い間。）
貢　（やがて、二三通の郵便物をもつて現れる。その一つを開封する。讀む。讀みながら、椅子を引寄せ、腰をおろす。また別のを開いて讀む。何れも、何んでもない手紙。さういふ時の精のなささうな表情。草花の鉢を一つ取り上げ、香を嗅ぎ、根ぎは、それから葉の裏を檢め、不用な莖を摘み採りなどする。窓ぎはに立つて外を見る。外へ出る。しばらくして歸つて來る。また出て行く。（長い間。）
（此の時、牧子と西原とがはひつて來る。）
西原　別に急がないんだから、よう御座んす。ゆつくり探すことにしませう。
牧子　ほんとに濟みませんでした。（入口の方を振り返り）さあ、どうぞ……。かまはないぢやありませんか、そんなこと……いやな方ね。
より江　（ためらひながらはひつて來る）あら、お兄さまは……。
牧子　何處へ行つたんでせう。裏ですわ。一寸呼んで來ますから、どうぞ、御ゆつくり……（かう云つて出て行く）
西原　もう少し早いか遲いかするとよかつたですね。
より江　あたくしがでせう。
西原　僕達がですよ……。
より江　おんなじですわ、それぢや……。
西原　お母さんはまだお若いですね。
より江　あたくしがお婆さんだからですわ。
西原　さうお取りになつちや困りますよ。あなたは實に鋭敏だ。どうです、あなたは芝居をやつて見る氣はありませんか。
より江　どういふお芝居ですの。
西原　勞働者に見せる芝居です。勞働者とは限りませんが、つまり、面白い脚本を、頭のいい素人が、熱心にやつて大勢に、安く見せる芝居です。
より江　あたくしに出來ますかしら……。
西原　出來ます。
より江　暇がありますかしら。
西原　夜は何時から暇です。
より江　五時から……。
西原　何時まで……。
より江　母に相談してみますが、許してさへくれれば、電

車があるまで……。
西原　よろしい。電車代とお辨當しか出ませんよ。
より江　結構ですわ。
西原　明日から、僕の事務所へ來て下さい。
より江　母に相談してみますわ。
西原　事務所は此處です。（名刺を渡す）
より江　牧子さんにもおつしやつて御覽になりました？
西原　先生は、舞臺に出ると、足がすくむさうです。
より江　あたくしもさうかもしれませんわ。
西原　無理に勸められない仕事ですからね……。
より江　あたくしからお勸めしてみますわ。
西原　お母さんさへお許しになればいいんですね。
より江　ほかに許しを受ける人なんか御座いません。
西原　さうですか。
（牧子、續いて、貢、笑ひを浮べながらはひつて來る。）
貢　殘念なことをしたね。（より江に）や、いらつしやい。
より江　意氣地なく、引張られて參りました。
貢　さうあつてこそです。トランプでもしませうか。
西原　僕は知らない、さういふ遊びは……。まあ、君達、おやんなさい。
牧子　お敎へしますわ。

西原　いや、僕は勘辨して下さい。それより、水を一杯どうぞ……。
牧子　只今、紅茶を入れますわ。
西原　なに、水で結構……。水の方が結構。
牧子　（取りに行く）
西原　僕にかまはずに、やり給へ。
貢　そいぢや、まあ、面白い話でもしよう。
貢　どうせ暇潰しさ。何をしたつて同じことだ。僕たちは、二人きりだと、よく、トランプの獨り占をやるんだよ。二人が、めいめい、默りこくつて、あれをやつてゐると、夜なんかね、一寸、神祕的だよ。
より江　さういふことがお好きらしいわね、お二人とも……。
西原　結局、閑人なんだね。
貢　いや、閑なことを苦にしてる人間なんだよ。
西原　閑人といふものは、閑を苦にしてる人間だよ。閑を樂んでゐる人間に、閑人なんかありやしない。
貢　それも一說だね。さうすると、僕たちは閑があり過ぎるのかなあ。
西原　あり過ぎるね。
牧子　（水を持つて來る）あり過ぎるんですつて……。閑なんかありませんわ。

貢　こいつは、閑を閑とも思はない女なんです。忙しい忙しいつて云ひながら、何もせずにゐる。

牧子　あら、うそばつかし……。

より江　そんなことありませんわね。あたくしなんか、どうかすると、なんにもすることはないと思ひながら、一方で、なにかしなくつちやならないと思ふでせう。その氣持がこんがらかつて、結局、落ちつけないことがありますわ。

西原／貢　（同時に）それはありますね。

牧子　（同時に）さういふ時だつて……
より江　（同時に）つまり、さういふことが……。

牧子／より江　（互に「どうぞ」といふ眼くばせ）

西原　（引取つて）閑は出來ちや駄目だね。作るやうにしなくつちや……。

貢　それを云ふだけならやさしいがね。

西原　商賣にもよるさ。

牧子　西原さんなんかは、おつしやるだけぢやないでせう。

（長い沈默。）

貢　此の部屋はなんだか陰氣だな。外が馬鹿に明るいだけに、家の中は、なんだかすすけてて惨めだ。

牧子　また外でお茶にしませうか。

より江　温室の前の芝生がよう御座んすわね。あそこで、何か戴くと、味が違ひますわ。

牧子　そいぢや、さうしませう。兄さま、一寸、また、手傳つて下さいません。

貢　机はあれでいいだらう。

より江　ええ、ですけど、椅子が……。

西原　椅子なら、僕が持つて行きます。

より江　あたくしも持つて行きますわ。

牧子　それぢや、めいめい、御持參で……。（先へ出る）

より江　（その後から、續いて）何かお手傳ひしませうか。

牧子の聲　いいえ。いいんですのよ。

貢　（より江が持つて行かうとする椅子を無理に取り上げ、兩手に一つづつ持つて出る）

西原　（これも、兩手に一つづつ持つて、その後に續く）行きますよ。

より江　（ひとり、窓から、温室の方を見てゐる。懐中鏡を出し、手早く顔を直す）

（長い間。）

牧子の聲　より江さん、いらつしやい。

より江　はい（と答へたきり、ぢつと、眼を据ゑて、何か考へてゐる。寧ろ、何かを待つてゐる）

（長い間。）

貢の聲　いらつしやい、より江さん

より江　いま、すぐ　（さう云つて、まだ、動かない）

（長い間。）

（此の時、突然、西原の姿が、硝子戸に近く現れる。より江はそれを知らずにゐる。）

西原　（極めて落ちついた調子で、しかし、親しみを籠めて）お茶が冷めますよ。

より江　（ハツとして、その方を振り返る）

西原　（朗らかな微笑を以て之に應へる）

第　三　場

同じ應接間。

五月初めの夕刻、七時頃——

薄暗い燈火——窓掛が風にゆれてゐる。

牧子が現れる。勿論、前場の若々しさは去つて、もとの日立たない女になつてゐる。窓ぎはに椅子を持つて行つて、それに腰をかける。ぼんやり外を見てゐる。

呼鈴が鳴る。

彼女は、一寸首をかしげて、不思議だといふ眼つきをするが、急いで座を起つ。やがて「あら、どうなすつたの。もうすんだんですの。」といふ彼女の聲——間——外出の服裝をした貢が、帽子を被つたままはひつて來る、恐ろしく沈んだ額つき、牧子、そのあとから不安らしくついて來る。

牧子　今日は、もつと、遲くおなりになるだらうと思つてましたのに……。でも、あちらへ行き着くか行き着かないかぐらゐの時間ぢやありませんか……これぢや……？

貢　（牧子の腰かけてゐた椅子に腰をおろし、だるさうに帽子を脱ぐ。牧子、それを受け取る）さうさ、向うへ行きつくか行き着かないうちに歸つて來たんだもの……。

牧子　でも、顏だけは出していらしつたんでせう。

貢　いいや、出して來ない。

牧子　あら。

貢　やつぱり、出さない方がいい——ふと、あそこまで行つてさう思つたんだ。向うとしちや、おれたちを呼ぶ義務があるだらう。しかし、こつちに、行く義務はないからね。

牧子　でも、行かなけれや、變に思ふでせう。

貢　變に思ふだらうな。——しかたがない。こつちとしちや、やつぱり、行かずに濟ましたいからな。

牧子　……。

貢　どうなつたつて、お互にこれまで通りの交際（つきあひ）ができれば、それでいいぢやないか。

牧子　此の一月つていふもの、だつて、交際（つきあひ）らしい交際は

してませんわ。さういふ話があつてからでせう、急にこつちへ來なくなつてしまふなんて、隨分現金ですわ、二人とも……。

貢　その間に、あの芝居といふやつがあつたからな。

牧子　より江さんていふ人の大膽なのには、あきれましたわ。どうでせう、あの大勢の前で……。

貢　さういふ女でなけれや、西原は動かせないんだね。

牧子　それは別の話ですけれど……。

（長い沈默。）

貢　先生達は、結局、いい相手を見つけたね。革命家に勞働婦人……。

牧子　……。

貢　西原つていふ男は、中學時代から秀才だつたが、それや、ひねくれ者でね……。

牧子　より江さんも、學校時代には、それや先生を手古摺らせた人なんですのよ。やさしい問題なんか、あてでもしやうもんなら、存じませんつて、つんと橫を向くんですの。

貢　西原にもさういふ處があつた。しかし、あいつは、熱情家でね。今でこそ、冷靜な口の利き方をし習つてゐるが、昔は――その當時、熱血男兒つていふ言葉が流行つたが――その熱血男兒の標本だつたよ。

牧子　そのくせ、より江さんは、人一倍、涙脆いたちで、よく友達の身の上話なんか聽かされては、獨りで泣いてるんですよ。また、あの頃は、身の上話が流行つたもんですわ。――あたくしなんかも、隨分、聽かせろ、聽かせろつて、人から云はれましたわ。それが、ね、ずつと兄さまと二人つきりなもんで、何かわけがあるだらうと思ふんでせう。その身の上話つていふものを、初めてして聽かせた相手が、より江さんなんですわ。自分では、何氣なく云つてるつもりなのに、あの人、おいおい泣くんですのよ。しまひに、自分でも悲しくなつて……そこへ、また、なんとか、慰めるやうなことを云はれるもんだから、なほ胸がつまつて……。可笑しんですの。それからが、きまつて、例の、仲よしになりませうね、ですわ。

貢　西原の奴、一度、變なところへおれを連れて行つてね……。あれは、たしか、今考へると、戸山ヶ原の射的場かなにかなんだが、薄暗い穴の中でね……。そこで、腕をまくれつていふんだよ。腕をまくつて見せたら、やつも、小さな腕をまくるんだ。それから、何をするかと思つたら、ポケットから、鉛筆を削るナイフを出しやがつてね、――さあ、おれも血を出すから、貴樣も出せ、お互にその血を飲み合はうつて、いきなり、そのナイフを

おれの腕へ突き立てようとするから、おれは、まあ、待て、とね……。

牧子　さう、さう、あの人の寫眞道樂が大へんなもんでしたわ。毎週一枚ぐらゐづつ新しく寫したのを持つて來やしませんでしたか知ら……。それが、また、一一、變つた寫し方で、その爲めに、わざわざ、髮の結ひ方を變へたりなんかしたんですからね。二三度、あたくしも一緒に寫されたことがありますわ。

貢　おれが、これ誰だつて訊いたら、どうしても云はなかつた。あれも、さうぢやないか、そら、お前がすわつて、その肩へ手をかけてる……。これ誰だつて訊いても、お前は笑つてて云はないから、學校へ見に行くつておどかしたぢやないか。

牧子　そんなこと、ありましたかしら……。でも、その前に、あの人、うちへ來ましたわ。

貢　いいや、來ない。卒業する一寸前に、始めて、お前が伴れて來たんだよ。そん時、ははあ、あれだなと思つたんだから……。

牧子　あの頃から、綺麗つて云ふより、目立つ人でしたわね。どつか、ぱツとしたところがありましたわ……。

貢　さう云へば、あの時代に、先生と西原とうちで會つてやしないかしら…… 紹介はしなかつたかもしれないが……。

牧子　あつたにしても、兩方とも、忘れてるでせう。だけど、西原さんも、特徵のある顏だし……。そんなことをもう話し合つてゐるかもしれませんわね。

貢　無論、そんな話は、とつくにしてしまつてるさ。ああん時、あそこにゐたのがあなただつたんですか、なんて、やつたにきまつてるさ。

牧子　ぢや、西原さんていふ方は、大學へいらしつてから、おとなしくおなりになつたのね。

貢　おとなしくつて……そんなにおとなしいか。

牧子　でも、お酒はあがらず、亂暴な口の利き方なんぞ、なさらなかつたでせう、ほかの方みたいに……。神谷さんなんか、出鱈目だつたぢやありませんか。

貢　神谷の方が馬鹿だよ、それや……。西原は、さうだね、大學へ來てから、急にすましだしたね。眼鏡を拭きながら話をすることなんか覺えてね。

牧子　それはさうと……。

（沈默。）

貢　なに？

牧子　いいえ、なんでも……。

（長い沈默。）

貢　これで、先生たちが、同時に、われわれから、非常に

遠い處へ行つてしまふやうな氣もするが、それと反對に何時までも、この邊をうろうろしてゐて、なかなかわれわれの頭の中から消えて行きさうもないつていふやうな氣もするんだ。

牧子　どつちにしても、あんまり……。

貢　うん。それや、まあ、どうでもいいさ。（間）おい、人が歸つて來たら、茶ぐらゐ飲ませろ。それから、此の間から云つてるぢやないか、此の電球をもつと大きいのと取り換へようつて……。

牧子　兄さまこそ、序に、買つて來て下さればいいんですわ。（起ち上る）

貢　それがいけないんだ。自分で家の中をキチンとしようと思はなくつちや……ねえ、もう少し、ここだつて、家らしくできるだらう。

牧子　お茶は、ただのでよろしいんですか。

貢　そんなことも、自分で考へろよ。

牧子　（出て去る）

貢　（頭を抱へる）

（長い間）

貢　（何となく落ちつかぬ樣子で、室內を歩きまはる。時々立ち止つて、耳を澄ます。何を聽かうとしてゐるのかわからない。が、さういふ動作の後で、常に、惱ましげな表情が浮ぶ）

牧子　（紅茶を運んで來る）お湯が少しぬるいんですけれど。

貢　もう欲しくない。

牧子　（椅子に倚り、途方に暮れてゐる）

貢　何も考へることはないだらう。お前にはお前、おれにはおれの生活がある。仕事がある。どうしてそつちを向くんだい。（怒鳴るやうに）こんなことぢや、駄目だよ、何時までたつたつて。

牧子　（ハツとして、そつちを振り返へるが、その眼は、反感といふよりも、寧ろ憐憫の情に近い色で、寂しく曇つてゐる）

（長い沈默。）

貢　（思ひ出したやうに書架の中から、恐らく手當り次第であらう、書物を一冊引拔き、肱掛椅子に投げかかるやうにして、その頁を繰りはじめる。勿論、それは、言葉の調子を變へる準備であつたに違ひない）事務所の電球を外して來てくれないか。

牧子　（素直に立つて出て行く）

貢　（書物をテーブルの上に投げ出し、左の靴を脫ぎ、靴下を脫ぎ、足の指をいぢる）

牧子　（電球を持つて來る。此の光景に聊か意外らしい一瞥

を投じた後）電球、取換へませうか。
貢　ああ。
牧子　（電球を取りかへる。貢の側に近寄り）マメですか。
貢　ああ。
牧子　絆創膏か何か持つて來ませうか。
貢　それより、飯粒を持つて來てくれ。針と……。
牧子　そんなことなすつてよろしんですの。
貢　いいんだよ。
牧子　（飯粒と針とを取りに行つて來る）
貢　（針でマメを潰す。その上に飯粒を塗る。そして、紙片
を張りつける）
牧子　（この間、ぼんやり、傍に立つてゐる）
貢　お前は、何か、することはないのか。
牧子　……
貢　自分の用事はないの。
牧子　いいえ、別に……。
貢　可笑しいね、今夜に限つて、どうして、おれも、お前
も、なんにもすることがないんだらう。
牧子　今夜、兄さまのお留守の間に、しようと思つたこと
はありますのよ。
貢　なんだ、どんなこと……。
牧子　（椅子にかけ）手紙を書かうと思ひましたの。

貢　何處へ？
牧子　お友達のとこ。
貢　友達……？　どんな友達……？　誰……？
牧子　より江さんと同じくらゐ仲のよかつたお友達……。
貢　やつぱり、獨りでゐるの。
牧子　一昨年までは獨りでゐるつていふ話でしたわ。
貢　一昨年まで……。ふむ……。あの、何時か、何處かで
會つたつていふ……。
牧子　ええ、庄司さん……。
貢　書いたらいいぢやないか。東京にゐるの。
牧子　もとの處にゐますかどうですか……。
貢　學校へ聞き合せればわかるだらう。（間）こつちから
手紙をやれば、よろこぶだらうと思ふやうな奴もゐない
な。おれの仲間にや……。神谷ぐらゐのものかな……。
あいつなんか、もう子供の二三人もこさへてるだらう。
案外近所に住んでゐて、知らずにゐる奴があるかもしれ
ないね。
牧子　より江さんなんか、それでしたわ。
貢　此處の前なんか通らない奴でさ。
牧子　さうですわ。
（長い沈默。）
貢　あしたはと……。あいつを植ゑ替へてと……。

牧子　……。

貢　今夜は、もう寢てもいいんだが、寢るには惜しい晩だな。――風が出て來たね。

牧子　……。

貢　何か、かう、事件でも起りさうな氣がするな。

牧子　事件が起つてるぢやありませんか。

貢　こつちにもさ。――ぢつと待つてれば、何かやつて來さうな氣がするんだ。お前、そんな氣がしないかい。

牧子　しますわ。

貢　ね、するだらう。變なもんだね。こんなものかねえ。

牧子　……。

貢　今夜、一晩、起きててみようか。ここに、かうしてて見ようか。何かしら、あるよ、たしかに……。

牧子　いやですよ、そんなことなすつちや……。

貢　兎に角、これは大したことに違ひないよ。四つの魂が此の月の光の中で、ダンス、マカアブルを踊るかもしれないよ。おれは、それが見たいね。一寸でもいいから見たいね。

牧子　なんのことですの、それは……。

貢　靜かに眠ればいいさ。(間)　さもなければ、大きな聲で歌がうたへるか。(間)　どつちもむつかしさうだね。それぢや、どうしよう。(間)　かうしてるよりしかたがないぢやないか――かうして、ぢつとしてゐるより……。

(椅子の背に頭をもたせかける)

牧子　(靜かに涙をふく)

――幕――

可兒君の面會日

可兒君
可兒夫人
女中
織部
木暮妙
鳥居冬
駒井
毛利
泊
齋田

一月十二日午後——
　極めて平凡な客間兼書齋。

可兒君　今日こそゆつくり寢てゝもよかつたんだ。下らないことに氣をつかつたりなんかして——見ろよ、一人も來ないうちから、もう草臥れた。（仰向けに寢ころがる）

夫人　そんなに氣をおつかひになることはないでせう。二時までに、その邊を綺麗にしておいて、ねえやに、襟のよごれた襦袢を着替へさせて、あたくしが、この、カバアを脫ぎさへすればよろしんですもの。

可兒君　それでよろしいもんか。座蒲團は借りてあるか。

夫人　五枚揃つてれば澤山ですわ。

可兒君　でも、初めての面會日だからね。普段來たこともない奴まで、思ひ出してやつて來るかも知れないよ。

夫人　一々端書なんかおだしになるんですもの。それに、月一度は、いくらなんでも、少な過ぎますわ。それも、一日中とか、午後全部とかなら、まだですけれど、二時から三時まで一時間なんていふ面會時間はどこへ行つたつてありませんわ。尤も、その爲めに、來たい人でも來れなかつたりなにかして……。

可兒君　丁度いゝさ。每週例へば月曜日を面會日と決めてだね、第一月曜は朝から一人きり、第二月曜には夜遲く二人、第三の月曜は、一日待ちぼうけを食ふなんていふのは、あんまり氣が利くまい。いや、そんなもんだよ。さうして、面會日でもない日に、一寸でよろしい。お手間は取らせませんてな客が、ぞろぞろ來てさ。そのうちには、圖々しく面會日を無視して、そこまで來た序だなどゝ、晝食から終電車まで尻を据ゑて行く奴がゐるに違ひない。さうなると、面會日には一日縛られ、面會日で

ない日には落ちついて仕事ができず、結局、面會日を決めたゞけ損といふことになる。面會日の最も有效な利用法は、日を成るべく少く、時間を成るべく短く、と、ね、これだ。おれは、月一回、一時間の制度が、最も機宜に適してゐると思つてゐる。それや、もつと交際でも廣くなれば、また別さ。さうなれば、お前を中心にして、月一回ぐらゐ、婦人連だけのサロンを開いてもいゝな。

夫人　あたくしは、さういふことは眞平ですよ。面倒なことは出來るだけ省くといふのが、あたくしの生活のモットオなんですから……。

可兒君　生意氣云へ。おれだつて面倒なことは好きぢやないさ。お前は、なにかい、おれの地位が、社會的に向上するのを悦ばないのか。おれの周圍に集るおれの崇拜者は、おれのそばにゐるお前を、同時に崇拜するやうになるんだぜ。

夫人　有難いものですわね。

可兒君　冗談でなくさ。お前は、さう思はないかい。

夫人　思はなければどうなんですの。あなたは、もうそんなに偉くなつて下さらない方が、あたくしは、安心ですわ。

可兒君　どうして？

夫人　あなたお一人が、だんだん高いところへ上つて行つてしまひになるやうな氣がするのは、いやですわ。

可兒君　ハ、、、、。高いところはよかつたね。女房といふものは、自分の亭主を買ひかぶるか、世間並にさへ認めないのが、世間一般らしいが、お前は、實によく亭主の正體を摑んでゐるよ。いゝ氣にもならず、落膽もせず、さうして、せつせと、原稿の淸書を手傳つてくれてゐる、その内助振りは、全く感激に價する。

夫人　（さういふ冗談口には馴れてゐるらしく、夫の口先の感激に何等の反應を示さず、机に向つてペンを動かしてゐる）

可兒君　昭和二年一月十二日……か、雪は降るまいなあ。

夫人　…………。

可兒君　おい、もう一時半だぜ。おれはこのなりでいゝかしら……。かういふ日に、ドテラはどうかね。

夫人　いゝんですよ。

可兒君　どうしていゝ？　どうしていゝつて云ふんだ。さうかなあ。

夫人　紋附でもお召になりたいんですか。

可兒君　なりたかないさ。誰でもさうか知ら。

夫人　誰でもは誰でもでいゝぢやありませんか。あなたはあなた……。一體、誰が來るんですの、あなたは、普段の通りにしてらつしやればいゝんですよ。人が來たらお

會ひなればいゝんでせう。誰も來るか來ないかわからないのに、こつちばかり、何も、用意をしてゐるわけはないぢやありませんか。

可兒君　お前は、女に似合はず、ドオデモイイニストだね。

夫人　………。

可兒君　物事にけじめをつけることが嫌ひだね。

夫人　………。

可兒君　なに、お前さへかまはなければ、おれは、着物なんか、なんだつていゝさ。

夫人　そら、そんなことおつしやるもんだから、間違つちまひましたわ。こゝはと、……「彼女の眼も、鼻も、唇も、頭も……」……あゝ、唇がぬけたんだ……。

可兒君　そこは肝腎な處だから氣をつけてくれよ。

（此の時、「御免」といふ聲——可兒君は、飛び起きる。二人は思はず顏を見合す。もう一度、「御免」といふ、やゝ急き込んだ聲。女中が取次ぎに出たらしい。やがて——）

女中　（現はる）あの、織部さんがいらつしやいました。

夫人　（夫に笑ひかけ）どうしませう。

可兒君　どうしませうぢやない。（女中に）お上りなさいつて……。（妻に）そこはいゝから……。早く座蒲團……。

夫人　（座蒲團を出し奥にはひる）

可兒君　（机の上を片づけ、さも今迄仕事をしてゐたやうな顏つきで訪問客を待ち受ける）

織部　（女中に案内されて入つて來る）やあ、しばらく……。

可兒君　やあ、端書着いた？

織部　あれを見て、今日ならきつとゐると思つてやつて來たんだが、忙しいんぢやない。

可兒君　なに、今日は、どうせ駄目なんだ。しかし、君なんか、面會日を守つてくれなくつたつていゝよ。あの端書は、序に出したんだが、あれで、まあ、きつとゐる日だけはわかるからね。——さう思つて……。

織部　だからさ……。しかし、月一回は少かないか。

可兒君　會ひたい人間には何時でも會へるんだからね。

織部　それもさうだ。僕も、そら二三年前に、一度面會日を決めたことがあつたらう、——あん時は、毎週火曜にしたんだ——處が、その日に限つて、外へ出る用事ができてね、閉口したよ。用事がなくつても、その日が來ると、なんだか、外へ出て見たくなるんだ。別に、人に會ふのが嫌やなわけぢやないが、うちにぢつとしてゐるのが辛いんだね。妙なもんだよ。結局、何時からともなしに、面會日はなくなつてしまつたわけだが、人が折角訪

ねて來てくれて、まあ、人にもよるが、こつちも會ひたいやうな人がだね、それに留守だと、實に殘念だ。やりきれない氣がするよ。

可兒君　さういふ時、僕は、こつちから、すぐ訪ねて行くことにしてゐる。そら、君が何時か留守中に來てくれたね、あん時も……。

織部　さうさう、あん時は、こつちが……。――また、生憎なもんでね……。

夫人（茶を運んで來る）いらつしやいませ。

織部　やあ、先日は。

夫人　瓦斯が、どういふんですか、なかなかつかなくつて……。どうぞ……。（茶を薦める）奧さま、お變りいらつしやいませんか。

織部　ありがたう。だんだん御盛んで結構です。

夫人　は？　いゝえ、なんですか……。でも、可笑しいもんですわね。面會日をきめると、一番にいらしつて下さるのが、一番お心易い方なんですものね。

可兒君　實際、君なんかゞきつと來てくれるんなら每週一回にしたつていゝね。さうなると、來る方でも、また窮屈だらう。――何時でも會へると思つてゐると、つい、半年も會へなかつたりしてね。皮肉なもんさ。

織部　どうしてまた、十二日としたの。

夫人　可兒の誕生日なんですの。

織部　あ、さうだつたか。

可兒君　自分でも覺え易いしね。

織部　自分で忘れちや話にならん。十二日、さうか。たしか、一月十二日だつたね。それぢや、今日だね、ほんとの誕生日は……。

可兒君　滿三十三さ。

織部　若いね。

夫人　あら、いくつお違ひになるんですの。

（勿論、相手の年は知つてゐて、さういふのである。眼附でそれがわかる。奧に去る。）

織部　處で、實は、少し賴みがあつて來たんだがね。

可兒君　まあ、後でいゝぢやないか。後でゆつくり話さう……。

織部　うん……。まだ誰も來てゐないやうだし、その話さへ出來たら、今日は、少しほかへ廻りたいんでね……。また、そのうち、ゆつくり飯でも食はう。

可兒君　まあ、いゝぢやないか。三時には、みんな追ひ返しちまふから、あとは、君……。

織部　それがね、その話といふのは、ほかでもないが……。

（此の時、「御免下さい」といふ女の聲。）

ぢや、また、後にしよう。

可兒君　（抑へきれぬ微笑）一寸樂しみだよ、これでね……。（耳をそばだてる）

女中　（現はる）木暮さんがいらつしやいました。

可兒君　（首をかしげ）木暮……？

女中　あの、若い女の方で御座います。

可兒君　…………？

女中　此の前、一度見えたことがおありになるんですけれど……。

可兒君　あゝ、さうか……。（一寸考へて）いゝから、お上りなさいつて……。

織部　（察して）愛讀者かね。

可兒君　うん、いや、作家志望の娘さんだ。

木暮妙　（二十一二の學生風の娘。――會釋して入り來る。その後にもう一人、その友達らしい同じやうな年配の女が、ためらひながらついて來る）先日はお邪魔いたしました。この方、あの、あたくしのお友達で、鳥居冬さんつておつしやいますの。やつぱり、先生の御作品を、なんなもんですから、あの、御一緒にお連れしましたんですけれど、よろしう御座いませうか。

可兒君　さうですか、それやどうも……。

鳥居冬　（丁寧にお辭儀する）どうぞよろしく……。

可兒君　學校は、おんなじなんですか。

木暮妙　はあ。でも、あたくしの方が、一年前に出ましたんですの。

可兒君　へえ、あなたの方が後見たいだ。

木暮妙　あら、さう見えます？　あたくし、何時までも子供だつて、みんなに云はれますの。

可兒君　鳥居さんですか、あなたも、何か書いてらつしやるんですか。

鳥居冬　いゝえ。

女中　（茶を運んで來る）

可兒君　あゝ、さうさう、御紹介しときませう。これ、織部九郎君……識つてるでせう、名前は……。

織部　いやあ……。

可兒君　（少女らが識らぬらしいのを見て取つて）駄目だなあ、織部九郎君の名前も知らなくつちや……文學は落第だ。有名な劇作家ですよ。そら、「運命の喇叭」つていふ脚本を、去年の夏、讀賣講堂で、上演したでせう、未來座つていふ劇團が……。知りませんか。知らない筈はないがなあ。尤も、先生の作品は、非常に先驅的で、今の文壇ぢや殆どわかる奴なんかゐないことはゐないんだが……。

織部　もういゝよ、君、紹介はそれくらゐで……。（何氣ないやうに笑ふ）戲曲はあんまり讀まないでせう。

木暮妙　戯曲は讀んでもわかりませんもの……。先生はどういふ雜誌にお出しになりますんですの。
織部　僕ですか。さあ、あなたがたには緣のない雜誌ですよ。
木暮妙　「花園」へはお書きになりませんわね。
織部　あゝ、あゝいふ方へは……。
可兒君　「花園」ばかりが文藝雜誌ぢやありませんよ。
木暮妙　えゝ、それはさうですけれど……。
織部　（思ひ出したやうに）ハ、、、、。
木暮妙　あの、先生が今月の「花園」へお書きになりましたもの、あたくし、少しわからないところがあるんですけれど……。
可兒君　えゝ、まあ、それは此の次ぎにしませう。今日はなんだから……。それより、織部君に、芝居の話でも聞かせてお貰ひなさい。
木暮妙　えゝ……。でも、あたくし、どんなこと伺つていいかわかりませんわ。ねえ、鳥居さん。あゝ、さうだわ、あなた脚本好きだつて云つてらしつたぢやないの。
（長い沈默。）
（此の時、また玄關で、「御免」といふ聲。やがて、女中が名刺を持つて來る。）
可兒君　（それを受け取り）今日はね、面會日でお客さんがあるから、何時か別の日に來てくれつて……。あゝ、奥さんにさう云つて、出て貰へ。
女中　はい。
織部　今日は面會日だから、別の日に來いは可笑しいぢやないか。
可兒君　うむ。
（女中去る、長い沈默。）
夫人　（現はる）その方ね、（と、名刺を見て）今日は御面會日だつていふことを承知して伺つたのですが、一寸でよろしいんですからつて、さうおつしやるんですよ。
可兒君　どんな用か聞いて御覽。よし、おれが行かう。（起つて出て行く）
織部　（名刺をのぞき）關東土地株式會社……。土地でも買はれたんですか。
夫人　いゝえ、さうだとほんとに結構なんですけれど……。
夫人　（女たちに菓子を薦めながら）どうぞお一つ……。（織部に）此頃、碁はなさいませんの。
織部　碁ですか。碁もね……。あれで飯が食へるといゝんですけれど……。
可兒君　（客を伴ひて入り來る）ほかにお通しする部屋がないから、ぢや、此處で……。かまはないんでせう、別に祕密の用件と云ふんぢやないでせうから……。

客　はあ、いえ、別に、こちらはなんですけれど……。（座につく）

可兒君（織部に）　此の人はね、關東土地株式會社の駒井さん……。こちらが劇作家の織部君……。そちらのお嬢さんたちは……まあ、名前は聞かなくつたつていゝでせう。

駒井　はあ、いえ……。（頭を掻く）

可兒君　それで早く云ふと、土地を買へつて云ふんでせう。僕んとこにや、そんな金はありませんよ。

駒井　はあ、いえ……。實は、社長がお伺ひする筈だつたんですが、社長は、丸で文學などわからないんですし、お伺ひ致しましても、まあ、つまり、お話のしかたに困ると申しますやうな次第で、私に是非と云はれましたもんですから……。それと申しますのが、私は、かう云つちやなんですが、少しばかり文學の方が好きで、先生の御作品など愛讀さして頂いてゐるものですから、かういふ機會に、先生に御目にかゝつて置くのもと思ひまして、伺ひましたやうなわけで……。何もわからないもので御座いますがどうかよろしく……。

可兒君　そのお話といふのは、何か、文學と關係があるんですか。

織部　「土の文學」といふのがあるね、近頃……。

駒井　はあ、いえ……。今日伺ひましたのは、早速ですが、私共の經營いたしてをります土地と申しますのが、つまり、分讓地で御座いますが、場所と致しましては、東京近在では、何處にも負けないつもりでをります。眺望と云ひ、氣候と云ひ、交通の便と云ひ……。

可兒君　わかりました。廣告文を書けつて云ふんでせう。

駒井　はあ、いえ……。廣告文と云ふわけぢやないんで御座います。一つ、何時でもよろしう御座いますから、そのうちに、先生の御作品の中へ、さういふ處があるといふことをお書き願ひたいと思ひまして……。

可兒君　はゝあ、宣傳をしろと云ふんですね。

駒井　はゝあ、いえ……。宣傳と云ふわけでなくつても、土地の名前だけでもよろしう御座いますから……。例へば、主人公が戀人を連れて散歩に行つたとか……。

織部　何處です、その土地と云ふのは……。

可兒君　戀人なんか連れて行きさうもない處だよ、きつと……。

駒井　はあ、いえ……。中央線武藏境で降りますと、すぐで御座います。お天氣のよろしい日などは、散歩には持つて來いの處で御座います。三百年前の武藏野の面影が、そのまゝ殘つてをりまして、雜木林の間に、富士山が繪のやうに浮んで見えます。

可兒君　その文章は君が作つたんですか。
駒井　はあ、いえ……。（また頭を掻く）
木暮妙　（袖で顔をかくして笑ふ）
織部　その廣告文ぢや、君、荻窪や吉祥寺と變つたところはないぢやありませんか。
駒井　はあ、しかし、ずつと東京から離れますからして……。
可兒君　それぢや、なほ……。
駒井　いえ、近頃は、それくらゐ離れた方が靜かでいゝとおつしやる方が、大分殖えて來たやうで御座います。
織部　離れてゝもいゝが……。さうすると……小說に書くと……。お禮はどうなるんです。
駒井　はあ、その點はまた更めて御相談いたしますが……。
織部　土地を只でくれるんぢやないんですか。
駒井　はあ、いえ……。うんと割引ぐらゐ致してもよろしう御座います。
織部　割引か……。それぢやつまらん。
駒井　（織部にはかまはず）如何で御座いませう、可兒先生、一つ、枉げて御承諾願へませんでせうか。社長とも相談いたしましたんですが、先生にさう願へれば、建物附で極く安く……御都合次第では……。
可兒君　駄目です、僕は……。小說は、君、小說さ、作者が行かうと思ふ處へ、主人公は行きたがらないかもわからんのですからね。
駒井　御冗談……。作者は、それこそ、主人公の運命を握つておいでになるんですから……。
織部　それやさうだ。僕ぢやどうです。可兒君がいやなら僕が脚本の中へ書きませうか。大劇場で上演されゝば、それこそ宣傳になりますよ。その代り、百坪でも、五十坪でもいゝから、土地を只でくれなくつちや……。
可兒君　さうし給へ、織部君に頼み給へ。
織部　僕は、かう書くよ。つまりね、その土地が、いろいろの點から見て、理想的な土地なので、或る金持が買ひ占めにかゝる。するとですね、その土地會社の一青年社員で、まあ、名前は、駒井でもなんでもいゝが……。
駒井　（慌てゝ）はあ、いえ……。
織部　その青年社員が、社長の意に反して、金持の契約申込を拒絕する。そこで、社長は、その青年を解雇しようとするんですね。勿論、青年は、自分の所信を述べて、社長の再考を求めるが聽かれない。青年は、仕方がなく、自分が日頃、慕つてゐる社長の一人娘、これが絕世の美人さ、その娘さんのところへ、それとなく暇ごひに行く……。少し新派かな。
駒井　いえ、結構です。社長に娘はありませんが……。そ

れに土地の方のことをもう少し……。
織部　何れゆつくり考へてからにしませう。僕の處はね、一寸、君、書くもの……。あ、（番地を書き）此處……。すぐわかります。近いうちに來て下さい。
駒井　はあ、何れ、社長に話しまして……。しかし、社長のことは、なるべく惡くお書きにならないやうに……。
織部　その心配は御無用……。なんて、嘘ですよ、そんな話は……。戯談ですよ。
（駒井を除いたほかのもの、みんな笑ふ。此の時、「御免下さい。」といふ聲。）
（沈默。）
駒井　もう少しお邪魔さして頂いてよろしう御座いませうか。
可兒君　もう、その話は打ち切りにしませう。それでよけれや……。
女中　（笑ひながら現る）あの毛利さんでいらつしやいます。
可兒君　お上りつて……。
女中　あんまり大勢さんならばつておつしやるんで御座いますよ。
可兒君　お客さんがかい。いゝからお上んなさいつて……。
女中　（去る）
木暮妙　あのあたくしたち、お暇いたしますわ。
可兒君　どうして……。まだいゝぢやありませんか。丁度いゝお話相手ができたから……。
木暮妙　でも……男の方でせう。
可兒君　男だといけないんですか。
鳥居冬　（木暮に）ほんとに、お邪魔だといけないわ。
木暮妙　ぢや、もう少し……（腕時計を見ながら）もう十分……。
織部　どつちへお歸りですか。
木暮妙　あたくしは、赤坂……。この方、本郷でいらつしやるんですの。
織部　僕も本郷ですから……、それぢや……。本郷は何處です。
（大學生少し恐縮して入り來る。）
毛利　今日は、こんなことだらうと思つて、餘程此の次にしようかと思つたんですけれど……。
可兒君　此の次だつて、同じことだよ。學校はもう濟んだの。
毛利　僕はまだ行かないんです。あ、先生の今度の拜見しました。
可兒君　（それに頓着なく、又は頓着せぬ風をして）紹介しとかう。これ、織部九郎氏……。（間）識つてるだら

う。（間）劇作家のさ……。

毛利　（考へて）あ、さうですか。

可兒君　毛利君、學校の後輩だ……。それからと、そこにをられるレディースは、こつちのグリーンの方が木暮妙さん、そつちのオレンヂつて云ふかね、それが、えゝと……。

木暮妙　（引取つて）鳥居冬子さま……。

可兒君　若い人達を引合はすのは、好い氣持ちだね、なんとなくビリビリと來るもんがあつてね。

駒井　先生方にかゝつちや敵ひませんな。

女中　（茶を運んで來る）

可兒君　（毛利に）此間の問題はどうなつたの。

毛利　あのまゝです。

可兒君　それや困るね。なんとかなりさうなもんだね。

（長い沈默。）

（また、「御免遊ばせ。」といふ聲。）

織部　なかなか來るね。

木暮妙　あたくしたち、失禮いたしますわ。

可兒君　まあいゝでせう。

織部　僕も、失敬しようか。

可兒君　まだよからう。

女中　（現る）佐伯さんつておつしやる御婦人の方で御座います。

可兒君　どんな人？

女中　あの、三十ぐらゐの、品のいゝ方で御座います。

可兒君　あゝ、さうか。（一寸當惑して）それではと……。兎に角お通しして……。しかし、こゝぢやなんだから奥さんにさういつて……。（奥に向ひ）おい、一寸……。

夫人　（現る）は？

可兒君　佐伯の細君らしいんだがね。わざわざ今日でなくつたつていゝのに……。どこか通す部屋はないか。

夫人　さあ。

可兒君　ないね。こゝでもいゝか。あの話だらうと思ふんだがね。こつちから伺ふからつて、歸つて貰はうか。よし、兎に角、おれが出よう。（起ち上つて出て行く）

夫人　（織部に）ですから、あたくしが云はないことぢやなかつたんですよ、月に一度ぢや無理だつて……。でも、今日は特別で御座いませう。

織部　第一、十二日なんていふ日を選んだのが間違ひですよ。いくら誕生日だつて、月半ばつて云へば、誰でも人ぐらゐ訪ねたくなる時分ですからね。これで、三十日とか、なんとかいふ日だとね、それ、一寸、出にくい、そこを面會日にするんですね、客が多くて困るなら……。

夫人　でも、可兒は、十二といふ數を、それや、有がたが

るんですのよ。二でも三でも四でも割り切れるなんて申しましてね。

織部　それから、六でも割り切れますな。

夫人　どうですか……。それに一年は十二月で御座いませう。

織部　それから、子丑寅の十二支といふ奴ね。

夫人　はあ。それに、可兒の兄弟と、あたくしの姉妹とを寄せますと、丁度十二人なんで御座いますの。

織部　そんなこと云へば、わたしと家内とは十二違ひですよ。

夫人　あら、不思議ですわね、

可兒君　（現れ）ちつとも不思議ぢやない。だから、圓滿なんだ。（座につき）十二といふ數はね、七だとか、十三だとかいふやうに、ある神祕的な感じをもつた數ぢやないが至極朗らかな、整然たる感じのする數だ。從つて、少し常識的だが、實生活を律する上には、却つて安全な氣持を與へるんだ。僕は好きだよ、此の數が……。

織部　僕はどつちかといふと七とか十三とかいふ數が好きだね。（毛利に）あなたはどうです。

毛利　さあ、僕は、さういふことを考へたことはありませんが……。（木暮と鳥居に）あなた方はどうですか。

木暮　（鳥居と顔を見合せながら）あたくし、やつぱり十二が好きですけれど……。十六もよろしう御座いますわね。

織部　なるほどね。あなたは……。

鳥居　あたくし、一が好きですわ。

織部　これや、よほど深い意味がありさうだな。君はどうです。

駒井　はあ、いえ……。私なんかは別に……。なるべく多い數がいゝくらゐなもんで……。

織部　こりや名言だ。

（一同笑ふ。）

駒井　（名譽恢復を思ひたち）十は如何でせう。

（誰も相手にしない。長い沈默。）

（「賴まう。」といふ大きな聲。）

女中　（現る。名刺を差出す）

可兒君　（それを受け取り）泊六郎……。へえ、これは珍しい。（奥に向ひ聲をかけようとするが、やめて起ち上り一寸考へて）兎に角、お上りなさいつて……。（誰にともなく）どうもはや……。

織部　誰だい。

可兒君　（新しい客を坐らせる場所をこしらへながら）此處ぢや、ちよつと、狹いね。

夫人　（現る）毛利さん、恐れ入りますが、その座蒲團を

一寸……。あなたはよろしいでせう。

毛利　(敷いてゐるのを外し) 僕、もう、歸りませうか。

可兒君　うん、まあ、いゝさ。氣の毒だなあ。

泊　(訝しげに、あたりを見廻しながら入り來る。何處に坐つていゝか一時ためらつてゐる)

織部　さあ、どうぞ、あちらへ……。

泊　(入り口に坐り織部に向ひ割合に打ち解けた調子で) やあ、しばらく……。

織部　(間誤ついて) 可兒君はあちらです。

泊　(落ちつき拂つて) あ、さうですか。(一座を見廻し可兒君を見つけ) やあ、しばらく……。つい、どうも………。

可兒君　さうかね。君、泊君かね。

泊　變つたかね。さういふ君も……なるほど、聲を聞けばたしかに昔の君だ。

可兒君　今、どうしてゐる。

泊　まあ、それは、ゆつくり話すが、今日は何か、寄合日かね。(改めて一座を見廻す)

可兒君　いや、面會日なんだ。

泊　さうか。そいつは、丁度よかつた。二三年前から、新聞や雜誌で、ちよいちよい名前を見るのでね、一度訪ねたいと思つてゐたのだが、十年近く會はずにゐて、だしぬけに訪ねたんでは、と思つてね。何かいゝ機會がありさうなものだと、實は、今日まで待つてゐたやうな次第だ。處が、昨夕、偶然「クイン」といふ雜誌を讀んだら、君の小說が出てゐる。――實は、君の書いたものを讀むのは、これが始めてだ、それは斷つて置くが――。すると、中に書いてあることが、どうも、僕のことらしい。あの「彼」といふ男は、たしかに僕だ。――いや、かまはんよ。あれは、小說だ。ね、さうだらう。だから、事實とは違ふ。違ふのがほんとだ。それくらゐのことは、僕だつて知つてゐるよ、しかし、僕をモデルにしたものに違ひない。あの時の僕は、たしかに、あゝ見える男だつたらう。そこでだ、君があれほど僕に好意を持つてゐてくれるなら、今、訪ねて行つても、まんざら、いやな顏はされまいとね、なに、皮肉ぢやないよ、これは……。近頃の小說で、主人公があんなに優遇されてゐる小說はないよ。僕は自分をあれほど善人だとは思つてゐないだけに、聊かくすぐつたい氣持にはなるが、君が僕を善人に見立てゝくれたことに腹は立たない。――おや、こんなに獨りで喋舌つていゝのかい。

可兒君　それや、かまはないが、その話は、まあ、もつと、後でしようぢやないか。それより、君の、その後の樣子を聞きたいもんだなあ。

泊　それこそ、何時でも話せる。僕はね、昨夕、あれを讀んでから、今日此處へ來るまで、そのことを考へ續けたんだ。――君が一體、僕といふ男を――あの時、あんなことをした男を、なぜ、あれほど寛大な心で見てゐてくれるかといふことが、僕には、どうしてもわからないんだ。

可兒君　まあ、いゝぢやないか、そんなことは……。

泊　いゝや、よくない。それを聞きに來たんだ。聞かしてくれ。

可兒君　今日はね、月に一回の面會日で、此の通り大勢お客さんが見えてゐるんだから、君一人と話をしてゐるわけに行かないんだ。

泊　(悄げて)　さうか。しかし、もう一と言云はしてくれ。君は、あの小說の中で、僕の今の家内と、以前何處かで……。(かう云ひかけて、あたりに氣がつきやつと)　さうか……。こいつはまづいな。

可兒君　まづいとも……。君は、まだ、こゝにゐる人たちに挨拶もしてゐないんだぜ。

女中　(現はる。名刺を差出す)

可兒君　(名刺を見ながら)　原稿なら、當分駄目だ……。あ、奧さんに一寸つて……。

女中　(去る)

夫人　(現はる)

可兒君　これ、用事を聞いてね、原稿なら斷わつてくれないか。

夫人　(笑ひながら去る)

可兒君　(更めて、泊に)　さういふ譯だから、もう少し落ちついて、順序よく話をしようぢやないか。先づ、紹介をして置かう。これが、僕の友人、織部九郎君……。

泊　(それには應へず)　面會日は何曜と何曜だね。

可兒君　これが劇作家の織部九郎君だ。挨拶をし給へ。

泊　此の次の面會日は幾日……？

可兒君　おい、君、織部君に挨拶をしろ。

夫人　(現はる)　あの……原稿も原稿ですけれど、一寸お目にかゝつて、伺ひたいことがあるつて云ふんですけれど……。

可兒君　忙しいつて云へ。

夫人　でも面會日なんですから……。

可兒君　だから、人なんかに會つちやをられん。

夫人　そんな無茶なことおつしやつたつて……。ねえ、織部さん。

可兒君　そんなら、どうとも勝手にしろ。

夫人　(起ち上りながら)　上つて頂いてもよござんすね。

可兒君　上る奴は勝手に上れ。

夫人　（去る）
織部　僕は、ぢや、失敬するから……。（起ちかける）
可兒君　いや、君はまだ歸つちやいかん。
毛利　僕、お暇します。
可兒君　君も歸つちやいかん。
（長い間。）
木幕妙　あの、あたくしたち、もうなんですから……。（手をついて、お辭儀をしかける）
可兒君　えゝと、あなた方はゐたつてかまひませんよ。
（間。）
駒井　（仕方がなしに）　ぢや、私が……。（坐り直す）
可兒君　あ、さうして吳れ給へ。折角だが……。
駒井　どうも御邪魔をいたしました。ぢや皆さん、お先へ……（起ち上る）　あの……先生、一寸……お顏を拜借……。
可兒君　なんですか。顏ですか。
駒井　（廊下へ出ながら）　はあ、一寸、お顏を……。
可兒君　（廊下へ出る。駒井の後ずさりする方へ機械的について行く。便所の戸口である）
駒井　（辭をひそめて）　先程お願ひしました一件で御座いますが……。
（此の時新しき客座敷に通る。）

可兒君　まあ、考へて置きませう。
駒井　はあ、どうぞ一つ……。お禮の點は、充分なにするつもりで御座いますから……。それに……。
可兒君　兎に角、今日は、こんな風だから、明日にでも來て見て下さい。明日、さうですね……明日なら、何時でもかまひません。
駒井　はあ、どうも……。では、明日……。（便所の戸を開けかける）
可兒君　歸るんなら、こつちですよ。
駒井　はあ、いえ……一寸……。（戸を開けてはひる）
可兒君　（手持無沙汰さうに一つ時駒井の出て來るのを待つてゐる。がやがて座敷に歸る）
新しい客　わたくし、「亞細亞文學」の齋田で御座います。
可兒君　もう澤山です。
齋田　は？
可兒君　御覽の通りの有樣ですから、とても原稿なんか書けやしませんよ。
齋田　いえ、今日は、その、實は、談話筆記をさして頂きに上りましたので……。今度、各方面から、少し變つた姓名の方に、御自分の姓名についての御感想、又は、御意見を伺つて、それを一つの欄に集めて見ることになりまして……。

可兒君　僕の姓名は、そんなに變つてやしませんよ。

齋田　いえ、どう致しまして……。大分變つておいでになります。「可兒」と申します姓は、やはり琉球の……。

可兒君　そんなことはどうでもいゝぢやありませんか。

齋田　でも……。さう致しますと、「可兒」といふ字は、なぜ……。

可兒君　なぜも糞もない。可兒だから可兒です。君はなぜ、齋田ですか。え、なぜです。齋田……齋田……何が齋田だい。なぜ、織部です。なぜ、木暮です。なぜ……。(つまる)

木暮妙　(手傳つて)　鳥居……。

可兒君　うん、なぜ鳥居です。え、なぜ、毛利です。なぜ泊です。泊……、泊……。泊なんていふ名があるもんか。

齋田　それや、さうおつしやられゝばそれまでゞすが……。

可兒君　それまでなら、それまでゞいゝぢやないですか。僕は、今日は、君なんかの相手になつてをれんのですからね。惡しからず……。それではと……用事を段々に片づけよう。ぢやありませんか。木暮さんはなんでしたつけな。

木暮妙　いえ、あたくしは、別に……。(と云ひながら包みをひろげ)　これ、お暇の時に、また、御覽下さいませんでせうか。(原稿を出す)

可兒君　(受け取り)……「冬は橇に乘つて」……(首をひねり)　どうも、何かで見たことのあるやうな題だな。よろしい。拜見しときませう。

木暮妙　どうぞ……。(鳥居冬に眼くばせして)　それでは、また……。(一同に會釋して起ち上る)

鳥居冬　(これも會釋して起つ)

可兒君　(座を起たうとせず)　ぢや、これで失禮……。

木暮妙　(廊下に出て)　あの……先生、一寸……。

可兒君　なんですか。(起つて行く木暮妙について、また便所の戸口に行く。此の時便所の戸が開いて駒井が現はれる)　あ、わかりましたか。

駒井　(恐縮して)　は、どうも、失禮……。(逃げるやうに玄關に去る)

木暮妙　(云ひ出し惡さうに)　あの、あたくし、今、一身上の重大問題にぶつかつてゐるのですけれど、そのことについて、是非先生に御相談して、解決をつけたいと思ひますの。それで……。

可兒君　さう……。なんなら此の次ぎに御話を伺ひませう。

木暮妙　はあ、でも、なるべく急いでその方の始末をつけませんと……。

可兒君　そんなら明日と……明日は駄目か。ぢや、明後日、もう一度いらつしやい。ゆつくり、御話をしませう。

木暮妙　はあ。で、そのことにつきましては、詳しいことは、あの只今の小説に書いて置きましたけれど……。なんですか、うまく書けませんの。

可兒君　兎に角拜見して置きませう。

木暮妙　どうぞよろしく……。（鳥居冬と二人玄關の方に去る。可兒座敷に戻る）

泊　今の二人はなんだね。

可兒君　（それには答へず毛利に）君は、何か用事はないの。

毛利　いえ、別に……。たゞ、一寸……。

可兒君　なに？　此處ぢや云へないの。

毛利　えゝ。さつきの問題なんですけれど……。

可兒君　そんなら、此處だつていゝぢやないか。聞かれて惡いやうな人はゐやしないよ。もう男ばかりだ。

毛利　でも……。

可兒君　駄目だなあ、そんなことぢや……。そんなら、もう少し待ち給へ。

（長い沈默。）

織部　僕は、また出直して來よう。

可兒君　君は急ぐ必要はないぢやないか。

織部　いや、それが、大いにあるんだ。

可兒君　さうか。それぢや、君の方から片づけようか。此處でかまはないんだらう。

織部　うん、それがやつぱり、なんなんだ。

可兒君　祕密を要するのか。君にも似合はないな。それぢやと……。（奥に向ひ）おい、そつち片づいてるか。

夫人の聲　（奥から笑ひながら）こちらは、今、一寸、困るんですの。

織部　かまはないぢやないか、どこだつて……。

可兒君　なにしてるんだい。それぢや、ねえやの部屋は……。あんまりかな。

女中の聲　あら、どうしませう。

夫人の聲　いけないんですつて……。ぢや、失禮して、お玄關になすつたら……。今、お火を入れますわ。

可兒君　ぢや、さうしよう。（起ち上る）

織部　（毛利に）では、失禮。（外に出る）

（兩人玄關に行く。）

泊　（毛利に）あなたは、まだお獨りですか。

毛利　と云ひますと……。

泊　獨りかと云へば、獨身かといふことですよ。可兒君は、あれで評判はいゝんですか。

毛利　さあ……。

泊　（奥に向ひ）奥さん。

夫人の聲　（しばらくしてから）はあ。（現はる）

泊　（にや〳〵笑ひながら）わたくしは、可兒君の舊友です。これから、ちよいちよい寄せて頂きますから、よろしく……。奥さんは、何時、こちらへおいでになりましたか。

夫人　あの……一昨年で御座いますの。

泊　一昨年……。さうすると、丁度、わたしが上の子供を失くした年ですな。

夫人　まあ。

泊　さつきも云つたことですが、わたしは、可兒君に感謝してゐるんです。わたしは、かう見えても、世間に顔向けのできない男なんです。何れ、あとからお聞きになることでせうが……いや、或は、もう、お聞きになつてるかも知れませんが、わたしは、學校にゐる頃、不圖した動機から、親しくしてゐた可兒君の金を盗んだんです。勿論、可兒君は、それを表沙汰にはしてくれなかつた。たゞ、それからといふもの、わたしの方から、自然遠ざかつて行つたのです。なぜ遠ざかつて行つたか。それはおわかりでせう。しかし、心のうちに罪の重荷を引摺つて、一人の親友から離れて行つたわたしは、生活が日に日に荒むばかりでした。學校もやめました。

夫人　そんなお話は、もうよろしいぢや御座いませんか。わたくしには何も關係はありませんもの……。かうして久々でいらしつて下さつたからには、可兒さへ心が解けてゐれば、もともと通りの親しいおつきあひができる筈で御座いませう。ねえ、毛利さん……。

毛利　…………。

泊　今、そこで、どつかの子供が荷馬車に轢かれましたよ、ついそこの酒屋の角で……。

夫人　え、子供が……。

泊　（默つて腕組みをして考へ込む）

夫人　（茶碗などを片づけ始める）

齋田　先生は今、お忙しいですか。

夫人　はあ、なんですか、時間がないやうで御座いますよ。お茶が冷めましたらう。（去る）

可兒君の聲　それぢや、明日……はいけないと、明後日もなんだから、明々後日にしてくれ給へ。（間）いや、朝のうちがいゝな。（間）うん、それぢや、失敬。どうも今日は取込んでゐて……。（座敷へ歸つて來る）そこでと……（齋田に）君、また此の次ぎ來て貰ひませうか。今日はもう疲れた。それに、名前のことなんか、僕はちつとも興味はないんだから、勘辨して下さい。

齋田　どうも弱りましたな。先生のがないといふことになると、一寸、此の企てが無意義になりますんで……。

可兒君　そんなことはないでせう。第一、頭が惡いよ、そ

んなことを企てるなんて……。もつと氣の利いた題目はいくらだつてあるぢやないか。今日は君、賴むから、引取つてくれ給へ。
齋田　はあ、今、一寸、もう一杯熱いお茶を戴いてから……。
可兒君　さうか。（奥に向ひ）おい、熱いお茶を一杯……。
夫人の聲　はい、只今……。
毛利　お疲れになつてるなら、僕も、これで……。
可兒君　さう……。それぢや、さうしてくれ、君の方も急ぐんだね。明日、明後日、明々後日……みんな塞つてるから、その次の日……（指を折りながら）十六日だね、さうしてくれ……。
毛利　何時頃……？
可兒君　何時でもいゝ。朝でも、晩でも……。
毛利　それぢや、さう願ひます。お邪魔しました。
夫人の聲　毛利さん、只今、珈琲を入れますから……。
毛利　はあ、有りがたう。
女中　（珈琲を運んで來る）
（一同默つて珈琲をすゝる。）
（長い間。）
泊　西洋では、珈琲なんか飲む時、こんなに音を立てちや、いかんのださうだね。
（長い間。）
齋田　東の海の林と書いて、何んと讀むか御存じですか。
可兒　知らんよ、僕は、そんなことは……。
毛利　どうも御馳走さま……。ぢや先生……十六日に……
（一同に挨拶して起ち上る）
可兒君　は、よろしい。さよなら……。
毛利　（去る）
齋田　では、わたくしも……。何れ、また、そのうち、何かお願ひに出ます。
可兒君　…………。
齋田　御免……。
可兒君　ぢや、こゝで失敬……。
齋田　どうぞ……。（笑ひながら去る）
（極めて長い沈默。）
泊　今日は、もう暇なんだらう。
可兒君　あゝ、暇だよ……。（力なく兩手で頭を抱へ机の上に肱をつく）
泊　ぢや、ゆつくりしてつてもいゝかい。
可兒君　あゝ、いゝとも……。

—幕—

動員挿話（二幕）

人物

宇治少佐
鈴子夫人
馬丁友吉
妻　數代
從卒太田
女中よし

明治三十七年の夏。
東京。

第一幕

宇治少佐の居間。――夕刻
從卒太田（騎兵一等卒）が軍用鞄の整理をしてゐる。
鈴子夫人が現はれる。

夫人　さ、此の毛糸のチヨッキをどこかへ入れといて頂戴。――あとから送つてもいゝけれど、どさくさ紛れに失くなされでもするとつまらないから……。それに、もう、あつちは、九月になると寒いつて云ふぢやないの。――何もかも、あんたのお世話になるのね。ほんとに、よろしく頼むわ。大變だらうけれど……。病氣だけは氣をつけてあげて頂戴ね。すぐおなかをこはすのよ。
從卒　さうすると、入れるものは、これだけでありますか。
夫人　さうね……。もう大概それくらゐのもんね。お護りはあすこへ入れたと……。
從卒　ウイスキイは二本でよろしうありますか。
夫人　澤山でせう。御自身でも一つ、圖嚢へ入れてらつしやるのよ。
從卒　太田も一つ持つて行きます。それから馬丁もゐますから……。
夫人　そんなに……？　寒い晩にお酒なんかあがるのはいけないんださうだけれどね。よく凍死するんですつて、それで……。
從卒　は？
夫人　凍えて死ぬのよ、お酒に醉つてなんかゐると……。
從卒　どうしてでありますか。
夫人　どうしてだか知らないけれど……。婦人會の講話で、さう云ふお話を伺つたことがあるわ。あんたは飲まない

のね。

從卒　はあ、駄目であります。

夫人　駄目の方がいゝわ。

(此の時、宇治少佐、浴衣姿にて現はる。)

少佐　もう形づいたか。

從卒　はあ、形づきました。

夫人　ウイスキイばかりこんなにお持ちになつて、どうなさるんですの。

少佐　お前の知つたことぢやない。(太田に) そいぢや、今日は歸つていゝ。家のものには、もう會つたのか。

從卒　いゝえ、まだ會ひません。別に用もありません。

夫人　でもねえ……。

少佐　明日は來んでもいゝ。それから、副官に、今晩はもう用はないからつて、さう云へ。

從卒　は。副官殿に、今晩はもう御用はないつて、さう申します。(證明書を取り出し) 御判をどうぞ……。

少佐　出發前に、からだをこはさんやうにせい。

從卒　はあ。(軍用鞄を擔ぎ、出で去る)

夫人　御苦勞さま。

(少佐と夫人とは、對座したまゝ、暫く無言。――おもてを號外賣が通る。)

夫人　號外、買はせませうか。

少佐　うむ。

夫人　(奥に向ひ) よしや、號外を買つて來て御覧。

よしの聲　はい。

(長い沈默。)

夫人　何を考へていらつしやるんですの。

少佐　あいつ、また馬丁部屋へ遊びに行つてるんぢやないか。

夫人　猛ですか。

少佐　數つて云ふ女は、どうも子供によくない智恵をつけていかん。玩具の鐵砲を自分の喉に當てゝ、自殺をする眞似なんかして見せたらしい。

夫人　まあ。何時ですか。

少佐　さつき、おれが歸つて來たら、門のところで、ほかの子供たちと一緒に、そんなことをやつて遊んでるんだ。誰れから習つたつて訊いたら、數からだつて、さう云つた。

夫人　ほんとに困りますわね。

少佐　馬丁の家内が、なまじつか、女學校なんか出てるからいけないんだ。言ふことは生意氣だし、することが巫山戲てゐてどうも氣に食はん。おれの留守中でも、あんまり子供なんか委せて置けないよ。

夫人　氣を付けますわ。世間を知りすぎてるんですわね。

少佐　すれてるのさ、つまり……。
夫人　そこへ行くと、よしつて云ふ女は……。
（よしが襖を開ける。夫人、口を噤む。）
よし　號外屋さんはもうをりませんです。
夫人　お前の呼び方が遲いからだらう。
よし　いゝえ、わたくしが御門の外へ出ました時は、もうどこかへ行つてしまつとりました。
夫人　鈴は聞えなかつたの。
よし　鈴で御座いますか。さあ、鈴は方々で聞えましたけれど——。
少佐　もういゝ。友吉を呼べ。
夫人　今のことをおつしやるんですの。
少佐　いゝや。
（長い沈默。）
（馬丁友吉、恐る恐る現る。）
友吉　何か御用で……。
少佐　もつとこつちへはひれ……。寢藁は新しいのと取り更へたね。
友吉　はあ。
少佐　それではと、早速だが、お前の決心を聞きたいんだ。
友吉　………。
少佐　どうだ、おれと一緒に戰地へ行くか。

友吉　（默つてうつむく）
少佐　副馬の方はまあいゝとして、正馬の方は、あの通り手のかゝる馬で、お前にはやつと馴れたところでもあるし、お前がついて行つてくれゝば、おれは大變助かる。將校の馬を預つてゐれば、日頃こんな時の覺悟も、まあしてゐるだらうとは思ふが、念の爲め聞いて見るんだ。
友吉　………。
少佐　それとも、戰爭に行くのがこはいか。
友吉　いゝえ、こはくはありません。
少佐　そんなら、どうだ。行くか。
友吉　（また、額を伏せる）
少佐　兵隊に取られたと思へばなんでもなからう。そのからだで、その若さで、意氣地のないことは云ふまいな。
友吉　………。
少佐　人間はどうせ一度は死ぬんだ。疊の上で死んでも一生は一生、汽車に轢かれて死んでも一生は一生だ。國家の爲に、潔よく命を投げ出せば、それだけ死花を咲かせることになるんだぞ。男子の本懷ぢやないか。
友吉　（默つて頭をさげる）
少佐　給料は倍にするし、お上からも、無論手當は出る。その上、無事に歸れば、從軍徽章も頂戴できるわけだ。
夫人　それに戰爭と云つても、普通の兵隊さん見たいに、

そんなに危いところへ出ないでも濟むんでせう。

少佐　それもさうだ。なに命は大丈夫だよ。（間）こつちへ殘して行くものゝ世話は勿論引き受ける。お前に萬一のことがあつても、心配はいらん。

友吉　（默つて頭をさげる）

少佐　無理に引張つて行くわけにも行かんから、お前のいゝやうにしろ。

友吉　ぢや、一つ、嬶に相談して見ます。

少佐　それがよからう。だが、お神さんは、お前、女だぜ。

友吉　へえ。

少佐　行く方がいゝか、行かない方がいゝかつて云へば、行かない方がいゝつて云ふにきまつてやしないか。お前がかうと決心をして、おれは行くんだと云つてしまへば、それを行くなとは云ふまい。日本の女は、そんなことは云はんよ。

友吉　へえ、でも……。

少佐　でも、なんだ。

友吉　實は、さつきも一寸話をしましたんですが、なにしろ、あの女も、身よりはありませず、わたくしに行かれつちまふと……。

少佐　だから、あとはこつちが引き受けると云つてるぢやないか。

友吉　どうか一つ、そこんところを旦那からよろしくおつしやつていたゞきたいんで……あの女は、一度云ひ出したことは後へ引かない女で……。どうも、困つてしまひます。

少佐　すると、お神さんは、お前が行く事を不承知なのか。

友吉　それと申しますのが、かう申しちやなんですが、あいふいきさつも御座いましたくらゐで、わたくしと致しましてもあとで、どんな短氣な眞似をされるかもわからないつていふ心配もあるんで……。

少佐　そんなこともあるまい。今日、男といふ男は、みんな、妻子なり、親姉妹なりを殘して、敵地に向はうとしてゐるのだ。お前の女房一人が、あとへ殘るんぢやあるまい。さう譯がわからんでも困るな。それぢや、おれからよく訊いて見てやらう。

夫人　それや、あん時はね、二人が一緒になれるかなれないかつていふ場合だつたから、死ぬの生きるのつていふ騷ぎをしたのだらうけれど、今度のことは、また別だわね。あたしが、大事に預つて、あげるわ、そんなことがないやうに……。

友吉　へえ、恐れ入ります。なにしろ、どうもあの氣性で……全く、わたくしの手には……（頭をかく）

少佐　（笑ひながら）弱音を吐くな。自業自得だ。しかし、

なかなか、睦じさうで結構は結構だが……。

友吉　なんですか、ちつとかう、息がつまりさうなんで……。

夫人　（笑ひながら）おやおや、隨分ね、この人は……。

少佐　數を呼んで御覽。

夫人　（去る）

少佐　おれを見ろ、おれを……。おれは誰にも相談なんかしはせんぞ。

友吉　へ……。

少佐　お前は、少し、女房の云ふことを聞き過ぎやせんか。

友吉　それが、さうしませんと、あとが五月蠅いもんですから……。

少佐　どう五月蠅いんだ。

友吉　嬶は何時も、あたしのからだはあんたのもの、その代りあんたのからだはあたしのものつて、かう申しますんです。

少佐　さうすると、主人はどうなる？

友吉　へえ、そりや、もう、わたくしは、何んですが、まあ、二人つきりの時だと、さういふわけなんで……。夜、こちらからお暇が出ますと、それきり、煙草を買ひに行くことも出來ません。

少佐　果報者だよ、お前は……。（間）しつかりしろ、しつかり……。なんだ、その面は……。

（此の時、夫人が、友吉の妻、數代を伴つてはひつて來る。）

（數代、丁寧に會釋をする。）

少佐　そんなに改たまらなくつてもいゝ。そこで、あらまし話は聞いてるだらうが、今度、戰爭がはじまつて、師團にも動員が下つたわけなんだが、知つての通り、將校は、みんな馬丁を一人連れて行くことになつてゐる。おれは、友吉を連れて行かうと思ふが、お前に異存はないか。

數代　（默つて友吉の顔を見る）

友吉　（その視線を避けて、顔を伏せる）

少佐　今、友吉に話したところだが、友吉は、お前さへ承知すれば、行つてもいゝと云ふのだ。これが、われわれ兵隊なら、家内に相談も糞もない。それだけまあ、馬丁などは自由なわけだが、日本の男と生れて、此の千載一遇の好機會に少しでも國家の爲めに働き度いと云ふ望みは、これは、誰しも一樣なわけだ。

數代　さう致しますと、行つても行かなくつても、それは日本人の勝手なんで御座いますか。

少佐　まあ、さうだ。

數代　それなら、宿は、お伴を致し兼ねます。

少佐　それや、どうして……。
數代　別れるのがいやで御座います。
少佐　たゞ、それだけか。
數代　たゞそれだけで御座います。
少佐　もう考へ直して見る餘地はないか。
數代　さき程から、よく考へて見ました、實は陸軍の馬丁が、戰爭に行かなければならないものか、どうか、わたくしどもにはよくわからなかつたので御座います。行かなければならないのなら、またそれだけの覺悟も御座います。ですけれど、只今のお話では、行かなくてもすむといふことで御座いますから、わたくしは行つて貰ひたくは御座いません。
少佐　お前が行つて貰ひたくないと思つても、亭主が行くと云へば仕方があるまい。
數代　そんな筈は御座いません。行くと申す筈が御座いません。二人の間に、話はもうちやんとついてゐるので御座います。
友吉　しかし、なあ、數代、旦那もあゝおつしやるんだしさ……。いろいろ御世話になつた義理から云つても、お伴をしないわけにや行くまいと思ふんだ。
數代　今更、あなた、なんですか。お世話になつたことは、またほかの方法で御恩返しができるぢやありませんか。――あんたが戰爭になんか行けるもんですか、人一倍臆病なくせに……。鐵砲の音を聞いただけで腰をぬかすでせう。
友吉　冗談云ふない。そんなこたないさ。それに、馬丁は、危いところへは行かないんだとさ。
數代　あたしがいやだつたら、仕方がないぢやないの。
（長い沈默。）
夫人　そばから餘計な口を利くやうだけれど、どうだらう、數や……ほかの場合と違つてあたしらは、自分たちだけのことを考へてはゐられない時なんだからね、お前も一つ決心をしたら……？　友吉だつて、世間への顏があるだらうからね。
友吉　それがありますんで……。今日なんかも、隊で、仲間の奴らから、お前行くかつて聞かれましたが、無論行くつて云つてやつたくらゐです。
數代　まだそんなこと云つてるの。さつき、あんた、なんと云つた、あたしに……。
友吉　（ぐつとつまり、妻の顏を見たまゝ、もぢ／＼してゐる）
數代　今まで、二人のことでは、いろ／＼御心配をかけました上に、かういふ時お役に立たないなんて、全く、人でなしとお思ひになりませうが、こればかりは、どうか、

御勸辨を願ひます。もつとなんとか、お斷の致しやうも御座いませうが、なまじ作り事を申して、動きの取れない羽目になりますよりもと存じまして、あからさまなところを申し上げます。此の人に行かれてしまひましては、わたくし、もう生きてゐる甲斐は御座いません……。(急に袖を眼に押しあてる)

少佐　わかつた、もう何も聞く必要はない。お前は、それで、女學校まで行つたと云ふのに、國民の義務と云ふことがわからんと見えるな。しかたがない。今、わしが、それを敎へてゐる暇はない。友吉も、よくよく運の惡い奴だな。これから、何處へ行つても、肩身の狹い思ひをするんだ。

數代　そのことなら、御心配下さいますな。此の人に肩身の狹い思ひをさせて、わたくしが默つてはをりません。世間はもつと廣い筈で御座います。

夫人　數や。口が過ぎはしないかい。

少佐　もういゝから、二人とも、あつちへ行け、そんな奴等と口を利くのも汚らはしい。今日限り、主從の緣を切るから、さう思へ。

友吉　相濟みません。

數代　致し方ございません。その覺悟だけはいたしてをります。御差し支へなければ、宿は何處かで仕事の口を見つけ、わたくしは、こちらで、奥樣の御手傳ひでもいたしたいと存じてをりましたが、それも御迷惑とあれば、二人ともお暇をいたゞきます。(間)　では、旦那さま、奥さま、お機嫌よろしう……。さ、あんたもお挨拶をなさい。

友吉　(頭を下げる)

夫人　お前たちは、さういふ風にして此の家を出て行く氣かい。あしたから、お馬の世話は誰がするんだい。

友吉　(妻の方を見ながら)　さうだ。明日の朝、鞍は誰が置く……。

少佐　おれが自分で置く。出陣の鞍を置くのに、そんな意氣地なしの手を藉りたくない。(憤然と起つて、奥に去りかける)

數代　(キッとなつてその後を見送る)

友吉　(滿身の勇をふるひ起すやうに)　旦那……。

少佐　(後をふり返る)

友吉　意氣地なしとはなんですか。(聲をふるはせ)　わたくしは、命なんか惜しくはありません。わたくしも男です。そんな侮辱を受けるわけはありません。

少佐　(故らに微笑を泛べ)　よし、意氣地なしと云はれて腹が立つなら、お前の根性もまだ腐つてはゐない。もう一晩考へろ。(姿を消す)

夫人　まあ〳〵、お前も、さう角を立てない方がいゝ、旦那さまにして見れば、お前の態度を齒がゆくお思ひになるのは當り前さ。それや、お前たちの立場は、わかつてゐるよ。あたしは、だから、もつと穩便に、今度のことはお願ひするやうにしたいと思ふの。

數代　なんとおつしやられても、致し方御座いません。たとへ此の人が意氣地なしでも、わたくしに取つては、かけがへのない大切な夫で御座います、御主人御一人の御機嫌を損じたゞけで、夫の命を拾ふことができれば、こんなうれしい事は御座いません。

夫人　さういふことは、云はなくつてもいゝことだわね。

數代　いゝえ、奥さま方と、わたくし共とは、物を見る眼が違ふので御座います。立派な御身分の方々は、その御身分だけの氣高いお心掛けがあるんで御座いませうけれど、さういふ御心掛けは、わたくし共にはわかりません。通用いたしません。わたくし共に取つて、名譽は紙屑と同じで御座います。陸軍の馬丁が、死んで神様に祀られると申せば、馬が嗤ひます。

夫人　しかし、お前……。

數代　(夢中で)　いゝえ、それだからと申すのでは御座いません。例へ何萬圓といふお金を積んでいたゞきましても、此の人を戰爭などに出すことはいやで御座います。戰爭はおろか、一日別れてゐることさへ、わたくしにはできません。かう申してもおわかりになりますまい。(思ひ出すやうに)　一度、二度、三度……別れるといふ悲しみは、もう凝り凝りで御座います。此の人と一緒になつた時、今度こそは、どんなことがあつても側を離れまいと決心いたしました。(間)　一度目の夫は、急病で、あつといふまに失くなつてしまひました。――此の人が病氣で斃れたら、わたくしもその後を追ふ覺悟をいたして居ります。(間)　二度目の夫は、旅先で女をこしらへ、行衞を晦ましてしまひました。――此の人が旅へ出る時は、わたくしもきつとついて行くつもりでをりました。一身同體とまで申します間柄に、どうして別れるなどゝいふ悲しいことがあるんで御座いませう。きつと、それは、間違つてゐることに相違ございません。死んでも離れないのがほんたうで御座います。――奥さま、わたくしどもが、こんなことを申すのを、きつと可笑しくお思ひになりませう。

夫人　(しんみり)　口で云ふだけでなく、それがほんたうに出來る身分だから羨ましいよ。

(此の時、襖を開けて、女中のよしが半身を現はす。)

よし　奥さま、あの、旦那さまがお呼びでいらつしやいます。

夫人　それぢや、まあ、今日は、これで引取るといゝ。御暇をいたゞくにしても、穏やかにね、あと／＼のこともあるんだから……。（女中と共に退場）
友吉　あつちへ行かうか。
數代　あんたも、云ふ時には云ふのね。
友吉　當り前さ。侮辱されて默つてる奴があるかい。主人だと思つてへえ／＼してれや好い氣になりやがつて……
數代　いゝぢやないの、なんとでも云はしとけば……。どうせこれから世話になるんぢやなし……。
友吉　おれや、戰爭がこはいんぢやねえ。
數代　わかつてるわ。
友吉　だけど、いま／＼しいな。世間はうるさいからな。
數代　東京にゐなけれやいゝぢやないの。
友吉　馬も可愛いしな。
數代　あたしとどつちが可愛いの。
友吉　（妻の顔を見てにや／＼笑ふ）
數代　どつちが可愛いのよ。
友吉　（數代の頬を指で突つつく）
數代　（その手を取り）それ御覽なさい。もう心變りをしちやいやよ。ぢや、きめたわね。（間）さ、早く何處かへ行きませう。（急に明るい顔になり）大阪へ行かない、大阪へ……。大阪なら私の叔父さんがゐるわ……。きつと、どうかしてくれるわ……。ね。さうしませう、さ、早く……（起ち上つて友吉を引き立てようとする。友吉は、なか／＼起ち上らない）

――幕――

第二幕

馬丁友吉夫婦の部屋。――晝頃。
綱で括つた行李が一つと、風呂敷包が二つ、部屋の隅に置いてあり、膳の上に布片がきせてある。
數代が瀬戸火鉢で何か煮物をしてゐる。入口の土間に立つたまゝ、女中のよしがしきりに喋舌つてゐる。

よし　それや、氣骨は折れないさ、日那さまがお留守だとね。だけど、奥さん一人になつて御覽。なんだかんだつて愚痴を聞かされて……。それだけならいゝさ。やれ淋しいつて云つちや怒られ、やれ便りがないつて云つちやあたられ……そばについてるものこそ、いゝ迷惑さ。あたしや、しばらくお妾さんのうちにゐたことがあるから、よくわかるんだよ。
數代　（うはの空で聞いてゐる。歯が痛むらしい。時々頬に手をあてなどする）

よし　だけどさ、あんたがゐてくれないと、あたし、困ることがあるの。(間)　さう〳〵、今朝、旦那さまと奥さまが、水盃つていふのをなすつたわよ。あの樣子を、あんたに見せたかつたわ。
數代　さういふとこが違ふのね。
よし　あたしなんか、あゝいふ時、どうしても泣けちまふわ。
數代　奥さん、泣かなかつた？
よし　不思議だね。
數代　………。
よし　昨夜、そつと泣いたかも知れないよ。奥さまは、でも、あんたが羨ましいつて云つてらしつたわよ。
數代　何時？
よし　さつき……。(間)　旦那さまは、もう今夜から、隊の方へお泊りになるんだつて……。
數代　ずつと？
よし　だから、今朝、お別れの水盃をなすつたんだわ。——でも、お出ましになる時は、なんだか、あたしまで胸がつまるやうだつたわ。
數代　………
よし　勇ましいやうな、悲しいやうな、あたし、萬歳つて云ひたくなつたよ……。

數代　もうお晝の支度はすんだの？
よし　あ、忘れてた。あのね、手がすいたら、奥さまが、一寸つて……。
數代　なんだか、工合が惡くつて……。
よし　そんなことないわよ。奥さまは何んとも思つてらつしやりやしないわよ。たゞ、これから、どうするつもりだらうつてさう云つて、心配してらしつたわ。
數代　代りがあるまでなんて、いやだわね。馬丁の代ぐらゐ、いくらでもありさうなものね。男はみんな戰爭に行きたいんだつて云ふから……。
よし　戰爭もいゝだらうけれど、死にさへしなけれやね……。
數代　それより、死ぬか生きるかわからないからいやなの。
よし　あら……。只今、さう申したんですけれど……。
(此の時、鈴子夫人が現はれる。)
夫人　まだ手がすかないの。——急に淋しくなつたから、話しに來ておくれよ……。
數代　はい。でも……。
夫人　旦那さまも、今朝は、あの通り御機嫌を直してお發ちになつたんだから、お前も氣兼ねをすることはないだらう。今日にでも代りが見つかれば、それでいゝんぢや

ないか。友吉も、今日は、御用のしをさめだと思つて、いつもよりも甲斐々々しく、お馬の口を取つてゐたわ。あれでこそだ。あたしはうれしかつたよ。

數代　恐れ入ります。

夫人　動員完結までには、まだ四五日あるらしいから、それまでに適當な人が見つかればいゝけれど………。お前も、さう、あわてゝ出て行く用意をしなくつたつて、どうせ此の部屋は明いてゐるんだし、先々の計畫が立つまで、ゆつくりしておいでよ。

數代　有りがたう御座います。

夫人　（よしに）お前、そんなところに立つてないで、早く、お晝の用意をして來ておくれ。

よし　はい、お晝は何にいたしませう。

夫人　昆布の煮たのがまだあつたね。お鮭でも燒いといて貰はうか。

よし　……。（去る）

夫人　御飯なら、うちのをおあがりよ、お冷が一杯あるの。

數代　はい。恐れ入ります。宿が、若しかしたら、お晝に歸つて來るつて申しましたから……。

夫人　今朝、お前、お玄關で泣いてたね。どうして泣いてたの。

數代　あら、奥さま、見ていらしつたんで御座いますか。いゝえ、ね、あの時、なんですか……。旦那さまをお見送りしながら、わたくし、かう、大きな力にうたれるやうな氣がいたしましたの。奥さまは、坊ちやまのおつむに、お手をおかけになつて、たゞ默つて、お目をお伏せになりました、お坊つちやまが、いつもの通りに、「行つてらつしやい」つて、元氣よくおつしやいますと、旦那さまは、あとをお振り返りになつて、優しく目禮をなさいましたでせう。すると、奥様は、急に坊つちやまをお引き寄せになつて、かうお笑ひになりましたわね。

夫人　まあ、詳しく見てたのね。

數代　見てをりましたとも……。（間）奥さま、わたくしは、あの時、自分がほんたうに見すぼらしい女だといふことがわかりました。でも、それは致し方御座いません。わたくしどもには、かうしなければならないといふことがないんで御座いますもの……。

夫人　その方が氣樂でいゝわ。

數代　その代り、いつも眼の前は眞暗で御座います。一人では歩くことができません。どうかすると、勝氣のやうに見えますけれど、あれはたゞ、自分を叱つてゐるだけで御座います。

夫人　しかし、お前ぐらゐしつかりしてゐれば、世の中にこはいものはないよ。たゞ、なんと云つたつて女は女だ

からね。友吉は、お前の前だけれど、あゝいふ、どつちかと云へば、人の云ふなりになる人だし、これから先だつて、隨分苦勞がないとも云へないよ。また、お前一人で思案に餘ることがあつたら、何時でも相談をしにおいで。あたしが出來ることなら、なんでもするから……。

數代　さうおつしやつて頂くと、却つて辛う御座います。どうせ不義理をしてお暇を頂くんで御座いますから、一つそ、激しいお小言を浴びながら、御門を出ました方が、幾分でも心が輕いやうな氣がいたします。

夫人　それがお前のわるい癖だよ。

數代　いゝえ、奥さま、どうかもうほんとにわたくしたちのことはお氣にかけて下さいませんやうに……。

夫人　さう、お前見たいに、人の親切を無にするもんぢやないわ。

數代　さうで御座いますか。わたくしどもは蔑みを受けるだけでは、まだ足らないんで御座いますか。此の上、まだ、憐みを受けなければならないんで御座いますか。（急に語調が亂れる）それや、あんまりです、あんまりです……。（泣く）

（此の時、友吉がしを〳〵とはひつて來る。）

（夫人に會釋したる後、妻のたゞならぬ顔色を見て、不審らしく夫人の方を見返す。）

友吉　どうかいたしましたんですか。

夫人　數はどうかしてゐるの。今度のことでいろ〳〵氣苦勞もあるんだらうけれど、あたしが、折角、打ちとけて話をしようと思ふと、なんだか、それを變に取つて……（數代に向ひ）まあ、もつと心を鎭めて、素直にあたしの云ふことを聞いて御覧。

友吉　こいつは、どうもひねくれてゐて困ります。それに、昨日から、少しばかり氣が立つてゐるやうですから……、どうも飛んだ失禮をいたしました。

夫人　いゝえ、あたしはかまはないの、そんなこと……二人のことで心配してあげたのは、これがはじめてぢやないんだからね。

友吉　全くで……。

夫人　あん時だつて、二人があゝいふ風になつた時だつて、旦那さまの前をいゝやうに取りなしてあげたのは、あたしなんだからね。數や、お前は、あん時、此のあたしに云つたことを忘れやすまいね。（間）友吉と一緒になれたら、どんな苦勞でもするつて……。それから、かうも云つたね、奥さまの御恩は死んでも忘れませんつて……。いゝえね、あたしは、人に恩なんかきせたくはないよ。たゞあたしの心持が、お前にわからないかと思ふと、少し殘念なの。

友吉　はあ、それやもう、二人で、いつも話し合つてゐることですが、決して、さういふわけぢや御座いません。今度のことにつきましても、全くわたし共の心得違ひだつたといふことが、今になつてわかりましたやうな次第で……。それと申しますのが、今日、隊で、仲間の奴等が、一人殘らず御主人の御伴をするといふことを聞きまして、わたくしも、たうとう決心をいたしました。

數代　（突然顏を上げて、友吉を見つめる）

友吉　やつぱり、お伴をいたすことになりました。旦那からもお許しが出ました。なに、さう決まれば、なんでもありません。おい、數代、今云つた通り、おれも行くことになつたから、そのつもりで支度をしてくれ。

數代　（默つて友吉の顏を見てゐる）

夫人　（數代の方に氣を兼ねながら）さういふことは、なにかい、數やに相談しないで決めてしまつていゝの。

友吉　なあに、こんなことを、女房に相談するのが間違つてゐました。さあ、支度をしてくれ。

夫人　一體それや、ほんとなの。それでよけれや、なんにも云ふことはないぢやないか。そいぢや、まあ、ゆつくり別れを惜しむといゝ。あたしは、その間に、お晝をすまして來るから……。（去る）

友吉　（少してれ臭さうに）どうして默つてるんだい。おい、なんとか挨拶をしろよ。（間）おれは、どうしても行かなけれやならないんだ。いや、おれは、行きたいんだ。なんにも云はずに、行かしてくれ、なあ、おい、數代、辛抱してくれ。

數代　（夫の顏を見るでもなく、眼を下に落すでもなく、ぼんやり遠くの方を見つめたまゝ、默りこくつてゐる）

友吉　昨夜あれだけ固い約束をしたのにと思ふかもわからないが、あん時は、おれは、惡い夢を見てゐたんだ。（間）死ぬやうなへマな眞似はしないから、今度だけ行かしてくれ。きつと無事に歸つて來る。歸つて來たら、今迄以上に、お前を可愛がらあ……。な、それでもいやか。

數代　………。

友吉　どうして返事をしないんだい。（間）留守中、奥さんのそばで、氣樂に暮してゐてくれ。なにも心配はいらない。だつてお前、うちの奥さんを見ろ、奥さんを……。おんなじことぢやないか。

數代　（突然、癇高く）違ふ、違ふ、あれは女ぢやない。自分の夫が、何時歸つて來るかわからないやうな、遠い處へ行くのを、平氣で見送れるやうな女が、どうして女と云へるものか。いや、いや、行つちやいや、行つちやいや……。

友吉　だからよ、こつちは、何時でも歸つて來られるぢや

ないか。病氣だつて云へば、何時だつて歸れるんだ。
數代 そんなことまでして行かなくたつていゝわ。（友吉の方に躙り寄り）よくつて、あたしは、あんたが一つ時でも側にゐてくれなけや、生きて行けない女よ。あたしは、ほかの女と違ふのよ。毎日毎日、生きてるか死んでるかわからないあんたのことを想ひつゞけて、だん〳〵痩せて行くあたしのことを考へて頂戴……。いゝえ、それより、あんたが行つてしまつたら、あたしは、すぐに死んでよ。うそぢやなくつてよ。今、こゝで死んで見せるわ。
友吉 おい、おい、冗談云ふのはよせ。
數代 冗談だと思ふの。（間）あたしは、小さい時から苦勞に苦勞をしつゞけて來たのよ。今だつて、あんたにわからない苦勞があるわ。たゞ、あんたと一緒にゐるだけで、その苦勞が苦勞にはならないの。あんたの顏を、かうして見てゐるだけで、この世の中に生きてゐたい氣がするの。（間）ね。だからさ、後生だから思ひ止つて頂戴。戰爭に行くのが偉いのなら、戰爭に行かないことだつて偉い筈よ。さうでせう、人を殺さないですむんですもの……。（間）それに戰爭に行つて死ぬことなんか、かうして生きてゐることから見れば、人から馬鹿にされ、可哀さうがられて生きて行くことから見れば、どんなに樂だか知れやしないわ。でも、そんなことはどつちでもいゝの。苦しい目に合ふのが誰かの爲なら、あたしたちは、いくらだつて苦しんで見せるわ。苦しみませうよ、一緒に、二人きりで、人なんか當にしないで……。
友吉 （當惑して天井を見てゐる）
數代 あんたは、だから意氣地がないのよ。
友吉 あの馬は、おれが行かないつていふことを、何時の間にか感づいてゐた。今朝、何氣なしに人參を持つて行つてやつたら、何時もうまがつて食ふ人參を、鼻の先で押しのけやがる。無理に口の中に突き込まうとすると、齒を食ひしばつて、どうしても口を開けようとしないんだ。やつ、おれを恨んでやがるに違ひなかつたんだ。
數代 そんなことないわよ。お腹が大きかつたのよ。
友吉 いゝや、違ふ。外のものぢやないぜ、人參だぜ。――だから、おれは、冗談に、「行くよ、行くよ、安心しろ。」つて云つてやつたんだ。さうしたら、大きな口をあんぐり開けやがつた。
（長い沈默。）
數代 ぢや、あたしが、かうしてゐるから行つて御覽なさい。（友吉の頸に腕を卷きつける）
友吉 お前を連れて行けるといゝんだがなあ……。
（長い沈默。）

友吉　（女の腕と一緒に、なにかの誘惑を振り拂ふやうに起ち上る）　さ、かうしちやをられない。

數代　（友吉を見すゑながら）　でも、なによ、あんたは、戰爭に行くことを、さも大事なことのやうに思つてるけど、あんたは、軍人でも何んでもないのよ。たかの知れた馬丁よ。戰爭つていふものは、芝居見たいなもので、好い役者だけが手を叩かれるのよ。うちの旦那さん見たいに、勳章を澤山つけて、長い劍を拔いて馬の上から號令をかけるんなら、戰爭に行く甲斐があるわ。あんた見たいに、貧弱な恰好をして、馬の後から走つて行くだけなら戰爭も糞もあつたもんぢやないわ。（間）　おだてられちや駄目よ、調子に乘つちや駄目よ。こつちばかりがお國の爲と思つても、肝腎のお國が、目をかけて下さらなけりや、なんにもならないぢやありませんか。

友吉　そんなこと云つたつてしやうがないさ。

數代　どうして、しやうがないの。

友吉　お前にはわからないことがあるんだよ。

數代　なにがわからないの。――さうよ、さうなのよ。あんたは、もう、あたしのことなんか考へてはくれないのね。

友吉　また、そんなことを云ふ。なんべん云つてもおなじことだ。おれはたゞ、世間を狹く渡りたくない、たゞそれだけなんだ。仲間の奴等が、威勢よく出かけて行く。そいつを、おれ一人が、默つて見てゐるわけに行かないんだ。それぢや、あんまり情けない氣がするんだ。お前だつて、これから先、毎日毎日鬱いでゐるおれの顏は見たくないだらう。どうしたつてさうなる。何處へ行つても、あれは宇治少佐の馬丁だつて云はれるからなあ。

數代　それぢや、どうしても行くつて云ふのね。

友吉　さうさしてくれ。若し、これで、お前がどうあつても行くなと云やあ、おれは生きちやゐられない。

數代　生きちやゐられないつて……。あんた、ほんとに死ぬ氣なの、あたしと一緒に死んでくれるの。

友吉　…………。

數代　あんた一人に行かれちまふよりは、その方がよつぽど、あたし、うれしいわ。（間）　かうして一緒にゐたつて、何時また悲しい目に遭ふかも知れないんだわ。ほんとにさうだわ、あんたが、さういふ氣になつてくれた時こそ、思ひきつて、なんでもできるんだわ。（間）　ぢや、そのつもりで支度をするわ。どういふ風にして死ぬか、あんた、考へて頂戴。あんまり苦しまないやうな、……なんか、一と思ひに死ねるやうな工夫はないか知ら……。でもいゝわ、少しぐらゐ苦しくたつて……。どうせ、五分か十分なんだから……。

友吉　下らないことを云ふのはやめてくれ。そんな……そんな馬鹿な……。それこそ物笑ひだ。

數代　笑ふ奴は、勝手に笑ふがいゝわ。あたし、どうして今迄、そのことを考へなかつたか知ら……。こんなことがなくつても、何時かあんたと別れなければならないつていふ心配で、胸が一つぱいだつたの……。それこそ、御飯もたべられないくらゐだつたの。

（此の時、從卒太田が現はれる。）

太田　まだゐたのか。

友吉　（慌てゝ起ち上り）今飯を食つたところなんだ。これから、服を着かへて、すぐ行かうとしてゐたんだ。

太田　二時に師團司令部集合だから、もうぼつぼつ馬の用意をして置かうぢやないか。三時から武裝檢査があるしな。

友吉　さうだ。おい、（數代に向ひ）早く、あつちの服を出してくれ。それから、水筒に茶を入れて……。

太田　雜嚢に入れるものは……？

友吉　うん、わかつてるよ。

太田　そいぢや、一と足、先に歸るからな。奥さんから手紙を事づかつた。中を一寸讀み度いな。

友吉　ぢや、あんた、先へ行つて旦那の外套を卷いといてくれないか。鞍へつけるんだから……

太田　よし。お神さん、そいぢや、御機嫌よう。友さんはおれが預かつた。心配はいらないよ。（元氣よく出て去る）

（長い沈默。）

數代　（もぢ〳〵してゐる友吉に、險しい視線を向け）それぢや、やつぱり行くのね。

友吉　どうしよう。

數代　どうでも、あんたの好きなやうにしたらいゝぢやないの。

友吉　おれは、お前のいゝやうにする。どうしていゝか、わからん。（ぐつたり腰をおろす）

數代　ぢや、あたしは、もう、なんにも云はないから、あんたの氣のすむやうにして頂戴。行くなら行くで、機嫌よく、あたしを安心させてから行つて頂戴。行かないなら行かないで、思ひきりよく、あたしを恨まないで、一緒にゐて頂戴。

友吉　お前を安心させるつて、どういふ風にすればいゝんだい。

數代　………。

友吉　お前のことは決して忘れやしないよ。

數代　それだけ？

友吉　浮氣なんか、する氣遣ひはなからう。

数代　それだけ？
友吉　歸りには、うんと土産を持つて來らあ。
数代　それだけ？
友吉　出來るだけ度々、便りをするよ。
数代　それだけ？（聲がだん〳〵小さくなる）
友吉　長くなるやうだつたら、都合をつけて早く歸つて來る。
数代　それだけ？（殆ど聞えない）
友吉　さ、そんなこと云つてないで、早く支度をしてくれ。
数代　（默つて、行李の紐を解き、服を出す）
（遠くで進軍喇叭の音が聞える。）
友吉　（着てゐる服を脱ぎはじめる）
数代　（涙を押へて）あたし、一寸、奥さんのところへ、お知らせして來るわ。すぐ來るから待つてゝ頂戴。（友吉の顔も見ずに、何物かの後を追ふ如く、よろめきながら出て去る）
友吉　（一つ時その後を見送つてゐるが、思ひ出したやうに、手早く服を着替へる）
（喇叭の音。）
（女中よしが現はれる。）
よし　たうとう行くことになつたんですつて……。
友吉　おれは、なに、初めからそのつもりでゐたんだ。——あとを宜しく頼むぜ。
よし　なんかお手傳ひしませうか。お神さんは……？
友吉　一寸、奥へ行つてるんだ。あんた、濟まないが、その腹巻を取つてくれないか。
よし　（上へあがり、取つてやる）はい。
友吉　（それを腹に卷き）これぢや、少し暑いな。
よし　暑くつたつて占めてらつしやいよ。ひどい汗ね。（手拭で脊中をふいてやる）
友吉　もういゝや。
よし　いゝから、ぢつとしておいでよ。
友吉　戰爭に行くつていふと、待遇が違はあ……。
よし　なに云つてるの。
友吉　留守中いろ〳〵世話になるだらうが、ほんとに頼むぜ。あれで人一倍淋しがりと來てるからな。
よし　あんたの方が淋しいんでせう。
友吉　よせやい、おれは、これでも、日本男兒だ。女房風情に後髪を引かれて溜るかい。
よし　えらい、えらい。お神さんが聞いたらよろこぶわよ。
（此の時、鈴子夫人が「よしや。」と呼びながら現はれる。）
夫人　またお喋舌をしてるね。友吉に、何んにもないけれど、お頭づきで、お膳をこしらへてね……。

友吉　いゝえ、もう、さうしちや、をられません。どうか、そんなことは……。
夫人　いゝよ、まあ、あたしの志なんだから……。
よし　さう致しますと……？
夫人　あゝ。今朝、旦那さまにした通りに……。
よし　はい。（出で去る）
夫人　お神さんは？
友吉　只今、奥さまの處へ上るつて、出て參りましたが……。
夫人　あゝ、來たけれど、すぐ歸つたよ。ぢや、何か買物にでも行つたんだらう。
友吉　あいつには、全く手こずりました。でも、やつと、承知させました。（强ひて笑ひ聲を立てる）
夫人　それやねえ、あゝ云つてゝも、なにもかもわかつてるんだから……。
（此の時、突然、よしのけたゝましい聲が聞える。續いて、よしが、血相を變へて飛び込んで來る。一同その方に向き直る。）
よし　奥さま、大變で御座います。
夫人　どうしたの。
よし　（外の方を指しながら）お神さんが、あの、井戸で御座います、奥さま、井戸……（あとは聲が出ない）
夫人　（驚いて外に走り出る）
よし　（後に續く）
友吉　やりやがつたな。（これもその後から走り出ようとするが、何を思つたのか急に部屋に飛び上り、柱につかまつたまゝ、恐怖に滿ちた眼を一杯に見開き、聲をふるはせながら）うそだよ、うそだよ、おれは行かないよ。行かないつてばさ。えゝい、うそだつて云ふのに、これでもわからんのか……（殆び狂亂の體にて、悶え呼ぶ）

——幕——

ガンバハル氏の實驗（ラヂオドラマ）

人物

アナウンサー
ガンバハル氏
平野萬兵衞
その妻
その娘
森田六造
その妻
小泉ゆき子
その許婿
テノール歌手
キガ・ムラノ
連れの青年
高圓寺の男　活動說明者
上海の男　ホテルのボーイ
旅客
カフエーの女將
北海道の女　女給
カフエーの若い客
作者
其他群集。

マアナウンサーの紹介につゞいて
別のアナウンサーの聲で――
――只今から、ガンバハル氏の「精神と電氣」といふ御講演が御座います。
ガンバハル氏の聲――えゝ、わたくしは、只今御紹介にあづかりましたガンバハルと申すものであります。生れは多分アフガニスタンあたりだと思ひますが、早く兩親を失ひ、物心のつきます頃は、もう、ポートセードの船着場で、靴磨きをしてをりました。
ところが、或る日のこと、モロッコの絨氈賣が、わたくしを佛蘭西の貨物船に載せて、無理矢理にマルセイユへ連れて行きました。そこでわたくしは、例のドバンゴ婆さんと近づきになりました。此の婆さんは、御聞き及びの方もありませうが、有名なソルシエール、つまり巫女であります。その婆さんのところへは、色々な人が出入りしてをりました。露西亜の宮內官、獨墺の學者、支那の政治家、それに、英國の相場師、これがなかなか澤山であります。そ

のうちで、わたしを可愛がつてくれた墺太利の心靈學者と、マルセイユ電力會社の技師、この二人が、何をかくしませう、わたしを今日あらしめた恩人であります。すなはち、心靈學と、電氣學の二た道から、わたしの好奇心は眼をさまされたのでありまして、この二つの學問を究めることによつて、わたくしは新しい發見に到達することが出來たのであります。

わたくしは、歐米のあらゆる都市で、機會ある毎に、此の新學說を試みましたが、何分、手數のかゝる實驗を必要とする關係上、多くは、豫期の結果を收めることができずに終りましたが、幸ひ、日本に參りまして、東京放送局の理解ある援助により、わたくしの實驗は完全な成績を擧げる機會を得たのであります。

扨て、一口に「精神と電氣」と申しましても、それは、今日まで、假說として行はれてをります牽强附會な唯物論的空想と違ひまして、人間の精神活動と宇宙の電氣的現象との密接な關係を立派に證明することができるのでありますが、その理論は、こゝで簡單にお話しましても到底おわかりになりますまいし、また、專門家以外には、それほど面白い話でもありませんから、すぐに、これから御目にかける、いや、御耳に入れる實驗の說明をいたします。

先づ、みなさんは、「千里眼」といふものを御承知だらうと思ひます。すはなち、透視といふやつであります。箱の中に隱されてあるもの、隔つた場所にあるものを、はつきり見つける一種の能力であります。この「千里眼」なるものを學者はどう說明してをりますか。心靈學上に一問題として、まだ誰もはつきりした學說を立てゝはをりません。或は、「網膜によらざる視覺」の實驗に成功した生理學者もあると聞いてをりますが、その實驗は、まだ決定的な成績を擧げてはゐないやうであります。

わたくしは、此の「千里眼」についても既に充分の研究を積んでをります。しかし、一方、かのテレヴイジョン、卽ち、無線映寫の科學的進步が甚だ遲々としてをりますため、實驗に少からぬ不便を感じてゐる次第であります。然るに、音響の無線放送が最近長足の發達を遂げました結果、今日まであまり問題とされなかつた音響の透視——妙な言葉でありますが、「千里眼」に對して、「千里の耳」とでも申しますか、遠距離にある物音が、任意に聽けるやうになりましたことは、なんと申しましても學界の驚異であると思ひます。こゝでもう一度はつきり申上げて置きますが、今日の所謂ラヂオは、聽取者の方には勿論、放送者の方にもそれ相當の機械的設備が必要なのであります。處が、それだけなら、今日電氣學の知識さへあれば、理窟はなんでもないことであります。然るに、わたくしは、聽取者の方だ

けにある裝置を施せば、どんな處で、何をしてゐる人間の聲でも、好きな時に聞くことができるといふことを發見したのであります。この謎は電氣學の知識だけで解くことはできません。また、その實驗も普通の無線電話裝置だけでは不充分なのであります。が、その裝置のことは、詳しく申上げません。たゞ、或る場所から聞えて來る音聲を、此處で私が喋舌る聲と同樣に、みなさんの御耳に入れることが出來るやうになつてゐるのであります。此の實驗に必要なのは、先づ、その聲を聞かうとする人の署名であります。今日放送局の方にお願ひして、なるべく世間に名を知られてゐる方々の手紙を集めていたゞかうと思ひましたが、それは一寸困るといふお話なので、致し方がありませんから、先程ある紙屑屋に參りまして、好い加減に拾ひ集めて貰つた手紙や端書を五六枚、これから實驗に供することに致します。

みなさんは、もう既に、此の實驗に伴ふある種の危險を豫感されるでせう。それは人間の姿が、此の裝置の前では、全く赤裸々にされ、凡て秘密の談合といふものは、此の地上にあり得なくなるからであります。壁に耳のあることを恐れた時代はもう過ぎ去つたのであります。

今から始めます實驗が、不必要な個人の私生活をあばき、その名譽を傷けないことを切に祈る次第であります。

第一は、平野萬兵衞といふ人、市內京橋區……詳しい住所はわざと申上げません。一寸お斷りして置きますが、本人の聲だけでなく、その周圍にゐる人々の聲も當然聞えて來ますから、そのつもりで御注意を願ひます。はい、始めます。（コッツといふ機械な合はす音）やがて電流の通じるらしい音。

——巫山戲やがんない、馬鹿野郞……。

——なんて聲を出すの、この人は……。

——なんて聲だ？　てめえにや、それがわからねえのか。

——もういゝから、はやくおやすみなさい。

——寢ようと寢まいとこつちの勝手よ。

ガ氏の聲　はゝあ、やつてをろやうですな。

——おつ母さん、一寸、お湯い行つて來るわよ。

——もう遲いからよせ。

——だつて、まだ、何處でも起きてるわよ。

——いゝから、さつさと行つておいで。

——お父つつあん、何んか、御用ない？

——ある。歸りに柿を少し買つて來な？

——おつ母さん、お金は……

——お父つあんにお貰ひ……。

——馬鹿なこと吐かせ。出してやれ。

——いやですよ。

――なに、いやだ。（大聲で）おい、柿を食はせろ、柿を……。

ガ氏の聲　醉拂ひの平野萬兵衞さんはこれくらゐにして置きまして、次は森田六造氏、府下池袋……。（コッツといふ音）

――（唱ふ聲）からたちの花が咲いたよう……。

――直して頂戴よ。早く……もう演藝放送はとつくに始まつてるわよ。

――だから一生懸命に直してるぢやないか。どうも、よく狂ふ機械だな。……からたちの花が咲いたよう……。

――あなたが餘計なことをなさるからよ。さつきまでよく聞えてたんだわ。

――一層よく聞える爲めに、一時、聞えなくなるといふ例はいくらもある。そんなにガミガミ云ふなよ。見つともない。

――ぢや、もうガミガミ云はない。早くして頂戴ね、後生だから……。

――そんなに聞きたいのか。

――今日のは面白さうだわ。

――何が面白いもんか。「ガンバハル氏の實驗」なんて、六でもない實驗にきまつてらあ。

ガ氏の聲　六でもない……知らぬが佛とはよく云つたものですな。

――可笑しいな、今聞えたんだがなあ。やゝ、長き間といふところかな。おや、おれの云つたことがまた聞えて來やがらあ……。おや、おや、これや、どうかしとるよ。

ガ氏の聲　面倒なことになりましたから、この邊で打ち切りませう。次は、女名前で、小泉ゆき子さん、敬意を表してお所は略します。なかなか見事な御筆蹟です。

――そんなところに立つてないで、まあお掛けなさい。草臥れたでせう。

――えゝ。（波の音らしいものがかすかに聞える）

――僕たちの新しい生活について、もつと話さうぢやありませんか。

――えゝ。

――僕は今幸福の絶頂にゐるんです。今日といふ日を、どれだけ待つてゐたと思ひます。ゆき子さん、此の果てしない海を前にして、二人の永久に變らない愛を誓はうぢやありませんか。

ガ氏の聲　どうでせう、これは少しお聞きづらひと思ひますから、このへんで……。放送局の方が、今、手眞似で、もつと續けろと云はれるのですが、どうも、かういふ種類の何は……。ぢや、折角の御希望ですから、もうしばらく……。

—さうよ、それや、さうよ。でも、明日は、今日ほど幸福でせうか知ら……。あたくし、なんだか、明日になるのがおそろしいの。それや、幸福でないとは思ひませんわ。あなたと一緒にゐられる限りは、どんなことだつて幸福でないことなんかありませんわ。ですけれど、今日つていふ日は、きつと特別な日よ。特別に惠まれた日よ。だから、明日と同じ日が、何時までも續くよりも、今日と同じ日が、何時までも續いて欲しいと思ふわ。あたくし、慾張りでせう。

—僕、あなたのおつしやることがよくわからないんですが……。

—おわかりにならない？　ぢや、もつとお話しますわ。

—ですがね、ゆき子さん、あなたは、僕といふ人間を誤解なすつちやいけませんよ。世間には、結婚の翌日から男の優越權を露骨に示して、妻を足下に見下す夫があります。僕は決して、あなたを……。

—いゝえ、そればかりぢやありませんわ。あたくし、そんな淺墓なプライドから、結婚の翌日をおそれてゐるんぢやありませんわ。それよりもね、あたくし、どつちかつて云へば、ピユリタンなのね。あなたとあたくしとの關係を、普通の夫婦關係にしてしまひたくないつていふ氣がするんですの。それは勿論、空想ね。そんなこと、できつこないわ。でも、それを空想にしてしまはない方法が、たつた一つあると思ふの。

—このまゝ別れるつておつしやるんですか。

—いゝえ、そんなに辛くないもつと自然な方法よ。

—所謂、マリヤアジユ・ブランつていふやつを實行するんでせう。

—いゝえ、それこそ不自然此の上なしですわ。それに、こんなに愛し合つてゐるものが、そんなこと云ふだけ野暮ですわ。

—ぢや、どうするんです。

—だから、明日が來ないやうにすればいゝんですわ。

—明日が來ないやうに……。もつと、はつきり云つて下さい。

—このまゝ死んでしまふの。

—ば、ば、馬鹿な……。

—どうして……？　あたくし、それが理想なのよ。さうするより外、二人を世の中で一番幸福なものにする方法はないわ。ね、さうして頂戴。あたくし、その爲めに、わざわざ、ピストルを用意して來たのよ。

—ピストルを……。

—えゝ、ピストル……。こゝに持つてるわ。出して見ませうか。

――お止しなさい、危いから……。

――大丈夫よ。こら、まだ新しいのよ。彈丸は二發だけ入れといたの。あなたが一發、あたくしが一發、それで澤山なんですもの。

――どら、お貸し下さい。

――あなたがなさる？　駄目でせう。あたくしの方が上手よ。さ、此處がいゝか知ら……。それとも海岸に出ませうか。

――海岸に……？

――海岸の方が素敵ね。

ガ氏の聲　海岸まで、みなさんはついておいでになりますか。此の不幸な新郎新婦の最後を、みなさんは見屆けようといふ勇氣がおありですか。

――ゆき子さん、待つて下さい。それぢや、こゝで、たつた一度、キッスを許して下さい。最初の、そして、最後の……。

――いゝえ、いけません。さ、お起ちなさい。

――ゆき子さん、僕は、不幸です。

――もう一度云つて御覽なさい。

――なにをですか。

――今、おつしやつたことを……。

――今……？　（強ひて笑ひながら）　どうして、そんな眼附をなさるのです。（聲をふるはせ）　不幸だと云つたのは、僕の云ひ違ひです。僕は此の通り幸福です。幸福にふるへてゐるのです。

――幸福でせう。あたしもよ、あたしもこんなに幸福なの。

――それぢや、もうすこし、此處にかうしてゐませう。海岸にはまだあんなに人がゐるぢやありませんか。

――さうね、やつぱり此處の方がいゝわ。此の部屋は、全く靜かな部屋ね。二人つきりの世界が、ほんたうに始まりさうな部屋だわ。

――電燈を消しませうか。

――待つて頂戴。あたくし、なんだか、もう、かうしてはゐられなくなつたわ。

――（驚いて）　ゆき子さん……。

――ぢつとしてらつしやい。

――（絶望的に）　一寸、ゆき子さん……。

（と同時に、轟然、ピストルの音一發、二發……あとは寂寞。波の音。）

ガ氏の聲　みなさん、わたくしは冷靜でなければなりません、しかし、わたくしの心臓は、今、激しく鼓動してゐます。こら、この通り……（木魚を打つやうな音が聞える）　わたくしも、長年、此の實驗をつゞけてゐますが、こんな驚くべき場面に遭遇したことはなりません。日本

には、かういふ事件が屢々あるのですか。あるとすればうつかり……戀愛も出來ませんな。餘談はさて置き、次にうつります。今度は。……はい、わかりました。それではと……只今、其筋から、實驗に供する人物の本名を公表するなといふ御注意がありましたから、わざと假名を用ふることにします。そのおつもりで……。そこで、今度は……やはり、女の方ですが、何といふ名にしませうかな。手紙の文面では、もう相當の年配らしい、それでも、なかなかハイカラな御婦人ですな。それではと……どうも日本流の名前をつけるのは六ヶ敷しいが……。まあ、可笑しいかも知れませんが、キガ・ムラノさんとでも申して置きませう。そこで、キガ・ムラノさんのお聲を一つ……。

（最初ピアノの伴奏でテノールの獨唱が聞える。民謠風の曲である。）

――（うつとりした聲で）　いゝわね。なんて素敵でせう。

――ちつともよかないや。

――どうして……。あんたはなんでもけなしたがるのね。

――それより、小母さんは、どうして今夜、僕をこんなところへ誘ひ出したんです。

（方々から、シッ、シッといふ聲が聞える。長い間。）

――（囁くやうに）　もう少し我慢してらつしやいね。あとで、いゝことを聞かしてあげるから……。

（間。）

――何を探してるの。え、どうしたの、お金入れ……なくしたの。よく探して御覽なさい。外套のポケットぢやない。

（シッ、シッといふ聲。間。）

――ない？　澤山はひつてたの。そんな筈ないわね。え、澤山？　うそ……

（獨唱止む。拍手。）

――どう、起つて御覽なさい。その邊におつこつてやしない。

（そのうちに、ガヤガヤと方々で話聲がするので、この二人の會話は聞えなくなる。）

ガ氏の聲　落した金入れにいくらはひつてゐたかわからないのは殘念ですが、いや、それよりも、まだ知りたいことがみなさんにはおありでせうが、キガ・ムラノ夫人の秘密は、一とまづ、此の群集の雜音の中に葬りませう。（間）　今迄の實驗によつて、ほゞ、みなさんは、人間の精神活動と、宇宙の電氣的現象との間に存在する不思議な關係について、たしかな證據を認められたことゝ思ひます。すなはち、ある人間の音聲は、物理的に云ふ音波なるもの以外に、最も微妙な精神的波動を傳播し、その

波動が、他の特殊な精神活動、例へば「文字を書く」といふ機能と、その機能の結果に、一種の交感作用を及ぼす事實が明白になつたのであります、之を言ひ換へれば、人間の書いた文字には、人間の發する音聲と同樣に、精神があるのであります。少くとも、精神的波動と、これに感應する性質があるのであります。從つて、同じ人間の音聲と筆蹟との間には、特殊な精神的脈絡があり、空中電波の媒介によつて、その脈絡を電氣的にわれわれの感覺に訴へることが出來るそれが此の不思議な實驗なのであります。今日の實驗で、その筆蹟を、めいめいの署名と限つたのは、自分の名前といふものが一番書き慣れてをり、一番はつきりその人の精神を寫してゐるからであります。（間）　わたくしの學說を御紹介する上から云へば、實驗はもうこれくらゐで充分だと思ひますが、今氣がついて見ますと、此のお話は、どういふ間違ひか、プログラムには、演藝放送として取扱はれてをります。これは甚だ迷惑な次第でありまして、當然、科學講座、或は、くだけて、趣味講座として頂くべきでした。が、これはもう致し方がありません。放送局の御都合もあることゝ思ひますし、かたがた、みなさんの御期待にそむかないために、わたくしは、斷然、此の深遠な科學問題を、肩の凝らない娛樂としてみなさんの前に提供することに致します。それにつきまして、一つ、御相談があるのですが、先程、申上げました通り、屑屋から貰つて來ました手紙が、まだ二三通殘つてゐるのです。しかし、どれを見ましても失禮ながら、あまり面白さうな人物もゐないやうですから、一人一人やつて見ても始まらんと思ふのです。そこで、今迄、そんなことをやつて見たことはありませんが、今夜、試みに、これを一度にやつて見たらどうかと思ふのであります。或はたゞ、わけのわからない、狐にでもつまゝれたやうな場面になるかとも思ひますが、なに、世の中の出來事は、芝居のやうに筋が通つてはゐないのであります。念の爲め、一ツ、二ツ、三ツ、此の三人の住んでゐる處だけを大體御知らせして置きます。えゝと、一人は北海道、一人は東京市外高圓寺、尤も、そのそばに神田キネマホールといふ活字が刷つてあります。それから、もう一人は、上海にてと書いてあるだけです。それでは、はじめます。

——妻のわさ子は、いよいよ、住みなれた我家、その昔、光は此處にのみとさへ思つた愛の巢を後に、雪深き北海の果て、トラピスト修道院に向つたのであります。

（甚だ悲しい音樂がはじまる。）

——初めてお目にかゝつた旦那に、こんなことお願ひしちや濟まないんですが、どうか一つ、いくらでも結構です、

助けると思つて……。

——わかつた。君が、かうして、旅の空で、借金に苦しんでゐるのを見るだけで、僕の氣持は暗くなる。しかし、上海あたりで、ホテルのボーイでもしてゐれば、相當金がはひりさうなもんぢやないか。

——使つちまふから駄目です。

——はひる以上に使ふんぢや借金も出來るわけだな。

——淋しいんですよ、旦那……。金でも使はなけれや、ぢつとしてあの灯を見ちやゐられません。

——うちぢやね、堅いお客さんばつかりなんだから、あんまり變な評判を立てられないやうにして頂戴よ。

——あたし、そんな女に見えます？

——さういふわけぢやないさ。たゞね、いろんな女がゐるからさ。いらつしやいませ。お一人？　この娘、今日來たんですの。どうかよろしく……。

——朝の祈り、晝の祈り、夕の祈り、彼の女の姿は、その祈りの度毎に淨められ、心の痛手は純白の法衣の下に、あとかたもなく消えて行つたのであります。

——旦那、今夜一つ、どつかへお供しませう。ダンスホールは如何です。

——僕は踊れないよ。

——踊らなくつたつて、旦那、一度、經驗しといても惡かありませんよ。上海は、その點、世界的市場ですからね。

——何をそんなに見てらつしやるの。

——君の顏をさ。

——あたしの顏に何かついてます？

——ついてやしない。たゞ、不思議なんだ。

——どうして？

——君が、こんなところへ出るなんてさ。何か事情があるんだらう。

——彼女は今、燈火のほの暗き祭壇に額づいて、何事か、心に祈りつゞけてゐるのであります。惡むべき夫は、もはや、彼の女の眼に、單なる憐むべき男として映じてゐるに過ぎません。

——君は誰にでもさういふことを云ふのかい。船がはひると、君は、眼をキョロつかせて船客の誰彼を物色するんだね。僕は、不幸にして、君の眼鏡にかなつたわけか。

——旦那は、でも、甲板の上から、わたしの方ばかり見ておいででした。

——僕は、上海は不案内だから、どこか、日本人の經營してゐるホテルへ泊らうと思つてゐたのだ。

——旦那は何處からおいでになつたんですか。

——何處から來た、あの船の來たところからさ。

——何處へいらつしやるんです。

――そんなことを聞いてどうする。僕は、君のやうな男にまた會ひたくはないよ。

――ねえ、僕にそれを聞かしてくれ給へな。

――さういふことをお聞きになるお客さまつて、隨分多いのね。

――だけど、僕は、ほんとに君の身の上に興味をもつてゐるんだよ。

――あら、まあ、御禮を云はなくつちやならないのか知ら。

――彼女は、しかし、それ以上に、自分を憐れむべき女だと思つてゐました。

――冗談ぢやないよ。

――弱りましたな。

――それより、何か召上らない。

――一體、いくら欲しいんだい。

――ぢや、ハムサラダとエビフライ……。

――いくらでも結構です。借金は二百圓ばかりなんですが。

――御飲みものは……。

――君の借金の高は僕に關係はない。

――シトロンでいゝ。君も何か食ひ給へ。

――ぢや、五十圓ばかり如何でせう。

――あたしは澤山……。

――五十圓……。それや、知らない男にやる金ぢやない。

――をばさん、此の女にも御馳走していゝだらう。

――そんなら三十圓ばかり……。

――えゝ、ようござんすとも……。

――馬鹿云へ？

――靜かに上げた彼女の顔は、晴れやかな光に滿ちてはゐましたが、その眼には、われ知らず涙の露を宿してゐたのであります。

――辯士默れ。

（やがて音樂が止む。）

ガ氏の聲　やゝ混亂の體でありますから、この邊で打ち切り、最後に、みなさんのお許しを得て、此のドラマの作者――名前はおわかりでせう――これを槍玉にあげることに致します。一體なら、作者は、當夜放送局に出張つて、自ら放送指揮をなすべきであるに拘はらず、怠慢のためか、はたまた、自信のないせゐか、今以て顔を見せません。そこで、此處にある原稿の署名を利用して、彼が、現在、何處で何をしてゐるかを突き止め、あはよくば、みなさんの喝采を博したいと思ひます。では、早速…

（グゥグゥ高鼾が聞える。）

ガ氏の聲　これはなんでせう。此の音は……はゝゝ、眠つてをります。

（ムニャムニャいふ聲。）

ガ氏の聲　何か云つてをりますか。
――うむ……。五月蠅い、やかましい、ラヂオなんかやめちまへ。
ガ氏の聲（狼狽して）はあ、今すぐ……。
（アナウンサアの聲、ガンバハル氏の御講演「精神と電氣」は終りました。）
（をはり。）
――東京中央放送局のために――

ゼンマイの戯れ

――映畫脚本――

主なる人物

笠原平造（四十六才）
妻たけ子（四十二才）
長男政一（二十三才）
娘　富子（二十才）
次男圭次（八才）
北野良作（四十五才）
安田　茉（二十六才）

此の「物語」は、特別の指定以外、どの部分を畫面で表し、どの部分を字幕で、また、どの部分を「説明」で補はうとも、それは監督の自由である。たゞ、各場面々々の印象を、映畫的に活かして貰へばいゝ。

第一巻

1

古ぼけた柱時計が大きく映る。針が零時十五分を指してゐる。
振子を持つた男の右手が現はれる。時計を捲き始める。針を九時に直す。
振子を振つて見るが、すぐ止まつてしまふ。

2

時計の内部が映る。ゼンマイが外れる。
そのゼンマイが、幕一杯に大きく映る。そして、今度は、それが急速度で廻轉し始める。すると、その中心から、白い華車な女の右手が現はれる。人差指を出して、何かを指し示してゐる。
此の畫面が次第に消えて、次の情景が寫し出される。

3

笠原平造は、日當のいゝ緣先にあぐらをかいて、一心に小刀を動かしてゐる。見ると、玩具の船が出來かけてゐる。傍らに、圭次が、おとなしくそれを見てゐる。もう、帆をかけるばかりである。
妻のたけ子は庭の一隅で張物をしてゐる。

船ができ上つたので、平造は盥に水を入れて、それを浮かして見る。圭次がよく遊んでゐるのを見て、平造は鶏小屋に近づく。金網の破れたところを繕ふ。
富子は母に何かせがんでゐる様子である。
――お父さん、富子が、お友達のとこへ行きたいつて云ひますよ。
平造の慈愛と威厳とを無器用に交へた表情。
――今日はやめとけ。後でお客さんがあるから……。
富子の不服らしい顔附。
母親の富子をたしなめてゐる様子。
平造は、娘の氣を惹くやうに、
――安田が、また、トランプをしに來るつて云つとつた。
富子、相變らず不機嫌である。しかし、どうにもならないことを知ると、急に、何もなかつたやうな顔して、奥に姿を消す。
平造は、鶏小屋を離れると、今度は、花壇の方へ歩を運ぶ。草花の新芽がのびてゐる。それに、輕く指をふれながら、誰に云ふともなく、
――今年は芍藥がよく出た。

4

ある官廳の事務室。――六七人の男が事務を取つてゐる。

平造は頻りに帳簿の整理をしてゐる。
上役らしい男が現はれる。平造の傍に來て、平造の差出す書類に眼を通す。大きくうなづく。ふと、卓子の上に立てかけてある、寫眞立のやうなものに眼をつけ、それを取上げて見る。それは、カレンダアであるが、そのカレンダアを右に開くと、左から疊み込んである別の紙に住所録がついてゐる。そして、その裏が汽車の時間表になつてゐる。それをまためくると、裏に、必要な電話番號が書き込んであり、中央の仕切には、一枚の寫眞が張りつけてある。
――はゝあ、なるほど、これは便利なもんだね。君の考案かい。
平造一寸恐縮する。
――此の寫眞は、大連汽船にゐるつていふ息子さんだね。
――はあ。
上役は、なほ、その組立てを檢めながら、
――しかし、なかなか器用だね。どうだい、一つ新案特許を取つちや……。立派な發明だよ、こりや、君……。ねえ、安田君。
安田君と呼ばれた隣席の男は、どつちともつかぬ笑ひ方をしてゐる。上役は、上機嫌で、
――暇があつたら、僕にもこれと同じやつを一つ、こしら

へて吳れないか。
平造は、大いに面目を施して、上役に一禮する。
隣席の青年は、更めて、そのカレンダアを取り上げる。
——さう云や、さうですね。新案特許なんてものは、すぐ取れるらしいですよ。
向ひ側の男が手を出す。隣席の男の手からカレンダアを受け取る。それをつくづく見ながら、
——笠原式……何んとつけたらいゝかね。

5

平造は、隣席の安田と共に役所の門を出て來る。
青年が頻りに話しかけるのを、上の空で聞いてゐる平造——
—彼は時々、自分の空想に向つて笑ひかけてゐるらしい。
平造の頭の中をかすめる幻影——
汽罐車——自動車——飛行機——電線——電話——ラヂオのアンテナ——電車——工場に於ける齒車の廻轉——化學實驗室——學者が試驗管を振つてゐる——圖書館の本棚——歐文の書籍——その頁が順々にめくれて行く。

6

平造は、何時の間にか一人になつてゐる。氣がつくと、自分が今、何處にゐるのかわからない。一つ時、きよろきよろ、あたりを見廻はす。やつと、方角がわかつたらしく、急いで歩き出す。撒水夫が通る。平造は慌てゝ飛び退く。
——畜生！　あんなものは、なんでもない。水の壓力を利用しただけだ！

7

家の門口である。平造は元氣よく玄關の格子を開ける。
茶の間で服を着かへる。食事の用意が出來てゐる。食卓に着く。
たけ子の話
——お向うのお孃さんは、いよいよ十日に式なんですつて……。今日、奥さんが見えて、仕度を一度見てやつてくれつておつしやるんでせう。見て來たの。大したものよ、そりや……。總桐の簞笥が二棹……それに……。
平造は默つて此の話を聽いてゐる。聽いてゐるふりをしてゐるのかも知れない。その眼は、しかし、それとなく娘の上に注がれてゐる。
つつましく箸を運んでゐる娘の姿が、華やかな婚禮姿になつて眼の前に浮ぶ。そして、その傍に並んで坐つてゐる新郎の姿、これはまた、役所の同僚、安田なのである。
すると、何時の間にか、平造の眼の前には、今日、上役が

カレンダアを見て、發明の才があると褒めた、あの時の光景がありありと浮んで來る。
平造は、はつと、我に歸る。誇らしげに、一同を眺めまはす。
——おれが、今に、どんなにえらいことをしでかすか、まあ、見とれ。
妻と娘とは、あつけに取られて、平造の顏を見る。

8

夕食後——
平造は、夕刊を讀んでゐる。
妻と娘は、針仕事をしてゐる。
圭次は、腹這ひになつて、繪を描いてゐる。
平造は、次の新聞記事に目をとめてゐる——

遠山平造氏の世界的發明
——飛行機垂直離陸の實驗成功——
▲航空史上の一大記錄▼

平造は、新聞を下に置いて、眼をつぶる。すると、次のやうな活字が表はれる。

笠原平造氏の世界的發明

平造は、思ひ出したやうに、起ち上つて、座敷へ行く。薄板、ボール紙などを取り出す。

9

スクリーン一杯にゼンマイ仕掛がうつる。そこへ白い華車な手が現はれて、ゼンマイのネヂを捲く。

第　二　卷

1

平造の考へ込んでゐる顏——
役所で。
町を歩きながら。
食事をしながら。
風呂の中で。
寢床の中で。
電車の停留所で。

2

平造は、いろいろな書物を讀みはじめる。

通俗科學講話
機械工學
世界發明家評傳

3

印刷工場を見學してゐる平造。——彼は實に「感心屋」である。

4

自轉車屋の店先で、オートバイの說明を聽いてゐる平造。——彼は少し强情なところがある、そのくせ、臆病である。

5

憲兵曹長の知人から、ピストルの構造並に各部の機能について、講釋をして貰つてゐる平造。——彼は、あまり理解力の强い方ではない。それでゐて、早合點をする癖がある。

6

平造は夕食が終ると、すぐに座敷に引込んでしまふ。その後ろ姿を見送る一同の淋しい顏。

7

平造は、座敷で、何にか圖面を引いてゐる。たけ子がはいつて來て話をしかけるが、返事をしない。しまひに、
——五月蠅い！　おれが何をしてゐるか、それがわからんか。
たけ子は諦めて部屋を出る。

8

茶の間である。電燈がついてゐる。時計が止つたまゝ九時を指してゐる。圭次が額に濡れ手拭を當てゝ寢てゐる。たけ子と富子とが、その枕元に不安らしい顏を並べてゐる。平造が襖を開ける。此の樣子を見て、一寸、驚く。
——どうしたんだ。
——少し熱があるらしいんです。
と、たけ子が答へる。
平造は、病人の顏をのぞき込む。
——どこが痛い？
病人は何か云つてゐるやうであるが、平造の耳にははいらない。
——富子、醫者を呼んで來い。
——お待ち、わたしが行くから……。

たけ子は、かう云つて起ち上る。
此の時、三人の眼は、云ひ合はしたやうに、止つた時計の上に注がれる。

9

役所の卓子の前で考へ込んでゐる平造。
給仕が何か云つてゐる。平造は慌てゝ書類を探す。探し出した書類を見ながら、別の紙に何か書きつける。急ぐので思ふやうに捗らない――さういふ焦立たしさが見える。
給仕がまた呼びに來る。平造、何度もうなづく。しばらくして、やうやく仕事の形がついたらしく、書類を持つて出て行く。

10

上役の部屋。――平造が恐縮したやうにはいつて來る。上役の不機嫌さうな顔。
――君は近頃、どうかしてるね。
平造は、やゝ窮屈な笑ひ方をする。が、だんだん反抗的な態度を示して來る。

11

ある小さなカフエー。――平造と安田とが卓子に向ひ合つてゐる。
――新案特許は駄目でしたか。
――うん、あれや、どうだつてかまはんさ、處が、今度こそは大丈夫だ。
――何んです、今度のは？
――何んだと思ふね？
――さあ……？　鉛筆削りですか？
――馬鹿云つちやいかん。
それから、平造は、手眞似身振を交へて、新發明品の說明をする。
それは、つまり、箱車に取りつける日覆である。炎天に重い車を曳いて歩く小僧達の慘めさから說き起して、人道上から見ても、その考案の價値が如何に大であるかを述べる。
――ねえ、安田君、さう思はないかね。
――そいつは、たしかに、いゝですな。
――第一資本を手に入れる必要があるんだ。
――何時か聞いた、あの人はどうです、辯護士で會社の社長をしてるつていふ人は……。幼友達だつていふぢやありませんか。資本ぐらゐ出してくれるでせう。
――いやだ。あいつの力は借りたくない。

――からだを動かすことなら、僕を使つて下さい。

――あゝ、君には、いろいろ相談するつもりだ。君は文章がうまいから廣告文を書いて貰ふかな。

――ビラ撒きだつてやりますよ。

――はゝゝゝ。

兩人は愉快さうに笑ふ。

12

圭次の病床。――

醫者が脈をみてゐる。そこへ平造が歸つて來る。

13

座敷。――平造と醫者とが對座してゐる。

――どうも、私では少し不安ですから、どなたか專門醫にお見せ下さいませんでせうか。

――餘程重態でせうか。

――可なり重態だと思ひます。どうですか、いつそ病院へお入れになつては……。

平造は默つて考へ込む。

14

茶の間。――

たけ子が獨り、圭次の枕元に坐つてゐる。

襖越しに醫者の云ふことを聽き取らうとしてゐる。

15

平造とたけ子とは、醫者を送り出して、座敷に歸つて來る。

二人はなるべく口を利くまいとしてゐる。しかし、云ふだけのことは云はなければならない。

――北野に相談して見ようか。

――およしなさいね、それだけは……。

――ぢや、どうする。

――政一のところへ云つてやつて見ませうか。

――あいつにか……。

――でも、ほかの場合と違ひますからね……。

16

炎天下の路上を、寢臺車が通る。その後から、平造が、扇子を使ひながら歩いて行く。時時、幌の間から中をのぞく。平造は車を挽いてる男に聲をかける。

――此の車は、これで、いくらぐらゐかゝるね、造らせると……。

17

平造が、座敷の机の前に坐り、兩手で頭を抱へてゐる。左の手に繃帯をしてゐる。突然、机の曳出から、一葉の證書を取り出し、それを眺める。その證書は、「箱車用笠原式日覆」の新案特許證書である。何か決心したらしい面持で起ち上る。服を着替へはじめる。

18

北野法律事務所といふ表札のかゝつた建物の前を、さつきから、行きつ戻りつしてゐる平造。

19

應接室。——平造が北野良作と對座してゐる。彼は風呂敷包をほどいて、特許證書を取り出す。そして、それを良作の方に差出す。良作は、その證書と平造の顔とを見比べてゐる。平造の顔には、ありありと得意の色が浮ぶ。

——實は、このことについて、御相談に上つたんですが。

良作の怪訝な顔。

——へえ、君にかういふ才のあることは、ちつとも知りませんでしたね。さあ、しかし、わたしは、かう云ふ方面には丸で素人だが……。

平造は、こゝぞとばかり、

——なに、少し資本さへあれば、きつと成功するだらうと思ふんです。

良作は苦笑しながら、

——わたしも、自分の關係してゐる仕事に、もつと資本が欲しいくらゐなので……。

平造は、默つて對手の顔を見てゐる。明かに失望の色が見える。

良作はそれを慰めるやうに、

——だが、心懸けては置きませう。事業家といふものは、どんなことに興味を持たないものとも限らない。機會があつたら、さういふ方面の人に話して見ませう。

平造は、頭を下げる。そして、逃げるやうに外へ出る。

20

平造は人通りの多い町を歩いてゐる。ある四ツ辻で、老人が自動車に轢き倒される。人だかり。巡査。擔架。

平造はそこで、自動車に轢かれても怪我をしない護身裝置を考案しようと思つてゐる。それは鋼鐵製の鎧のやうなものか、或は魚を燒く金網のやうなものでなければならないと考へる。既に、さう云ふ護身裝置をつけた人間が眼の前に浮ぶ。そして、その人間が實際自動車に轢かれながら、平氣で起き上つて歩いて行く有樣が眼に見えるのである。處が、さういふ奇妙な恰好をした人間が、右

往左往する大通りを想像して見ると、一寸、變な氣がする、こいつは、もう少し考へ直して見なければなるまい。

21

ゼンマイのネヂを捲いてゐる大きな白い手。

第三巻

1

港に碇泊してゐる汽船の舷梯。
三等運轉士笠原政一は、今、一通の長い手紙を讀み了つたところである。脣がかすかに顫へる。
手紙の一端が飜る。

政一どの　　母より

といふ字がはつきり讀める。
政一の顏はだんだん悲痛な色を帶びて來る。彼は今、眼の前に一つの情景を描き出してゐる。
其處には、圭次が寢てゐる。勿論、病人であることだけはわかる。その傍に、母が泣き伏してゐる。
次ぎに、父が頻りに小刀で木を削つてゐる。やがて其の手をやめて、考へ込む。髮の毛を掻きむしる。癇癪を起して立上る。富子とたけ子が兩方からその手に取り縋る。
それを拂ひ退けて、狂氣のやうに笑ふ。
政一は、溜息を吐く。手紙を靜かにしまふと、何か思ひ出したやうに、急いで其處を立ち去る。

2

政一の船室。――机の上に、家族一同の寫眞が飾つてあるのがすぐ眼につく。政一は、船室にはいると、いきなり、手紙を書きはじめる。

3

平造の役所の事務室。
平造の席ばかり空いてゐる。隣席の安田は、向ひ側の同僚と笑ひながら話をしてゐる。
――笠原君には、近頃會ふかい。先生よりも、娘さんにやどうだい。
安田は案外眞面目である。
――えゝ。
――箱車の日覆は、やつぱり駄目かい。
――雇主に理解がないんで、どうにもならないて云つてしまつた。しかし、今度考案したのが當れば大したものでせう。

――何だ、今度のは？
――當てゝ御覽なさい。
――鼠取りだらう。
――あ、どうして知つてるんです。
――それ位のこた、わからあね。二三日前に新宿で奴さんに會つたんだよ。鼠取りなんか、今時、誰が買ふもんか。それはさうと、急に役所をやめられちや、先生も、困るだらうな。
――結局、氣樂だつて云つてましたよ。
――あれで、なかなか、負惜みが強いから……。

4

病院。圭次の病室。
看護婦が忙しさうに出たり入つたりしてゐる。たけ子は圭次の顏をのぞき込んでゐる。醫者が來て注射をする。

5

平造の家。――小使風の男が玄關を開ける。
――佐竹病院から參りました。すぐ皆さん、病院へおいで下さい、坊ちやんの御容態が少しお惡いやうですから。
富子が飛んで出て來る。すぐに奥にはいる。
富子は座敷と茶の間との間を行つたり來たりする。そしておろおろ聲で、
――お父さんはどうしたらいゝだらう。

6

病院。
圭次の枕元には、たけ子と看護婦と醫師とが附きそつてゐる。そこへ、富子が、息せき切つてはいつて來る。
――お父さんは、何處へいらつしやつたか、わからないの。
醫師は脈を取りながら、
――まだ大丈夫です。
一同は氣が氣でないといふ風に、絶えず戸口の方に眼をやる。富子だけが、眼にハンカチを當てゝゐる。

7

荒物屋の店先で、新案蠅取器を手に取つて仔細に見てゐる平造の姿。

8

夕方である。繁華な大通り。動物の玩具を賣つてゐる大道商人。茣蓙を敷いて、その上に、色々な動物が並べてある。殊に、兎、蛙、龜、蛇などが眼につく。可なりの人だかり。それは、たゞ、その玩具が珍しいばかりではな

い。何よりも、それを商ふ男の、人を喰つた口上が暇な散歩者の足を止めるらしい。

——如何です、本物よりよく出來てゐるでせう。それもその筈、こいつらには、人間の魂が吹き込んでありやす、へゝゝゝ。

男は、かう云ひながら、それらの物を動かして見せる。

——これは兎です。はい、こちらが龜さん……。この通り、のそのそと匐ひ出します。何が可笑しいんです。君だつて此の龜と大して違やしないよ。（笑ふ）こんどは蛙です。さあ、飛んだ。おや、人間が笑つてるぞ。玩具の人間が……。さ、これはなんです、お嬢さん（と云つて、若い二人連れの女の鼻先へ、蛇の玩具をつきつける。あれッと大業に叫んで、女たちは顔をそむける）はゝゝゝゝ。なにも、怖いことはない。さういふ風に、あなた方の頭は單純に出來てる。ね、あなた方が嬉しいと思ふ事は、ほんとにうれしい事ぢやない。悲しいと思ふことも、ほんとに悲しいことぢやない。あなたがたが、たゞ、さう思ふだけですよ。わかりましたか。わかつた人は、手を擧げて！　さあ、さあ、皆さん、ゼンマイ仕掛の頭で何を考へてゐるんです。早く買はないと日が暮れる。兎はこれで二十錢、龜と蛙が十五錢、蛇は特別で五十錢……。さあさあ、買つた買つた。

かう云ひながら、手早く、玩具のゼンマイを捲き直す。

それを、いろいろの氣持で見てゐるいくつもの顔。——あるものは無邪氣に感心し、あるものは、わざと馬鹿々々しいと云ふ薄笑ひを浮べながら、その實なかなか心を惹かれてゐる、また或る者は、人が見てゐるから見てゐると云ふ張合のない表情。その他、不健康な文明が生むさまざまな不健康な顔が、此の小さな生命の假感によつて、いろいろな程度に刺激され、興奮させられてゐる有樣が、氣味惡るく、また、やゝ滑稽に現はされる。

そして、それらの顔の中に、いつの間には、一つの新しい顔が加はる。それは平造の愚直そのものゝ如き顔である。その顔は、次第に他の顔の前に出て來る。つまり、他のものを押し分けて、動く龜の方に近づいて來るのである。

——どうです、一つ、旦那、お土産に龜の子は如何です。

かう、云ひかけられて、平造は、一寸、きまり惡るげに顔を引込める。

此の頃から、買手が盛に現はれる。銀貨や白銅をつまんだ手が、あつちからもこつちからも出る。

——兎をくれ給へ。

——おい、龜の子。

——蛇を二匹くれ、二匹。

——蛇と蛙を交せてくんな。

みんなの笑ひ顔。

忽ち商人の膝の前には白銅と銀貨の山が築かれる。

平造は、もうそこに文字通り腰を据ゑてゐる。そして、手に取つてこそ見ないが、玩具の動く仕掛を、前後左右から見究めようと努めてゐる。それがためには、殆んど地べたに頬を擦りつけなければならない。彼は衆人環坐の中にゐることを忘れてゐるやうである。彼が何氣なく顔を近づけた刹那、一匹の蛙がピョンと鼻の頭に飛びついた。可笑しいのは本人ではない。が、他のものは、そんなことには氣がつかない。たゞ此の熱心さには、誰もが興味を感じてゐる。勿論かういふ場合の常として、中には、此の憐れむべき研究狂を鼻で嗤ふ氣障な紳士も交つてゐる。

平造は、たうとう我慢ができずに、蛙を一匹手に取り上げる。裏返して見る爲めである。その時、商人は無意識か故意か、代金を受け取る手を、その方に差出す。すると子供が何か惡戯をして、それを見つけられた時のやうに、惶てゝ、蛙を下に置く。左右を見返る、多くの眼が自分の方に注がれてゐる。彼は、此の時こそ、自分の滑稽な立場をはつきりと意識する。逃げるやうにそこから立ち去る。

9

平造の右手。——掌の上に、銅貨が二枚。

10

病院。

圭次の傍に、たけ子と看護婦とが、靜かに話をしてゐる。たけ子は、額のあたりに、いくらかまだ暗い影を殘してゐるが、看護婦の方は、殆ど、今朝の緊張した光景を忘れさせるほどの明るい微笑を以て之に對してゐる。圭次は兩眼をはつきりと見開いて、何か物を云つてゐるらしい。

たけ子が、匙で牛乳を飲ませる。

戸が開く。平造が悄然と、疲れ切つた姿を現す。たけ子の險しい眼付。平造は圭次の枕元に近づく。圭次の手を取る。その間、一言も發しないたけ子は、遂にゐたゝまらないやうに座を立つ。よろけながら戸口に近づく。戸を開ける。と同時に、袖を眼に押し當てる。姿が消える。

11

病院の長い廊下。——薄暗い電燈の光り。

たけ子、窓から外を見てゐる。努めて氣持を落付けようとしてゐるらしい。何度も病室の戸口に眼をやる。廊下を

往き來する看護婦、輕症患者、面會人など。
平造が出て來る。すぐたけ子のそばに近づく。たけ子はその方を振り向かうとしない。
——ちつとも知らなかつたよ。
——あなたは、まだ、御自分のしてらつしやることがわからないんですか。
——わるいことはしてやしない。
——結果は同じことですわ。あたしは、もう決心をしました。
——どういふ決心——？
そこで平造は、たけ子の顏をのぞき込む。たけ子は、汚らはしいものを避けるやうに、顏をそむける。
——おれの仕事を、もう少し理解してくれなくちや困る。おれの才能を何處までも伸ばさせてはくれないのか。
——それよりも、あなたはあなただけの仕事をしてゐて下さい。その方がみんなのためですわ。
——おれに、どれだけのことが出來るか、お前に解るか。ね、さうだらう。もう少し見てゐてくれ。
——それが解る前に、あたしたちは世間から見放されてしまふでせう。
此の時、病室の戸があいて、看護婦が手招きをする。たけ子、急いで病室に入る。平造之に從ふ。但し、看護婦の樣子は、決して、彼等に危險を豫感させる程度であつてはならない。

12

病室の內部。——圭次、父親に何か云ふ。平造大きくうなづく。
——ようし、あした來る時持つて來よう。
平造は、一瞬間、何か考へてゐる樣子である。が、すぐに、圭次の傍を離れ、たけ子に向ひ、小聲で、
——もう少し辛棒してくれ、今度こそは物にして見せる。

13

病院の門を出る平造の、淋しい影のやうな姿。

14

動き止んだゼンマイ。——大きな白い手が現はれる。ネヂを捲き初める。

第四卷

1

平造の家。

先づ茶の間である。長火鉢もない。その代り、安物らしい瀬戸火鉢と、食器を並べたまゝのチャブ臺が一隅に片付けられてある。

2

庭の花壇には雜草が生ひ茂つてゐる。庭の一隅に、日覆を取附けた箱車が、しよんぼり置去りにされてある。鷄小屋には鷄が一羽もゐない。富子が洗濯物を干してゐる。

3

平造は、座敷で、相變らず何か考へ込んでゐる。あたりには、ゼンマイ仕掛けの玩具が三ッ四ッ散らかつてゐる。時々、それ等の玩具を動かして見る。先づ、拳鬪の玩具である。その次は、ノンキナトオサンである。トオサンが歩くたんびに、自分も首を振る。最後に、輪を描いて飛ぶ飛行機である。これは最も平造の意に叶つたものであるらしい。彼は子供のやうに打ち興じる。

4

玩具屋の店先。
平造が切りに玩具をいぢつてゐる。

5

また別の玩具屋。――平造の顔が飾窓に映つてゐる。

6

最後に、ある玩具屋の店の奥。――玩具屋の主人は、あれこれと變つた玩具を平造に見せてゐる。入り代り立ち代り新しい客が來て、買物をしては出て行く。平造は、もう餘程長くゐるらしい。主人は、此の不思議な客を五月蠅く思ひ出す。もう相手にしなくなるが、油斷なく、一擧一動を監視してゐる。高い處に載せてある箱入の高價らしい玩具を平造が一寸見せてくれと云つても、主人は――あれですか、あれやお手に合ひますまい。
と云つて取り合はない。
平造は、主人の不機嫌を見て取り、何か買はなければ惡いと思ふが、生憎懷は淋しいし、手頃な欲しいものがない。止むを得ず、おしやぶりを一つ買ふ。そして店を出る。

7

公園である。子供達が大勢遊んでゐる。繩飛びをするもの、ブランコに乘るもの、スベリ臺を滑るもの、それから、獨樂を廻すもの、小さな自動車を運轉するもの、其の自

動車が平造の眼にとまる。平造は、その側に近づいて行く。乘つてゐる子供には頓着なく、機械の點檢を始める。スケートに乘つた子供が來る。その子供からスケートを取り上げて、自分で乘つて見る。勿論、その構造を研究することを忘れない。スケートを取られた子供は、泣き出しさうな顔をして平造の後ろ姿を見送つてゐる。遊動圓木をやつてゐたその姉らしい少女が、弟のそばに來て、「どうしたの。」と聞いてゐる。弟は、恨めしさうに、平造の方を指さして、何か訴へてゐる。「まあ、ひどい小父さんね。」と言つてゐる少女の眼つき。

しばらくスケートは調子よく滑走を續けてゐたが、忽ち、車が廻らなくなる。平造は、前にのめる。急いで、修繕に取りかゝる。子供がたかつて來る。平造は、汗だくだくで、大人の面目を立てようとあせつてゐる。

8

病院。

圭次の枕元で、たけ子が居眠りをしてゐる。――靜かな病室の朝の日ざし。

醫者が回診に來る。

――もう一と息です。今が一番大事な時ですよ。

――お蔭樣で命拾ひを致しました。

9

北野法律事務所の應接室。

良作と平造とが向ひ合つてゐる。

――どうです、一つわたしの會社で働いて見ませんか。

――家内から、さういふことをお願ひしたのではありませんか。

――いゝえ、わたしの一存です。わたしは舊友として、君達を見殺しにすることは出來ない。さうかと云つて、君達の窮境を救ふといふ名で、君達を、つまらぬ恩義で縛るやうな結果になることは絶對に避けたいと思ふのです。なにしろ、かう云つてはなんだが、君のやつてゐることは、どうも、わたしたちには見當がつかんよ。

――あゝ、さうですか……。信用できないと云はれゝばそれまでゞす。

――笠原君……。

平造は默つて立ち上る。明らかに憤懣の情を抑へてゐる。良作は沈痛な面持で平造を見上げる。

10

公園。――薄暮。

運動場には、子供は一人もゐない。それは何となく空虚な

感じである。平造は、默つてベンチに腰をおろす。そこへ、同じく仕事にあぶれたらしい勞働者風の男が來かゝる。これも、ベンチに腰をおろす。全く別々な、しかし同じく孤獨な二つの魂が、何時からか、そこに置き忘れられたやうに見える。風が立つ。落葉が舞ふ。長い沈默。平造は、起ち上つて、歩き出すが、何を思つたか、また元の所に腰をおろす。

野良犬が一匹、尾を垂れて通る。

11

電車の中。――

平造は吊革にぶら下つて、人が讀んでゐる新聞の盜み讀みをしてゐる。その男が新聞をしまふ。手持沙汰な顏をする。殊に眼のやり場に困る。その隣りに、子供を抱いた婦人が腰掛けてゐる――その子供の持つてゐる玩具に、ふと眼をつける。その玩具は、猿の木登りの玩具である。母親は子供をあやしながら猿を上げたり下げたりしてゐる。平造は子供の顏をのぞき込んで「ばア」をする。さういふ時の、多くの若い母親がする會釋。平造は悶々しくなつて、子供の玩具に手をかける。子供が泣き出す。母親は、見知らぬ男の無作法なお愛想に、やゝ反感を抱いたらしく、ぷいと席を立つ。すると、平造は、にやにや笑ひながら、その空席を占領する。

電車の中に並んでゐる無表情ないくつもの顏。

12

夜店。

ダンス人形を賣る男。――人形は、あらはな兩腕を細い腰に當てゝ、足拍子面白く、華やかなトーダンスを踊つてゐる。アセチリン瓦斯の光が、踊り子の冷めたい、白い肩先を照してゐる。

平造の顏が、大きく笑ふ。

――何と、うまいものを考へ出す奴がゐることよ! だがおれは一體、何をどう工夫すればいゝのだ?

13

平造は富子の給仕で、形ばかりの夕食の膳に向つてゐる。

――あたし、今夜は、病院へ泊つて來ようかと思つたの。母さんは、あれから、幾晩も寢てないのよ。でも圭ちやんが歸つて來るならうれしいわ。――あたしがついてるから、一度家へ歸つてお休みなさいつて云ふのに、母さんは、どうしても圭ちやんをはふつて歸るのはいやだつて云ふんですもの。

平造は、食事を終ると、仰向けにごろりと寢ころがる。富

子が枕を持つて來る。そして食事の後片附けをする。

14

平造の頭の中では、今、いろいろな玩具が次ぎ次ぎに、現はれては消え、現はれては消えするのである。殊に、ダンス人形は、平造の貧しい空想を嘲りながら、幾度も、その魅力ある活潑な運動を繰返す。

其處へ、ノンキナトオサンがノコノコ歩いて來る。するど、ダンス人形が、いつの間にか、娘富子そつくりに見えて來る。こつちを向いて笑つてゐる。ノンキナトオサンの顏は、何時の間にか、平造の顏に變る。

そこへ、今度は同じやうな踊り子が、一人出て來る。二人は手をつないで廻り始める。ぐるぐる絶え間なく廻る。それが大きな獨樂に見える。

と、今度は、踊り子が一人一人爪先で廻り出す。それは、見てゐると、二つの獨樂が並んで廻つてゐるやうである。

それが、また、一つの獨樂になる。その獨樂が踊り子になる。その踊り子が娘の富子になる。

ノンキナトオサンは、いきなり踊り子の手を取らうとする。踊り子は驚いて、その手を振り放す。逃げる。追ふ。

踊り子は、ある波止場に追ひつめられる。が、ノンキナトオサンはもう足が動かなくなる。その時は平造である。

兩手を差出して、娘の名を呼ぶ。

踊り子は岸に浮んでゐるボートの中に飛び込む。ボートの中には、白い服を着た青年が乘つてゐる。ボートが岸を離れる。青年と踊り子とは顏を見合はして驚く。青年は政一である。二人は抱き合つて悦ぶ。

平造は、がばと跳ね起きる。眠つて居たらしい。が、その眼は、何か見失つたものを探してゐるやうである。

富子は氣味惡るさうに父の視線を追ふ。はたと二人の視線が合ふ。平造は、しげしげと娘の顏を見守る。と、急に平造の顏は輝いて來る。

——あれだ！

かういつて、膝を打つ。富子は、何のことかわからないが此の言葉の調子に惹き入れられて、我れ知らず大きな息を吸ひ込む。

——ようし、占めた！

平造は更にかう叫んで、富子の兩手を取る。

15

大きな白い手が、ゼンマイのネヂを捲き終つたところである。

第五巻

1

出帆しようとする汽船。盛に貨物を積み込んでゐる。監督の任に當つてゐる三等運轉士笠原政一――彼は、ボーイから、今、二三通の手紙を受け取つたところである。そのうちの一通を、手早く開封する。

次の文面が讀まれる。

――秋冷相催し候處、其許には相變らず頑健にて勤務の由安堵致し候。扨、前便の趣、其許の考、一應尤に候も、決して常軌を逸したる次第には無之、たとへ一度失敗するも再び起つ勇氣と自信とを失はず、一家のものには多少苦勞ありたらんも、そは成功の曉十分に償ひ得るものなり。母上よりは如何やうなる便りありたるやは知らざれども、そはみな取越苦勞乃至は針小棒大的報告に過ぎずと存せられ候。なるほど今日までは、世の發明家と云はるるものが、何れも遭遇する困難と障害とを小生も免かるる能はざりしが、いよいよ、此度は、三ヶ月の苦心報いられて、成功疑ひなき新案物を發明いたすことに相成、近々特許出願の運びに御座候。目下秘密裡に見本製作中なれど、此の前の箱車用日覆などと違ひ、一般向なる上に、各家庭に備へて以て一家團欒の樂しみを増すべく、行く行くは外國へ輸出さるるやうにでもなれば、販路は無盡藏ならんと存じ候。來春御歸省の砌りは、當方も多少面目を改めをるに相違無之候。なほ、圭次の病氣は、追々輕快に相向ひ二三日中には退院の豫定に御座候。

いろいろ御話し致したきこともあれど、目下研究に忙殺され居り候間、之れにて擱筆いたし候。

時候不順の折柄自愛專一に祈居候。家のことはくれぐれも心配御無用に候。

十月二十一日　　父

政一殿

政一は、手紙をぢつと見つめてゐる。その時、起重機が廻り過ぎて、大きな箱が、政一の頭にぶつからうとする。

――危い！

と、誰かが叫ぶ。政一は、無意識に飛び退く。ぢつと胸騒ぎを鎭めようとする。

母と妹の淋しく笑ふ顏が、その瞬間、政一の眼の前に浮ぶ。白い服を着た支那の女が、手を叩いて笑つてゐる。

政一は苦笑する。

2

平造の家の茶の間。――夜である。圭次が寢床の上に坐つて、背中を、高くした掛蒲團にもたせかけてゐる。富子が本を讀んで聞かせてゐる。
長い間。
襖が開いて平造が首を出す。
――お母さんは？
富子は答へる。
――まだ。
平造首をひつ込める。
長い間。
平造再び顏を出す。今度はすぐひつ込める。

3

暗い淋しい通り。角に交番がある。空車が一臺通る。間。
やがて、風呂敷包みを抱へた女が通る。うつむいて歩く、が、一寸、後ろを振り返る。それはたけ子である。姿が消える。――長い間。
男が一人反對の方向から來る。それは平造である。二人は何處かで、擦れちがつてゐる――お互に氣がつかずに。

4

平造の家の茶の間。
たけ子は風呂敷をほどいて、着物を出す。富子がそれを檢めてゐる。
――やつぱりお前にや地味だね。
そこへ、出し拔けに平造が歸つて來る。二人の方にちらと視線を投げ、默つて奧にはいる。富子とたけ子とは、何といふことなしに顏を見合せる。たけ子は、あわてゝ眼をそらす。そして、口の中で、
――少し地味だね。

5

小さな木の獨樂が二つ、皿の上で廻つてゐる。かち合つては離れ、またかち合つては離れする。一方は、急に勢がなくなつて、ぐらぐらしはじめる。それを、別のが小づく。ぱつたり倒れる。
そこへ人間の手が出て、兩方の獨樂を廻し直す。
今度はその人間の全身が現はれる。云ふまでもなく笠原平造である。彼は、滿足げにこの獨樂を眺めてゐる。それは丁度、相撲狂が勝負を夢中で見てゐる時と同じ樣子である。と云ふよりも寧ろ、行司に近い恰好である。
――はつけよい、のこツた。
勝負が終る毎に、その勝負相應の笑ひ方で、盛んに景氣をつける。

6

茶の間では富子とたけ子とが、時々、あきれて、顏を見合はせる。こちらの空氣は、その度毎に、憂欝さを增して行くやうである。たけ子は、しまひに、たまり兼ねて、眉を深く寄せ、兩手で耳を塞ぐ。

富子は心配さうに、たけ子の耳元に何事か囁く。そして、襖の隙間から座敷の中をそつと覗く。しかし、平造が、一體、何をしてゐるのかわからない。母の方を顧みて、それと、首を振つて見せる。

7

平造が、朝早く、包みを抱へて家を出る。いつになく晴れやかな、のんびりした樣子である。

8

茶の間では、たけ子が火鉢に火を起してゐる。富子がはいつて來る。長い間。

——お前はすぐにお父さんの肩を持つけれど、お父さんはあたしたちのことを、ちつとも考へてやしないんだよ。

——そんなことはないわ。今だつて、出がけに、かう仰しやつたわ、いよいよ、お前たちに樂がさせられるつて。

——その「いよいよ」……を、何度聽かされたことやら……。それよりお前、あの返事を聞きに行かなくつてもいいのかい。

——えゝ、行くわ。だけど、お父さんもお可哀さうよ。ああして、一人で悦んだり、落膽したりしていらつしやるのを見ると、あたし、うそでもいゝから、信じてあげたくなるわ。でも、今度は大丈夫らしいの、なんだか知らないけれど……。

9

或る玩具屋。——主人が店を掃除してゐる。平造がはいつて來る。

——いつか話した玩具ね、やつと出來上つたんですがね、一つ、見てくれませんか。

平造は、包みをほどく。獨樂を取り出して、それを廻して見せる。

——誰にでも出來る遊びなんです。

——なるほどね。

——特許出願中ですが、むろん、おりると思ふんです……。

——面白いですな。

——面白いでせう。

——しかし、よつぽど廣告をしないと賣れませんな。

――それやもう、廣告はするつもりです。
――どうです、玩具を作る會社へ相談なすつて見たら…。
――はゝあ、さうですな。しかし、權利を手放したくないんです。
――それもさうですね。
――千や二千の端た金でね。
――それなら一つ、御自分で工場でもお建てになるんですな。
――それには、やはり、なんでしてね。
――さやう。
主人は、興味がなささうに、店の掃除を始める。平造は、所在なささうに、玩具をしまひかける。
――どうでせう、一つ、共同でやつて見る氣はありませんか。
――共同と云ひますと……。
――いや、資本を少し出して下されば、わたしが萬事仕事の方は引受けますから……。
――資本をね……。
主人は皮肉な微笑を浮べる。

10

別の玩具屋の店にはいつて行く平造の後ろ姿。

11

また別の玩具屋の店を、悄然と出て來る平造の姿。――相變らず包みを抱へてゐる。

12

北野法律事務所の入口。
平造がその前を往つたり來たりする。

13

平造の家である。
圭次が、寢床の上に坐つてゐる。その傍で安田が、退屈さうに新聞を讀んでゐる。圭次が新聞をひつたくる。安田は、怒つた眞似をして、それを奪ひ返す。圭次、面白がつて、またそれを取る。新聞が破れる。
――僕、立つて見ようか。
――駄目だよ、そんなことしちや……。
――もう、立てるよ、きつと……。
――駄目、駄目……。おつ母さんに云ひつけるよ。
そこへ、たけ子が現はれる。
――どうもお世話樣……。富はどうしました。
――知りません。どつかへ出て行きましたよ。僕が來ると、

どつかへ出て行くんだから……。

——まさか……。

安田はさう云つたものゝ、相手の返事が、ぴたりと來ないので、てれかくしに、

——遲いなあ、大將は……。

——どうせ、何時のことだかわかりませんよ。

14

北野法律事務所の應接室。

平造は、例の獨樂を機械的に廻しながら、努めて相手の顏を見まいとしてゐる。

北野良作は、極めて冷やかな態度で之に對してゐる。それは決して、第三者の反感を唆るやうなものではないが、ある場合には、石のやうに無感覺な印象を與へ得る人物であることがわかる。

——いや、これ以上、どう云ふ名義にしろ、物質上の御援助は出來ません。どうか惡からず。では、今日は急ぎますから、これで……。

呼鈴を押す。給仕が現はれる。

——あ、此の方を御案内して……。それから、すぐに出掛けるから車の用意……、

平造は、しかたなしに獨樂をしまふ。

15

再び平造の家。安田が歸るところである。

——ぢや、今日の結果はあしたの朝聞きに來ます。どうかよろしく。

安田が歸へると、入れ變りに、富子が、何處からか姿を現はす。

——お前何處へ行つたの。

返事をしない。

たけ子は馬鹿らしくつてたまらないといふやうな顏をして臺所に行く。

富子は、圭次の傍にすわる。

——もう一軒、賴んで來とかうかしら……。カフエーだつていゝぢやあないの……。

返事がない。

——圭ちやん、もう橫におなり。あんまりさうしてゐるとくたびれてよ。

——うゝん、もうさつき寢たんだよ。姉ちやん、こら……。

と云ひながら、圭次は、そつと、からだを起す。腰を据ゑてはゐるが、なるほど、立派に立ち上つた。半年ぶりで立ち上つた。富子は、此の意外な光景に、それを制することも忘れて、たゞ悦びに胸を躍らせる。弟の方に手

を差し出し、轉んだらばと身構へる、が、圭次は、轉ばない。自分でも、たしかに立てるとは思はなかつたらしい。うれしさに、思はず、大きな聲で、

――おつ母ちやん。

富子も、之れに和して、

――母さん、早く來て御覽なさい。圭ちやんが、立てるわよ。

此の聲に、母は、臺所から姿を現はす。

――あら……。

と云つて、そこに立ちすくむ。が、忽ち、がくりと膝を折る。

――圭坊……。

遠くから兩手を前に出す、兩眼に涙が光る。

16

日東玩具製造會社といふ表札のかゝつた門。

平造が、がつかりした樣子で門を出て來る。自轉車が擦れずれに通る。風を喰つて、二三歩よろめく。帽子が落ちる。力がなささうにそれを拾ふ。しばらく、立ち止つて考へる。

平造の頭の中に、不圖浮ぶ幻影――それは先づ、白く續いた鐵道線路である。黑い底知れぬ流れである。嵐模樣の空にくつきりと太く、横に描かれた松の木の枝である。

17

平造は、ある玩具屋の飾窓をのぞいてゐる。その中に、「新案特許相撲獨樂」といふ札のついた箱入の玩具が陳列してある。

――一寸、そいつを見せて呉れないか。

玩具屋の主人が出て來て、奥から別の箱を出す。

――これは、何處で作つてゐるのですか。

――えゝと、裏に書いてありませう。

――これは何時頃から賣り出したんですか。

――さあ、最近は最近ですが……。

――他處では、あんまり賣つてませんね。

――左樣ですか。

――賣つてませんよ。實は、わたしも、これと同じ玩具を考へてゐたんです。こゝに、この通り持つてゐますがね、

かう云つて、平造は、包みを解く。主人は訝しげに平造のすることを見てゐる。

――ねえ、この通り。自分で作つたんですから、體裁は惡いが、それ、この通り、相撲を取る。はつけよい、のこつた、そら、こつちが勝つた。どうです。

――なるほど。

――こりや、たしかに、わたしの方が考へついたことなんですがね。ひどい奴もあるものだ。なに、出るところへ出ればわかる。駄目かな。特許まで取つてあるんぢや……。それにしても、どうして、こいつを知つたかです……。
――さうですな。

18

平造は、我家の門口を、どうして潜らうかと、一瞬間、躊躇する。いや、そこまで來る間に、迷ひ抜いたことであらう。

19

大きな白い手が、一生懸命にゼレマイのネヂを捲いてゐる。

20

茶の間では、富子とたけ子とが夕食の膳ごしらへをしてゐる。二人は、默つて柱時計を見上げる。相變らず時計は止まつてゐる。
玄關の格子が開く。二人は同時に耳を聳てる。
玄關では、平造が、今迄見たこともないやうなはしやぎ方で、
――萬歳、萬歳!
を連呼してゐる。どうしたと云ふのだらう。女どもは、我を忘れて起ち上る。富子が走り出る。

21

平造は、茶の間の眞中に、どつかと腰を卸ろす。そして、如何にも重大な吉報を齎した人のやうに、徐ろに口を開く。
富子は、もう父の云はうとすることを察してゐるらしい。頻りに、うなづいて見せる。たけ子は、わざと冷靜を裝つてゐるが、內心、若しやといふ期待を失はずにゐることを暴露する。
平造は、徐ろに口を開く。
――さあ、いよいよ、おれも本望を達した。
これは、そばにゐる富子に向つて云ふ如く裝つてゐるが、實はチヤブ臺の上を、必要以上に長く拭いてゐる妻のたけ子に、それとなく聞かせるつもりらしい。
――今度は大成功だ。
――なに、どんなもの? ね、お父さん。
――まあ、待て。第一に、工場を建てる。職工は、始めは先づ五十人ぐらゐでよからう。
――なにを作るのよ、お父さん。
――今にわかる。何しろ、外國に輸出する約束をして來た

んだ。一と月に四五百圓の利益はすぐに上るんだから大したものだらう。

かういふと、其處には、工場で職工が働いてゐる光景が映る。平造は、社長らしい威嚴を作つて、その間を巡視してゐる。外では、箱をいくつも積んだ荷馬車が、次ぎ次ぎと出て行く。

するとまた、立派な自動車に、盛裝したたけ子と富子が乘り込んでゐる。その自動車は劇場の車寄に駐る。二人はしづしづと車から降りる。

平造は、今や、包を解かうとしてゐる。富子は、膝を乘り出す。たけ子は横目でその方を見てゐる。何といふ用心深さだ！　しかし、平造は、それに頓着なく、例の代物を、彼女等の前に、出來るだけ派手にひろげて見せるのである。そして滿身の熱を煽り立てながら、

――これだ。ね、最新式拳闘獨樂つて云ふんだ。

二つの獨樂は、皿のやうな臺の上で廻る。

――そら、ね、相撲ぢやない、拳闘だ。はつけよい。のこつた。面白いだらう。

圭次は勿論、女共に、これが面白くない筈はない。もう占めたものだ。彼女達は面白がつてゐる。平造は、一心に獨樂を廻はす。

――そうら、こつちが勝つた。ノック・アウトと云ふ手だ。もう一度。さ、しつかり。あぶないぞ。どつこい。面白いだらう、どうだ。

「面白いだらう」を繰り返しつゝ、次ぎ次ぎと絶え間なく獨樂を廻してゐるが、彼自身は困つたことに、だんだん面白くなくなつて來るのである。唇は自由に動かなくなる。眼は曇つて來る。息がつまつて來る。指がきかなくなつて來る。どうして顏を上げることができよう。

圭次は、まだ面白さうに見てゐる。しかし、女共は、平造のこのたゞならぬ樣子を見て、實際それが面白いのかどうかわからなくなつて來る。面白くなければならないのだ。さうだ、面白くなければ大變だ――さう思ひながら一生懸命に面白くあらうと努めるのである。

平造は、今、獨樂が廻らなくなることを恐れるばかりである。獨樂が廻り止んだ瞬間は、彼に取つて、總てが終る瞬間である。が、もう、これ以上「面白いだらう」と云ふ力はない。たゞ無暗に獨樂を廻し續ける。

圭次は、まだ、無心に獨樂を見つめてゐる。

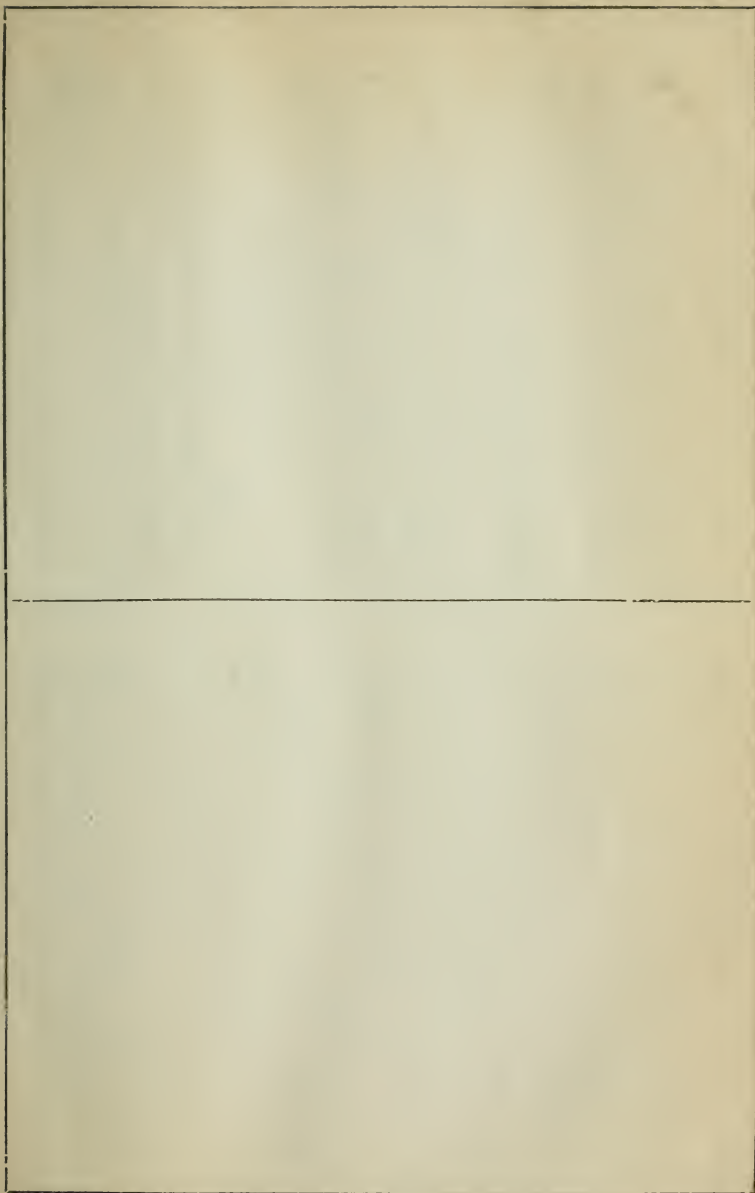
富子の眼が、先づ曇りはじめる。

たけ子は、流石に、失望を通り越して、ある新しい危機を豫感してゐる。しかし、その豫感は、平造の、あまりにも打ち萎れた姿の前で、寧ろ、一種の深い喜びに似た感動に變つて來る。彼女は、はじめて、何かしら、熱いも

のを胸の奥に感じてゐるらしい。

22

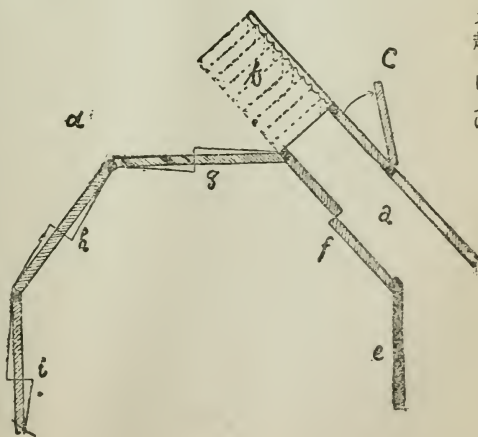
此の光景が次第に消えると、それにつれて、全く動き止んだ大きなゼンマイが、徐々に、はつきりと幕の上に浮んで來る。

（終り）

佐藤春夫篇

日光室の人々 （寫生的一幕物）

冬は温きさる海岸別莊地なる二流どころの宿屋の日光(サン)室(ルーム)なり。

さしわたし四間ほどの廣さある八角形の建物。北側の二邊は壁。西側の一邊は本館よりここに通ずる廊下に接し、二枚のガラス戸にてこの室の入口をなす。この三邊の外はすべてみなガラス張りの腰窓なり。――この室の大半部を現すことを要す。即ち壁の一面と窓の二面とを切り去りて、その他を看客の前に展開せしむ。廊下の外には庭の一部分見ゆ――細き松の幹や枝等。また人なくして動かざる遊動圓木の一端。この室はかくの如く、庭より見れば普通の平家なるも海面に近き濱に對しては別に二階ほどの高さを有す。即ち、高き石垣ある敷地の外に別に突き出して櫓もて建てられたるものと知るべし。されば、庭とは別の一角には、多少の鳥瞰的效果をもつて遠景あり――灰だみたる海、遠き岬、曇れる空など。

又廊下の行きづまりは別に濱邊に下り行く石段に通す。この石段は看客より全くかくれたりと雖も、人々そこを通る時には、窓の一邊に、その姿の一部分、ガラス越しに見ゆ。

これらの事、凡そ圖の如し。(a) 腰張板ある廊下なり。腰張の終端扉の如く開く。(b) 見えざる石段なり。石垣に沿ひてつくられたり。(c) 遊動圓木ある庭の一部なり。(d) 濱邊なり。低くして看客には見得べから

ず。背景には岬ある海の遠望のみ現されたり。(e) 壁面。(f) 室の入口なり。腰張あるガラス戸、左右引ちがひに開く。(g)(h)(i) みな腰窓なり、ガラス戸ありて、左右引ちがひに開く。海に對す。

曇天なり。

室内には、中心に卓布なき大なる圓卓(まるテーブル)あり。その上に茶色細毛絲の頸巻置かれたり。その卓の周圍には型も見かけも古びて粗雜なる木の椅子、或はやゝ新しき籐椅子の肘かけあるもの、無きもの、など取交へて十二三脚、いづれもその上に座ぶとんあり。掃除の後、未だ腰かけたる人なきを示すかの如く、椅子は最も機械的に正しく並べられたり。

1

半開かれたる窓g――

そこに一人の青年、窓より上半身をのり出して、手を差し延べなどし、何事かしきりに下を覗き窺ふ。あたかもこの窓と下との高さをはかるものの如し。しかもその態度は甚だ打興じたり。彼は髪をきれいに分けて光らし、大島柄の銘仙絣を重ねたり。色蒼黒く痩せたるも、學生風にして快活、機敏なる動作。二十二歳ぐらゐなり。

この時。一人の病身げなる婦人、入口に現る。ガラス越しに上半身見ゆ。戸を開かんとつとめつゝあり。藤色の手柄かけたる丸髷はみだれたりといふにあられど、油氣なくてほつれたり。戸開きて入り來る。瓜實顔にして小柄。三十四五歳なるべし。襟つきの着物の上には細かき赤縞お召を羽織りたり。無地古代紫の半襟。顔かたちに、むかし花街に育ちたる人の面影、美ならざるに非ざれども、活氣なき擧動彈力なき皮膚、病弱の人として先づ哀れを催さしむ。凝視して後、辛うじてその美人なるを認むべし。開きたる入口をとざすに兩手もてす。

窓の青年、ふりかへりて彼女を認め、微笑す。

病身なる婦人　(先づ同じく微笑をもつて答へながら)　藤波さんおひとり。――何をしてゐらつしやるの。そんなところで。

藤波と呼ばれたる青年　(意味ありげの微笑)　釣をしてゐるんですよ。

婦人　釣り?

藤波　(笑つてうなづく。窓の下を指ざす)　コイを釣つてゐるところです。

婦人　(窓より覗く。笑)　おや〳〵。陸釣(をかづり)ではなくて、陸燒でせう。

藤波　（無遠慮なる哄笑）
下よりの嬌聲　あら！
婦人　（窓の下の人と顏を見合せたるが如く輕く會釋す）
下よりの聲　藤波さんですか。いやな方。さつきからわたし、何だか髮にさはるものがあると思つてゐたら。――いたづらをしていけませんわよ。
藤波　（道化て）おつ。と、と、と、と。――餌をとられちや大變だ。（手繰る。細き糸紐の先端に商店のつつみ紙をまろめたるもの下より引き上げられる。長さ丈餘。この動作をしながら言ふ）さつきから大分お話が面白さうだから、そこへ下りて行きたいと思ひながら遠慮してゐたんです。傍に人あることを相圖したいと思つても、お氣がつかないのですか。
下よりの聲　くだらない――そんなことを仰言らずに下りて行らつしやればいいのに。散歩なさらなけやいけませんよ。日はあたらなくとも、風がないからいいお天氣よ。
（病身なる婦人は、これらの間に、圓卓のわきより肘かけある籐椅子一つを、兩手もて重たげに引きずりながら、窓iのところに腰をおろす。）
藤波　（窓gを閉めて、圓卓の上の頸卷をとり上げ、婦人に）どうれ、僕も一つコイの仲間へ這入つて游戈して來よう。
婦人　（やさしく親切に、半ば揶揄して）さんざ、あばれていらつしやい。――またうんと熱を出すやうにね。
藤波　（笑）憚りさま。あなたとは違ひますよ。もう三月も熱なんか出しませんよ。
（元氣よく入口の戸をあけ又うしろ向きのままで閉めながら出て行く。頸卷をあてがひながら石段づたひに下る彼の姿は窓gのガラス越しに見えて、順次、下の方へ隱れ去る。）

2

病身なる婦人、窓iの片すみに悄然としてひとり腰かけたり。なすことなき人の物憂さもてガラス越しに窓外を見つめたり。終始、袖口より兩手をとほして腕をくむが如く、己のが身を抱くが如く、且つ首をすくめたり。
やや久しき間、かくのごとくひとり、ここに取殘さる。この間に、入口（f）の上にある圓き大形の柱時計二時を打つ。

3

二十ばかりの令孃、しとやかに入口をあけて入り來る。
窓の婦人ふりかへる。互に目禮を交す。
令孃は圓卓の前の椅子の一つにつく。彼女は紫矢絣の

銘仙の着物と羽織。――やや派手にして袂長く、もしこの上に袴あらば二三年來流行の典型的女學生の樣子あり。濃き臙脂色の半襟ある頸筋はその兩頬とともに丸々と肥え、血色も亦つやつやし。但し、丈低く、目鼻立も整へりといひ難し。袂よりトランプをとり出し、卓の上に廣く並べつつあり。遠きところに札を置くとき赤き袖口と太く白き二の腕と現る。

窓の婦人　（再びふりかへりて）お母さまは？　もうお歸りなさいまして？

卓の令孃　え、昨晩。――みなさまによろしくと申しましたわ。（言葉つき內氣にて、聲美し）

婦人　（窓外を見ながら）お丈夫になつてゐらしつたので、きつと御安心してお歸りなさいましたでせう。

令孃　え。（掌中の札を繰る。時々、輕く咳をする癖あり）

……（對話絶ゆ。暫くして。）

令孃　敦子さんも、今日は御歸りのやうに仰言つてゐらつしやいましたわ。――今朝ほどお兄さまがお迎へにお見えなすつたのださうでございますよ。

婦人　（少しふりかへりて）あなたのお部屋のお隣の方？　あの方もおとなしい方ですのね――あまりお口もおききなさらないぢやありませんか。どこがお惡いのでせう――いつもふさいでゐらつしやるけど。

令孃　何ですか、ただ神經衰弱だか、何かですつて。お母さまが本當のお母さまでゐらつしやらないので、その方がまたお優しいのでかへつて御遠慮があるのですつて。お氣の毒に。

婦人　おや、さう。それはまあ……

……（對話再び絶ゆ。暫くして。）

婦人　（窓外を見つめながら）もう二十日もたてば、いい陽氣になりますわねえ。さうすれば、皆さん思ひ思ひに、ちりぢりになつておしまひですよ。お馴染の方がゐらつしやらなくてはつまりませんから、さうすればわたしも何處かお湯のあるところへでも行かうか知らと考へてゐますの。

令孃　溫泉はよろしうございますわね。

……（對話三たび絶ゆ。）

＊　＊　＊

石段を登り來る人、窓 g のガラスを透してまづ頭部より現る。耳隱しめきたる束ね髪なり。痩せ形の近代風美人。頤細り（おとがひぼそ）のやや畸形なる面立多少妖氣を帶ぶ。下瞼の下にうす黑き暈（かさ）あり。薄き唇は鮮紅なり。年二十六七。おもむろに上半身見ゆ。くすみたる青磁色に細かき飛模樣ある錦紗の羽織。入口 f の前に、石段をふりかへりて立つ後姿。丈高き人なり。

つづいて一人の青年、同じく石段を登りて現る。二十四五歳。額廣く髮をオールバックにし、肩たくましく健康にして精力に滿ちたる風貌。細かき薩摩飛白を着たり。

彼女と彼とは、日光室には入り來らず。彼は廊下の一端の腰張の扉のごとくなれる部分を開きて、庭に出づ。彼女もこれに從ふ。

遊動圓木の動搖し始むること。彼及び彼女の姿、上半身、交々右往左往して入口のガラス越しに、隱見す。必ずしも圓木を遊べるにも非ず。折々彼女の鋭く華やかなる笑聲ありて、室内に洩れ來る。

室内。無言。

依然としてトランプを遊べる令孃。

窓の病身なる婦人。

令孃　（トランプを切りて卓の上に並べながら小聲にてうたふ）——

　山路越えて
　ひとり行けど
　主の手に縋れる
　身は安けし
　…………

（間。）

婦人　（先刻より殆ど不動のまゝ、只、窓外を凝視したり。やや唐突に、半ばは令孃に語るが如く、半ばは獨語の如く）　海の上には時々、日が當るやうですけれどねえ。

4

男二人、入口に現る。第一の男入口の戸を開ける間、第二の男は庭の方を注視す。二人ともどてらを着たり。彼等は各ともに、一見にてはその年輩をも推知すべからず。三十より四十までの間なるべし。第一の男、甚だ暗鬱なる表情、頭髮長く延びて亂れたり。眉間に深く刻まれたる立皺は、必ずしも彼が用ゐたる鼻目鏡のためのみには非ず。第二の男、第一の男に比して陰氣ならざるも、鼻翼の皺ふかく自ら愛嬌なき風貌なり。普通の金ぶち目鏡をかけたり。小柄。彼が着たるどてらは、その縞柄といひ釣合はざる身丈といひ宿の借着なること明かなり。

第二の男　（第一の男につづいて部屋に入り、その戸を閉めながら）　何しろ、非常に溫かいね。東京とはたしかに十度は違ふだらう。

第一の男　ふむ。

（窓の婦人物憂げにふりかへる。第一の男、彼女に目

禮しつつ圓卓の方に行き、瞳を上げたる令孃とも目禮を交しつつ、兩手に一つづつの籐椅子を引きずりて、そを窓gの前に置きて、己まづ腰をかく。第二の男、入口に近きその第二の椅子に倚る。）

（以下、彼等の對話は概ね低聲にて取交さるるものなり。又、第一の男の句調には三分の自嘲、第二の男の句調には七分の諧謔的要素ありと知るべし。）

第二の男　君、これや宿屋といふよりは保養院の感じだね。

第一の男　全く。（うなづく）――これが君、この二ヶ月の間を僕が顏を出す唯一の社會なのだ。

第二の男　萬目あまりに蕭條としてゐる。尤も意外には美人がゐるね。あれはちよつとばかりビアズレの繪のやうに面白い。それに、Nymphomania の相貌があるぜ。

第一の男　君の觀相は當つてゐさうだね。あれがここの社會で問題を提供してゐる人なのだ――恐らくは僕と相並んでかな。つい一ヶ月程前からゐるのだが、醫者の夫人らしい。何でも御亭主が三四度來て、自分で細君の胸に聽診器をあてて行つたさうだ。――尤も聽診器では心臟の精神的な方面は一向わからないらしいな。

第二の男　（表情で）？

第一の男　若い男がゐるだらう、傍に。あれは夫人より二週間ほどあとでここへ來たが、その時、夫人も東京かどこかへ行つての歸りで、一緒にやつて來たのださうだ。何でも「ちよつと知り合ひの法科大學生で、汽車で偶然乘り合したのだが、試驗の勉强をする宿がきまらないので一緒につれて來た。」といふ話だつたさうだ。宿ではちやうど部屋がなかつたので斷ると、それぢやといふので夫人は自分の二室のうちの一つを提供したさうだ。一番奧の方だがね。それで隣同士にゐて、二間つづきの部屋の間の襖間はいつの間にやら開けつ放しになるし、御飯なども夫人のお給仕で差向ひといふことになつてしまつたさうだ。傳ふるところによれば、醫學士が來る日になると、大學生は見えなくなるさうだよ。

第二の男　どんな男だい、大學生といふのは。

第一の男　わからない。彼等はここへはあまり顏を出さない。男の方は外の誰とも一切口は利かない（間）見給へ。（海岸の方を目顏で知らせる）あそこの汀を逍遙してゐるのが、詩人藤波紫水さ。そんないろんな話を僕に知らしてくれるのだ。その代りには僕の事も何か、當推量で皆に報告してゐないとも限らないね。

第二の男　詩人？　藤波紫水？

第一の男　さつき話をしかけてゐた隣室の青年さ。

第二の男　うん。（やや大聲に）讀書的遊民か。その先生がくれたといふ名刺を……

第一の男 （制止の表情） 君、藤波君は （こつそり圓卓の令嬢を示す） あのお孃さんと同郷ださうだ。どちらも埼玉縣の豪家の出で。

第二の男 ……（うなづく）

第一の男 藤波君の名刺は一覽する値があつたのだが、どこへやつたものかな。ついこの間までは見えてゐたのに。何しろ、讀書的遊民といふ肩書があつて、その裏には七五調の新體詩が印刷してあるのだ。（陰慘なる笑顏）――かしこの濱邊この渚、われはうき世を捨小舟、秋は入日の夕なぎや、冬は千鳥の泣く夜半を、わが身はひとり目覺めつつ、人の運命を思ふかな……

第二の男 フツ、フツ、フツ。（特色ある笑）

第一の男 まだ／＼なか／＼長いのだ。六號活字で一ぱいあるのだ。いろんな彼の身の上を咏んである――半生の自敍傳を新體詩で行つたのさ。

（遊動圓木の人々、これらの對話の間に見えずなる。）

第二の男 まるで野口男三郎の歌だね。

第一の男 さうなのだ。中學を出て東京へ遊學すると半歳ばかりで病氣にかかつて……水にうつれる月よりも、碎くる胸の切なさは、雲間がくれのほととぎす、血を吐くまでになりにけり。甲斐なき身をば養ふと、三年がほどの草まくら、旅にしあれば割箸の、わりなく悲し朝夕――とあつた。（笑） この修辭的時代錯誤はなかなかいいだらう。――旅にしあれば割箸の、わりなく悲し朝夕――ね。

第二の男 フツ、フツ、フツ。うむ。なかなか面白い。君はまたよく覺えたものだな。

第一の男 いいや、何。名刺を貰つてそのまま机の上へ置いといたのだ。別に捨てることもないからいつまでもそこにあつて、毎日それが目につくものだから、時々とり上げて讀んでゐるうちに、つい覺え込んぢやつたよ。その上たうとう秀句を發見した――僕の退屈や思ひ見るべしだらう。

第二の男 （眞面目に） 全くだ。來て見て想像以上だ。それに一足も外へ出ないのだつて？

第一の男 （うなづく） 殆ど一足も。うつかり外へ出てゐてごらん。狹い町だもの直ぐに見つけられてしまふ。さうすれば萬事休すではないか。

第二の男 それにしても、毎朝たつた十分ほど彼女に會へるといふだけの事に、君は莫迦々々しい高價を支拂つてゐる。まるで囚人だ。

第一の男 いいや、決して。――さ、囚人かも知れない。何かアンデルゼンの小品にあつたね。囚人の窓から入日が一筋さし込むのだ。窓のところで鳥が二聲三聲啼くひ

まに、監房の壁の夕日影は消えてしまふ。それでも囚人の胸にはたとひ一筋でも日かげはさしたのだ。僕の監房へも毎朝十分間、すばらしい朝日がさし、鳥は啼くのだ。また明日のその時刻を考へれば、ともかくも一日は送ることも出來る。それに彼女とても、その十分間のためにどれほど苦勞をすることか。彼男(かのをとこ)がまだ起きない時刻に、女中などにも氣づかれないやうに、毎朝缺かさずにここへ通ふことは、並大抵の事ではない。それにこの家へだつて氣を兼ねもする。その彼女を思ふと、僕はその僅の十分間のために、外(そと)の一日の時間は死んでゐてもいいよ。

第二の男　死んでゐるなら、それやそれでいいさ。でも生きてゐる。生きて一たい何をしてゐるんだ。

第一の男　僕は六時に起きるんだよ……

第二の男　六時に？

第一の男　だつて彼女は六時半には來る。早起きが僕の樂しみだ。だが一日は永いよ。まづ朝の二時間ばかりは、十分間、彼女と對ひ合つてゐたその同じ火鉢のそばで、この事件に就て考へ込む。結局わからなくなつてそいつを投げ出す。一時間ばかりは遊動圓木を遊ぶ――僕は上手になつたぜ。二時間ほどは海を見る――海は色がよく變るからね。夕方には一時間ばかりお湯に這入るからいい。最もやり切れないのは、この今ごろの時刻だ。そんな時には、そこらの令孃たちの口眞似をして讃美歌を歌ふ――泣く事の代りだ。それから藤波紫水から敎はつて流行歌をうたふ――これが自暴自棄の最もつつましい表現だ。

第二の男　やれ／＼。君が讃美歌をうたふところを見たいものだ。

第一の男　そればかりではない、夜になると藤波紫水が來て、ともに藝術と哲學とを論ずるんだよ。その上に、埼玉出身の才人の洒落(しやれ)を一緒に享樂する義務があるのだ。それもたまにではない。毎晩だ。

第二の男　斷つたらよささうなものだ。

第一の男　さびしいのだらうよ、きつと――自分の事ながらわからないが。

第二の男　そいつは寧ろ笑ひ事以上だ。ねえ、いかに戀の爲めとは言へ、日本のハイネともあるべき天下の君が――何でもいいよ、ともかくも君がさ、藤波紫水の新體詩を愛誦し、その諧謔に打興じ、ともに詩歌と哲學とを論ずるに到つては、寧ろ悲壯だよ。フツ、フツ、フツ。――藤波は君を何人(なにびと)だか知つてゐるのかい。

第一の男　知つてなどゐるものか。僕は出たらめの名で通つてゐる。それから名古屋の新聞記者だよ、僕は。

第二の男　名古屋か。これはいい。適切だ。君は自分を知

つてゐるね。その名も淸水純吉と言ひ、か。フッ、フッ、フッ。それにしても埼玉の才人は人見知りをしない畸人と見えるな。

第一の男 ――四日に一ぺん、特別の日があるんだ。彼女が髮を結ふのだ。結ひたての髮をして訪ねて來る。髮結ひの時間をかすめるのだ。それが三十分間。大てい朝の十時にだ――藤波も、しかし、可愛いい男だ。隣にゐては氣づかひだと思ふのだらう。わざと手荒に障子をあけ立てして室の外へ出てしまふのだ。それをまた彼女が氣にして、わざ〱藤波を僕の部屋へ呼び込んだりする。――可哀さうに、あの女には第一に子供が可愛いのだ。第二には世間がおそろしいのだ。しかも、彼女のさういふ部分を僕が愛してゐるのだからねえ――君も知つてゐるとほり。

第二の男 しかし、君たちは、そんな少年少女のやうなことを、一たい何時までつづけるつもりなのだ。

第一の男 知らない。僕にはどうする力もない。

第二の男 では彼女には？

第一の男 無論、無い。

第二の男 それぢや、一切は彼男にあるのか。――さうなると、なるほど、少しは忌々しいな、第三者としても。

第一の男 いいや。違ふ。ただ因襲だけがその力を持つてゐる。それを彼男が自分の力だと思つてゐる。さういふ顏をしてゐる。忌々しいのはその點だけだ。僕はただ、そいつを思ひ知らせてやるだけで充分なのだ。

第二の男 それならば、もういいではないか。――結局、君はどうしようといふのだ。

第一の男 知らない。わからない。昨夜もいふとほりねえ。――この話は、今はもうよさう。そのつもりでここへ出て來たのぢやないか。

第二の男 さういふ口の下から、君が自分でいつのまにかその話を始めてゐるんだ。――何にしろ、君はまるで洞窟のなかへ追ひ込められたやうな、いや、自分からすき好んで這入つてゐるやうなものだ。ここでの君の生活を見て、僕は尙更この比喩の適切なることを感ずるね。一たい僕は、君を見舞ひに來たので、忠告をするつもりは更にないが、そんな窒息するやうな世界から早く出ることだ。僕ならもうとつくに窒息してしまつてゐるぜ。第一、ここでたつた一晩ゐて君の空氣にかぶれただけで、もううんざりして早く歸りたくなつたよ。萬目は蕭條としてゐるしね。この生活を、持久的にやりさうな勢ひを君は示してゐるのだから、君はへんに強い男だねえ。君のやうなのが一種精神的淫亂だよ。……淫亂と言へば(庭の方をふりかへりながら) さつきの Nymphomania

夫人(マニア)はどうしたかな。
第一の男　さつきからもう居ないよ。
第二の男　そいつは惜しい事をした。註釋を聞いた上でもう一度熟覽しようと思つてゐたのに。
第一の男　(己の肩のあたりを指し、窓下の女をひそかに示して)　どうだ。面白いだらう――「昨日(きのふ)の花」だ。
第二の男　さつきから注目を拂つてゐるが、「昨日の花」ぢやない「去年(こぞ)の花」だ。押し花で、それも蟲がついてゐる。
第一の男　お妾(コンキユバイン)だよ。
第二の男　どういふ人の?
第一の男　(窓ガラスに息をふきかけて、その上に指もてさりげなく、何か書く)
第二の男　うむ、兜町の商人(マアチャント・オブ・ヘルメツトスツリイト)か。
第一の男　(笑。うなづく)　――無論、大したのぢやないやうだが。感心に、必ず週に一度は來る。つくづく見たまへ、面影に殘つてゐる、かつては教坊第一の花だらうと思ふ。
第二の男　――かつては教坊の第一花。老大、商人の第二號。病を養うて湘南の地に來る……(笑)
第一の男　終日窓によりて波濤を看る、か。(笑)　まるで藤波紫水だね。――子供の頃からさういふ境涯で育つた人でなければ出來ないやうな沒常識的質問(センスレスクエツシヨン)を、時々發するよ、この間も、渚のところに烏が下りてゐるのを見つけて、突然、鳩と烏とどつちが大きいかといふのだ。不意にね。可憐な感じがしたぜ。
第二の男　君の趣味だね、何もかも。(輕い欠伸。立ちながら)　どうだい、庭へ出て煙草を吹かさう――ここではやらない方がよささうだ。
第一の男　(同じく立ちながら)　差支へないだらうが。
(彼等は入口の方に行く。)
(窓の婦人、直覺的に己のことを噂されたるを感ずるらしく彼等の後姿を見る――但、惡意なき瞥見。)
(第一の男、入口の戸に手をかける時、入口の向側に、別に一人の令孃現る。第一の男戸をあけて、彼女に輕く會釋して出る。第二の男も同じ。彼女は丁寧に返禮して、彼等が開きたる戸口より入り來る。)
(廊下にて、第一の男、海邊の方を見て遠方の人と合圖するごとく、輕く禮をなす。彼等、庭の方に出て行きて室内より見えず。)

5

新しく室に入り來りたる令孃。年齡二十二三か。大島の對の着物にて外出姿なり。一たい地味なる好み、令

孃といふよりも、寧ろ若き夫人の感じ。入口の戸を閉めんとして、廊下に人を認め、戸をそのままにす。二十歳ぐらゐの外出姿の女中來る。戸を閉す。一見して新來の令孃が下婢なること、その動作によりて知らるべし。

新來の令孃　（トランプを遊べる令孃のうしろより）　御熱心なこと。知らない顏をしてゐらつしやるわ。

トランプの令孃　あら、敦子さん。（ふりかへる）　ちつとも存じませんでしたわ。こつそりいらつしやるのですもの。（已が隣の椅子を動かしてすすむ）

敦子と呼ばれたる令孃　（腰かけながら、下婢をふりかへり）　お前もおかけ。まだ時間はあることよ。

女中　はい。（彼女は木の椅子に腰を下す）

敦子　（トランプを片づけつつある令孃に）　しげ子さん。わたしたうとう、この汽車で立つことにいたしましたのよ。いよいよお別れですわ。

しげ子と呼ばれたる令孃　（瞳を上げて友を見る。一種感傷的に）　さう。（ふりかへつて、うしろの高きところなる柱時計を見上げて後）　この次と申しますと、三時十分ですの。

敦子　え。さうですつて。（片手もて別の手の袂口を少したぐり上げ、腕の時計を見る）　まだ少しはありますわね。

しげ子　停車場までは十分もかかりませんわよ。出來るだけ長くここにゐらつしやいましよ。

窓の婦人　（物憂げにふりかへる）　もうお歸りでございますつて。やつと御馴染になつたばかりですのにねえ。みなさんがそんなにお歸りになりますと、心細うございますよ。

敦子　わたしも、いつまでも、かうして皆さまとここにゐたうございますのに。（まことの感傷を帶びたり）

（短き間――）

（この間に、藤波、石段を登り來る。その口笛を吹ける横顏、窓gに見え、やがて入口の前に立ち、戸をあけて入り、廊下の外にて、先づ上草履を踏み拂へば、足もとより砂こぼる。彼の口笛は、

かなしき戀よ、花うばら

といふ節なり。）

藤波　（室に入り戸をしめながら、窓の婦人に言ふ）　奥さん。さつきから、凝と海岸ばかり見てゐらつしやいましたね。男ぶりのいい青年が散歩してゐるものだから。

婦人　（口輕に）　ほんたうに、それがこの上もなく色の白いお方でしてね。

圓卓にゐる女中（笑を忍ぶ）

藤波（道化たる樣子にて、その甚だ黑き顏を撫で）さつそくお面を一本頂戴したな。ハ、ハ、ハ。

婦人（いつの間にか再び、海の方を凝視しつつ）淸水さんにお客があつては、お相手がなくつて、御退屈ねえ。

藤波　ええ。（人々に一禮しながら圓卓の一方に腰をかけ、その上にあるトランプ札を認めて、手を延べつつ）ちよつと、拜借。一つ運勢を見なけや、このごろは全くの八方ふさがりで。（トランプを切る。注意して敦子を見る）おや敦子さんは、今日は大へんおめかしをしてゐらつしやる。

敦子（眞面目に）わたくし、この次の汽車で東京へ歸りますものですから。

藤波　や、さうですか。それはそれは。もう別れですか。それは殘念ですな。（ぼつぼつと持前の冗談口調にて）我我はここに一つの絕好な色彩を失ふわけですな。どうれ。それぢや、お別れのしるしに一つ、先づ敦子さんの未來を占つて上げませう。（器用な手つきにて札をくばる。仔細げにその面を見る）いや、未來は福德圓滿お羨しいやうな運勢ですな……

敦子（笑　この人笑ふ時、最もさびしげなり）ありがたうございます。何ですか大へんよく合つてゐさうに存じますわ。（言ひながら時計を見る）

しげ子　まだまだ大丈夫ですわ。

藤波　時間は大丈夫ですよ。（再び、トランプを切つてまく）しかし、敦子さんの未來は上々吉だが、ここに少しく氣がかりなことは、――え、もう一度見ますが、現在でありますな。なるほど、さうか。これはまことにお氣の毒な卦ですね。お互に深く愛してはゐられる。しかるにです、ここに思ひがけない障害が起る。これはなかなか有力な邪魔ものですぞ。然るにもかかはらず、相思の間はなかなか御熱心。しかし……

しげ子　およしなさいましよ、藤波さん。そんな失禮なことばつかり。

（敦子の表情、笑へるが如く、泣けるが如し。）

藤波　いや、何、もうすぐです。失禮なことは一切申しません。易の上に現れたる眞實だけです。それで、あなたは結局御結婚なさる事になる――それがどうも、思はぬお方との御結婚です……

（敦子、圓卓の上に面を伏す。やがて立ちて入口の方に行く、面を兩の手もて覆ひたり。）

（下婢は驚いて立ちて、入口に赴き敦子を慰む。彼女等囁きを交はして後、下婢、戸を開きて、ふたり出で行く。）

（令孃しげ子と藤波呆然たり。）

（しばらく間。）

しげ子　それ御覽なさいまし。わたしがおやめなさいと言つたではありませんか。藤波さん、わたし本當に困つてしまひますよ。――ついさつき、敦子さんからいろんな事を伺つたあとですもの、何だかわたしが直ぐにあなたにでも告げ口をしたやうに見えるぢやありませんか。出鱈目が何だか當つてゐるのですもの。困つてしまふ。

藤波　へえ？　そいつは困つたな。占ひの上手なのも困つたものだな。

しげ子　本當よ、わたしどうしたらいいのでせう。

藤波　僕が行つてあやまつて來ませう。

しげ子　だつて、さうすればなほをかしいでせう。

藤波　（立つて頭の横を押へて）うむ。

婦人　（始めて、窓の方よりふりかへり）お孃さん御心配なさる事はありませんわ。あなたがそんな方ぢやない事はわかつてゐます――藤波さんの出鱈目はいつもの事ですし。思ひつめてゐらしつた折からで、何にでも涙がこぼれるのですよ、きつと。お氣になさいますな。――藤波さん、これに懲りたらうつかり御冗談はおよしなさいね。

藤波　……（正直に悄氣てゐる）

（先刻の女中再び入り來る。）

女中　（しげ子と藤波とに禮をしながら）お孃さんがよろしく申しました――さぞお興ざめでゐらつしやいましたらうが、どうぞお許し下さいまし、と。もう車が參つて居りますので、失禮いたしますつて。

藤波　いいや、僕こそ。

しげ子　御玄關へ出てゐらつしやいますか。ちよつとお見送りさせていただきませう。

女中　さよなら。それでは。

窓の婦人　（ふりかへりて）さよなら。私からも、どうぞよろしく。

（しげ子及び女中出で行く。）

（しばらく躊躇したる後、藤波も亦彼女等の後を追うて出で行く。）

6

（窓の婦人、相變らず窓外を凝視す。）

（この活動なき場面を、看客に暫く印象せしめて後、最も靜かに幕となる。）

春風馬堤圖譜（シナリオ）

1

蝶が二つ、もつれあひながら、畫面の下から上へ消えて行くのです。

2

藪入の下女——この娘は十八でせう。醜からず。男、二十二ぐらゐです。風俗は同じく藪入の下男です。彼等の上半身が現はれるのです。彼女と彼とは樂しげに話し合つてゐます。彼女は桃割の髮。又きらきらと光り動く銀短册ある花簪。

3

彼と彼女との全身が現はれる。二つの蝶は彼等のあとを追ふやうに飛んでゐるのです。彼等の足もとは川原。

4

遠景。——堤がある。川原がある。最も近くに川がある。川の上には渡舟がこちらに近づいて來る。

5

川の汀に渡舟を待つ男が二三人。猿まはし。行商人など、彼等は草鞋脚絆、肩には小荷物をふりわけにかけてゐる。この男たちのなかに藪入の若い男女が加はる。彼女を男たちは注意して見る。

6

渡舟が着く。舟に乘る人々。下りる人々。下りる人々は若者も若い娘もみな鄙びた風俗。この人々も藪入の娘を、その都ぶりの風俗を、見る。

7

娘と一緒に歩いて來たかの若者は舟には乘らず。彼女の舟の方を見送つてゐる。

8

舟は一旦動き出してから、船頭、岸の方を見て舟をもう一度汀につける。舟の人々は岸の方を見る。

9

川原の上には、娘を見送りながら去る若者とすれ違ひに、半僧半俗の風俗をした六十ばかりの老人、杖をつきながら急いで來る。この人は老俳諧師である。

10　タイトル

「やぶ入や浪花を出でて長柄川」

11

舟の待つてゐる間、娘は手の風呂敷包を開く。そのなかから先づやや大きな馬のおもちやをとり出してそれを片わきに置く。次には風車。風車はまはる。風車も馬の傍に置かれる。それから脚絆をとり出す。馬のおもちやと風車とをまたもとのとほり風呂敷につつみ直す。包みの一はじから風車が見えてゐる。

12

既に岸をはなれた渡し舟。舟頭は棹を動かしてゐる。

行商人たちは話に熱心である。猿まはしは小猿とたはむれてゐる。老俳諧師はあたりの景色を見てゐる。それらの人物を背景にして、舟の片すみでは、娘がこごんで脚絆をはいてゐる。なまめかしく。袂から布ぎれを出してそれを裂いてひつかけ草履にする。

13

長い堤の上の路。渡し舟を下りた人々。先頭に行商人たち。猿まはしもつづく。彼等から半町ほど離れて娘。その二三十歩あとに老俳諧師。

14

娘のうしろ姿、上半身。右手には腕の上にかかへてゐる風呂敷づつみ。それを持ち支へてゐる手の指はしなやかである。風呂敷づつみの端に見える風車が、クルクルとまはりつづけてゐる。彼女は左手をあげて自分の桃割の鬢から髱を輕くさはつてみる。

15　タイトル

「春風や堤長うして家遠し」

16

路ばたにこごんだ娘のうしろ姿。彼女は新らしい手拭ひで、姉さんかぶりをする。彼女の前に長い路が展けてゐる。

17

彼女、堤から川原に下りる、小ばしりに元氣よく。まづ風呂敷づつみをおろす。それから若草の萠えてゐる上に腰を下す。足をなげ出して憩ふ。あたりの蓬の葉をなぐさみにつんでは袂のなかに入れる。蓬をつむ事に與味を覺えて、立つてあたりの草むらの方まで摘んで行く。草の刺に手をさされたらしく、手の甲を自分の唇で吸ふ――空を見上げながら。

18

空には紙鳶があがつてゐる。高く、また低く。

19

彼女の目前にうかぶまぼろし。……五つぐらゐな男の兒。まづその顔。それは彼女のものに似てゐる。その兒のすがた。……その兒は母親に手をひかれてゐる。母親は四十七八、同じく彼女に似てゐる。それらの人物はみな田舎びた風俗である。

……最後に草屋根のささやかな家が淡く浮んでは消える……

20

彼女は荷物をひろひ上げる。川原の上をいそいそと歩き出す。

川原の窪に川水がたまつてゐる。彼女は水の上を石を傳うて飛びわたる。

21

一軒の掛茶屋。屋外には一本の幹古びた柳が新らしい芽をふいてゐる。柳の糸はもつれてゐる。その腰掛には二人の若者「い」「ろ」が談笑してゐる。氣の利いた旅人の風俗。彼等は猿をまはさせてゐる。

猿まはしは出て行く。

柳の枝のうしろを通つて、藪入の娘が姉さん冠をとりながらこの家へ這入つて來る。

茶店の老婆が出て彼女を迎へる。彼女たちは顔馴染らしい様子。老婆は娘の着物の袖を手にとつてほめる。娘は彼女の花簪を手でふれて見ながらにこやかに笑つてゐる。

二人の客が彼女を注視する。そのうちのひとり「い」は席を立つて彼女を呼びかける。彼女のために席をすすめる。
彼女、會釋をする。
笑ひながら「ろ」は「い」を輕く打つ。「ろ」も立ちながら席の茶盆の上に二文錢を三枚置く。笑ひながら今度は「い」が「ろ」を打つ。彼等は笑ひ興じながら、店を立ち出る。
老婆、三枚の二文錢をいただきながら禮を言ふ。娘に席をすすめる。娘腰をかける。
老婆、茶碗を持つて奥に去る。
柳の枝ごしに今の二人の客が、もう一度、娘の方を見る。娘も彼等を見送る。

22

腰掛の上に娘ひとり、今、立去つた若者のふりかへつた柳の枝の間を見つゞけてゐる。その空間に一つの顏が浮ぶ。
それは渡場で別れた若者の顏である。
新らしい茶碗を用意して老婆出て來る。
空間の顏は消える。娘はふりかへつて老婆から茶を受け取る。

老俳諧師が、柳の枝のかげから出て來てこの茶店に憩ふ。

23

娘が歩いて行く。行く手には三四軒ほどの田舍家がかたまつてゐる。猿まはしの後姿。子供が三四人その後に從ふ。

24

草屋根の裾にある板庇。その上に虎猫が一疋。立つて啼いてゐる。

25

日あたりのよい田舍家の緣側に、頸飾のある三毛猫が一疋、丸くなつてねむつてゐる。頭を上げて目をあけて振り返つて見る。そのまま再び眠つてしまふ。

26

その屋根に虎猫のゐる田舍家及びその隣家。それらの家の前の路。
藪入の娘その前にとほりかかる。
偶々或る十ばかりの小童が家のなかから出て來て、通りかかる彼女を見る。急にはしやぎながら、路ばたの石を

ひろつて屋根の上の虎猫を目がけて投げつける。石は當らないが、猫は逃げてしまふ。小童は元氣よく棒ぎれを振りながら馳け出して行つてしまふ――前方に小さく見える猿まはしを追うて。

27

雛が慌しくひよつ子を呼ぶ。六七羽のひよつ子が飛んで來る。母雛がその雛を彼女の羽根の下にかばふ。

28

路に沿うたまばらな竹垣。その下にはひよつ子が再び母雛の羽根の下から出て來て草をついばんでゐる。母雛が、草のあるところを教へて呼んでゐる。

藪入りの娘はそれを見ながら、その路を通りすぎる。

29

堤の路。川原の方でない側には田畑が打開けて、堤からその畦道におりる徑がある。

娘は畦徑の方へおりる。

30

彼女の下半身。もう大ぶん古くなつた草履の足もとに、

早咲きのたんぽぽの花が一つ。

31

彼女はしやがんでたんぽぽを摘む。

32

畫面の半分に彼女の横顏。その目のまへにはたんぽぽの花が、彼女の指に摘まれて、くる／＼とゆるくまはつて居る。その花莖の折りとられた部分からは、乳に似た汁がふき出てゐる。彼女は花をさかしまにして、その莖の折れ口の汁を見る。それをしぼつて見る。

33

…乳の出てゐる乳房……

34

……その乳房にすがつてゐる小さな女の子。

35　タイトル

「むかし／＼しきりにおもふ慈母の恩
慈母の懷抱別に春あり」

36

……女の子に乳をふくませてゐる三十ばかりの若い母親の上半身。その母は19景に出て來た母親の若い時である。(それは今藪入に歸る娘に似てゐなければならない。)

37

……男の子に乳をふくませてゐる四十二三の母親。(抱かれてゐる男の子は19景に出て來た兒のより少さい時でなければならない。)その母と子とのそばに、十二三の女の子(彼女自身)が、抱かれてゐる弟をあやしてゐる。

38

……母の乳房から男の子は、姉の背に背負はれる。弟を背負うて嬉戯してゐる十二三の女の子。

39

……貧しい田舍家の一室に病みやつれた瀕死の男——五十ばかり。その枕もとには三つぐらゐの男の兒を抱いた四十五ぐらゐの母親と、十五ぐらゐの女の子。彼女たちは泣いてゐる。外に村人が數人。

40

……19景と全く同じ田舍家。その戸口に四十七八の母に抱かれてゐる五つばかりの男の子。この二人の人物も亦19景と全く同じである。

41

藪入の娘が畦道のなかをうな垂れながら歩いてゐる。その顏の前では、たんぽぽの花を指につまんでくる〳〵とゆるくまはしてゐる。(32景と同じく。)

42

……富有な都會の家。朝早く。白髮の隱居がじよたんのなかから、鶯の籠をとり出してゐる。

老人が座敷の障子をあける。外は緣側である。

緣側の向うに、庭木の梅が花をつけてゐる。

庭を掃いてゐる若者がある。彼、その顏を緣側の方に向ける。藪入りの娘を渡場まで見送つて來た彼である。

43

緣側に鶯の籠を持出した隱居が手をたたく。そこへ餌すり鉢と青菜とを用意して出て來る仲働きの女中——それ

は今、藪入をしつゝある娘と同じ人物である。彼女庭の方を見る……

44

彼女、うなだれた手にたんぽぽの花をくる〳〵と弄びながら歩いてゐる。

45

かの若者の胸に顔をおしあてて、羞づかしげにうなだれてゐる彼女。（前景の上におぼろに二重露出。）

46

歩んでゐる彼女、おもむろに笑ひ顔になる。

47

故郷の家、弟を抱いてその戸口にゐる母親（19景と同じもの、前景の下におぼろに二重露出。）彼女の笑ひは顔から消える。彼女、手の荷物を持ちかへる。

43 タイトル

「故郷春深し行々て又行々」

49

彼女の上半身。その手には蒲公英の外に菫、蓮華草、菜の花など摘みとられてゐる。彼女は首を上げて前方ばかり望んでゐる。

50

畫面の下隅には、彼女の手に持たれたさまざまの野の花が見える。それを前景にして、遠景には、路の片側に三軒ばかり草屋根がまばらに並んでゐる。屋根には夕日があたつてゐる。その家がだんだんと近づいて來る。

51

杉の梢が夕日を受けてゐる。たくさんの鴉がみだれて飛ぶ。

52

50景の家々近づく。その家の一軒（19景47景に現はれたもの）に、母親とその手に抱かれてゐる弟とが見える。畫面の片隅にあつた花と手とが斜に上へ動く、遠景の家を遮りながら。

53

彼女、花を持つた手をあげて遠方の家の戶に立つてゐる母子に相圖をする。

54　タイトル

「黃昏戶に倚る白髮の人
弟を抱き我を待つ春又春」

55

戶口に立つて笑をたたへてゐる母親、二三步前に進み出る。男の兒は母に抱かれながら、滿面の笑に、双手を擧げて人を迎へる有樣。彼女が畫面に後姿を現はす。己の家と母と弟とに近づく。

56

彼女は手の花を捨てて弟を抱く。母は娘の荷物をとつて持つてやる。また娘の髮の上に冠つてゐる新らしい手拭をもとつてやる。小さな男の兒は抱かれて、しつかりと姉につかまる。姉は頰ずりをする。
彼女は母の手に持たれた自分の荷物のなかから、風車を拔きとつて弟に持たせてやる。弟はそれを高くさし上げる。風車はクル〳〵とまはる。母が先に立つて家のなかに這入る。

57

貧しい田舍家の內部。（39景、瀕死の病人がゐた部屋に同じ。）
弟が炎のゆれてゐる新らしい蠟燭をそろ〳〵と步みながら持つて來る。
姉はその部屋の押入れをあける。その內部に現れた貧しい佛壇に、弟から受取つた蠟燭を立てる。さうして拜む。

58

老俳諧師が、彼女の家もそのなかに雜つてゐる三四軒の家並の前の路を行きすぎる。日が暮れかかつてゐるなかを、彼は小さく遠ざかつて行く。

59

淡い月光の中。或る門がある家の前。梅の花が咲いてゐる。老俳諧師は來て立ちどまる。案內を乞ふ。

60　タイトル

「燈を置かで人あるさまや梅が宿」

61

玄關の障子に內部から、灯影がうつり、障子が開いて、手燭を持つた老翁が顏を出す。笑顏になる。老俳諧師と互に會釋をする。

62

貧しい田舍家の內部（57景と同じところ。）

行燈の下に食事を終つた母と娘とがゐる。幼い弟は、まだ食事を終らずに、しかも姉の土產の馬のおもちや、――その底に車のあるものを押し動かしてゐる。またその馬のぐるりには、小さな猿まはしと猿とがおぼろに浮び動いてゐる。

顏を上げた娘の前にはまぼろしのやうに7景（渡し場）の若者がにこやかに立つてゐる……

目を伏せた母の顏の下には、おぼろに39景の溺死の病人が見えてゐる。……

しかし、この三人はみんなそれぞれに笑顏をしてゐる。

63

上り框におもちやの馬を置いて男の兒は泣きしやくつてゐる。

母親は泣いてゐる弟をすかしてゐる。

泣く兒の姉は、腰をかけて新らしい草履をはき試み、それからきのふの脚絆を脚につけてゐる。

64

姉は泣いてゐる幼い弟を抱いて家を出る。母はそのうしろから重箱らしい風呂敷づゝみを持つてゐる。

65

姉と母とは、子供と重箱の包みとをとりかへる。弟はあきらめてもう泣かない。たゞ不機嫌な顏をしてゐる。娘は歩きつづける。母は立ちどまる。彼女たちは正午の短い影を曳いてゐる。

66

娘は歩きつづける。母が小さく遠ざかる。母は手をあげて目かざしをする。娘は振かへつてみる。

67

59景の門ある家を、61景の老翁に見送られて老俳諧師が出て來る。正午の短い影を曳いてゐる。

68

老俳諧師は歩きつづけて58景のあたりをとほる。道ばたに桀の花。

69

柳のある掛花屋（21景）から、主家に戻る彼女が出て來る。彼女は、入日のころの長い自分の影を踏みながら歩いて行く。

70

彼女は歩いてゐる――……42景、43景、63景、66景、39景、など交々二重におぼろにうつつた中を。最後に7景の幻影のなかを最も長い間。彼女の影、だんだん長く地にうつる。

71

掛茶屋の柳に、十日ばかりの月がおぼろにかすんでゐる。老俳諧師がその景色のなかを通りすぎる。――長堤の上をゆく彼は影繪の如く。（以後は月光の世界。）

72

路の上に老俳諧師が立ちとまる。後は立ちとまつて川原の方を見る。

73

凝視してゐる老俳諧師の顔。驚き。感心する表情。

74

月夜の川原。その灌木の茂みのなかに一疋の狐がゐる。狐はくるりと一つころんで立ち上ると、……一人の貴公子の後姿を見せる。

75

73景と同じ表情で、俳諧師は歩き出す。月を見上げる。

76　タイトル

「公達に狐化たり宵の春」

77

老俳諧師はあたりを見まはして歩いてゐたが、小さな竹藪のある別の場所に立ちとまる。再び川原の方を見る。

78

73景と同じく驚き感心する人の顏。

79

月夜の川原。74景よりももつとよく茂つてゐる灌木の草原のかげに、睦しげに坐つてゐる若者と娘との形が見える。

80

凝視してゐる老俳諧師の顏。驚き、感心し、次には少し怖ろしげな表情。

81

老俳諧師は歩き出す。彼の目の前にはころんでぢやれて遊んでゐる二疋の狐がおぼろに浮ぶ。彼は感心して、自分の眉毛に唾をつける。

82

彼は堤の道から渡場のある川原へ下りる。(13景と同じ場所。)

83

77景の小さな竹藪のある場所。川原から路へ、まづ若者が出て來る。手には重箱のつつみをさげてゐる。そのあとから桃割に髮を結つた娘が出て來る。脚絆がけである。娘はうなだれてゐる。

84

若者と娘との顏。彼等は目をそらし合つて、しかし互によりそうてゐる。若者は一種ごく眞面目な顏つきをしてゐる。娘は羞じらつてゐる。彼女の花簪の銀短册が月の光でぎらぎらかがやいて光る。

85

川原の渡舟場。人を乘せてゐない渡し舟が向ふ岸から川の半ばまで來てゐる。

老俳諧師が舟のつくのを待つてゐる。

若者と娘とそこに現はれる。

老俳諧師はつくづくと彼等を眺める。

若者と娘とは顏を伏せて人目を避ける。

渡舟は着く。

老俳諧師が乘る。若者が乘る。娘が乘る。

若者と娘とは、少し間をへだてて同じ舷に腰かける。老俳諧師はひとり別の舷に腰を下しながら、岸の方を見る。

船頭は棹をとつて舟を出さうとする。

俳諧師は陸の方を指差す。

86

川原には渡場に近づく人影。遠目には、見なれない風俗である。だんだん近づく。ひとりの公達である。しかしその顔は狐である！

87

舟頭は棹をとつて打ち殺す用意をする。
老俳諧師はそれを手でおしとどめて、舷から立つて舟首に行く。

88

老俳諧師、舟まで近づいた狐の公達に會釋する。手をさし出して狐が舟に乘ることをたすける。
彼は狐の手をひいてそれを自分のとなりに坐らせる。
娘はおそろしげに若者により添ふ。怯えながら若者の肩にすがる。

89

舟は動き出す。
船頭、若者、狐の顏と姿とを見てクス〳〵と笑ふ。娘もいつの間にか怯れを去つて笑顏になる。袖口で口をかくして笑ふ。媚を含んで若者を見る。

90

老俳諧師と狐とは甚だ普通の顏つきをしてゐる。

91

おぼろの十日月が、大きな口を開けて樂しさうに笑ひつづけて消えてゆく……

（終）

巣父犢に飲ふ（一幕）

堀口長城先生に捧げます。孝行な息子が
年とつた父のために見せる芝居なのです。
わたしはこれをお求めにより、令息大學
君のために代作いたしました。

ひとりの花嫁とそれについて行く村人たちの一群

隠士、許由

帝王、堯

堯のお供をしてゐる人々えらいのやえらくないのや大勢

許由の友、巣父

巣父に伴はれた犢

童話時代

美しい面白い國

やや遠いあたりから笛の音と太鼓のひびきとが、洩れ聞えてゐます。

細流に沿うた往還です。流の向側には木々が生ひ茂り、桃の花ざかりです。そのなかから草で葺いた小さな屋根の頂が見えます。この林のうしろに、あまり遠くないあたりに容のやさしい山が見えます。ほんのりと霞んでゐるのです。

林のなかから、のどかな調子の歌が聞えてきます。歌つてゐる人の姿は、花ざかりの桃の木のかげになつて見えないのです。

箕山のふもと
潁川のほとり
山に採り
川に飲む
人と生れて
性を養ひ
春に逢うて
花を見る

雲よ

せせらぎよ
そよかぜよ
友よ
歌うて
黄鳥の如く
許由は
不足を知らぬ

この歌聲が終ると、これとは關係なく別にまたもの一つ歌が聞こえて來ます。合唱です。

日が出れや稼ぐ！
日が入れや休む！
井戸にや水が出る！
田にや米が出る！
天子のお陰は！
どこで蒙ろ？

この合唱を歌ひながら、人々が川上から出て來るのです。この人たちは中にひとりの花嫁を守つてゐます。人々はみんな藍色の袍をつけてゐるし、花嫁だけは桃色の袍を着てゐる。みんなは跣足です。帽をも頂いてはゐない。只、花嫁だけは髮の上に一ぱい堆く花を飾つてゐます。合唱をやめて會話が始まる――

A　だんだんと、太鼓がよく聞えて來たね。

B　もうすぐ近くだからね――ここは許由先生のところだから。

かういふ話と同時に、別にひとりの老人が、花嫁にむかつて言ひます――

老人　みんなは、あのやうな騷ぎをして、お前の來るのを待ちこがれてゐるんだよ。

花嫁は含羞みながら笑つてうなづく。彼女の頭に戴いた花束がゆつたり動くのです。

人々の列は順々に過ぎて行く。この群のなかの後の方から行く人々の會話――

C　許由先生はこのごろでもやつぱり、手のひらで水を飲んでゐられるかね。

D　うん。さうらしいよ。

E　瓢簞の盃はどうしたのだ。

F　知らない。

群集はみな通りすぎてしまふ。

間。――犬の吠える聲がする。

やがて美しい吹流しの旗を持つた男がひとり、川下か

ら現れる。

ひきつづいてきらびやかな行列が出て來る。たくさんな人數、それが立ちとまる。

行列の七分どほりまでは觀客に見える。殘りの部分は舞臺の外につゞいてゐる心持。この行列は、前に通りすぎた花嫁の一行の素朴さとコントラストするものです。

行列の中央には天子堯が、四人の奴隷によつてかつがれた輿の上に乘つて居られます。王冠をいただき、白い長い髭がある。彼は紫色に金絲と寶玉を鏤め縫ひつけた袍を着てゐます。彼をとり繞つた家來たちも、それぞれまた黄色や緑色などの美麗な袍を纒ひ、また履を穿つてゐます。但、奴隷は素足でまた殆んど裸體であります。

侍從の一人　陛下。只今、行き逢うた者どもの話のとほりでございますれば、許由先生のお住居は、ここであらうかと存ぜられます。

堯　さうか。それではわたしたちが此處へ來たことを、ちよつとその人に傳へて貰はう。わたしがその人に相談したい事があるのだと申してくれ。

侍從の一人　畏りました。

彼は、もつと若い別の侍從をふり返つて命令する――

許由先生に、陛下をお出迎するやうに申すのだ。

若い侍從は一禮してから、流のあたりをきよろ〳〵と見まはす。向側ふに渡るべき橋がないからです。最後に彼は行列の遠い後方を見て、手で六度さし招く。

六人の奴隷が出て來る。

若い侍從は、六人の奴隷に手で何ごとかを命令する。口は一切利かない。

奴隷達は流のなかへ這入つて行く。水は、せいぜい一尺五寸ぐらゐしかないものである。

奴隷たちは前後に並んで立つて、いづれも深く腰をかがめる。第一の奴隷の尻に第二の奴隷の頭が、第二の奴隷の尻に第三の奴隷の頭が、以下かういふ風にして六人の彼等が身をかがめた上を、若い侍從は奴隷を橋にして、その背中の上を踏みながら、流れの向ふに渡る。

彼は木立のなかへかくれてしまふ。

堯　わたしに履をはかせてくれ。

老侍從　どうなされるのでございますか。

堯　わたしは土の上へおりなければならない。

老侍從　いやいや。決してそれには及びますまい。

堯　どうしてだ。わたしは地におりて、その人に會はなければならない。さうして歸る時には、この輿の上にその

人を乘せてわたしはその人のうしろに從うて行く筈ではないか。わたしはもう決心したのだ。ためらふことはない。わたしの履を用意してくれ。

老侍從は默つて一禮する。それから別の侍從たちをかへり見て言ふ——

老侍從　陛下にお履をお上げ申せ。

二人の別の侍從が出て來て、手に手に一つづつの履をもつて、跪いて堯の足にはかせる。

（この間に、流れを渡つた侍從が許由と一緒に川の向ふ側に現はれて來る。）

許由の容貌と風俗とは普通の人と大差ないもので、さきの嫁入の一行のうちに雜つても別に目立つところはない。藍色の袍をつけて、跣足である。その許由に、侍從が、慇懃な樣子で先づ川を越すやうに勸めてゐることがその擧動でわかるのです。

許由　いえいえ。わたしにはどうぞお構ひなく。

侍從　どうぞ、さう仰言らないでおさきへ。

許由　さうですか。それでは。

許由は袍の裾をからげると、つかつかと流れのなかへ歩み入つて、直ぐ川を越してしまふ。

侍從は、奴隸たちがさつきからその體をもつて造つてゐる橋を横目でみたが、彼は履を脫いで、許由が今したやうに裾をからげて、水の中を渉る。

奴隸たちに向つて。

許由　ありがたう。君たちはもうそんな形をしてゐなくつてもいいのだ。

堯が自分の方から歩いて許由に近づいて行く。侍從たちは敬禮する。

堯　あなたがわたしの民どもの呼んでゐる許由先生ですか。わしは天子の堯です。

許由　わしが許由でございます。

許由は丁寧に禮をする。

堯　甚だ出し拔けなやうであるが、わたしは實は、これをあなたの頭にのせて貰ひたいのです。

——堯は自分の頭の上の王冠を指さす。

許由　全く。それは少し出し拔けですね。困つた事でございます。

堯　さうあなたのやうに一口に言つたのでは相談にはならない。もしも、あなたがこれを戴いてくれなかつたら、天下にこれを置くところはない。

許由　どうして今のとほり、あなたのお頭（つむり）の上ではいけないのでせう。

堯　それがです。年をとつたせゐか、それがわしの頭の上では坐りが惡いのですよ。まあ聞いて下さい。民はそれ

を望んでゐないのです。許由先生は、このごろ民がどういふ唄を好んでうたふかを知つてゐますか。

許由　はて、どういふ唄が流行るのでせう。

堯　わたしはよく知つてゐる。臣はみんな一様に、「太陽が上つたらば起きて働く、太陽が沒した時には休息する。井戸をうがてば水は湧くし、田を耕せば米はみのる。天子の德といふのをわれらは一向に知らぬ。」とまづかういふ意味ででもあらうかと思へるやうな事を、下々の言葉で歌つてゐる。到るところで唄つてゐる。

許由　さう仰言ればわたしも聞いたことがあるやうに思ひますよ。

堯　さうでせう。ところで、一たいわたしがこの唄を始めて聞いたのは、いつのことであつたか、ともかくも、世の中がうまく治まつてゐるかどうかを知りたいと思つて、わたしが最初に忍びの姿で町へ出てみた折のことであつた……

侍從の一人なる史官　陛下。お言葉のあひだでおそれ多くございまするが、それは陛下が御卽位の第六十一年目でございました。

堯　さうか。ともかくも、その時に始めてわたしはあの唄を聞いた。或る年寄が何か慰みごとをしながら歌つてゐた。尤もその同じ時には、また別の唄も歌はれて居つた。それは言葉はもうわすれたが、確にわたしの治め方に滿足してゐる者の言葉であつた。わたしがあればこそ世の中もおだやかだと言つてゐたやうに思へた。これを歌つてゐたのは若者だつた。わたしはまるで意味の反對なこの二つの唄を聞いて迷つたものだ。しかし、わたしはどうもやつぱり身びいきで、自分に都合のいい方を聞いてゐた。といふのはね、年寄といふものはいつも不平のあるものだし、若い者はいつも希望のあるものだから、若い者の唄こそ本當の民の聲だらうと信じてゐたのだ。それがどうであらう！　その後、わたしが忍び姿で町へ行く度每に、あの年寄の歌つた唄はいつも聞くけれども、以前それと同じやうに流行つてゐた若者の歌つた唄は、どうもごく稀にしか聞かれない。それも近年になつては全く聞くことが出來ない。その反對にもう一つの唄は、いつどこででも、誰の口からでも聞かれるのだ――「天子の德といふものをわれらは一向に知らない。」といふ意味がね。わたしはこれに就て一度誰かに相談してみようと思つた。さうして民が許由先生と呼んでゐるあなたこそその人であらうと考へた。今日はうららかな天氣ではあり、わたしは思ひ出してここに來たのだが、その途で遽に思ひ立つて、これは相談するまでもなく、この頭の上の重いものを、是非ともあなたの頭にのせて貰はねばな

らないと決心した。といふのは、わたしは途で、——それもここからあまり遠くもないところで民どもが集つて酒を酙んで音樂を奏して踊つてゐたのだ。それがいかにも太平の祥と思へたから、わたしは乘物をとめさせてそれを見てゐたのだ。その時、民どもが何と唄ひ出したと思ふ。やつぱりあの流行唄だつた。わたしは悲しくなつたよ。むかしはわたしの忍びで歩いてゐることを知らずに唄つたものを、今はいかに醉ひ痴れてゐるからとは言へ、わたしのこの行列を目の前に見ながら唄ひ囃してゐるのだ。民には何の惡意もない。それは天の聲だ。わたしはただ自分の寡德を自ら責めるより外はない。わたしはその場で決心をした。許由先生。民はあなたの慾心の尠いことを慕うてゐる。則天無私なあなたのやうな人を、今から、今までのわたしの輿へ乘つて頂いて、わたしはそのあなたのうしろに從うて歩いて歸るつもりです。

許由　いやいや。陛下。あなたは間違つてゐられます。わたしが考へるのに、天下が今日のやうに太平なことはありますまい。陛下の民が歌つてゐる唄こそ、陛下の德を讃美してゐるものだとわたしには考へられます。日とともに起きて働き、日とともに休む。地の下には清い泉があり、地の表には豐に草が實る。それでゐながら、民がもし不服をいふとしたならば、民の求めるところはわたくしにも判らないのです。上に好き天子がゐられることをさへ有難いと思はない世の中こそ、わたしには理想の時だと思へるのです。明君の德を民がしみじみと感ずるやうな時代は、何か有難くない事のあつたあとかも知れないのです。どうぞその冠はただ今のままのところへお置き下さいませ。たとひわたしにお乘せ下さつても、わたしもただあなたが今なされてゐるとほりの事より外には出來さうにもないのですから。

堯　どのやうにでもあなたの好きなやうになさるがいゝ。ただわたしの頭の上にこれがあるのは、今はもう適當ではない。わたしはもう年をとつて來て、頭にでこぼこが出來たと見えて、冠がうまく乘つてゐない。それに頸が痛い。肩が張る。どうかこれをわたしの頭の上からとらしていただきたい。されぱと言つて、これは尊いものだから、無闇なところに置くことはならないのだ。許由先生どうぞ、あなたの頭の上へ置かせて下さい。

許由　お言葉ではありますが、陛下。あなたはわたしといふものを御存じないからそんなことを仰せられるのです。陛下、わたしは實は、瓢を二つに割つてこしらへた盃でさへ、折角人から貰つてもてあますやうな莫迦な男なのでございます。

堯　といふのは、また、どういふ話です。

許由　いや、ついこの間のことでしたが、わたしが掌をくぼめてこの川で水を飲んでゐるのをみて、親切な人がわたしに瓢箪でできた盃を一つくれたのでした。指のあひだから水の漏れるやうなことがなくてよいといふことでした。なるほどそのとほりでしたが、これで飲むと言つてもやつぱり腰をかがめて水の面から掬むのは同じことです。同じことならば盃もいいわけですが、水を飲まない時には盃は手よりも厄介なものです。杜へつるして懸けて置くと風がふくたびに揺れて、ガタン／＼と音がするのです。それがうるさいので、わたしはたうとう、その盃は水のなかへ捨てて流してしまひました。

堯　ハ、ハ、ハ。

許由　わたしはそのとほりの莫迦でございます。況んや、王冠は瓢箪の盃よりはもつと持ちにくいものだといふことは、お話を承つただけでも充分に判るのでございます。それほどのものをわたしが戴いたならば、わたしはまあどんなにか持ちあつかふ事でございませう。

堯　フム。

　堯は歎息する。これらの對話の間に小鳥の聲などが聞える。

許由　しかし、陛下がもし、どうしてもお冠をどこか別のところへおうつしなさらねばならないとお考へならば、わたしは到底お受けすることは出來ませんけれども、わたしの友だちに巣父と申す人がございます。

堯　さういふ人がゐると、名前だけはわたしも聞いた事もある。

許由　すぐこの山の上にゐるのでございます。大きな木の洞のなかに住んで居ります。その樹の根元には犢がうづくまつて居りますから直ぐにわかります。わたしがお供を申上げてもよろしうございます。この人ならば、ひよつとすると、そのお冠を持つことが出來るかも知れないのですが。あの人は瓢箪の盃を持つことならばたしかに出來たのですからね。わたしが、杜にそれがぶつつかる音がうるさいから捨てたといふと、折角貰つたならば捨てるにも及ばなかつた――風が吹いて盃がゆれ、それが杜に觸れるのも自然の發する音なのだから、それを樂しむすべもあつたらうに、と彼がさう申した時には、わたしも彼を尊敬したものです。

　侍從たちがふりかへつて。

堯　お前たちは、今、許由先生の言はれた巣父先生といふ方を知つてゐるか。

　侍從たちは互に顏を見合す。たうとうしばらくして。

老侍從　存じては居ります。しかし、陛下、巣父に御相談なさることは、多分御無用だとわたくしは信じます。い

や、わたくしばかりではなく他のすべての者も、同感であらうかと存じます。巣父は狂人――でございませんければ、きつと神仙でございます。外のことに就てはおそらくさまざまな學ぶべき事も御座いませうが、例へば許由先生の言はれるやうな瓢の盃などに就てはきつと賢者ではございませうが、天子のお位のことなどに關してはおたづねなされても御無用であらうかと存ぜられます。畏れながら、何にいたせ、この御問題につきましてはもう少しお氣ながくお考遊ばされたがよろしからうかと存じます。

他の侍從たち　わたしどもも、畏れながらさやうに存じます。

堯　さうか。

堯は愁然としてゐる。それから再び許由に。

堯　それではもうお別れをしよう。わたしは、民のうたふ唄については、しばらくあなたの解釋に從うて自分を慰め、その上で更に自分の德を積まなければなるまい。

許由は默つて敬禮する。

堯は歩いて輿に乗る。二人の侍從が左右から助ける。

彼等は堯の履を脱がせて、各一つづつそれを彼自身の頭の上に戴いて持つ。先づ旒を持つた者が動いて、行列はもと來た道をかへつて行く。

どこかからのどかに犢の聲が聞えて來る。

突然、許由は流に近づいて、その岸の土の上へ坐つた。彼は額の半面を水のなかへ浸し、しばらくしてまた別の半面を同じく流に浸す。このやうな不思議な動作をしばらくつづける。

その時、一個の奇妙な人物が下手の森のなかから現はれて、流を渉る。この人物は大體は袍に似た形のものを纒うてゐるが、それはすべて木の葉をつづり合せてつくつたものである。まだ青い葉や、或は枯れた栗色の葉や、黄色い葉などもところどころに無雜作につないである。この人物のうしろには、犢がのこのことついてゐる。この異風な人物が巣父である。彼は許由のしてゐる事を見る。

許由は巣父の來たことに氣がつかないらしい。

巣父　許由。どうしたのだ。何をしてゐるのだ。

許由　耳を洗つてゐたのだ。

巣父　耳？　耳を？

許由　うん。

巣父　耳へ何か這入つたのか。

許由　あ。非常なものが這入つてしまつたのだ。ついうつかりしてゐるうちに。――つい今のさつき、天子の堯が見えて、王冠の置きどころがないからわたくしの頭の上

へ置かうと、仰言るのだ。わたしは無論御辭退をして、君のところへ行くやうにおすすめしたのだ。しかし家來たちは君のことを氣違ひか、それでなければ仙人だといふやうなことを言つて、君のところへは行かうとはしないのだ。

巢父　ハ、ハ、ハ、ハ。殘念なことをしたな。それで君はまた何だつて耳を洗ふのだ。

許由　君のところへならば行かなくつて、わたしのところへならば來る。それはどういふわけだらうと考へてゐるうちに、まだわたしの不充分なところが自分でわかつたのだ。さう云へば、天子がそんなことを仰言つた時、わたしの耳は——右の耳だか左の耳だかはわからないが、一瞬間その話に氣をとめて聞いてゐたやうな氣がする。それでわたしは耳を洗つたところだ。

巢父　さうか。それはよかつた。それにしてもどうしてわたしのところへお出なされないのだらう。

許由　君は欲しかつたのかい。

巢父　うん。欲しかつた。わたしはそれを戴かせるのにいいものを知つてゐるんだ。君にはまだ話さなかつたか知ら。泰山の頂きに立派な石があるんだよ。めづらしい紫色をしてゐてそれに金色で龍のやうな模様の紋が出てゐる。まるで天子の袍のやうなのだ。この上へ玉冠を置いたらばさぞ似合ふだらうと、それを見つけた時からわたしはさう思つてゐたのだよ。石はいいものだよ、それだから千古不滅の德があるのだ。

巢父話しながら歩き出す。

許由　どこへ行くのだ？　犢に水を飲ませるのではないのか。

巢父　（歩きながら）さうだよ。だがこの邊の水は今日は汚い。汚いことを聞いた君の汚い耳を洗つたのだから。面倒でも今日はずつと川上まで行かなけやなるまい。

犢　（歩きながら）もおう。

巢父　（歩きながら）わたしの犢は汚い水は飮まない。

犢　（歩きながら）もおう。

巢父と犢とは行つてしまふ。許由がそれを見送つて佇んでゐます。

——幕——

暮春挿話

彼――三十の青年紳士
彼女――十八九の、令孃のやうなあどけない夫人。――彼の新妻
老紳士――異樣な人物、五十五ぐらゐ？白髮
ホテルのボーイ
自動車運轉手
同じく助手

海岸の小都會、有名な避寒地、第一流のホテル。
扉を兩方に開け放した大きなケースメント。その奥のバルコン――がつしりした唐草模樣の鐵細工で圍まれてゐる。手すりの色は黑である。海の遠い水平線が手すりの上三寸ばかりのところまで現はれてゐる。手すりの模樣の隙間からも、無論海の色がのぞき出てゐる。
四月末ののどかな、淡いすみれ色の空。
ケースメントの外は明るい午後二時ごろの日ざしで、灰色の床にものゝ影は映じ出される。
バルコンの正面、手すりにすれ〳〵のところに小さな卓が一臺。その卓の三方から椅子が三脚。一脚は海に面し、他の向ひ合つてゐる二脚のその一脚には、まだ極く若い――十八九の令孃のやうにあどけない夫人。
（彼女）
が、日光をうしろからうけて、ひとりで、白い毛絲の編みものをしてゐる。その毛絲の玉を着物の袂に入れてあるので、袂がぶらぶらしてゐる――そんなことが彼女をあどけなくしてゐる。二本の長い編み棒で彼女は丹念に編んでゐる。
そこへ
（彼）
が、ケースメントの内側に僅にある廊下――ケースメントの手前をそれに沿つて左右に通ず――の右から出てくる。黑の上衣縞ズボン申分ない服裝。スツキリした三十の紳士。片手にフランスとぢの本をもつて。ケースメントを拔けてバルコンへ出る。
彼女に對して腰かけながら、

彼　もうさつそく始めてるね。（笑顏）そんなものを丹念にこしらへて見たつて、日本のハイカラにはなれるだらうけれど、よそへ行つて何にもなりやしないのに。

彼女　（笑顏）さうでせうねえ。

彼　ほい！　また負けたか――いつもその手でやられるのだが、柳に風だね。あなたには全く學ぶべきだよ。外交の祕法をのみ込んでゐらつしやる――輕く受けながして置いてその間にどんどん實行して行くのだから。（笑）

彼女　だつて私、もうせんからこんなことをしなれてゐるのでせう。何もせずにゐると手もちぶさたなのですよ。だから出來上つたらまたほぐしてしまつて、また編み直してもいゝのよ。（少しほどく）

彼　おや、それでもう解きほぐしてしまふの？

彼女　（笑）　え！

彼　これはまたひどく反抗的だな。（笑顏）

彼女　……うそよ。間違つてゐたのですもの。

彼　僕が邪魔をしたものだから。

彼女　さう！

彼　どうれ、僕もあなたの邪魔なぞをして嫌はれるより、……（一たん卓上に置いてあつた書物をとり上げる、海の方をちらと見て）――ほんとうに靜かだなあ。

彼女　（海の方を見る）

彼は書物をひろげ、それを片手にもつて讀み初める。

彼女はやはり先刻からのつゞきを編んでゐる。

間。

この間に、

（ボーイ）

が、金ボタンの澤山ついた制服をつけて、廊下を右から現れて慇懃に歩調正しくしかし足音なく左に通り去る。間もなく再び左から出て來て、同じ歩調で、ただ胸のところで兩側の時計を開けてそれを見ながら右へ通り去る。機械的、バルコンとは全く關係のない動作。

彼女　（編みながら）　あなた。

彼　（讀みながら）　何？

彼女　少しお話をなさらない？　それとも御本がおもしろい？

彼　いゝや。御本はあんまり面白くない――たゞね（笑）もうせんからかういふ癖でね、何も讀まずにゐると手もちぶさたなのですよ。

彼女　あら！　（上目で見て）　直ぐと私をおからかひになる。

……私ね、あなた、一度お嫁に貰はれたことがあつたのですよ。

彼　いつ？　（本を卓上に置いて稍眞面目に）　今までそんなことはなかつたと、あなたは言つたのにな？

彼女　いゝえ。――本當にではないの。冗談……

彼　冗談にお嫁に貰はれた？
彼女　――でもね。皆さんがさう言つて私をからかふのでせう。
彼　いつのことなの。それは？
彼女　もうずつと先――さうね（數へるやうに心持頭を動かして）七年も前ですわ。女學校の二年の時だから……
彼　へえ？
彼女　それがね、あなた。どんな人だとお思ひ遊ばす？
彼　知らない――解らない。
彼女　お爺さんよ！　それも妙なお爺さん。
あら、編むのをやめて）もう毛絲が無くなつたか知ら……
彼　――部屋へ行つて取つて來て上げようか。
彼女　いゝのですわ――ありがたう。持つて來てありましたの、（編物を卓上に置いて）もう無くなるかと思つて。そら……（別の袂から束のを出す）ぢや、おそれ入りますが、これをかういふ風に（仕方）持つてゐて下さらない？
彼　巻いて上げようよ――あなた、そのまゝで持つておいで。
彼女　（絲口をさがし出して彼に渡しかける。直ぐ思ひかへしてひつ込める）あなた持つて下さいましよ（笑顔。押しつけるやうに束を差し出す）――あなたが、お巻きになれば、きつと固すぎるか柔かすぎますわ。
彼　（束を受取る）そんなむづかしいものなの。
彼女　え、かげんがありますわ。
彼　（束を兩手にかけて）これでいい？
彼女　え。すみません。（巻き始める）
彼　（兩手を無器用に動かす）それで、今の話はどうした。そのお爺さんは！
　以下、彼女は巻きながら。
　彼は兩手を動かしながら。
彼女　その方がね、それは妙なの。様子も不思議な方だけれど、學校のひける時刻に二日もつづいて門のところに立つてゐたの。三日目にはたうとう學校へいらつしたわ。私のゐる敎室へ。それからそのお爺さんが先生に何か小さな聲でお話をなすつたと思つたら、先生が私の名をお呼びになつたの。――何でもないのよ。私に讀本をお讀ませになつただけなのですが、――國語の時間でした。あそこのところ――「田舍と都會」といふ章のおしまひ、今でもよく覺えてゐますわ――（自然と讀む口調で）「心きよき田園の人々、よし寫し得ず咏し得ずとも、その身こそは月花とともに、やがて繪なれ歌なれ。」と言ふの。ね、よく覺えてゐるでせう。二學期の半ごろだわ。その

お爺さんは暫く參觀をして出て行つておしまひになつたわ。それが一ばんおしまひの時間だつたでせう。わたし、歸らうと思つて何げなく門を出ると、そのお爺さんが、やつぱり、その日も、門のところに立つてゐるのよ。わたしほんたうにびつくりしたわ。だつてその方が妙に私に口をお利きになるのぢやないか、つてそんな氣がしたのでせう。だものだから、私はお友だちの陰になつて急いで歩いたの。もう大分來たと思つて振り向いてみると、どうでせう、やつぱりその方は立つてゐらしやるの――私の方を見ながらよ。その明る日、

彼　また來たの？

彼女　いゝえ。もうそれつきり――でもね、皆さんがおからかひになるのでせう――でも上の級になると時々、そんな風にお嫁さんを見に來る方があるのでせう。それをきつと寄宿舍の方が上の級の方々から聞いて來たのでせう。わたしきまりが惡かつたわ。それだのに皆さんが、それや面白がつておからかひになるの。あんまり同じことをおつしやるものだから私、氣がふさいでしまつたわ。何だかもう學校へ行くのがいやになつたくらゐ。――をかしいわね。ほんたうに赤ちやんよ。おうちへ歸つてもね、私の樣子が變つてゐたのでせう、お母さまが「どうかしたの。」とおたづねになつたことよ――大變御心配のやうに、私、困つたわ。――ほんたうよ。

彼　その話はおうちではしなかつたの？

彼女　えゝ、だつてその日すぐ言つてしまはなかつたでせう。へんに言はないでしまつたの。だものだから、言ひそびれてしまつて、――それに、皆さんがそんなことを言つておからかひになるなんて、お母さまに言ふのはきまりが惡いでせう。

彼　うん。――一たい、どんなお爺さんだらうな。

彼女　さうね。それや變つてゐる方。ちよつと見ると西洋人のやうな……

彼　西洋人――西洋人にはそんな變つた人もゐさうだな。

彼女　ところがね。西洋人ではないのですのよ。

彼　ふむ。お爺さんつて一たい幾つぐらゐ？

彼女　それがね、さあ幾つくらゐでせう。子供だつたからよつぽどのお爺さんのやうに思つたけれど四十位だつたかしら。もつと年とつてゐたかしら。五十位？　さうね、やつぱりわからないわ。――さうさうきつと五十位ですわ。あ、さうだ、教室へ這入つてゐらしつた時髮が眞白でしたもの。瘦せて、いくらか怖いやうで――でも、今考へると上品な……

ピアノの音がする、この建物のどこかやゝ遠いところから――滯在客の手すさびらしいまづい彈き方。あり

ふれた曲。

突然、バルコンへ、――廊下からでなく、ケースメントを通らず――ぢかにバルコンの上へ、白髪の、

（老紳士）

が來る――左から。彼女が今話してゐたと全く同じ形の人。横顔。茶の格子縞の旅行服を着てゐる。慚羞と驕慢とが相半したとでも言ふ異様な物腰。身邊には何か特別の空氣をもつてゐて、その人が來ると舞臺の調子が徐ろに一變する。彼女のうしろから卓の方へ進む。

彼　（老紳士を訝しげに見る。毛絲の束を手から卓上に置く。目を上げて彼女に）……

彼女　（彼の無言の話を解せずに。――卷く手をやめて）あなた、どうなすつたの。もうおくたびれになつて。もうほんの少しのところですのに……

老紳士　（進みよりながら、呟く）あまり不意だらう……

彼女　（ふりかへる）？（輕い驚き。手の毛絲のたまを卓上へ無意識に置く。毛絲のたまは投げるやうに置かれたので、卓上をころがつて、卓の端から手すりを越えて落ちる――下へ。――見えない地面へ。）

老紳士　（呟きつづける）驚いたらう……

彼女　（彼に）あなた！（夢にうなされた人の低い聲に似てゐる）

老紳士　（呟き）もつと驚くことだらう……（彼と彼女とに會釋する）・さぞびつくりなさるでせう。――突然で。（海に面した椅子を指しながら）私をこゝへ暫らく坐らしてくださるでせう？（彼等に關はずに腰を下す――後姿となる）

彼　あなたはどなたです！

老紳士　（彼を輕く手で制しただけで、それには答へずに）私はいつかあなたたちを愕かさなければならなかつた者です。（彼女に）これ、私だらう。――私を覺えてゐるでせう……

彼　（起立）

老紳士　（一切相手には關はずに。この人の聲は明晰で、しかし低く重く――抑揚のあまりない調子でいつも獨語に近い口調、時々目の前の相手をはつきり意識する。彼女に――）七年前にお前のところへ現れた時、私はほんのさんたまんたりずむだつた。今日は一つの眞實ですよ。――私は眞實を言はなけやならない。あなたは眞實を聞かなけやならない。――それだけにお前が怖れるのも無理ではない。

よね子、――よね子さんといふ名だね。――あの時、學校で聞いて覺えたが……

彼　さうです。――あなたは何か御用ですか。――あれは

私の妻です。

老紳士　さうですとも。さうですとも。それを私が知らないでなるものですか。――あなたは、あれに似つかはしい夫だ、と私は見てゐる。信じてゐる。

まああなたもそこへおかけ。何でもないのだから。あなたがたをびつくりさせて本當にすまない。

だが、いつかは一度びつくりさせなけやならなかつた。その時が今だつたまでだ。

――よね子さん、――私がつけたかつたやうな名ぢやないが、そんなことはどうでもいゝ。

彼女　あなた。（夢にうなされた人のやゝ高い聲に似てゐる）

彼　…………

老紳士　――いゝのだよ。ねえ！　よね子。

――私はお前のお父さんだよ。――信じられまい。――あたりまへだ。――お前は生れたその日から嘘に慣らされてきた。

お前ひとりではない。たくさんの人が、いや、人間は今までのところでは、皆、みんなではないまでも大方、嘘の方に慣れてゐる。

突然、かうして本當が目の前へ來て坐つても容易には誰も信じまい。解るまい。

だが、今に追々とわかる。後になるほどもつとわかる。――私は疑はないのだよ。沁みとほる。どこまでも沁みとほる。――それが眞實といふものの力なのだから。

――ね、よね子、私はお前のお父さんだよ。本當のお父さんだよ。――この一言が言ひたかつただけだ。私はお前たちのあとをつけまはしてゐた。――たつた一言いひたい爲めさ。

彼　（腰を下す）

老紳士　（彼女に）　私はお前がいゝ夫を持つたことは新聞で知つたよ。あなたたちはイギリス大使の夜會で知り合つたのだね。私はそれを新聞で知つてから……

新聞は賑やかに書いてあつたね。（彼に）　あなたはいつ任地へ――たしか羅馬だといひましたね――いつ羅馬にお立ちになるのです。――もうすぐ近いうちだといふが。

彼　（曖昧に）　ええ。――何ならば、（彼女に）　よね子、部屋へ行かうではないか。（老紳士に）　あなたもそこでお話下さいませんか。

老紳士　いや。私はもう直ぐ失禮する。ここでいいではありませんか。

――この建物の二階には、あなたたちと私とより誰もゐない。それに本當の話は誰が聞いてもいいものです。

……私は新聞でみた。あなたたちは羅馬へ行く。私はあなたたちの行かない前に自分の娘に、一言、本當を言ひたかつた。でも、私はもういつ死ぬかも知れない。――私はさう年寄りではないが、でももう疲れてゐる。

――あなた方はさつき私の年のことを言つてゐたやうだつたが、私は、――この娘は私が三十四の時に生れた。あの女――この子の母はあの時二十七だつた。私の今の年は、だから、あの子の年に三十三を加へたものだ。――私も、時々、自分の年を思ひ出さうとする時にはいつもさうして數へるのだ。

――私はもう大ぶん長いこと自分の年を數へもしないが。でもあの子の年ならば、いつだつても知つてゐる。(目の前の彼女を見て) 今年は二十だね。

彼女 (目を可憐に見ひらく。無心のうちに大きくあどけなく頷づく)

老紳士 (うれしげに) ほう。お前は私には似ないでお母さんに似てゐるよ。今のやうにうなづくところなどはそつくりだよ。

――私などには似ないでもいい。お母さんに似ておくれ。

……あれは珍らしい人だつた。

……あの男はあの女のことを、時々、馬鹿だと言つてゐたつけが。

――さう、單純ではあつた。だが、あれこそ、眞實をすぐに見てとる人だつた。眞實に對して答へることを知つてゐた。

――ただ弱かつたのだ。いやあれだけではない。私の方がもつと弱かつたかも知れない。

――私が死なうとさへ言へば、あの一時に、あの女も死んだのだ。

――さうすれば、よね子、お前はこの世には無かつたのだ。

無かつた方が幸福だなどと、お前、思はないだらう。思つてはいけない。これからさきでも、いつでも。

――私でさへも絲のやうな生をでも生きたかつたではないか。

――生きて來たではないか。

――生きてよかつたではないか。

(彼に向ひ) この子がお父さんと呼んでゐるのは、ただこの子のお母さんの夫ですよ。

――それから私の友達だつた――いや、今でも時々は友達だ。あの男にだけ言ひたい樂しい話題がいつも澤山あるのだもの。

ただね、その男は夫としては、或る時、あまり妻を愛しなかつたものですよ……。

——あなたにもわかるでせうが、同情は愛になるし、信賴も愛になるものです。

——あの女は本當に、私の妻になるべきだつた。その前に、間違つて、あの男と結婚してしまつてゐたのですねえ。

あの男はよね子が私の娘だといふことは知つてゐるのです。あの女と私とがあの男の前ではつきりと言つたのだから。しかし、その事を知ると直ぐにあの男は急に自分の妻がよくなつたのですね。私に信賴しきつてゐるあの女を、ほんたうにいぢらしいと思つたのでせう。そのいぢらしさをあの男自身に盡させたくなつたのです。さうだ、その氣持も本當だ。あの時のあの女を見て誰だつて心を動かさずにはゐないだらう。

——あの男は强い男ですよ——女を捨てるなら捨てるでせうが、奪はれるのはいやだつたのですよ。

——ああいふ性格を私はその後いつも愛してゐる。——私が彼によね子をのこして置いたよりも、彼が私によね子をのこされた方が、きつと、もつと傷ましかつたに違ひない——それを彼は堪へてゐる。ただあれほどの人間が、どうしてさう世の中を、世の中の嘘の約束を重く見たがるだらう。

いや、世の中へは默つてゐてもいゝ。それを知らす必要はないかも知れない。

だが（彼に）あなたには何か話しましたか。その事を、よね子の事を、あなたの妻たるべき娘の誕生のことを。

彼　……　……

老紳士（言はんとする彼を待たずに）さうだらうと思つた。それがあの男のやり方だ。むかしから變つてはゐないのだ。

あなたが外交官だといふことをあの男は喜んだだらう——いつも外國にゐる人なら、何も知れまいと思つて。彼のさういふ態度が——それだけが、私の敵だ。

なぜ、あの男は眞實をあなたに言はないのだ。事の初めに嘘があつてはならないのを——あの男は知りすぎるほど知つた筈ではなかつたか。

——なぜまた、あの女が言はないのだ。あの男が言はせないのだ。

——私をどこまで埋もれたものにするつもりだらう。——

——私はあなたにも知つていただきたい、今あなたがそのやうに愛してゐられるよね子の父は私だといふことを。この好い子の父は私だよ。その名譽をあなたから私に受けさせてもらひ度い。世に時めいてゐる人がよね子の父ではない。

私こそ——この妙な男こそよね子の父ですよ。

――さう聞いて、萬々一、あなたの氣持が變るやうなら、よね子を私にかへして下さい。私にかへして下さい。

彼　（果然たるうちに不安と微かな恐怖）よね子を私から取り返さうと思つてあなたは御出になつたのですね。

老紳士　よね子がそのやうに生れて來て私の娘であることが、何の恥でせう。誰の罪でせう。罪も恥も、あの女にない。あの男にもない。私にもない。況んや、よね子にあらう道理はない。

ただ間違ひは、眞實が今まで匿されてゐたといふだけの事だ――だからこそ、私はそれを告げに來た。

この外には、誰に罪もない。誰に恥もない。ただみんなの不運ではあつたかも知れない。――もう、私はさうも思ひはしないが。だが、今になつて一番悲しいのはきつと（彼女に）お前だらう。

しかし（彼に）あなたが本當にあの子を愛してくれるなら、今日からはきつと、あの子をもつと可愛く思ふでせう。悲しみを持つてゐる女をこそ一しほいとしい氣になるものだから。――少くとも私はさうだつた。――よね子の悲しみをあなたは支へてやるでせう。

よね子！

彼女　（顔を上げて老紳士を見る――凝結した表情――放心した大きな瞳）……

老紳士　悲しみが今にお前の心へ沁み入るだらう。何も知らないお前の心を亂すのを宥しておくれ。

もう年をとつた私が、またいつ逢ふか判らないお前に、私の生涯の遺産をおくるのだ――お前の父の一つの眞實をね。

悲しくとも、お前はそれをいつかは知らなければならなかつたのだ。生きるといふことは自分に就ての何ごとをでも知ることさ。すべての眞實を知らなければいけない。與へられただけで、それを知らないでしまつては生は一つの夢だ。

解からなければ無意味な謎だ。それぞれの人にはみんな一つづつの謎がある。知つただけで解からなければ悲しみだ。

――私のいふことが判るか知ら。しどろもどろで、とりとめもない。

――いつもひとりでゐる人間はひとりぎめの事より外には言へない。

――ともかくも、私は知らせてお前を悲しませる。

それを悲しく思はなくなるのがお前のつとめだ。

お前の悲しみをきつとお前の夫が分けて背負うてくれる。

私も亦、同じやうにしよう。私はお前の心持をよく了解

するよ。
二十年の間お前が私の心のなかで育つて來たやうに、今度は私がお前の心のなかで老いて行くだらう。それが私にはどんなに樂しいか。
——お前、私を、お前の心に住まして くれるだらう?
私は疑はない。私とあの女との娘であるお前は喜んで、それだけのことをさせてくれるに違ひない。
私はそれでもう充分なのだ。だから、お前は私を何も氣の毒に思ひ出すことはないよ。
私は幸福だよ——尠くとも今、この一時の私は。
——誰がこの一時の私のやうに生きてゐるものか。この一時を味ふために私の孤獨な二十年は必要だつた。しかもそのさびしい二十年の間、お前こそ私の希望であつた。その希望は今、遂げられた。
今日まで、そばにゐなかつたお前が私をあれほどに慰めたやうに、今日から後もお前は私を慰めるだらう。
——まあ考へてごらん。二十年の間、お前のお母さんのそばに私がゐて、お前が私の膝の上で大きくなつたとしたら——それが世間の幸福といふものだらうが。
さういふ幸福のなかには、私が今感じてゐるこの天地に相通ずるやうなこんな一時は果してあるだらうか!
世間の幸福も、この一時を水にうすめて二十年にまくばつただけの事だらうよ。
——幸福は世間の人々には世間の人々らしく、私には私らしく與へられた。誰も幸福も不幸もない。
お前に與へるこの悲しみは私にどうすることも出來ないが、——それを癒やすのがお前の務めだが、ただお前は私を哀れな父と思ひ出さずともいい。
——ごらん、私は、晴々とした顏をしてゐるだらう。

彼女　(再び顏を上げて老紳士を見る——凝結した表情——
——放心した大きな瞳)
　無言。間。

老紳士　(更に彼女に)　この晴々とした私を覺えてゐておくれ。
世間の人を信じてはいけないよ——世間の人はね、お前のお父さんのことを——私をさ、氣がふれたやうに思つてゐるらしいのだが、それは嘘だよ。
私はただ、いつも私の世界に住んでゐるだけさ。だが、誰だつてさうではないか——ただ、大ていの人の世界はみんな似通つてゐる。私に開けた世界だけが、外の人のとは共通ではなかつた——自づと私は、外の人とは違つて考へ、違つて振舞ふだらうよ——それだけの事さ。

彼　(呟き)　——それにしてもあなたは、あまり不意に私どものところへお出でになつた……

老紳士　不意に？　さう不意に。あなたたちにはあまり不意に。だが、私にはほんたうに自然だつたのですよ。不意どころか、あなたたちが私を呼びよせたとしか思へない くらゐ自然だつた。

彼　――あなたは私たちの話を聞いてゐらしつたかとさへ思へるのです。

老紳士　(彼に)　さうなのですよ。(彼女に)　全くだよ。今日だけではない。毎日。お前がたがこゝへ出る度ごとに――お前がたは私につけられてゐたやうなものだな。――お前がたがこの土地にゐるといふことを知つて、私は一週間おくれてこゝへ來た。お前がたがあそこに　(右の手で右のうしろを指す)　ゐるのを知つて、私はあそこ　(左の手で左のうしろを指す)　へ來た。不氣味に思つてはいけない――お前がたはいつも私に見守られてゐたのだ、私の親ごゝろに。――私はそれ程お前がたを見たかつたのだよ――樂しんでゐるお前がたはそれほど私の喜びであつた。――そのお前がたと一緒に、ここへ、一度かうして腰をかけて見たいといふのが、ふとした私の願ひだつた。いつか、七年前にお前を學校へ見に行つた氣持のつゞきだ。そのうちにその願ひは嵩じて來た――私はどうかしてお前に私のことを、お前の父のことを、眞當の父のことを言ひたいといふ切願が出た――夢に望んでゐたことを成し遂げたくなつた。その時は今より外にはないと思つた。――お前がたが外國へ行つてしまへば、私はその後で死ぬかも知れない。お前は私を知らないでしまふ。私はお前に知られないでしまふ。……――さう思ふことが私には堪へられなかつた。さうかと言つて、私はお前をおどろかせ悲しませるのをためらはずにはゐられなかつた。私はお前たちの末永い幸福を見究めただけで、それだけでもう滿足して、私は今日、默つてここを立去るつもりだつた。その最後の時、今日が別れだと考へると、私の願ひは一番切なかつた――ここへ一度お前がたと坐りたい、私がお前にとつて何者であるか知らせたい。――その燃え上つた私の切願が通じたのだ。お前は、七年前の私の噂で、ここへ私を呼んだではないか――さうとしか、私には思へない。――お前と私とを引き合せたいといふ何者かがあつたのだらう。(彼に)　あなたはいづれヴェエスへ行くでせうね？

彼　(あまりに唐突な話題に)　え？……

老紳士　この子をそこへつれて行つてやつて下さい。――

あの美しい町で私は十年住んだ――あなたが外國へ行く人だといふ事があの男にだけの仕合ではない。
（ポケットから手帳を出し、それを卓上に開いて書く）
ここが、あの町の停車場だ。――ここがグランド・キャナル。それがから曲つてゐるあたり――さう橋のある手前を、左へ曲る堀割に沿うて、曲るとすぐ右手に、――かういふ名のホテルがある。町の名も番地も書いて置く。私を十年住まはせたのはここだ。舟がすぐ玄關へつくよ。私のゐたのは表の三階で、水の上から見上げると左から五つ目の窓のある部屋さ――もう壁の色ぐらゐは變つてゐるかも知れないが。ヴェニスへ行つたら、あの部屋へ、すくなくともあの家へ留まつてくれ。三流ぐらゐの家ではあるが、古風でなつかしい。ベデカにも出てゐる。贅澤ではないが、宿屋になければならないもの――親切だけはあそこの誰も彼もたつぷり持ち合せてゐる。おやぢは――私より少し若いがあの頃、いつも地酒（ノストラン）に醉ひすぎては（回想的に）帳場で神さんにきめつけれてゐたつけな。喧嘩の時でさへ仲のよさの溢れてゐる夫婦だつた。ふたりとも生粋のヴェニス人だつた。
――さうさう、あのおやぢは、まだこれくらゐ（床上三尺ぐらゐの高さを手で示して）のころに、ロシヤの文豪アントン・チエホフに頭を撫でられたことがあると言つてそれをよく自慢にしたものだが、一八九一年三月、アントン・チエホフといふ署名を大事にしまつてあつたつけ。――そこに娘がゐる。スザンナといふ名だ――もう大きくなつたらう。……よね子！

彼女　（老紳士を見つめる――光つてゐる大きな瞳）

老紳士　スザンナはお前と同い年だよ。よね子。私がどんなにお前を愛したか。それを知つてゐる世の中でたつた一人の人がスザンナだ。あの子はいつも私の膝に抱かれた――お前の身代りにね。あの子は私に一ばんなついた。一日中私の部屋にゐたものだ。よね子。私を生きさせてくれたのは、スザンナだつた――お前の影だつた。……私はスザンナにいつも何を話したと思ふ？　お前のことばかりだつた。私はスザンナに言つたものだ――可愛いスザンナや、私にもお前と同じ年ごろの娘がひとりあるのだよつて。
――私はね、よね子、スザンナより外の人には今まで誰にもお前のことは言はなかつた――それがあの女、お前のお母さんとその夫とへの私の心づくしだつた。――せめてスザンナひとりぐらゐには話さずにはゐられないぢやないか。
――スザンナは私に尋ねたよ。――小父さんの子は何といふ名だつて？――私は答へやうがなかつた。

でも、よね子、私はお前の名さへ知らなかつたぢやないか――お前が生れたことは人づてに知れた。お前がよく育つてゐることもわかつた。それよりほかの事は何もわからなかつた――

でも、私はもうお前のお母さんも私に無いくらゐなら、よその國で死なうと思ひ定めて日本を出てしまつたのは、お前が二つの時だつた。

スザンナはまた聞くのだ――小父さんは、なぜ、そんなに愛してゐる自分の子をここへ連れては來ないのだ？　つて。

私は抱いてゐるスザンナに言つた――スザンナや、お前はいい子だから今度からはもうその事は聞くのぢやないよ……

彼女　（顏を上げて老紳士を見る。――凝視――一脈の表情――幼兒的恍惚）

老紳士　お前は！　お前はほんたうにお母さんそつくりぢやないか。

存分に泣いたあとであれが私を見上げた顏は、今のお前のその顏だ……（間）

私は何を話しかけてゐたつけね？

彼女　（幼兒的恍惚、幼兒的語調）　スザンナ。

老紳士　さう――スザンナは私がそこを立つ時には、小父さんは私を置いて、自分の娘の方へ行くのかと言つて泣いた。あの子はあの時十三だつたが――あれは悧巧な子だつたよ。小父さんは自分の娘に會へるからうれしいでせうとも言つた。私は首をふつてその子に會ひたくとも果して會へるやら……――と答へるとスザンナは、どうして！？　と不思議がつた。

私はその時返事をした――スザンナや、おとなにはおとなでなければ判らないことがある。お前がおとなになつた頃、小父さんはまた來て、そのわけを話して上げようよ……

これらの話の半より、廊下に

（ボーイ）

（自動車運轉手）

（同じく助手）

いづれもそれぞれに金ボタン附の華やかな制服を着て、右より相つづいて出て來る。機械的な動作。

再びすぐ左より、運轉手と助手と、あまり大きくない一つの古トランクを二人して前後より持ち運び來る。そのうしろよりボーイ從ふ。トランクを運ぶ二人は右に去る。明るいバルコンに對してこの薄暗い廊下の動作はすべて影畫的である。

ボーイ　（ケースメントの入口の片脇に、直立して）　そち

らにおゐでで御座いましたか。

老紳士　（ふりかへる――一種かがやかな顔）　何か。

ボーイ　お仰せつけのお供がまゐりました。

老紳士　（時計を見るらしく）　汽車は何時だ。

ボーイ　三時二十五分で御座います。

老紳士　よし。（立ち上る）

　ボーイ敬禮。再び左に行き、直ぐ手に洋傘とハンティングとを持つて出て來る。右に去る。）

老紳士　お前がたを私に會はせた何物かが、今もう私にお前がたと別れるやうに言ひつけるらしい。――さやうなら。――今別れなかつたら、いつ別れてよいやらわかるまい。――さよなら。（卓上に殘つたあつい手帳をとり、一枚裂いて、その斷片を）　さあ、これを渡して置かう。

彼女　（受取る）

老紳士　よね子、――私には、スザンナはお前の分身のやうにさへ思はれるのだから……

（彼に）　自分のせゐでない悲しみをもつたあなたの妻をあなたはもつと愛してやるでせうね。

（彼女に）　よね子、さやうなら。

　老紳士は彼等に背をむけてケースメントの方に輕快に、大股に、歩き出す。）

彼女
彼　}（同時に立つ）

彼女　もうし……（幻に呼びかける人の聲、影。――七八歩ほど歩いた老紳士を呼びとめる）

老紳士　（ケースメントの中央に立ちどまり、彼等をふりかへつて）　私かい。

彼女　え！　（凝視）……あの、（うなだれて）……何でも御座いません。（再び相手を凝視して）　さよなら。

老紳士　（快活に）　さよなら。――きつとヴェニスへおいで。お前がどんなに愛せられたかスザンナにお聞きよ。スザンナには何もかも話しておやり。私の約束だから。――さよなら。

　老紳士廊下より右へ立ち去る。――無雜作に。間。――ピアノやむ。

　彼と彼女と立つてゐる。――遠い物音を無心に聞くが如き表情。

彼　……（呆然と立つてゐる自分と彼女とに氣づいて）　今あなたはあの方をよびとめたね。

彼女　（呆然と）　え！

彼　何をいふつもりだつたの？　――私も何かいふつもりだつたが。

彼女　わたし……わたし、ともかくも、もう一度見て置きたかつたの。

彼　あなたに何かおもひ當ることがある？

彼女　（大きくうなづく。彼の顏を見入つて、我に返る瞬間。一種鋭い明確な聲）――わたし、妹たちとまるで氣質が違ふのです。

彼　……（間）

彼女　（彼に近づきつつ）あなた。いつかヴエニスへつれて行つて下さるわねえ。

彼　（やさしく）ああ、行かうよ！　つれて行くとも？

（彼女を輕く抱いて劬る）

彼女　（愕然と）それにしても、あの方は、どちらへ立つておしまひになつたでせう!?

彼　あなたに紙ぎれをくれたではないか。ちよつとお見せ。

彼女　（渡す）

彼　や。これやヴエニスの宿屋のことか。私はあの方の所書きだと思つてゐた。――所書ぐらゐは、何にしても、知つて置かなけれやなるまい。

（急いで、老紳士を追ふ彼に、――）

彼女　あなた！　行つてもう一度、お引きとめして下さい……

彼は彼女の言葉を聞かずに去つてしまふ。

彼女は彼を追はんとしてケースメントの上まで來る。

思ひ返したごとくまたもとの手すりのところに歸る。

彼女はその指に、さつき卷きつけてゐた毛絲を、そのまま未だしつかりと持つてゐる。

地面に落ちた毛絲のたまと、卓上の毛絲の束とからほどけた絲が、彼女の指から彼女の歩いたあとに絲になつて曳かれる。

彼女はバルコンの手すりに倚る。うなだれる。――考へてゐるやうである。さしぐんで來るやうでもある。

彼女は、ふと、地面に落ちた毛絲のたまに目をとめたらしく始めて、それに氣づき、しかし半意識的動作で、しづかにそれを片手で手繰り始めた……

水平線に遠い船が通つてゐる。

――幕――

五月晴（一幕）

人物

野村竹亭　一見四十位よく見るともつと若い

元吉　竹亭の弟。三十位　會社員

彼等の姉　三十八位

おゑい　話題に出る人物――元吉が近頃離緣した女

東京近郊の古びた借家。

茶の間。片側に窓一つのうす暗い部屋。取亂した感じ。朝めしの卓。――長火鉢のそばに元吉と姉と。――尤も目上の坐る場所が空いてゐること。

初夏の暗い朝。古びた障子にさす窓の少しばかりの日ざしで知れる。――最も明るい日光。

姉　（奥の方をふりかへつて、ふすま越しに次の間に呼びかける。聾者に特有な疳高な聲）これ、御飯をたべんかの？　――もうみんな濟んでしまふで……。（元吉に）今日はせつかくのお天氣ぢやさかい、わたしや共進會を見てくるのぢや。（ものを喰べながら）誰もつれて行つてくれさうにもなし、ひとりで行つてくる。

元吉　…………

（ふすまを開けて、竹亭が入つて來る。――姉よりもふけて見える。打見たところ四十以上。手入れをしない延びた髪、不興極る顏つき。）

竹亭　（坐りながら、姉を見て）何度も同じことを言はんでもわかつてゐる。――仕事が出來さうだから、描きかけてゐたのだ！　そんなことぐらゐわかつてゐさうなものだ。

姉　（竹亭の語勢に少し怯えて）さう。それや濟まんことをした。――御飯をたべてからゆつくりしたらいい。（竹亭の茶碗に盛りながら）

竹亭　駄目だ。――今日はもう描けない！　（姉の差出した茶碗を受取らうともせず食事を終へて新聞を見る元吉に）今日も休んだのか。

元吉　――いいや。（新聞から目を放さずに）

竹亭　どうしたのだい。

元吉　日曜だもの、今日は。

竹亭　……（やつと茶碗を受取る）

姉　今日はおみおつけがないのぢや。――氣がついてみた

ら、お味噌の味が變つてゐた。あれや、もう食べられん。
竹亭 (一口食って茶碗を下に置く) お茶は?
姉 ……(土瓶を出す)
竹亭 (受取つて、お茶を飯の上へかける。茶碗を取上げて
また下に置く) 水だね! これや。
姉 (眉をしかめ耳を傾けて) え?
竹亭 (大聲で) 水ですよ、これは!
姉 …………
竹亭 (火鉢を見る。小聲で) 火も無いのだな。——姉さ
ん、御飯が冷たいのなら……
姉 ゆうべ、みんなが他所で食べて來たので殘つたのぢや
よ。
竹亭 だからさ——
姉 ——あんたもあまり毎晩よそでお酒を飲むのはおよし
よ。
竹亭 だから、冷たいのは仕方がない。だから、御飯が冷
たいなら、なせ。——お茶ぐらゐは沸しておいてくれて
もよささうなものだ。——そんなことぐらゐはわかるで
せう。
姉 待つておくれ。いま沸して上げる。
竹亭 ——お火はあるの?
姉 お火はないが、直ぐぢや。

竹亭 いいよ——それには及ばない。(二口三口食べなが
ら、小聲で元吉に) お前はよく我慢をしてこんな朝飯を
食ふな。——おれは何だかなさけないよ。——よその家
ぢやもつと氣の利いた食事をする。これぢやまるで人間
の飯ぢやない。生きものの飼料ぢや。おれは鳥にだつて
もう少しは氣をつかふよ。
元吉 (新聞をたたみながら) 姉さんのことは今さら言は
なくつたつてわかつてゐるぢやないか。
姉 (彼等の對話はよくわからないながらに) かんべんし
ておくれ。わたしも共進會を見たいのぢや。——誰もつ
れて行つてくれないから、今日はひとりで行くのぢや。
——早く行きたいと思つていそいでゐるのぢや。
竹亭 自分の都合でこんな朝飯を食はせるのか。飯々とう
るさくいひながら何一つ用意はしてゐないのぢやない
か。こんなものを食はせるつもりなら、今日は休むと言
つた方が増しだ。——實際、おれは仕事をしかかつてゐ
れば飯などは休んだ方がいいのだ。——姉さん、姉さん
は共進會などを見てどうするのです。子供みたやうに。
姉 でも、見たいもの。
竹亭 あんなものあ田舎者だましぢやないか。
姉 だつて、私は田舎者だもの。
竹亭 田舎者には違ひないさ。だがまんざら、東京が珍ら

しいわけでもあるまい。東京にだつて三年や五年は住んだことがあるでせう。

姉　（意味のない微笑）　もう二十年もむかしのことぢやの。

竹亭　（元吉に）　姉さんは小石川にゐたのぢや。おれは夏休みに東京見物に來て、姉さんところにゐた時の事を今もよくおぼえてゐる。――十四の時ぢや、多分。（ひとり言めいて）　おれの生涯での最初のひとり旅ぢやつた。――姉さんは新婚でね、夫は大學の法科にゐた男ぢや。お前も知つてゐるだらう。――それが姉さんの第一次結婚だ。

元吉　（氣のない返事）　うん。

竹亭　姉さんももとはかうでもなかつた。重ねがさねの不運で、ぼけてしまつたのだ。今ぢや、ただ「走り廻らないだけの馬鹿」ぢや。――尤も、もとからそんなに氣の利いた人ぢやなかつたやうだが……

（やゝ長い間。）

（その間に、竹亭は飯を食ひながら、だんだん不機嫌になつて來る。）

竹亭　……姉さんは、一たい、共進會を見に來たのか。――元吉の家を片づけに來たのぢやないのか。おゑいが行つてしまつて女の手がなくなつたから、手つだひに來てくれたのぢやなかつたのか。

姉　手つだつて片づけようにも、あんたは「この仕事がすむまではここにゐなけやならない」といふぢやないか。――いつになつたらみなすむのだか知らないが。

竹亭　だから、早く濟ませたいと思つて、今朝も始めてゐたのぢやないか！

元吉　兄さん、もう、およしよ。――姉さんも。

姉　（無表情に）　あ、わたしが悪かつた。（竹亭の顏を見ながら）　ね、ちよつと待つてゐてね。お飯も焚きなほす。お茶もわかす。ね、きげん直してね。

（姉、立たうとする。）

竹亭　（素氣なく）　いいよ、いいよ。

元吉　姉さん。さうしてあげたらいい。

竹亭　いいつてば！　おれはもうとつくに濟んでゐるぢやないか。元吉。おれは飯がまづいと言つておこつてゐるのぢやないぜ。そんな子供見たやうなことをいつまでも氣むづかしく言つてゐるのぢやない。――わからないか。――ただ、おれはへんに情けないのだ。――おやぢやおふくろもまた、何だつてこんなところへ姉さんなんぞをよこしたのだらう……

元吉　――だから、そんな取込みのところへ行つたところが、もとより邪魔になるばかりで手つだひどころぢやな

い。面倒だらうが、御承知のとほりの人物で當人は何と言つても行くと言つて聞かないからつて――おやぢが、さうくれぐれも言つて來てゐる……

竹亭　邪魔になる、面倒をかける。そこまではわかつてゐて、それからさきはおやぢにも判らないのぢや。お前にしたつてもさうぢや。――考へても見ろ。やもめの兄弟が三人顔をつき合せて、家を疊む思案が何で面白いのだ！　おれの言ひたいのはそれぢや。それぢやのにお前たちは、無神經な面をしてあたりまへさうに暮してゐるね。

元吉　だつて、兄さん。ほかにどんな顔の仕方もないものね。わたしは兄さんのやうにものごとをくよくよ考へ込まないやうに出來てゐるのさ。（自分の言葉を和げようとする微笑）

竹亭　だから！　お前はよからう。――お前は好きで女房を出したのだからね。

元吉　……私が出したとばかりは言へん。あれが出て行つたとも言へる。あのとほり出て行つた。平氣な顔をして出て行つた。あの女はもうせんから二言目には出て行くと言つてゐたものぢや。

竹亭　なるほど、さうも言へる。――あれは出て行つた。だが出て行きながら、あれはお前に一言ひきとめて貰ひたかつたのだ。あの場になつて、どうぞおいて下さいとは言へまい。女にだつて意地はある。ことにあの女は意地張りだつた。だが口さきだけだよ。なぜもつと心を見拔いてやらないのだ。――それが見えないお前ではあるまいが。

元吉　でも、それほどまでにして置かなけやならない女でもなからう。

竹亭　さうか。――だが考へて見ろ。どれほどまでにしてお前がつれて來た女だつたか。あの女は意地張りだつたからお前のところへも來たのだぜ。それで今度は、意地張りで出て行かなけやならない。おゑいはお前を好いてゐたのだぜ。おれにはその心持をしみじみと言つた。――どういふわけだか、お前には相談しなかつたが、おゑいはおれに何もかも言つた。

元吉　兄さんにいふ半分だけのことを私に言へばよかつたのだ。――兄さんはまたおゑいの言ふ相談なら聞くのに、私のする話はうるさがつて取合つてはくれなかつたぢやないか。

竹亭　さうさ。おゑいはお前のところにゐたいと思つておれに相談をしたのだ。お前はおゑいがゐなくつてもいいと思ひながらおれに相談したのだ。――おれはお前の心を繫へさせようとは思はなかつた。今でもさう思つてはゐない。お前は、しかし、お前をあれほど好いてゐる女

を出してしまつたのだ。――贅澤をするがいい。お前は若い……

元吉　（妥協的な微笑）　兄さんだつて若いぢやないか。兄さんは自分の好みで年つてしまつたのぢや。

竹亭　餘計なことを言はずに聞け！　――お前は働きもある。――おれのやうにこの年になつて弟の食客をしなければならないやうな男とはちがふ。だから女の贅澤をするのもいい……

元吉　兄さん、今時分そんなことを言ふくらゐなら、なぜもつと早く言つてくれないのだ。

竹亭　いや〳〵、いまでもまだ早いくらゐだよ。――思ひ當るやうになつてから言つた方がいいのだよ。……それにしてもおゑいの奴も馬鹿だ。あれほどおれには言ひながら、お前と顔を合すと、怒鳴り合つてばかりゐる。――尤も、女だからあれも出てしまへばまたその氣にはなるだらうが……

元吉　………

竹亭　（自嘲の口調で）　お前の兄弟には、女に逃げられた兄貴もあるし、男に逃げられた姉もある。――その埋め合せをお前がするか。ふゝふ。（一種の笑）

（姉、この間、ふたりの對話をとぎれとぎれに聞くらしく。突然、姉はヒステリカルに泣き出す。）

姉　私が來たのが惡かつたのだよ。ごめんよ。うちでもみんなとめたのぢや。――だが私は來たかつたのぢや。皆が困つてゐると思つて。（泣く）　誰かひとりぐらゐはやさしくしてくれてもいい。うちにゐても私は邪魔ものだ。せめてここへ來れば……

竹亭　うるさい！　何を泣くんだ！

（竹亭は荒々しく立つて、ふすまをあけて奥の間へ行く。ふすまを閉める。）

（姉は泣くのをやめて、ぼんやりとしてゐる。）

（元吉は卷煙草を出して火をつけ、何でもない天井の方を見てゐる。）

（奥の間から――）

竹亭の聲　（茶の間の人々に言ひかけるのではない。外の何ものかに言ふらしく、或はひとりごとらしく）　こら！……こら！　Tchez tchez tchez tchez, Tchez, Tchez tchez,（舌を鳴らす聲）　――こら、出ろ！　――出て來い。……どうしたんだ。こら！　――さ！……　出て來い！　おいで！　……さう、さう、さう……

耳慣れない叫び聲　Q:iy'-qee!

竹亭の聲　痛ッ！　畜生！

（聲と同時に、ものの障子に投げつけられた音。やや重いものの疊に落ちる音。ガラスの板のこはれる音。）

（それら同時に起る音に雜つて——）
再び耳慣れない叫び聲　Quy-qee!
（元吉と姉と立ち上る。）
（各、ふすまを一枚づつ左右に開く。）
（奥の間見ゆ。）
（仕事中の日本畫家の部屋。——枠に張つた稍大きな
絵絹。その上には半成の白い鸚鵡の圖がある。赤黒い
毛氈の上に繪の具皿がいくつか。その皿の一つを片手
にふり上げて、竹亭が部屋中央に突立つてゐる。）
（竹亭の傍に空の大きな鸚鵡籠。）
（姉、竹亭のふり上げた手の袂をおさへて——）
姉 ｝（同時に）｛そんな、そんなむごい事をやめて！
元吉 ｝　　　　　｛兄さん、どうしたんだ！
竹亭　（落着いた聲）　何、あいつが噛んだのだよ。
姉　落着きなさい！
竹亭　何を言ふのだ。自分こそ落着きなさい。——そいつ
を殺さしてくれ……
元吉　兄さん。馬鹿な、おこる事ぢやないぢやないか。——
あいつはよく噛むぢやないか。
竹亭　あんなに大切にしてやつたのだ。おれは噛まれるこ
とはない。
元吉　鳥だつてきげんの悪い事はある。
竹亭　（姉に）　手をはなしなさい。ともかくも殺さしてく
れ。見なさい。あれはもう助かりつこはない。
（——みんな部屋の片隅を見る。）
（元吉、姉に竹亭を放させる。）
（竹亭、皿を投げる。）
叫び聲　Qu-Qu-Quy!
（竹亭はそのまゝ奥の障子を開けて縁側から庭へ出て
行く。）
（開け放された障子の奥から、庭——たゞ黒いほど緑
の木が、鬱陶しいかたまりになつて覗き出る。）
（間。元吉と姉と無言。）
（元吉は茶の間の押入から古新聞を出して籠洗から流
れた水をふく。）
（姉は出て行つて、雑巾を持つて來る。——子供のや
うにしやくり泣きをしてゐる。）
元吉　姉さん、ちよつとそれを、（目顔で示して）　とつて
おくれ。
姉　（泣きながら）　どうするの？
元吉　兄貴の目につかんやうに……。見ろと兄貴は、また
思ひ出しておこるだらうから。
姉　あんなに可愛がつてゐたのにねえ。
元吉　うん。

（姉、白いものを大切さうに兩手でそつと持つて渡す
――）
（元吉、受け取りながら姉の顏をちよつと見入る。）
元吉　姉さん。何も泣くことはない。――兄貴は姉さんをおこつてゐるのぢやないよ。――なんか自分のことを考へてゐるんだから。（しやがんで　白い大きな鸚鵡の死骸を、ひろげた新聞の上へ横たへながら、それを丁寧に新聞にくるみながら）……兄貴は、姉さんを氣の毒に思つてゐるんだよ――優しい事は口に出せないんだから、やさしい事を考へるといら〳〵して來るんだよ――兄貴といふ人は。だから泣いてゐると猶、おこるよ。
姉　……（頷く。立つて、元吉のしてゐることを見つめてゐる）
（短い間。）
（竹亭、庭から緣側へ現れる。）
竹亭　おい――元吉。
元吉　え？（ふりむく）兄さんそこに居たのか。
竹亭　今來たんだ。（平靜な自然な調子）お前、姉さんをつれて行つてやれよ。――おれは留守をするから。――それから、あしたから片づけて貰はう。おれはまた旅をすることにきめた。
元吉　だが、繪は？
竹亭　繪か。つまらない、おれはもうやめるよ。――入選してみたつてなにになるんだい。――それにもうモデルは死んでしまつたしさ。旅に出るにはちやうどいいや……。姉さんをつれて行つてやれよ。
元吉　うん。……
竹亭　旅支度をしながら留守をしてやるよ。（空を見まはして無意味に）久しぶりにいい天氣だ。

――幕――

樂しき夏の夜

童話劇（一幕十場）

道　　化
外出すがたの令孃
シルクハットの青年紳士大ぜい
花を賣る娘
通行人A
同じくB
コックA
同じくB
混合酒調合人
號外賣
おかみさんA
同じくB
巡査大ぜい
彌次馬大ぜい

1

公園のベンチ。

ギタアを持つた道化がひとり。
ぼんやり空を見つめてゐる。
しばらくして、唄ふ――大きな口を開いて――

「星の數、
（彈く）タラン
（唄ふ）足らん
タラン
足らん
タラン

2

高いところに、窓一つ。――咲き滿ちた小さな赤い薔薇の鉢を置いてある。
その窓を額ぶちにして、外出すがたの令孃がひとり。
空を見上げる。ひとり言を言ふ――
まあ、ほんたうにどうすればいいのだらう。こんなお天氣と言つちやありやしない。降るなら降る――晴れるなら晴れる。何とかはつきりすればいいではないか。……
まつたくあの方のおこころのやうな。わたし、ほんたうに困つてしまふ。（腕の時計を見て）あら、もうすぐお約束の時間だのに。これぢや、出かけていいのだやら、

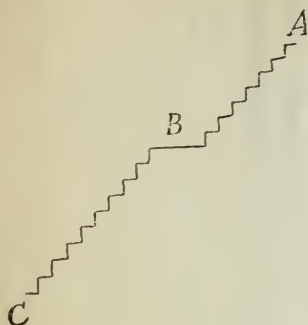
惡いのだやら……(たゞとから手紙を出す。讀む) ……お天氣ならばお待ちいたします。雨のやうならば待ちどほしくとも次の日にいたしませう。――お天氣ならばお待ちいたします。雨のやうならば待ちどほしくとも次の日にいたしませう。(ぢれつたさうに) 何べん讀んだからつて、雨なら、お天氣ならとより外には何も書いてありはしない。あの方の親切が足りないからだわ――曇つたら一たいどうすればいいとおつしやるの！……

(この言葉の間に、令孃は無意識に花を搦り取つては投げ捨てる。搦り取つては投げ捨てる……)

3

A

B

C

圖のやうな、長い、一めんの階段。

シルクハツトにドレツスアツプした青年紳士大ぜい。Aから現れてCへ下りて去る。

Bの所に、虹のやうに美しい衣裳をした花賣娘がゐる

青年紳士たちはみな、ひとり〳〵花を受取つて、襟にさす。――キラ〳〵光る不思議な白い花。

青年紳士たちは快活げに、口々にいろ〳〵なことを言ふ。

「××××××」

「××」

「××××××」

「××××」

「××××××」

(彼等の言葉はちつともわからない。)

4

並木のある廣場。

よこぎつて通行人がひとり。

――空を見上げる。

――おどろく。

や！　ひどい雲だ、あんなに早く！　一たいどこへ行くんだらう。

（言葉が終らないうちに、どことも知れぬところから群集の叫喚――）

バグダツド！
バグダツド！
バグダツド！
バグダツド！
バグダツドへ！
バグダツドの都へ！

（通行人A氣絶する。）

（通行人B、Aを發見する。叫ぶ――）

大變です……――誰か來て下さい。人が倒れてゐるんです！

5

街上。――赤い薔薇が澤山落ちてゐる。

雨がふり出してゐる心持。シルクハットの青年紳士――例の白い花を胸にさしてゐる一人が、濡れながら歩いて來る。帽子からも上衣からもポタポタ雫がたれながら、しかし、彼は平氣で。ふと地上に落ちてゐる花を見つける。

おや、妙なものが降つてゐるぞ――ここは。（見上げる）――や！（間）ふむ。下界も馬鹿にはならないわい。これだから、たまには下界へも來たくなるのだ。だが（歩き出す）星ともあらうものが、下界の少女などに目をくれたとあつては仲間に申しわけがない。

6

コツク場。

コツク二人、窓から天を見ながら、

A　これや、樽の底がくさつてゐるに違えねえぜ。

B　いいや、ソオダのフアウンテンが開けつぱなしなんだ。

（混合酒調合人、扉をあけて突入する。）

調合人　おい！　見てくれ――おれは氣が違つてはゐないか。

A　何だ？　――もつとゆつくりものを言へ。

B　一たいどうしたてえんだい？

調合人　聞いてくれ――かうだ。今のさつきよ、シルクハツトを召した若い旦那がたが、十人もどやどやとバアへとび込んだ。

A　いづれは雨やどりのつもりだらう。

調合人　それや、さうかも知れないよ。――所がさ、そいつらがカクテルを注文しやがつた。JACK'S MANUALにも無い名を、擇りも擇つて五十ばかりもペラペラと列べやがつた。

B　ハ、ハ、ハ。やられやがつたな。トチメンボーめが！

調合人　それやそれでいい——結局、おれのナンセンス•カクテルをうまいうまいと言つて飲んだ。十杯づつもやつたもんだ。

A　なあんだ。——またカクテルの自慢か。

調合人　それがね。（聲をひそめて）おい、みんな星なのだ。——おれはちやんと見抜いた……。

（Bと顏を見合せて。）

A　やつぱりこれ（自分の額を指で指しながら）のかげんなのだな。

B　（うなづいて、調合人の聲色で）若い時分にや、これでも未來派の詩人だつたのだ——酒の調合より外にや藝術がないと氣がついた、か。アハ、ハ、ハ。——さうして今夜は、たうとう、お星さまのカクテルを調合しやがつた！

調合人　（心配さうに）全くおれは少しへんかなあ。

7

ベルの音しきりにひびく。

濡れて水のしたたる並木。

青白いアークライトに照し出されて光る濡れたアスファルトの道。

シルクハットの青年紳士——例の銀色の花を胸に挿したひとり、濡れながら濶歩する。

雨合羽にすつぽりくるまつた號外賣が來る。

青年紳士號外を買ふ。讀む——

何だと——バグダッドの都は連日の大雨のために大洪水——（號外をまるめてすてながら）ざまあないな！

8

きたない街。

おかみさんがふたり。隣同士のかど口で挨拶——

A　全く困つてしまひますね。——これぢやおしめだつて乾かすひまもあれやしませんわ。

B　まつたくほんたうに何といふ惡い、いやな御天氣でせうね……

A　ほんたうに氣まぐれな……

（シルクハットの青年紳士、例の銀色の花を胸に挿したひとり、通りかかる。——醉つてゐる。おかみさんたちの挨拶を聞くなり、ふたりに。）

紳士　何だと！　何といふ惡い、いやな天氣だと——、おい。もう一ぺん言つて見ろ。氣まぐれはおれたちの性分だ。——それがどうしたといふんだい。やい、手前たちの都合ばかり言つてゐやがつて、手前たちのおしめがど

うしたといふのだい。それがおれと何の關係があるんだい。おれが頼んで手前たちにおしめをほしてくれと言つたか。——もう一ぺん言つて見ろ、ただでは置かないから……

A　（あつけにとられながら）どこの若旦那だか知らないが、わたしや何もお前さんの惡口なんぞついたおぼえはありませんよ。

B　わたしだつてもさ。何を聞きまちがへたんだか知らないが……

紳士　とぼけるな！

B　立派な旦那が、へん、醉つぱらつたからつてつて、何といふ口の利きざまだらう。

紳士　立派な旦那たあ、誰の事だ。おれたちやごろつきだ。

A　それぢや立派なごろつきの旦那、何しろ私たちはお前さんのことを言つたのぢやないのだから。

紳士　いいや、言つた。

B　私たちはただお天氣の話をしただけなのだ。——それがどうしたといふのです

紳士　だからよ。聞いて置くがいいや、な。おれたちだつて、時たまにや遊びたいのだ。——おれたちを何だと思ふんだ。かう見えたつて、お星さまだぞ。

（どこからか、シルクハットの仲間大ぜいどやどやと出て來る。）

（——うす暗かつたのが、急に明るくなる。）

（おかみさんABは取圍まれる。）

AB　（悲鳴）誰か早く來て下さーい！

（彌次馬大ぜい。）

（口々に罵り合ふ。格鬪になる。）

（巡査大ぜい。サーベルを鳴らしながら出て來る。）

おれたちをつかまへて見るがいいや。バグダッドの二の舞ひがしたいのか。

（といふ言葉も聞える。）

（呼び子が一聲鳴る。）

（闇になる。）

（極く短い間。）

（突然に月光がさす。——青い一めんの月光のなかに、今まで倒れてゐた群集が、ひとりづつ目をこすりながら起ち上る。巡査と彌次馬とばかりで、シルクハット組はひとりもゐない。皆、顏を見合す。）

（沈默。）

彌次馬の一人　おれは、あんな花火を見たのは始めてだ！

（群集、空を見ててれかくしに一度に哄笑する。）

酒場の酒臺。

調合人がひとり言を呟きながらカクテルを調合してゐる。

カクテルでは、ナンセンス・カクテルとノンシャラン・カクテルが一等なんだ。誰も飲む奴がないんだから腹が立つ。――そこへ行くとさすがお星さまはええもんだ。――人間なんて奴あ、どいつもこいつも苦(にが)いのか甘いのか（赤い酒瓶をとり上げて）でなけや承知しない。――――一ぺん毒でも入れてやりてえもんだ！

10

（2）の窓。（2）の令孃。

令孃、窓によりかかつて月を見ながら、

この月がもう三十分も早く出てくれれば、わたし、あの方に逢へたのだのに。――ほんたうに何といふ意地の惡い……

（窓の外でナイチンゲールの聲。）

クツキツークウ、クーキツークウ。お孃さん、お天氣の惡口(あくこう)をつくと星にひどい目にあひますよ。クツキツークウ。

――幕――

燕（一幕三場）

老婆　少し氣がへんである
お糸　四十位の女
いさ　老婆の孫。お糸の娘。十二三

1

百姓の家とも漁師の家とも思へる小舍の一室。廣い土間の向うに入口がある。土間のこちらは莫蓙を敷いた板の間である。建物は黑く煤けてゐる。この部屋と奥の間とを仕切る古びた障子には時折焰の影がさす。入口の外は薄明るい。部屋の中は殆ど暗い。入口からの鈍い外光と、障子に映る焰の影とでやつと人物の有様などは認められる。

老婆、年齡不明、女にしては頑丈な體格。しかし中風のやうな病氣で半身不隨になつてゐる。それが板の間の土間に近い所へ坐つてゐる。その側に孫娘のいさが立つてゐる。

戸の外では激しい風の音がして、明けつ放した入口からも時折風が吹き込んで部室の障子が搖れ震へる。

お糸　（彼女は障子の影の次の間から話しかける）いさ！なぜ早くかどを締めんか。そこから這入つて來るんぢやろ、風があふつて危くて火がもされん。

いさ　（母には何も答へずに祖母の耳元で大聲に云ふ）かどを締めんと危くて火をもされんと。

お糸　（いさの言葉につけ足すやうに、叫ぶが如く）障子も何も今に飛んで了ふよ。

老婆　待て、待て、親燕が今に歸つて來るのぢや。それまでかどを開けて置いてやらんと燕がかあいさうぢや。

お糸　（叫ぶが如く）ばさま。何を云ふのぢや、いくら燕かてもうこの暗がりに、そとでこの風に吹きつさらされて何んでうろついてゐるもんか。もうとつくに巢へ歸つたんぢやろ。構はん、構はん。早くかどを締めてままを食べにお出でよ。

老婆　いいや、いいや。親燕はさつき出たきりまだ歸らんのぢや。このしけであれも餌が見つからんのぢや。あれが歸るまで開けて置いてやらんと、あれは歸れんわい。

お糸　（叫ぶ）歸つたのぢや、歸つたのぢや。ばさまは眼が霞んでそれが見えなんだのぢや。それにきまつてゐる。ばさまのとろい眼でこの暗りに燕の番したとて燕のつの字も見えるものかのう。

老婆（半呟くが如く）さうぢやない、さうぢやない。おれはもう毎年毎年かうして燕の番をしなれてゐて、巣立ちする燕をまだ一度も見のがしたことはない程ぢやわ。もう巣立ちして飛んで了ふといふ時には、二日も三日も前から親子の素振りで分るのぢや。今日はこのしけでさへなければ、あれ等は飛び立つ積りぢやつたのぢや。わしには何もかもちやんと見通しぢや、親の燕はさつき行つたぎりまだ歸らんのぢやわい。眼は見えいでも羽音の氣配でもわしにはちやんと分るのぢや。噓ぢやと思ふなら踏つぎと蠟燭とを持つて來て巣の中を覗いて見るがいい。ひよつと歸つてゐるならおれも安心ぢや。門を締めて貰はう。

（この時風特に激しく表口より吹き込む。）

いさ　ばさま。それぢやからしよう。少し——燕の出這入り出來る程開けて置いて外は締めて了はう。どうぢや、それでええぢやらう、のう。

老婆　踏みつぎを持つて來て覗いて見ろ。

いさ　うちにや、そんなものあない。（言ひ乍ら土間へ下りて行く、さうして九尺を二枚で締める頑丈な障子を締める。重さうで立てつけのよくないもの。締め切らずに二三寸だけ隙けて置く）ばさま、これでええぢやらう。（子供の機嫌を取るやうに）ねえ、ねえ、かうやつて置けば大丈夫ぢや。燕は賢い鳥ぢやさかい、こゝから拔けて來るよ。

お糸　さうぢや、さうぢや、さうして置けば大丈夫ぢや、さうして置いて早うこつちへ來てみんなままを食ふのぢや、こんな日は早くしまうてしまふのが第一ぢや。いさよ、いさよ、こちらへばさまを連れて來い。

（次の間に灯を燈したらしく障子が明るくなる。）

いさ　ばさま、（祖母の側に寄り添うてその手を自分の肩に掛けながら）そら立つのぢや。

老婆（不精無精に立ち上る努力をしながら）どよつこいしよつ。

いさ（殆ど老婆と同時に）どよつこいしよつ。

（老婆はいさの肩にすがつて歩き出す。）

2

次の間。高い所から釣りランプが燈つてゐる。ランプの鎖が下つてゐる。薄暗いランプが燈つてゐる。ランプのホヤは上の方は煤けて曇つてゐるが下の方は綺麗に磨かれてゐる。大きな紙製の傘がその上に被さつてゐる。奥の方に火の氣の無くなつた竈が見える。古びた荒壁の上にはいさの古い習字などが張られてある。その傍に佛壇のやうなものが見える。習字の紙は釣りランプの火が時折り風

が入つて搖れる。
三人にしては大き過ぎる木の餉臺に老婆とお条といさとが坐る。

老婆　かういふ晩には火の用心が何よりぢや。
お条　それを知つてゐながらなぜまた早うかどを締めてくれんのぢや。こんな晩に火を焚きたうないと思うたが飯が無くなつて了うたのぢや、今日はいもんがゆぢやぞ。
いさ　ほんたうにえらい風ぢや。
お条　こんな風をうちの中へ吹き込ましては障子が飛んで了ふばかりぢやない。それで無うてさへ潰れたがつてゐる小舍ぢやもの、めちやめちやに碎けて飛んで了ふぞ。（小聲でいさに）表は隙けてあるんぢやらう、しつかり締めて來ておくれよ、――戸も。そつと行かんとばさまがうるさいぞ、ばさまはまるで氣狂ひぢや、燕のこととさへいへば。
（いさ立つて出て行く。すぐ歸つて來る。）
老婆　（いさを見咎めて）どこへ行つて來たんぢや。
いさ　ご飯の前ぢやもの、――途中ぢや惡いと思うて小用して來たんぢやよ。
（三人食事を始める。）
お条　（耳を傾けて）たうとう雨も降つて來た。沖へ出てゐる舟がなければええが、じげには今日は一艘もない筈ぢやが餘所の濱には出た舟もないと限られんわ。毎年この季節にはきつとこんな早風が來るのはどういふ譯ぢやらう。よう忘れんわい、いさ、お前のおぢいさんやとうさんが佛になつたのもこんな風のお蔭ぢやつた。仕方がない、うちばかりぢやないわ。じげから十七艘出た舟が一艘も歸らんのぢや、お前が恰度まだ腹の中にゐた時分のことぢや、
老婆　何をつまらん話を始めたのぢや　子供にそんな話をきかして何になるかよ。
お条　ばさまは氣の强さうなことをいふ人ぢやが、いさ、ばさまはお前が生れた時から（小聲で）少し氣が變になつたのぢや。お前の顏を父さんに見せてやり度かつたとそんなことばかり云つて、氣病をしたのぢや。いつも頑固な强情なことばかり云ふばさまぢやが、大根はやさしい人なのぢや。それでなきや、わしらも迚も辛抱は出來なかつた筈ぢや。
老婆　（耳を傾けてゐたが小聲の話がきこえぬので）お前等は何の話をしてゐるんぢや。
お条　（淋しく笑ひ乍ら）燕の話をしてゐたのぢや。
いさ　（母と同じやうに笑ふ）ばさまが燕の好の話をしてゐたのぢやわ。
老婆　おれは毎年毎年燕の番をしてゐて、巢立ちして飛ん

で行く燕をまだ一度も見逃したことはない程ぢや。燕は旦那衆の軒でなければ來んといふが嘘ぢやわい。それが嘘ぢやなけやこのばばあのうちも旦那衆ぢやわい。

お条　ばさまはそれが自慢ぢや。

老婆　それはさうと親燕はもう來たぢやらうな。

お条　とつくに來てゐるよ。燕ぢやとてこの吹き降りに何んでいつまでもうろ／＼してゐるものか。

老婆　さうぢや、さうぢや。あれは賢い小鳥ぢや。

いさ　波の音が段々強くなるのう。

お条　さうぢや、風が酷いので分らんが風が絶えるとえらい音がしてゐるな。まるで地鳴りぢや。津波でもせねばええが。

（沈默。）

お条　夏蜜柑はみんな落ちたぢやらう。夏蜜柑はしまひぢやさか落ちてもええが、蜜柑は大事ぢや。

いさ　稻は？

お条　稻は大丈夫ぢや。大丈夫ぢや、まだ風に當る程に延びてゐるものかよ。――うちらのやうな芋作りはどんな風でも何の心配もないわい。（さびしく笑ふ）

いさ　（手で額の汗を拭きながら）　芋粥はうまいが食ふと暑いのう。

（いさ食事終り立つて食器の後始末をしようとする。）

お条　構はんとおけ、あしたのことにしよう。（默つてゐる老婆に）ばさま、默りこくつて何を考へてゐるんぢやの。

老婆　（お条の顔を見上げて）　何も考へてないわ。

お条　かういふ晩には早く寢るに限るのぢや。（獨言らしく）　ぢやが、こんな風と波とではおち／＼と睡つてもゐられぬわい。

いさ　橋が流れねばよいがのう。

お条　雨がそれほどには降つてない。

3

翌日朝。風雨の音全く止みたゞ時々昨夜の名殘らしく波の音が聞える。

Iと同じ場面。

いさ老婆を助けて入口の間の端土間に近い所に老婆を坐らせる。

老婆　（呟くが如く）　靜かなええ天氣ぢや。お前等が巣立ちには以つて來いぢや。まてまて、今にかどを開けてやるぞ。

（いさ土間に下り草履をつつかけて表の戸を除ける。その時光線とともに戸外から燕が驀進に入口を潜り拔ける。）

いさ　あツ、あツ。
老婆　親燕ぢやないか。——それ見ろ！
　（燕再び戸外へ翔けり去る。老婆體を捻ぢ向けて梁の上を見上げる。次の瞬間土間を見下す。）
老婆　やツ！（驚駭。沈黙。續いて喚く）お条、出て來い。出て來い。いさ、これを見ろ。
お条　（障子を開けて覗き乍ら）ばさま、なんぢやのう、大きな聲を出して。
いさ　（振り返つて、同時に）やつ。（走り寄つて土間から生育した燕の子を兩手に一杯掬ひ上げて、それを老母とお条との眼の前に突き出す。）
お条　何んぢや！　どうしたのぢや。
老婆　何を言ふのぢや、夕べお前等が殺したのぢや。歸らぬ中に親燕をお前達が締め出してしまつたんぢや、——その留守に子供があばれて落ちたのぢや、知れたことぢや。きまつてゐる。きまつてゐる。
お条　さうかしらん。そんな筈はあるまい。風に吹き飛ばされて落ちたんぢやらう。
老婆　何をいふんぢや。親燕は今戸を開けるのを待ち兼ねて飛び込んで來たわ！
いさ　それはほんたうぢや。
老婆　（始めは强く段々力無げに）お前等はまだ日も暮れ切らん中に燕の親を締出して了うたのぢや。うちの中は暗くてもまだ戸外は明かつたのぢや。——いつも岬へまだ日が當つてゐる時分にでも、このうちは日が翳つて了うてうちの中が眞暗になつて了ふことを、お前等は忘れて了うたか。うちは夜でも空は暮れずに殘つてゐたのぢや。……
　（この時燕再びせはしく入つて來てまた飛び去る。いさ、燕の後を追うて開けかけて五六寸隙いてゐる戸を開けつ放して、戸外へ駈け出す。）
　（戸外は輝くやうな朝。その朝の光の中に空を仰いでゐるいさの姿がくつきりと浮び出し、これにくらべて室内の老婆とお条とはただ黑い影のやうに感ぜられる。）
いさ　（子供らしく手を上げて叫ぶ）燕！　燕！　空一面何處から來たんぢやらう、燕が集つた。
老婆　（低く力强く）知れたことぢや、みんな勢揃ひをして今日は海を越えて立つんぢや。その中でうろうろ子をさがしてゐるのがうちの燕ぢや——見ろもう來年からはうちへは燕は來るものか。
　（無言のお条が最も悄然として立つてゐる。）

屈原（歌曲小品）

第一景

白い光のなかで――

岸には青い楊柳がある。そのかげには小舟がある。小舟のぐるりには鬱陶しく菱と茎(しやうぶ)とが繁つてゐる。舟のぐるりには蘆荻が茂つてゐる。
（一見して夏だといふことがわかる）
舟には、屈原が自分の膝を抱いて坐つてゐる。屈原の頭には奇形な冠がある。山のやうに聳えてゐて、高さは一尺ばかり、その上には夜光の玉が鏤めてある。
舞臺が、急に少しづゝ暗くなつて來る。

第二景

初め黒い光のなかで――
後に青い光のなかで――

屈原が起つて歩き出す。
屈原はたゞ影のやうにしか見えないが、その冠と、またその衣裳とに鏤められてゐる夜光の玉のために、やつとその形が見える。（舞臺が黒いのだ。）
遠景が白くなる――月魄(つきしろ)である。月が出て來る。（但し舞臺には見えない）
（ただこの時、青白い光で初めてはつきりして來る。）
――楊柳もなければ舟もない。菱もない茎もない。
――たゞ枯れた蘆荻があつて、屈原はその岸に立つてゐる。
屈原の衣裳は、乞食の襤褸と同じやうにつゞれてある。
但、その垂れさがつた衣片の端々には、奇異な冠と同じやうにさま〳〵の美しい玉がちりばめられて垂れさがつてゐる。また彼は把(つか)の長い劍を帶びてゐる。この劍の把も鞘も、同じく玉を鏤めてある。

屈原――
（水の面を見つめながら）

汝(なれ)をあざむくすべをなみ
水よ、眞(まこと)をうつすかな
わが面影はやつれつゝ

姿はいたくうつろひぬ
むかしの衣は朽ちはてゝ
われは乞食に似たるかな

（一足歩みながら）
すがた容は變るとも
心はいかで變るべき

（あたりを眺めて）
あゝ、澤の邊の秋ふかみ
淨としてげに愛しけれ
汝がこゝろをこゝろにて
秋よ、わが身も老いんとす

（物音もなく不意に舟が現はれる。）
（その舟の上に漁夫がゐる。）
（舟も漁夫もうしろから月を浴びてゐて、明るい背景のなかに影畫をなす。）

漁夫――
（屈原を呼びかけて）
君は三閭の大夫ならずや
――頸垂れて行くひとよ。

屈原――誰そや、われを呼ぶ……

漁夫――澤に住む漁夫、無禮なれど
君に問はめ、三閭の大夫。
名にし負ふたふとき君の
などかゝる境に至る。

屈原――問はるゝはうれし
答ふるは憂し。
世はみな濁りたれど
われひとり淸みたり。
人みな醉ひたれど
われひとり醒めたり。
身はこの故に追はれたり。

漁夫――聖は萬物にとゞまらで
恒に世とゝもに移るとなん。
君に問はめ、三閭の大夫、
世悉くもし濁りたりとならば

などその泥をにごしつゝ
諸共に波を揚げざるや。
人悉く醉へりとならば
などその糟をくらひ食べ
そが醨をしもすゝらざるや。
いかなれば然は、君
ひとりのみ高くふるまひて
身を追はるゝがごとくなせしや。

屈原——

いなとよ、われはこれを聞けり、
あらたに髪を沐ひし者は
かならずその冠をはじき、
あらたに身を浴ぎし者は
かならずその衣をふるふとなり。
誰かは淸き身をもつて
物のけがれを受けんとはする。
しかじ湘水のながれに赴き
わが慕ふかの濁らざる淵の
魚の腹にしも寧ろ葬られむ。
誰かはよくけがれなき心もて
世のあくたをし蒙るものぞ！

漁夫——

（棹をとりながら）
吁、三閭の大夫、己を捨てず
己を立てゝ苦しみに住みぬ、
流れに逆ふ櫂なれや！
壯んなる人の心は知らで
われら名もなき漁夫、

（舟は動き出す）
身は澤の邊の蘆間にかくれ
いざ舟やらむ、流れのまゝに……

屈原——

（行く舟を見る。手を上げて——）
まて、しばし、漁人、問はん
など然は、にこやかに笑める

漁夫——

（答へず。また舟はとどまらず、やがて消え去り、歌ごゑのみのこる）
滄浪の水
淸める日に
われは濯ふ
冠の紐を

滄浪の水

濁る日に
　われは濯ふ
　　わが足を

（漁夫の唄の聲はだん／＼かすかになつて行き、遂に聞えなくなる。）
（屈原は瞑想してゐる。）
（この一瞬間の靜寂の後に、忽ち、あたりの蘆の枯葉はそよめきわたりつゞいて、今までの平和な水のなかに、激しい風波が起る。）
（月は雲のなかにかくれる。）
（舞臺はしばらくうす暗くなる。）
（湧き立つ水のなかに圓く怪しいものが浮び出る。）

屈原――（劍の把をにぎつて、身構へながら）
　何者ぞ、怪し……

水中の者――（奇異な聲を持つ）
　勿れ、怪しむ勿れ。
（水中の者は背を半分現はす。更に異形の感じを増す。）

屈原――
　螭か？　龍か？

水中の者――
　非ず。魚のみ、唯。
（その尾を現はす。）

屈原――
　魚とや？　何の魚？

水中の者――
　銀鱗巨口長大の魚！
（水中の者は顏を現はす。いかにも魚ではある。）
（但、甚だ荒唐無稽である。）

屈原――
　魚よ、古怪の魚よ、汝。
　何處よりか來れる。汝。

魚――
　流れによりて來れり！　唯。

屈原――
　否とよ、魚よ。
　沅水よりか、白水よりか。

魚――
（表情ある無言）

屈原――
　溱水？　淮水？

九河？ 湘水？
夏浦？ 澧浦？
激渚？ 鄂渚？……

魚―― 止めよ！ 止めよ！
來し方は知らず
われは魚のみ。

屈原―― （おもむろに身構へを解いて）
呵々。魚は魯なるに似たり。

魚―― われは魚のみ。唯、魚のみ
人が名づけし地の名は知らず
來し方は思はで行手のみ見て
たゞ流水を飲めるわれは魚のみ。

屈原―― （凝視しながら）
古怪なる魚よ。古怪に過ぐ。
よも世の常の魚にはあらじ
告げよ、天地に何をか司る？

魚―― 唯、流れのなかに忘却を司る！

屈原―― 忘却？ 忘却!? 忘却!!

魚―― 然なり。よろづの物わが口より來り
わが體を拔けて出で去る時、
物はたゞ形なし。虛無に歸す。
たゞ流水とゝもに虛無に歸す。
われは魚のみ、時の流れに住む。
必ずしもわれは澄める淵のみには住まず。

屈原―― いと古怪なる魚もあるかな。
さても汝、いま何のために我に來れる？

魚―― 汝が呼ばうによりて來れり。
魚の腹に寧ろ葬られむと
汝が呼ばうによりて來れり。
いざ、わが口の門に來れ！
（魚は口をひらく。――思ひがけなく巨い。）
（直徑一間ぐらゐある。）
（屈原躊躇する。）
（魚は口を閉ぢる。）

魚――

屈原――　屈原！　心おびえたるか？
　否とよ、魚よ、たゞためらふ。

魚――　いかなれば汝、然はためらふ？
　さばかり惜しむ汝が命か？

屈原――　否とよ、魚よ、我は惜まず、
　蘆の根に寄る泡沫なれや
　わが現身はあらずともがな。
　たゞに惜しむよ――わが志、
　日々に朽ちゆく埋木ながら
　朽ち果つるまで保ちしものを
　己が命のもしもあらずば
　わが志の亡ぶるは惜しも！

魚――　われは魚のみ。流れに住む。
　人の抱けるこゝろは知らず。

屈原――　われは人のみ。志を抱く。
　わが志の亡ぶるは惜しも！

（この時、今まで雲にかくれてゐた月が出る。「但し、月は舞臺には見えない。たゞ、青白く變化する光線によつて、これがわかる」）

（同時に歌ひ聲「女聲」が聞える。）

歌の聲――　（清麗な聲を持つ）
　なげくなかれ、なれが志
　そがなかのいと淸らけきもの
　みな今わが身に託してよ
　われら後の世によく傳へなむ。

屈原――　（怪しみながら）
　やさしきものよ
　何なれば、かく
　ひかりに滿ちて
　朗かに言ふ？

歌の聲――　月なり、夜はしばし
　天地しろしめす空の月なり。
　世には敗れて人に知られぬ
　尊く淸きものをわれは收む。
　集め收めて、その力もて
　われは永久にかゞやく。

敗れたる者よ、なげくなかれ、
よしなきものはうべ滅ぶとも
汝が清きものはみな殘るめり
　――汝が着るころも糸のみ朽ちて
玉はとこしへにかゞやけるごとく。
舒望よ、いざや積まんわれらが車に、
かのあはれなる者の清き心を、
積み行きて後の世に永く傳へよ。

男性合唱――
積まんかな、積まん
世の清きものを
志遂げぬ尊きものを
積まんかな、積まん
皆こと〴〵く。

女性合唱――
かくてぞわが光
永久にかゞやく、
かくてぞわが光
なぐさめに滿つ。

男女合唱――
見よ、わが照す浪に
にごれるはなし。

女の聲――
舒望よ、積まれたるか
屈原が志。

男の聲――
姮娥よ。積まれて堆し
屈原が志。

合唱――
われらが清き月の車は
永久に傳へ行かん
屈原が志。

(歌は消えて、音樂ばかり殘る。)
(屈原は恍惚として聞きとれてゐたが、喜に溢れて狂舞する――死の舞踏に似てゐる。)
(魚は再び口をひらく。)

魚――
(吼哮するごとく)
いざ、わが口の門をくゞれ！
(屈原は狂舞しながら、天に手を上げて月に會釋し魚の口のなかへ、歩み入る……)

第三景

夕燒の空――

楊柳がある。小舟がある。小舟のぐるりには菱と荃とが繋つてゐる。（第一景に同じ）。小舟の上には舟ばたに屈原がゐる。

屈原のうなだれた頭から、冠が落ちる、水のなかに入る。しかし菱と荃とに受け支へられて、冠は水には没しない。

夕燒の赤い空である。その下に水草の上の冠の玉がかがやいてゐる。

屈原身を起す、稍おどろいて水中を見る。さうして、その冠を發見する。手をさしのべてそれを拾はんとしながら。

屈原——

思ひ屈つしてはおぞましく
つかれ果てゝはまどろみて
わが冠や落ちにけむ。
渚にゆらぐ舟の上に
あやしき夢を見つるかな。
蘆の枯葉とおもふ身の
己が心はうつり出て
夏たけなはの夕ぐれに
秋ゆくさまを見つるらし。
あやしき夢に現はれし
漁人よ、月かげよ
はたはをかしき鱗屑よ……
わが身に何を啓すとや
——こよひは解ん、この夢を。

——幕——

ソロモン王

「人これによりて箴言と譬喩と智慧ある者の言葉とその隱語とを知らん。」

◇

ソロモン王
その后(きさき)たち數人
その重臣たち十數人
既に歸つてゐる六人の船長
今歸つて來た一人の船長
望樓(やぐら)の頭(かしら)
用人數人その他

◇

〔最も樣式的な演出を要求する〕

◇

黑い天鵞絨のうへに紫金青の大きく荒い立縞のある背景。

背景の中央やや高いところに大きな窓が一つ。――青い空が見える。

この窓の下に一群の人物がゐる。圓つて盛上げられたやうに簇つてゐていい。三十人以上。

人物の最も高いところにはソロモン王がゐる。――高齢ではあるがよぼよぼではない。〔ロダンのこしらへたユーゴーの像に似たやうな顏だと思へばいい。〕

王のぐるりには一段ひくく后たちがゐる。七人ほど。その容貌と髮の形とでそれぞれに異邦の婦(をんな)だといふことがわかる。〔パロの女なるエヂプトの婦、これは五十に近い。后たちのうちで最も年長けてゐる。その外には三十前後から十七ぐらゐまで順次に。モアムの婦、アンモニの婦、エドミの婦、シドン及びヘテの少婦など〕

王と后たちとは寶石づくめの著物である。

后たちはそれぞれに腕や肩が現はれてゐた方がいい。――圓いのやら、少し萎びたのやら、眞白いのやら、やや黑いのやら、艶やかなのやら、傷ましいのやら。

后たちの更に一段下には王の重臣たち十數人。〔大臣、侍從、書記官、史官、軍長など。〕

重臣たちの足もとには這ひつくばうた者どもがゐる。六人の船長及び數人の用人たちである。

高いところの人物は、それぞれにその下にゐる人物のために下半身がかくれてゐて上半身しか見えない。さ

うして人物は一個の群像のやうである。この群像のぐるり適當なところに、まだともされてない數十の燭臺がある。金で出來てゐる。右手には望樓に導く螺旋形の梯子の一端が見える。象牙で出來てゐる。左手に扉がある。

◇

（暫く無言の後に。）

王 （靜かに）船はまだ見えないのか。

（最も低いところの者ども――船長たち用人どもは、床の上に接吻するほど身を屈めて敬禮する。）

（若い用人が起つ。立つて改めて敬禮する。（立つて行はれる敬禮は一種舞ふやうな身ぶりである。）

（若い用人は梯子を昇つて行く。）

（やがて歸つて來る。再び立つて敬禮をして、さて這ひつくばつて。）

若い用人 水の涯にもまだ陛下のお船の帆の影は見えないと申します。

后たちの一人 （美しい聲）まあ一たいどうしたと申すのでせう。かうして今日は暮れるのでございませうか。もしや船の路に颶風でもあつたのではございますまいか。

王 いや、そのやうな筈はあるまい。わたしは昨日も一昨日も、その前の日も、雲と星と月の出入とを見てゐた。潮の音を聞いてゐた。しかし、われらが考へられるかぎりの樣子では、われらの船が來るあたりが、そのやうな惧れに陷入つたらうとの何の徵も見られない。……

船長たちの一人 （敬禮して）まことに陛下の仰せられるとほりでございます。

王 それにわたしは、もう永い間、遠くで嵐に會うて逃げかへつたらうと思はれる姿をした海鳥は、一羽も見たこともない。だからわれらの目と智慧とがとどく限りでは、われらのえらい船長といい船とを掠めるやうな恐しい嵐は、海の上には無かつたらうと思はれる。

船長たちの一人 （敬禮）まことに陛下の仰せのとほりでございます。只今が、最も海の平和な期節なのでございます。お案じ遊ばされずとも、陛下のお船は今に間もなく、勇ましくここへ歸つて參ることと思はれます。陛下がお待ちかねの者は、わたくしどもの仲間ではその考もその技も、一ばんすぐれた者でございますから、陛下の篤い御信任に決して負く者ではございません。間違ひもなくこの入日の間際の滿潮に乘つて參ることでございませう。

（この時、梯子を下りて望樓の頭が降りて來る。立つて敬禮する。）

望樓の頭　（喜びの聲で）　陛下のお船は、只今水の面に帆影を現はしましてございます。

（人々歡聲をあげる。）

（王はうなづく――微かに期待の表情。）

（望樓の頭、敬禮。梯子を昇つて歸つて行く。）

后の一人　（早口で）　それにしても、陛下のお船はどんな寶物をもつて歸るのでせう。

最も若い后　わたしは孔雀と猿とを賴んであります。眞紅で伶長（うたのかみ）のやうに歌へる孔雀と、人間と同じ言葉で自分の心持を話しする猿となのでございます。――わたしは猿に聞いてみたい事があるのでございます。――普通の孔雀や普通の猿などならばもうしかたがありませんもの。

王　（微笑）　わたしはまたそんな變つた孔雀や猿があるだらうとは思はなかつた。

最も若い后　われらの王樣が御存知遊ばされないと仰せられるなら、とてもさういふものは無いのでございませうか。

船長たちの一人　（敬禮して）　レバノンの香柏から墻に生える苔のことまで、また空を飛ぶもの、地に歩くもの、水をくぐるものの何をでも悉く御さぐりなされた陛下でさへもお聞及びなされない生きものでございます。どうぞおあきらめ遊ばして下さいませ。いつぞやお望みを承つてわたくしどもも、もう力の及ぶかぎりはお盡し申し上げたのでございました。今日、歸ります者とても到底、お望をお滿たせ申し上げられようとは存ぜられません。同じ仲間の者のために、これは豫め御詫びを申上げて置かねばなりません。

最も年とつた后　（たしなめる人の權威を持つて）　そんな猿や孔雀や、なぐさみものなどはどうでもいいのです。わたしは陛下とわたしとの命を燃えさせるお酒が欲しいのです。

王　（微笑）　わたしはそんな珍重な酒があつたとは聞かない。

最も年とつた后　われらの陛下がさう仰せられるならば、陛、とても遂げられない望でございませうか。

王　さうだ。われらの命は夕づく日かげのやうなものだ。

最も年とつた后　それでは今日のお船の長は一年も餘分に國々の港をめぐり歩いて來て、一たい何物を陛下に獻じようといふのでせう。

船長の一人　恐れながら申し上げます。わたしどもが考へまするところでは、陛下の御殿のなかに無いほどのものならば、世界のどこの涯を搜しても恐らく無駄であらうかと存じます。いや、いや。陛下の御殿にだけはあつて、外にはもうどこにもないものの方が多分、多からうかと

存じて居ります――陛下の御智惠を初めとして……。

最も年とつた后　けれども（重臣たちを顧みて）――史官！

史官（敬禮。恭しく）何事でございませうか。

最も年とつた后　今日歸るといふ船の長が、一年前に、仲間のものどもと最後の港で別れる時に、仲間たちに何と申し傳へさせたか、その言葉をもう一度讀んでみては下さいませんか。

史官（大きな書物を兩手にひらく。恭しく讀む）「わが友よ、歸りてこれを陛下に告げ奉るべし。哀れなる地の上にはも早、陛下のみ心を悅ばせ奉るべき寶は盡きたるが如し。われは國々の港を經廻りたれどもつひに一つもこれを得ること能はざりき。われは陛下のみ心に協ひ奉らぬことを恐れて、今ひと度國々をさぐらんとす。ものの數ならぬ命かけて陛下が僕は、今一年の後には、この度こそ必ず陛下の爲めに陛下の宮居になくてかなはぬ至寶を捜し求め得て、陛下の貴き御足の下に跪くべし。至寶のありかすでに知られたれば、陛下が僕はすでにこころに期するところありて、伏して一年のおん暇を乞ふものなり。」

最も老いたる后（船長たちを見下して）それごらんなさい。今日のお船の長はわたしたちの陛下に、固く誓を立ててゐるではないか。ちやんと目あてがあつてこの上ない寶を陛下に差上げようと言つてゐるではないか。お前たちはその者の手柄を嫉んではならないのだ。

船長たち（敬禮）恐れ入りましてございます。

（船長たち互に囁き合ふ。）

（望樓の頭、梯子段を下りて來る。立つて舞ふが如く敬禮。）

望樓の頭　陛下のお船は矢のやうに近づいて參ります。風を一ぱいに孕んだ百の帆は入日をうけて金のやうに輝いて居ります。お船にはめでたい三角の最も大きな紅い旗を揭げてございます。

（王うなづく。）

（望樓の頭、敬禮。立ち去らんとす。）

軍の長　待て！　お船はもう喇叭のひびきの聞えるあたりまで近づいて居るか。

望樓の頭　多分、今少し近づけば聞えるでございませう。

軍の長　それならば充分に近づいた時には、喇叭を吹くがよからう。それから漕ぎつかれた者どもを勵ませよ。陛下がお待ち兼ねのことを舟子どもに知らせよ。またお城の者どもにはお船の近づく事の相圖にもなるだらうから。

望樓の頭　かしこまりました。

（望樓頭は再び敬禮して去る。）

王　（人々、希望ある沈默を味ふ。）わたしはまるで子供のやうにこの船を待ち兼ねてゐる。といふのも、これがわたしの見ることの出來る最後の船かも知れないからだ。あと二年しなければこの次の船は港を出ない。さうして三年しなければ船はわたしのところに歸つては來ない。その時どんな珍重なものや好い消息を齎さうとも、わたしはもうこの世にはないかも知れないのだ。

后たち　（口々に）不吉なことは仰せられないがよろしうございます。

王　いやいや。わたしにとつては何の不吉でもない。人が最後に知るところのものを見ることが出來ると思つて樂みなのだ。全くもうこの地上には、さして變つたことや特別なものも無いと見える。

（喇叭鳴りひびく。以下しばらく喇叭の聲聞ゆ。）

（人々、喇叭に耳を傾ける。）

王　（王は一瞬間だけ注意をして、やがて言ひつづける。）思へばわたしが始めて、エドムの土地の紅海の濱邊のエテラに近いエジオンゲベルでヒラムの僕たちに船をつくらせたのは、もう二十年もむかしの事であつたらう。彼等はオフルからたしか四百二十タランの金をわたしへの土産に持つて來てくれた……

史官　（大きな書物を開いてページをくりながら）一々、陛下の御記憶のとほりで居らせられます。

王　（微笑）物忘れをしないのがわたしの病氣だ。

（若き后たち無意味に笑ふ。）

最も老いたる后　あのころのことを言へば、シバの女王は、あの美しい娘のやうな女王はその後どうなされたのか知ら。――わたしもあのころは若かつたのです。

最も若き后　シバの女王とやらはこの上ない美しい方だつたさうでございますね。

最も老いたる后　ああ、（笑）あなたよりももつと美しかつた。――陛下は（笑）わたしに氣を揉ませたものですよ。陛下はわたしをいやがつてわたしが何か申上げるといつも屋根の上に逃げておしまひなされたものですよ。

（人々、笑ふ。）

王　（苦笑）まつたく、爭ふ婦と一緒に部屋にゐるくらゐならば屋根の隅にをる方がいいのだ。――わたしはただシバの女王の話が面白かつたのだ。あれほど物好きな女も稀らしい。あの女は智惠のある年寄を見たいといふが望みで、わたしを見物に來たのだからね。……何にしても、むかしはよかつた。タルシシの船が出來たころには、世界にはまださまざまな夢も寶もあつたものだ。面白い

好い消息もあつて、わたしは國々の變つた話を、まるで渴いた者が泉から飮むやうに樂んだものだ。――わたしにもちよつとでは理由のみ込めない出來事の噂も隨分とあつた。――その頃の事を思へば、世界は今、全く貧しいちつぽけなものになつてしまつたものだ。

大臣 にして王の友なるザブタ　陛下　御言葉ではあるがさうでは御座いません。陛下が世界中の寶と智惠とを、殘らず陛下の御身のまはりに寄せ集めておしまひなされたのでございます。

王 ――つまりは同じことではないか。

（喇叭、一きは高く鳴りひびく。）

（望樓頭、降りて來る。立つて敬禮する。）

望樓の頭　陛下のお船は只今着かうといたして居ります。

（この言葉とともに、窓の外に大きな船の檣頭とその上にある大きな三角の紅い旗とが現はれる。）

（旗は夕風のなかでひら〳〵とはためき飜る。最後の入日をうけて輝いてゐる。）

（人々、喜びざわめく。）

（歸つて來た船長、ひとり扉を押して入つて來る。扉の前に跪く。這ひつくばうて敬禮する。）

（王は手を擧げて迎へ、招く。）

大臣　陛下の御許しが出たから、ずつと近づくがいい。

（歸つて來た船長、這ひながら進み寄る。）

（彼の上に人々の注視が集る。）

（彼はひどく悄然としてゐる。）

大臣　お前が遠い異邦から持つて來たものを、殘らず、早くここへ運ばせたがよからう。

歸つて來た船長　……（無言）

大臣　言上すべきことはすべて躊躇なく申し上げたがよからう

歸つて來た船長　……（無言

大臣　陛下は先刻からずつとお待ち兼ねでゐらせられる。

王　言へ。わたしにどんな寶を持つて來てくれたか。

歸つて來た船長　陛下。陛下のお船は何物も持つては參りませぬのでございます！　陛下の宮殿に無いものは、ただ希望だけでございます。――この一年の間、陛下の僕は陛下に希望を差上げたのでございます。

（人々、沈默に落ち入る。）

（この間に滑車の音、カラ〳〵とさびしくひびいて窓外の旗は檣頭からおろされる。）

軍の長　（起つ。激越なる調子）陛下　斬りすてませう、この者を！

王　（靜に）ともかくも、灯をつけよう――暗くなつたではないか。

（數十の燭臺には、二人の用人の手によつて左右から一つづつ灯をともされる。）

王　（微笑）歸つて來たわが船の長。お前はわたしにわたしの無くてかなはぬものをくれた。ともかくも一年の間、わたしは夢と希望とを持つた。さうして今は失望を！この一年の間、わたしは久しぶりに生きてゐたやうな氣がする。（顧みて）史官！　この事を記して置け――ソロモン年老いて、愚なる者となり得て纔に生きたり！と。

最も年老いたる后　陛下。あなたは今日はほんたうに智惠のある方のやうにはお見えにはなりません。

王　そのとほりだ。おまへたち澤山の婦どもが、それぞれにあまりに澤山の世界を見せ澤山の神をわたしに敎へたからだ……

（人々、王の言葉を解せずに、ただ無意味に空虚に笑ふ。）

（王は最も嚴肅な顏をしてゐる。）

――幕――

彼者誰（一幕）

景中の人物

病的な人
その細君
健康な人

噂に出る人物

保田
峯子　保田の妻君
西岡
久保

大阪。川に沿うた或る宿屋の一室。
晩秋。——灯のともる前後のこと。

病的な人は宿屋のどてらを著てゐる。
健康さうな人は背廣服を著てゐる。
彼等ふたりとも三十二三ぐらゐ。
細君は二十二三。くつきりした顔立。淸楚な透明な感じ。極めて柔順な態度。

健康さうな人は今この部屋へ来たらしい。
細君は座ぶとんなどをすすめてゐる。

健康な人　（坐りながら）で、何かい。まだ二三日はゐるつもりかい。
病的な人　………
細君　それがでございますよ。急にいやになつたさうにございまして。海が心細いやうに申しましてね。今朝などはまた東京へかへりたいと言ふのでございますよ。
健康な人　へえ？　どうしてまた。海と言つてもほんの八時間かそこいらでせう。（病的な人に）それに靜かな天氣ではないか。ここはいつもかう曇つたやうなのだぜ。
病的な人　………
細君　え、船のことは、ともかくも、海岸に住むのはいけないと氣がついたのださうで。遠い水平線を毎日見るのはいやだと申しましてねえ。
病的な人　さうぢやない。單にいやなのぢやない。僕のからだのためによくないのだ。
健康な人　西岡の別莊は、しかし——
病的な人　（遮る）君、別莊ではないよ。ほんの果樹園のなかにある小舍だよ。

健康な人　さうかい。それぢやその小舍だが、そこは一たい山の方だといふぢやないか。そこから、いつかまだ學校の時分に、手紙をもらつたことがあつたが何とか山房と書いてあつたぜ。
病的な人　曆枝山房さ。
健康な人　だからさ。山ならばいいではないか。西岡がすすめるんだものきつと君の氣に入るよ。我々の連中ぢや、君と西岡ががらにない詩人だ。前から氣が會つてゐたね。
病的な人　…………
健康な人　それにあの邊はきつと溫いよ。閑がある身分なら、奧さん、僕もお伴をしたいくらゐですよ。
細君　ほんたうにそれだと、主人もどんなにか樂しいでございませうにねえ。ほんたうにお暖かですつて。十一月の半には、もう水仙が咲くつて、西岡さんのお話でございましたわ。
健康な人　いいな。……どうだい、君、今さらそんなことを言はずに行つてみたまへよ。
病的な人　暖いのはいいのだ。——海がいけないのだ。——海の空氣はいけなくない。——海を見ることがいけないのだ。
健康な人　だからさ。海を見なければいいだらう、山の方ばかり見てゐれば。（笑）ねえ、奧さん。

細君　…………（微笑、さびしいが自然なるもの）
病的な人　（彼女等の笑ひに誘はれること無しに、この人の言葉は常に感動を拒絕する如き口調）そんなわけに行くものか。山のなかにあつて海が見えるのだ。見えれば見たくなるよ。——誰が片方ばかり見つめて暮せるものかね。それに僕は海が好きなのだ。——その好きな海を見てはいけないのだ。——あまり遠すぎる景色は、そのうへにそれが單純だと來ては、神經には害になるのだ。——さういふことを書いた本を僕は見たことがある。
健康な人　でも、ここまで來たのだものね。それに西岡にも惡いやうだなあ。
細君　せつかく御親切に御心配下さつたのですものねえ。
病的な人　さうだ。それはよくない。
（間）
健康な人　（細君に）え——何とかいふところでしたねえ
細君　船は串本とかで下りますさうで、潮ケ岬の近くでございますつて。
病的な人　潮ケ岬ではないと言つてゐるのに。潮の岬といふのだよ。西岡がさう敎へてくれたぢやないか。潮ケ岬と言つたのは俺の間違ひだ。西岡が言ひ直してくれたぢやないか。地名だからめちやを讀んではいけないのだ。

細君　（從順な微笑）ほんに、さうでしたわ。
健康な人　は、は、は。けふはだいぶん機嫌が惡いやうだね。
病的な人　………（ごく無意味な微笑）
細君　お天氣がはつきり致しませんものですから。主人はカンカンと照るのが好きなのでございますわ。
健康な人　それは誰しもその方が愉快ですなあ。（病的な人に）まあ、しかし氣が進まないなら急いで行くこともないさ。少しここで遊んだらいいぢやないか。奥さんをつれて紅葉でも見に行くがいいよ。さうして行きたくなつたら紀州へも行くさ。（思ひ出したやうに）さうさう、奥さん。どこかお出かけのところぢやありませんでしたか。私にはどうぞお構ひなく。
細君　よろしかつたのですわ。用事ではございませんの。歩きがてらそこまで、手紙を入れて來ようと思つてゐました――あまりちよいちよい女中さんたちを氣の毒だと思ひましてね。いつでもいいのんきな手紙なのでございますよ。
健康な人　はあ。――でも、せつかくですから行つていらつしやいませんか。その間に僕は御主人と內緒話をしたいんだがなあ。（哄笑）
細君　おや、私にもうかがはせて頂きたいこと。（笑）

病的な人　（顏を上げて、先づ彼を、それから彼女を見る）
細君　それでは、わたし、ちよつと御免を蒙つて出てまゐりますわ。ね、あなた。
病的な人　………（うなづく）
　（細君、立つて隣りの間へ行くのを呼びかけながら――）
健康な人　外は案外さむござんすよ、川風で。
細君　（こごんで襖間をあけながら、ふりかへつて）さやうでございますか。では手袋をしてまゐりませう。（出て行く）
病的な人　君は保田や峯子さんの噂をしようと思つたのだらう。それであれを退席させたのだね。それには及ばなかつたのに。
健康な人　奥さんは知つてゐるのかい。
病的な人　知つてゐるどころぢやない。君が今からその話をしようといふことまでも知つてゐる。
健康な人　どうして？
病的な人　僕は君が這入つて來た時から、君の今日の用事はちやんと知つてゐるよ。――あれがけさ敎へてくれたものね。
健康な人　へえ？

病的な人　あれの言つたとほりの事ぢやないまでも、何かそれに關係のあることがあるに違ひないことはわかつてゐる。あれはね、峯子さんがここへ尋ねて來る夢を二晩も見たのだ。

健康な人　君の細君は峯子さんを見た事がある？

病的な人　ない。だがいろ〳〵樣子を聞くと、どうしてもそれが峯子さんなのだ。――だからをかしいのだ。（障子に嵌まつたガラス越しに外を見る――遠く）君、あの女はね――僕の家內さ、あれは不思議な女だよ。これから起ることを、それに大變似た事を何でも知つてゐるのだ。夢で見るのだ。――だから、僕は毎日あれに夢がたりをさせるのだ。――あれの母の妹は落ちぶれて田舍で巫女をしてゐるさうだが、あれも不思議な官能を持つてゐる。僕は時々、ぞくつとすることがあるよ。――あれの妙な美しさは、――いつも月の光で濡れてゐるやうな美しさは、さういふ妙なところから來てゐるのだよ。君の前だが。（ガラス越しの外を見る――遠く）

健康な人（しばらく相手の横顏を見る）――要するにそれぢや、細君は峯子さんのことは知つてゐるんだね。

病的な人　それは噂ででも知つてゐるようさ。僕も話した。それに今あの人がここに住んでゐることもねえ。――だから、何もあれに內緖にすることはなかつたのだ。それどころか、あれは今、君と僕とが何を話してゐるかもちやんと知つてゐるよ。――だから、君はあの女をなにも外へ出すことはなかつたのだ。君は困つた事をしてくれた。（外を見る）――あの女はまたすつかり鎧戶をおろすよ。

健康な人　え？　どうするつて？

病的な人　あの女は自分の心を閉めきるんだ。すつかり鎧戶をおろして、その隙間からぢつとこちらの心を覗くのだ。さうしてあの女は石になる――大理石にね。（ガラス越しに外を見る――遠く）

健康な人（相手の顏をためすやうに見る）それや一たいどういふことだい。

病的な人　すつかり冷たくなるんだ。――いや、それが、決して反抗的ではない。――何も拒まない。それで、ただそれだけの事なのだ。――大理石が鑿のとほりになるやうに。さうして何の曖かさもない。――僕は一人ぼつちで放り出されるのだ。

健康な人　君のいふことはどうもあまり詩的で、僕にははつきりわからないが、君、君がそんな氣がするのぢやないのかい。君がさう思ふのだよ。

病的な人　さうさ。僕が思ふのだらう。さうして、世界の事は、何だつて、誰だつてみんなさう思ふのだらう。思

ふだけだらう。

健康な人　なるほどこいつはむつかしいな。その相手はちよつと僕にはむかないな。――ともかくもそれは詩人のかゝる病氣さ。

病的な人　（ガラス越しに外を見る――遠く）何もかも今にわかるよ。（間）……君、君にだけ僕の祕密をいふが、あの女は、あれは二重人格だぜ。――僕を惱ますのはそれだ。――それが僕を憂鬱にするんだ。――今にわかるよ。あれが今に歸つて來たところを見たまへ。心が石になつて、表情までが大理石像のやうに硬ばつて……

健康な人　………

病的な人　君は信じないね。言葉では判るまいよ。今に歸つて來たらよく見たまへ。――さつきこゝを出て行く時から、あれはもう第二人格を現はしてゐた。君は氣がつかなかつたのかい。

健康な人　（相手を疑はしげに見ながら）いいや。

（間　病的な人は、やつぱり時々、ガラス越しに遠く外を見る。）

健康な人　……時に、話は違ふが、君は久保を知つてゐるかね。おぼえてゐるかね。

病的な人　あゝ、あの同期生のだらう。あの久保だらう。どうして？

健康な人　あれが、今、やつぱりこちらに來てゐてね。

病的な人　（全く無興味に）ふうん。

健康な人　君のことを噂すると、逢ひたがつてゐたぜ。逢つて話したらどうだい。久しぶりだ。

病的な人　僕はあの男は好かない。あれはバルガーな男だ。

健康な人　さうかな。無遠慮な奴だが、面白いがね、快濶で。さう／＼、君が氣分が重くつて西岡の別莊へ養生に行くのだといふとね……（しばらく躊躇してから）君があんまり奧さんと仲がいゝからだらうと言つてゐたよ。ハ、ハ、ハ。

病的な人　（相手の言葉には殆んど注意を拂はずに、小聲で呟く）……

健康な人　え？　何か言つたかい。

病的な人　保田の話を早くしたまへ。

健康な人　あ、保田も君がここへ來た事を知つてゐるよ。久保が言つたのだらう。――先生たち同じところへ勤めてゐるからね。保田が久保を世話したのさ。

病的な人　（無興味に）ふふん。

健康な人　保田がね、久しぶりだから君に逢ひたいと言ふのだよ。君、逢つて見る氣はないかい――久保や僕やみんなして。奧さんを見せてやり給へよ。

病的な人　（外を見てゐた目を相手に向けながら）保田

が？　保田が僕に、僕に逢ひたい。君、嘘を言ひ給へ。でも、保田が僕に逢ひたいなどといふ筈はない。もしそんな事を言ふなら、それは保田の虚榮心だ。あの男は君、年月が經つほど僕が憎くなる筈なのだ。

健康な人　そんな莫迦なことはないさ。どんな事だつて年月が經てば濟んでしまふよ。水はどん／＼と流れたぢやないか。

病的な人　澤山の水は流れても、その中に流れないで立つてゐる岩がある。――君は知るまいが、保田は峯子さんと僕とをだましたのだ。うまくだまして峯子さんを自分の方へつれて行つたのだ。目隱をして、こつちが南ですよと言ひながら、無理に手を引いて北の方へつれて行つたのだ。僕は知つてゐる、保田は峯子さんが自分のものになればなるほど、あの時の彼自身が鮮やかにきつぱりと思ひ浮ぶに違ひない。あの時は手段を擇ばなかつたが、今になつたならば擇びたかつたらう。さうして僕が憎くなるのはわかつてゐるのだ。

健康な人　（當惑げに）　さういふ理窟になるかな。

病的な人　さうだよ。だから保田が僕に逢ひたいなどといふ筈はないさ。君、おせつかいはやめたまへ。君は保田のところへ行つては、僕が保田に逢ひたがつたやうなことを言つたのだらう。僕には保田が逢ひたがるやうに言ひながら。ふたりを結局君がだまして、――あの時保田が峯子さんと僕とにしたやうなことをして、今度は反對に仲なほりをさせようといふのだね。

健康な人　君のやうにさう何もかも氣をまはしては困るなあ。

病的な人　いいや、君が何と言つても保田はそんなことを言ふ筈はない。僕はあの男をよく知つてゐる。（突然、言葉を切つてガラス越に外を見る）

健康な人　何だつてさつきから、さう外ばかり見るのだい？

病的な人　――で、峯子さんも知つてゐるのかい、僕がここにゐることは。

健康な人　さあ、もしかすると久保が話したかも知れないね。

病的な人　――それでわかつた。やつぱりさうだ。峯子さんはもう二度もここへ來かけてゐたのだぜ。――おとつ日もきのふも、夕方にね。ちやうど今時分。――川の向ふのあの道を通つた。さうしてたうとう來ずにしまつた。――その姿なら僕は見た。――それを知つてゐてあれは――ちやんと夢に見たのだ、二日も。（外を見入りながら）――まるで魔法使ひだ。……やあ（突發的な感激。立つ）　峯子さんが來てゐる！　（傍に來てからあつたら

しい双眼鏡を持つて。障子を少しあける。双眼鏡を目にあてて覗く。――健康な人も同じやうに立つて障子をあける）

（遠景――二十間ほどの向岸に、川沿ひの片側町。）

（灰いろの大きな石造建築物とそれに附屬する長い石塀。）

（落葉した並木。）

（未だ輝きを現はさない街燈。）

（夕ぐれの曇つた空、水の反映。）

（すべて透明で白つぽい寒い景色。）

病的な人　（双眼鏡に見入りながら）やあ、お辭儀をしてゐる――

健康な人　どれ〳〵。どこに？

病的な人　（見入りながら）そら、ちやうど我々の眞向ふだ。

健康な人　――どれ、ちよつと僕にも見せたまへ。立つてゐる人かい。――はつきり見えない。

病的な人　（双眼鏡を渡す）

健康な人　（覗きながら）成る程、こつちを見てゐるね。黒い手袋をしてゐる。……峯子さんなものか。だが、――見たことのあるやうな人だが……おや……（愕然として、目から眼鏡を外す。病的な人を凝視する）

病的な人　さ！　も一度それを貸したまへ。

健康な人　は、は、は、（一種の笑）何を言ふのだ。さあよく見たまへ。（双眼鏡を返しながら）君の好きな人には違ひないが、あれは峯子さんなものか！　（手を上げて、遠くの人に相圖をする――去れと）

病的な人　（相手の言葉に耳を借さずに眼鏡をのぞき込みながら）あ、歩いて行つてしまつた。（視野をおもむろに變へながら）橋のうへの人ごみへ雜つてしまつた……

健康な人　（不氣味さうに）君、もうよしたまへ。こんな誰そ彼時に、あんなに遠くの人の顏や姿が見わけられるものかね。（相手を憫み勞はるやうに）ね、もう坐りたまへ。そこが開いてゐると寒いから……

（病的な人坐る。健康な人障子をしめる。後者は前者のうなだれてゐる姿をぢつと見入る――永い沈默。）

細君の聲　（次の部屋から）おゝ、ほんたうに寒いこと。

病的な人　（低い聲に力をこめて）あ！　あれが來た。――君！　僕を苦しめるあれの第二人格をよく見給へ！――あの聲がもうそれなのだ。（言ひながら部屋の電燈をともす）

（夕方の光りと灯の光とが交錯する。）

（細君入つて來る。――黒い手袋。）

健康な人　や。おかへりなさい。——お寒かつたでせう。

（細君を見る）

細君　失禮をいたしました。——ほんたうに川のところの寒うございますこと。東京はまだこんなぢやございませんわ、きつと。——（極めて無邪氣に）よく私をお見つけ遊ばしたことね。わたしがお辭儀を申し上げたのがわかりまして。——わたし、序に川の向ふへ行つて、こちらがどんなに見えるか眺めてゐましたの。——おふたりで障子をあけてわたしを御覽遊ばしたでせう。

健康な人　（病的な人に注意しながら、こつそりと强くうなづきながら）何しろ、もう薄暗がりではあり、遠くもありますからね。何だかあんまりはつきりしませんでしたよ……

病的な人　（健康な人の言葉を遮つて、險しい口調で、細君に）何だ！　お前は。手袋をはめたままで失禮ではないか。

細君　（夫の口調に別に驚かずに）おや、まあどうしませう。ついうつかりして。御免下さいまし。

（慌てて手袋をとる細君を、健康な人はよく見る——彼は彼の女の言葉と動作とのなかに最も自然な從順を見るだけである。）

健康な人　……（病的な人を見つめる）

病的な人　（健康な人に）ね、どうだ。君はまさか僕を氣違ひあつかひにするつもりではなからうね。

健康な人　（相手を劬はる口調で）何を言ふのだい、君は。——ただ僕はさつき君、君は詩人のやうな病氣にかかつてゐると言つただけぢやないか。

病的な人　（うなづく）全くさ——たつた一ぺん自分の女房の顏を夕やみのなかで外の女のと見そこなつたぐらゐなことで、氣違ひにされちやひどすぎるからな、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。（笑。長い笑。その笑は、しかし、狂人のものに非常によく似てゐる。その陰氣な大笑のうちに）

——幕——

犬養健篇

家鴨の出世（四　幕）

出て來る鳥

家鴨の末つ子
家鴨の母親
家鴨の小さい姉さん
家鴨の兄。一、二、三、四
家鴨の祖母
隣りの七面鳥　（コック頭（かしら）のやうな身形）
七面鳥の子どもたち
そのほか家鴨の近所の鳥大勢
遠い山のなかの鷄の爺さん　（オランダ風の百姓の身形）
鷄の婆さん
覆面の鳥　（中世紀の武士の身形）

（出て來る鳥は額を除き、すべてそれぞれの特徴を持つた羽で身體を包む。足のかたちもこれに準ずる。そして服裝は、羽をあまり澤山隱さぬやうに着こなして貰ひたい。）

舞臺裝置

第一幕　第一場

舞臺のやゝ右手寄りに家鴨小屋の切斷面を見せる。小屋のそとは一面に桃いろの幕でふさぐ。

第一幕　第二場

家鴨小屋の切斷面にそのまゝ戸口と壁とをはめ込み、桃いろの幕を落してそとの草原を見せる。春の花と春の鳥とが要る。

第　二　幕

秋。川べりの牧場の風景が前の場よりも廣く見られる。しかし舞臺の都合によつては、前の場で桃いろの幕を落す時に、すでに第二幕の景色を見せてしまつてもいい。

第　三　幕

大きい爐と、皿を澤山飾つた棚のあるオランダ風の百

姓家。照明ははじめ暗く、だんだん明るくなる。

第四幕

第二幕のとほり。清清しい春の明け方の淡い色どりが要る。

時　われわれが空想を欲してゐる時

第一幕

第一場

それは春さきの出來事でした。或る長閑な川べりの家鴨小屋のなかでは、母家鴨がいま鉢卷をして一生懸命に卵を一つあたゝめてゐます。傍にはいま孵つたばかりの子家鴨たちの卵の殼がちらばつてゐます。そとではその子家鴨の賑やかな聲が響いてゐます。そこへ眼鏡をかけた祖母家鴨が入つて來ます。

祖母　お前なぜそとへ出ないの。子供たちははじめて廣いところへ出たので大喜びだよ。あんまり世界が明るいので、驚いて目をきよときよとさせてゐるよ。

母親　(不愛想に)さうお。

祖母　ほら。あんなに聲がきこえる。もう言葉までおぼえたのだよ。ピイピイ云つてね。それは可愛いよ。わたしも長生きしてたうとう孫の顏が見られたのだね。うれしくつて涙が出るよ。お前も出て御覽なね。

母親　(少しプリプリして)でもまだ一つ孵らないのですもの。

祖母　まだ？　大變かへりのわるい卵だねえ。どれお見せ。おやおや。これは妙に大きいね。これはもしかすると七面鳥の卵かも知れないよ。

母親　まさかお母さん。

祖母　えゝえゝ。きつとさうですよ。家鴨の卵がこんなわけはないよ。お前はまた、うとうとしてゐる間にだまされましたね。あの無精者の七面鳥がその間にそつとお前に抱かせたんだよ。さうだとも。家鴨の卵でこんな變なのが今までにありましたか。

母親　それもさうですけれど。

祖母　さあさあ。こんなえたいの知れない卵をあたゝめるよりか、外へ出て子供たちでも遊ばしておやり。

母親　でもこれがやつぱり家鴨だつたらかあいさうですわ。

祖母　ところがそんなわけはないさ。かりに家鴨だつたとしてもこんなに遲く孵る子にろくなものはないよ。(そとで一層賑やかな聲が聞える。祖母はにこにこして)よ

し。よし。みんなでお祖母さんをおよびかえ。いま行きますよ。いま行きますよ。さあお前もおいで。

母親　いえ。わたしは行きませんわ。

祖母　なぜさね。馬鹿正直といふ事はちつとも自慢にはならないよ。

母親　それでもわたしはこの卵が何だか可愛いのです。この變てこな卵をあたゝめるのが何だかなほ樂しみなのです。お母さん。どんな子どもが孵るでせう。それに孵りが遲いと云つても、もう今まで我慢した事ですわ。それを思へばもうちつとの辛抱ぐらゐ何でもありませんわ。

祖母　だがまたあの七面鳥に一杯喰はされるかと思ふと口惜しいよ。いくら七面鳥が、この庭での親方だつてね。

母親　それだつてよろしいぢやありませんか。さうすればわたしが孵した七面鳥の子はきつとわたしになつきますわ。乳兄弟の家鴨仲間ともきつと仲よしになりますわ。そしてこの庭では前よりも喧嘩がへりますわ。どぜうの骨が臺所から飛んで來ても、きつと讓りあひをいたしますわ。さうなればいくらあの傲慢な七面鳥さんだつて、家鴨の馬鹿正直もなかなか馬鹿に出來ないことをさとりませうよ。

祖母　やれやれ、お前のひとり合點にもあきれるよ。

母親　（耳をすます）　お母さん卵の工合がどうやら變ですよ。

祖母　どれ。なるほど殼をつゝつく音がしてゐる。いよいよかね。ひと並の子供が生れてくれゝばいゝが。

母親　とび拔けて善い子ならなほいゝぢやありませんか。

祖母　それが片輪の方にとび拔けられてはねえ。

母親　（怒つて）　そんな事！　わたしの苦勞にかけたつてありませんわ。

祖母　だがそのお前の苦勞で、七面鳥がまた只まうけだつたらねえ。あゝ。あゝ。生れる前からこんなにお祖母さんに心配かけるなんて！

母親　お母さん。（眞面目に）　もうすぐにこの子は生れます。子供の生れぎはは大切ですわ。どうかそんな言葉で誕生のお部屋をけがさないで下さい。縁起よくしてやつて下さい。どうか善い子が生れるやうに。善い子が生れるやうに。

（その時に殼をやぶる音がする。それから若々しい聲がきこえて、母家鴨の向ふから、普通の家鴨の子にしては少し大きい、鼠色の醜い子が歩いて出て來る。母親は不安にうたれ、祖母はじろじろ覗き込む。）

祖母　あゝ。どうしやう。やつぱり七面鳥だつたよ。

母親　（一生懸命に打ち消して）　早合點はしないで下さい。この水かきを御覧なさい。（醜い子は首をあげてひと聲

なく)

祖母　だがこのいやな聲は！　これが家鴨の言葉のしやべれる子だと云ふのかい？　わたしや御先祖に何て申しあげやう。

母親　えゝ。わたしの子どもの生れたのを喜ばないやうな御先祖なら、もう今日から他人ですわ。お母さん。この子はわたしの子ですわ。わたしのいゝ子です。後生ですわ。この子を祝つて下さいな。よそゆきの聲で、大きな聲で、祝つてやつて下さい。

祖母　(がつかりして)　わたしには出來ないよ。

母親　よろしいわ。それならわたしひとりで祝ひます。いえ。兄弟たちにお祝ひさせます。(大聲で)　みなさん。みなさん。いらつしやい。お母さんのいひつけですよ。お前たちの弟が生れました。末つ子がいま生れました。みんな大急ぎでお祝ひにいらつしやい。

(外でがやがやと先きをあらそふ聲がする。扉が開いて大勢の子家鴨の首が一度に内をのぞく。)

母親　さあ。遠慮なくお入りなさい。これが今生れたばかりのあなた方の弟ですよ。仲間に入れてやつて下さいな。

(誰も氣味わるさうにして入らない。)

母親　なぜ返事をしないの。なぜ誰も、遠くからでもお祝ひ一つ云はないの。聞きまちがへなのかい。それではもう一度云ひますよ。この子はお前たちの弟です。お母さんは嘘はつかないよ。この子はお母さんが現に抱いてかへした末つ子ですよ。

(みんなやはり默つてゐる。)

母親　この子はこんなに淋しさうにしてゐます。それだのになぜ誰もかまつてやらないの。(返事がない)　一番上のお兄さん。あなたからお入りなさい。さうして手をひいてやつて下さいな。(子家鴨の首が一つ扉からかくれる)　どうしたと云ふの。では二番目のお兄さん來て下さい。(もう一つの首があわてゝかくれる)　まあ、ではその次のお兄さん。(また一つひつこむ)　あゝ。何故みんなわたしの子なのに、同じ兄弟なのに、さう意地わるなの。さういやな子なの。ではいゝよ。(優しく)　一番末のちい姉さん。お前は氣だてのいゝ子だつたね。これはお前のすぐの弟よ。相手してやつて頂戴ね。

ちい姉　(澄んだ聲で)　えゝ。わたしはお相手をいたします。

(醜い子は思はずうれしさうに首をあげる。)

兄一　(同時にちい姉さんの羽を押へ、低い聲でおどかすやうに)　お前、あの子と遊ぶならもう仲間はづれだよ。

兄二　さうとも。あんな奴、僕たちの恥だ。

ちい姉　兄さん。どうかさう云はないで下さいな。

皆　いけない。いけない。
兄三　云ふことをきかないとあとでひどいぞ。
兄一　（威張つて）さあ。あつちへ行かうよ。（ちい姉さんに）お前も羽をもぎられたくないなら一所においで。
（扉がしまる）
祖母　ほら御覧。誰だつていやがつてゐるぢやないか。
母親　…………
祖母　この子は家鴨ぢやない。これは片輪だよ。
母親　いえ。いえ。この眼を見てやつて下さい。甘えたさうに、とびつきたいやうに、わたしを見つめてゐるぢやありませんか。母親にでなくて、どうして羞まずに、子供がこんな目つきをいたしませう。
（それから母親と祖母とは爭って、次の言葉を同時にガヤガヤと云ひ合ふ。）
祖母　お前そんな事を云つたところで——この子が——わたしやこんな者を孫だなどゝ云つて——やれ情けない。
母親　（かばふやうに、自慢するやうに）この子はわたしの子です。家鴨です。誰が何と云つてもわたしはこの子を育てますわ。（末つ子を抱き寄せて）ねゝね。お前はほんとにいゝ子になつてくれるね。なつておくれ。（末つ子は甘えて母親の羽にもぐり込む）
（その混雑のうちに幕）

第二場

もう春の眞盛りになりました。鶯が牧場で歌つてゐます。家鴨小屋の前では末つ子が一羽じつつまらなさうに立つてゐます。そこへ桃の花の蔭から、家鴨のかたちをした玩具を抱いたちい姉さんが、あたりの様子をうかゞひながら出て來ます。ちい姉さんは末つ子を見つけると急に元氣になります。

ちい姉　いま忘れものをしたつて云つて來たのよ。あなたどうしてゐるかと思つて。
末つ子　（うれしさうに）さう？
ちい姉　みんなは垣根のところで遊んでゐるの。あなたも仲間に入らない？　今日はみんな機嫌がよくつてよ。
末つ子　足が痛くつて、まだ駈けられないから、またこんど。
ちい姉　足つてこの間蹴られたところ。
末つ子　えゝ。
ちい姉　わたしも一所にこゝに居たいわ。わたしほんたうは始終さう思つてゐるのよ。だからあなたとあんまり遊んであげないと云つて、わたしを恨まないで頂戴な。
末つ子　大丈夫さ。お姉さんは僕と遊ぶとあとでいぢめられるんでせう？

ちい姉　うそよ。うそよ。この間のところはまだよつぽど痛い？
末つ子（がまんして）いゝえ。もう大分いゝの。毎晩お母さんがなほして下さるんだもの。僕にはお母さんがついてゐらつしやるからなんでも我慢するの。（急に心配さうに）だけどお母さんはこの頃おかげんがわるいんぢやないの。
ちい姉（あわてゝ）そんな事ないわ。そんな事ないわ。
末つ子　それならいいけど。
（裏から、みんなでちい姉さんを呼ぶ聲が聞える。）
ちい姉　まあ。もう呼んでゐるわ。どうしませう。
末つ子　行つてらつしやいよ。
ちい姉　あなたは？
末つ子　こつちの土手で遊んでゐよう。
ちい姉　何して？
末つ子　ひとりで何かしてますよ。
（鶯が近くに來て啼き出す。）
ちい姉（引つ返して來て）あなた怒つてゐるんぢやないの。
末つ子　なぜ。
ちい姉　末ちやん。わたしちつともいい姉さんぢやないわね。

末つ子　僕こそちつともいい弟ぢやないや。
ちい姉　ああ。そんないやな話はもうよしませうね。うそよ。うそよ。わたしたちは一番、一番いゝ姉弟（きやうだい）なんだわ。
（また烈しく呼ぶ聲がする。）
ちい姉　また呼んでるわ。では行つてよ。
末つ子　行つていらつしやい。
ちい姉（急に躊躇して）ああ。どうしませう。
末つ子　見つかると僕困るなあ。
ちい姉　では行つてよ。行つてよ。またあとで來るわ。
末つ子　無理して來なくつてもいゝんですよ。
ちい姉（大人ぶつて身體を反りかへらせながら）あなたはほんとにえらいのねえ。
末つ子　姉さんこそほんとにえらい姉さんだなあ。
（ちい姉さんは急に駈け寄つて末つ子を抱きしめてから、いそいで右手に出てゆく。末つ子もあとから左手に入る。そこへパイプを銜へた七面鳥が祖母家鴨と連れだつて通りかゝる。）
祖母　たつた一つの取得はあれが家鴨なみに泳げるといふことなんですよ。
七面鳥　さうとも。それでまあよかつたのさ。その取得までなかつたら、それこそあいつがわたしの子になつて、わたしが卵を孵すに無精をきめこんだ事にされるところ

でしたよ。

祖母　御免なさいね。御迷惑をかけて。むしやくしやしてゐたものだから、つい、とばつちりがあなたに行つたんですよ。だがわたしは本當にどうしよう。死んだお爺さんにすまないのです。あのひとは家畜會で一等賞をとつた男振りなんですからねえ。その孫があれなのですよ。一度は棄て兒にしようと思つたけれども、母親が泣き悲しんで、どうしてもさうさせないのです。それからといふものは神經に病んで、わたしを目の敵にして用心するんです。かあいさうに母親はあの子のために痩せてゆくんです。

七面鳥　全くあのお子だけはちつと出來そくなつたね。ほかのはみんな可愛いのに。

祖母　あゝあ。いつそあの子が――

七面鳥　全くむだな苦勞なんだからねえ。

祖母　シッ。母親が出て來るやうですよ。

（扉が開いて、母家鴨がうつむきながら出て來る。）

母親　小父さん。どうかそんな大きな聲であの子の惡口を仰らないで下さいましな。どこであの子が聞いてゐるとも限りませんわ。それは顏だちがちと醜いのは玉に疵ですけれど、それもどうせ嫁入り娘といふわけではございませんのですから。

七面鳥　御尤も！　ですがね。人間に見られて、家鴨もこの頃のはこんな恰好になつたのか、などと云はれたらお家の恥にならないとも限りませんからね。ひいてはわれわれ家禽の恥にもね。

母親　でもあの子は氣だてのよろしい子です。それだけでもあの子が生れただけの事はありますわ。今に育つたらどんなになるでせう。あなたの仰るのとはまるで反對に、鳥仲間にもこんな氣だてのがあるかなどと云はれて、方々の皆さんにそれは可愛がられるかも知れませんわ。

祖母　（怒つて）それならほかの子はなほさうなるわけだよ。

七面鳥　（聲をそろへて）さうとも。どこから、えゝと、その證明がつきますか。

母親　（負けずに）いまにつきますでございませうよ！

七面鳥　ごろつきだつてね。

母親　何ですつて。あんまりなお言葉ですわ。

七面鳥　勝手にしやがれ。

（おどかすやうに胸をふくらましながら行つてしまふ。）

祖母　お前よけいなことを云つてたうとう親方をおこらしてしまつたね。

母親　だつてあんまりなんですもの。癖になりますわ。（七

面鳥の方を振り返つて）きつと育てゝ見せるとも！

祖母　ではわたしも「勝手におし」だ。あんな子をひいきにするのなら。

（祖母は七面鳥の方へ行つてしまふ。母親はそれを見送つて靜かに首を振り、前掛をいぢりながら戸口に入る。日はだんだん高く、鶩だけはますます機嫌がよい。）

（末つ子は小屋の横から出て來て壁に倚りかゝる。）

——幕——

第二幕

その年の秋でした。コスモスが家鴨の脊の五倍も高く咲き亂れてゐます。黄ろい銀杏の葉の散りはじめた小屋の前の草原では、もう大分育つて大きくなつた子家鴨たちが大勢繩飛びや獨樂廻しをして遊んでゐます。少し離れて末つ子が仲間はづれのやうに立つてゐます。

兄一　（わざと小屋に聞えるやうな大聲で）川つぷちへ行つて、みゝずでも掘らないか。

兄二　あゝ。川つぷちへ行かう。（目くばせをしてそつと舌を出す）

兄三　僕も行きますよ。

兄四　僕も。

ちい姉　（五色に塗つた毬をかゝへてゐる）兄さん。川つぷちならさう遠くもありませんから、末ちやんもつれて行つてやつて下さいな。（皆は顏を見合せる）ほかの所なら無理にお願ひしませんけれど、この子は川つぷちが大好きなんですから。（末っ子に）あなたからもお頼みなさいよ。

末つ子　兄さん。僕もつれて行つて下さいな。

兄一　だがお前をつれてゆくと途中で知り合ひに逢つた時に氣まりがわるいからなあ。

ちい姉　そんな事云はないで。この子はあすこへ行くとそれはおとなしくひとりで遊んでよ。

末つ子　僕は川つぷちが好きなんですよ。せいせいするんです。それから上流（かみ）の方を見てゐると、なんだか善い事があるやうに胸がどきどきするんです。あの上流の、水のきれいなところには何があるんですか。青い屋根に金のしるしのついた處はなんですか。あれを見てゐると探檢にゆきたくなるんですよ。

兄一　馬鹿。あすこは白鳥の國だぞ。

末つ子　白鳥？　白鳥の國つてなんですか。

兄一　（赤面して）おれがまだ見たこともないものを聞くない。あれで三里もあるんだもの。大人だつてうつかり

あすこへ出かければ、途中で流されて土左衛門になるんだつてさ。チエツ。どうせ僕たちの行かれない處の話で、時間をつぶすのはよさうよ。
皆　（わざと大聲で）　さあ。行かう。行かう。（目くばせなし合ふ）
末つ子　僕は行つてはいけませんか。
兄一　いや。お前には一寸殘つてゐてもらひたい用があるんだ。本當は僕たちの行くのは川つぷちへ行くんだよ。川つぷちへ行かうつて大きい聲で云つたのは、お母さんを安心させるためなんだ。ほんたうは垣根を越していい所へ行くんだがね。お前はここに立つて番しておくれよ。川の方を向いてぢやない。戸口を始終にらんでゐるんだ。横なんぞ向いちやいけないぞ。
末つ子　立つてゐてどうするの。
兄一　誰か心配してさがしに來たら、みんなは一寸川つぷちへ行つたつて、云つてくれゝばいゝんだ。
末つ子　嘘をつくの。
兄一　お前馬鹿正直だなあ。
末つ子　お母さんを油斷させるの。僕はいやです。
兄一　何だと。
末つ子　僕は兄さんたちがどこへ行くか知つてゐるんだもの。
兄一　（怒つてうしろをふり向き）　誰だ。こいつにしやべつたのは。
末つ子　誰からも聞かないでも知つてゐますよ。僕はつれて行つてもらはないでもいゝや。そのかはり番もしませんよ。自分のしたいことをして遊びます。
兄一　おい。俺たちはきさまの兄貴だぞ。
末つ子　ですけど僕はお母さんの子どもです。（皆ドッと笑ふ）　お母さんの云ふことをきゝます。
兄一　お母さん？　あはゝ。お前のお母さんがどこにゐるつて。
ちい姉　（心配さうに）　兄さん！　（一生懸命にごまかして）　さうよ。さうよ。末ちやんのお母さんはあすこに、お家にいらつしやるのよ。今日もおかげんがわるくつてお休みになつていらつしやるのよ。お母さんはわたしたちが垣根を越しはしないか、どこかあぶない所へ行きはしないかつて、始終心配していらつしやるのよ。
末つ子　それだのに姉さん！　兄さんたちは人間のお屋敷のアハビの貝をねらひにゆくんですよ。あれは猫の喰べかすなのに。
兄一　（びつくりして）　やあ。たうとう知つてやがるな。かうなればもう邪魔が入つたんだ。きさまと喧嘩だ。（蹴る）

ちい姉　兄さん。兄さん。
兄一　いや。承知しないよ。こいつは何とか云つてはすぐに、お母さんにおべつかを使はうとするんだからね。おい。お前は始終お母さんの側へくつついて居さへすればいゝと思つてるのかい。お前はお母さんの自慢の子なのかい。
ちい姉　兄さん。いけません。
兄二　默れ。ほんとだとも。こいつは。（末っ子の言葉つきを眞似して）お母さんのおかげんがわるいなんて、大げさに悲觀した顔を見せてゐても、お母さんのおかげんがなぜわるいのか、知らないんだつてさ。
末っ子　（姉の方を振り向き、訴へるやうに）ちい姉さん。
ちい姉　みんな嘘よ。氣にしないでね。氣にしないでね。
兄一　なんだ。まだごまかす氣だな。よし。もう我慢が出來ない。僕たちを馬鹿にしてゐるんだからね。今日こそお母さんがいつも、默つてろ默つてろと仰つたことを教へてやるぞ。お前、水溜りにでも行つて顔をうつして來い。お前の顔はだんだん變つて來てゐるんだぞ。お前はそれでも家鴨かい。
（末っ子はつと驚く。）
兄二　やあい、まゐつたか。
兄三　それでお母さんのおやせになるわけが分つたらう。
（足で砂をひつかける）
兄四　一寸。（みんなに合圖する）僕がもう一ついゝ事を教へてやらうか。（わざとゆつくり）お前は棄て兒にならうとしたんだよ。
末っ子　えッ？
兄一　（意地わるく）それをお母さんがとめて下さつたんだ。お母さんはお前の恩人だ。そのお母さんは毎日泣いていらつしやる。お前のために！　お前はえらいねえ。
皆　（はやしたてる）えらいねえ。えらいねえ。
末っ子　（しばらくぼうつとしたまゝ立つてゐたが、やがて顔色が變つてフラフラ倒れかゝる）
ちい姉　（しつかり末っ子を支へて）末ちやん。末ちやん。がまんしてね。がまんしてね。うそです。兄さんたちの云ふことはみんな嘘です。お母さんのおやせになるのは兄たちのせゐなんです。兄さんの意地わるのせゐです。
皆　何だと。――女のくせに。――生意氣！
末っ子　（眼を開いて）姉さん。もうお止しなさい。
ちい姉　なぜそんな事を云ふの。わたしだつてもう我慢は出來ないよ。女だつて、お母さん似なんだからね。御覽なさい。この末ちやんの傷は誰が毎日つけるのです。それをどなたが毎晩そつと、かうやつてなほして置いて下さるんです。どなたが毎晩いつもおそくなつてから、眠

てしまへばみんな同じやうにいゝ子になるわたしたちの顔を見くらべながら、不思議さうに晝間のことをお歎きになるんです。まあ、兄さんたちこそ今すぐに、お母さんの方を向いてお詫びをなさい！

兄四　チェッ。

兄一　生意氣云ふない。（倒れるほど蹴とばす）

ちい姉　（がまんして泣き聲で）わ、わたしはどんな事されたつていゝんだわ。いくらでもわたしを打つて頂戴。わたしは末ちゃんが厭がつてゐるのに、無理によけいなひいきをしたんです。むしやくしやするならわたしをいぢめて頂戴。

兄二　ところがお前ぢや、つまらないんだよ。（いきなり末つ子に飛びかゝる。するとほかの兄たちもそれを眞似する）

ちい姉　（大聲で叫ぶ）あらお母さん！　お母さん！

（兄たちはあわてゝ逃げて行く。末つ子はちい姉さんを助けて起こす。）

母親　（前掛をつけたまゝ戸口から顔を出して）何だね。どうしたんだね。また末ちやんが打たれたのかい。引つ掻かれたのかい。

末つ子　（ごまかして）いゝえ、みんなが姉さんを、何にもしないのに、いま蹴つとばしたんです。お母さん繃帶を出して下さいな。（ちい姉さんを支へるやうにして）かうやれば歩けるでせう？

母親　やれやれ。またか、またか。（溜息をつきながら引つ込む）

ちい姉　（末つ子の肩につかまつて、びつこを引きながら）末ちやん。兄さんたちが云つた事はみんな嘘よ。みんな嘘よ。分つた？

末つ子　（うなづく）

ちい姉　今夜わたしがもつと本當のお話してあげませうね。いゝこと？

末つ子　（うなづく）

ちい姉　あなたわたしが好き？

末つ子　（うなづく）

ちい姉　大好き？

末つ子　（やつと笑ひ出す）

ちい姉　（うれしさうに）ぢやあ「大丈夫」つて云つて頂戴な。

末つ子　（笑ひながら）大丈夫。

（ちい姉さんはいきなり末つ子の額に接吻する。それから小屋のなかへ一所に入る。）

（あたりが靜かになる。）

（しばらくして末つ子は扉をそつと開けて出て來る。）

カバンを肩にかけてゐる。末つ子は足音を立てないやうに家の前を通り過ぎるが、窓の下まで來ると堪らへられなくなつて膝をつき、板に接吻する。それから片腕で泣き顏を隠しながら立ち去る。）

（末つ子はもう一度裏手の柵の向ふに姿をあらはして、方々を迷ふやうに見廻すが、やがて遠くの青い山々に惹きつけられるやうに行つてしまふ。）

ちい姉の聲（ゆつくりと小屋のなかで）末ちやん。――末ちやん。――末ちやんてば。――あら隠れたつて見つけてよ。

――幕――

第三幕

話かはつて冬の或る夕方でした。遠い山の麓の百姓家のなかで、末つ子は部屋の隅の寢臺に疲れて眠つてゐます。末つ子はもう若者らしくなつてゐます。蒲團のうへにはぼろぼろになつたカバンが投つてあります。そこへ爺さんの鷄と婆さんの鷄とが心配さうに入つて來ます。木樵姿の爺さんの鷄はいま山から歸つたばかりです。窓のそとには消えかゝつた赤い夕焼雲がひろがつて居り、爐では火影が靜かに動いてゐるだけですが、婆さんが持つて來たランプのために部屋のなかは急に明るくなります。

婆　戸口に倒れてゐたのはこの方なんですよ。

爺　やれ。やれ。助けてやつていいことをしたね。さもなければ凍えてしまつたらうに。どこの誰方だか知らないが。

婆　御覧なさいよ。からだぢう泥だらけで傷をしてゐるんですよ。何の鳥でせう。家鴨としては鼠色で少し變ですし。

爺　渡り鳥かしらんて。世界を胯にかけるといふひとさ。

婆　それはまあ落ちぶれた有様でしたよ。ひがんだやうな目つきをして他をまぶしさうに見るんです。倒れてゐたからわたしが駈けつけてあげるとねえ、このひとのはうが羽で顏をかくすんですよ。打たれるのを避けでもするやうに。

爺　戸口で邪魔になると、小言でも喰ふと思つたのか。いやはや。こんな若者が平氣であはれつぽく乞食根性を出すなんて。戸口にゐたつていいぢやないか。どうせ道ばただ。それともうちの卵を盗んだことでもあるといふのかい。うむ。意氣地のないひとだ。

婆　でもねえ、かうやつて眠てしまへば罪もありませんわ。それに御覧なさい。どこか甘つたれて育つたやうな風ぢ

やありませんか。

爺　なにか野心をおこして家をとび出したか。いやわしにも覺えがあるぞ。何事も若い時だつた。（聲が大きくなる）若い時だつた。若い時は寶石だよ。（べそをかき、ハンケチを出して鼻をかむ）いや婆さん、わしの若い時はもう二度とかへつては來ないよ。

（末つ子は寢がへりをうつ。）

婆　何んですねえ、お爺さん。起してしまふぢやありませんか。もう少し向ふへ行つてゝ――

（そのとたんに末つ子は眠ぼけて大きい聲を出す。爺さん婆さんはあわてゝ、互ひに合圖しながら隣りの部屋へ出て行く。遠くで時計がゆるやかに五時をうつ。）

末つ子　（突然大聲に）お母さん！（目をさます）今のは夢だつたのか。僕はお母さんにかじりついて、はしやいで、お母さんのうれしいやうな、そのくせ仕方なしに僕を叱つて見せてゐるやうな、顏に見とれてゐたんだ。――みんな夢だつたのか。――夢だとも。――實際の僕はこんなのだもの。（無理に起き上り、カバンから母家鴨の寫眞をとり出し）お母さん。お母さん。――お母さん！　僕は今こんな有樣で、こんな處にゐるんです。戸口に倒れて、拜むやうにしてなかへかつぎ込まれたんです。乞食のとほりになつて、恥なんて事はとうに忘れてしまひました。お母さんやちい姉さんが、いえ自分でさへまさかと思ふやうなことをして來たんです。それでもまだ、どこかに僕の仲間はゐないか、同じ恰好の鳥はゐないかつて、しつこく圖々しくさがしたんです。醜い顏は、あれからどんなになつたでせう。僕には姿をうつして見る氣はとてもありませんもの。水溜りがあると急いで逃げたんです。（涙をこらへながら寢臺からおりて、床に坐つてしまふ）でも、でも、僕にはよく分つてゐるんです。どこの町へ着いてもみんなが變な鳥だ、變な鳥だつて慘く扱ふんです。どんなに機嫌のいゝ村へ入つても僕を見ると急に意地わるくなるんです。（自暴をおこして）さうでせう。もともと生れないでいいものが生れたんですもの。お母さん！（寢臺の蒲團のうへに額を突つ伏す）僕が生きてゐると、方々の町の鳥まで惡くなるんです。だから――だから（よろよろと立ちあがる）僕はどうしても、かうしなくちやいけないんです。（壁の釘に繩をかけ、首をくゝらうとする）許して下さい。僕のすることを許して下さいね。

爺　（扉を蹴つてとび込んで）待つた。お前を今ここで、この閾のうちで死なせてはお家にすまないぞ。

末つ子　離して下さい。私には家はないんです。親もないんです。

爺　いや分つたよ。わしはすつかり立ち聞きしたんだ。泣かされたんだ。だがさうかと云つて鳥を一羽、ここで死なせていい理窟はないぜ。お前さんが首をくゝつて堪るものか。

末つ子　なぜです。僕のやうなものがなぜ。

爺　お前さんはまだ若い。なぜといふわけはそれだけさ。うんとこ！（力を入れて繩を切つてしまふ）お前さんはまだ若い。まだ若い！（にこにこして末つ子の身體に觸つて見る）これこれ、この腰は枝のやうにこんなにしつかりしてゐる。これこれ、この筋肉は蕾のやうにこんなにはちきれてゐる。（末つ子の背なかを打つ）ああ惜いお前さんだ。お前さんには何でも出來るぜ。

末つ子　何でも出來る？　ああ。その考ならもうまへに、一度僕にもわいたんです。「僕にはまだ何でも出來る。家を出よう」とさう思つた時に、この山が丁度家の庭から遠くに見えたんです。青くきらきらして、高く聳えて、まるで僕の望みどほりの場所に見えたんです。でもそばに來て見ると急な坂道で、石や棘草だらけでした。そしてやつぱり僕はひとりだつたんです。

爺　なるほどお前さんは方々に傷をしてゐなさるね。だが待てよ。その傷はとりかへしのつかないやつかね。（爐にかけてあつた藥罐をとり、湯を金だらひにあけて）どれ、これで洗つて見せようかね。だがこれだけではちつと足りないやうだ。婆さん！　もう一杯お湯をわかしておくれ。

婆　（隣りから）はあい。

爺　さて。これからが相談さ。そこへおかけなさい。どつこい。（自分も椅子に腰かけ、湯で末つ子の背なかを洗ふ。するとそこだけ鼠色のよごれが落ちて眞白になる。しかし末つ子は氣がつかない）どうだね。かうやつて（手拭を見せる）血や泥がおちるたんびに、お前さんは急に苦勞が跡かたもなく消えてゆく氣はしないかね。お前さんはもう一度生きて見たくなりはしないかね。（意味ありげに）お前さんは不仕合せだと云つて居なさる。うむ。それでお前さんは不仕合せなのさ。

婆　（金だらひをかゝへ、うつむきながら急いで入つて來る）どうもおそくなりましたよ。（ふと顏をあげ、今はほとんど眞白になつた末つ子を見て、あつと云ふなり、金だらひを置いてしまふ）

末つ子　（驚いて）何です。どうなさつたんです。

婆　あなたこそ、ど、どうなさつたのです。一體まあ――あなたは何の鳥なんです。

末つ子　（顏いろが曇る）もうそのお話はよしませう。

爺　（我慢しきれなくなつて）なぜお前さんはさう分らず

屋なんだ。
末つ子　なにがです。
爺　えゝ、まだそんな事を云つてゐる。お前さんは現に立派な家鴨ぢやないか。
婆　まあ、あなたが家鴨さんですつて？　さうだとも！　こんな立派な家鴨が今までにありましたかい。
末つ子　（うろたへる）
爺　合點がゆかないか。お前さんはよつぽど自分のねうちを知らないひとだな。疑ふなら勝手に疑ひなさい。わしは村ぢうの鳥を證人に立てますぞ。どうしてくれよう。さうだ。（末つ子がよろけるほどに、その羽を引つぱつてひろげる）これはどうしたといふんだよ！
末つ子　えつ？（羽を見る）
爺　やつと氣がついたか！　だがその雪のやうな色は羽ばかりではないのだぞ。頭もだ。背なかもだ。どこもかしこもだ。可哀さうに！　お前さんといふ持主にまで愛想をつかされてゐたお前さんの汚さは、本當は血や泥の汚さだつたんだ。その泥の下に血の下に、まるでたんぽゝの柔かい飛び毛のやうなやつが靜かに育つてゐたんだ。それがたうとう表にあらはれて出たぞ！　時期が來たから誰にも見えるやうに。お前さんにも見えるやうに。さうだとも。この通りだ。下を向け！　それ、その金だらひを！
末つ子　（おそるおそる足もとを見て、金だらひの湯に寫つた自分の姿をのぞく。感きはまつて動けなくなる。そして無言のまゝ膝をついて、爺さんの足にかじりつく）
爺　（眼尻に皺を寄せて、上機嫌になりきつて）ありがたい！　この眞白な羽はよつぽど羞み性だつたと見えるね。いつもまだまだ早い、まだまだ駄目ですなんて、人前に出たがらなかつたんだね。婆さん。一つ今夜は（目くばせする）
婆　（前掛で涙をふきながら）えゝ。えゝ。どんな御馳走でもつくりますとも。（兩方の袖をまくり上げて、えらい勢で臺所へ出て行く）
爺　（うつむいて泣いてゐる末つ子の肩をそつとたゝく）これでお前さんは迷はずに家へ歸つてくれるでせうな。
末つ子　歸りますとも！　それにしてもあなたといふ方がいらつしやらなかつたら、僕はどうなつたでせう。
爺　いやわしは年よりだ。型のきまつた禮ならもう聞きあきた。さあ返事して貰はう。お前さんはまつすぐに家へ歸つて「僕はやつぱり家鴨だつたんです。」とお母さんに云へるかね。
末つ子　えゝ。部屋ぢうに響く聲で云ひますよ。
爺　立派な言葉だ。覺えてゐますぞ。あゝ、今夜は首途だ。

わしはうれしいのだ。息子の出世を聞くやうにうれしいのだ。わしは身體が丈夫で、節制家で、長生きしたばつかりに、今夜とんでもない事をしてしまつた。いや、まつたくとんでもない事だつた。こんな若いさかりの鳥を一羽助けてしまつた。これでお前さんとは生きてゐる間いつも手をつなぎましたぞ。さだめしわしの見た事もないやうな往來で、見た事もないやうな身なりをして、お前さんがにこにこしたり喋つたりしてゐる樣子が、わしの時どきの夢に入りませうよ。さあ、くつろぎませう！杯を擧げませう！

婆　（扉を一ぱいに開けて）お待ち遠さま。腕前はこのとほり！

（婆さんは戸口にすれすれになるほどの、大きな銀いろの盆のうへに蠟燭で飾つた御馳走を山盛りにして、よろけながら運んで來る。爺さんと末つ子は度膽をぬかれるが、急いで手傳ひながらそれを卓のうへにおろす。）

爺　それ椅子をかう並べて。

婆　あらナイフが一つ足りませんね。

爺　（駈け出す婆さんの後ろから）お酒は穴倉の飛び切りのやつをね。

――幕――

第四幕

また春がめぐつて來ました。それは霧の立ちこめてゐる明け方のことでした。去年の鶯がまた牧場にお客に來てゐます。去年の桃の花がまた夢のなかの色のやうに美しく咲いてゐます。だんだん四邊が明るくなるにつれて、まだみんなが眠しづまつてゐる家鴨小屋の前に、末つ子がひとり待ちくたびれてゐるのが見えます。末つ子の羽は、いまは一層白くなつて、輝いてゐます。

末つ子　まだ日がのぼらないのか。僕は夜なかにここに着いて、もう二時間も待たされてゐるんだ。裏口から入れないこともないんだけれども、もしかすると兄さんたちにまつさきに出逢ふからな。出逢つたつて僕の方はかまはないが、兄さんたちが僕を見つけて、それと氣がついて、工合わるさうな顏をなさると困るからな。（遠くで雞が啼く）そろそろ朝なのになぜみんなは早起きしないのだらう。ここまで靜かにきこえて來るのは誰の寢息かしら。お母さんのかしら。お母さんのだ！　お母さんは今でもこの窓ぎはにおやすみになるんだ。だがお母さんは今朝はぐつすり眠て下さつた方がいいや。少しの寢不足もなくつて、機嫌よく起きて下さるといいな。後悔する事もなく、今朝はお母さんにとつて、はればれした朝

だといいんだ。少しでも氣苦勞がおありになると困るんだ。さうしてせつかく僕を御覽になつても、すぐに胸がつまつて、もうすんでしまつた事の愚痴がさきにたつと困るんだ。だつて僕はもう昔の僕ではないのだからな。（近くで二番雞が啼く）となりの叔父さんも起きたな。ではうちももうぢきだらう。あゝあ。（伸びをして籠の上にころがる。疲れてゐるのでうとうとする）

母親（少し前より老けてゐる。靜かに扉をあけて見まはして）やつぱり居はしないわ。居はしないわ。わたしはまあなんといふ馬鹿だらう。またあの子がかへつて來た夢を見たのだよ。あの子が窓際に來て、早く戶をあけて下さい、あけて下さい、さうしないと僕は死んでしまひます、と云つた氣がしたのだよ。さうしてわたしは又いつものやうに、噓だ、わたしの未練だとは思ひながら、ふらふら出て來てしまつたのだよ。あゝ。やつぱり居はしない。居るはずがないわ。それでも一度かうやつて見まはした朝は、一日淋しいのだ。泣くのだ。はしやいだ朝御飯のときも、わたしだけはむつつりして、みんなの起きたての顏をかはらしてしまふのだ。そのくせあの子が家を出た時に、ちい姉さんの泣き聲を聞いた時に、わたしは見かけほどには悲しめなかつたのだ。それを今頃になつて、あの時悲しめなかつたことを悲しんでゐるのだ。ああ。わたしは馬鹿だ。馬鹿だ。

末つ子（起き上る）お母さんだ！　まづなんと御挨拶したらいいだらう。

母親（すかして見て）そこにいらつしやるのはどなたですか。あなたですか、さつきわたくしの窓のところで罪ないたづらをなすつたのは。

末つ子　お母さん、僕です。僕です。僕が歸つて來たのです。

母親　僕です？　僕です？　その聲には聞きおぼえがあるが。（よくのぞき込む）

（二羽ともしばらく物を云はない。）

末つ子　僕が分つて下さいましたか？

母親（眼をふいて）分つたよ。分つたよ。お前がどんな姿になつてゐようとも、わたしは忘れやしないよ。「僕がお分りになつて下さいましたか？」お前は今こんな立派な姿になつて來ながら、へり下つて、育てゝあげなかつたわたしに恥かしい氣をおこさせないやうに、靜かにさう云つたね。お前は今でもやつぱり親切な子だね。察しのいい子だね。あゝ。それでこそお前だつた。わたしが每日蟲よくも待つてゐたお前だつた。（抱く）

末つ子（母親の羽の下から）ちい姉さんは？

母親　奥にゐるよ。

末つ子　それならなぜ早く呼んで下さらないの。

母親　わたしが慾張りだつたのだよ。誰にも知らせないうちに、少しの間だけお前を横取りしたかつたのだよ。思ふ存分に！　思ふ存分などといふことは今日が始めてだからね。まあ。わたしも駄々つ子になつたね。お前がはじめて駄々つ子になれたやうに。だがお前のいふとほり早く知らせてあげないとちい姉さんはほんとに怒つてしまふかもしれないね。（大聲に）みなさん。みなさん。早くいらつしやい。早く。末ちやんが歸つて來ました。末ちやんが歸つて來ました。

（兄のひとりが入口の戸を開けて首を出すが、驚いてすぐに引つ込める。家のなかゞ騷がしくなる。庭の向ふから隣りの七面鳥の子が首を出し、また急いで引つ込める。それから戸口や柵の木戸から、ちい姉さんをはじめ、兄たち、祖母家鴨、七面鳥、七面鳥の子、そのほか近所の鳥などが大勢集まる。）

ちい姉（幾分恥かしさうに、末つ子に近づいて）お歸りなさい。

末つ子　只今。

ちい姉　ありがたうよ。

末つ子　なんのお禮ですか。

ちい姉　だつてあんなに役に立たなかつた、わたしの事をわるく思つてゐないんですもの。

末つ子　あゝ。氣兼ねはやめて下さい。さうしないとまた不仕合せになりますよ。その不仕合せは美しい不仕合だつたかも知れませんね。でも不仕合せは不仕合せですよ。お母さん聞いていらつしやいますか。今日から僕たちはすつかりやりなほすんです。僕はお母さんのことを思へば思ふほど、お母さんのそばにゐてはわるかつたんですね。それが今日からは、お母さんも家鴨らしい家鴨のお母さんになれば、僕も家鴨の子になるんですよ。僕はやつぱり家鴨の子だつたんです。

祖母（涙をこぼしながら）末坊や。末坊や。それではわたしのやうなものも恨まないでおくれかい。

末つ子　ああ。お祖母さん。（行儀よくお辭儀する。返事に困りながら）だつて、あなたは、あんなに御先祖に忠義だつたんですもの。

祖母（釣り込まれて丁寧にお辭儀をしながら）まあお前そんな賢い事を云つてくれて、わたしや、（涙聲で）さあ。みなさんや。それ、挨拶をして。（兄たちはきまり惡さうに挨拶をする。）

母親（羽をひとつうつて）ああ。お目出度いわ。お目出度いわ。けさの明け方に不意にこんなことにならうとはね。さあ。ちい姉さん。けさは煙のたつ朝御飯を一膳ふ

やすのですよ。さあ。子供たちいらつしやい。お家に入りませう。そして今日からは同じやうにわたしの駄々つ子になるのですよ。それからお互ひに駄々つ子になるのですよ。お互ひに甘えたり、無理を云つたり、仲なほりしたりするのですよ。誰もそれを氣にもかけない。自慢にもしない。それだのに家のなかは今までとはまるで變つてしまふのですよ。みなさんそれはまあどんなでせうねえ。さあ。お家にひきあげませう。

末つ子　(突然心配さうに動かなくなる)

母親　末ちやん。どうしたの。

末つ子　(指さして)　あの方が、さつきからぢつと僕を見つめてゐるんです。

母親　どの方が?

覆面の鳥　(そのとたんに)　わしだ。(大勢のなかから出る)

母親　あなたはどなたです。

覆面の鳥　…………

母親　何の御用があつてここへいらしたのです。なぜさうわたしの子どもを見つめていらつしやるのです。

覆面の鳥　…………

母親　歸つて下さい。歸つて下さい。あなたはここに邪魔しにいらしつたのですね。

覆面の鳥　(靜かに末つ子へ手を差し出して)　友達よ。迎ひにあがりましたよ。

ちい姉　(こはい顔をして末つ子をかばふ)

末つ子　(顔色がかはる)　あなたはどなたです。

母親　(恐怖をもつて)　あなたはこの子を奪ひにいらしつたのですね。あなたはわたしたちを嫉んでゐらつしやるのですね。でもお氣の毒ですが、あなたの計略はしくじりませうよ。この子はやつとの事で今朝こゝへ着いたのですからね。

覆面の鳥　(また靜かに)　友達よ。わたし達の用意は出來て居ます。

末つ子　(恐る恐る)　あなたは僕をどこへ連れてゆかうと仰るのです。

覆面の鳥　(川かみの白鳥の國の御殿を指す)

末つ子　あすこへ?　あの青い屋根に金のしるしのついたところですか?　あゝ。あすこは僕が小さい時分から見るのが好きな處でした。あすこを見てゐると妙に涙がわいたんです。ですが……ですが僕はお斷りいたします。僕にはまだここの家でする事がありますからね。僕は家鴨ですからね。

覆面の鳥　あなたは家鴨ではない。

母親　惡魔!

(大勢の鳥が動搖する。)

末つ子　僕が家鴨ではない？　それならあなたは何の鳥です。どう云ふわけであなたは、場合を選りも選つて今朝ここへ、そんなことを知らせにいらしつたのです。

覆面の鳥　(覆面を投げすてる。金の頸輪をしてゐる)　わしは鵠だ。わしはあらゆる子供の運命をつかさどつてゐる方の御使だ。

(空から角笛がひゞきわたる。)

見物のなかゝら　鵠だ。鵠だ。

末つ子　あなたが鵠ですか。では伺ひませう。差し出されたお杯をお受けしませう。僕は何なのですか。

(母親思はず羽で顏をかくし、聞えないやうにする。)

鵠　(しづかに)　あなたは白鳥だ。

ちい姉　おゝ。おゝ。

(大勢の鳥が動搖する。)

末つ子　(低い聲で)　僕は白鳥ですか？

鵠　思ひあたることはないか。あの川かみの青い屋根を、わけは知らずに戀しく思つたことはないか。

末つ子　(思ひあたるやうに)　僕は白鳥ですか。

鵠　あなたが心のどこかで、絶えずさがした場所はあすこなのだ。あなたの故鄕はあすこなのだ。

(のこらずの鳥が默つてしまふ。)

鵠　みんな默つてゐるな。みんな不服さうにわしを見てゐるな。だがわしは御使だ。わしの役目はこれなのだ。わしの役目に融通はきかない。わしの役目は事實を云つて果される。(角笛またひゞく)　さあ。時が來た。今こそあなたの祕密を話してきかさう。(一歩前へ出て歌ふやうに)

三年前のことだつた。
白鳥御殿の一羽の宮女は
心のわるい下部の云ひよるのをまともにとつた。
事は露見した。下部の酒もりの席から。
事は腹から笑はれた、氣位の高い局たちによつて。
だが宮女はしとやかな心の持ち主だつた。
後悔の涙のうちに
今は靜かな樂しみが胸にわいてゐた。
今は生れ來る子の生れる日を
靜かに指をりかぞへてゐた。
そしてかぞへられた日は來た、
冬のある朝、宮女は御殿の一室で産のひもをといた。
安らかに。だが父親はすでに逃げてゐた。
不身もちのために氣高い御殿にはゐられなくなつ

て。
さうして行くへはわからなかつた。
母親はなげいた、病の床についた。
だが母親は星のやうな卵の生れたことを讃めたゝ
へ
身にあまつたことと涙にむせび
自分のからだにかへてもと思ひつめて、
身をもつて終日終夜あたゝめた。
だがあたゝめる彼女のからだは日ましに冷え、
衰へ、痩せて行つた。
さうして霜のかゞやいた晴れた冬の午後
母親は最後のぬくもりをその愛兒にあたへて、
すべての祈念をそのなかにこめて死んで行つた。
この子はどうか無事に孵(かへ)りますやうに。
さうしてゆくゆくは立派な鳥になりますやうに。
それが消えかゝつた母親の魂のさけびではなかつ
たらうか。
その聲は遠くするどく天上のわしの主人にまで達
した。
主人のお心は動いた。
「わしはあの子を祝福しよう。
しかしあの子は宮殿においてはいけない。
わしはあの子を死んだ母親にふさはしい、
愛情の深い、大きい、こまやかな子にしたい。
しかしそれにはあの子を鍛へなければならない。
苦しまないと生命(いのち)のことは分らない。
苦しまないと世界のことは分らない。」
命をうけたわしの心は震へた。
手は震へた。
だが主人の眼差は嚴しかつた。
わしはすご〳〵退出した。
わしの役目は御使だ！
その晩わしは闇に乘じて下界におり、
宮殿の煙突から入つて卵をうばつた。
わしはふたゝび闇の空へまよひ出た。
わしは下界を見まはした。
その時目にとまつたのがたつた一つ
この家の貧しい灯(ともしび)だつた。
わしは祈つた
わしの心はきまつた。
さうして心をこめて家鴨の母親にしばらく白鳥の
卵をゆだねた。
白鳥の子はかくして生れた。
かくして育つた。

だがかくして今日！
時が來た。（一歩あとへ退る）

（大勢の鳥が動搖する。）

末つ子　お母さん（遠慮がちに）僕はやつぱり白鳥の子だつたのです。

母親　………。

末つ子　お母さん。（何か云はうとする）

母親（遮つて靜かに）それがどうしたと云ふのかい。この方はいまお前の祕密とかいふものをおしやべりになつたね。そしてお前は白鳥の子だと仰つたね。だがそれがわたしたちのさつきの約束とどういふ關係があるの。お前はなるほど白鳥の子かも知れない。さうでないとはわざと云ふまい。わたしにはその證據もない、また證據もいらない。そんなことはどうでもいいのだよ。兎に角いまのわたしにとつてかけがへのない大事な事がらは、お前がわたしを忘れずに歸つて來てくれたことだよ。そしてわたしがお前を忘れずに待つてゐたことだよ。そしてわたしたちが今お互ひにゆるし合つたことだよ。おお。戸外には丁度春の天使が來たやうに、この家にもなにかの花が咲かうとしてゐるのだよ。末ちやんや。この事を考へておくれ。わたしたちの因緣は今の「祕密」ぐらゐで崩れるほどのものなのかい。

ちい姉　そんな事は決してありませんわ。

母親　ちい姉さんよく云つてくれたよ。それでは末雄は、あの白鳥の國とかには行かないでくれるね。

末つ子　………。

母親　なぜ默つてゐるのかい。お前はまさか大それたことを思ひはしまいね。

末つ子（困つて）でも、僕は行かないといけないのです。

母親（絕望して）ああ。それでは急にここがいやになつたのだね。お前のお家にゆきたくなつたのだね。

末つ子　お母さん。どうか間違はないで下さい。露骨に云へば死んだお母さんを嫉まないで下さい。僕の白鳥のお母さんへの心持は、今お話をきいたばつかりのせゐか、それとももう死んでゐらつしやるせゐか、何だかお伽噺のやうなのです。そのためにこの家を出てゆくにしては、あんまりぼうつとしてお伽噺のやうなんです。まして死んだお母さんは最後まで僕の幸福を祈つて下さつたやうな方ですもの。僕がここに、代りのあたたかい家を見つけて、そこで可愛がられたつて、なんでおいやがりになりませう。僕はここにゐたいのです。ここを家にしたいのです。いえ、いつまでもここを家には致しませう。でも僕の行かなければならない處はあそこです。

母親　なぜ。なぜ。
末つ子　僕が白鳥ですから、僕は一生お母さんの子ですが、そしていつまでたつてもお母さんをお母さんとよびますから。が、やつぱり白鳥のやうに泳がなければなりませんから。白鳥のやうに啼かなければなりませんから。そして白鳥のやうに胸を張らなければなりませんから。ああ。お母さん。よく傷をなほして戴いた水かきを使つて、ここを離れて、川をのぼつて、あすこへ行つてしまふのですね。何だか濟みませんねえ。でもさうしないとやつぱり濟まないんです。あの方にです。――死んだお母さんだと思つて下さるな。このお使ひの方の御主人にです。本當に、お母さん。がつかりなさつたでせうね。何もかもこれからといふところでこんな事になつたのですからね。だけれど僕も今のまゝでは、いつまで經つても恰好が半端でせうよ。可笑しいでせうよ。嵐や、雪や、洪水にすぐに負けるでせうよ。でも嵐や、雪や、洪水はみんな無邪氣なやつなんです。用意をしない僕の方が惡いんです。だからお母さん！　今がつかりなさるかはりに、先きを樂しみにして下さい。何年か經つたら、あの時はやつぱりあれでよかつたんだねつて、笑つて見せて下さいね。きれいな眼を見はつて下さい。僕だつてそれをあだにはいたしませんよ。

（間。）
末つ子　どうしたんです。お母さん！
（間。）
母親　（羽ばたきして）末雄や。分つたよ。分つたよ。わたしはね、お前をまだゆつくり手もとにおいて可愛がつたことがないのに、今またすぐに手ばなすのはつまらないと思つたのだよ。それにわたしがさつきから有頂天になつてつくつた計畫を、この方とお前とでかたつぱしから形なしにしてしまつたので、一寸むしやくしやしたのだよ。勝手に自分でつくつた計畫なのにね。わたしはこんな我儘なお母さんなのだよ。それにひきかへてお前のは何といふ見上げた甘え方だらう。おお。末雄。それでは行つておいで。行つておいで。
末つ子　（嬉しさうに）許して下さつたの。
母親　あゝあ。行つておいでとも。わたしはもつと胸一ぱいの聲をはりあげて「行つておいで」と云ひたいのだけれども、もう胸がつまつてこんないぢけた聲しか出ないのだよ。だがわたしの心を開いて見せたい。わたしは喜んで許してあげて居るよ。末雄や。お前はお前らしく行くがいい。わたしはここで待つよ。お前の準備はもうととのつたのだ、そのととのつた準備の最初のいしずゑは、わたしが手をかけてやつたにしろ、準備のととのつた身

譲はお前のものだ。行くがいいよ。母親は母親らしく年とるのも忘れて待つばかりだよ。母親はなげいてはいけない。愚痴をこぼしてはいけない。笑つて見送らなければいけない。わたしはいつまでも病はずに、樂しみにして、根氣よく待ちますよ。さやうなら。（接吻する）ああ。末雄。ふたりは母子でないと分つた日から、本當の母子になつたね。お禮を云ふよ。

ちい姉　（駈けよつて）末ちやん。末ちやん。わたし――待つててよ。待つててよ。

祖母　（見たちを押しわけて）末坊や。それではわたしはもうこれで見納めかも知れないね。まだお前を可愛がつたこともなくて。ご……ごめんよ。さやうならよ。（急に未練を出して）だがお前にも時々はここへ來てもらへるものならね。だつてわたしの先きはもう短いのだからね。

末つ子　（祖母とちい姉さんを抱いて）ええ。今にまじりつけのない泳ぎ方が出來るやうになつたら、お天氣のいい日曜日に下りてまゐりませう。（鵠に會釋する）

（鵠は末つ子に二尺ほどの銀いろの鍵を渡す。角笛がひびく。）

末つ子　それではみなさん。行つてまゐります。

皆　さよなら。さよなら。御達者に。

末つ子　では。

（末つ子は鵠のあとから、何度も振りかへりながら續く。それから最後に手をあげ、合圖して行つてしまふ。）

（やや遠くで角笛の音。）

母親　（急にきれをとり出し）　末ちやんや。末ちやんや。（それを振る）

ちい姉　ああ、聞えたのよ。（やはりきれを出して振る）

（この時太陽がのぼる。見送つてゐるものの顔はみんな明るく照らされる。水車の音がはじまる。）

母親　（しばらくして我にかへり）　ああ。もう見えなくなつたよ。あの子はたうとう行つてしまつたのだよ。（力なくよろめく）

（みんな驚いてそれをささへる。遠くでもう一度かすかに角笛の音。）

――幕――

（大正七年一月作）

偽サンタクロース

七つの場面から出來てゐる話

一

「サンタクロースサマ。サクネンハアリガトウ。コトシモマツテヰマス。ヤマダハナコ」

二

隣りの女中　お孃さん、何を持つていらつしやるの。おや葉書ね。假名が書いてあるぢやないの。お孃さんもう字がお書けになるの。（裏返す）まあ宛名が書いてあるぢやないの。京橋區銀座、サンタクロース様。お父様の字字ね、あなたのお父様面白い方ねえ。あら本當の切手が貼つてあるぢやないの。勿體ないのねえ。お孃さんそんなに急に駈け出しては危なくつてよ。あゝいけません、いけません。いけなくつてよ、それをポストへ入れては。あら、入れてしまつた。――あゝあ、仕方がないのねえ。

三

銀座にて青年詩人　（口から白い息がたつ）雪がふるかな。すつかり軒並みに飾りつけたな。メリークリスマス、旗の色合がうまいや。即興詩が出來ないかな、出來ても金にならないや。寒いと腹が減るな。この二つの密接な關係について、ひとつ圖書館で徹底的に調べてやるかな。やけだからな。

おや、サンタクロースになる人募集。大正屋食料品店。この店かな。（不意に起る空想と歡び）なつてやらうかな。クリスマスの日いちにち。面をかぶつて髯をつけて。ストーヴに暖まつて。辨當はくれるだらうし。恥はあかるみに出ないし。オルゴールだの銀紙だのに取り卷かれて。――止さうかな。俺は無愛想だし、人好きはよくないし、すぐにかつとするし。――入らうかな。――止さうかな。――入らう！（店へ入つて行く）

四

年老つた郵便夫　面白い事もないな。クリスマスと新年と盆には、いつも俺は足に豆をつくつてしまふ。今日はちやんと踵へ油を塗つておいた。敵がその氣ならこつちもその氣さ。郵便！

えゝと、もう大分カバンが輕くなつたな。おや。これは番地が書いてないぞ。番地は書かんきやいかんといふ事にせんかな。なに。サンタクロース樣。馬鹿にしとる。おまけに大人の字だ。子供ならまだしも。破いてやらうか。後がうるさいな、往來などで破いては。めんだうだ！　いゝかげんに投り込んでやれ。こゝは止さう、主人が江戸ッ子らしいから。こゝも止さう、小僧が理窟を云ひたさうな顏をしとる。さうだ！　こゝがいゝ。赤い帽子をかぶつて白い髯を生やした男がぼんやり立つとる。こつちを向いたな。おや面だ。假装だ。面ならなほいゝ。郵便！

あれがサンタクロースといふ奴か。一體サンタクロースといふのは耶蘇の親父かしらんて。やあ、俺を呼び留めてゐる。逃げろ。逃げろ。

五

銀座店内のサンタクロース

（オルゴールの曲はロベルト・シユーマンの「子供の場面」作品第十五。丁度いま第二節の「不思議な噺」をかなでてゐる。）

變な郵便屋だな。俺に葉書をわたしていきなり駈け出したりして。俺が假装のサンタクロースだから、向ふも假装の郵便屋だといふ洒落かな。なに、サンタクロース樣。止してくれ、これあきつと「詩の泉」の仲間が俺を見ぬいたんだ。俺の友達でなくつちやこんな目茶な惡戯はするもんか。何でまた俺だつて事を見抜いたらうなあ。體格かな。手つきかな。靴の穴かな。靴の穴だ。あゝ、赤面しちやつた。さうか、面で人には見えないか。よしよし。

一體どんな事をかいて嘲弄つてゐるんだらう。なに、「サンタクロースサマ、サクネンハアリガトウ。コトシモマツテヰマス」。一向平凡ぢやないか。まさか火にあぶるととてつもない皮肉があらはれたりするんぢやないだらうな。しかし中野の消印だよ。をかしいな。さう云へば本當に子供の字らしいぞ。ヤマダハナコ。ヤマダハナコといふお嬢さんが書いたのだな。もし本當に書いたとすれば——

（「子供の場面」は第七節「夢想」に進行してゐる。）

（突然）お嬢さんありがたう！　僕は滿足しましたよ！オルゴールの「夢想」は白い心臟のやうにひゞいてゐる。お嬢さんの夢想も殺されはしなかつたぞ。涙がこんなに出て來た。奇蹟が行はれたのだ。通信の奇蹟が行はれたんだ。基督の生れた日に。東洋の都會のなかで。涙が鼻のあたまに溜つて痒いや。面を一寸脫いで拭いてやれ。

支配人が妙な顔をしてゐるな。自分勝手に面を脱いではいけないつて、今朝云ひきかされたからな。おや〱、こつちへ歩いて來たぞ。急いでかぶらう。かぶるかはりにこのビラの束を、ありたけ店ぢうに撒いてやらう。一、二、三。

（「子供の場面（キンデルスツエーネン）」は第十一節「おどかし」へさしかゝる。）

クリスマスお目出度う！

もうひと束。

クリスマスお目出度う！

もうひと束。

クリスマスお目出度う！

お嬢さん萬歳！

生きるあひだ空想を忘れない者萬歳！

支配人（飛んで來る）おいつ！　あんな氣狂ひを雇つちやいかんぢやないか。（卒倒しかける）今日は鶴屋と大正屋の大々――大的決戰日なんだ。（卒倒）

（しばらく色紙のビラの雨が靜かに降る。）

六

若い父親（新しい人形を抱いて眠つてゐる娘の傍で、夕刊を讀んでゐる）ほんとにサンタクロースから貰つたつもりでゐるな。その人形は右の頬にキズがある、それで安かつたんだよ。だがお母さんがな、青いリボンをうまく頬かぶりさせて、香水を着物にふりかけておいてくれたよ。（氣のない様子で夕刊を手にとる）ジグスがマギイを離縁すると痛快だな。（頁をめくる）はゝあ、銀座が大ぶんの人出だつたやうだな。「喜劇クリスマス、ローマンス」面白い事があつたやうだな。――「サンタクロースの大人氣――大正屋はそのために銀座第一の客來にて、店頭は押すな押すなと危ふく破壊されんとし」――どうしたわけだ。――「サンタクロースは胴上げされて身動きも出來ず――遂に右腕打撲傷――原因は極度に昂奮せる支配人の談によれば」――（熟讀）これは變だぞ。うちの花子ぢやないかしら。きのふ俺とクリスマスごつこをした時に――（娘を搖り起す）花子、花子。ちよつとお起き。――困るなあ、すつかり歩き草疲れて眠込んでしまつた。（お伽噺を一册とりあげ）さうだ、これだよ。俺がきのふ花子に讀んで聞かせたのは。（讀む）郵便を出せば世界ぢうのどなたとも話が出來るのです。郵便は鳩のとび出す魔術のやうにふしぎですよ。郵便局は世界のどこの國のどこの村にも建つてゐます。郵便は世界を暖かくつつむ目に見えない絹の網です。郵便で人と人とは手をつ

なぎます。これをあなた方の分るやうにやさしく言へば、郵便は……

若い母親　（割烹着を着、別の夕刊を持ち、笑顔をはち切らせて入つて來る）あなた、こつちの夕刊を讀んだこと！

父親　いや俺はこつちの夕刊を讀んだんだ。

七

省線電車の終點驛の驛夫。（電車のなかに眠てゐる詩人を起す）もしもし。起きて下さい。こゝは終點ですよ。終電車の終點です。一時過ぎましたよ。もう十二月二十六日です。どうしたんだらう、この人は。金や銀の鈴を肩からかけて。右の腕をくぢいて繃帶を頸から吊つてゐるな。喧嘩でもしたのかしら。
それにしちや眠ながら笑つてる。いゝ事があるのかな。いゝ喧嘩をしたのかな。
やあ吃驚した。そんなに跳び起きないだつていゝぢやありませんか。何をそんなに駈け出すんです。いやににこにこして。もしもし。切符をおいて行つて下さい。切符を下さい。あゝ驚いた。立ちふさがりでもしたら突き倒されるところだつた。切符もおかずに一直線に畑を突つ切つて行くな。なんて大膀なんだらう。やあ綺麗だな。頸のまはりの鈴にのこらず明りが點いたぞ。豆電燈を仕込んであるんだな。馬鹿に早足だから明りが見る見る小さくなつて行くぞ。やあ線路をかまはず突つ切つてゐる。危ない、危ない。あれあ氣が變なのかしらん。自殺しやしまいね。

居眠りしてゐた老驛夫　この頃のずるは上手くなつたよ。

粉雪の笑ひ聲　ちらちら。ちらちら。

（をはり）

（大正十四年十一月作）

田島淳篇

能祇（一幕）

時

昔、冬。

處

能祇の庵。

人

能祇。俳諧師（六十あまり）
名主。（五十ぐらゐ）
泥棒。（三十ぐらゐ）
村の娘。（二十たらず）

凩の音。

そのうちに幕あがる。

凩の音。

舞臺、殆んど闇黒。

唯、下手寄りに圍爐裏の殘り火、僅にあかし。

能祇（床のなかにて）おゝ寒い寒い。どうも眠られぬわ。なんといふ寒さだらう。それに、斯う腹が空いてゐては、とても堪らぬわい。どうにかして、早く眠つてしまひたいものだがなあ。——（間）——やつぱり駄目だ。えゝいつそのこと起きて、ひと煖り、煖るとしようか。（起上る。）おゝ寒い。（行燈に灯をつける。舞臺、全く明かるし。正面は、右が狹き床、左に、それに連りて三尺の戸棚の上に椅形の佛壇、又それに連りて出入口の障子二枚、それを開けると縁と雨戸。上手は柱を中央に奥一間は壁、手前一間は窓。下手は奥一間が廚への出入口と壁、手前の一間は戸棚。床に梅、佛壇の前に鐘、行燈の側に机、すべてみな、俳諧師の庵に、ふさはしきこしらへ。——圍爐裏に粗朶をくべ終つて、兩手をあぶりながら）おゝ寒い寒い。なんてまあ寒いんだらう。おゝ寒い。——（間）——何か喰べるものは無いかなあ。堪らなく腹が空いてきた。二日も喰べないでゐると、どうもかう心までこたへるわ。この名主殿に頼まれた伊勢物語さへ寫しあげてしまへば、あと一月ぐらゐは、樂なものだが。さうだ、あすは、ひとつ前借りに出かけるとしようわい、何か無いかなあ。斯う空いてきては、どうも堪らぬわ、飯が喰ひたいなあ。飯でなくつても何んでもいゝけれどもなあ、何か無いかなあ。菓子のかけらでもいゝがなあ。ひとつ探してみるか。と云つたところで、有る筈は無し、でも、若しやと云ふことがある。えゝひとつ探してみるとする

か。（と立上る。）菓子、菓子、菓子、菓子と、あゝ何か喰べるものは無いかなあ。喰べ物、喰べ物、喰べ物、喰べ物と、（戸棚の中、佛壇の中等、諸所を探す、無し。）呆れたものだなあ。（此時、部屋のなかほどの疊一枚、次第に、もち上つてくる。これに氣附いて思はず飛び上つて色を失ひ、すさりすさつて、戸棚の中にかくれ入りしが、またそうつとあけて首だけ出し、こはごは見つめながら、やゝあつて）泥棒かな。――（首をかしげ）でも、こんなうちへ入つてくる筈は無し、――と云つて怨をかつたおぼえはなし、――身に恐れるところは無いが、――（疊、突然、激しく上つて、泥棒の半身現れる。思はず戸を閉す。泥棒もびつくりして、ひつこむ。しばらくたつて、能祇また、そうつと首だけ出す、泥棒もまたそうつと首だけ出す。兩人、顏を合せて言葉無くして見つめあふことしばし、――やがて、無理に力を入れて）だれだあ。

泥棒　泥棒だ。

能祇　（安心の體にて）泥棒かあ。

泥棒　シーツ。

能祇　（急に側にかけ寄つて）上がらつしやれ〳〵。（と手傳つて上がらせ）さぞ寒かつたでござらう。さあ煖らつしやれ〳〵。（と蒲團をかたづけて、圍爐裏のはたに坐つて、粗朶をくべる。泥棒は立ちしまゝ煖る。粗朶をくべながら）さぞ、寒かつたでござらう、この夜更けにまあ〳〵――（下から見上げて）そなた、何か喰べる物を持つてゐないか。

泥棒　（つッけんどんに）喰べる物があるくらゐなら、泥棒になんか入るか。

能祇　なる程。

泥棒　何か喰はせろ。

能祇　ヤアそなたもか。

泥棒　ナニ。

能祇　わしは腹が空いてゐるんだ。

泥棒　勝手にしろ。

能祇　わしは二日も飯を喰はないんだ。

泥棒　嘘をつけ、何か喰はせろ、俺は四日も喰はないんだ。

能祇　――上には上が有るもんだなあ。

泥棒　馬鹿にするな、何か喰はせろ。

能祇　喰はせたいけれどなア。何んにも無くつて、わしもやつぱり腹が空いてゐるんだ。

泥棒　喰ひ物が無ければ金が有るだらう。

能祇　金も無いんだ。

泥棒　嘘をつけ、出してしまへ。

能祇　ちつとも無いんだ。

泥棒　おやあ探すぞ。
能祇　ウム探してくりやれ。
泥棒　ヨシ。（探しまはる。能祇、そのうしろについて、一々覗く。）うるさいッ。（能祇、圍爐裏端にかしこまる。何んにも無し。）呆れた奴だ。
能祇　わしも、今、呆れてゐたところなのだ。
泥棒　こんな所に長居は無用だ。（と出て行かうとする。）
能祇　マア待つた。
泥棒　なんだ。
能祇　マア待つた。朝になれば、わしが金を借りてくる程に、さうすれば喰へる。それ迄まあ、こゝで待たつしやれ。
泥棒　朝迄待てるか。
能祇　だいぶ空いてゐるとみえるな。ぢやあ、折角だが、何んのおあいそも無かつたが、では、こんど寄らつしやれ。こんどこそ御馳走をしますぞえ。
泥棒　ふざけるねえ。
（と、正面の障子をあけて、其そとの雨戸をあける。風、吹き込んで、圍爐裏の火はをどり、行燈は消えかゝる。
雨戸を閉めて出て行く。）
能祇　――（突然、立ち上つて、急いで雨戸をあけ、大聲に）待つたあ。
泥棒　なんだ。――（再び現れる。）
能祇　待つた。いゝものがあつた。待つた〳〵。（と急いで、机に行つて、紙に何やら書き）いゝものがあつた待つた〳〵。（と、それを泥棒の方に持つて行き）これを、そなたにあげる程にな、いつかまた此村を通る時があつたら、どこでも、大きなうちへ行きさへすればな、こゝの坊主が書いたものだと云へば、いくらにでも買ふてくれるわ。これをそなたに進ぜよう。
泥棒　（不審相に）さうか、ぢやあ貰つて行くとしよう。
（と懐に入れ）ありがたう。（と去る。）
能祇　さやうなら。――（見送つて）まるで風に飛ばされて行くやうだわい。氣の毒な御人だなあ。――おゝ、もう東が白んできた。早く喰ひたいものだなあ。（と戸を閉して、座敷に歸る。）四日も喰はないと云つたな。さぞ、空腹じいことであらうのう。（鶏、鳴く。）たうとう寢ずにしまつたわい。（さつきの、ちらかした机の上を、とりかたづける。紙の綴ぢたのを開いて見て）まだ、だいぶあるな。あと二日三日だな。（あちこちにて盛んに鶏鳴く。上手の窓の雨戸をあける。）風も無くなつてしまつたな。（蒲團を戸棚に納つて、机、行燈を片隅に押し寄せ、正面の雨戸を皆あけて座敷を掃き出す。）

机を元の位置に直して、手拭をとつて正面の椽から降りて椽先きの井戸で顔を洗ふ。次第に曉の色になつてきて明ろくなつてくる。鷄の聲。能祇の水を流す音。鐘、靜に響きわたる。——座敷に上がり佛壇の前に坐つて靜に鐘をうつて合掌する。拜み終つた頃、おもての方にあたつて、にはかに騷々しい人聲がする。正面の出入口の方を見やつて）なんだらう。

名主　（障子をあけて現る。）お早うござります。

能祇　ヨウ名主どの、これはお早うござります。ササさどうぞこちらへ。

名主　ありがたうござります。（と、うしろをふりかへり）お前達は、もう歸つてい丶。

（がや〱しながら、人聲遠くなる。

何者にか、つきとばされて、泥棒、再び現れる。うしろ手に縛かれてゐる。）

能祇　（びつくりして）ヨウ。

泥棒　おぼえてゐろ。

能祇　さつきの仁ではないか、こりやマアどうしたことでござるの。

名主　（上りながら）いつもながらの能祇殿のお智慧には、イヤまことに感服つかまつ丶てござる。（と坐る。）

能祇　一體、なんでござるな。

名主　イヤ恐れ入つたものでござる。イヤ驚き入つたものでござる。このやうな智慧をもつて、泥棒をつかまへさせるとは、イヤどうも恐れ入つたものでござる。

能祇・なんでござるな。手前には、とんと、わけが、わかりませぬわ。

名主　ヤそのやうに仰せられるな。早速、代官所へ、御足勞ながら、御同道を願ひたいもので。

能祇　代官所へ。

名主　さうでござる。此野郎を代官所へ引つ立てるのでござる。それにしても、馬鹿な奴ではござらぬか、能祇殿の智慧に、か丶るとも知らいで、字の讀めぬ阿呆の悲しさには、エヘ手前どもの門を叩いて、これを出してござる。（と、さつきの紙を見せる。）

能祇　（紙と、ふたりの顏を、見比べてゐたが、突然、頭をかきながら）ヤハハハハ……（と笑ふ。）

名主　アハハハ……（と共に笑ふ。）

能祇　（あわて丶、それを制し）此仁(このじん)は泥棒ではござらぬわ。（泥棒の方にむいて）御氣の毒でござつたなア。

名主　泥棒では無い。

能祇　いかにも泥棒ではござらぬわ。

泥棒　それみろ。

名主　でも、これに書いてあるではござらぬか。（讀む）

泥棒がかどたてゝ行く夜寒かな。此句なるべく高く御買ひ取り下されたく候、能祇。泥棒がかどたてゝ行く夜寒かな。と、書いてあるではござらぬか。

能祇　でも泥棒ではござらぬわ。

名主　――イヤ、なにも、そのやうに怖がるには及びませぬわ。この位な奴ナーニ。

能祇　イヤ、全く以て泥棒ではござらぬ。

名主　――

能祇　――ウ、では、何かわたくしの物を持つてをりましたかな。

名主　ウム、それは。

能祇　早く繩を、といてあげていたゞきたい。（泥棒に）御氣の毒でござつたな。（名主に）　早く繩をといてあげていたゞきたい。

名主　ほんたうでござるか。

能祇　ほんたうでござる。早くといてあげていたゞきたい。

名主　大丈夫でござるか。

能祇　大丈夫でござる。さあ早くといてあげて、いたゞきたい。

名主　大丈夫でござるな。

能祇　――（うなづく。）

名主　なんのこつた。（と繩を、ときはじめる。）

能祇　ありがたうござる〳〵。――（繩、とかれる。泥棒に）　あゝ御氣の毒でござつたな。あやまりまするぞえ。あやまりまするぞえ。（名主に）　なんとも申し譯ござらぬ次第。手前の胸に浮びしまゝを、句にしたゝめしが事の起り、なんとも申し譯ござらぬ。（泥棒に）　あやまりまするぞえ。御氣の毒でござつたな。あやまりまするぞえ〳〵。（名主に）　なんとも申し譯ござらぬ。

名主　さうでござつたか。

能祇　なんとも申し譯ござらぬ。（泥棒に）　御氣の毒でござつたな。

名主　――（間）――泥棒は、すゝり泣きしてゐる。（間が惡るさうに）　手前――手前、いろ〳〵用がござりまするし、それに、まだ朝飯前でござれば、これで御免かうむります。

能祇　マよいではござりませぬか。

名主　イヤまだ朝飯前でござれば。

能祇　イヤ手前もまだでござる。それは丁度ようござる。折角のおいで、何は無くとも是非さしあげたい、マよいではござらぬか。

名主　またこん度御馳走にあづかりませう。

能祇　マよいではござらぬか。

名主　またこん度——
能祇　そのこん度が面倒。何は無くとも是非さしあげたい。是非マあがつていつて戴きたい。
名主　さうでござるか。デハ御言葉にあまえて御馳走になりませう。
能祇　それは忝けない。では早速ながら金子を少々御借り申したい。ナニ伊勢物語さへ寫してしまへば、必ず御返し致します程にな、少々ばかり金子を御借り申したい。
名主　さやうでござるか。（と金をとり出し）——デハまことに失禮ではござれど、これはおみやげのしるしに。
能祇　ナニおみやげは、おみやげ。これはまた手前の志でござれば、さやうな御心置き無く、遠慮無くあがつていつていたゞきたい。（と金をとる。）
名主　さやうでござるか。では、御馳走になりませう。
能祇　では、ちよいと、行つて參りまする程に、暫く御待ち下さりまし。
名主　どうぞ。
能祇　（泥棒に）暫く待つてゐて下されや。（と立ち上る。よろめく。）
泥棒　——（突然）おいらが行つてこよう。
能祇　（ふりかへり）エ、そなたが行つて下さる。それは忝けないな、——では、お頼みするかな。ありやうは、だいぶ草臥れてゐたところだ。それは忝けないな。では、いつそ、お頼みするかな。かうッと、ウム、このお方のおうちのぢきさきにな、同じ側ぢや、何んでも商うてゐるうちがある。そこに行つてな、米と、酒と、それからほかに何か、見つくろうて買うて來て下され。御願ひしまするわ。いま風呂敷を持つて來まするからな。忝けない〳〵。（と戸棚から風呂敷を取り出して、金と共に泥棒に渡す。）忝けなうござるな。
泥棒　どの位づゝ——。
能祇　ウム、米を——二升にな、酒をそれから一升、で、あとので何か、見つくろふて買ふてきて下され。あひすまぬな。
泥棒　ナニ。では、ちよつくら行つて參ります。
能祇　ありがたうござるな。（泥棒の出て行くのを見送つて）御苦勞でござるな。——（名主に）近頃、どうも弱りましてな。それに、かう腹が空いてをりまするると、思ふやうに歩けませぬでな。
名主　アハ御冗談を。

鶯鳴く。

二人障子の方を見る。

鶯鳴く。

だいぶ天氣が、つゞきまするな。

能祇　ことしは雪も少なうござつたな。

名主　さやうで、長命寺の梅も、もう、苔を、もつてきましたわい。

能祇　もう苔を。それは、早いことでござるな。

（此時、正面の障子に、籠を背負つた娘の影がうつつて行く。急いで立ち上つて、障子をあけて呼びとめる。）

娘さん〳〵。

娘　（ひつかへして來て、正面の出入口に現れる。）ありがたうございます。味噌漬けに、大根に、梅でございます。

能祇　ちつと、お願ひがあるんだけれどもな。どうだらう。みんな買ふけれどもな。

娘　エ。

能祇　ちつと、お願ひがあるんだけれどもな。

娘　アノみんな買うて下さる。アノみんな、ほんとに。

能祇　ア、だけれど、ちつと、お願ひがあるんだけれどもな。働き賃は出すけれども、ちよいと、一時ばかり、済まないけれども、働いてくれないか。

娘　アイ〳〵。ナニそんなこと、どうせ町へ行つて、これを賣るには、一日かゝるんですもの、夕方迄働いたつて、よございますよ。

能祇　それは忝けない。では、むかふへ、まはつてくれないか。（と下手をさす。）

娘　あい〳〵。（と下手にまはる。——能祇も下手の方に行く。——厨に上つて）これは、どこへ置きませう。

能祇　ア、そこへ置いといてもらはう。そこにいれ物があるからな。

娘　梅は、どこへ置きませう。

能祇　梅か、（井戸端の方を見やって）それは要ると、アーット、ア、これへ水を入れてくれないか。（と鐘を渡す。）

娘　あい〳〵。（と、それを受け取つて、水を入れて能祇に渡す。）

能祇　ありがと〳〵。いま、米がくるからな。さうしたら、たいて下されや。

娘　（うなづく。）

能祇　どつこい〳〵〳〵。（と鐘を、よきところに運んでから、次には梅を、かゝへて持つてくる。）

名主　（あつけにとられてゐたが、始めて、口を開き）よい梅でござるな。

娘　たくさん、苔をもつてをります。

能祇　ア、お錢を拂ふて下され。

名主　——。（懐より財布を取り出して、娘に、金を渡す。）

娘　ありがたうございます。いま、おつりを出します。

（名主、財布を持つて待つてゐる。）

能祇　（そつちには、目もむけず、一心に梅を生けながら）ア、つりは働き賃ぢや。

娘　ありがたうござります。（名主、財布をひつこませる。）では、火を、おこしておきませう。

能祇　ア、粗朶が、そこにあるから。（能祇は、一心に梅を生け、娘は粗朶をくべて、火をおこす。）

名主　よい薫りでござるな。

能祇　長命寺の梅も、デハあと五六日で見頃でござるな。

名主　さやうで、また、さだめし、人が出ることでござらう。

能祇　その頃迄には、伊勢物語も寫しあげてしまひますぞえ。

名主　ありがたうござります。

泥棒　（正面の出入口に現る。）行つて參りました。

能祇　ア、これは、お早うござつた。――ありがたうござる。

泥棒　米に、酒に、昆布巻を餘つたゞけ、買つて參りました。

能祇　エ、昆布巻、それは結構、結構、何より結構。では早速、仕度をしまするかな。ア、娘さん。米がきましたから、いゝ程、たいて下されや。（と立ち上る。）

娘　あい／＼。（と米を持つて廚に入る。）

能祇　ア、これは、たつぷりでござるな。（と酒徳利を取つて來て、圍爐裏にかけ、机を、その上の物をおろして、よきところに据ゑて、茶碗、皿等を持つて來て、膳ごしらへをする。泥棒も手傳ふ。名主は煙管を取り出して煙草をすふ。娘は井戸端で米をといでゐる。膳ごしらへが終つてから）ア、サウ／＼。（と俎板を取りだして大根を切り始める。）

名主　お上手でござるな。

能祇　なれてをりまするからな。

名主　アハハ……（と能祇と共に笑ふ。）

泥棒　（手傳ひ終つてから圍爐裏端に行つて粗朶をくべてゐたが、やがて徳利にさはつて見て）もう、いゝかも知れねえ。

能祇　アさうでござるか。（娘に）では、これもひとつ煮ておいて下されや。

娘　（米をとぎながら）ようござります。

能祇　（泥棒が熱い徳利を持ちかねてゐるのを見て）ア、そこに手拭がある。それでとつて下され。

泥棒　これで、よござい ますか。

能祇　ア、かまはん。（名主に）ササさあこちらへ。

名主　では、御馳走になりまするかな。（と煙管をしまつて立ち上る。）
能祇　さあ、こちらへ。（と名主を、上手に坐らせ）さあ、こちらへ。（と泥棒を、それにむかつて坐らせる。）
泥棒　丁度よござ います。（と德利を眞ん中に置いて坐る。）
能祇　それは忝けない。（と自分も眞ん中に坐り）何も、ほんたうに、ござらぬけれど、くつろいで、あがつていたゞきたい。（ふたり共、頭を下げる。）さあ、いかゞでござるな。（と名主にさす。）さあさあ、（と泥棒に、さうとする。泥棒、ためらつて、自分が能祇に酌をしようとする。）イヤ、さあさあ。（と、さす。）
泥棒　ありがたうございます。（と貰つてから、こん度は能祇にさす。）
能祇　ア、これはありがたうござる。
名主　では、頂戴致しまする。
能祇　さあ、さあ。
泥棒　いたゞきます。
能祇　さあ、——（飲む。）アヽこれはいゝ心持ちでござるなア。——ア、さあ、昆布卷は、いかゞでござるな。
名主　頂戴致しまする。
能祇　これはうまい。
名主　結構でござるな。——（泥棒、名主にさす。）ア、これは忝けない。ありがたうござる、ありがたうござる。（と、うけて飲んでから、こん度は泥棒に盃をさす。）
泥棒　（片手を首筋にやつて）——濟まねえ。（と、うける。）
名主　さあ、さあ、——先き程は、失禮しましたな。許して下されや。
泥棒　（あわてゝ、それを制し）ナニ、おいらこそ堪忍してくんねえ。
名主　イヤ許して下されな。
泥棒　ナニおいらこそ堪忍してくんねえ。そんなこと云はれると、おいら、もう、堪らねえ——（と涙ぐむ。）
名主　イヤわしがとんだ粗忽から起つたこと、どうか、勘辨して下されな。
泥棒　堪忍してくんねえ。面目ねえ。——（と泣きだす。）
能祇　まあいゝわ〳〵。——お前さん、さぞ、空腹いだらうなう。どうして、また、四日も喰ひなさらなかつたんだえ。
泥棒　——堪忍してくんねえ〳〵。——よく聞いて下された。——堪忍してくんねえ。（と顏から掩つてゐた手をとる。）
能祇　ナーニ。
泥棒　おいらは隣國の者だ。——金を貯めてなあ、——その金を持つて、都へ出て何か商賣しようと思つて國を出

て來たんだ。さうすると、あの國境の峠で――惡い奴にその金をみんなとられてしまつたんだ。
能祇 名主 エ、。
泥棒 だけれどなア、折角出て來たもんだから、都へ行つたら、また、どうにかなるだらうと思つてなあ、こゝ迄やつて來たけれど、あんまり腹が空いたもんだから、惡いことゝは知りながら、つい、こゝのうちへ入つてしまつたんだ。堪忍してくんねえよ。――
能祇 名主 アさうか。――お氣の毒でござるなあ。アさうか。
名主 ――ウ此句を、わしが高く買ひます。
能祇 エ。
名主 此句をわしが高く買ひませう。
能祇 ――買ふて下さる。アノ買うて。アそれは忝けないな、忝けない〳〵〳〵
名主 高く買ひませう。
泥棒 アそんなことといけない、そんなことといけない〳〵〳〵
能祇 （あわてゝ、それを制し）遠慮しちやいけない。遠慮しちやいけない〳〵〳〵
泥棒 だつて。
能祇 遠慮しちやいけない、此お方は金持ぢや、遠慮しちやいけない。馬鹿な。遠慮しちやいけない〳〵〳〵〳〵（名主に）サなるべく高く買うてあげて下され。
名主 よろしうござる。――さア（と金をおく。）
能祇 さアとつとけ。
泥棒 だつて。
能祇 さア、とつとけ、とつとけ、とつとけ〳〵〳〵……
泥棒 ――ありがたうござりまするッ。
能祇 （膝をうつて）ア、目出度い。ア、目出度い。
名主 その金を持つて、都へ上りめされや。
泥棒 ありがたうござりまするッ。
名主 必ず出世なされや。
泥棒 ありがたうこざりまするッ。
能祇 あゝ目出度い。あゝ目出度い。――ウ、、ササさあア飮みませう。さあア飮みませう。（と三人につぐ、泥棒だけ、盃を、とらざるを見て）さ、そなたも、お飮みなされ。あゝ目出度い。（一口飮んで）あゝ目出度い。（と、また飮んで盃を置き）あゝ目出度い。――ウワハハハ……
名主 お目出度うござる。さあ門出をお祝ひ申さう。（と泥棒にさす。）
泥棒 （それをうけて）此御恩は決して忘れは致しません。

名主　必ず出世なされや。

泥棒　きつと出世致します。

能祇　あゝ目出度い。（と酒をつぎまはす。）・輝く笑顔。樂しき笑ひ。盃のやりとり。娘、米をいれた鍋をもつてきて、圍爐裏にかけて火をあほぐ。

能祇　ア、大根も煮て下されや。

娘　あい／＼。

輝やかな笑顔。樂しき笑ひ。盃のやりとり。樂しき笑ひ。娘、しきりに火をあふぐ。

そのうちに　幕

如皐と默阿彌（一幕）

時

明治十四年六月二十四日

處

東京淺草馬道猿寺横町の瀨川如皐の家

人

三世瀨川如皐　七十五歳
二世河竹新七（默阿彌）　六十六歳
如皐の妻おたつ　六十五歳
醫　者
隣家の女房

暮れがた。——

瀨川如皐のさゝやかな住居。——二間つゞきで上手の一間は書齋になつてゐて、まだ灯をいれない薄暗いなかに如皐が病みほうけて寢てゐる。其上手は障子を隔てゝ臺所。——下手の一間は玄關兼茶の間で、其正面の障子の外は土間で格子。——

醫者が如皐を診察してゐる。女房のおたつは其後に坐つて團扇であふいでゐる。

醫者　（やがて、診察し終つて手を洗ふ。拭きながら——おたつに）あした藥をかへてみますがね。（如皐に）にがいけども、我慢して飲むで下さい。

（おたつは、茶を入れかへに立つ。）

如皐　先生。

醫者　…………

如皐　もう駄目でせうなア。

醫者　ナなにがです。

如皐　イヤもうおさらばでせうなア。

醫者　トとんでもない。すぐになほりますよ。

如皐　イヤどうか、ほんとのことを仰言つてくださいまし、ちつとも氣にいたしませんから。

醫者　ほんとも噓もありやあしませんよ。すぐになほりますよ。

如皐　……さうでせうか。

醫者　おきなほりますとも。だが、靜かにしてゐなきやあいけませんよ。今が肝腎の時ですから。

如皐　肝腎と云ひますと。

醫者　イヤすぐなほりますよ。早くなほつて、またなにか面白い芝居でも書いてください。

如皐　……ネエ先生。どうか、ほんとのことを仰言つてくださいまし。ちつとも氣にいたしませんから。自分ぢやあ、もうこんどは、おしまひのやうな氣がするんですが。

醫者　イヤアそんなこたあありやあしませんよ。とんでもない。あ芝居つてばネ、今度の新富座は大變な前景氣ですよ。御存知でせうが、なんでも菊五郎のおぢいさんの追善興行とかでネ、アさう〳〵猩猩狂齋のかいた土蜘蛛の看板が大した評判ですよ。……お茶屋の二階へは盆燈籠をさげましてネ、そりやあもう大變な景氣ですよ。早くなほつて（おたつ、茶を持つてくる。）御一緒に觀に行くんですな。……ハ、、……アぢやあ、お大切に。（と立ち上る。）

おたつ　ありがたうございます。

如皐　ありがたうございます。

　おたつは醫者を送つて行く。

　醫者は土間におりてから、おたつに何やらさゝやく。おたつは、驚いて、何やら聞きかへす。ふたりは、しばらく話しあつてゐる。

　――やがて、醫者は挨拶をして歸つて行く。

如皐　オイ。おたつ。（おたつ、來る。）なんてつた。エ、なんてつたんだ。先生は、

おたつ　なんとも云やあしないよ。

如皐　あゝ。おまへまでが嘘をつくのか。

おたつ　嘘なんかつきやあしないよ。

如皐　おまへはちやんと知つてるぢやあないか。俺やあ、もう、覺悟をしてるんだ。去年弘福寺のお住持にたのむで戒名までもつけてもらつてあることを、おまへはちやんと知つてるぢやあないか。

おたつ　だつて、だつてなんとも云やあしないよ。

如皐　おまへまでが嘘をつくのか。……俺やあ、もう、ちつとも氣にしやしないつたら。

おたつ　だつて、なんとも云はないものを。

如皐　いゝ。いゝ。おまへにも、ずゐぶん苦勞をかけたなあ。

おたつ　なにを云つてるのさ。……ア、ネ先生も云つてたぢやあないか。ネ、サア早くなほつて新七さんの土蜘蛛でも觀にゆかうよ。ネ。

如皐　チエッなんでエ。新七の土蜘蛛か。なんでエ、たかが能から盗むだもんぢやあねえか。

おたつ　……だつて大變な評判だよ。

如皐　チエッなに云つてやがんでえ。新七なんかにやア何一つ自分のものなんかア書けやあしねえんだ。みんな講釋種や何かの燒き直しばつかりぢやあねえか。

おたつ　…………

如皐　第一、俺がこんな目に遭つてるのも、みんなあいつのおかげなんだ。小團次つて奴も奴だ。死んだ奴のことを……なにも、云ふんぢやあねえが、なんでえ、たかゞ市村座の火繩賣の息子ぢやあねえか。誰があれほどまでにしてやつたんでえ。

おたつ　……ほんとにねえ。

如皐　櫻莊子をやつて百日間も打ちつゞけたなあ、いつてえ誰のおかげだ。切られ與三の觀音久次や黒田騒動の安養法師をやらして賣り出さしたなあ、誰のおかげだ。

おたつ　………

如皐　それを新七の奴が攫つて行きやあがつたんだ。たかが葱塚の殺し場をちよつと直したばつかりで攫つて行きあがつたんだ。また喜んでくつ附きあがる小團次も小團次だ。

おたつ　………

如皐　この瀨川如皐つてえ名を左交さんがあの新七の野郎に讓つてやらうつて云つた時に、なんて云やあがつた。そんな立派なお名前はつて辭退しやがつたぢやあねえか。その瀨川如皐を襲いでるこの俺が、いつてえ、なんてざまだ。

おたつ　ア、靜かにしてくださいよ。ネ、ア、サア。

如皐　その左交さんの守田座へも大きな面アして入りこんでゆきあがつた。この俺の中村座へも大面アして乘りこんできやあがつた。ナなんてやつだ、ほんとに。ろくなもの一つ書けもしやがらねえくせに。なんでえ、どれもこれもみんな燒き直しものばつかりぢやあねえか。すぐ目と鼻の間にゐやあがつて、見舞にひとつきやあがらねえ。（ひどく咳きこむ。）

おたつ　（さすりながら）ア、シ靜かにして。お湯を飲むかえ。

如皐　水をくれ。

（おたつ、飲ませてやる。醫者の手を洗つた金盥を片附ける。）

おたつ　……ほんとにねえ。……なんでも、隨分いゝ暮しをしてるんだつてねえ。猫までが河岸の尾寅のもんでなきやあ喰べないんだつてさ。この間うちへきた魚屋が地内の師匠のとこへ持つて行きやあ魚の良い惡いはすぐわかる。魚を一つぺらづゝ切つて猫にやると、場違ひのものは喰べないつてさう云つてゐたよ。

如皐　チエッなに云つてやがんでえ。地内の師匠が聞いてあきれらあ。師匠師匠つて師匠風吹かせやがつたつて、うしろへまはりやあ、みんな舌ア出して笑つてることを知らねえのけえ、九代目だつて誰だつてみんな感心してやあしねえんだ。みんな馬鹿にしながら、おだてゝこき

使つてるんだ。こゝへでもきてみやあがれ。ほんとに、
洗ひ浚ひみんな云つてやらあ。その高慢ちきな鼻おつぺ
しよつてやらあ。

おたつ　ほんとに、うんと云つてやるがいゝよ。

如皐　云つてやるとも、洗ひ浚ひ、なにもかもみんな云つ
てやらあ。足腰の立たねえやうにしてやらあ。

おたつ　ほんとに思ふ存分うんと云つてやるがいゝよ。

如皐　云つてやらねえで、どうするもんけえ。……

おたつ　ア、アノ今ランプを持つてくるからね。（と立ち
上つて、玄關に行き障子をあける。）ア、こりやあどうも
ありがたうございます。

隣りの女房の聲　いゝえ。

おたつ　いつも撒いていたゞいて。

聲　いゝえ。お互ひさまだよ。

おたつ　どうもありがたうございます。（とランプをとる。）

聲　ア、アノ今ネ、地内の師匠がネ、そこで玉子を買つて
たよ。なんでもおまへさんとこへくるらしかつたよ。

おたつ　エ。さう。

聲　ア、。

おたつ　（如皐に）噂をすりやあ影だねえ。

聲　エ噂をしてゐたの。

おたつ　エ、。

如皐　きやがつてみろ。

おたつ　（隣りの女房に）でも、うちぢやあないかもしれ
ないわ。むかふはえらいんだもの。

聲　いゝえ。おまへさんとこらしかつたよ。

おたつ　さう。

聲　アけふはどうなの。

おたつ　……（わざと夫に聞えるやうに）ア、アノネ今お
醫者さんがさう云つたのよ。だいぶいゝんだつて。もう、
すぐに、なほるんだつて。

如皐　チエッ。

聲　アさう。そりやあいゝ按排ね。お大切になさいよネ。

おたつ　ありがたう。

聲　うちぢやあ、まだ歸つてこないのよ。

おたつ　さう。ア。（と外を指差す。）

聲　さうら。

おたつ　アぢやア、アノ晩にでもお話にいらつしやいよ、
ネ。

聲　ありがたう。ぢやお大切に。

おたつ　（會釋なして急いで障子をしめ）やつてきやあが
つたよ。（と、ランプを持つてくる。）

如皐　さうか。驚いちやあいけねえぞ。うんと云つてやる
から。

おたつ　うんと云つてやるがいゝよ。近所にゐやがるんだもの、なんぼなんでもこない譯にはゆかないいんだらうよ。
如皐　云つてやるとも。
（おたつは、マッチを擦つてランプをつける。）
（……格子をあける音がする。）
新七の聲　御免ください。
おたつ　（如皐と顏を見合せて、障子をあけ）いらつしやいまし。
新七　ア、こんな夕景にうかゞひまして。ヤもうとうにお見舞にうかゞはなきやならないいんですが、ヤもう何や彼や忙しいもんですから、どうもつい失禮をしてしまつて。
おたつ　サア、マアどうかお上りくださいまし。
新七　（一禮して、上る。）
おたつ　ちらかつてゐまして（――枕許に座蒲團を置く。）
新七　（坐つて）どうなすつたい。
如皐　ヤア……
新七　とつくに、こようと思つてたんだけど、ヤもうちつとも暇がないもんだから。
如皐　忙しくつて結構だよ。
新七　ヤどうも。
如皐　………
新七　どこが惡いんだイ。
如皐　ヤ、腹を少うしやられてネ。
新七　そいつあいけねえや。大切にしなけやいけねえ。
（おたつ、茶をもつてくる。）
（新七、頭をさげる。）
（おたつは、また茶の間の玄關に行く。）
如皐　土蜘蛛が大變な評判だつてね。
新七　ヤ、ナーニつまらねえ。たかが能を書き直したもんだよ。
如皐　………
新七　どうも、ほんたうにもういやんなつちやふよ。自分の書きたいつてものは何一つ書けないいんだからねえ。こんども音羽屋がきて三世の追善に三世が蜘蛛のだんまりをやつたことがあるから、自分も何か一つ蜘蛛のものをやりてえつてんでね、それから守田さんもきて、ぢやあマア、能の土蜘蛛でも直してくれつてことになつて、マア據處なく筆をとつたのさ。
如皐　………
新七　ほんとにもういやんなつちやふよ。狂言作者だ何だつて云つてゝ、いつてえ、どこが作者だつてんだ。ネエ。役者だの座元だのゝ註文で講釋種や何かばつかり、でつち上げさせられてゐるんだからなあ。ほんとにもういやんなつちやふよ。

如皐　でも大變な評判ぢやあねえか。

新七　俺やあ、もう、つく／＼考へたんだ。實は、俺やあもう、今年で引退をしようと思つてるんだ。

如皐　エなんだつて。

新七　俺やあ、もう、なにもかも、みんなすつかり、おさらばをしてしまはうと思つてるんだ。

如皐　ドどうして。

新七　ヤア、もう、やりきれねえや。

如皐　ナなにが、どうしたつてんだ。

新七　ヤもう俺やあ、たまらねえんだ。芝居のやつだつて、なんだつて、みんな俺をいゝ馬鹿者扱ひにしてこき使つてるんだからなア。

如皐　…………

新七　俺やあもうほんとにたまらねえんだ。みんなで、よつてたかつて、なんだのかだのつて俺の惡口ばかり云つてやあがつて、いゝコケ扱ひにして笑ひもんにしてるんだからなア。それでゐて蔭ぢやあみんな爪を研いでる奴ばつかりなんだ。ちつとでも俺にもう隙がありやあ俺をぶつ倒さうつて奴ばかりなんだ。

如皐　…………

新七　ヤアそれにもう近頃は演劇改良だとかなんだとか云やあがつて寄ると觸ると五月蠅くつてやりきれねえや。

如皐　…………

新七　ヤまつたく田舍者の新しがりやは、ほんとにもう始末におえねえよ。ナア人情つてものが、いつてえ改良出來るかつてんだ。つまり人情をザンギリにして金時計をぶらさげようつてんだ。ヤどうもモウ油つ臭くつて頭垢つ臭くつてやりきれねえや。

如皐　…………

新七　依田學海が此間あるひとに「狂言作者なんてものァ新七みてえな馬鹿でも出來るんだ」つて云つたさうだ。笑はせやがるぢやあねえか。馬鹿にしてやがらあ。ヤ俺やあそんなこたアもうちつとも氣にしやあしねえがネ。なんだか、かう、もう、……やりきれねえんだよ。……ヤアつまらねえことを云つてすまなかつた。

如皐　…………

新七　だがなあ俺やあもうほんたうに引退をしようと思つてるんだよ。去年あゝして先代の葱塚は建つてしまつたし、座の方も、みんなそれ／＼弟子をまはしてしまつたし、俺やあ、もう、實は藤澤の遊行寺から阿彌號を貰ふことにまでなつてるんだ。

如皐　オイおたつ起してくれ。

新七　アいけねえよ。寢てゐなよ。

如皐　イヤ寢てばつかりゐると背なかが痛くつてやりきれ

ねえ。

おたつ　寝てゐた方がよござんすよ。

如皐　起してくれつたら。

おたつ　でも。

新七　寝てゐた方がいゝよ。

如皐　起してくれつてば。

おたつ　ぢや、ほんの少しね。

新七　いゝんですか。

おたつ　ぢやあ、また、すぐ寝てくださいよ。

（と、如皐を起す。）

新七　寝てゐた方がいゝのに。ヤ騒がしてすまなかつたなア。

如皐　……（間）……イヤア全くだよ。芝居者なんて奴にやあ、ろくな奴アひとりだつてゐやあしねえんだ。だがなア考へてみりやアみんないゝ人ばつかりなんだよ。だから寂しくつてお互ひに悪口を云ひあつてるんだよ。

新七　マアさうだらうなあ。

如皐　……だが、ほんたうに、随分つらいだらうなあ。

新七　ヤアありがたう。愚痴を聞いてくれるなあ、おまへさんばつかりだよ。…… 俺やあもうほんとに寂しくつて寂しくつてやりきれねえんだ。ナア人間の世の中ぢやあねえか。それだのに寂しいんだ。そんな筈アねえぢやあねえか。だが、さうなんだからしやうがねえんだ。ナア、俺やあ人間が大好きなんだ。だから、その人間の腕でもなんでも持つて振りまはしてえくれえなんだ。その人間の腹んなかへでもなんでも飛びこんで行きてえくれえなんだ。だが、さうすりやあ、却つて寂しくさせられてしまふんだ。俺やあほんとにもう人間が大好きなんだ。だから却つて離れてゐなきやあいけねえんだ。俺やあ火の玉みてえな人間なんだ。だから冷いとこへでなきやあ行けねえんだ。情ねえこつたがしやうがねえんだ。俺が弱いのかも知れねえんだ。だが、しやうがねえんだ。……俺やあ、もう、寂しくつて寂しくつてたまらねえんだ。

……

如皐　……（間）……だが、ほんとに、引退をするのかえ。

新七　ウム。……さうして、もう、どつかへ引つ込んでしまひたいよ。

如皐　…………

新七　ナア。

如皐　エ。

新七　かう、なんだなア、秩父の山んなかか、なんかへ生れて、なんにも知らねえで、それで炭焼かなんかで一生を終つてしまつたら幸せだらうなあ。

如皐　ヤまつたく、さう考へたくもなるよ。……だが、や

つぱり、それにだつて情ねえこたアあるよ。
新七　（うなづく。）
如皐　……おうちの人はみんなお達者かえ。
新七　アありがたう。お琴のやつが相變らず頭痛持でねえ。
如皐　さうかい。いけねえなア。どうにかして直らないもんかなあ。
新七　ヤしやうがねえなあ。
如皐　弱るなア。……ア、お島さんはやつぱり是眞さんとこへ通つてゐなさるのかえ。
新七　アありがたう。あれも、弱くつてねえ。
如皐　……お糸さんは近頃どうしてゐなさるえ。
新七　ア、こいつも駄目だよ。三十にもなつて五町からの道はもう歩けねえんだからねえ。丈はあの通り高いが何しろ十貫目と無えつてんだからねえ。モウ自分でもすつかり諦めてゐて、可哀想に俺のためにばつかりモウ生きてるやうなもんだよ。
如皐　よくおまへさんの手傳ひをするんだつてねえ。
新七　ウム近頃は、ちつと調べものがあつてね、毎晩寄席へ通つては、續き物を速記してきて俺にみせてるよ。……三十にもなつて嫁にもどこへも行かねえで、俺のためにばつかり、かう、つくしてくれてんのかと思ふと、俺やあもう可哀想でたまらねえ。
如皐　どつか良い緣は無いかねえ。
新七　自分で行く氣がねえんだからしやうがねえ。それに體が弱いしねえ。……アノ朝比奈なんかア俺の眼の惡い時だつたもんだから筆取りをしてくれたんだがね。俺の臺詞が早いもんだから、たうとう泣きだしてしまやアがつた。ヤ俺も一緒に泣いちやつたよ。
如皐　可愛がつてやんなよ。
新七　ありがたう。マスはとられてしまふし、殘つたやつはみんな體が弱いし、ほんとに、おまへさんなんか却つて氣樂で羨しいよ。
如皐　………
新七　うちぢゆう病人だらけなんだからなあ。それに俺が氣を詰めてやつてるもんだから、女房のやつ、延榮を妾にもつたらなんて薦めやがるんだ。
如皐　（淋しく笑ふ。）
新七　マ波風一つ立たねえつてば、マアさうなんだが、ヤもう、なんだか、かう、凍てついてしまつてるやうだよ。
（時計が、七時半をうつ。）
新七　アこいつあいけねえ。八時迄に藥研堀まで行かなきやあ。
如皐　マアいゝぢやあねえか。
新七　ヤこいつあ、どうも、おつそろしく長話をしちやつ

た。寝てゐたところを。
如皐　マアもう少しいゝぢやあねえか。
新七　ヤどうしても行かなきやあならねえんだ。
如皐　…………
新七　どうしても用があるんだ。
如皐　さうか、ぢやあ、また、きてくれよ。
新七　またくるよ。（おたつに）どうも、とんだ長話をし
てしまひまして。
おたつ　ヤも何のお愛想もございませんで。
新七　（玄關から風呂敷包を持つてきて）喰べてくれない
か。
如皐　ヤアありがたう。
おたつ　どうもありがたうございます。
（おたつは、立つてきて包を持つて行く。）
新七　ぢや大切にしてね。寝てゐた方がいゝぜ。
如皐　また、きてくれよ。
新七　また、くるよ。
おたつ　（風呂敷を持つてきて）どうも、ありがたうござ
いました。
新七　（風呂敷をとつて、おたつに）では、お大切に。
おたつ　ありがたうございます。
新七　ぢや寝てゐた方がいゝぜ。ぢや、さやうなら（と
立ち上る。）
如皐　さやうなら、ありがたう。
新七　（おたつに）どうもとんだ長話をしてしまひまし
て。
おたつ　いゝえ。
新七　ぢや大切にね。
如皐　ありがたう。
（新七、おたつに送られて、土間におりる。）
如皐　ア、アノ、提灯を持つてるかえ。
おたつ　お持ちで？
如皐　持つてなかつたら、そこにあるのを。
新七　ア、ぢやあ、ひとつお借り申して行きますかな。…
…晝間つから出てゐたもんですから。……ヤ助かります。
おたつ　きたないんですけれども（と、わたす。）
新七　（うけとつて）ぢや明日。
おたつ　いつでも、おついでの時に、
新七　ありがたうございます。ぢや、お大切に。
おたつ　ありがたうございます。
新七　（おたつに）さやうなら。
如皐　（その聲をひきとつて）さやうなら。
新七　（姿は見えぬが應じて）さやうなら。（おたつに）
さやうなら。

おたつ　さやうなら。
　　　　　（新七は、格子を開けて、出て行く。）
おたつ　（障子を閉めて、きながら）なんだね。……意氣
　地がないつたら、ありやあしないや。
如皐　俺よか、新七の方がよつぽど可哀想だ。
おたつ　負惜しみを云つてらあ。（と坐る。）
如皐　おめへなんかにやあ、わからねえんだ。
おたつ　負惜しみも大概にするがいゝや。
如皐　……（突然）ア、アノ、替の蠟燭を入れてやつたか。
おたつ　（首を振る。）
如皐　ぢや新しいのか。
おたつ　いゝえ。
如皐　オイ藥研堀まで行くんだ。途中で絕つたらどうする
んだ。老人が、途中で提灯が消えたらどうする。オイ早
く追つかけてつて持つてつてやれ。……持つてつてやれ。
持つてつてやんねえか。
　　　　おたつは、不性無精に立ち上る。
如皐　ハ、早く。
　　　　おたつは、蠟燭を持つて出て行く。
　　　　如皐は、ひとり、ぢつと腕をくむだまゝ考へこむ
　　　　でゐる。

幕

歳末挿話（一幕）

冬。夜。
東京の場末。
新世帯の貧しい家。

見窄しい長火鉢。其傍の食卓は既に膳立されてあつて新聞紙が覆(かぶ)つてゐる。――
若い妻が長火鉢に凭れて、たゞぼんやりとしてゐる。――やがて、立ち上つて障子をあけ靴ぬぎから夕刊を持つてきたが讀まうともしずに、すぐ抛りだして、また、つくねんとしてゐる。火箸で灰に字などを書いてゐる。
と、突然、おもてゞ「もし。もし。」と、いふ聲がして、すぐに遠く消えて行く。靴ぬぎに下りて格子をあけ、おもてを見たが、誰もゐないので、また火鉢のところに戻つてくる。
と、やがて、格子をあける音がする。

妻（立ち上つて障子をあけ）いま、おほきな聲してゐたの、あなたぢやなくつて。
夫　おれだよ。
妻　どうなすつたの。
夫　いきなり十圓札をポケットへねぢこんだ人があるんだ。
妻　エ
夫　追つかけてつたが、あの角のところでわからなくなつちやつた。
妻　マア、どんな方。
夫　きれいな娘さんだつたよ。
妻　マア
夫　おつぽつてきてやつた。
妻　エ
夫　あの角のところへ打つちやつてきた。
妻　マア……（と、おもてへ、かけだす。）
夫　オイよせよ。オイよせ。オイよせ。すてとけ。すてとけ。
妻（かけだして行ったが、間もなく戻つてくる。）
夫　オイすてとけつてのに。
妻　だつて（と格子の外に姿を見せる。）
夫　すてゝこい。
妻　きつと、これ慈善よ。

夫　……すてゝこい。（と上框に腰を下す。）

妻　（夫の氣持を察して行きかけたが……立止つて）デモ飛んぢやうと、もつたいないわ。

夫　飛んだら他の人が拾ふ。

妻　デモ溝へでも落つこつちやうと。

夫　いゝから、すてゝおいで、ネ。

妻　誰か拾ふといゝんだけれど。誰も拾はないともつたいないわ。

夫　すてゝおいで。（と、靴の紐をとく……）

妻　……ねえあなた。これ折角の好意だわ。無にしちや惡いわ。ねえ、わたし達だつていまにうんと慈善をしてあげればいゝわ……世の中、相持ちだわ。

夫　マアいゝから、すてゝおいで。

妻　……今月、何月だと思ふの。

夫　そんなこと、どうだつて、いゝぢやないか。

妻　だつて、あなた。うちに、いくらあると思ふの。……いま、うちには二圓三十八錢きりないのよ。

夫　（手をやすめて）思つたよりあるね。

妻　エ、さつき前のおかみさんが二圓返しにきたのよ。

夫　さうか。サア、すてといで、ネ。

妻　いま迄だつて拂つて無いとこだらけなんだし、

夫　給料を貰ふから、どうにかなるぢやないか。

妻　四十五圓ばかりの給料ぢや、とても足りやしないわ。

夫　朝から晩迄働いてるんだぞ。（座敷に上る。）

妻　（上らずに）それにこれだけありやあ炭が買へるわ。

夫　（ふりかへる。）

妻　あなたなんか一日編輯室の温い處にゐるんだからいゝけれども、わたしなんか、おち〳〵炭もつげないわ。

夫　どん〳〵つぎやあいゝぢやないか。

妻　お金の拂へない炭ついだつて、しやうがないわ。（と障子に凭れて上框に腰をかける。）

夫　蒲團でも着てゐりやいゝぢやないか。

妻　蒲團なんか着てゐちや働けやしないわ。

夫　噓をつきやがれ。煮豆ばつかり食はしてやがるくせに。

妻　（立ち上つて）わたしだつて煮豆ばつかり食べさしたかないわ。

夫　どうとも勝手にしろ。

妻　エ、勝手にするわ。（と懐に金を入れて座敷に上つて坐る。）

夫　オイよさないか、ほんとにオイ……オイよせよ、ほんとに……

妻　……あたし、やつぱりすてゝくるわ。（と立ち上る。）

夫　それみろ。
妻　(歩きながら)　まつたくなんだか變だわね。(と外に出て、ぢきに戻つてくる。)
夫　えらい。えらい。
妻　石を上へ置いてきたわ。
夫　エ
妻　だつて飛んぢやうと、もつたいないわ。
夫　どこへ置いてきた。
妻　そこの、うちの前の所へ。
夫　しやうがないなあ。
妻　だつて。
夫　ぢやあ、おまへ。おんなじこつちやないか。
妻　ぢや、あの、交番へとゞけませうか。
夫　交番へとゞけたつて譯を言へばやつぱりおれ達のものになつちまふ。……どうにかなるだらう。(と釦を(ボタン)とつて立ち上る。)
妻　いまにきつと誰か持つてくわ。(と立ち上つて着物を持つてくる。)
夫　(妻に手傳はせて着更へる。)
妻　(洋服を壁に掛けながら)　……ひどい風ね。
夫　……(着ながら)……　持つてこい。
妻　(立つた儘)　エ

夫　持つてこい。
妻　……
夫　持つといで。
妻　……ソウ　(と外に出て、持つてきて食卓の上に置いて坐る。)
夫　あした、孤兒院へでも寄附してやらう。
妻　アそれがいゝわ、それがいゝわ、さうなさいね。
夫　(うなづいて、札をほうる。)
妻　(火鉢の抽出しにしまつて)　それがいゝわ。(と茶を入れ……茶をすゝめて)　お金のある人もゐるんだわねえ。
夫　よせよ、そんなこと。(茶を飲むで)　オイ。
妻　エ
夫　おまへ。さつき二圓返してくれたつて云つたなあ。
妻　エ、
夫　牛肉を一圓買つてこないか。
妻　エ？
夫　どうも近頃まるつきり油が切れてしまつたやうだ。
妻　……エ。ぢや買つてくるわ。
夫　ア、。だが寒いとこ可哀想だなあ。
妻　いゝえ。ぢやアノ御飯も蒸(ふか)しときませうね。
夫　ア、ぢや、火はおれが興しておこう。

妻　ア、ぢやすみません。お頼みするわ。（と、お鉢を持つて臺所に行く。）
夫　（炭をついで火を興す。）
妻　（御飯蒸を持つて臺所から出てきて）興つて。
夫　ア、
妻　ぢやコレお願ひしますわ。（と御飯蒸を置く。）
夫　ア、
妻　（臺所へ入つて風呂敷を持つてきて）ぢや行つてきますわ。
夫　寒いとこ氣の毒だなあ。
妻　（會釋して出て行く。）

夫は、しきりに火を興してゐたが、御飯蒸をかけて、茶を飲み、夕刊を取つて寢轉つて讀むでゐる。

……と、あわたゞしい格子の音。

妻　大變よ。前のうち夜逃げよ。（と上つてくる）なんだか、うちのなかでガタガタしてゐるの。變だと思つてたら、ちやうど芳ちやんがお使に出るところで、どうしたのつて聞いたら、夜中に引越すんだつて、どこへつて聞いたら知らないつての。
夫　……ぢやあ、なんだね。ソノ夜逃げのさなかに、おれ達のとこへだけは二圓返しにきたつてんだね。
妻　さうねえ。

夫　さうか。……いくらあるつてつたつけなあ。
妻　今牛肉買つたから一圓三十八錢よ。
夫　おれは二十錢きりない。……アぢやあ今の十圓な、あれをどつかへ行つてくづして二圓にしてネ、怒らないやうになあ、なにかお餞別のお品をと思つたんですけれど差し當つて何も思ひつかないもんですから、これを芳ちやんにお菓子でもと云つて、怒らないやうにさう云つて早く持つてお出で。
妻　アさうしませう。アぢやあお酒屋さんへ行つてくづしてきますわ。
夫　ア早く行つておいで。
妻　きつと喜ぶわ。
夫　早く行つておいで。
妻　アそれから歸りにお葱を買つてきますわ。
夫　（振りかへつて）怒らないやうになあ。
妻　（應うて出て行く。）

夫は、しばらく、ぢつと坐りこんでゐたが、立ち上つて机の抽出しから原稿を取り出して、調べ始める。……と、やにはに、ガタピシといふ格子の音。

夫　（振りかへる。）
妻　大變よ〳〵。
夫　ナなんだ。

妻　アノネ、十圓盗んでネ、不良少女がつかまつてるのよ。

夫　……

妻　いま八百屋さんへ行つたら、ゾロ〳〵みんなが交番の方へ行くのよ。どうしたんですつて聞いたら十圓盗んでつかまつたんですつて、それからあたし行つてみたのよ。さうしたら、あの江戸屋ネ、アノ小間物屋の番頭さんが怒鳴つてるの、なんでも店先にあつたお金をとつて逃げたんですつて。

夫　ドどんな人だつた。

妻　耳隠しに結つたハイカラの娘さんよ。なんでも、札附きの不良少女なんですつて。十圓位、普通のお孃さんなら、始終持つてるでせうけれど、不良少女だつてからきつとつれてかれるのよ。

夫　とにかく行つてみよう。（と立ち上つて）蟇口を出せ。

妻　（蟇口を渡して）どうなさんの。

夫　マア行つてみよう。

妻　交番へ屆けりやよかつたのねえ。

夫　今そんなこと云つたつて仕様がない。……おまへが、さきへ拾ひたがつたんぢやないか。（洋服のオーバを羽織る。）

妻　早く行かなきや駄目よ。

夫　（出て行く。）

　妻は、不安さうに見送つたが、座敷に歸つて考へこんで、やがて立ち上り、葱を切つてきて牛肉を煮はじめる。……

　……そのうちに格子の音。

　出むかへる。

夫　やつぱり、さうだつたよ。（と上つてくる。）

妻　どうなすつて。

夫　十圓おいてきてやつたよ。（と蟇口を抛つて坐る。）

妻　だつて、ないぢやないの。（と蟇口を見る。）

夫　交番へ行つたら、やつぱり、其女なんだ。それから信濃屋へすぐ飛んで行つて（羽織の無いのを示して）一圓五十錢に叩つこんで、交番へとつて返して小間物屋さんの前に落ちてましたつて、とゞけてきてやつたよ。嬉しさうな顔をしてゐたよ。

妻　……

夫　サア食べよう。妙に腹が空いちやつた。小間物屋も引きとつたよ。

妻　サウ

夫　さあ食べよう。

妻　（よそつて）ぢやあアノつれてかれなかつたのね。

夫　ア、、嬉しさうな顔をしてゐたよ。

妻　よかつたわねえ。
夫　ア、うまい。
妻　お羽織が無けりや、困るでせう。
夫　なあに勤めは洋服だもの。
妻　……一圓五十錢とはひどいわねえ。
夫　ア、おれも急いだからなあ。
妻　でも、あんまりだわ。
夫　仕方がないさ。
妻　だつて。
夫　マア仕樣がないさ。
妻　あんまりだわ。なんはなんでも、（と自分のを、よそひながら）アそれから前のおかみさんね。そりやあ喜んでゝよ。
夫　ア、さうかい。どこへ引越すんだつて。
妻　エ、なんだか云はないの。そのうちにおたづねしますつて。
夫　だつて夜逃げをしちやあ、たづねてもこられないだらう。
妻　さうねえ。
夫　いゝ人だつたなあ。
妻　ほんとにいゝ人だつたわねえ。（食べたが、やがて、茶碗を持つた手を膝において、ボンヤリしてゐる。）

夫　どうしたのさ。
妻　エ（と、また食べたが）なんだか、あたし食べたくなくなつちやつたわ。
夫　お食べよ。
妻　（食べたが）どうしたんだか、あたし、モウおなか一杯になつちやつたわ。
夫　そんなこと云はないで折角買つてきたんぢやないか。サアお食べよ。
妻　（食べる。）
夫　（やがて食べ終つて茶碗をだす。）
妻　（よそつてだし、無理に自分のを食べてゐたが……食べ終つて）あなた。
夫　エ
妻　一體どうなさんの。
夫　どうにかするよ。
妻　だつて、あともう十日つきりないのよ。
夫　ア、どうにかするよ。
妻　だつて今迄だつて拂つてないとこだらけなんだし、今月ばつかりはモウどんなことしたつて、とても待つちやくれやしないのよ。
夫　そんなこと今いはなくつたつていゝぢやないか。
妻　だつて。

夫　そんなことは、おまへなんかよか、おれの方がよつぽど心配してるんだよ。

妻　いくら心配したつてお金は降つちやあきやしないし、十圓くると思へばこんなことだし。

夫　ア、もういゝよ。

妻　お給料ぢや、とても足りやしないんだし、あなたの小說なんか一體いつ賣れるんだかわかりやあしないし。

夫　ア、もういゝつたら。

妻　なんだか、あなた、ほんとに賴りなくつてしやうがないわ。

夫　……

妻　あなた、ほんとにいゝ人すぎて賴りないわ。

夫　馬鹿にしろ、いゝ加減に。……サアお食べよ。

妻　……それにもう少しでもお金が入りやあ、直ぐお友達と一緒にお酒を飮むでしまふんだし。

夫　そりやあ、おまへ、つきあひつてもんぢやないか。

妻　いくら、おつきあひだつて、うちにゐてお金の言譯をするものゝ身になつてごらんなさいな。

夫　……

妻　それに、あなたつくらゐお友達とばつかり仲の良い人は無いのよ。わたしなんか、どうなつたつていゝんだわ。

夫　もうよせよ。

妻　お友達〳〵つたつてなんだかわかりやしないわ、どつかのカフエーにでも可愛いゝ人でもあるんでせう。

夫　馬鹿。

妻　エ、どうせ馬鹿よ。どうせ馬鹿よ。かうやつて、うちにゐて心配ばつかりしてゐて、あなたばつかりおもてを遊びまはつてゐて、こんな間尺にあはないことつたらありやしないワほんとに。エ、どうせ馬鹿よ。エ、どうせあたしなんかほんとに馬鹿よ。

夫　勝手にしろ。

妻　エ、勝手にするわ。カフエーの利巧な人でもつれてらつしやいよ。

夫　勝手にしやがれ。

妻　エ、勝手にするわ。わたしうちへ歸るわ。

夫　……

妻　わたし歸るわ。

夫　歸れ。

妻　エ、歸るわ。……歸るわ。

夫　歸れ。

妻　歸るわ。歸るわ。（と立ち上る。）

夫　オイおよしよ、ほんとにモウ、好い加減でおよしよ、ほんとに……（茶碗を出す。）

妻　（坐つて、よそひながら）こんなつまらないことつた

ら、ありやしないわ。

夫 （食卓の下に落ちてゐた護謨風船に氣附いて）なんだ。（と取る。）

妻 夕方、芳ちやんが忘れてつたのよ。

夫 （膨ませかけたが）なんだか氣味が惡くつて膨ませられないや。（と茶碗を取る）サアお食べよ。

妻 いくぢなしねえ。風船ひとつ膨ませられないんですもの。

夫 女つてやつは平氣で風船が膨ませられる動物なんだ。

妻 エ、動物よ。どうせあたしなんか動物で馬鹿よ。

夫 ……

妻 動物で馬鹿でなくつて、誰がこんなところにゐるもんですか。

夫 なんだと。またひつぱたかれたいのか。（妻の顏を見て）けふは、ひつぱたいちややらないぞ。結局はおまへはおれにひつぱたかれなけりや滿足しないんぢやないか。

妻 ひつぱたかれたい人なんか、誰が、あるもんですか。

夫 噓をつけ。ひつぱたかれたくつて、うづ〳〵してやがんぢやないか。けふはどんなことしたつてひつぱたいちややらないから。その手は喰はないぞ。

妻 ……學校にゐる時、ほんとに、みんなでよくさう云つたわ。結婚なんて、富籤のやうなもんだつて。

夫 馬鹿。（と怒鳴りつける。）なんだと思つてやがんだ。ほんとに、なんだと思つてやがんだ。……（間）……それりやあ結婚なんてものは富籤にや違ひないんだ。それもみんな綺麗な函に入つてゐる割にあはない富籤なんだ。だが　それでいゝんだ。仕方がないんだ。みんなさうなつちやつてるんだ。空籤ぢやないんだ。

妻 エ、どうせ割にあはない富籤でせうよ。割にあふ人をつれてらつしやいよ。わたしうちへ歸るわ。歸るわ。

夫 ……

妻 歸るわ。

夫 歸れ。

妻 歸るわ。

夫 歸れ。

妻 歸るわ。歸るわ。（と立ち上る。）

夫 （怒つて口のうちで何やら呟く。）

妻 （たゆたひながらも、靴ぬぎにおりる。）

夫 オイ。

妻 （ふりかへる。）

夫 歸んのか。

妻 エ、。（と、たゆたひながらも、行きかける。）

夫 オイ。

妻　エ。
夫　荷物はどうするんだ。
妻　あなたが、みんな、質に入れちやつたんぢやないの。
夫　みんなだしてとゞけてやる。
妻　いゝわ。とうさんにだしていたゞくから。（と逡巡してゐたが、出て行く。）
夫　（すぐに飛び出しておもてに行つたが、……妻に何か云ひながら、格子をあけて入つてくる。妻は俯いてゐる。）サアお上り。（妻、上る。）サア仲良くしようね。いつまでも仲良くしようね。サアもうよさう。ネ、サ、いつまでも、仲良くしようね。（……食卓のところにきて、急いで湯を鍋に入れ）サア食べなほさう。おまへもお食べよ。（茶碗をだして）サアよそつてくんないか。
妻　……
夫　……（自分でよそつて食べる。）
妻　（すゝり泣いてゐる。）
夫　ア、もうおよしよ。……（食べ終つて、茶を飲み……間。……寝轉がる。呟くやうに）ア、うまかつた。
妻は、すゝり泣いてゐたが、やがて、そのうちに聲をあげて泣き伏す。

……幕……

夕立（一幕）

初夏。重苦しく曇つた蒸暑い夕方。
雨を呼ぶ蛙の聲がしきりである。

こゝは越後、國上山の五合庵の前で、五六人の子供達が隱れんぼをして、鬼達が隱れた子供等を探しまはつてゐる。——やがて

一の子供　（杉の木の下に立つて）見つかつた〳〵。
二の子供　（かけてきて）なあんだ。そんなところにゐたのか。
　他の子供も、かけ寄つてくる。
　三の子供は、枝をつたつて、する〳〵と、おりてくる。
四の子供　どうりで見つからなかつた。
五の子供　こんどは良寛さまだ。
二の子供　どこへ隱れたんだらうなあ。
一の子供　ほんとに、どこへ隱れたんだらうなあ。
　と、みんなで、また探しながら、次第に下手の方にと去つて行く。

と、やがて、しばらくの後に——「蛙が鳴くから歸アろ、蛙が鳴くから歸アろ。」と、云ふ聲がして、だんだんに遠くなつて行く。

すると、庵の下手、窓の下に積まれた粗朶や枯れた杉の枝がバラ〳〵と崩れて、其間から良寛がノッソリと現れて太息をつく。汗をふきながら庵に歸つて濡縁に上り障子を開けようとして手をかけると内側から、いきなり開いて良寛を突きのけて、ひとりの男が一散に花道の方に馳け込んで行く。良寛は、あつけにとられて、そのあとを見送る。と、突然。稻光りが閃く。空を見上げて部屋に入る。遠くの方で雷の音がする。机のまはり、開け放されたまゝの戸棚の中、部屋のうちは、そこかしこ、亂暴にとりちらかされてゐる。團扇をとつて扇ぎながら、それを一々片附けはじめる。また稻光りがする。こんどは、かなり近くで雷が鳴る。佛壇に供へた花が疊の上に落ちてそれを挿した茶碗が倒れてゐるのに氣附く。懷から手拭を出してそこを拭いて、花と茶碗とを持つて上手の濡縁に出て筧の水を汲んで花を挿す。バラ〳〵と雨の音。木の葉が散る。手を差しのべてみる。部屋に入つて佛壇に花を供へ合掌し、机の前に坐つてあふいでゐると、ザーッと俄か

に夕立。やにはに、立ち上つて、廚にかけこみ、菅笠を冠り尻を端折つて番傘をかゝへたまゝ現れ、草鞋を穿いて花道の方に馳け出さうとする。と其時、一散に下手から馳けてきた侍と其仲間甲乙に行きあたる。)

侍　どうか軒下をお貸し下され。

良寛　オ、、サお上りなされ。

侍　忝けない。(と仲間と共に軒下に駈け込む。)

良寛　サアどうか、ずつと。

侍　忝けない。

良寛　サアどうか、ずつと。(と振りかへつて云ひながら馳け出す。)

侍　アもしや良寛殿ではござらぬか。

良寛　(立ち止つて)良寛でござる。…ちよつと失禮をしまする。直に戻つてまゐりまする。ちよつと(と馳け出す。)

侍　——ア暫く。

良寛　(花道で立止つて振り向く。)

侍　この雨中、もし(仲間を指して)これにて間に合ひますれば。

良寛　——ヤア、どうも、それは忝けない。デハお頼みしまする。(と云ひながら馳け戻つて)忝けない。此さきにひとりの男がまゐりまする。此雨で定めし困つてゐるでござらう。此さき半里ばかりは一軒も家がござらぬ。どうか此傘を渡してやつて下され。

侍　畏まりました。(仲間甲に)すぐに。

良寛　忝うござる。(と菅笠を、とりながら)相濟みませぬ。忝うござる。(仲間甲は、それを冠り、番傘をかかへて馳けて行く、見送つて)忝うござる。(侍に)ヤ忝うござつた。

侍　イヤ。

良寛　老の足ではなか〳〵追ひつきませぬでな。ヤ忝うござつた。サア(と軒下を傳つて、ふたりを上手の筧に案内をし)サア。

侍　イヤ、サア。

良寛　デハおさきへ御免を蒙むりまする。(と洗足をして部屋に上り)これは〳〵(と雨のふきこむ下手の窓の戸を閉めて、部屋のうちを見まはし)暗うなつた。(正面の障子に氣附いて一枚づゝはづして下手に立てかける。侍と仲間乙も洗足をして上り、侍は仲間乙にそれを手傳はせる。仲間乙は持つてゐた包を侍に渡して手傳ふ。)ヤどうも、ありがたうござる。……どうも、ありがたうござつた。(正面の障子四枚悉く開け放される。上り端に坐つてゐる侍に)サア、サア(侍は立ち上つて下手に行つて坐る。仲間乙もその後に行つて坐る。一方、良寛は圍爐裏端から土瓶をとつて筧の水を汲んでくる。—

—坐つて）ヤどうも、ありがたうござつた。
侍　イヤ。
良寛　サア（と土瓶をすゝめ、圍爐裏端から茶碗をとつて）茶碗がひとつきりで、どうか、おふたりで。
侍　（一禮して）——それがしは當與板の近習を勤むる原田伊織と申するもの、以後何とぞよろしく。
良寛　どうか私の方こそよろしく。良寛と申しまする。サアどうかサア。
侍　ありがたうござる。頂戴つかまつる。（と、ついで、うま相に飲む。飲み終つて、茶碗を前へ置く。）
良寛　（こんどは仲間乙に）サア、サア。
侍　（振り向いて、躊躇してゐる仲間乙に點頭く。）
仲間乙　（主人と良寛に禮をして——良寛、應ふ。——茶碗と土瓶をとつて飲んで前の脇に置く。）
侍　（脇にあつた包を前に置いて開く。——鉢の子である。）
良寛　オ、……ヤどうも、これはどうも……なんと申しあげたらよいやら、これは、どうも、ありがたうござつた。これはどうもなんと申しあげたらよいやら……これはどうもありがたうござつた。
侍　實は今日、殿には彌彦神社に御參詣をあそばれしその歸るさ、あまりの暑さに路傍の樹蔭に駕籠をとゞめて暫しの御休息をあそばされしところ、其時、圖らずお目にとまられしは、目の前の草のうちにありしこれなる鉢の子、「おれがの、ほんにおれがの」と、いふ如何にも御美事の御筆跡に。定めしこれは何か仔細のある器ならんと、幸ひ路傍に土下座致しをつたる百姓に、それがしをもつてお尋ねありしところ御貴殿の御品とのこと。
良寛　ヤどうも。
侍　早速、御屆け申せよとの仰せ、即ちそれがし持參仕つたる次第でございまする。
良寛　ヤどうも、これはどうも、なんと申しあげたらよいやら、これはどうもありがたうござつた。
侍　イヤ。
良寛　なんと申しあげたらよいやら、ヤどうも、ありがたうござつた。實は先程托鉢にまゐりました歸り道、ふと目に入りましたのは、（佛壇を指して）あれなる菫の花、今時分、その珍しさに、思はず殺生いたしてまゐりましたが、天罰は覿面、其時、そこへ忘れてまゐりました此鉢の子、ヤどうも、なんと申しあげたらよいやら。
侍　イヤ……さやうでござつたか。
良寛　ヤどうも、ありがたうござつた。
侍　……就きましては、甚だ、近頃以て率爾なるお願ではございますれど、殿には御貴殿のお書きなされしものを、何なりとも一筆、是非共、御所望いたしたしとの御意、

此儀何とぞお聞きとり下さいまするやう、一重にお願ひ仕りまする。

良寛　ヤそれはどうも。性來の惡筆。とても……

侍　甚だ卒爾なるお願ひではございますれど……

良寛　ではマとにかく、何はともあれお禮のお言葉を。

侍　ヤどうもそれはありがたうござる。どうもそれはありがたうござる。

良寛　では、しばらく。

侍　ヤありがたうござる。

良寛　（鉢の子を持つて立ち上り佛壇に置いて一禮し、机の前に坐つて書いて――侍のところに持つてくる。坐つて差し出し）　では。

侍　ありがたうございまする。（と、とつて讀む）……ヤどうも……（こんどは聲を出して）「みちのべにすみれつみつゝはちのこをわが忘れてぞ來しあはれ鉢の子。」ヤどうもありがたうござつた〳〵。

良寛　……

侍　「みちのべにすみれつみつゝはちの こをわが忘れてぞ來しあはれ鉢の子。」ヤ定めし殿もお喜びなされることでござらう。

良寛　あけくれ世話になりまするあの鉢の子、それを忘れてくるなぞとは。

侍　イヤ定めし殿もお喜びなされることでござらう。オ、、よいあんばいに、だいぶ小止みになりました。

良寛　（窓の戸をあけに立ち上つて）オ、もう、雲も、切れてまゐりました。（雨戸をあけ）オ、もうアノむかふの山には日が當つてをりまする。

侍　オ、……美しいながめでございまするなあ。

良寛　……もう、すぐ、やむでございませう。（と座に歸らうとする。天井を傳つて雨が漏つてきたので侍は思はず見上る。）オ、ヤこれは〳〵（と廚に入つて擂鉢を持つてきて）これは〳〵（と、そこに置く。其時一方揚幕からは仲間甲、さいぜんの泥棒を手拭で後手にくゝし上げて、左手にはその手拭を持ち、右手では傘をさしかけてやつてくる。）ヤ。

侍　オ、。

（仲間甲、泥棒やつてくる。）

侍　ナなんとした。
良寛　ドどうなされた。

泥棒　ヤイ覺えてゐろ。（仲間甲、傘をすぼめ、菅笠などとろ。――）

侍　なんとした。

良寛　ドどうなされた。

泥棒　覺えてゐろ。（濡緣に腰をかける。仲間甲は軒下に

膝まづく。)

侍　なんとした。

良寛　サ、マといてあげてくだされ。

仲間甲　この傘持つて、追つかけて參りました。後姿やうやく見ましたが呼びやあ呼ぶほど足を早くして逃げていきまする、やうやく追つつきますと、いきなり儂にとびついて、何だか、わけのわからねえことを云つて、ともすりやあ儂を振りもぎつて、また逃げ出さうとしまする。あんまり怪しい奴ゆゑ、これにやあ、てつきり何かわけがあることゝ、引つ縛つて參りました。

良寛　……ア、……ヤこれはどうも、これはお氣の毒でござつた。サといてあげてくだされ。これはどうもお氣の毒でござつた。お氣の毒でござつた。……(と手拭を解きはじめる。)

侍　(仲間甲に何か云はうとしたが良寛に手傳はうとする。良寛應うて解いてゐる。仲間甲に何か云はうとしたが、泥棒に」お許し下されい〳〵。(良寛に) お許し下されい。(良寛應ふて一心に解いてゐる。泥棒に) お許し下さいませ〳〵。(仲間甲に)……コレ……なんとして、お詫び、申上げる。なんとして、お詫びを、申上げる。

良寛　イヤもとは、わたくしから起つたこと……

侍　イヤお客人に對する御無禮、幾重にもお詫びつかまつる。幾重にもお詫びつかまつる。

良寛　イヤみな、わたくしから起つたこと……

侍　イヤ。なんとして、お詫びを申上げる。

良寛　(解いて)――これはどうも、ほんたうにどうも、お氣の毒でござつた。(仲間甲に) これはどうも、ありがたうござつた。ありがたうござつた。

侍　(泥棒に) どうかお許し下されい〳〵幾重にもそれがしよりお詫び致しまする。どうかお許し下さいませ〳〵幾重にもお詫びつかまつりまする。どうかお許し下さいませ。(仲間甲に) 詮ない奴ぢや。なんとしてお詫びを申上げる。詮ない奴ぢや。

良寛　イヤみな、わたくしから起つたこと――

侍　イヤお客人に對する御無禮、幾重にもお詫びをつかまつる。幾重にもお詫びつかまつりまする。

良寛　イヤ、マなにしろそこでは濡れまする。サ、マどうかお上りくだされ。(と立ち上つて) サどうかお上りくだされ。サ、マどうか〳〵……(と寛の方に行く。)

侍　(手を差しだして、すゝめる。)

良寛　そこでは濡れまする。サ、どうか〳〵……

侍　(すゝめる。)

良寛　サどうかサお上りくだされ。

侍　(仲間甲に) 御案内申上げぬか。

仲間甲　（不審相に立ち上つて、手を二三度たゞ差しのべる。）
侍　なんだ。それは。
仲間甲　（かすかに）どうか。
泥棒　……たくさん……
良寛　サ、マそこでは濡れまする。サ、マどうか……
侍　サ、サ……
仲間甲　どうか。
泥棒　たくさん。
良寛　サ、マどうかお上りくだされ……
仲間　どうぞ。
侍　サ、サ……
泥棒　…………
良寛　サ、マどうか。
侍　サ……
仲間甲　どうか。
泥棒　（仕方なしに、やうやく立上る。）
（仲間甲先に立つて筧に行く。……）
良寛　サ、サ……（仲間甲、泥棒、互ひに讓り合ふ。……
泥棒、先に洗ふ。）どうも、ほんだうにどうもお氣の毒でござつた。（仲間甲に）雨の降るなかを、わざ〳〵ありがたうござつた。ありがたうござつた。

仲間甲　…………
（泥棒、洗ひ終つて上る。）
良寛　サどうか〳〵、（泥棒そこに坐る。）どうか〳〵。
侍　サ、サ。（と、すゝめる。）
良寛　どうか〳〵。
侍　（すゝめる。）
良寛　どうか〳〵。
侍　（すゝめる。）
良寛　どうか〳〵。
泥棒　（やうやく、侍のすゝめるその隣りに坐る。）
良寛　（上つた仲間甲に）サどうか。
仲間甲　（侍の後、仲間乙と並んで坐る。）
（良寛も座につく）
侍　（泥棒に）云はうやうなき御無禮、お詫びの詮術もござらぬが、どうか幾重にもお許しくださいまするやう。それがしは與板の近習を勤むる原田伊織と申するもの、幾重にもお詫びをつかまつりまする。（泥棒も、どぎまぎして辭儀をしてゐるのを見て）サ、マどうか〳〵。どうかお許し下さいませ。
良寛　（土瓶をすゝめて）ほんたうにどうもお氣の毒でござつた。（茶碗をとり）茶碗がひとつきりで、サ、アノおふたりで……サ、サ……（と、すゝめる。泥棒飲む。）

わざ〳〵こんなところまでお戻りなされて、ほんたうにどうもお氣の毒でござつた。

侍　（良寛に）重々お詫びつかまつりまする。

良寛　イヤみな、わたくしから起りましたこと。なんとも相濟みませぬことをいたしました。どうかお許し下さいませ。

侍　イヤどうかお許し下さいませ。

良寛　イヤみな、わたくしから起りましたこと。（泥棒に）アノもうよろしうござるか。（泥棒、應ふ。）デハ（と立ち上つて中間甲に持つて行き）サ、サ（と、すゝめる。）

侍　コレ、そちからもお詫びを申上げぬか。

仲間甲　とんでもねえことをいたしました。どうか許してくだせえまし。

良寛　イヤわたくしの方こそ、どうか許して下さいませ。雨の降つてゐるさなかを、どうもありがたうござつた。ありがたうござつた。サ、サ……（と、すゝめて立ち上り、座に歸りながら）オ、、もう、すつかりやみましたな。（坐つて）――これで凉しうなりませう。

侍　……甚だ、なんとも、失禮ではございますれど、定めし殿には御歸城あそばされ、お待ちなされてゞございませう。甚だ失禮ではございますれど……これにて、お暇つかまつりまする。

良寛　マよいではございませぬか。

侍　イヤ定めし殿にはお待ちなされてゞございませう。

良寛　さやうでござるか。デハまたどうか、ちよく〳〵おいで下さいませ。

侍　ありがたう存じまする。また改めてお詫びに伺ひまする。

良寛　イヤ今日はどうもとんでもない失禮をいたしました。どうかこれに懲りずに、ちよく〳〵おいでなされて下さいませ。

侍　ありがたう存じまする。（と懐から袱紗包を出し）失禮ではございますれど、御參詣の途次、何も調ふることが出來ませぬ。殿よりおみやげのおしるし、何とぞ御受納下さいませ。

良寛　イヤこれはどうもありがたうございまする。ありがたく頂戴いたしまする。（と立ち上つて机の傍に行き、開いて）オこれは恰度ようござつた。ありがたうございまする。（と座に歸つて）ありがたうございました。（と袱紗を返し）殿様に、よろしくお傳へ下さいませ。

侍　（一禮して袱紗を懐に入れて）デハ失禮いたしまする。

良寛　殿様にかさね〴〵の御禮どうかよろしくお傳へ下さいませ。

侍　（一禮して、泥棒に）デハ失禮いたしまする。どうか幾重にもお詫びいたしまする。どうかお許し下さいませ。デハお先へ失禮いたしまする。御ゆるり。（良寛に會釋して立ち上る。）

良寛　（立ち上つて送りながら）どうか、また、たび〳〵おいでくださいませ。

侍　是非また御伺ひいたしまする。

良寛　どうか。（仲間甲に）どうもありがたうございました。

仲間甲　（應ふ。）

（侍、仲間甲乙、下におりて草鞋を結ぶ。樹々では蟬が鳴きはじめる。）

侍　（結び終つて立ち上り、ふたりに）デハ失禮いたしまする。

良寛　殿樣によろしくお傳へくださいませ。（侍、應ふ。）道が滑りますでな、どうか氣をつけておいでなされませ。

侍　ありがたうございまする。（ふたりに）デハ御免下さいませ。

良寛　さやうなら。

泥棒　（應ふ。）

侍　御免下さいませ。

（三人は庵の前を通つて行く。）

良寛　さやうなら。（仲間甲、乙に）さやうなら。さやうなら。（――三人は禮をして通つて行く。見送つて座に歸り、泥棒に）これは失禮いたしました。（さつき貰つた金子をとつて）オ、サこれを持つていらつしやれ。これを持つていらつしやれ。

泥棒　………

良寛　ほんとにどうも、わざ〳〵こんな處までお戻りなされてお氣の毒でござつた。サアこれを持つていらつしやれ。サ。

泥棒　……大丈夫か……

良寛　なにが……サ、持つていらつしやれ。

泥棒　（受けとつてキョト〳〵してゐる）……

良寛　………

泥棒　……わけが、わからねえ。

良寛　エ……どうもほんたうにお氣の毒でござつた。

泥棒　………

良寛　どうかなされましたか。

泥棒　……オイぢいさん。

良寛　エ

泥棒　俺も子分の十五六人もあるゴマの灰だ。

良寛　大したものだな。

泥棒　此金半分おめへんとこへおいてつてやらう。

良寛　エ

泥棒　此金半分おめへんとこへおいてつてやらう。

良寛　ドどうして。

泥棒　どうしてつたつて、おめへんとこみてえなうちは無えやな。

良寛　ナなにが。

泥棒　なにがつてつたつて、おめへんとこみてえなうちは無えぜ。サ、マ、半分おいてつてやらう……

良寛　貰つたところで、使ひみちがないやな。

泥棒　エ……おめへ、俺を怖がつてるんだな。

良寛　怖がつてなんぞはゐやあしない。

泥棒　マなんでもいゝや、ナ、半分とつときねえ。

良寛　だつてそんな大金を使ひみちもない者が持つてゐたつて勿體無いやな。それよりか、おまへさん要るんだらう、サ持つてゆかつしやれ。

泥棒　だつて、おめへ。俺さつきおめえんとこ搜しましたが、金なんか一文だつてありやあしねえぢやねえか。

良寛　金は無いよ。

泥棒　だから、とつときねえ。

良寛　そら。（と圍爐裏端の嚢を指し）あんなに、米がある。（伸び上つて窓の外を指し）アノ、マ、茄子の色のいゝこと。胡瓜も青々となつてゐる。茱豆も、あんなに、澤山なつてゐる。

泥棒　だつて、おめへ。金がなけりやあ困るだらう。

良寛　困る時にやあ、またどうにかなるよ。それよりかおまへさん要るんだらう。サア持つてゆかつしやれ。

泥棒　マそんなこと云はねえで、俺も云ひ出したからにやあ、なんだ、サとつときねえ。

良寛　だつて要らないものを、ア、要る〳〵。（と摺鉢の上を指し）屋根のこれを直すには、どの位かゝるだらうなあ。

泥棒　ウム廿文もあつたら、よからう。

良寛　ぢやあ廿文貰はう。いゝだらう。

泥棒　いゝとも、だがマそんなこと云はねえで、とつときねえ。

良寛　だつて、そんな大金を使ひもしないで持つてゐるなんて勿體無いぢやあないか。

泥棒　なにもマそんな遠慮しねえで、とつときねえ。

良寛　遠慮はしないよ。それよりか、おまへさん要るんだらう。サ、マ持つてゆかつしやれ。

泥棒　ナニ俺やあ半分ありやあ澤山だ。

良寛　マそんなこと云はないで持つてゆかつしやれ。

泥棒　ナニ俺やあ半分ありやあ澤山だ。それよりか、おめへマそんなこと云はねえで、サ、マとつときねえ、サとつ

とけ〳〵マ是が非でもとつとけ。

良寛　要らないのかえ。

泥棒　おりやあ半分ありやあ澤山だ。サ、マアとつとけ、とつとけ。

良寛　さうか。ぢやあ、そのうちから、半分のうちから廿文引くと、

泥棒　マアいゝやな。

良寛　……

泥棒　四兩三分三朱四百五文だ。

良寛　アさうか。（と机に行つて紙に何やら書き、廚に入つて、それに飯粒をつけながら出てきて庖の柱に貼る。）

泥棒　なんだ、それは。

良寛　かうしておけば、誰かまた、要る人がとりにくらあな。

泥棒　なんと書いてあるんだ。

良寛　「四兩三分三朱四百五文是有り候。」サ。

泥棒　おめへ。要らねへのかい。オイ……困つてゐねえのかい。

良寛　どうして、

泥棒　……おめえは氣樂でさぞいゝだらうなあ。

良寛　……氣樂なことなんか、ちつともありやあしない。かうやつてゐても寂しくつて寂しくつて、どうにもたまらなくなる時があるよ。

泥棒　おめえみてへなもんでも、そんなことがあるかなあ。

良寛　この頃は子供が毎日遊びにくるので、そりやあもう面白いよ。だけれども、誰もこない日には、あの原のところに出て誰かこないかと、出たり入つたり一日どうすることも出來なくて暮してしまふ日もあるよ。

泥棒　（急に）ぢいさん。俺、おめへんとこへ、毎日きてもいゝかい。エ、おい。

良寛　エきてくださる。それはありがたいな。ありがたい、ありがたい、ヤありがたうござる。どうか毎日きてくだされ。その代りわたくしもおまへさんのところへゆくからな。ヤありがたいな。ありがたい。ヤありがたうござる。

泥棒　こられるやうならうちぢやあねえが……（急に）ぢいさん。俺この金みんな貰つていくぜ。（紙を指し）あの金みんな貰つていくぜ。

良寛　ア、サどうか、持つてゆかつしやれ。（と立ち上つて貼つた紙をはがしてしまつて）サ持つてゆかつしやれ。（と坐りながら）どうか毎日きてくだされ。わしもゆくからな。

泥棒　俺、この金、みんな、子分にくれてやらあ。さうして俺もこんなかゝら元手貰つて、何んか、商賣すらあ。

さうして、この街道にやあ、ひとりもゴマの灰がゐねえやうにしてみせらあ。さうして、旅人はみんな安心して通れるやうにしてやらあ。

良寛　さうすりやあ、おまへさんも安心だよ。

泥棒　アさうだ。俺も安心だ。俺も安心だ。

（子供達の「虹が出た〳〵。」と、云ふ聲が、下手から聞えてくる。

空には、いつのまにか、虹がかゝつてゐる。）

良寛　アちよつと待つた。ちよつと待つた。……

（と、周章てゝとびおりて上手の池の岸、蓮の葉の下に蹲る。

泥棒はキヨロ〳〵してゐる。

「虹が出た〳〵。」と、云ひながら、子供達がやつてくる。）

一の子供　……だあれ。エをぢさん、だあれ。エをぢさんだあれ。

（子供達は「だあれ。をぢさん、だあれ。」と、口々に云ふ。）

泥棒　俺か、俺は、その、なんだ、その、なんだ（子供達は、しきりに聞く。）俺か、俺は、その、なんだ、その、なんだ（子供達は、しきりに聞く。）……俺は……俺は（自ら、恍しさに溢れて）泥棒ぢやあねえぞ。泥棒ぢやあねえぞ。

一の子供　ア泥棒〳〵……

（「泥棒〳〵。」と、子供達は叫び立てる。）

良寛　（いきなり）たんま（「そんなところにゐたのか。」と、云ふ子供がある。）たんま、たんまだよ、たんま（と飛び出して）

一の子供　……ごめん。此人はお客様だよ、お客様だよ。をぢさん、ごめん。をぢさん、ごめん。ネごめん。ネごめん……

（「ごめん〳〵。」と、子供達は叫ぶ。

泥棒は、一々、それに應ふ。）

四の子供　また、しようよ。

五の子供　アしようよ。

三の子供　良寛さま、かくれんぼ、また、しようよ。

良寛　アゝ。

二の子供　（泥棒に）をぢさん、まざんない。をぢさん、まざんない。

泥棒　……おれも、まぜてくれるか……エおれも、まぜてくれるか……

一の子供　サア、みんなで、しようよ。

（泥棒も、おりてきて、みんな、圓くなつて……）

みんな　ぢやんけんぽん。ぢやんけんぽん〳〵……

そのうちに　幕

拾遺太閤記（一幕）

時

天正十年の秋

處

攝津國河邊郡尼ヶ崎の廣德寺

人

羽柴筑前守秀吉　四十七歲
廣德寺住職圓通　六十歲位
加藤虎之助淸正　二十二歲
四方田但馬守政孝　三十八歲
其他に
　寺參りの若き夫婦。羽柴方、四方田方の者、並びに廣德寺の僧大勢

靜かに幕あく。

稍上手寄りに二重屋臺。――廣德寺の一部。――部屋及び廚。

部屋の正面は上手寄りが廣い櫛形の窓で、その下手につゞいて三尺の佛壇があつてその下は戶棚、なほそれにつゞいて二枚の襖。上手は奧一間が塗骨障子で、手前の一間は何も篏つてゐず、その外には椽があつて奧の方に通じてゐる。下手に閾を隔てゝ廣い廚、閾には中央に柱があつて、その手前一間は何も篏つてゐず奧一間に篏つてゐる障子は一枚あけはなされてゐる。

麗かな秋の午過ぎである。

どこかで百舌鳥が鳴いてゐる。

上手寄りに紅葉をした櫟の木が立つてゐる。

下手には井戶。

一面の落ち葉である。

それらが秋の陽に照り映えて何んとも云へなく美しい。

若い僧がふたり、ひとりは高箒を持つて何やら話をしながら下手の奧から出て來たが、そのまゝ上手に歩み去つてしまつた。

烏の鳴き聲が、ふた聲ばかり聞えた。

やがて下手の空から飛んで來て櫟の上枝にとまつたが、すぐにまた羽ばたきをして上手の空に飛んでいつてしまつた。

枯れ葉が音を立てゝ散る。

下手の遠くで呼子の音が、かすかに三聲ばかりした。

やがて正面の襖を、そうつとあけて圓通が現れて部屋のうちを注意深く見廻したが誰れもゐないと見究めたので、うしろを振り向いて手招きをした。すぐそのあとから秀吉がおづ〳〵して、あたりに氣を配りながら入つて來た。

圓通　(急いで襖をたてきつて手に持つてゐる衣を差し出しながら)　サア大丈夫。早く。

秀吉　忝けない。(と急いで鎧を脱ぎはじめる。)

圓通　サ早く――(衣を差し出しながら秀吉のあまりに周章てゝゐる様を見つめて)――こはうござるか。

秀吉　こはくはないが命がこはい。

圓通　おんなじこつちや。

秀吉　身共の命は大事ぢやからな。

圓通　誰れの命だつて大事ぢや、おん身はもう三四千の人の命を殺したのではござらぬか。

秀吉　(なほも鎧を脱ぎながら)　それは戰ひの習ひぢや。

圓通　勝手なことを云つてゐる。――(衣をうしろからかけてやつて脱いだ鎧をひとまとめにする。)

秀吉　ア采配は井戸のなかに。

圓通　(うなづく。)　なかなか智慧者ぢやな。

(采配と鎧を持つて下におりて采配を井戸のなかに投げ入れ、鎧を廚の窓下に積まれた炭俵の一つをにし空(そら)て其なかに押し込む。秀吉は慣れない衣をまご〳〵して着る。)

秀吉　(やうやく衣を着終つて、頭を叩きながら)　サア早く早く。

圓通　よし〳〵。(急いで廚に上つて茶碗をとつて井戸端におりる。)

秀吉　早く〳〵。

圓通　よし〳〵。(水を汲む。)

秀吉　早く〳〵。

圓通　いま〳〵。(茶碗に水を入れて持つてくる。)

秀吉　(坐つて頭を叩いて)　サア早く〳〵。

圓通　よし〳〵。

秀吉　サア早く。

圓通　よし〳〵。(茶碗の水を少しづゝ秀吉の頭にかける。)

秀吉　(驚いて額に滴れてくるのを袖で拭つて)　早く。

圓通　いま〳〵。(懐から剃刀をとりだして髻を落しにかかる。呼子鳴る。秀吉びつくりして伸びあがる。剃刀を振りあげて)　オ、驚いた。

秀吉　早く〳〵。

圓通　さうふるへてゐては、ちつとも剃れんがな。

秀吉　早く〳〵。

圓通　大丈夫〳〵。（頭をおさへて髻を落しはじめる。）—
—剃除鬚髪、當願衆生、斷除煩惱、究竟寂滅、——
（と剃髪の偈を口ずさみながら剃る。呼子また鳴る。）

秀吉　（周章てゝ）まだでござるか。

圓通　もうぢき〳〵、動かずに〳〵、ソレよし。（と剃り終る。）

秀吉　（口を叩いて）ひげ〳〵。

圓通　ア、よし〳〵大丈夫〳〵。（片髭を落し、其顔を眺めて）中國の探題羽柴筑—

秀吉　シッ

（秀吉は片髭のまゝ圓通は剃刀を持つたまゝ兩人暫くあたりを見廻す。）

圓通　（頭をおさへて）サア大丈夫〳〵。大丈夫〳〵。（殘つた片髭を剃り落して）ソレよし。

秀吉　（急いで頭と顔をなでながら）忝けない一生忘れぬぞ。

圓通　アハハ……

秀吉　（廚の擂鉢に目をつけて）ア味噌を擂つてゐよう。
（と廚にかけ込む。）

圓通　アハハ……（急に氣附いて）ア、ドレ。（紙の上に剃り落した髻や髭などとつて井戸端におりる。——盛んに呼子が鳴る。水を汲みながら）しきりに鳴るな。（水を流して）洗ひ流さん煩惱の髭、どぶに入りて佛果を得よ、喝、か。アハハ……

上手から墓參りの歸りの若い夫婦、何やら睦し相に談りあひながら出てくる。秀吉は驚いて思はず振りかへつたが安心してまた味噌を擂りはじめる。——（然し味噌を擂るのが目的ではないから常に擂つてゐる必要はない。）

夫　（圓通を見て）ア好いお天氣でござります。

圓通　（振り向いて）アお歸りでござるか、お歸りにならない方がいゝ、お歸りにならない方がいゝ。

夫　——

圓通　いくさぢや。

夫　エ。

妻　いくさ。

圓通　ウム——羽柴筑前守が毛利と和睦をして中國から登つてくるので、

夫　アでは噂にたがはず信長樣の敵討ちに、

圓通　ウムさうぢや、デ明智方の四方田但馬守が今そこで待ち伏せしてゐてひと合戰始まらうといふところぢや、それに東新田ではもう始つてゐる。危ない〳〵、お歸りにならない方がいゝ。

夫　ほんたうでござるか。

妻　（夫に）　どうしませう。
圓通　危ない〳〵、サア暫く上つてお待ちなさるがいゝ、サア暫く上つてお待ちなされ、こゝにゐれば、たとひ、やつてきたつてどうもしやしない。
妻　（夫に）　どうしませう。
夫　お袋様は大丈夫でせうか。
圓通　大丈夫ぢや、お袋様の方でそなた方を心配してゐるくらゐぢや、大丈夫ぢや〳〵、サア暫く上つてお待ちなさるがいゝ、サア上つてお待ちなされ、お待ちなされ。
妻　だ大丈夫でせうか。
圓通　サア〳〵上つた〳〵。
夫　――（決心なして）　ではお世話になりまする。
圓通　サア〳〵。
夫　（妻に）　安心しておいで、わたしがついてゐる。
妻　大丈夫でせうか。
夫　安心しておいで。
圓通　サア〳〵。
夫　ありがたうございます。ではお世話になりまする。
圓通　サア〳〵お上りなされ〳〵。
夫　ありがたうございます。
圓通　サ奥の方に。
夫　ありがたうございます。（と妻を連れて上る。）

圓通　サア〳〵　（ふたりのあとについて上り）　サ奥の方に。
夫　ありがたうございます。（と妻と共に頭をさげて正面の襖から退場。）
圓通　（秀吉が長い袖を持ちあつかひにしてゐるのを見て、その方に歩みながら）　村で評判の孝行者ぢや、此間おやぢが亡くなつたので毎日仕事を早仕舞しては缺かさずの日參ぢや。（と袖をうしろにまはして首筋で結いてやりながら）　それにお袋が、おやぢが死んでから、どつとの病ぢや。
秀吉　來んな。
圓通　ウ、もう來てもいゝ時分ぢやな。
秀吉　滅相な。來ぬわ、うまい〳〵。
（突然、奥の方で物騒しい音がする。）
圓通　ヤそら來た。
秀吉　頼む。（進二無二に味噌を擂りだす。）
（圓通は襖の方に行く。正面の襖をあけて僧甲あはただしくかけ入る。そのあとから年老いた僧乙。）
僧甲　タタ大變でございますタタ大變でございます。
（圓通うなづいて行かうとする。僧乙いぶかしげに秀吉を見る。）
圓通　ア新發意ぢや。（と云ひすてゝ襖から退場、僧甲も

それにつゞいてかけ入る。）
僧乙　――お精が出ますな。
秀吉　――
僧丙　（上手の椽から登場、乙を見て）タタ大變ぢや大變ぢや。
僧乙　（驚いて振りかへる。）――
僧丙　タタ大變ぢや大變ぢや。
僧乙　ア、びつくりした――そりや大變にや違ひないけれど何もそんなに騒いだつてしやうがないやな、明智方がやつて來たつて、またなんだ、羽柴方がやつて來たつて、わし達にはどうもしやしないよ、わし達はたゞかうやつてゐればいゝんだよ、（物騒しい奥の方を見やつて）馬鹿馬鹿しいこつた、いくさごつこなんて馬鹿馬鹿しい、人の子を殺して喜んどいて自分の子が殺された時にやあ歎くなんて馬鹿馬鹿しいこつた、のう新發意さん、さうぢやあないか。
秀吉　（無心に）ウム。
僧乙　横柄な仁ぢやなあ。
僧丙　ウ、いやに落着いてゐやがるな。（と舌を鳴らして椽から退場。奥ではしきりに物騒しい音がする）
僧乙　のう新發意さん、ひとつ見物に行かないか。（と椽から退場。）

（上手の椽から、あたりを見廻しながら四方田方の武士甲。下手の奥から鎧の上に蓑を着て饅頭笠を背負つた武士乙。いづれも抜身のまゝ。）
武士甲　ゐたか。
武士乙　見つからぬ。
武士甲　どこにかくれうせやがつたか。
武士乙　全く不思議な奴だ。
武士甲　（佛壇の下の戸棚をあけて直ぐまたしめる。秀吉に）お、ヤイづくにう。陣羽織を着て髭のはえた奴がここにやつてこなかつたか。
秀吉　探してみなさい。
武士甲　探してもゐぬのぢや。
秀吉　では仕方がないなあ。
武士甲　ウ、どうしたものであらうなあ。
武士乙　いまいましいなあ。
（椽から槍を持つた武士丙。）
武士丙　見つかつたか。
武士甲　見つからぬのぢや。
武士丙　裏の藪はどうした。
武士乙　ゐない。
武士丙　どこにかくれやがつたか。
武士甲　全く妙な奴だ。

（奥の方から、けたゝましい女の叫び聲がする。一同その方を見る。襖から武士丁、さいぜんの女を小脇に引きずつて出てくる。女は「放して。」「あなた。」「誰れか助けて。」等と、しきりに叫ぶ。）

武士丙　どうした。

武士甲　なんだ。

武士丁　掘り出し物ぢや、今宵の酒の肴ぢや。（と下手に引きずつて行く）

武士乙　あひかはらず抜目がないなあ。

武士甲　何分頼むぞ。

（武士丁、狂ひ叫ぶ女を引きずつて下手に退場。奥の方から「お花ァ。」「お許しなされて。」等と叫ぶ男の聲。襖の側に立つてゐた武士丙振りかへつて槍で突く。そのかげで男の悶絶する叫び。呼子一聲。）

武士乙　ヤゐたぞ。

（また一聲。）

武士甲　ヤまた鳴つた。

武士丙　なんのこつた、ひきあげだ。

（夫婦を追つてきた圓通襖に現れる。）

武士乙　なんのこつた。

武士甲　また別な所を探すのであらう。

武士丙　ゐればいゝが。

武士乙　不思議な奴だなあ。

（と、各々下手に退場。）

秀吉　（圓通を見て）酷いなあ。

圓通　これが戰ひの習ひぢや。

秀吉　――（遮二無二に味噌を擂る。）

（上手から槍を持つた武士戊抜身のまゝ下手に退場。上手の縁から槍を持つた武士巳下手に退場。途中井戸で水を飲む。一方圓通は襖の閾の外に出て）

圓通　可哀想に――誰れかゐないか――ア本堂に運ぶのぢや――可哀想に――サよいかしつかり持つて――サよいか。（と退場。）

（上手から武士庚。武士申。）

武士庚　運のいゝ奴ぢやなあ。

武士申　たたつ殺してくれるが。

（下手に退場。

襖から四方田但馬守、武士壬、下手にむかつて歩む。途中、四方田井戸に目をつけて中を覗く。）

四方田　（急に）龕燈を持つて參れ。

（武士壬、下手に退場。

四方田、釣瓶で注意深くしきりに中をかきまはす。

武士壬、龕燈を持つて登場。）

武士壬　持つて參りました。
四方田　中を照せ。（中を照させてしきりにかきまはす。）
武士壬　ヤ、采配。
四方田　ウム。
（――しばらくの後、やうやく釣瓶に入れて采配を引き上げる。水を流し采配は井戸端に殘る。）
武士壬　くたばつた、くたばつた、くたばりましたな、猿面はくたばりましたな。
四方田　――いやその猿智慧であるかも知れぬ。
（圓通、秀吉の方に行かうとして襖から現れたが、ふたりに氣附いて、部屋の中央に坐る。）
武士壬　イヤくたばつた、くたばつた、くたばつたに違ひござりませぬ、でなければ是れほど探してゐないといふわけがござりませぬ、追ひつめられて逃げ場を失ひ、さすがは屍をさらすことを恥と思ひ此中に飛び込んでくたばつたに違ひござりませぬ。
四方田　――イヤ然しさう、うかとは信じられぬ――と云つて今しらべるわけにはいかず、（圓通に氣附いて）ア住持。
圓通　なんでござる。
四方田　暫く待つてくれ――（武士壬に）何はともあれ皆の者に下知を傳へい。
武士壬　なんと申しませう。
四方田　――前の林をもう一應とつくと探し、明石殿よりの注進を待てと申せ。
武士壬　エでは明石殿に援兵には行かぬのでござりまするか。
四方田　――ウム。
武士壬　猿面を追つてきた明石殿の者に聞いても、また猿面唯一騎にてこゝに馳け來つたところを見ても、明石殿猿面方と餘程の合戰を致してをると相見えまするが。
四方田　助太刀に行きたいことはやまやまだが身共の第二の釬（かまり）をも切り拔けてこゝに飛びこみ――まだ生死の程もしかと定らぬ上は、うかつにこゝを離れるわけにはいかぬ、――おつつけ明石殿より注進がくるであらう、今のやうに下知を致せ。
武士壬　かしこまりました。
四方田　行け。（武士壬下手に退場――圓通に）待たせた――（と腰から巾着を取り出し）寺を荒してすまなかつた。佛前に喜捨をするぞ。（と巾着をほうる。）
圓通　――ではお納めしておくとしませう。
四方田　ヨシ（と行きかけて秀吉を見、少しためらつて）坊主。（秀吉返事無し）おい坊主。
秀吉　（わづか後を振り向いて）ハア。

四方田　これから一と合戰するんだ、飯を喰はしてくれんか。
秀吉　（圓通に）ようござるか。
圓通　お喰べなさい。（と廚に行く。）
四方田　忝けない。（と廚に上つて踏み臺に腰をかけ秀吉に）賴む。
圓通　（秀吉に）サアお前さんはあつちへ行つておいで、立派な御大將樣ぢや、勿體ない、わしが給仕をする、サアお前さんはあつちへ行つておいで、勿體ない。
秀吉　ハ
四方田　（秀吉を抑へて圓通に）イヤそれには及ばん此坊主で澤山だ――
圓通　（秀吉に）サアお前さんはあつちへ行つておいで――
秀吉　ハ
四方田　イヤそれには及ばん此坊主で澤山だ。（秀吉に）サア早く。
圓通　サアあつちへ。
四方田　それには及ばんと云ふに（秀吉に）サア早く。
圓通　デモ。
四方田　よいと云ふのに面倒な（秀吉に）サなにをしてをる早く、サ早くなにをしてをる、サ早く。（圓通は仕方がなしに座に歸る。秀吉は棚から茶碗と箸とを取つて側の櫃から飯をよそふ。）サア早く。（秀吉、茶碗をさしだす、それをうけとつて）忝けない。その味噌でよい。（秀吉、擂鉢を前に置く。）忝けない。（二箸三箸かつこんで）うまい。――（夢中でかつこんで）うまい。（圓通に）忝けないな。
圓通　たんと。
四方田　忝けない。（きよろ〳〵しながら夢中で喰べる。）――馬鹿に腹がすいた――
圓通　偉い人といふものは、どうせ、たゞは喜捨はしないなあ。
四方田　エ。
圓通　イヤ。
四方田　（喰べる）――うまい――（喰べ終つて）もう一杯、馬鹿に腹がすいた、すまんな（よそつてゐる秀吉に）うい奴ぢや〳〵（茶碗をうけとつて）忝けない、うい奴ぢや――（喰べながら）――その歳でかういふ勤めはつらからう――體を大切にせいよ――體が一番ぢやぞよ――體が一番ぢやぞよ――
秀吉　――（わづか頭をさげる。）
四方田　ほんたうぢやぞ――體が一番ぢやぞよ――體を大切にせいよ――

秀吉　――（傍に箕をかぶせた香の物の皿のあつたのに目をつけて、それを出して）香の物。

四方田　アこれはありがたいありがたい。（香の物を喰べて）うまい――（喰べながら）――戰ひがすんだら都へたづねて參れ――必ず馳走をするぞよ。

秀吉　（頭をさげる。）

四方田　必ず馳走をするぞよ。

秀吉　ありがたうござる。

四方田　――たづねて參れ必ず馳走をするぞよ――うまい――（喰べ終つて兩手を膝におく。）――

秀吉　――（間をおそれて）もう一杯。

四方田　――ウムではもう少し貰はう、もうほんの少し、ほんの少し。

秀吉　（よそつて出して）これでようござるか。

四方田　ア丁度よい〳〵、うい奴ぢや。

（秀吉、茶碗を持つて井戸端におりる。）

四方田　アすまんな。

秀吉　（水を汲んで持つてくる。その間に四方田も喰べ終る）水でござるが。

四方田　ア、かまはん。忝けない〳〵。（と、うけとつて飲んで）ア、うまい、（飲みほして）――ア、、うまい――馳走になつたな。（圓通に）馳走になつた。

圓通　イヤもう。

四方田　エーツト、アよい物があつた。（と腰から印籠をとり出して、秀吉に）これをお前にやらう、なんにでも効くのぢや、都でも得がたい藥ぢや、これをお前にやらう、よい物があつた。

秀吉　（うけとつて）ありがたうござる。

四方田　うい奴ぢや。

（下手から加藤虎之助清正血刀をひつさげて登場。）

清正　ヨウ四方田。我れは加藤虎之助清正――

四方田　猿面はくたばつたぞ。

清正　なにツ――僞り申すな。

四方田　采配を見ろ。

清正　（采配を見ていきなり）うぬツ。（と切つてかゝる。）

四方田　猪口才な。

（と、うけて兩人しばらくの間は激しく切り結ぶ。秀吉は擂古木を持つてたゞまご〳〵する。圓通はさいぜんから、もしやを慮つて立ち去りかね遂にはふたりの仲を見てほゝゑんでゐたが此騷ぎに思はず立上つて熱心に見つめる。遂に清正は四方田を下手の藪疊に切り倒す。）

秀吉　（思はず飛びだして擂古木を振りあげ）清正、あつぱれ〳〵。

圓通　なにがあつぱれ〳〵ぢや。
（秀吉、掘古木をおろす。）
清正　（秀吉の顏を見つめて）――オ丶。
秀吉　清正。
清正　オ丶、オ丶、御大將ぢや御大將ぢや御大將ぢや、大悅至極に存じまするツ。
秀吉　して戰ひはどうなつた。
清正　もとより勝利にござりまする、明石の紆を切りちらしてをりまするうちに御姿を見失ひ、こゝ迄くればまたもや四方田の紆、切つて切つて切りちらし、悉く味方の勝利にござりまする。
秀吉　いつもながらのそち達の骨折り秀吉過分に思ふぞよ、殊に四方田を打つたるそちの手柄隨一なるぞよ。
清正　ありがたき仰せ――御運益々目出度いことでござりまする。（福島正則下手から登場。）オ、福島、御大將は御無事ぢや御無事ぢや。
正則　（秀吉の顏を見つめて）オ丶――オ、大慶至極に存じまするツ。
秀吉　いつもながらのはたらき過分に思ふぞ。
正則　ありがたう存じまするツ。
清正　（正則に）サア早く鬨の聲ぢや。
正則　ヨシ（と行きかける。）
秀吉　――ア丶、待て。
正則　ハ（戻る。）
秀吉　――皆もつかれてゐよう、今宵はこゝで屯するとしよう。さうして明早朝立つと致さう、諸將達は本堂に通るやうに、後刻ゆるりと對面致すであらう。
正則　かしこまつてござりまする。
秀吉　行け。
正則　ハ。
（正則、下手に退場。）
（日の光は次第に薄らいでくる。）
秀吉　――（太息をついて）ア丶よかつた。
圓通　助かつたな。
秀吉　（ふりむいて）ひとへにそなたの恩ぢや、一生忘れぬぞ、必ず忘れぬぞ、必ず恩返しをしまするぞ。
圓通　なんの。（清正に）アそなた――その炭俵のなかに鎧を入れておいた、出しといて下され。
秀吉　忝けなかつた。
圓通　イヤ。
清正　こゝでござるか。
圓通　アたしかその二側目のまんなかぢや――どれ本堂を片附けるとするかな。
秀吉　後刻ゆるりとお禮を申し上げる。

圓通　イヤなんの。（と襖から退場。）

秀吉　（坐つて）まづよかつた。

清正　（鐙を持つてきながら）いつもながらの御智慧、たゞたゞ驚きいつてござりまする。

秀吉　ハヽ……窮すれば智慧も出るわ。

清正　驚きいつてござりまする。（鬨の聲きこえる。その方を見やつて）ア、、目出度い。

秀吉　ウム目出度い目出度い、これも、ひとへに皆そち達の骨折りぢや、殊に四方田を打つたるそちの手柄、過分に思ふぞ。

清正　（鐙を正面上手寄りに据ゑて）恐れいつてござりまする。（下におりる。）

秀吉　（立ち上つて陣羽織を羽織る。鬨の聲きこえる。清正は井戸で水を飲む。）ア身共にも一杯くれ。（と部屋の端に出る。）

清正　かしこまりました。（と廚に上つて茶碗をとつて、水を汲んで秀吉にさしだす。）

秀吉　忝けない。（一口飲んで）ア、うまい。（飲みほして清正に茶碗をかへす。清正はそれをしまひに廚に上る。）——妙に腹が空いてきた——飯を喰はないか清正。

清正　ハ唯今とりよさせますするでございます。

秀吉　イヤそこにあるのだ。それに身共が摺つた味噌がある。相伴せぬかどうぢや。

清正　ありがたう存じまする。

秀吉　ウムではそこにあるから。急に腹が空いてきた。四方田メがさつきうまさうに喰ひをつたわ。（と部屋の中央に歸る。）

清正　さやうにござりまするか。

秀吉　（下手をむいて坐つて）ひどく空いてきた。（清正、櫃と擂鉢とを持つてきてまた廚に行く。）アそれからそこに香の物があるから。

清正　ハ。（茶碗、箸、香の物を膳にのせて持つてきて秀吉に對つて坐り秀吉の茶碗に飯をよそふ。）

秀吉　——ひどく空いてしまつた。——（茶碗をうけて）忝けない。（喰べる）——始めてくつた——

清正　（自分のをよそひながら）始めてとはハヽ……

秀吉　ハヽハ……（喰べながら）全くうまい。全くこんなうまい飯は始めてだ——

清正　ハヽハ……戴きます。（喰べて）うまい。全くこんなうまい飯はそれがしもまだ喰はせられたことがございません。

秀吉　さう云ふな。

清正　ハヽ……イヤこれはハヽ……うまい。

秀吉　うまい——

（僧、蚊いぶしを持つて上手の椽から出てきて部屋の隅に置いて退場、煙、紫に立ちのぼる。夕闇は次第におそつてくる。奥の方からしづかに木魚の音が聞えてくる。）

秀吉　――（喰べながら）――味方に殺された者や手負ひはどの位あつた。

清正　極く――極くわづかのやうでござりました。

秀吉　さうか――ア、馬鹿に腹がすいた――

（夕闇は次第に濃くなつてくる。秀吉喰べ終つて清正に茶碗をだす、清正よそふ。――ゆるやかに、しづかな木魚の音。――燈を持つた若い僧が上手の椽から出てきて佛壇に灯を點もす。）

秀吉　いま時分あの木魚の音はなにをしてゐるのぢや。

僧　ハイさつき殺された村の衆の回向をしてゐるのでございます。

秀吉　さうか。（清正から二杯目の茶碗をうけて喰べる。）

（清正も自分のに二杯目をよそつて喰べる。僧は座敷の隅の燭臺に灯をつけて退場。正面の窓に其の影がうつつて行く。――絶えず、ゆるやかに、しづかな木魚の音。――そのうちに秀吉は一口喰べてはなんとなく考へ込んでくる。やがて印籠を取り出し前に置いて一口喰べてはなんとなく考へ込む。）

清正　どうかなされたのでござりまするか。

秀吉　イヤ――

清正　（不審相にそれを見ながら喰べ終つて）戴きました。（と廚に行つて土瓶を持つて井戸の水を汲んでくる。しづかに、ゆるやかに木魚の音。月の影さしてくる。次第にすだく蟲の音。秀吉もやうやく喰べ終つて清正の持つてきた土瓶を見て茶碗をだす。）ごはんでござりまするか。

秀吉　イヤ茶ぢや。

清正　水でござりまするが、今、茶を持つてよこさせませう。

秀吉　イヤ水でよい。

清正　さやうでござりまするか。（と秀吉の茶碗に水をついで自分のにもついで飲んで）戴きました。（と膳をわきによせる。しづかに、ゆるやかに木魚の音。秀吉の前には印籠。――不審相に）どうかあそばしたのでござりまするか。

秀吉　（かすかに）可哀想だなあ。

清正　エ。

秀吉　イヤ――（間）――いくさをしてゐるのが、なんだかわけがわからなくなつてきた。

清正　なんと仰せらるゝ。

秀吉　なんだか――いくさをしてゐるのがなんとなく變になつてきた。
清正　どうなされたのでござりまする。
秀吉　どうしたのだか自分にもわけがわからぬ。
清正　――（思ひきつて）まさか、よもや明智が恐ろしう――
秀吉　馬鹿な、なんの明智、夢にも恐れるものか、馬鹿な。
清正　もとよりさうでござりませう。――失禮の段なにとぞ重々御許し下さりませ。――だが一體どうなされたのでござりまする。
秀吉　――（急に）あの木魚をきけ、あれはさつきこゝにきた若い男ぢや、殺されてしまつたのぢや。（印籠を見て）これは四方田が呉れたのぢや、――あの木魚、殺されてしまつたのぢや、女房は四方田の士になぐさみものに連れてゆかれてしまつた。さうして自分は殺されたのぢや。うちには、お袋がたつたひとりで病んで待つてゐるであらう。
清正　アそのやうなことを、お氣になされてゐるのでござりまするか、そのやうなことは戰ひの習ひでしかたがござりませぬ。
秀吉　まだ此村にはそのやうな者が大勢ゐるであらう。家もかなり燒けたやうだ。田畑も滅茶／＼だ。
清正　そのやうなことは戰ひの習ひでしかたがござりませぬ。
秀吉　――しかたがない、――しかたがない、――なにがなんだか、わけがわからなくなつてきたわ。
清正　どうなされたのでござりまする、失禮ながらそのやうなことを申されてゐたのでは敵が打てますまい。
秀吉　さうぢや――（印籠を見てかすかに）敵――（急に）けれどもな四方田は身共の敵ぢや、その四方田に身共が飯を喰はしてやつた、すると四方田は喜んで此身共に體を大切にせいと云つて此印籠をくれた。（と印籠を手にとり）なにがなんだか、わけがわからなくなつてきたわ。
清正　でも戰はなければなりませぬ。では一體もしも戰はなければどうなるのでござりまする。どうしても戰はなければなりませぬ。
（――上手から若い僧ひとり寺男ふたり登場、秀吉と清正に輕く會釋する。）
寺男一　（歩きながら若い僧に）どの邊だな。
僧　御師匠樣が、たしか、この邊だと云はれたが――（藪疊の方に近寄つて）ア、あすこだ。
（三人藪疊に行く、中に入れる者は上半身見えたり。）
寺男一　やれ／＼。――どえらい鎧を着てゐるな。

僧　諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂、
寺男二　どえらい鎧だ。
寺男一　こりや、あんでも、きつと立派な御大將だぞ。
寺男二　ウム立派な御大將だ、どえらい鎧だ、肩先き切られてるだな。
寺男一　ウム肩先き切られてるだ。やれ／＼、なむあみだぶ／＼。
寺男二　なむあみだぶ／＼。
僧　サア早く運んで下さい。
寺男一　ア、サ無駄口たゝいてゐずと早く運ばうわい。
寺男二
寺男一　なむあみだぶ／＼。
（と、抱き起して下手の奥に運び去る。僧はそれについて入る。秀吉はそれをばさいぜんから見つめてゐる。清正は傍らの膳に氣づいて廚にかたづけ四方田の運び去られた方を見送つて刀を拔いて燈に照して見る。圓通、正面の襖から登場。）
圓通　アまだこゝにおいでなされたのか、本堂はかたづきましたぞ。
秀吉　忝けない。
（圓通は佛壇に香をたいて、その前に坐つて合掌する。清正は腰から砥粉をとり出して刀身を燈に照しながら砥粉をうつてしきりに手入れをする。）

秀吉　（突然、印籠を摑むで立ち上り、――兩人を見廻して、どつかと坐す。）
月光は、いよ／＼冴ゆ。
圓通は、靜かに合掌してゐる。
清正は、しきりに刀の手入れをしてゐる。
蟲の音がしきりである。

そのうちに　幕

月の出る迄

——黄表紙仕立の戯作——

これは或る避暑地に於ける餘興劇である。場所は其處の荒寺を利用してある。

もとよりよしなき邪劇で次に掲げたのは其日に青年達が立てた高札である。

今晩は廿六夜待でございます。
月の出は十一時五十六分でございます。
それ迄の御退屈凌ぎに私どもが芝居をやっておめにかけます。
場所は西光寺で時間は十時から始めます。
どうぞ御誘ひ合はされて御いでを願ひます。
それから蚊がたいへんに多うございますから團扇の御用意を御忘れないように願ひます。

——見物が集つた頃。前の方で。

開けようか。

エヽ。開けませう。

（と、云ふ聲がして。

二十七八の學生風の男と十七八のモダンガールとが寺の廊下に飛び上つて障子を開ける。

中からは濛々と蚊とり線香の煙が出る。

學生　このくらゐ燻せばまづいゝだらう。

娘　ほんとに、こゝの蚊つたら、やりきれないわ、なんぼ化物寺でもこれぢやああんまりだわ、化物をでも、やつぱり蚊が喰べんのかしら。

學生　ウム。それも調べてみようと思つてるんだがね。

（遙か後の方で「オーイ。」と、云ふ聲がする。

學生の名は吉村といふのである。）

吉村　ヤ、武井ぢやないかしら。

聲　オーイ。

娘　アさうよ。

吉村　タケイー。

聲　オーイ。

吉村　オーイ。

（武井「三十近い會社員風の男」やつてくる。）

吉村　ヤアよくわかつたなあ。

武井　なるほど、荒れてるなあ。化物寺と云つたら直ぐわかつたよ。

吉村　さうか。

武井　ほんとに出んのか。
吉村　出るとも。
娘　ほんとよ。
武井　そんなことがあるかなあ。
吉村　あるかつて、まつたくだよ。
娘　ほんとに出るのよ。
武井　さうかなあ。
吉村　マア上れ。
娘　荷物は。
武井　チツキにしたがまだ着かないんだ。（上る。）
吉村　ぢや此次の汽車だらう。後で取りに行かう。
武井　松田は。
吉村　まだ歸つてこないんだ。
娘　どうしたんでせうねえ。こんなにおそくまで畫を描いてる筈はなし。
吉村　どつかで一杯やつてんのかも知れないよ。
娘　だつて、けふ武井さんがくることわかつてんだし。
吉村　どうしやがつたんだらうなあ。
武井　とにかくペコペコなんだ。なんか喰はしてくんないか。
吉村　アさうか。
武井　汽車のサンドキツチだけぢやあ、とてもやりきれない。
（娘、お鉢と茶碗や箸を持つてきてチヤブ臺の上に置く。）
武井　ヤアすみません。
娘　（蠅帳を持つてきて中のものを臺の上に出しながら）ハイこれうまいのよ。リビーのコーンビーフ。日魯の鮭。それから國分の牛肉。星印の海老。それから日本橋漬。（臺の上のを置きかへて）ついでにエーアシツプ。
武井　……罐詰ばかりだなあ。
吉村　どうせモダンガールのお臺所だよ。これで毎日蕎麥屋から飯だけ買ふんだからなあ。
武井　へエ、。成程こりやあ化物屋敷だ。
娘　なんですつて……おぼえてらつしやい。これからもう踊つてやんないから。
武井　マアマアさう怒り給ふな。
娘　ずゐぶんだわ。
武井　…………
娘　今晩踊らない。
武井　エ。
娘　だつて此ひとは駄目だし畫描き先生も駄目だし折角蓄音器持つてきたんですもの。
武井　踊つてもいゝねえ。

娘　アぢやあ針を買つてくるわ。もう、すつかり使つちやつたから。
武井　ヂヤあしたにしようぢやないか。遠いんだらう。
娘　イエ直ぐ停車場の側よ。（と、行きかける。）
武井　ひとりで行くのかい。
娘　モダンガールを侮辱するものぢやなくつてよ。
武井　ヤレヤレ。
娘　ぢや直ぐ行つてくるわね。
武井　行つてらつしやい。
（娘、出て行く。）
武井　……（喰べながら）……うまい。
吉村　松田のやつ、どうしたんだらうなあ。
武井　どつかで、やつてんだらう。
吉村　だつて君のくることはわかつてんだしなあ。
武井　ヤア然しこりやあ全く荒れてんなあ。なんぼたゞの避暑とは云へこゝに一月籠城とは恐れるなあ。（喰べてゐる手をやめお化けの眞似をし）全く、これは出んのかい。
吉村　出るさあ。
武井　さうかなあ。
吉村　マ、論より證據、今晩見てゐたまへ。
武井　痛快だなあ。

吉村　だつて近頃は科學の力で證明してゐるんだからしやうがないよ。心靈學つてばモウ君一番新しい學問なんだからなあ。バーミンガムの大學の總長のオリバア・ロッヂなんか死後は如何つていふ立派な本までこしらへてるぜ。こりやあ君、無線電信の可能を發見した立派な科學者だ。
武井　フム。
吉村　アノ、ダーウヰンと同時に進化論を發見したワレス博士だつて、どうしても疑へなくつて仕方がなしに信じたつて云つてるぜ。
武井　さうかなあ。氣のせゐぢやあないのかなあ。
吉村　だつて、君、みんなに見えるんだからしやうがないぢやあないか。僕らの方ぢやあ、これを集合幻視つてんだがね。
武井　ウム。
吉村　オ、論より證據、あの柱を見給へ。
武井　なんだい、ありやあ。
吉村　ありやあ、君、此寺で有名な血の跡なんだ。
武井　だつて綠色ぢやあないか。
吉村　ウムそこなんだ。ありやあ、君、來た時には毒々しい血の跡だつたんだ。なんでも此寺で有名なものなんださうだ。つまり、三十三間堂の天井板みたいなもんなん

だな。昔は隨分旅人が見にきたもんださうだよ。土地の人の言ひ傳へに依ると、なんでも此寺の住持があの柱に靠れて腹を切つたつてんだがね。
武井　フム。
吉村　それを、君、來た日に、あの女が主婦之友社のヘルクレスつていふ淸淨劑で拭きとつてしまつたんだ。
武井　ウム。
吉村　ところが、どうだい。
武井　エ。
吉村　毎日毎日あゝして同んなじところへ、いくら拭いても拭いても、ちやんとついてるんだ。
武井　フウム。だが。
吉村　ところがだ、君。けさに限つて、どうしたんだか綠色なんだ。
武井　ウム。
吉村　で、こりやあ、東京へ削つてつて分析をする迄とつちやあいけないつて、あの儘にしてあるんだ。
武井　フーム。さうかなあ。そりやあ不思議だなあ。
吉村　モウからなつてくると遠感說や何かつてこつちやあとても說明がつかないんだ。アノ君がよく讀んでるコナンドイルね。
武井　ウム。
吉村　あれだつて君たいへんな信者なんだぜ。此近着のストランド・マガジンを見給へ。ロンドンのヴイクトリア街にコナンドイルが心靈學に關する圖書館を建てたさうだぜ。エ、素晴しいぢやあないか。
武井　ウム。してみると、なんだなあ。十億の靈今地上を步むつていふミルトンの言葉も、もう單なる詩ぢやあなくなるつてわけかなあ。
吉村　さうともさ。アノ君。歐洲戰爭の發端となつたセルヴヰア王の暗殺事件だつてロンドンの心靈學硏究會の豫言には三月も前にちやんと現はれたんだからなあ。
武井　フウム。さうかなあ。で、ところで、君の其方の論文も此寺の材料でもう出來上つたのかい。
吉村　イヤどうもまだ良いミヂアムが無いんでね。
武井　ミヂアムつて何だい。
吉村　イヤつまり不思議な靈力を持つてゐる人間でね。それがゐると幽靈が姿を現したり聲を發したりする媒介者だ。然しこれは詐欺が多いんで氣をつけないと、ひつかかるんだよ。
武井　で、君は一體どういふ論文を書かうつてんだい。
吉村　イヤまづ第一に、つまり、あの世がどういふ組織になつてるかといふことだな。今迄の學者の硏究ではどうもあの世にも階級があるらしいんだよ。ケンブリッヂの

ワアドなんて人は幽界遍歴つてやつをやつてね。あの世にも市街があつたつていふんだ。もつとも、こりやあ、あぶなつかしいがね。で、よく檢べてみて、もし觀念的實在や何かでなくつて、ほんとに市街があるんだつたら、そこには無政府的共產主義（アナアキスチツクコムミニズム）が行はれてゐるか、或ひはギルド・ソシアリズムが行はれてゐるか。

武井　イヤ待てよ。いくらあの世だつてそんなものが行はれてゐる筈はないよ。アナーキスチツク・コムミニズムだなんて共產主義が政府が無くつて實現されるなんて、いくらあの世でも空想的すぎるよ。ギルド・ソシヤリズムだつて政治と產業とを、はつきり區別出來るなんてこれも空想的な樂天的妥協思想だよ。

吉村　イヤそりやあ君の方の專門だつたなあ。で、マ、僕の特別によく檢べてみたいのは、つまりあの世にもマルクスの辯證法が行はれてゐるか、どうかつていふことだ。それにやあわけがあるんだ。こりやあ催眠術に下降法つてやつがあつてね。人の全生涯を逆に繰返させる方法なんだが、つまり被術者を子供の時に返らせると、其人が小學校時分とちつとも違はない字を書くつてやつなんだ。で、デロシヤスつて人がジヨセフインといふ子供に此下降法をかけてみるとジヨセフインの赤ん坊の時の次に暫くして老人の斷末魔が現れてクロード・ブールドンといふ人になつてしまつたんだ。それをなほ下降法にかけて行くとカルテロンといふ老婆になり、次には早死をした子供、次には自殺した男といふやうになつて行つたのだ。これはメエテルリンクが書いてゐる實驗なんだがね。で、つまり再生といふことが、どうも、あるらしいんだ。で、僕の研究したいのは其再生がマルクスの辯證法中の飛躍によつて行はれてるか、どうかといふことなんだ。

武井　ウム隨分大變な問題だね。

吉村　ウムもう此世でもダーウヰンの漸次的な進化論なんか破れかゝつてフーゴー・ド・フリースの變異說の種の飛躍を認める學說が其地位を占めようとしてゐるくらゐなんだからねえ。

武井　ヤだがこんな田舍寺の化物なんかにそんな六圖敷いことがわかるかなあ。

吉村　イヤ事實さへ示してくれゝばそれで十分だ。學說はこつちで立てゝやるつもりなんだ。さうして、せめてはあの世にマルクシズムを大宣傳してやるつもりなんだ。もつともダーウヰンの幽靈も此間ロンドンに現れて原子に就いては論じてゐたやうだが、其再生つてことに就いては、ちつとも、まだ論じてゐないんだよ。

武井　ウム。ぢやまづ何よりも第一に其いゝミチアムつて

やつを得るこつたなあ。
吉村　だが、こゝの化物はポルテルガイストつてやつで、騒ぎお化けとでも譯すかな。ひどく露骨に現れるんで、かなり都合がいゝんだ。この通り寫眞機の準備も何もすつかり出來てるんだ。たゞ室が不完全なんで空氣の檢査が出來ないのが實に殘念だよ。
武井　そんなことまでするのか。
吉村　ウム。リシエなんて人は幽靈の出た後の部屋の空氣を檢べて窒素が多くつてひどく腐つてゐたつてんだ。寫眞の方はわけあ無いんだよ。勿論二重寫しなんてもんぢやないんだ。たゞやつこさん。分光鏡の端の光がひどく嫌ひらしいんだ。どうもアルトヴイオレツト光線に乘つてくるらしいよ。
（突然、ドカンといふ音がする。
松田が廊下に寫生箱を投り出して。）
松田　どつこいしよと。（と、腰をかける。）
武井　ヨウ。
松田　ヨウ。
吉村　どうしたんだい。
松田　ヤどうしたも、かうしたもないや。
吉村　なんだい。
松田　憲兵分隊へ引張られちやつた。

吉村　なんだつて。
武井　どうして。
松田　イヤあんまりいゝとこだつたもんだから（懷からスケッチブックを出して）一寸やつてたら憲兵にとつつかまつちやつたんだよ。要塞地帶條令つてやつさ。おまけにこれだ。
吉村　落つこたのか。
松田　眞つ暗だからなあ。（裏の方へ行きながら）イヤさんざん油を搾られてこれから氣をつけろつてんで歸されたのさ。そりやあ法律を犯したことは飽迄もこつちが惡いんだが、いゝ景色なんか自由に誰でも樂しめるやうな早く國防なんて無くなる時代がこないかなあ。
吉村　ヤアまた始まつたなあ。
松田　後で大に論じよう。
（と、裏に洗ひに行く。）
娘　今ゐたの松田さんぢやなくつて。
（と、歸つてくる。）
吉村　ウム。
娘　どうしたの。こんなにおそくなつて。
武井　憲兵分隊へ引張られちやつたんだとさ。
娘　どうして。
武井　要塞地帶條令つてやつさ。

娘　間抜けだからだわ。

松田　（正面から出てきて）ヤア何しろ飯だ。（と坐つて）相變らず罐詰ばつかりか。

娘　ぢや何かこしらへたらいゝぢやないの。

松田　どつちで云ふこつたい。

娘　あたしやあ、そんな舊時代ぢやないのよ。お間抜けさん。（と蓄音器を取りに行く。）

松田　（罐詰をかき鳴しながら）なるほど新時代だ。

娘　さあ踊らない。（と、蓄音器とレコードを持つてくる。）

武井　少し休んで。

娘　これ、とてもいゝのよ。キンカジユウ。（口吟む。）これ素敵よ。知つてる。ブリンキー・ムーン・ベイつての。（口吟む。）……

松田　ひどい蚊だなあ。閉めてもいゝだらう。

と、立上つてきて障子を閉める。

と、同時に、暗くなると、

裏手に當つて燐火の飛び交うてゐるのが見える。

こゝは此寺の裏手の庫裡である。

青白い光のうちに大きな卓を圍むで曇談の靈怪を中央に七人の靈怪が掛けてゐる。

すべて、異様なるものゝ氣配である。

曇談　……さて御坊達、まことに、由々しき大事ぢや。三百年になんなんたる此生涯に於て、いまだ、かつて、かほどまでの恥しめ、かほどまでの憂目をうけたためしがござるか。なんといふ苛責ぢや。なんといふ苦患ぢや。わしは此寺の開山ぢや。したが存生中、涅槃經を講義して、あれはよし、これは惡しと斷案を無理强ひしたる増長慢の罪によつて焆煨增地獄に轉落し今ではそこで一廉の大役を仰せつかるなみ〳〵ならぬ幽魂ぢや。二世の者最殿とても一切經を寫し佛像を刻み嚢中を肥したる貪嗔癡の罪によつて黑繩地獄に隊轉し勘定奉行を勤めてをらるゝ幽魂ぢや。最後の惠凝殿とても此寺を紅毛人に荒されたるを憤激して勝手に自刄したる罪により鋒刄增地獄にあつて砥硎師を勤めらるゝ幽魂ぢや。かやうに、こゝにをらるゝ御坊達の各々方、まつた今忍びに行つてをらるゝ御坊達。いづれも皆々重き役目にあつて幽冥界の安寧と秩序とを保つてをらるゝ譽ある亡魂ぢや。それを何事ぞ。たかゞ嘴靑き小童どもが、こざかしくも此寺にまゐりしばかりに、かほどまでに脅かさりようとは、イヤ、うたてきとも、うたてき……

稭覺　仰せのとほりぢや。

者嚴　シッ、謹聽。

曇談　まことに切齒。淺間しの限りぢや。まづ彼等は値の

出ぬ故を以て卑屈にものめ〳〵と此寺に推參いたした。其上參るや否や、まづ眞つ先にかの有名なる柱の血をば奇つ怪なる藥を以て拭きとつた。何といふ不屈。何といふ剛慢。許し難き度し難き振舞ぢや。これに對して日毎に塗りかへらるゝ惠凝殿の一方ならぬ御畫痒には一同深く感佩いたしをる仕儀なれども、それにも怖れずかの小娘は性懲りもなう怯めず臆くせず、また、いとまめやかに拭きとりをる。古今著聞集十七の冒頭にも恠異のおそれ古今つゝしみとすとあるに、まことに恠異を怖れざる僭上の振舞、言語道斷、不屈至極。沙汰の限りの所業ぢや。

猪覺　愚僧はかの小娘の噺が憎うてならぬ。此寺に參りし數ある武藝者、宮本武藏、荒木又右衛門と雖も、

曇謨　殊に彼等の口にするマルクシズムといふ敎は靈魂をなみし。

耆嚴　シツ

惠凝　靈魂をなみし。

耆嚴　靈魂を。

（潙山の靈怪、いきなり飛び込んでくる。）

潙山　惠凝殿。御坊は、御坊は。

曇謨　何ぢや、あわたゞしい。

潙山　御坊は、御坊は。

曇謨　何ぢや。

惠凝　何事でござる。

潙山　ワツパどもは腹を抱へて笑つてをるぞ。かやうな辱しめを受けたことはない。かやうな辱しめを……あゝ、腹立たしや。あゝ。口惜しや……

惠凝　………

潙山　御坊は日毎に血を塗りかへるに、あの小ワツパの箱から畫の具を盜んでをつたのぢやな。

曇謨　畫の具。

潙山　それがけふは間違へて綠色の畫の具を盜んだのぢや。

耆嚴　ナニ綠色。

潙山　さうぢや。腹を抱へてワツパどもは笑つてをる。御坊が卑屈にもあの箱から畫の具を盜み出すところが眼に見えるやうぢや。ワツパどもを怖ぢ怖れあわてふためいて、こは〳〵盜むところが見えるやうぢや。……あゝ腹立たしや。かほどまでの侮り、かほどまでの恥しめをうけたことはござらぬ。あゝ腹立たしや。あゝ口惜しや。

……

（希遷の靈、飛び込んでくる。）

曇謨　何事ぢや。

希遷　あゝ怖しや〳〵。ひとりではとても聞いてはをれん。

あゝ怖しや。……

曇談　何ぢや。

希遷　あのまたマルクシズムとかいふ教を說いてをるのぢや。……この世を支配してをるものは靈魂などではない。此世を支配するものは此世の中の富の有樣、此世の中の祿の有樣ぢや。それが却つて靈魂を支配するのぢや。それが、此世の樣が心や志を支配するのぢや。

稽覺　オ、、外道。

潟山　異端ぢや。

者巖　ウ、やめろ。モウ、我慢、ならん。ようし、あの小ワッパども愚僧が追ひ散らしてくりよう。愚僧には魔呪法力の轟きの術があるぞ。此轟きこそ北山科あせ倉の變化より直傳したるものに愚僧獨自の秘法を加へたるものぢや。これぞ卽ち今昔物語の十七にも伊勢物語の芥川の章にものせられたる轟きぢや。これに愚僧獨自の秘法によつて源氏物語の夕顏の轟きを加へたるものぢや。此轟き、此唸り、此叫び、いざ、眼にもの見せう。少くとも彼れら日本人ならば、日本文學に對する尊敬の念よりしても怖れねばならぬ筈ぢや。方々、御免。いざ參らう。

（と、希遷を連れて正面より走り去る。）

稽覺　うまくやつてくれゝばいゝが。

曇談　各々。蔭ながら助力の呪をいたさう。

（皆々、聲を合せて呪を始める。）

潟山　（聞き耳をたて）オ、やんだようぢやな。

曇談　御坊達。忘れなされたか。朧月夜の櫻のもとにて開いたる謡の會を御忘れなされたか。秋の月夜に本堂にて催したる連歌の會を御忘れなされたか。今こそ我れらの平安が亂されようとしてゐるのですぞ。さあ、一心不亂に祈るは今ぢや。

（者巖、泣き叫びながら入つてくる。）

者巖　……なんといふ〳〵……

曇談　どうなされたのぢや。

者巖　……（泣き喘ぎながら）……愚僧が唸り始めると、かの小娘めが眞つ先に部屋を出まうした。さすがは女、いしくも怖れたなと、なほも不亂に唸るところへ、小娘め再び現れ、手に小さき瓶を持ち「幽靈さん。」

曇談　ウム。

者巖　「幽靈さん。」だいぶ喉が惡いやうね。これブロチンよ。一日に三回三粒づゝ飲んだらどう。

曇談　言語道斷。

潟山　なんといふことぢや。

者巖　此唸りこそ百年前、領主の姉君楓姬が氣を失ふて病が重りしに、それにもかゝはらず日頃懇なる和蘭醫者の梅澤了白とのかたらひを絕つて硅坦律師に歸依したる唸りぢや。それを〳〵かの小娘づれに蔑まれたかと思へば、

口惜しくて／＼……

曇誤　御道理ぢや／＼……だが、御坊はだいぶ亢ぶつてゐられるやうぢや。かなたに行つて靜かに御休みなされてはいかゞぢや。あの柳のもとには苔滑らかなる墓がござる。大鴉がそなたの悲しみを慰めてくれるでござらう。

（耆巖は、ひた泣きに泣きながら去る。）

（希遜、そこへ飛んでくる。）

希遜　助けてくだされい。とても／＼ひとりではをられん。どなたか／＼。……

曇誤　ナ何事ぢや。どのやうなことを申してをつたのぢや。

希遜　あゝ怖しや／＼。まだ耳にへばりつき。

曇誤　何と申したのぢや。どのやうなことを申したのぢや。

希遜　あゝ口にするだも怖しい。

潙山　何と申したのぢや。

希遜　……極樂などは無いと申したのぢや。

一同　（愕然。）

希遜　極樂は無い。永遠の眞理は無い。そんなものは嗤ふべきものぢや。

曇誤　何と申す。阿彌陀如來、十劫の昔、四十八願に應酬して西方に建立ありし微妙莊嚴の淨土。これこそ卽ちわれら淨土宗の永遠不滅の極樂淨土ぢや。

希遜　常住の極樂は無い。永遠の正義は呪はれてあれ。正義は常に變る。時により處により國びとによつて變る。現在の正義は祖父の正義ではない。孫の正義は現在の正義ではない。正義は世の祿の樣の變ると共に移り變る。まづ人の思ひ志しが世の樣によつて不斷に變る。世に常住不壞のものがある筈はない。

曇誤　オ、白法隱沒……

稽覺　闘諍堅固だ。

希遜　辯證法。ワッパどもの敎の名ぢや。

（「辯證法。」「辯證法。」と、囁きかはす聲がする。）

希遜　萬象は正反合と變化をする。今は雇主の世の中ぢやが、やんがては雇はれ者の世の中・はては隔て無き世の中となる。

曇誤　何を馬鹿な。ものゝ考が無常迅速ならば、きやつらが云ふそれその雇主雇はれ者てふ考へも變るべきに無常の理を說くに不變のものを考へてする。愚しきうらはらの極みぢや。

惠凝　（うじ／＼して）差出がましきはゞ口ではござれども、まことに仰せの通り政ごとの先占などは出來るものではござらん。此寺に押し入つたるかの紅毛の國は思はぬ大河の氾濫によつて據處なく敷きたる町の掟が次の町から次の町へとうつりやがつては全國中に擴まつたといふことぢや。……かの柱に就きましての所業は……何

とも面目次第もござらぬ慙愧至極の所業ではござれども、此たびこそは必ず〳〵きやつら小ワッパどもを追ひ散らしてくれまする。どうか〳〵拙僧に何とぞ恥を雪がせてくださりませ。

曇謨　オヽ。

惠凝　如何樣にも申し開きも無き仕儀なれども、ありやうは、まことの人の血を得るといふことは今時なみ〳〵ならぬ。六ヶ敷いことでござりまする。こたびこそは必ず必ずきやつら外道めらを追ひ散らしくれまする。

曇遷　………

惠凝　拙僧は最早姿の見えぬ唸りなどではなく、かの柱より此兩腕を現してみせまする。これは花園世尊寺の變化の型にて後年かの化物作者鶴屋南北が東海道四谷怪談に用ひて江戸中の當りをとりましたる型でござる。必ず必ずワッパどもを追ひ散らしてみせまするほどに萬望萬望拙僧めをおつかはしくださりませ。

曇謨　ヤけなげなり。よくぞ申した。とくまゐれ。

惠凝　ハアッ（と、平伏して）いざ。（と、希遷と共に出て行く。）

潙山　なにを。うまくいくかどうか。

曇謨　……まことに憎つき外道ばら。きやつらは、かやうなことを申してをる。一切は流轉し一切は變化をする。二度と同じ河に入ることは出來ぬ。存在は卽ちこれ革命。

稽覺　オヽ、外道。

曇謨　戰ひは一切の父ぢや。

潙山　オヽ、阿修羅。

曇謨　理性は沒理となり恩惠は害惡となる。

稽覺　オヽ、呪はれてあれ。

（希遷、喘ぐ惠凝を肩にかけて入つてくる。）

希遷　しつかり、しつかりなされ〳〵。

曇謨　何事ぢや。

稽覺　ドどうしたのぢや。

希遷　腕を折られたのぢや。

稽覺　エヽ。

惠凝　……あゝ悔しや〳〵……あゝ悔しや〳〵……いづこまで我れらには紅毛が祟ることか。かの柱より兩腕を現すや否や、紅毛の風習に從つて腕を上げろと種ケ島を擬せられ、あまりのことについ腕を入れんとする時……呪ひの言葉を浴びせかけられ其怖しさに。（片腕をさする。）

希遷　サア早く行つて御手當をなされ。

曇謨　何と申したのぢや。

惠凝　第四（フォースヂメンション）次を利用して逃げるわ。

稽覺　オヽ。
希遷　サア早く。
（惠凝、古井戸の蔭に消える。）
潙山　口ほどにも無い。
稽覺　しばらく御免。
（と、いきなり出て行く。）
曇談　何ぢや。
希遷　……それに、きやつらはまた、其紅毛が我れら佛の教によつて此日の本を排し斥けるのぢやと申してをりまするぞ。
曇談　ナニ。
希遷　佛の教をかの紅毛の富める輩が己が方便に使ひ「萬物は一如。もとでは働き、働きはもとで。雇はれる者は雇主にして雇主は雇はれ者。」と、說きちらし、教の上には一如を說き行の上には隔てを保つによつて、佛の教に對し貧しき雇はれ者達は自づから眼に見えぬ怒りを釀し、爲にゆくりなう此國たみが排し斥けられるのぢやと申してをりまする。
曇談　だまれ。淺はか千萬。此界及十方。利益不唐捐。ナニもとでと働き。さすれば其一如の爲にこそ力を致すべきぢや。釋迦は四性平等の爲に戰うた。其智慧門、難解難入。所詮、紅毛には佛の教がわからぬのぢや。
（庭の彼方に大なる咳の如き聲がして陰火が燃える。）
希遷　殊に彼れらは、そのもとでは、富を生む爲の富とは、一體、誰が如何にして富を生み、それを誰が我がものとするかなど〻奇つ怪極る亂世誘念の言をばほざきをりまするぢや。
（稽覺、やにはに飛び込んでくる。
金冠朱衣の恐しき形相。皆々、思はず感嘆の聲を發する。）
稽覺　見られよ。方々。これこそ即ち、かの咳病神大納言伴の善雄より申し受けたる衣冠束帶。朱をそ〻ぎたる此面容。此眼の輝き、此爪の銳さ、これを以てかの外道ばら追ひ散らしくれん。思ひ出せば今より二百年、此國の領主藤堂相模守、隣國の姬を招きて櫻狩りなせし折に一度現じたる此姿。其時姬は失神なして遽かの歸國、緣談は破れてかの美しき淺野伊豆守に輿入れなし、相模守は怒つて伊豆守に戰ひなし伊豆は落城、姬諸共に自刄をなしたる其時のいでたちぢや。方々は物のかげよりおぢおぢ出づれば小ワッパ共の恐れぬ法もあれ。我れは表の渡廊より、とゞろ〳〵と踏み參らん。
曇談　ヤ勇まし〻勇まし〻。
稽覺　折もあれ。梟は森の奥に鳴き大鴉は柳の古枝に風は迷へる魂の如く寺のまはりを吹きめぐる。（希遷に）　い

ざ參らん。方々。御免。

希遷　拙僧は裏から。

稽覺　勝手にめされ。

（稽覺は正面から左に希遷は正面から右に出て行く。しばらくして聲々に「表から」「表から」と、囁きかはす

稽覺、飛び込んでくる。）

曇譚　何ぢや。

潙山　どうなされたのぢや。

稽覺　渡廊に／＼。

潙山　渡廊に。

曇譚　何事ぢや。

潙山　ドどうなされたのぢや。

稽覺　（決然として、またもや馳け出して行く。）

潙山　何事でござらう。

曇譚　どうしたのぢや。

（と、皆々、いぶかる。）

稽覺　（激怒して入り來り手にせるものを叩きつけ）あゝ腹立たしや／＼……畜生々々……（と、蹴りながら）ああ腹立たしや／＼……

潙山　水瓜。

稽覺　……かの渡廊の隅にこれなる水瓜。眞青なる顔、眞つ白なる衣、あまりの怖しさに思はず飛んで參つたが（皆皆の異樣なる笑。）方々の手前……引つ捕へて、あはよくば味方にもつけんずと、二たび參ればこれなる水瓜に白き衣……（皆々の異樣なる笑。）あゝ恥しや／＼……あゝ腹立たしや／＼（と、蹴る。）

（希遷、飛んでくる。）

希遷　餓鬼、畜生、阿修羅、外道ッ。

曇譚　何ぢや。

希遷　もう我慢がならん。聞き捨てならん。

曇譚　何ぢや。何事ぢや。

希遷　……彼れらは全露社會主義聯合共和國憲法第十三章第六十四條及び六十五條によれば曾つて僧侶であつたもの地主雇主皆一切の權利から剝奪されてをると申してをりまするぞ。

曇譚　何ッ、ヤ言語道斷、不埒千萬、ウム惡鬼、羅刹、提婆達多、きやつらの頭上に六道三有の塵を起す法もあれ。いざや方々。かくなる上は力を合せ呪ひに呪ひ祈りに祈り怨敵退散惡鬼調伏仕らん。鈴を持てるはそれを打て、鐃を持てるはそれを鳴らせ。木魚を持てるはそれを叩け。いざや力を合はせて最後の呪ひを呪ひ申さん。痤隸、摩訶痤隸、郁枳、目枳、阿隸、阿羅婆第、涅隸第、涅隸多婆第、伊緻……

靈怪共は鈴や鐃や木魚を一心不亂に然も陰々滅々と打ち鳴らす。
其時、彼方よりは蓄音器の賑かなるヂヤツバンドが聞えてくる。
彼れらはこれに負けまじと倘も不亂に鳴したてる。
然し其音のうちに……
遙か大海原の彼方からは二十六夜の月が三尊搖漾として現れるであらう。
さうすれば見物は次第に波打際に行くであらうし、其時此芝居は自づと終るのである。)

一九二七、九、一四、戯作。

冬ざれ（一幕）

時

現代。冬の夜。

場所

某大劇場の樂屋。

人

初代――と、稱ばれる人氣俳優。

三代目――と、稱ばれる老優。

その他、子役、男衆等。

正面は、全體が茶色の壁でその中央には一間(いつけん)の出入口、定紋を染めぬいた紫の暖簾がかゝつてゐる。上手は、床、違ひ棚。床には茶掛け、棚には人形。下手も壁で手前の一間には棚をつつて衣裳や小道具が載せてあり奥の一間には錦繪を貼りまぜにした六枚屏風が少し正面に折りまげて立てゝある。その正面下手寄りの壁には帽子や外套がかゝつてゐてその前には火鉢や茶道具があり男衆の溜りになつてゐる。壁は床が砂、他はすべて茶色だが電氣が皎々とついてゐるので、さほど陰氣にも見えない。中央、稍や下手寄りの舞臺端には鏡臺を据ゑてそのむかふには毛氈、その上に派手な樂屋布團、その側には火鉢、煙草盆など。――初代と稱ばれる人氣俳優の樂屋である。

――溜りの火鉢の前で男衆甲が懐手をして居眠りをしてゐる。乙は火鉢にかじりついて火を興してゐる。――と、やがて幕切れの柝が鳴る。ふたりは、すぐに立上つて、鏡臺の前に行つて仕度をしたり火鉢の火を直したり何かとそれ／＼忙しい。……

男衆甲　これやあ、おそくなりさうだな。

男衆乙　エヽ。……初日つから、たいへんな景氣ですねエ。

男衆甲　ウム。

――出入口の外を驅けて行く多勢の草履の音。――まもなく、樋口次郎兼光の扮裝をした初代が、男衆丙をつれて入つてくる。いきなり鏡臺の前に坐つて臺をとり含嗽をして茶を飲み直ぐに顏を直しはじめる、眉間に疵をつけ芝翫筋を加へる。

紋附袴の頭取が入つてくる。

頭取　賣りきれました。（と大入袋を渡す。）

初代　お目出度う。（と受けとつて鏡臺のわきの棚にたてる。）

頭取は會釋をして忙しさうに出て行く。初代は顏を作り終つてから水入りの甕をつけて立上り、紺と萠黄の荒い竪縞のシマアセを男衆甲に手傳はせて肌を脫ぐ。ピジョウ縫ひ、大阪手甲、脚絆、腹掛け、古代紫の帶、しばし鏡に姿を直してから、火鉢にむかつて上手むきに床几に腰をかける。――その扮裝は、見るからに、豪快である。

三代目が船頭權四郎の拵へ――朱銅で仕上げた顏には油墨で皺がかいてある。白勝の胡麻でカラの絢ひまぜの甕。竪横縞茶木綿、裏は花色の、いかにも、よたれた着附。絞りの六尺帶には壺屋の貰入れ。みすぼらしい姿で、

三代目　お目出度う。（と入つてくる。）

初代　お目出度う。サアどうぞ。

（男衆丙は火鉢の前に座蒲團を持つてくる。）

三代目　（坐つて）ヤア、どうも、大したもんだ。

初代　ヤアどうも、どうか、惡いとこを敎へて下さいな。

三代目　ヤア大したもんだよ。あの「なんの誰が笑ひませうぞ。」なんてとこア。ヤもう素晴らしいもんだよ。あゝやつてくれるんで、おれの「ありやうは、さつきにから、さうしたかつたのぢやわい。」がまるで生きてくるんだ。あすこを、のつぺらぽうにやられたひにやあ、おたまりこぼしがありやしない。おまへさんがあゝやつてくれるんで、おれがまるで生きてこようつてもんだ。ヤアありがたう〳〵。

初代　ヤさうですか。氣をつけてやりませう。

三代目　ヤアありがたう。素晴しいもんだ。

初代　どつか、かう惡いとこはないでせうか。

三代目　ア、あすこだ。あの「これも誰が蔭」つてとこな。あすこでおれが一足出ておまへさんが「モシ」と、とめて、トン〳〵と下つて、刀を置いて、兩手をついて「親仁樣」つてとこな。あすこが、かう少うし離れすぎたやうだつたぜ。

初代　ヤあたしもさう思つたんです。氣をつけます。

三代目　ア、さうか。ヤアどうも大したもんだ。どうだいアノマア、見物のヤンヤ、ヤンヤは。

初代　ヤこれもまつたく、それこそ「これも誰が蔭」ですよ。

三代目　ヤとんでもない。ヤア、おれなんか、もう駄目だ。

初代　まるであなたに舞臺を引きずられてるんぢやあありませんか。

三代目　ヤア、めつさうもねえ。ヤアおれなんか、もう、駄目だ。

初代　ヤ、ドどうも。

三代目　それに、正直なところ、年をとるとかういふ役はもう寒くつてこたへるよ。
初代　ほんとにその薄着ぢやあねえ。
三代目　ナーニ、舞臺へ出りやあ、汗が流れらあ。
初代　ダガほんとに風邪を引かないやうにしてください よ。ねエ。
三代目　アハ大丈夫だよ。年をとらなけりやあ出來ねえ役だもの。
初代　ダガまつたくなんて寒さなんでせうねエ。
三代目　ウム、こりやあ雪だなあ。
初代　エ、。この風ぢやあもうどつかで降つてるのかもしれませんねエ。
三代目　ウム。ヤだが、こりやあ時代と世話との綯ひ交ぜで、なか〳〵やり榮えのある役だぜ、エ、。おれが若え時これをやつた時にやあ大變なもんだつた。東京中がわれつかへるやうな騷ぎだつたなあ。こんなことがあつたよ。この次の幕だ。アノ逆櫓の松へ登つて、(身振りをして)北は蝦江長柄の地、東は川崎天滿村――つてとこでなあ。「東は川崎天滿村」つていふと、いつも東の棧敷のおんなじとこにおんなじ女がゐるぢやあねえか。始めのうちは氣がつかなかつたんだが、四五日たつうちに表からいはれてわかつてきたんだ。で、そこを見めえとするが、どうも、そこを見るのが、やつぱり、一番に寸法がいゝんだ。……で、たうとうその女と出來ちやつた。
初代　ヤこりやあ、いきな話だ。
暖簾をあげて男が小田卷蒸をのせたお盆をさし出す。男衆丙は男から何やら聞いてそれを受けとつて持つてくる。)
男衆丙　アノ柳橋の小しづさんから。
初代　(男衆丙に蓋をとらせてみて)アこりやあ丁度いゝ。どうです。
三代目　こりやあ考へたな。樂屋への通しもんとしちやあなか〳〵珍らしいや、ひとつ御馳走になるかな。
初代　サアどうぞ。
三代目　(とる。)
初代　(男衆に)おまへ達も持つてつてお上り。
(男衆丙、數だけ持つて行く。)
三代目　(食べながら)おまへさん、どうだね。
初代　御相伴したいんですけれど、これからあばれるんですから。
三代目　ア、さうだな
初代　で、今の話のそのひとは、
三代目　(食べながら)ア、死んぢやつた。
初代　――さうですか。

三代目　――だがなあ。……おれやあ、この頃、つく〴〵から思ふんだ。もう惚れるなんてえこたあありやあしねえし惚れられるなんてえこともねえし、こんないゝこたあねえ。いゝなあ。と、つくづく、から、思ふことがあるよ。
初代　さうですかねえ。
三代目　――寂しいが靜かでいゝや。……から、としよりの何といふのかなあ。
初代　――
三代目　こんなこともあつたよ。こりやあ今の話よりずつとあとのことなんだが、やつぱりこの役をやつてゐた時の話だ。……或女をつれて或お客が樂屋へたづねてきたんだ。ヤなんでも暑ツい盛りだつた。で、その時分もばかに警察のやかましいことがあつてなあ、おまはりさんがまはつてきたつてんで、どうしませうつて騷ぎなんだ。で仕方がねえからその女を戸棚へかくしたんだ。で暑ツい盛りだつたから、扇を戸棚へ入れてやつたが、その扇から、たうとうできてしまつたよ。
初代　ヤこいつもいきな話だ。ぢや、つまりなんですね。扇がとりもつ緣かいなつてんですね。
三代目　――まあ、そんなわけだつたんだなあ。
初代　デそのひとは。
三代目　それからぢきに變ないきさつで、わかれてしまつたよ。なんでも支那で遇つたつて人がゐるんだがね。
初代　支那つてなあ、ずゐぶん、なんですねエ。
三代目　ウム。……ヤ、どつかいゝとこへでもかたづいているといゝんだが、今でもその女のことを思ふと變な氣がするよ。
初代　さうですか。
寫眞屋　ごめんください。（と暖簾から――初代に）寫眞屋ですが此幕の終りに一つお願ひ致したいんですが。
初代　（點頭く。）
寫眞屋　ありがたうございます。
（と、暖簾をおろして去る。
と、それと入れ違ひに初代の弟子が、遠見の樋口の扮裝をした子役をつれて入つてくる。）
初代　（それを見て）ヤこりやあよく出來た。よく出來た。
弟子　どうでございませう。
初代　よし、よし、よく出來た。
三代目　ヤアこりやあよく出來た。しつかりおやりよ。エエ。しつかりやるんだよ。
初代　御褒美をあげるよ。
弟子　（子役に「ぢやあ。」と、うながして、三代目に）ごめんくださいまし。（と子役をつれて、子役はお辭儀を

して、ふたり出て行く。）
初代（見送つて）ヤアよく出來た。
三代目（見送つてゐたが）……ア、もうおれなんか、だめだア。
初代（見こむ。）
三代目　子供はないし、女房にやあ先に逝かれてしまふし……ヤアもう、なにもかも、おしまひだア。
初代　ソそんなそんなこたあ、ありやあしませんよ。
三代目　ヤアもうだめだ。
（まはりの柝が聞える。）
初代　だつて大勢の贔屓の見物つてものがゐるぢやあありませんか。
三代目　ナーニ見物なんか誰がこんな老いぼれに聲ひとつ掛けるものがあるもんか。
初代　だつて、あんなに掛かるぢやあありませんか。
三代目　いくら掛かつたつて、おれなんかあだめだよ。みんな、家へ歸れば忘れて寝てしまふんだ。おまへさんの樋口を見にこようつてものはあるが、誰がおれの權四郎を見にこようなんてものがあるもんか。
初代　ソそんなそんなこたあ、ありやあしませんよ。
三代目　ヤアもうみんなおしまひだア。
（まはりの柝が遠くに鳴つて行く。）
三代目　舞臺の上で、おれが若い時にやつた役を見てゐると、かう、なんとも云へねえ氣持になつてしまふことがあるよ。
初代　さうですかねえ。
三代目　ヤこいつあいけねえと我れに歸るんだがねえ。
（幕開きの柝が鳴る。）
初代　アぢやあお先へ。御ゆつくり。
三代目　アぢやあ御馳走になつてくよ。

初代は出て行く。男衆丙がついて行く。
三代目はモグ〳〵と小田卷蒸を食べてゐる。
まもなく、盛んに初代をよぶ掛け聲が聞えてくる。
三代目は頭を上げて、しばし、あらぬかたを眺めてゐる。
盛んな掛け聲。立廻りのツケの音。
男衆甲が、お茶を持つてくる。
三代目はまた食べはじめる。
盛んな掛け聲。立廻りのツケの音。
三代目はまた頭を上げたが、ふと、鏡にうつる自分の姿を見る。
そうつと、むき直つてたべる。
盛んな掛け聲。ツケの音。

食べをはつて茶を飲みぼんやり前を見つめてゐる。
と、「東は川崎天滿村」と、いふ聲が幽かに聞えてくる。
頭を上げたが、また項垂れて考へこむ。
漁師の子供に適しい扮裝をした槌松の役の子役が男衆につれられて入つてくる。

三代目　（それに氣附いて）ア、サア行かう。（と立ち上つて）ア、いゝ子だ。いゝ子だ。（と手をひき）ア、サアおんぶをしてつてやらう。（と跼む。）

子役　揚幕から……

三代目　サアおんぶしてつてやらう。……ア、サア、こつから、おんぶをしてつてやらう。

子役　（おぶさる。）

三代目　アどつこいしよと。（と、立ち上つて）ア、いい子だ。いゝ子だ。（と、ふりかへつて、子供を見ながら）ア、いゝ子だ〳〵……

……と、消えるやうに、暖簾から出て行く。
やがて、幕　が靜かに下りる。

水木京太篇

淺瀨（一幕）

吉田謙三　會社員（二十八）
富士子　妻（二十）
禮子　富士子の妹（十一）
高橋芳雄　謙三の從弟、醫學生（二十七）
宿の婆や、別莊の小間使

八月の初頃。夕方から夜。
東京から遠くない海岸の避暑地、漁師の家につゞいた、貸間用に出來た離室。二間になつてゐて、前に緣が通つてゐる。右は床、押入、奧に窓。左には玄關、奧は臺所。
緣の前は一寸した庭になつてゐる。草花の鉢など。釣ランプのぼんやり灯つてゐる室の內は夜だが、窓には西日を除けてさげた簾の影がうすくうつつてゐる。部屋には若い夫婦の假の住居らしい道具がいろ〳〵置かれてある。
かすかな波の音、時々遠くで雌太鼓。

芳雄が窓ぶちの机のそばで、鏡に向ひながらワイシャツをつけてゐるところへ、母屋つゞきの緣から謙三がはひつて來る。

謙三　なんだもう歸り支度か。
芳雄　後でやつても手數は同じだ。なか〳〵これがね……（ネクタイを結びながら）まあ二日目にしては上出來だらう。蝶結びまでには行かなくても、ばつた結び位には出來た。（鏡をのぞいて額を撫でる）ふゝん。
謙三　ひり〳〵するんだらう。
芳雄　何だか不氣味にほてるよ。女が皆白粉をつけてゐるのも萬更お洒落の意味ばかりではないんだね。
謙三　さういへば禮子につけてやればよかつたんだね、すつかり忘れてゐた。
芳雄　うん、でもいま生意氣に白粉みたいなものをぬりつけて出かけたよ。僕もこの過酸化水素クリームつて奴をつけて見ようかな。（額へ塗る）
謙三　（見てゐて急にふき出す）
芳雄　どうした。
謙三　（笑つて）君がそのチョボ髭をはやして、桃色の水着を着た恰好はなかつたぜ。
芳雄　可笑しいのは水着で、何も髭を引合に出さなくてもいゝぢやないか。

謙三　しかし濱では特に目立つて可笑しかつたね。本當に思ひ切つて早く剃らないかなア。

芳雄　待てよ。今少したてば自然と頭の下るやうな立派なものになるから。――職業上どうしても必要でね、今から生やして置かないと間に合はないんだ。

謙三　さうだね、洋服とちがつて出來合ひといふのはないからな。

芳雄　まあいゝさ、君なんぞが變にけなしたりするのは、つまり僕の髭の存在を段々認めて來たといふわけなんだから。（肩をゆすつて）お湯が馬鹿に泌みたが、水着が小さいので肩がすれたんだな。――然し驚いたね。こゝへ來てゐて海へもはひらずに、水着一つ持つてゐないなんて。もう一と月にもなるだらう。

謙三　うん、そろ／＼一と月だ。

芳雄　丁度僕の卒業試驗最中だつたね、君が退院してからこゝへ來たのは。

謙三　（しみ／″＼と）君もよかつたな、もう試驗なんていやなものから解放されたんだから。

芳雄　本當だよ。――全く永い間馬鹿な事をして來たもんだね、受驗生々活をまる三年もやつたんだからね、僕は多分一生試驗の夢を見たらうなされるよ。いやなもんだね。――學校へ這入つた時は生き返つた氣がしたよ。それと同時に三部へはひつて醫學を專門として研究しようと夢中になつてゐたのが、まるで馬鹿げてくだらなく思はれたね。――受驗生活が僕を下等な人間にしたか、僕が利口になつて悟りをひらいたか、まあどつちにしても苦心して髭をのばすやうになつたよ。何も學問をするために髭の必要はないんだが。

謙三　いやに髭にこだはるぢやないか。――しかし君、あの三年間をよく辛抱したと思ふよ。俺なんぞが人眞似に大人ぶつてゐるのに、君が眞面目に豫備校通ひをしてゐるのを見てゐると、何だか叱られるやうな氣がしてならなかつた。

芳雄　冗談でせう、それが僕の馬鹿なところさ。僕が小倉袴でうろ／＼してるうちに君は學校を卒業する。こつちがやつと制服にありついたと思つたら、君の方ぢやもう一人前の月給とりになつて、戀愛をしたり、結婚をしたり……

謙三　皮肉をいふなよ。――俺こそ自分の馬鹿からとりかへしのつかないところへ來て了つて、丁度うか／＼淺瀨に乘り入れた舟みたいな樣だよ。艪も利かなければ陸へも着かない、それでゐて一寸した小波にも始終ゆり動かされなければならない――

芳雄　さあね、しかし羨しい身分だよ。戀女房と二人でこ

んなところへ保養に來てゐられるんぢやないか、あまり文句はいふなよ。僕なんぞは明日から施療病院の代診になつて、朝からこきつかはれに出掛けるんぢやないか。

謙三　――いや君、眞面目に考へてゐる事なんだが、俺はもうなりゆきに押されて暮す生活がとても溜らなくなつてね、いつそ思ひ切つて舟を沖へ流して、それから出直して見ようと思ふんだが。第一富士子にしても、今ならまだ遲くはないと思ふし……

芳雄　（にや／＼して）君何か富うちやんと面白くない事でもあつたのかい。

謙三　そんな事ぢやない。もつと眞面目で云つてるんだよ。

芳雄　さうかね。でもぐづ／＼してゐて夫婦喧嘩の留男にさせられるなんぞはつらいね。――僕はお暇だ。禮子ちやんどこまで行つたかな。

謙三　禮子なんかどうでもいゝから、まあ坐つて俺の話を聞いてくれ。

芳雄　（冷かすやうに）聞くがね。そして君と富うちやんがさしむかひのところを拜見して行きたいが、今日は歸る。もう八時だ。

謙三　まあいゝから少し落付けよ。富士子はきつと八時半といふので歸つて來るだらうから。――何もないが久し振りで一緒に飯を食はうぢやないか。

芳雄　うん久し振りだ、だから富うちやんにも逢はうと待つてゐたんだが、これで僕だつて明日からはお勤めがあるんだし、禮子ちやんを麻布のうちまで送つて行かなければならないんだから、どうしても今度ので歸るよ。

謙三　それあ禮子はどうで休みだから泊めてやつてもいゝから、君本當にも少し居てくれないか。眞面目で聞いてもらひたい事があるんだから。

芳雄　眞面目々々つて、馬鹿におどかすね。――そんなら近いうちにゆつくりやつて來るが、禮子ちやんは連れて歸つた方がいゝだらう、後が面倒だから。――富うちやんに僕の洋服姿を見てもらへないのは殘念だが仕方がない。

謙三　また來るつて、もう俺たちはこゝにゐなくなるかも知れないよ。

芳雄　どうして。

謙三　どうしてゞも。――君は俺たちのラブ・アフェヤには始終立會人になつて來てくれたね。ところでどうだらうその最後にも立會人になつてくれる親切はないかい。

芳雄　（笑つて）さあね。もつと暇な時まで待つてもらへないものかね。

謙三　君、眞面目な話は眞面目に聞いてくれないか。實際俺は富士子との間を今日明日にもはつきりきまりをつけ

ようとしてゐるんだよ。今の狀態をつゞける事はもうとても溜らないんだ。

芳雄　だつて國の方では大槪承知しさうになつてゐるといふぢやないか。今だつてかう大びらに二人で暮らしてゐるんだから、正式に結婚するにしたつたつて簡單に行くわけぢやないか。

謙三　………

芳雄　よしまたいざとなつて國の方で不承知だとしても、子供でも出來たらもう問題にならないからね。腹は借物でも、孫は孫さ。それに今急に無理をして籍を入れる必要もないぢやないか、富うちやんだつてかうして暮らしてゐさへすれば不足はないと思ふんだが。――何かそんな風の面白くない事でもはじまつたのかい。

謙三　そんな事ぢやないよ。俺はね、結婚とは反對の事で、富士子とのきまりをつけようと考へてゐるんだ。

芳雄　結婚と反對のこと。

謙三　(肯く)

芳雄　(疑ふやうに)　でも君、まさか――

謙三　いや本當だ。

(間。宿の婆やがビールに一寸した食べ物をもつて緣から來る。)

婆や　奥さんが御出になると御馳走が出來ますが、生憎何にもございませんで。旦那様、これはうちで拵へたお祭の餅でまづいものですが、どうか御孃さまにでもあげて下さい。

謙三　どうもいろ〱手數をかけて、ぢや君夕飯がはりに一杯やらないか。

芳雄　(わざと快活に)　やありがたう。婆やさん、うちのお孃さまがさつきから見えなくなつてね、どこへ行つたかわかりませんかね。

婆や　ほんたうにまだ御歸りになりませんか。きつと近藤さんの人達とお宮の方へ行かれたんでせうが。

芳雄　さうかな。(立つて窓をひらき簾をあげ禮子の水着をとり入れる。軒に富士子の水着が殘つてゐる)　早く歸つて來ないと時間に間に合はないんだが。

婆や　何でしたら呼びに上りますが……

謙三　なにいゝんですよ、あの子は泊つて行つても構はないんだから。――それよりは、さあ、ぐつとやれよ、さう〱、さつきの御土產がまだあつた。

(臺所からサンドキッチの皿を出して來る。)

芳雄　でも婆やさん僕丈はどうしても八時四十分ので歸らないと都合がわるいから、馬車でも自動車でも早く來た奴を知らしてくれませんか。

婆や　まあ奥様が御歸りになるまでいゝぢやありません

か。折角御出でになつたのに、生憎御留守で……。

謙三　氣の利かない奴には困つた者でね。妙な時出かけて來て飯も食はずに歸るつて云ふんだから。

芳雄　馬鹿にするなよ。――ぢやあ婆やさん乘物の方を一つ賴みましたよ。

婆や　はい承知いたしました。ではお孃さまのお迎へはようございますね。本當に東京のお子さん方は人なつつこいから、さつき近藤さんの人達とお出かけになつたにちがひありませんよ。――ではごゆつくり。

（婆や茶盆を片づけて持ち去る。）

謙三　禮子の奴泊るのはいゝが、お腹が空いたらうに。どこへ行つてるんだらう。

芳雄　誰かと一緒に踊りでも見てゐるだらう。人おぢしない子だから困る。さつき汽車の中でもくだらない婆とおしやべりを初めて閉口したよ。何と云つても客商賣をしてゐるうちのものはちがふね。

謙三　富士子もそれだ。もう遊びに出掛ける知合が五六軒も出來てね、海へもその連中と一緒にはひりに行くんだ。近藤つてのは何でも日本橋の糸屋ださうで、すぐ近所に別莊があるんだ。實はそこの內儀さんの紹介で、今日赤阪の美顏術師のとこへ出かけて行つたんだ。

芳雄　美顏術。日やけをなほしに行くのはまだ早いぢやないか。

謙三　いやそこの弟子にしてもらつて、稽古に通はせようと思ふんでね。――

芳雄　へえ、自分の顏をいぢるのに美顏術の稽古までしなければならないのかい。

謙三　あれに何か手職をつけてやりたいと思つても、餘り地道な事では我慢を仕通せないだらうし、いはゞ少しは派手な職業をと考へてね、樣子を聞きにやつたんだ。

芳雄　（間。コップを置いて）一體君はどうしようといふんだ。僕にはわからない。

謙三　さつきから云つてゐるぢやないか、こゝでお互に新しく出直さうと思ふんだ。

芳雄　富うちやんと別れるとでもいふのか。

謙三　うん俺にはそれより外とる途がなくなつたんだ。

芳雄　しかしまた、どうしてそんな事になつたんだらう。さつきから君の云つてゐる事が何だか冗談らしくて仕方がない。――どうして急にそんな氣になつたか、僕にはまるで呑みこめないね。

謙三　君、何も急に思ひ立つた事ぢやないんだよ。退院してから、會社を休んでまでこゝへ來てゐるのは、自分丈では二人の戀の決算をゆつくりやつて見たかつたからだ。俺はお互のした事を一つ一つ書き入れた、そして今夜富

士子が持つて來るしらせを受け取れば、すつかりバランス・シートが出來上るまでになつてゐるんだ。

芳雄　僕はまた君たち二人が、こゝでは一番樂しい生活をしてゐるんだとばかり思つてゐたが、ぢやあもう別れようといふ氣でゐたのかい。――それにしてもまるでわけがわからない。

謙三　それは五月頃すでに自分が考へてゐた事なんだよ。

芳雄　五月つて云へば、君が病氣で寢てゐた最中ぢやないか。

謙三　さうだ。

芳雄　君たちの關係を國の方で默許するやうになつた時ぢやないか、富うちやんが完全に君の細君になつた時ぢやないか。

謙三　さうだよ。あの病院の白い部屋で、熱のため眠られない晩なんぞは、富士子がよく夜通し枕もとに坐つてゐてくれたもんだが、さういふ事がつゞく度に、俺は段々に別れなければならないといふ氣になつて來たよ。

芳雄　可笑しいね。さう云つては何だけれど、實際あゝまではしないだらうと思つた位、親身に手をつくして看病してくれたぢやないか。君のおかあさんが富うちやんに好意を持つやうになつたのも無理がないと思ふよ。

謙三　夜、汗ばんだ瞼を開くと、いつでも富士子の目が俺の顏を見つめてゐたが、まああの黑い瞳が一體自分に何を語つてゐたと思ふ。――ね、瀕死の病人に對して、いつでも憐みと救ひを求めてゐるぢやないか。俺は死んでも死にきれないやうな氣がした、親身にされゝばされる程、俺は背負ひ切れぬ重荷に堪へられなくなつて來た。

芳雄　重荷つていふが、しかしそれは當り前ぢやないだらうか。富うちやんはあれ以前から、去年の秋から、いはゞ君の妻君になつてゐたんだもの、君にもしもの事でもあればどうしたらいゝか心配するのは當り前ぢやないか。

謙三　しかし俺には思ひがけない心の重荷だつたよ。戀人としての情けや慰めを豫期してゐたのに、力のない自分が反つて助けを求められて、はじめはあわてたがだんだん恐ろしくなつて來た。自分の背負されてゐる重荷が、やがて弱い自分を壓し潰す程のものだといふ事がわかつて來た。一生背負ひ通す丈の力も覺悟も出來てゐない事がわかつて來た。――その頃から富士子と別れようといふ決心がついたんだ。

芳雄　飽きたとか嫌になつたとかいふなら格別、さういふ君の考へには大分無理があるやうに思はれるね。あんなにやさしく親切にした事を、うれしくない筈はないと思ふが……

謙三　結局は自分の心弱さから來てゐるかも知れない。し

かしそれかといつて、堪へきれぬ責任を、重荷を、倒れるのを承知で背負つては居られないぢやないか。頼もしい心強い戀人を、淋しい人生の道連れに得たと思つたのに、それがいつの間にかいやしい家畜の姿になつてゐることを發見したんだ。しかも自分が是迄會社員になつたり、日蔭者になつたりして拂つた犠牲は決して一生の足手まとひを求める爲ではなかつたんだ。

芳雄　敢て富うちやんの事をいふのではないが、君は女の持つてゐる美しい本性を餘り冷く見てゐるやうぢやないか。よしんば家畜でもいゝぢやないのか、やさしい忠實な家畜だつたら人生の道連れにしても差閊へないわけだ。

謙三　さうかも知れない。ことに女といふものがみな家畜になる性質を持つてゐるものだとしたら、さうあきらめるより外あるまい。そして自分が富士子をまるで別扱ひにしたのは馬鹿だつたらう。それにしてもこれから重荷を背負つて艱苦な一生を送るのは溜らないよ。はじめから家畜を飼ふつもりならば、まづ自分がその主人たる心の準備を整へてから、その最上の者を選び出さなければならないんだ。それにあれは決していゝ家畜にはなれない人間なんだからね。

芳雄　（間）——僕はもとから富うちやんを君の最上の道連れだとは思つちやゐなかつた。しかし君も苦勞した上で一緒になつたんだから、何とか考へ直せないものだらうか。——今更君に捨てられては可哀さうなわけでもあるし……

謙三　捨てるなんて君、そんな事はしないよ。この儘で行つたら二人とも共倒れさ、俺はまだ一人前の覺悟も力もない人間なのに、富士子がそれに縋りつくんでは、二人共もがき死するより外ないんだ。自分はからだもやつと人並にはなつたし、このぬかるみから足をぬいて本當に人間の修業の出來る所へ出かけて行きたいと思ふし、富士子にも家畜根性を捨てるやうな道を執らせようと思ふんだ。——舟を沖へ流すんだね。（コップを乾す）

芳雄　家畜根性を捨てさせるつてどうするんだ。

謙三　君、この濱邊での一月の生活は自分にいろ／＼な事を教へて與れたよ。富士子が白い豹のやうな身體にあの水着をつけて濱へ出かけるときは男も女も振り返つて見る程の生き／＼した美しい姿だ。そこで女王のやうな氣持で女王のやうに振る舞つた後淋しさうに歸つて來る時は、もう俺の家畜になつてゐる。からだの上でも、心の上でも弱く生れ付いた俺を、强ひて身を屈して媚びるやうな目付で見るとき、俺は自分の重荷を感ずると共に富士子を傷ましく思はずにはゐられない。

芳雄　（默つて顏をみつめる）

謙三　濱で思ひ深く秋波を送る男が數多くあるやうに、富士子にも他に好ましいと思ふ男がないとは云へないだらう。それが牽かるゝ羊のやうに力なくうちへ歸つて來るのは、俺以外にあれの生活を保證してゐる者がゐないからだとしみ〴〵感じたね。あれが自由な生き〴〵した心の儘の生活を送れないのは、そして家畜の心を抱くやうになるのは、主として之に原因してゐると考へたんだ。

芳雄　……さういふ事はいへるかも知れない。

謙三　この人生の道連れが、一人がたゞ他に縋り他が一人に縋られる計りで、どうして互に仕合な生涯を送ることが出來よう。憐む者と憐まれる者、主人と家畜、この關係の二人がどうして價値ある道連れになることが出來よう。——俺は今別れたら、自分をもつと力强いものにするために努力すると共に、富士子に一人で生きて行けるやうな方法を執らせて、一人立の出來るやうにしようと思ふ、それがあれを一番幸福にする事だ。それからでなければ幸福になんぞなれないんだ——。

芳雄　さつき云つた美顏術の事なんだね。

謙三　あゝ、あの方さへ一通り稽古を濟ませたら、俺もすつかり重荷を下ろせるよ。それから本當に世の中に出直すよ、身輕で自由になつて。改めて沖のまん中から舟を漕ぎ出すんだね。——今のうちなら遲くない。

芳雄　君はもういろ〴〵考へた結果の事だらうし、それに二人とも不仕合にならないのだつたら、僕なんぞがどうのかうの云ふ事はないがね、富うちやんがよくわかつてくれゝばいゝが。

謙三　今のうちは自分で自分の心もわからないだらうが、一人立ちが出來るやうになつて初めて自分の位置がはつきり見えるよ。それまでは何にも知らずに俺のいひ付けで稽古に通へばいゝのさ。

芳雄　——さうなつたら國の方でもどんなによろこぶだらう、君も實際いゝかげん親達に苦勞させたんだからな。

謙三　（苦笑して）そんな事はいつてくれるなよ。もう身の程しらずな事をしないやうにいゝ敎訓になつたよ。さうなれば萬更無駄な經驗とも云へないぢやないか。

芳雄　僕の受驗生活よりも意義ある事は確だね、第一色事の苦勞なら仕榮えがあるといふもんだ。——しかし君もこれからやり直すとすれば、三年遲れた僕もやつと追ついて一緒になれたといふもんだね。

謙三　本當にこれからしつかりやらうね。

芳雄　僕も背廣階級にはひつたが、いつまでも無給の助手でもなからうから、半年もしたらどつか歐洲通ひの船にでもつとめようかと思つて內々賴んでゐるところだ。四五年船醫をしたところで開業費なんぞ出來まいが、下手

な病院の代診をやるよりは愉快だと思つてね。

謙三　それあ愉快だらうよ、是非やれよ。——俺も富士子を稽古に通はせるために、來月から會社の方へ出るが、そのお役目が濟んだら、國へ歸つてまづ勘當をゆるしてもらつて——

芳雄　歸參が叶ふつてわけかね。

謙三　札幌の叔父の農場でも手傳ふとするか、そして毎日小說でも讀んで人間學でも硏究するか。

芳雄　その方は大丈夫だ、もう實習が濟んでゐる。

謙三　實習か。（間）——あゝ一日も早くさうなりたいなア。

芳雄　もうすぐ出來るんぢやないか。

謙三　うん——

（庭から別莊の女中がはひつて來る、背に眠つた禮子をおぶつてゐる。）

女中　ごめん下さい——

芳雄　おや〳〵寢てゐるんですか、とんだ御迷惑をかけてどうも。

謙三　どうも御厄介さま。禮子、なんだお前大きいなりをして。

女中　いえ、あの御疲れのところを無理に御連れ申したものですから。

（禮子は起されて部屋へ來る。）

謙三　ほら女中さんがおんぶして連れて來て呉れたんぢやないか。

女中　お孃さまお目がさめまして。ほゝまだおねむいんでせう、今日は海でお疲れでしたものね。

芳雄　禮子ちやん、さあ目をさますんだよ。どこへ行つたらうつて探したとこなんだ。さあ一緒に歸るんだから。しつかりして。

禮子　（いやな顏をする）

謙三　だらしのない奴だね。高橋さん歸るんだつてよ。お前泊るかい、それとも一緒に連れて行つてもらふかい。

禮子　どつちでもいゝわ。

芳雄　はゝ、どつちでもよくはないだらう。富ぅ姉さんとこへ泊りたいんだね。

女中　失禮ですがあの奧樣はまだお歸りなさいませんでせうか。

謙三　まだ歸つて來ませんが、何か御用でも……

女中　いえ、もしおひまでしたら御話に御出で下さいましつてさう申して居りますので。——失禮いたしました。ごめん下さいまし。お孃さまおやすみ遊ばせ。

（挨拶して去る。禮子は洋服のまゝで寢そべつてゐる。緣側から宿の婆やが紅提灯をつけてはひつて來る。）

芳雄　（身を起す）　來ましたか。

婆や　（笑つて）　通りを見てゐますが、停車場からのばかりで。――お孃さまお宮へお詣りに行つたんですか、田舍のお祭りはつまらなかつたでせう。――おやもうおすみで。――お祭りの提灯ですが、こゝへ下げて置きませうか。

芳雄　ありがたう。ぢや馬車を頼みますよ。

婆や　承知致しました、すぐ御知らせ申します。（去る）

（謙三と芳雄とはしばらく無言でゐる。）

芳雄　（ふと鏡子を見て）　寢かしてやつたらどうだらう。

謙三　子供の始末は俺たちには出來ないよ。富士子の歸るまで何か掛けてやらう。蚊にくはれては可哀さうだ。

（芳雄は座布團を折つて枕にしてやる。謙三は押入をさがして、丸めてある富士子の派手な浴衣を出してかけてやる。）

謙三　まだある、もう一杯やらないか。

芳雄　あり丈のまう。しかし君も人なみに酒なんぞ飮んで身體にさはらないのかい。

謙三　大丈夫だ。俺はこの頃寢酒をやつてね、毎晩戀の終りを弔ふ杯を擧げてゐるといふわけだ。酒でも飮めば何だか戀人同志がさしむかひになつてゐるやうな氣持にもなれるよ。富士子もビールの一杯位は平氣でつき合ふし、この頃は退屈になると煙草までぷか／＼やるんだ。どうせそこいらの別莊で奧樣連から習つて來たんだらうがね。

芳雄　今迄そんな事はなかつたね。

謙三　海邊へ來てゐるとへんな物が好きになると見えるんだね。この頃は酒のみの口に合ふやうな料理なんぞをこしらへてよろこんでゐるよ。それがつい寢酒といふ事になるんだ。――しかし戀人ごつこもう打ち切りさ。さあ今度はお互にしつかりやらうよ。

芳雄　それで富うちやんは毎日海へはひつて何ともないんだね。

謙三　富士子か、何ともないとも。たゞ二三日前から胃が少しわるいなんて云つてたが――

芳雄　注意しなけあいけないね、海へはひつたりなんぞは。

謙三　君、もう明日にもこゝを引き上げるんぢやないか、心配はいらないよ。

（婆やが急いで出て來る。）

婆や　自動車が來ました、前にとめてゐますから。

芳雄　やありがたう。ぢや君失敬する。

謙三　ぢやあ今度は東京で逢ふよ。

（芳雄大急ぎで縁で靴をはく、謙三も庭へ下りて見送つて出て行く。やゝしばらく。謙三が庭から歸つて來

て椽の柱に倚つて、ぢつと禮子の寢姿を見つめてゐる。やがて部屋へ來て食べ物を片づける。そこへ婆やが來て母屋へはこぶ。)

(謙三禮子の枕もとに寢そべつて、團扇を使ひながら机の上から夕刊をとつて讀む。玄關の方で「庭の方へまはして頂戴。」と富士子の聲がする。俥夫が風呂敷包と紙包とを椽に置いて默つて去る。)

(「只今。」といふ聲がし、玄關の障子があいて足袋をはたく音がする。やがて富士子が洋傘をもつたまゝはひつて來る。)

富士子 (椽側へ來ながら) どうも遲くなつて。まあ禮子はねちまつて。留守にお客樣が大勢來て大へんだつたでせう。(洋傘を立てかけ、風呂敷包を持つて部屋へ來る)麻布へ行つたら、今出たばかしといふところで、あなたがお一人でさぞお困りだらうと思ひましたけれど――(臺所へ行つてうがひする)

謙三 高橋もいま歸つたばかりだ。たうとう夕飯ぬきだ。

富士子 (顏を出して) まあ。いえね、御飯前に歸つて御馳走をこしらへようとも思つたんですが、高橋さんだからあなたがきつとどつかへ御案内するんだと思ひまして。あなたも召し上らない。

謙三 お客樣だけが食はないわけはないぢやないか。しかし御土産のサンドヰッチをたべてビールで腹をこさへたからもういゝんだ。

富士子 (もどつて來る) あたしいろ〳〵まはつたもんだから、これでも大急ぎなんですよ。

謙三 俥で歸つて來たの。

富士子 乘合があまりこみましたから (包を解いて改まつて) 只今歸りました。遲くなつて誠に濟みません。今日はまた禮子が出まして御厄介になりますつて麻布の母がよろしく申しました。これはあなたにつて。――あら、いやな髮でせう。こゝの井戸水ぢやあよく落ちないもんだから、今日は久し振りにすつかり洗つて貰つて來たんですよ。あたしなんぞ七三でもないから夜會にしたんですよ。昔のハイカラなんでせう。でもいやな恰好で、おつかさんにひやかされちまつた。

謙三 おつかさんはおかはりもないか。

富士子 お蔭樣で丈夫でゐました、夏休でお客樣もゐないし今日はおてんばがこつちへ來たので、これからゆつくり晝寢でもしようなんてところでしたよ。

謙三 東京は暑いだらうな。

富士子 えゝもう髮結ひさんとこから歸つたら、すつかり汗びしよになつちまつて、おつかさんと御風呂へ行つたんです。あたしからだが日にやけてるので、おつかさん

びつくりしましてね、こんなに丈夫になるもんなら、わたしも海水浴に行きたいなんて云つて――おつかさんが海へはひつたらそれあいゝ樣子だらうて笑ひましたよ。
謙三　あゝ今日ね、高橋がお前の水着を借りて泳いだよ。
富士子　まあいやだ、高橋さんが女の水着を着たら、ほゝ、大變よくお似合ひでしたらうねえ、あたし拜見したかつた。
謙三　高橋はそれよりも月賦でこさへた洋服を得意で見せに來たんだよ。ネクタイを結ぶのが大變さ。
富士子　さう〳〵、麻布のうちでもその話で大笑ひ。今朝御披露にいらしたのを、禮子がせびつてこつちへ連れて來ていたゞいたんですつて、禮子はほんとに世話の燒ける子であなた方はとんだ御迷惑でしたのね。
謙三　なに俺たちはほつたらかして置いたが、さつき夕はんも食べずに飛び出して、お祭へ行つたとか何とかで、近藤さんの女中におんぶして寢て歸つたよ。
富士子　そんな御厄介をかけて。まあ憎らしい、平氣でぐう〳〵寢こんぢまつて。
謙三　寢てゐるのはいゝが、何しろその子も夕飯を食つてゐないよ、尤もいろ〳〵物はたべたが、お腹が空かないかと思つてね。
富士子　まあ千松のお揃ひで大變ねえ。――ねあなた、甘いものでも一つおつまみになりませんか、到來物で一寸おいしいんですよ。
謙三　まあお菓子は明日にしよう、それよりも後でビールをもう一杯のまう。何か肴を仕入れて來たんだらう。
富士子　えゝいろ〳〵買つて來てよ、歸りがけに銀座へ寄つて來たんですもの。――禮子をどうしませう、もう床をのべて寢かせませうか。
謙三　さうだね。
（富士子手早く押入から布團を出して敷く。禮子に近づいてゆりおこす。）
謙三　よく眠つてゐるからそのまゝ寢かしたらいゝぢやないか。
富士子　でも上衣をとらなくては。
（上衣をぬがせて、床に抱いて行かうとしてやめる。）
富士子　あなた濟みませんが一寸手傳つて下さいな、重くつてとても私の手におへませんから。
（謙三床へ抱いて行つて寢かす。富士子上衣をたゝみ乍ら思ひ出したやうに云ひ出す。）
富士子　あなた小林さんと逢ひましたよ。
謙三　小林。
富士子　ほら、せんに麻布のうちに居た農大の方、あなたの御部屋のすぐ隣りだつたぢやありませんか。

謙三　ふん、どこで逢つたの。

富士子　今汽車の中で。一所に降りたんですよ。何だか髭なんぞ生やしてね、今學校の先生をしてゐるんですつて、そして近いうち洋行をするんですつて。あなたとの事を人に聞いたと見えていろ〱ひやかすもんだから、あたしも癪にさはつてうんとのろけてやつたわ。あしたでも遊びにいらつしやいつて。せんからいやに色男ぶつたいやな方でしたのね。

謙三　（しばらくして）お前赤阪の方の話はどうだつた。

富士子　行くには行つたんですけれど、つい寄らずに歸つたものですから――

謙三　寄つて來ないつて。お前何の爲に東京へ出掛けたんだ――富士子、一體お前は眞面目な用件と遊び事との區別がわからないのかい。髮を結つたり買物をしたりするのが主な用事で行つた筈ぢやないぢやないか。向ふの樣子では今日からでも用意をしなければならない事もある。しかもそれは誰の爲の用事なんだ。方々ほつき歩いて、肝心の用向を果さなかつたなんて、そんな馬鹿げた話はないぢやないか。

富士子　（落付いて）まことに屆かない事をいたしまして申譯ありません、これからはよく氣をつけますからどうぞおゆるし下さいまし。實はおつかさんにすゝめられてつい赤阪の病院の方へさきにまはつたものですから――

謙三　赤阪の病院へ行つたつて……

富士子　えゝ知らない所では恥しかつたもんだから……。顏馴染の看護婦さんに賴んで先生に診ていたゞいたら、やつぱりおつかさんのいふ通り……たゞのからだではないんですつて。

謙三　……………

富士子　それをきくともうあたしは居たゝまらない氣がして、すぐと麻布のうちへ歸つたんですが、おつかさんの傍を離れるのが心細いやうで、お産の話や赤ちやんの事を話してつい歸りが遲くなりました――もうわく〱して了つて、本當に申譯のない事をしまして……

謙三　（かすれた聲で）そんな事なら俺が無理を云つて濟まなかつた。

富士子　あなた、あたしあなたにどういつておしらせしようかと思つて、さつきから考へてゐましたわ。でもこれで安心しました。――何だかうれしいやうな怖いやうな氣がしてならないんですの。

謙三　さうわかつたら、これからからだをよく注意しなければならないね。

富士子　えゝ、昨日まで海へはひつてゐたなんて云つたら先生から叱られたんですよ。あの水着も高橋さんで着終

ひでしたわね。――おつかさんもさういつてましたが、あなたのお身體具合次第で、そろ〳〵東京へ歸らうぢやありませんか。

謙三　うんさうだね。

富士子　(獨語のやうに)　なるべくなら麻布のうちへ餘り遠くないところに住みたいものですわ。やつぱりおつかさんがそばにゐると思ふと、何かにつけて心强いんですもの。――

謙三　(泣き笑ひの口調で)　富士子、まあお祝ひだ。酒をうんと飮ませてくれ。

(富士子笑ひながら紙包を解いて食料品の罐や壜をとり出す。膝を抱いてそれをぢつと目つめてゐる謙三の頭は段々にうなだれる。)

――幕――

郊外にて（一幕）

石川　孝（三十）　會社員
園　子（二十四）　その妻
田村正太郎（二十二）　園子の弟
里見雪子（十九）　姉弟の從妹
なか（四十すぎ）　雪子の乳母

四月のはじめ、夕方
東京の郊外、園子の家

よくある借家の一軒。（拙作「明日」と同じ舞臺にてもよろし）階下の茶の間と客間。茶の間に續いて玄關と臺所とがある。前方の僅な空地が庭となつてゐる。
外出着に着替へた園子が茶の間で鏡臺に向つて髮の手入れをしてゐる。少し離れて長火鉢に肘をつき乍ら、正太郎は雜誌を讀んでゐる。あたりにレコードがちらかつてゐる。傍の蓄音機が陽氣な舞踏曲を奏してゐたのが、やがて曲が終つて騒音を立てゝる。

園子　（振り向いて）正さん――

正太郎　（氣がついて針をとめる）あゝうつかりした。
園子　（無意味な微笑。手にする鏝を差し出して）そつちと取り換へてくれない。
正太郎　よし來た。
（火鉢にある鏝を出して取り替へる。）
正太郎　姉さん、また突つこんで置くのかい。
園子　えゝどうぞ。（鏝を試して見て）まだ少しぬるかつた。――正さん、そこの火はよく起きてゐるの。
正太郎　（鏝で火鉢を掻きまはして）さうね、あぶないかな。
園子　（猶鏝を髮に當てゝ見て）これぢやあとても利かないわ。――此頃まるで手入れなんぞしないもんだから、仲々癖がつかなくつて。（火鉢へやつて來る）火はどう。
正太郎　（手荒く炭をいぢる）うん、起きるよ。
園子　（のぞいて）そんなにしちや駄目よ。
正太郎　なあに大丈夫。（ふうふう吹く）
園子　（灰を避けて）正さんいやよ、すつかり灰になつて了ふぢやないの。（坐つて）あたし起すんだからいゝわ。
正太郎　（座をゆづつて）暖いんで火の事なんか忘れてゐた……。
園子　（火箸で炭を調へながら）いえね、今度の炭は本當

に惡くつて。――臺所の炭だからうつかりするとすぐ消えて了ふのよ。もう火鉢に用がないから、うちぢやあ土釜ばかりにしたもんだから。

正太郎　……水道もないし、瓦斯もないし田舍のうちよりも不便だね。どうして市内へ越さないんだらうな、姉さん。

園子　だつて、仕方がないわ。

正太郎　石川さんが毎日會社へ通ふんだつて大變ぢやないか――こゝの、停車場からの道と來たらまたひどいんだから。

園子　（笑つて）正さんみたいに、下町の便利な處にばかりゐる人はさう思つても、馴れゝあ何でもないのよ。現に御近所だつてみんなお勤めの方ばかりよ。――それにもう二年もゐるんだから、あたしよそへ越して行きたいとは思はないわ。

正太郎　姉さんそんな事を云つて――文化生活も何も出來ないぢやないか。こゝぢやあ第一東京に住んでゐるやうな氣がしないと思ふがな。

園子　でも靜かなとこにゐつけて、たまに賑かな所へでも行くと、何だかこはい氣がして――うちへ歸るとほつとする位よ。

正太郎　いやだな姉さん、そんな意氣地のない事を云つて。都會に住んでゐたつて都會生活を充分樂まなけれあ何にもなりあしない。

園子　――姉さんも、もう駄目になつたんだねえ。

正太郎　駄目ぢやないがね。（笑つて）だつて姉さんは大した理想を持つて東京へやつて來たんぢやないか。――僕なんかいろ〳〵生意氣な事を覺えたのも、みんな姉さんの感化ぢやないか。――それがいつまでも郊外になんぞ納つてゐるんだから、僕には不思議でならないや。

園子　まあ感化だなんて、姉さんも大變なことになつた。

正太郎　感化さ。――國では都會生活讃美の御説教を何遍きかされたかわからない。劇場、コンサアト、銀座、カフェー――僕なんぞはそんなものを目あてに、學校へ來たやうなもんだ。――だから、すつかり不良學生になつて了つたぢやないか。姉さんのお蔭だよ。

園子　（見上げるやうに）……でも早いものねえ、もう卒業だなんて。

正太郎　何を卒業したんだかわかるもんぢやない――だが國へ歸るんだと思ふといやだなあ。

園子　あたしも本當に淋しくなつて了ふ――（まぎらすやうに）仕方がないから、これからは蓄音機でもやつて、せい〳〵文化生活を始めてよ。――でも本當に置いて行つていゝの。

正太郎　いゝんだよ姉さん。うちへ引つこんで帳場に立籠るんぢやないか、チエニイ位買つてもらはなくちやうまらないや。――その代りレコードはろくなものを置いて行きあしないよ。古くさいものばかりだよ。

園子　えゝえゝ、どんなんでも結構。

正太郎　さうだな、姉さんとこでも少しいゝ奴を買つたらいゝや、今度コロンビヤへ隨分澤山來たから。――何だつたら今日歸りに一緒に寄つて見ようか。銀座へ出て。

園子　（氣なしに）さうね。

（鋏を持つて鏡臺に戻る。）

正太郎　――姉さんどうしてさう不精になつたんだらう――二年も東京にゐ乍ら、まだ丸ビルを知らないなんて、まるでお話になりあしない。

園子　（笑つて）女ですもの、一人でどん〳〵勝手なところへ行けるもんですか。正さん自分で連れてつて吳れもしないで、そんな事をいふんだもの……。

正太郎　僕と行かなくたつて、石川さんと行けばいゝさ。

園子　だつてそれあ無理よ、だつて――お勤めへ出かけるんだから、そんなひまがありあしない。

正太郎　でも日曜つてものがある――

園子　たまのお休みですもの、うちの中でゆつくり休んでゐたいでせう。それに、毎日丸の內へ通つてゐる人に、見物に連れて行つて下さいなんて云へないわ、氣の毒で。――それにあたしも、からだをわるくしてから、億劫で外へなんか出たくもないんだから……。

正太郎　………

園子　これで正さんでもゐなくなれば、本當にどこへも行かれなくなるわ、丸ビルでもホテルでも、どこへでも連れて行つて貰へばよかつたのね。（笑つて）あたし惜しい事をした。

正太郎　まだよほど工合がわるいの。

園子　えゝ、大した事はないけれど、――まだ何だかはつきりしなくつて。お婆さんになつたせゐよ。

正太郎　（眞面目に）姉さん、僕が此間話した事ね、本當に一寸國へ歸つて見る氣はないの。お母さんだつてどんなに悅ぶか。――靜養つて意味で一月なり二月なり遊びに行かない。留守番は國から誰かよこせばいゝんだから。

園子　………

正太郎　ね、僕がこんな事を云つちや惡いかも知れないが、石川さんでも姉さんでも、あまり意地を張り過ぎはしなかつたらうか。――國ぢやみんな姉さんのからだの事を心配してるんだよ。女中がゐなくつて無理なんぞしなければいゝなんて、お母さんが始終云つてる位だよ。――今では誰だつて何とも云つてやしないんだから……

園子　（鏡臺を片づけながら）　えゝ、それあわかつてゐるわ。
正太郎　だから僕は、里見の叔母さんとこへ見舞に行つてくれるつてのがうれしくてたまらない――叔母さんだつて姉さんの事は心配してるんだからね。
園子　でも正さん、それあ違ふわ。あたしたゞ雪ちやんに逢ひたいだけよ、叔母さんなんかどうでもいゝの。――まる三年も逢はないんだからもう別の人みたいになつてるわねえ。
正太郎　あんまり變つてもゐないや。
園子　あんな事を云つて。（傍へ來る）　だつてぢきお嫁さんになる人ぢやありませんか、それあ立派なお孃さんになつてゐるんだわ。あたしは、お下げに結つてゐる時分見たぎりなんだから、もうびつくりする程變つてるにちがひないわ。――ねえ。
正太郎　あゝ。
園子　丁度よかつたのね。……來年一年志願から歸つて來れば、年まはりだつてよくなるんだし。――ね正さん、あなたの御婚禮の時ならあたし國へ歸つてよ。
正太郎　――
園子　えゝ本當ですとも、雪ちやんがあたしの姉妹になるんですもの、あたし、恥も外聞もないわ、その時は誰が何と云はうとかまはない、きつとお祝ひに出かけるわ。
正太郎　でも姉さん――それほど待たなくたつて、國へ歸つてもよさゝうなもんぢやないか。――お父さんだつてもう何とも思つてやしないんだから、僕と一緒に行かうよ。
園子　――さうはいかないわ。――今正さんにも云はれた事だけれども、あたしの身になれば少しは意地を立てゝ見たいこともあるの。あの頃親類の人達のした事を思へば。――里見の叔母さんだつて、本當は訪ねてなんぞ行きたくないの。
正太郎　………
園子　あれから今日まで、あたしなんぞはたゞ意地一つで生きて來たやうなものよ。意地を張る事がなかつたらもう氣がゆるんで倒れてしまつたのかも知れない。――本當にあの時は、お父さんでもお母さんでもかたきだと思つた……でも今でも、あたし惡い事をしたんだとは思はないの、あゝするより外仕方がなかつたと思ふわ。
正太郎　それあ僕だつてさう思ふ。――でも姉さんにしたつて、國の人達が持つてゐる厚意を、もつと素直に受入れてもよくはないかしら。
園子　でもあたし、それを信用出來ない氣がするの、あの時あんなにひどい事を云つてあたし達を攻撃した人達ぢ

やありませんか。――今更になつて、生じつかな親切なんか受けたくないわ。

正太郎　無責任な親類のした事はどうでも、お父さんやお母さんの心持まで疑ふやうなのは僕不贊成だね。昔にこだはつて何と云つていゝかな――現在、純粹な愛情にまで手を觸れまいとするのは、あまりに片意地だと思ふね。

園子　だつて正さん、親たちにしたところで、親類中が反對だつた爲に、いはゞその人達の顏を立てるためにあたしをうちから出したといふんでせう。そんなわからない事があるでせうか。――心から怒つてしたといふなら、あたしだつて親子ですもの、どこまでも意地を張りはしないわ。でもそんな間違つた仕打をされたんだと思ふと、いかに親だつてあたしは口惜しくつてならないの――どんなに苦しい事があつても、あやまりに行かうとなんぞ思はないわ。

正太郎　あやまるも何もないや、姉さん。――姉さんの病氣の時だつて、國では出來る丈の事はしたいからつて石川さんへそ云つてよこした位ぢやないか。お母さんも姉さんの體のことをどんなに心配してるか知れないよ。

園子　………

正太郎　だから、何でもなく體を休めに來たつて云つて、僕と一緒に國へ行つて見ようぢやないか姉さん。

園子　――正さん、もとから本當にあたしのことを思つてくれてるのはあなただけなの。――あたしみたいな事をしてかうのはあなた丈よ。あたしいつだつて賴りにするして暮してる者は、親からだつて憐まれたり同情されたりするのは、溜らないほどつらいものよ。だからどんな事でもこらへて通したの。――意地つ張りだの根性曲りだのつて嫌はないで、あたしの我儘をゆるして頂戴ね、御願だから。

正太郎　僕はたゞ姉さんが仕合になるやうに、いろ〳〵思つて見ただけだが……

園子　正さんがあたしの爲を思つて云つてくれるのはよくわかるわ。それは心底から有り難いと思つてよ。――でもあたしが國へ歸つた日には石川の立ち場がなくなつて了ふんだから、どうすゝめてくれても歸るわけには行かないの。一度でも歸つたら最後、あたし達は頭を下げたといふ事になるんですもの、これまで意地を立てゝ來たのがなんにもならなくなるわ。

正太郎　僕はそんな風に考へないけれど――

園子　折角云つてくれるけれど……惡く思はないでねえ。――かうしてゐたつて何も用はないんですもの、ごろごろして樂をしてゐれば自然によくなるんだわ。

正太郎　………

園子　（まぎらすやうに、ふと）どうしたんでせう、遅いわねえ。
正太郎　石川さん、僕たち病院へ行くつてのを知つてゐるんだね。
園子　えゝ、昨夜のうちそ云つたの。――遅くなるやうだつたら待たずに出てもいゝつて云つてた位だから、よく知つてゝよ。
正太郎　ぢやあ出かけようや姉さん。
園子　うちをからつぽにして。
正太郎　大丈夫さ。
園子　御飯の支度はしてあるからいゝけれど……でも、もう、歸つて來さうなもんだから。
正太郎　（立上つて袴をしめ直す）あんまり遅くなると銀座へ寄れなくなるんだから……。
（格子が明いて「こめんなさい。あの石川孝さんてこちらですか。」といふ聲がする。取次へ出た園子の返事を聞いて「いやどうもわからなくて。」などゝ云つてすぐ去る。）
正太郎　何だい姉さん。
園子　俥や。（戻つて來て）誰か來たのよ。――とにかくこゝを片づけなくては。――正さん、その盤をしまつて頂戴。

（そこへ取次の俥夫が大きい果物の籠を持ちこむ。一寸して雪子となかとがはひつて來る。）
園子　（出迎へて）まあ、よく――（土間でコートを脱ぐ雪子の姿を眺める）さあまづ、きたない家ですが、こつちへいらして下さい。（遮るのを無理に客間に招じる）まあすつかり別の方になつて了つて。――いえね、今日正さんに連れて行つてもらつて、病院へ上らうとしてゐたところなんでしたのに、わざ〳〵こんなとこまで來ていたゞいて。――叔母さんも大した事でなくつて結構でしたわねえ。
雪子　……母からもよろしく申し上げるやうにと云はれて參りました。――いつも御無沙汰致しまして。――お久振りでございます姉さんもおかはりがなくつて……。
園子　いえあたし共こそ御無沙汰ばかり申し上げて濟みません。今度は叔母さんの御病氣の事を承つてゐながら、つい無人なもんですから御見舞が遅れまして申譯がございません。――わざ〳〵またこんな所へいらして下さいまして。――ばあやもこつちへいらつしやいよ。雪子さんのお伴で東京へやつて來たのねえ。――本當に立派なお嬢さんになつて、ばあやはうれしくつてたまらないだらうねえ、あたしもさつきどなたかと思つた程だもの、まるでお變りになつてねえ。

正太郎　ばあや、あつちへ御出で。今日はお客さまぢやないか。

なか　はあ、姉さんはいつもお變りがなくて……。三年もお逢ひ申さないんですが、もうすつかり東京衆になつて御座つて田村のお母さんが見たら、なんぼよろこぶんだかわからない。

園子　ほゝ、とんだ東京衆でねえ。（雪子に）　いつも正さんに叱られ通しなんですよ。東京に居ながら東京を知らないつて。でも無理ですわねえ、連れて行つてくれなければ、女がひとりでそんなに飛びまはれませんもの。

雪子　いえ姉さんなんぞは、もう永くいらつしやつて知らない所がないでせうから、面白い所を敎へていたゞいて見物して行きたいと思ひますわ。病院の母へなど行つたり行かなかつたりしてゐるのですから、宿で退屈してゐるよりは方々へ參つて見たいと思ひまして。午前中はお連があるのでミネルヴへ通つて居りますが。

園子　ミネルヴ……。

雪子　えゝほんのいたづらですけれども、こちらにゐる間、二週間でも三週間でも手ほどきをして貰ひたいと思ひまして。——いつもばあやが一緒に行くんですよ、エレヹターが大好きで。三越でも丸ビルでも、昇つたり降りたり、それあ大變なんですよ。

園子　まあ。

なか　孃さん、そんな事を云つて。

正太郎　（茶の間でレコードを片づけ終る）　ところが流石のばあやも、この間尾張町でうろたへたね。うつかり道を横ぎらうとして、電車と自動車に追つかけられて、うわあと游いだ恰好はなかつたね。あれぢやあ昔盆踊りがうまかつた筈だと思ふよ。

なか　田村の兄さん、人の惡口利くとあとがこはいもんだよ。

正太郎　エレヹターで逃げれあ大丈夫だらう。（皆笑ふ）

園子　あ、お茶を忘れて——正さん、あなたこつちへ來て御相手をして頂戴。ぢや雪子さん一寸失禮して。

雪子　姉さん、どうかなんにもお構ひなく。

園子　いえなんにも。（なかが果物籠を差し出す）　まあ結構なものを澤山に。濟みません。遠慮なく早速頂戴致しませう——こんな不便なところで、氣の利いたお茶うけ一つないんですから。

雪子　でも大變靜で落付いたところで結構ですわ。——宿屋では夜晝電車がひゞいて、わたし着いた晩などは寢付かれませんでしたわ。

なか　ほんとに孃さん、落ち付いたえゝとこで、こゝのうちだとなんだか東京に居るやうでねえもの。

（二人は家の隅々や狹い庭を物珍らしく見まはす。園子臺所へ入り、果物を洗つて鉢に盛つて來て出す。それから菓子重を出し、銅壺の加減を見る。）

正太郎　（客間で）姉さん、果物をたべるんだから僕に紅茶を入れてくれませんか。

園子　あの、ミルクがなくつてもいゝ。

正太郎　結構。雪ちやんはどう。

雪子　いたゞきます。

正太郎　ぢやあばあやも飲めよ、お揃ひだ。

なか　はあ、なんでも御馳走になるんす。

雪子　（園子に）姉さん、ばあやも東京へ來てから急にハイカラになつたんですよ。

なか　（園子に）だつても折角東京さ來て、人のうまいと云ふものを食つて見ないと損がいくでせう。

園子　本當だね、ばあや。——だから見るものでも聽くものでも、雪子さんの行くところなら、どこへでも連れて行つていたゞくんだよ。

なか　えゝえゝ。孃さんが厭だつてもくつついてどこさでも行くです。——田村の姉さんになつてしまへば、あとお伴も出來ねえと思つて。

園子　そんな事もないだらうが……。でも雪子さんがこんなに立派なお孃さんになつて、ばあやもさぞうれしいだらうねえ——どこへお伴したつて、あたしの育てたお孃さんだつて云つて自慢が出來るんだから。

なか　ほゝ。したつて姉さん、どこさ行つても高聲で話をするつて、孃さんに嫌はれて了つたですよ。——それで氣付けてゐても、何でもつい訊きゝたくなるので。

園子　さうともさ、ばあや。わからないものがあつたら、よく雪子さんから伺つて置かないと、國へ歸つても東京の話が出來ないんだからねえ。——それを叱るなんて、孃さんが無理だわねえ。

雪子　あら姉さん、わたしなどは田舍者だから、東京のことなんどはなんにも知らないんですよ。——電車だつて、どれがどうだかわからない位ですもの。

園子　誰だつて、雪子さん、來たばかりでは當り前ですわ、あたしなんぞ、今だに一人ではどこへだつて出られないんですよ。——だからいつも正さんに連れて行つてもらふ始末ですわ。

雪子　いゝえ、姉さんなどは。そんな事がありませんわ。——こつちに居るといろ／＼面白いところへ行かれるんですから、本當にお仕合ですわ。

なか　姉さんなどはすつかり東京衆になつて了つて……。でも少しは國の方さも來ておもらひ申したいもんですよ。

園子　（まぎらすやうに笑つて）行くわ、ばあや。

（客間へ來て皆に紅茶をすゝめる。正太郎はさつきからネーヴルをたべてゐる。）

雪子　姉さんもずゐ分久しく國へ御出でにならないんですわね。

園子　えゝ、もう三年になりますか――。

なか　東京に御座つて面白いことばかり見てゐると、國の事などは忘れて了ふでせうな。――今日みたいにいゝお天氣だと、わたしらだつて國で雪の降つてるのが嘘みたいな氣がするですもの。

正太郎　まだ雪があるのかな。

雪子　今年は雪が多くつて。（園子に）先達國を立つて來る日なんぞは、大吹雪だつた位ですから、まだ／＼澤山積つて居りますよ。――考へて見ると、ばあやぢやないけれどまるで嘘みたいですわ。

正太郎　僕が冬休で歸つた頃は、雪が大變少くつて橇が利かない位だつたね。

なか　さう／＼、田村のお母さんが姉さんの御祈禱をしてもらひに行く時、寒中俥にのつたのは十何年目だなんて云つてたもの――あの時分までは珍らしく雪が降らなかつた。

雪子　さう云へば姉さん、ついうつかりして御見舞も申し上げないで。――この間は本當に惜しいことをしまして。――それでもおからだの工合はもうすつかりおなほりのやうですものようございましたねえ。

なか　あの時はみんなで御心配申してゐたですよ。姉さんつねが御丈夫でない方なのに、半産で病院さはひつたと云ふので、それあ大騷ぎ申したんで。――兄さんとこのおきよばあやなどは、毎朝、鄕社へお詣りに行きましたしね。――あの時は、田村のお母さんも、げそつと瘦せたつて、町で評判しましたよ。

園子　本當にみんなに心配をかけて……お蔭で命だけは助かつてよ。

なか　まあ早くよくおなりになつて何よりだつたですよ。――孫はこれからも見られるが、姉さんのからだは一つしかないのだからつて、始終さう云つてゐられたですよ。なあ孃さん。

雪子　――それでも折角お子さんが御出來になつたところを殘念でございましたわ。田村の叔母さんだつてどんなに樂しみにして待つてゐらしつたか。――お子さんが生れたら姉さんも見せに來るだらうなんて、樂しみにしてゐた程ですもの。

なか　それあそれとしても姉さん、本當に一ぺん國さお歸りになつて見ればいゝに。そんなに田舍を嫌つたもので

もないでせう。――これから丁度花時だし、うちの孃さんの歸る時一緒にどうです。なあ孃さん。
園子　さうねえ。國ぢやこれから花が咲き出すわね。――梅も櫻も、桃もみんな一時に開くんだから、本當に春になつたつていふ明るい氣持がするわね。――こつちにゐても、あのうれしさばかりは忘れられないわ。
正太郎　(わざとぞんざいに)　だから云はないこつちやない、いらつしやい、いらつしやいつて勸めてゐるぢやないか姉さん。へんに强情を張つてるんだから、厭になつちまふ。
なか　おや、兄さんもそんなにすゝめてゐたとこですか。
正太郎　うん。もう二年も歸らないところへ病氣だつたんでお母さんがひどく心配してゐるだらう。だから僕が東京を引き上げ序に、お土産に姉さんをひつぱつて來いつていひつけられてゐるんだ。
雪子　まあ、お土產だなんて――。でもさう云へばこの間春庵さんがうちへ來た時、東京さ行つて田村の姉さんに逢つたら、うまい杏の藥を調合して待つてゐるからと申し上げてくれ、さういへばわかるなんて云つてましたから、きつとそれを聞いてゐたんですわ。
正太郎　あゝあの老ぼれ醫者か。――杏の藥だなんて何だい姉さん。
園子　(笑つて)　風邪藥。
正太郎　下らない。
園子　だつて本當なんですもの。(雪子に)　あたしは子供の時分から弱くつて、しよつちう風邪をひいてゐたでせう。だから春庵さんが呉れる藥といへば、杏のやうな匂ひのする甘酸つぱい水藥にきまつてゐたんですよ。
なか　――姉さんはうちの孃さんとちがつて弱かつたから、春庵さんの藥をよく飲んだわけですものね。
園子　いつも熱が出て呼びにやると、また孃さんは杏の藥を飲みたくなつたなアつて、笑ひながらみてくれたものよ。――あの人には本當に世話になりましたわ。
正太郎　僕はあんなよぼ〳〵の漢法なんぞは眞平御免だね。うちへ來たつて僕はみて貰はないことにしてゐる。――何だか危かしくつて堪らないんだもの。
園子　正さん、そんな事を云つたつて。――あんなに親身になつて病氣のことを心配してくれるお醫者なんてどこにもゐないわ、――あたしこの多病院にはひつてゝ、つく〴〵さう思つたんですよ。學問や機械でお役目で病氣をなほしてもらふよりも、親切に扱はれるのが病人には一番うれしいものだつてことを。――大きい病院に寢てゐて、毎日別々の先生から藥をいたゞいても、何だか身に利くやうには思はれない位でしたわ。(冗談らしく)

今度病氣にでもなつたら、あたし春庵さんにみてもらひたいと思つたんですよ。

雪子　ほんたうに、姉さんも知らない所で病氣をなさつて、どんなに心細かつたでせう――今度からはお見舞にも上がれるんですけれど、御無沙汰をしてゐる時でしたから、蔭でさう思つたゞけで……

なか　今度もし鹽梅でも惡い時は、何でもいゝから國さ來て、春庵さんにみてもらふことですよ姉さん。

正太郎　だつて杏の藥ばかり飲まされるんぢや仕樣がないや。

園子　まあ正さん、あなた小さい時に春庵さんに苦いお藥でも飲まされたんで、それで惡口をいふのね。（氣を替へて、果物や菓子をすゝめる）雪子さんどうぞ。ばあやも食べて下さいよ。――これは正さんから貰つた國の羊羹で、珍らしくもないけれど。

正太郎　この間の、まだあるの。僕はもうとうにたべてしまつた。

園子　でもうちぢやあまりいたゞかないもんだから……。

正太郎　（やゝ皮肉に）この羊羹を食つて藪醫者の話をしてゐれあ、國にゐるとかはりがないね。

なか　久し振りで姉さんと兄さんのゐるところで御馳走になつたら、さつきから田村の御宅さ行つたやうな氣がして……さうでねえか孃さん。

雪子　ほゝ。

園子　だつてその筈ぢやないか、ばあや、雪子さんだつてぢき田村の姉さんになつてくれるひとだもの。

（なかのわだかまりのない笑顔の上に電燈がともる。雪子が目くばせして座をすべる。）

園子　まだいゝぢやありませんか、折角こんなとこへ來て下すつて。――それにもう歸つて來る頃ですから。

雪子　でも……また……

なか　姉さん、また今度は孃さんのお母さんも連れて來ますから。

園子　まだ本當にいゝでせう。――雪子さんとはまだ／＼お話があるんだから。――ばあや、さ、坐つて。

（押問答してゐるうち、格子が明く。）

正太郎　石川さんぢやない。

園子　さうでせう、きつと。（そちらへ行く）

（客間の三人は堅くなつたやうに坐り直す。）

孝　（蔭で、わざとらしく）もう出かけたかと思つて來たんだ。――またひどい停電を食つたもんだから。――正さんもゐるかい。――

（はひつて來て客間へゆく。）

孝　（快活さうに）正さん、待たせて失敬しましたね。い

や今日も停電で三十分も立往生させられちまつて。肝腎のラッシユ・アワーにやられては叶ひませんよ。（雪子に）いらつしやい。わざ〲こんなところへ來ていたゞいて恐縮です。お母様のお出での事を伺つて居りましたが、つい御見舞が遲れまして失禮しました。――今日、團子をやることになつてゐましたが、反つてどうも……。それに結構なものをいたゞいて。

雪子　――御無沙汰を致しまして……母からもよろしくと申して居ります……

孝　いえ、こちらこそ御無沙汰ばかりしまして――どうです、お母様の御病氣の方は。

雪子　――お蔭樣で……大したことはないのでございます……

孝　いやそれはようございましたね。（なかに）ばあやさんですね。今日はよく來てくれました。

なか　はあ――あの、旦那さんもお母さんもおまめで……今、どちらに御座るでせう。

孝　おやぢですか、相かはらずで――お國の方から仙臺へ行つて、去年の暮に福岡の鑛務署へやられましたよ。役人なんぞしてるもんだから、あの年になつても方々歩きまはらなくちやならないんですね。――（正太郎に）成績はどうでした。

正太郎　なあに例の通りです。

孝　例の通りで結構ですよ。――全く學校の成績なんぞは、實際社會に立つて働く時には何の役にも立ちませんからね。たゞわれ〲プロレタリヤには、學校を出ると就職といふ難關があるので、まあそれに對して表看板になる位のものでせう。――どうです、今年塾の方の成績は

正太郎　さあ知りませんね。

孝　正さんなんざ暢氣でゐられるからいゝわけですね―まあ可也でせうね うちの會社でも一人採りましたよ。――しかし正さんの前だけれども、塾の人は學問もあり目先もきくが、どうも一般に覇氣に乏しいといふ非難がありますな。――うちの社長などもしきりに云つてゐますが、どうですかね。

正太郎　さうでせうか。

孝　やつぱりブルヂョア育ちの人が多いからなんでせうが、今後の社會に活動する場合には考へて見る必要がありますな。はゝ。飛んだ說教になりましたね。――いつ頃國へ歸る豫定なんです。

正太郎　卒業式あたりまで――來月の十日頃まで遊んでゐようと思ふんですが。

孝　それぢや卒業祝ひもゆつくりやつていゝわけですね。はゝ。（雪子に）折角この冬からいゝ議論友達が出來た

と思つたら、もう正さんは卒業して歸つて了ふんですから、張合ひがありませんよ。

雪子　………

なか　ほんたうに姉さんもどんなに徒然になるか……

孝　これからは雪子さんと二人で、時々國から遊びに來てもらふんだね。

（格子の方で一寸した物音。）

園子　夕刊でせう。（立つて、持つて來る）

雪子　（園子に）姉さん、あのあんまり遲くなりますから、これで失禮します。

園子　でも、まだ……

雪子　いえ本當に――。（孝に）失禮でございますが……

孝　まだいゝぢやありませんか。こゝは田舍で何もありませんが、御飯でもたべて行きませんか。いゝだらう、ばあや。

なか　あの、不調法ですが……これで御免蒙つて……

園子　ではお止めしませんわ。――本當にこんなところへわざ〳〵來ていたゞいても何のおもてなしも出來なくつて……。明日にもお伺ひ致しますからつて、叔母さんへよろしく申し上げて下さいな。

雪子　とんだ御邪魔申し上げて。――どうぞ。御待ちして居りますから。

なか　姉さん、ほんとに來て下さいよ。

園子　正さん、今夜遲くなつて行つてあたし伺へないから、あなただけ雪子さんを送つて行つてくれない。濟みませんが。

正太郎　さうかいこれからぢや姉さん駄目かい。ぢや僕また明日でもやつて來らあ。（孝へ）僕も失禮します。

孝　今日は本當に失敬しましたね。ぢやお叔母さんへよろしく御願ひします。

（三人は去る。園子と孝見送る。）

孝　――もう立派なお嫁さんだね。

園子　えゝ。あたしもさつきは別の人かと思つた位よ。――すぐお風呂へ行つて。

孝　今日はどうでもいゝ。――何時頃來たのかい。（着替へる）

園子　さうね、四時頃かしら。あたしたちが出かけようとして、あなたの歸るのを待つてた時だから。――このカラー、もう洗濯屋へやりませうか。もう一度位いゝかしら。

孝　行きちがひにならなくつてよかつたね。――あゝ今日も停電で馬鹿を見ちまつた。

園子　どうしたんでせうね、此頃。お勤の人は困るわね。――雪ちやんも仲々ハイカラね、毎日ミネルヴへ通つてるんですつて。

孝　………

園子　この間新聞にあつたでせう、毛糸の編物を教へるところでせう。（果物の籠を見せて）あなた、こんなに貰つて、うちぢや仕様がないのにね。どつかお遣ひ物に出來ないかしら。――高瀨さんとこへでも上げませうか――病氣見舞をいたゞいた御禮に。

孝　うん。小さい籠を買つて來て分けてやれあいゝさ。――病院へは何を持つて行くんだい。

園子　あたし、近所でカステラでも買つて行かうと思つたんですけれど、叔母さんが好きだから。

孝　何しても澤山もらひ過ぎたね。――これあ千疋屋のだから上等だよ。

園子　千疋屋なんて可笑しい名ね。

孝　有名なうちなんだ――丸ビルにもあるよ。新橋の本店から買つて來たんだね。（バナ、をたべて）仲々上等だ。

園子　（たべる）おいしいわね。――ほゝ坐りこんでしまつて。ぢやあ片づけて御飯にしませう。（茶の間を片づける）あなた雜誌屋が來ましてよ。（カバーのかゝつてゐる雜誌を渡す。孝は長火鉢のところでよむ。園子は二三度臺所へ往復する）

孝　――雪子さんいくつだつて。

園子　（臺所で）九ですつて。柄が大きいせゐか割りに老けて見えるでせう。――でも正さんとは丁度いゝ夫婦でせう。あの人も年よりは上に見られる方だから。

孝　（横になつて）正さんもこれからはすつかり若旦那になつて了ふんだね。この蓄音機はどうしたんだ。

園子　正さんが、新しいのを買ふつてからうちで貰つたのよ。――盤はいゝのがないさうですけれど。（出て來て食卓を開く）

孝　置土產かね。（ねぢをまく）

園子　まあ――あなた濟みませんが、御飯が冷いんですよ、さつき炊いたものだから。

（孝は手近のレコードをかけ乍ら夕刊を讀む。さつきの陽氣な舞踏曲が不調和に鳴り出す。）

（園子は茶碗や小鉢を臺所から運んでは食卓へならべる。）

――幕――

殉死（一幕）

人

家老　五十位
和尚　白髯
用人　老人
家老の息子　二十四五
侍女浪路　二十位
石川主水　三十位
其他侍二三

時

封建時代の末期

場所

ある小藩。城主の館の一室。

奥の方から大勢の讀經の聲、鉦や木魚の音が陰に籠つて聞こえて來る。部屋の一隅に小机を控へて、用人は書類を見ながらしきりに大きい算盤を彈いてゐる。鼈甲の目金。時々小首を傾けたり溜息をついたりする。

しばらく。

侍　（出て來る）御用人樣、御注文の棺が三つ出來て參りました。
用人　さうか。受け取つて置け。
侍　畏りました。（もぢ〳〵しながら）あの、いづれ、その、殉死の方の御用品でございませうな。
用人　あゝ、無論だ。（算盤の手を休めて）いかに殿樣だつて、御自分でお休みになる分は、この間の一つで澤山だからな。
侍　全く。――で、一體誰方がお供申し上げるのでございませう。
用人　それはわしにはわからん。たゞ誰にしたところで、この追ひ腹といふのは迷惑なものだ。お供の葬式までこつち持ちになるのだからな。
侍　でも、しかし――
用人　いや先殿樣の時などは大變だつたよ。後から後からと七人にもやられたからな。お供をして死ぬのは無闇にいゝ氣持らしいが、御扶持だ御加增だと後始末を背負はされる方はやり切れない。今度こそと思つてゐたら、やつぱり駄目だ。
侍　何事も御心配の種ですな。
用人　あゝ、また豫算超過だ。同じ忠義をつくすなら、金

のかゝらない事をしてくれるといゝのだが。（帳面へつけろ）――上等の棺三箇か。

侍　それにしても誰方と誰方でせうな。あちらで皆が勝手な取沙汰をして居りましたが、どうも見當がつかない樣子で。

用人　ふむ。御家老でなければわかるまい。――とにかく棺は受取つて置け。

侍　はい。（立つ）

用人　（呼び止めて）それからな、勘定は御葬儀萬端相濟んだ上で、纏めて支拂ふからと商人に申付けるのだぞ。

侍　畏りました。（去る）

（鉦が一しきり鳴つて讀經が止む。）

（家老がはひつて來る。腕を組んで考へる。）

用人　（氣がついて）もうお經はお濟みですか。――お誂への棺が屆いたさうですが。

家老　棺が。うむ。――それではすぐに稻葉監物と石山重九郎の邸へ送つて貰ひたい。この二人だけは、今夜のうちに追ひ腹を切ることになつてゐるのだ。

用人　（よくも聞かずに）何にしても、今度は三人だけで打止めにしたいものですな。殿樣の御遊興に引きつゞいての御病氣、それに御葬儀と、もう物入りが重なる一方ですから、お供のところは精々儉約していたゞかないと堪りません。（帳面を展いて見せ）この通り、借金、借金、借金で、それでも足りない場合ですから。

家老　わかつてゐる。――わしの方でも足りない事では四苦八苦だ。

用人　でせうが、是非三人きりで我慢して下さい。――この上臨時費が嵩んだらやり切れません。

家老　（苦々しく）下らない。わしはお家の一大事を云つてゐるのだ。

用人　破產するのは一大事ぢやないのですか。

家老　借金は御代變りに踏み倒せば濟む。稅金を上げれば金なんぞはすぐ出來る。たゞ心配なのは、肝腎のお家がつぶれはしないかと云ふ事だ。

用人　え。お家がつぶれる――

家老　うん。さうだ。――殿樣は御本家から養子に來た方だらう。今度おかくれになつたのに、一人もお供に立つ者がないとなつたらどうだ。御本家では一家中みな不忠不信の家來ばかりだと考へて、若君のないのを幸に領地をお取上げになるに相違ない。さうなつたらわしもお前も明日から扶持離れの浪人だ。

用人　（あわてゝ）殉死が三人もあつたら、當節十分ぢやありませんか。何處へ聞こえたつて立派なものです。

家老　ところが二人しかないのだ。それも、稻葉監物は殿

様のお守役で御本家からついて來た者だ。常々殿様の不身持なのをわれ〳〵に濟まながつてゐたのだから、まあこれは責任上當然の殉死だ。今一人石山重九郎は御乳母殿の息子だから、殿様とは乳兄弟の間で、これも御本家から呼んで來た者だ。――當家中では、誰一人お供をする者がないので胸を痛めてゐるのだ。

用人　でも、棺は三つお誂へになつたのでしたな。

家老　そこだ。――先殿様がおかくれの時、お供に立つた者が何人あつたと思ふ。

用人　(帳面を指して)　えゝ、ちやんと費用まで書きつけてあります。栗原一馬、水野十郎、澤田龍之助、桝村半太夫――

家老　名なんぞはいゝ、とにかく七人だ。

用人　えゝ、七人。あれには閉口しました、何しろ豫算外ですから。

家老　先殿様とは御人柄も御行跡もちがふ事は御本家でも認めてゐる。それでも、せめて先殿様の半分はお供を立てないと、御本家の面目をつぶすことになる。さうだらう。また當家としても、御本家から御出でになつた殿様に對しては、それ位の義務があると云ふものだ。

用人　(算盤を取り上げて)　七人を二で割ると、えゝと三人半ですな。ふうん、四捨五入すれば、四人。なるほど。

家老　(詫びるやうに)　いやその端數は見のがして貰ふのだ。いゝか。そこでどうしても三人だけはお供が要ると云ふことになる。

用人　さういふ勘定になりますな。

家老　御本家の者にしろ、とにかく頭數ではやつと二人拵へたが、あと一人が難物でな、誰もなり手がないのだ。

用人　お心當りがないのですか。

家老　それがないので弱つてゐる。

用人　いよ〳〵なければどうするのです。

家老　無理にも誰かを死なせるつもりだが――。仕方がなければ二人で我慢するか。

用人　棺が一つ餘ります。

家老　そんなものどうでもよい。

用人　よくありません。――困りますな。それときまつてから云つて下されば無駄を誂へなくても濟んだのに。――この貧乏暮しの中では、全く棺一つ倹約しても助かりますのに。一體――

家老　わかつてゐるよ。

用人　いえ〳〵。一體、その――人のあてもないのに棺をこしらへる。そんな贅澤は金持の道樂です。こんな苦しい時にやる事ぢやありません。(帳面を叩く)　あゝ惜しい。むざ〳〵無駄づかひをして了つた。棺の餘り物ばか

りは、まるで外に使ひ途がない。——あゝ惜しい事をした。
家老　（不機嫌に）うるさい。お前などの知つた事ぢやない。お家のために入用な棺だ。
用人　それでも、使はなければ無駄物です。
家老　いまに使ふ。
用人　死に手がありますか。
家老　ある。
用人　誰です。
家老　誰でもいゝ。
用人　それ、やつぱり居ないでせう。
家老　（怒鳴る）無禮者。誰も死なゝければ、このわしが皺腹切つて棺にはひる。つべこべ云はずに算盤でも彈いてろ。
（少し前から遠くでがや〳〵騷ぐ物音。）
（さつきの侍が出る。）
侍　申上げます。
用人　何だ。
侍　さき程から若侍共が、棺のまはりに集つて、しきりに殉死の噂をしてゐましたが、そのうち踏を始めたり喧嘩口論に及んだりして手がつけられません。棺をあちらに置くと、どうも皆の氣が立つて面白くないやうですが——
家老　さうか。では卽刻稻葉監物と石山重九郎の邸へ送り屆けるやうに。
侍　はい。
家老　殿樣のお供に立つ骸を納めるのだから、至極丁寧に扱ふのだぞ。
侍　はい。
家老　若侍が騷ぐなら、猶更だ。早くせい。
侍　はい。……そしてあとの一つはどうしませう。
家老　うん。あとの一つか。それは……とりあへずこゝへ運べ。
侍　畏りました。（去る）
（やがて遠くで喚聲らしい物音。それが間近まで來る。）
（侍二三、白布で包まれた立派な棺を運び込み、中央に直して去る。）
（入れちがひに和尙と家老の息子がはひつて來る。）
家老の息子　何です、今の騷ぎは。
和尙　ほう、お供の支度が出來たのですな。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
家老　（息子に）どうだつた。誰か承知したか。
家老の息子　（首を振る）駄目です。いやどうも弱りました。みんな逆ねぢを食はせるのです。殿樣が勇ましく戰

場で討死されたのなら、一同お後を慕つて追腹を切る。武道のためお家の爲に捧げる命は、いくつ投げ出しても惜しくないと云ふのです。しかし——

家老　まあいゝ。一人も駄目か。

家老の息子　私は嬲り物にされにのこ／＼出掛けたやうなものです。殿様の御行跡を、まるで私のせゐだとでも云ふやうにみんなで非難した揚句が、眞平御免だと御斷りを食ふのです。ひどい奴になると、殿様と同じ病氣なら御供したいなどゝ嘲弄しました。

家老　（溜息をつく）うむ。

和尚　お話中だが、殿様の御病氣は何だつたな。

家老　なんでもそのやはり勞咳の一種で、腎虚の煩ひだと侍醫が云ふのですが。

和尚　なに腎虚。お若いのにおいたはしい事だ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

家老の息子　御本家との關係も說きましたがあの連中は耳にも入れません。所詮私の手ではどうにもならないのです。

家老　うむ。（和尚に）さあ和尚様。打ち明けた話が殉死の人數が少いので、私の立場として甚だ困却してゐるのですが、お宗旨の上から見ても、やはり大勢でなくてはいけないものでせうか承りたいものです。

和尚　左様。一體この殉死といふのは、殿様がなくなられて中有の一人旅に赴かれる時、臣下の者が死出の山三途の川を一緒にお供して、淋しさを慰めるのが趣意になつてゐますからな。

家老　すると、多い程いゝわけですか。

和尚　まあさうも云へますな。しかし三人で澤山ですよ。さき程御本家の御名代も大層御滿足でしたから、三人で十分でせう。

家老　御名代も御滿足でしたか。

和尚　殿様に就いてはとかくの噂をきいてゐたが、三人ものお供が出るとは御本家の面目になると云つてお悦びでしたよ。——それとも常々のお氣性を考へても少し賑やかに人數を殖やしますか。

家老　實は——

和尚　いくら多くても、多い分は構はないのですよ。昔支那の武公には六十六人の家來がお供をし、また穆公の卒するや從つて死する者百七十七人とある。

用人　（叫ぶ）　百七十七人。（歎息）

和尚　しかしかうなれば少し無茶だな。三人位が丁度いゝところでせう。

家老　實は、その三人が一人足りないのです。

和尚　ほほう。

家老　そこで、この殘つてゐる棺を御葬儀のお供に出したいと思ふのですが――

用人　なるほど。――それなら二人で濟む。

家老の息子　確にいゝ考へです。

和尚　いや、それは虚僞です、詐欺です、斷じていけません。殉死者を裝うて棺だけを擔ぎ出すなどゝは言語道斷、殿樣をだますことです。佛をあざむくことです。愚老は之を知つて猶且許すわけには行きません。

家老　（あわてゝ）そんな大それたつもりは毫頭なく、苦しまぎれにひよつと思ひ付いた丈ですよ。どうか氣を惡くしないで下さい。――なるほど、いけない事でした。――ところでどういふものでせう、女のお供は。

和尚　それは一向構ひません。秦の始皇は後宮の美姫千餘人を伴つて冥土へ立つた例もあります――殿樣もことに女人ならお悦びでせう。

用人　千人の女――

家老　さうですか、有り難い。（息子に）奥へ行つて、浪路といふ女を連れて來い。

家老の息子　（青くなる）え、浪路どのを。ど、どうなさるのです、一體。まさか――

家老　どうでもいゝ、早く引つ張つて來い。――何を愚圖愚圖してゐる。――聞き質すことがあるのだ　早くしろ。

家老の息子　でも。一體どういふ事を――

家老　連れて來ればわかる事だ。早くしろ。

（家老の息子思案顏に出て行く。）

用人　御家老殿、心當りが出來たのですか。

和尚　しかも女のね。

家老　かねて殿樣萬一の場合には、きつとお供申し上げたいと云つた女が居るのです。

和尚　ふむ、奇特な。そしてまだ若いのかね。

家老　えゝ、若くてすばらしく美しい女ですよ　その爲に殿樣のお情を受けてゐた者です。

和尚　ほほう。無理もない。殿樣と離れては一日も生きてゐられないと云ふ寸法だな。

用人　（帳面を繰る）はは、さうですか。どうりでお給金が法外に高い。

家老　まあこれで三人揃つて私も安心です。

用人　女の事だから女房子はなし、御褒美の一時金だけで事濟みでせうな。私も助かる。

和尚　さう云ふ緣故の深い女がお供したら、殿樣もさぞかし御滿足であらう。これも生前慈悲善根を積まれた酬いだ。有り難い。南無阿彌陀佛。

（そこへ家老の息子に伴はれて侍女浪路がはひつて来る。非常に色つぽい女。）

浪路　御家老樣、何か御用でございますか。
家老　うむ、その、少し內密の話があつてな。――さて殿樣の御他界は、申すまでもなく一家中の大不幸だが、われわれ日頃お側に仕へる者の悲歎は御同樣また一しほだ。ことに有り難い御寵愛を蒙つた女の身ではどんなに悲しいかつらいか、わしはお前が氣の毒でならない。
浪路　有り難う存じます。わたしは……わたしは……（顏を伏せる）
家老　全く愁傷に堪へない。殿樣はことの外お前を愛して居られた。それはよく存じて居る。うむ。お前も殿樣を心からお慕ひ申してゐた。いや、よくわかつてゐる。感心な事だ。――それが今度の御逝去だ。お前は杖柱を失つて身も世もない思ひだらう。わしもそれは十分察するぞ。
浪路　（泣き崩れる）
和尙　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
家老　いよ〳〵明日が御葬儀で、もうお骸のお側にゐられるのも今夜限りだ。あれ程お慕ひ申し上げた殿樣の御顏も、もう見られなくなつたら情なさが猶一倍だらう。本當に氣の毒でならない。――それを思つていま和尙樣に御願して見たところだ。お前は女の身として不淨を憚つて遠慮してゐるだらうが、差し閊へない。殿樣と御約束したことを、改めて許して上げる。
和尙　この世は假りの世界でな、生者必滅會者定離、よろこびも悲しみも一時の夢だ。あの世へ行けばいつでも殿樣に可愛がつていたゞける。かねて其望みでゐたとは、若い女性に似合はずよくも悟られた。――見上げたものです。
家老の息子　浪路どのがなんでそんな馬鹿げた事を云ふのですか。
家老　馬鹿。默つて引つこんでゐろ。――（浪路に）去年のお月見の晚にお前が殿樣に申上げた健氣な願ひを、わしははつきり覺えてゐる。それが叶つてさぞ本望であらう。な。――お前は女の事だ、あちらへ下つて髮も洗ひ肌も淸めて、心しづかに身支度するがいゝ。
和尙　あゝ、惜しい器量で――殊勝な事だ。南無阿彌陀佛。
家老　（浪路の肩を撫でゝ）さあもう泣くには及ばない。笑つてお側へ行けるのだ。こんな立派な棺まで用意してある。
浪路　（無闇に泣いてゐたが、顏を上げて）御家老樣、あたしどうすればよいのでございませう。
家老　無理もない、白刃の光も見たことがなからうな。逆手に持つて、かうやるのだ。（手眞似で敎へる）
家老の息子　あゝ、殘酷だ。

和尙　南無阿彌陀佛。（目を瞑る）
浪路　（矢庭に叫び出す）人殺し――
（飛び出して身を避ける。）
家老　これ、どうした。
浪路　あなたこそ、何をなさるんです。
家老　咽喉をつくにも作法がある。それを敎へてゐるところぢやないか。
浪路　緣起でもない。あたし指は切る事があつても、咽喉になんぞ用がありません。
家老　なに。さては殉死に氣遲れしたな。主人をたばかる不埒者奴が。
浪路　あら、何か思ひ違ひしていらつしやる。誰が殉死なんて、馬鹿らしいことをやるもんですか。
家老　去年お月見の宴に、滿座の中で云つた言葉を忘れたのか。
浪路　ほゝ、あの事ですか。あれはわたしの大手柄だつて、殿樣から御褒美が下りましたよ。――皆さんお酒がまはつて大陽氣のところへ、殿樣が御機嫌でおつしやいましたね。「あゝ愉快だ。この儘死にたいが誰が供について來る」つて。ところが誰一人としてお答へするものがなく、座が白けて了ひました。御家老さまだつてお側に居た癖に、「御伴します」つて御返事しなかつたぢやありませんか。
和尙　ふむ、いかにもな。
浪路　御家中の人だけならいゝが、よそからの御客樣も見えてゐるでせう。みすみす殿樣に恥をかゝせるのが餘り可哀相なので、大聲で「わたしをおつれ下さい」と云つて上げたのです。一期半期の奉公でも、主人に忠義はつくすものと思つて、氣轉を利かして上げました。――それがなんで不埒でせう。
家老　本心ではなかつたと云ふのか。
浪路　あたし一人の命ぢやないんですもの、さう無闇に死ねませんわ。――いゝ人に聞いてからでないと。
家老　では、殿樣をだましてゐたのだな。
浪路　飛んでもない。殿樣こそあたしをだましたんです。
家老　言葉を愼め。不屆き者。
浪路　だつてさうぢやありませんか。あたしとの約束を果して下さらずに、おかくれになつたんですもの。
和尙　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。
浪路　あたしはいやな惡侍につき纏はれたので、そのボク除けに御奉公に上つたんです。すると其日から殿樣が無理無態にお口說きなさるでせう。男があるのは承知だ、あとで立派に添はせてやるからとおつしやるので、たうとう御言葉に從つたんです。ところが話の目鼻もつけず

に、さつさとおなくなりになつたんですもの、あたしはだまされたんです。殿樣は嘘つきです。あたしそれを考へると、腹が立つて腹が立つて、口惜し涙が出るんです。
家老　だまれ、だまれ。
浪路　いえだまりません。殿樣は大嘘つきです。――ぢやあお遺言の中に、あたしを男と添はせてやれと書いてありますか。それ御覽なさい。なければ嘘つきです。大嘘つきですとも。
家老（怒鳴る）無禮者。許さんぞ。（息子に）そやつの舌の根を止めろ。
　息子は逡巡する。）
浪路（落付いて）まあ、あたしを切るんですか。あたしに何の罪咎があるんです。御家老樣なら勝手に人を切つてもいゝんですか。――たゞね、一寸氣をつけて下さい。こんなお多福でも殿樣のお情にあづかつた女です。いはば主筋ぢやありませんか。あまり無茶な事はして貰ひますまい。
　（息子身を引く。浪路わざと近づく。）
浪路　若旦那、さあ切つて下さい。あたしあなたの手にかかれば本望よ。いつぞやは度々御手紙を下すつて、本當にうれしうございましたわ。御親切は忘れません。殿樣が大の燒き手なので御返事が出せなかつたのですよ、惡く思はないで下さいな。今日はまたとんだいゝところへ連れて來ていたゞいて。――これはきつとあなたの御親切からでせう。御禮を申しますわ。
家老の息子　いや父上のいひつけで――
家老　こらもういゝ、構ふな。（浪路に）用はない、下れ、下れ。
浪路　さうおつしやらなくたつて、御葬儀までは義理だと思つて居て上げたんですよ。嘘つきや咽喉つきがこはいから、もう一日だつて居られませんわ。（一人一人にわざと丁寧に）永々御世話さまになりまして、有り難うぞんじます。（やがて用人の傍へゆく）あたしの御給金を勘定して下さいな。
用人　支拂は全部御葬儀あとだ。
浪路　いえ今いたゞきたいの。（帳面をひつたくつて繰る）さあこれを下さい。
用人　いま、その現金がない。
浪路　自分の金でもないものを、けち〳〵しなくてもいゝでせう。（手早く箱を開けて一包取る）これだけで澤山。
　――
用人（目を白黑させて）滅相もない。そ、そんな大金を
浪路　いゝんだよ、おぢいさん。特別手當をどつさりいた

だくわけがあるんだから。なんなら殿様に伺つて來な、
奥にお休みだ。

和尙　南無阿彌陀佛。

浪路（家老の息子に）若旦那、これからいゝ人と町で煙草屋を始めますから、どうぞ御ひいきに。――では御機嫌よう。（去る）

（皆呆氣にとられて顏を見合す。）

家老（息子を見ると）馬鹿。

用人　驚いた。あきれた。（棺を覗いて）困つた。（歎息）

和尙　女は怖ろしい。外面如菩薩内心如夜叉。うむ。

（侍はひつて來る。）

侍　御家老様、さき程お云ひつけの通り、稻葉監物樣石山重九郎樣のお邸へ、それ〴〵棺をお屆けして參りました。

家老　大儀だつた。

（侍去る。）

家老の息子（棺を叩いて）さあ、またこのいれ物の心配だ。

用人　無駄にするのは惜しいが、――この上百兩さらつて行くやうな玉は眞平ですぜ。

和尙　何にしても空では役に立たない。

家老の息子　父上、どこかお心當りがありませんか。

家老　もう思案も盡きた。

用人　いよ〳〵無駄になつて了ふのかな。上等の棺一箇。惜しい事だ。

和尙　しかしたゞ二人のお供では殿様も淋しからう。平常が賑かだつただけにな。――それに御本家の思惑もどうかな。

家老の息子　そこです、そこが一番の心配なのです。

和尙（家老に）誰かを無理にも納得させるわけに行きませんか。先代のお墓所には七人もの殉死者が控へてゐる。それが今度たつた二人では、見た目がいかにも淋しく見すぼらしい。お墓を飾るだけでも、も一人は是非とも欲しい。

家老　それは私も望むところですが、世の中はどうも思ふやうにならない。

和尙　殿樣のお後を慕ふと云ふよりは、代々恩顧を蒙つてゐる、この御當家の威嚴のために、誰か一奮發してお供しさうなものですがな。

家老　さう云はれるまでもなく、私が最先にお供したくなるのですが、いかにせん先殿樣から懇に後事を托されてゐるので、責任上捨てたい命を永らへてゐるのです。心苦しさ御察し下さい。死ぬよりつらいことです。

和尙　ごもつともで。

用人（家老に）でもさき程は、やむを得なければ皺腹か

き切つて棺をふさいで見せると云はれましたな。

家老　馬鹿な。わしとしてそんな輕々しい口が利けると思ふか。――（和尚に）全く苦しい立場です。（息子を顧みて）これとても同樣、私が萬一の時には重い責任を嗣がなければならない身ですから、泣いて願ふのを叱りつけて殉死をとめたわけです。若い身空でさぞ無念だらうと、それが不憫でなりません。

和尚　いや、一々ごもつともですよ。

家老の息子　（しきりに考へてゐたが突然）和尚樣、罪人ではいけませんか。

和尚　お供の事か。罪人でも何でも差し閊へない。誰かゐるか。

家老　誰だ。誰だ。

家老の息子　石川主水です。

家老　なんだ、あの亂暴者の謀反人か。どうして殉死どころか、殿樣に刄向つた人間ではないか。

家老の息子　あれでも、理非は辨へなくても利害はわかるでせう。磔になるよりも切腹の方が樂でせう。どうせ死ぬのは覺悟の前にちがひないから、遺族を取り立てるといふ條件でも出したら、案外うまく話がつくかも知れませんよ。

和尚　（家老に）流石はあなたの御子息だ。ふむ、いかにも妙計です。いや流石です。

家老　（息子に）よし、此際の事だ、思ひ切つて談判して見る。人目につかぬやうにすぐに、こゝへ連れて來い。こつそりだぞ。

家老の息子　承知しました。（去る）

和尚　なるほど。御子息の名案にはほと〱感服しました。

用人　しかし牢内でばつさりやつた方が簡單ぢやありませんか。手數もかゝらず、それに第一、遺族をどうのかうのといふ金もいらない。

家老　お前は何にも知らないんだ、牢内で容易く片付けられる奴か。あいつを殺すのは磔にするか自分で死なせるかより外ない。大勢で騷ぎ立てゝ殺したら、すぐと世間へ知れて殉死の化の皮が剥れて了ふ。

和尚　なる程な。

家老　奴が承知して切腹すればしめたもので、石川主水前非を悔いて殿に殉死と、かう立派に披露が出來ませう。

和尚　いかにも。

家老　それで四方八方うまく行くのだから、遺族の者へ少しはずんでやつてもよからう。御用人の方でもその心得でゐてくれ。

用人　さつきの女に百兩持つて行かれたので、すつかり算盤の桁がはづれて了ひました。明日の御葬儀が首尾よく

出せるかどうかもわかりません。
家老　さうなつたらお和尚様の御袖に縋るばかりだ。御慈悲に御布施をまけていたゞけ。
和尚　はは、一國の御家老だけあつて、かういふ場合でも餘裕綽々と冗談を云はれる。敬服の至りです。
用人　もう滅茶苦茶だ、燒け糞だ。（算盤を矢鱈に彈く）（しばらく。）
（石川主水と家老の息子がはひつて來る。）
（石川は囚人姿。魁偉な體軀。）
（父親の指圖で、家老の息子は石川の繩を解く。また父親の出した大小を石川に渡して差させる。みな默然として對座する。）
家老　（息子に）これ、茶を持て。さて石川氏――（石川の一睨みにひるんだ形）こゝは裁判の場所ではない。同藩の侍同志としてとくと懇談したいために御足勞を願つたのだ。そのつもりでゆつくり寬いで貰ひたい。
（家老の息子茶を運ぶ。）
主水　（顏を睨みつけながら飲み干す）毒がはひつてるのぢやあるまいな。
家老　怪我にもそんな厭味をいふものぢやない。お互武士だ、虚心坦懷に事を運ばう。そこで用件だが、貴公こゝで切腹してくれ。

主水　なんだと。
家老　この間中の貴公の行動は、國事犯でもあり謀反罪でもある。あんな事をやるからは死は初めから覺悟してゐる筈だ。もう裁判も確定して磔に處することになつてゐる。――しかし、貴公程の侍を三尺高い木の空で泥棒や火つけ間男などと同じ死態はさせたくない。政道の改革を企てたのだから、立派な愛國者ではないか。考へるといかにも殘念だ。ひと事とは思へない。――武士は相見互といふ事がある。そこで殿樣に特別の御慈悲を願つて、切腹の御沙汰を賜はるやうに取り計つたのだ。
主水　大きに御世話だ。
家老　え。それでは貴公、いやだとでも云ふのか。武士らしい立派な死に方はしたくないのか。瘠馬で引きまはされて、田樂ざしの槍料理を食ふのがそれ程望みか。あまり物好きが過ぎるぢやないか。
主水　うん。その上野天の曝し物にされたいのだ。
和尚　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。
主水　あわて者。まだ早い。――お先走りに、棺桶までこしらへたな。
家老　拗ねるのも大抵にしたらどうだ。ひとの情はすなほに受けるものだ。――第一切腹と磔では、痛さから云つてもお話にならない違ひだ。そこを考へただけでも、有

り難くお受けしてよからう。折角の好意ぢやないか。

主水　いやだ。苦しければ苦しい程、馬鹿殿を憎んでやる。俺は精一杯苦しんで死んで見せる。あいつの悪逆非道がいやでも應でも天下に知れ渡るやうに、大騒ぎをして死ぬんだ。こんな風に、血だらけの目をむいて見せる。それから牛のやうに唸つてやる。ううん。ううんと。

家老　もうわかつたわかつた。厭ならそれでいゝ。別段無理強ひするのではない。たゞ武士たる貴公の面目を思ひ名譽を重んじて、潔い死に方をすゝめたのだ。磔はあまり恰好のいゝものぢやないからな。

主水　名譽も糞もあるものか。俺の死態を見たら第二の俺第三の俺が續々と飛び出して來て、誰かゞ馬鹿殿を殺して呉れよう。それで俺の怨も俺の目的もはじめて果されるんだ。痛い思ひをするのもあいつをいつか痛い目に遭はせたいからだ。おとなしく死んだ日には俺の命が無駄になる。

家老　どうしても切腹はいやだと云ふのだな。

主水　いやだとも。あいつを殺すのに利目がないからいやだ。さあ早く殺せ。さつさと磔にしないか。（怒鳴る）

（和尚と家老と顔を見合す。）

家老　（頷く）恐れ多い事だが、貴公それ程までに殿樣をお怨み申上げてゐるのか。

主水　當り前だ。野郎一人が目の敵だ。畜生、今に見ろ、俺に劣らないひどい死態をさせてやるから。

家老　ところがその殿樣が實はもうおかくれになつたのだ。

主水　なに。嘘をつけ。あの業突張りがそんなに易々死ぬるものか。

和尚　いや全くのことだ。本月五日の夕方、おいたましくも御逝去になつて、明日がもう御葬儀だ。南無阿彌陀佛。

主水　（睨んで一人一人の顔を讀み終りやがて用人を見て）うん、貴樣は正直さうな面をしてゐる。おやぢ、くたばつたと云ふのは本當か。（睨む）隱さず云へ。

用人　（おびえる）本當で、困るのです。（帳簿を展く）何から何まで、この通りの物入です。本當なので實に困るのです。

主水　さうか。畜生、先を越して冥土へ逃げあがつたな。どこまでも癪に障る野郎だ。――ふん、それならそれでいゝ。

家老　聞かれる通りだ。當の殿樣なき上は、貴公ももう意地を張る必要がない。思ひ殘すことなく見事に切腹が出來よう。貴公が國家を思ふ一念から事を起したのは、われわれがよく承知してゐるから、そこは武士の情だ、遺族に對する處置も決して掛念には及ばない。

和尙　この際この場合、愚老とてもそなたの切腹は殿樣への殉死とも見做して、葬禮供養を懇にして上げよう、磔などゝちがつて速に佛果が得られますぞ。

主水　殉死とは追ひ腹を切ることか。これあ大笑ひだ。殺さうとつけ狙つた俺が死んでも、殉死になるといふのか。

和尙　人間死にさへすれば仇も敵も一切平等、みな御佛の弟子になるのだ。あの世では恩も怨も消えて、法の友達となる。有り難い。南無阿彌陀佛。

主水　調法なものだ。だが、あの憎い馬鹿野郎と道づれになるのはお斷りだ。（うそぶく）

（和尙と家老また顏を見合す。）

家老（形を改めて）さて石川氏、仕方がない、もうぶちまけた話をするが、國家のために何にも云はずに切腹してくれまいか。家老の職にゐるわしから、貴公を見かけての賴みだが——

主水　馬鹿におだて上げるぢやないか。

家老　いや全く心からの御願ひだ。——かねて承知の通り殿樣は御本家の出なので、今度の御死去に就いてはぎりぎりのところ三人殉死を出さなければ、當家として義理が立たない。さもないと御本家が家中一統を不忠不信と見て所領沒收と來るのが明かだ。——ところがこの棺にはひる者が居ないのだ。お家の存亡がこの一人できまる場合になつた。

主水　はゝあわかつた。それでさつきから無闇に腹を切らせたがるのだな。

家老　貴公が國家の事を思ふなら、どうかこの際有效に命を捨てゝ貰ひたい。戰場で功名手柄を立てるよりも切腹してくれる方が何倍も有難いのだ。——遺族緣類には十分の手當を出すから、どうか切腹を承知して貰ひたい。

主水　親もなければ子もないから、その心配は無用だが——とにかくこの棺をふさぐ役をすればいゝんだな

家老　きいて吳れるか。それでこそ貴公は本當の愛國者だ。

主水　うん、いかにもこの棺をふさいでやらう。

和尙　あゝ天晴な心掛けだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（主水立つて刀を拔き、和尙に向ふ。）

主水　やい坊主、貴樣死ね。

（和尙は驚愕と恐怖とで口がきけず、たゞもがくだけである。）

主水　たゞの人間なら俺が追腹切つてやつてもいゝが、死人は名代の馬鹿野郎だ、地獄へ行つても惡い事をしさうな奴だ。貴樣一緒に行つてよく敎へてやるがいゝ。それにさつき默つて聞いてゐれば、貴樣大層冥土の事が詳しいな。道案内にはもつて來いだ。——口癖に念佛を唱へてゐたが、その功德がいま來たんだ。ざまあ見ろ。

（一太刀で切り殺す。）

主水（家老に）こいつで間に合ふだらう。（棺に腰をかける）

家老（もう青くなつてゐる）だ、誰でもよいのだ。（息子を顧みて）あゝこれでお家も大磐石だ。みんな石川氏のお蔭だぞ。

用人　あゝこれで棺が生きる。

家老（懐紙を出し、息子に）これ刀のけがれを清めて來い。これどうした。

（家老の息子ははじめから主水の面前で畏縮してゐたが、今の一太刀で震へ上つて動けない。）

家老（虚勢で）意氣地なし、それでも武士か。しつかりしろ。

（膝で歩いて行つて太刀を拭はうとする。）

主水　序に貴樣も死ね。

家老　な、な、なにを云ふ……

主水　馬鹿殿のお供だ。貴樣こそ地獄行きの相棒になる筈だ。切腹でもして見ろ。それとも一人ぢや死ねないか。ぢやあ俺が殺してやる。（立上る）

用人　もう棺がない

主水（家老に）貴樣のお蔭で俺も愛國者になれたが、政道なんかどうでもよかつたんだぞ。馬鹿殿の奴俺の好きな女を横取りしたから、憎くて殺したくなつたんだ。しかし折角愛國者にして貰つたところだ。貴樣を殺してお家をもつと大磐石にしてやる。

（切り下げる。もう正氣を失つてゐる家老の息子を切先でつゝき、之をも切り下げる。）

用人　あつ二つだ。

（主水振りむいて用人へ行く。）

主水　おやぢ、今度は貴樣の番だ。――はゝ腰を抜かしたのか。――いや、命を取るんぢやない、金を出せ。路用にするんだ、有金全部こゝへ出せ。

（用人箱を差出す。主水開けて見て下へ投げる。）

主水　馬鹿にするな。これだぞ。（刀を振り上げる）

用人　それでみんなです。本當です。だから困るのです。さつきまで百兩包み一つだけありましたが――

主水　百兩だと。それをどうした。

用人　ひどい奴で――女がふんだくつて行きました。

主水　出鱈目を云ふと、許さんぞ。

用人　いや全く、本當のことです。これまで奥にゐた女です。この通り、ちやんと帳面に書きこんである。（帳簿を見せる）大きく、一金百兩――

主水（突然叫ぶ、帳簿を叩いて）おい、この女はどうした、どこに居る。

用人　（びつくりして）え、その――ひどいあまです。金を摑むと色男のところへつて走りました。
主水　なに、色男。（間）お浪のやつ、たうとうあの町人の手へ戻りあがつたな。うむ。
用人　すると、あの浪路といふ女をあなた御存知で――
主水　（間）金が出來ては、いくら口說いたつてとても駄目だ。畜生、――口惜しいな。（刀をおとす。ぢつと三人の死骸を見る。刀を拾ひ上げる）ちえつ、面倒臭い。
（突然切腹する。）
（用人は驚いてぢたばたするが腰が立たない。やがて惘然と目前の樣を見てゐる。）
（震へ勝ちに手を叩く　三四度。）
（侍出る。はつと立すくむ。）
用人　大變だ。（三本指を立てゝ）もう三つ……（死骸の方を指して）追加を三つ……
（侍、へた〳〵と坐る。）

――幕――

仲秋明月

人

柴野栗山　（六十五位）
古賀精里　（五十位）
尾藤二州　（五十五位）
小間使　（十八九）

時

寛政の末、ある年の八月十五夜。雨後

處

江戸駿河臺、栗山の邸

舞臺

――庭に面した客間。廻り緣が右に主人の書齋左に勝手の方へと通じてゐる。庭には竹の粗林があり、芭蕉二三株。池の一部が前に見える。

部屋は中央に釣られた一つの蘭燈に依つて照らされる。その眞下に酒饌を盛つた支那風の卓、まはりに椅子三つ。正面が栗山の左右が二州精里の席になつてゐる。外に壁際に二三の椅子が片寄せてある。

精里は椅子に掛けてゐる。二州は疊に片足投げ出し、柱に凭れて安座してゐる。――二人とも少し酒がまはつてゐる。

二州　（議論をつゞけて）あの岡田與四郎の一件などは、最も著しい例だからな。

精里　なんだ、與四郎といふのは。

二州　さうだ、君の知らない事だつたね。――そいつは岡田寒泉の甥で御書院番まで勤めてゐたが、誰知らぬ者のない放蕩無賴の徒だ。それが學問吟味の試驗に應じると見事上成績で及第したぢやないか。

精里　ふむ。

二州　試學の席には林祭酒はじめ叔父の寒泉まで立會つたのだから、學問の出來映えは確にちがひない。だから上科に當てるのも無理はない。しかしだ。

精里　しかし――

二州　そこまではいゝ。ところが、規定通り上司から御褒の詞があつて僅か二三日立つと、どうだらう、何か不都合を仕出來したことがばれて、早速の小普請入りぢやないか。――聖堂の儒官が秀才の折紙をつけた者がこんな有樣では、學問吟味も徒に世上の物笑ひになるばかりだ。

精里　でも止むを得まい。學問藝術がすぐれてゐたら上科に選んだつて。

二州　いや、止むを得ないでは濟まされない。平日の行ひが宜しからず、人の指彈をうけるやうな人物が、儒官の推擧によつて御賞賜にあづかるといふのでは、明德を明(あきらか)にすべき學問の權威が疑はれることになるんだ。

精里　しかし試驗の答案を吟味する儒官は、たゞその出來映えを評定するより外仕方がないぢやないか。その上に素行の詮索までするのは、もう學問の範圍外に屬する事だ。

二州　その通りだ。だから、さつきからこの制度が惡いと云つてゐるのだ。

精里　それとても、勸學の趣旨からすれば、一の良法たるを失はないさ。すでにこの春には二百四十九人ほどの應試者を得たといふだらう。――昨日まで淨瑠璃三味線の鄭聲に心耳を濁ごした輩までが、聖賢の敎に志して講釋辨書を事とするのも偏にこの制度のお蔭だらう。

二州　それが第一面白くないんだ。君だつて、その二百四十九人を本當に賴母しい好學の士とは思ふまい。彼等は單に嚴命に依つて心ならずも經書を繙くに過ぎないのだ。學問をかろしめ、たゞ立身出世の踏臺だと考へる輩なんだ。（睨む）

精里　そんなに憤慨しなくてもいゝぢやないか。勿論彼等は、皆が皆學問執心の者とは云へない。しかし嘘にも聖賢の敎へに親しむのは褒むべきぢやないか。敢て悅んでいゝ筈ぢやないか。

二州　いや違ふ。勸學院の雀は蒙求を囀ると云ふ。君はその喧しい囀りを聞いて、學徒が殖えた學問が盛大になつたとよろこぶことが出來るか。――雀は畢竟雀だ。あまり騷ぐと反つて眞の學徒の妨げになるばかりだ。

精里　それはあまり極端な議論だ。勸學の主意は何も儒者を作るだけの事でもあるまい。萬人を聖敎に薰染せしめて、修身整家の實を擧げさせるためだらう。經書に親しんでその感化がないといふ法はないから、應試のための勉學だつて決して無益ぢやない。

二州　手段のために書冊を手にしたところで、なんで身につくものか。しんから求める者でなければ、いくら講師の口眞似をしてもそれは雀の空囀り(からさへづり)同然だ。ことに岡田與四郎のやうな不埒者が上科に當てられるやうな制度は、むしろ學問振興に害がある。

精里　ではどうすればいゝと云ふのだ

二州　試學の掟を嚴重にせずに、普段の修養を基にして、一體の風姿篤行嗜學の程を檢定して賞賜を行ふことにするのだ。さもなくて鸚鵡のやうな口先の才子が御褒詞に

あづかるのでは、衆人一般が上を謾り學問を輕んずるやうになるにきまつてゐる。

精里　それは道理にちがひないが、さて多人數に之を施すことは、云ふべくして至難な事だらうな。

二州　それを押して實行しなければ斷じて眞の學問振興は來されない。學問と人間を別物と考へることからすべての間違ひが起るんだ。學問は身を修飾する衣冠束帶ではない。血だ、肉だ、人間そのものだ。（胸を叩く）――それが道具と視られ手段として玩ばれるのは許すべからざることではないか。今日の制度を改めざる限り遂に其弊が救はれない――

（跫音を聞きつけ、あわてゝ立つて席に戻る――ひどい跛である。）

（栗山がはひつて來る。）

栗山　どうも失禮。（席に就く）何か激越の口調で鬪論の模樣だつたが、論は論、酒は酒、杯を怠られては困る。どうです中華の銘酒は。

精里　全く陶然といゝ氣持になつてゐます。李白一斗詩百篇――詩宗の嗜んだと同じ芳醇を口にしてゐると、自ら詩興の湧き出づるのを覺えます。

二州　これで月さへ出て來れゝば、素晴らしい絶唱が出來上りさうだが……。とにかく酒の點だけでは詩仙に負けないつもりで、さつきから大いにつとめてゐるところですよ。はは。

栗山　――山城の薄酒飲むに堪へず。君に勸む且吸へ杯中の月。洞簫聲は斷ゆ月明の中。唯恐る月落ち酒杯の空しきを……。同じく杯を擧げるにも、月と共にしないとどうも快くない。――しかしこれも是非のない事だ、我慢して酒だけは十分やつてくれ給へ。

精里　中秋萬里晴陰を同じうす――今夜の雨は天下幾萬の詩客を歎かしめるかも知れませんね。たゞ僕等は、特別の御趣向に依つて、中華の酒に醉ひ中華に遊ぶ思ひの出來るのを至福とします。

二州　全くだ。僕はさつきからこの蘭燈を仰ぎ椅子に倚つてゐると、いくらでもいゝ詩が書けるやうな氣がしてならない。かういふ生活氣分がないから、本朝の詩文は所詮彼土に劣るんだね。――悠然と卓に對して杯を銜んでゐると、李杜蘇白の心境をわが物として感じ得ますね。

栗山　もつとものことだ。かうなるとかつて僧圓月の說いた、吳の泰伯を皇祖とする史論に心から共鳴せざるを得なくなる。われ〳〵が中華の書を讀み中華の思想に接してゐると、どうしても同じ種同じ裔の人間だと斷定したくなる。

二州　さうですとも、それでなかつたら、萬里を隔る彼土

の文字が、かほどまで僕等の胸を打つ筈がない。どうだ、古賀君。

精里　僕もさう思ふ。本朝開闢以來東方の君子國として淳風良俗を保ち得たのは、單に天佑だなど丶片づけられまい。古來有道の國たる中華の裔が渡來した爲と見て、はじめて源因がわかるといふものだ。僕はこの椅子に倚つて瞑目すれば、遠い遠い祖先の姿が、髣髴として幻に描き出される……。

栗山　(頷く)　それにつけても、われ／＼は一日も早く學問を擴め文化を進めて、不肖の兒孫たらぬやうにしなければならない。——その根據は昌平坂學問所だ。兩君とも述齋祭酒と協力して、この覺悟の下に學政を處理されん事を希望しますよ。

精里　それはもう、あなたが侍講に進まれてからは、僕等も寢食を忘れて微力の程を盡してゐます。實は今も今とて、尾藤君と學問吟味のことで爭論をしてゐたところで——。

栗山　ほほう。

精里　尾藤君は現在の試學制度は反つて學問振興を毒するものだといふのです。學問を手段として玩び效利的に之に對する弊が生ずる。應試の者の勉學などは、蒙求を囀る勸學院の雀に過ぎないので、眞の學徒の類ひをなすものだと——

栗山　うん、大分徹底的な意見で——理想家たる君に適しい意見だね。

二州　僕は理想家かも知れません。しかし今のやうな考試に依つて褒貶を附する時は、徒に片々たる小才子を幸するに終ります。年來書籍も手馴れ心ざまも廉直で、常に文武の道にいそしみ勤仕に値するやうなものは、自ら一家の見を具へ怠間に迷ふ所あつて、必ずしも講師の評に當るとは云へません。さういふ篤行の士が下等になつて、下らない人間が上科に選ばれたら、それらの日常を知つてゐる者はどう思ひませう。學問を投機のやうなものと賤しみます。

栗山　成程、一理ある言だ。ふむ。

二州　今の制度では、どうしたつて學問が體と離れたものに扱はれてゐます。しかしこれは間違ひだ。身にならないものは眞の學問ぢやない。考試吟味は須く人間全體を見なければならない。

精里　その主意に異存はない。しかし學問吟味がよし半面の眞だけを闡明しても、之を無用の業とは云へまいぢやないか。

二州　(きつとなつて)　君にも似合はない說を吐く。君は僕のやうな船夫の子とちがつて、幼にして武藝も習ひ射

御槍術にも長じた身だ。その武藝の免許はどういふ人間に與へられる。
精里　………。
二州　師たる者はよく〳〵弟子の性行を見きはめ、たとひ業だけは名人上手の域に達しても心だて人柄のよからぬ者には免許は許すまい。どうだ、さうだらう。徒に膂力を恃むやうな暴漢に一流の免許をゆるしたら、どんなに世上を毒するかわからないからだ。志ある輩もそんな奴と同じ門に學ぶことを潔しとしないだらう。――學問吟味もこれと同じぢやないか。
栗山　（間）尾藤君、君の言葉を聞いてわしは感慨に堪へないものがある。――學問吟味も、すでに弊害を云々せらるゝまでに盛大になつたかと思ふと、わしは全くうれし涙がこぼれる位だ。――しかしいかにも餘弊もあちうな、ことに君の如き學者肌の人から見ると。
二州　趣意を惡いといふのぢやありません。考試を筆紙の上だけに止めない、もつと寛大で變通自在な規約が必要だといふのです。學黌が求學の士を集めずに、官吏登用の機關になるやうな風潮を來すのを遺憾とするのです。
栗山　それもな、さうするまでは中々大變だつたよ。學問研究はどこまでも大切だが、その研究を盛大ならしめる便宜を作ることもまた大切にちがひないからな。
精里　それを思つて、今日昌平黌の大を致したあなたの功績と苦心とには、心からの感謝を捧げずにはゐられません。
栗山　いや、すべては學問藝術に傾投せられた定信公のお蔭だ。昌平黌も年々規模を增し、典籍備はり兩君はじめ世の碩學を儒官に迎へて、學問研究の根元たらしめるためには、わしとても一通りでない苦勞もして來たつもりだ。これは學問研究によき便宜を作りたいといふ微衷からだ。
精里　程朱の學を正學と立て、自餘の異端邪道の學派に一大痛棒を下した官の英斷も、みなあなたの方寸から出たことでせう。正學攻究のために、荊棘を拓いて坦々たる大道を開かれたことは、後世に殘る大恩澤と思ひます。
栗山　過褒敢て當らないが、菲才も顧みず正學の源泉たる昌平黌の隆盛の事には出來る丈の力を盡した。學問吟味もおよその一法として役立つてゐると思はれるが――
精里　さうですとも、これあるが爲に學問所は九鼎大呂よりも重く世に見られてゐます。
二州　僕は、皮相な學徒が雲集するよりも、一人の誠の好學の士を求めたいのです。
栗山　ははは。君らしい正直な潔癖だ。しかし何も俄勉強の輩を毛嫌ひしなくてもいゝ。だまつてゐたら放蕩に身

を持崩しさうな者共も、殊勝に經書を講讀してゐる。其樣はむしろ可憐ぢやないか。

二州　僕は、その浮薄な氣風が眞摯な學徒を毒するのを惧れるのです。

栗山　いや大丈夫だよ君。中華に科擧の制が布かれて幾百年になる。學問吟味と同じ餘弊が生れてゐるにちがひない。――ところが鴻儒碩學踵を推して續々輩出してゐるではないか。

精里　ふむ。あなたの云ふ通り、中華の例が一番確だ。科擧の制あるがためにいよ／＼國民が聖教を學ぶから、學問藝術が日進月歩して極まる所を知らないのだ。

栗山　尾藤君、玉石同架、なんでも學問させるに限る。玉は自ら磨いて後日燦然たる光を放つにちがひない。――要はたゞ彼等に道を開いてやることだ。來る者は拒まないどころか、ひろく衆人を迎へて講筵を聞かせる必要がある。さもないと、玉を逸してとんでもない異學の磨きをかけられるからな。はは。

精里　江戸でも下町派の五鬼が、爪をといで控へてゐるからな。はは。

栗山　わしは考へる。官の力を借りてゞもいゝから、門扉は出來るだけぐつと廣く開く。文字を讀むほどのものはすべてこゝに包容して了ふのだ。學問所の門をくゞる者は、誰でも彼でも程朱の學を學んで歸るのだから、それだけでも正學の勝利だ。そして中には瓦と共に玉も潜んで、必ずわが學派の名を擧ぐる者も出て來るのだ。

精里　もうそれが、着々として行はれてゐるから愉快だ。

栗山　上には名君あつて學問藝術に深い理解を持たれ、廳に上るはすべて昌平黌で性理の學を學んだ者となれば、十年百年の後異學を一掃することも難くはないだらう。諸藩相次いで宋學に參ずるを聞くのは實に本懷の至りだ。（間）はじめて學問吟味を行つた時、考試に應じた者が僅か十四人だつたことを思ふと、わしは今昔の感に堪へない。今日黌の盛んなことはどうだ――

二州　（顔を上げて）僕が褊狹を固執したのは至らなかつた。深く自分で恥ぢます。正學振興の大義のためには、いかにも清濁併せ呑む底の覺悟が必要だつた。片輪者の一徹をこゝで押し通す場合ではなかつた……。

精里　なんだ尾藤君、改まつて。

栗山　いや、年寄りの愚痴が出てつい固苦しい話になつた。――今夜は詩酒を戰はす會合だつた。さ、改めて杯を擧げ給へ。

二州　いや僕こそ小理窟を云ひ出して折角の清興を妨げて濟まなかつた。――さき程の惡詩二三、みんな物にならん。これでは酒でお相手するより外はない。

精里　中秋無月でやつぱり詩興が湧き惡い。どうしてもあるべき所に物がないと寂莫たる感じだね。
栗山　詩人は想像の馬を十里の先に驅ればいゝ。
二州　それでは、僕のやうな凡才は實感が出せないから駄目ですよ。今夜は月を失ふと共に詩を失つたといふわけです。
精里　しかしこの銘釀に醉ひ、蘭燈の下宛ら中華にあるの思ひを得て欣快この上ない。おもてなし忝く御禮を申します。
栗山　ははは。長崎の知り人からこれらの道具を贈られたので、兒戯に等しい趣向をして諸兄をお招きしたが、生憎の雨で……。幸ひ聖堂内の聖者と雉橋畔の賢哲の參會を得て滿足至極だが、この上はどうか老酒の壺を傾けてくれ給へ。
二州　その老酒と聞いて、實は跛を引いて馳せつけましたよ。勿論十分頂戴します。
精里　ははは。官舍で塾生に圍まれてゐてはさぞ肩がこることだらう。――流石に中華の詩仙の飮む酒だ。一杯ごとに一詩を誦吟するやうに佳味を新たにする。
栗山　中華の風に倣ふと云つても、何の珍羞もない。たゞ酒だけだ。ゆつくり杯を重ね給へ。――老酒の壺は中々大きいから、まだ容易に盡きるやうな事があるまい。
二州　（間）なあ古賀君。大阪では春水と三人でよく飮みよく談じたな。いまこの席に四人でこの卓を圍んだらさぞ愉快だらうな。
栗山　それあわしも同感だ。――ところで尾藤君、彼の息子の襄はどうしてゐるな。なか／＼の寧馨兒で、賴家後ありと云ふべしだな。
二州　困つたことには何分病弱で、今歸國して靜養中ですが、これには春水も胸を痛めて居ります。
栗山　才子多病の譬に洩れないのかな、氣の毒な。（突然立ち上つて）度々中座して濟まないが、一寸失禮。
精里　御多用のところ、どうか御隨意に。
（栗山の去るのを待ちかねて、精里も立つてよろめき乍ら緣側の方へ來て坐る。二州は椅子から辷り降りてゐざり寄る。）
二州　どうした。
精里　いやどうにも溜らん。ひとの足だか自分の足だかわからなくなつた。
二州　痛いのか。しびれが切れたのか。
精里　さあ何と云つていゝか。――とにかく血が下つて重苦しくて溜らない。君はどうだ。
二州　僕か、僕は椅子へ掛けるとからいけないんだ。ことに惡い方の脚と來たら、づきんづきん痛み出すといふ始

末だ。
精里　どうもこの椅子といふものは難物だ。聖賢の像を見ると、みな泰然と腰かけてゐるが——僕は閉口だ。とにかく主人のゐない間だけでも一休みしよう。
二州　僕はさつきから二度程休みに降りた。自分には足疾があるせゐかと思つたら……君もやつぱりさうか。
精里　脚から股、腰のあたりまですつかり感覺がなくなつた。酒を飲んでも十分醉がまはらない。
二州　僕等はいかに中華を慕つても、うかつに彼土に行けないね。
精里　全くだ。これでは命がけだ。
（眞顔で兩脚を延ばし、せつせと揉んでゐる。人の氣配であわてゝ席へ戻らうと立ちかけるところへ、美しい小間使が酒瓶を捧げてはひつて來る。）
（意外の有樣に立ち竦むのを見て、二州も精里も思はず顧みて大聲に笑ひ出す。）
二州　はははは。——おい古賀君、不取敢このまゝで一杯やらうぢやないか。
精里　さうだ。樂々ぐつとやらう。（小間使に）甚だ勝手だが、こゝで一杯ついでくれ給へ。
二州　も少し飲んで、足を醉はして了はないと苦しくてたまらない。

（小間使は酌をする。二人は數次杯を重ねる。）
精里　あゝうまい。はじめて酒の味がわかつた。（小間使に）や、もう有り難う。
二州　有り難う。酒はこゝへ置いて貰はう。
（小間使去る。二州はぢつと小間使の姿を見送る。）
精里　さつきから僕もさう思つたが、なか〳〵いゝ娘ぢやないか。
二州　うん。
精里　古愚軒に斯の美色を藏す、大に珍重すべきだね。
二州　うん。
精里　どうしたんだ。妙にぼんやりして——
二州　うん。（間）實は久太郎のことを思ひ出したのでな。——春水の子の襄だ。
精里　病氣でも惡いのか。
二州　さうぢやないが——たゞの病氣ではないのだ。
精里　たゞの病氣でないとは。
二州　素行の修まらない——いはゞ遊蕩病だ。
精里　あの謹嚴無比な春水の子が、さうかねえ。
二州　江戸を去るやうになつたのも、その方の間違ひがあつたからだ。
精里　ふむ。
二州　現在の叔父たる僕の邸にゐる間に、小間使として働

いてゐる預り娘と通じたのだ。僕が譴責すると恥ぢて邸を出奔したが、それから學業も成就せずに歸國して了つた。――その娘といふのが、今の小間使に面立がよく似てゐる。――ついぼんやり久太郎のことを考へてゐたんだ。

精里　さうか。

二州　春水からの消息に依れば、歸郷してもその病癖が癒らず一家心痛の種となつてゐる樣子だ。青春客氣の一時の病ならいゝが、それが痼疾で一生女色に溺れるやうでは、あれ程の才を抱いても遂に世に立つことが出來まいと思つて……。

精里　先哲の言がある。――皓齒蛾眉、命じて伐性之斧と曰ふ。

二州　それだ。

（しきりに杯を重ねる。）

二州　――久太郎も、回想して美しいと思ふやうな戀愛をするなら幸福だが……徒に慾情に墮してゐるのだから末が案じられる。

精里　いや、いづれにしても色情は君子の愼むべきものだ。

二州　色情――それはさうだ。が僕は男女相思の至情はかなり尊いものだと思ふよ。純潔な戀愛は決して心を害ふものぢやない。反つて惰弱から、卑屈から、自棄から、放肆から人を救ふものだと思ふよ。

精里　これは意外だ。流水子から戀愛讃美の説を聞かうとは思はなかつた。

二州　しかしこれは机上の空論ぢやない。僕の體驗がさう敎へるのだ。

精里　怪しからん、君は身に覺えがあると云ふのか。

二州　ある。

精里　これや聞捨てにならん。相手は誰だ、云ひ給へ。

二州　はは、今の事ぢやない。さういきむな。

精里　昔でも構はない。どこの誰だ。

二州　……久太郎のことで思ひ出すが……僕の戀人は――戀人であると共に恩人だな。

精里　何でもいゝ、早く話してくれ。

二州　……しかしもう此世にゐないかも知れないな――僕より三つ年上だから。

精里　ぢやあそろ／＼還暦だ。ふむ、面白い。

二州　何をいふ。その頃は娘だ、やさしい娘だ。情の深い瞳の表情、うるんだやうななつかしい聲音――僕はいつまでも覺えてゐる。

精里　どこの者だ――大阪か。

二州　いや郷里だ。伊豫の漁村の娘だ。――僕がどうして生れもつかぬ片輪になつたか、それは話したね。跛にな

つたことが進學の動機になつたことも話したね。――僕の戀人といふのは、五つの僕をおんぶしたまゝ崖から落ちた、隣りの娘だ。おしづだ。

精里　鄕里にゐた時の事か――大分古い話だな。

二州　うん、だが僕は生涯あの當時の事を忘れまい。やがてお既島の儒者捨場に骨を埋める日が來るまで、美しいおしづの面影が僕の心に樂しい思ひ出となつて殘るだらう。――おしづは片輪になつた僕を身を捧げて慰めてくれた。はじめはあやまちの償ひをするつもりだつたらうが、それが後で戀に變つた……。二人とも年頃になつてゐたからな。

精里　うむ。

二州　僕は、自分がいつまでも不幸でゐてやさしい戀人の心を傷ましめたくなかつた。おしづの顏に明るいよろこびを送るために、どうにかして一人前の人間にならうと考へた。その一念で勉强に精出したので、大阪へ出られるまでになつた。學問で身を立てる道がひらけたのだ。

精里　大阪での勉强ぶりだつて、儕輩がみな驚くほどだつたぢやないか。

二州　……それからは諸兄の鞭撻を得て今日に及んだが、古賀君、四國の舟乘りの息子が學問所の儒官になれようとは思はなかつた。まるで夢のやうだ。――僕は一つの業績を成就する每に、昔の戀人に對して感謝の念を新にした。――もしおしづが跛にしてくれなかつたら、僕は父業を嗣いで艣楫を手にしてゐたらう。更におしづとの戀愛がなかつたら海濱の一村醫で終つたにちがひない――

精里　なる程な。戀愛もなか〳〵馬鹿にならない。

二州　馬鹿にならないどころか、有り難い。

精里　なる程、さう聞けば有り難い。

二州　有り難いとも。おしづは戀人でもあり恩人でもある。僕の學問の守護神だ。

精里　僕等友人にとつても同時に恩人だ。――さあ、おしづのために杯を擧げよう。

二州　……なみの體ぢやないぢやけに、よう氣をつけてな。――大阪へ立つ時のわかれの言葉が、いつまでも耳朶に殘つてゐる。それぎりで逢はないが……。なみの體ぢやないぢやけに……

精里　それから一度も逢はないのか。うむ。さうか。

（栗山がはひつて來る。）

栗山　はは。兩君ともどうした。さあ席に直り給へ。――度々中座してどうも相濟まん。

（二州と精里は顏を見合せる。）

精里　いや、誠に勝手ですが、こちらで結構ですが……

栗山　いや、兩君のために設けた席だ。遠慮なく掛け給へ。

わしもゆつくりお相手する。

二州　實は、ははは。

栗山　どうした。

二州　ははは、實は、二人とも、椅子に腰かけてしびれを切らしたので――

栗山　さうか、君達もさうか。

精里　實はさつきから――

栗山　(哄笑)　はははは、君達もさうか。はははは。わしは苦しくなると中座して、度々奥で休んで來たのだ。ははは、みんなさうか。

二州　正直、椅子はもう眞平です。跋はこれに限る。

精里　下半身がづき／＼痛み出して、どうにも我慢が出來なくなつたのです。

栗山　そんならさうと云つてくれゝばいゝのに、わしもとんだおつき合ひをした。

精里　でも折角の御趣向だからと思つて。

栗山　いや、わしはまた兩君がひどくこれが氣に入つた樣子だから……。はは。では疊の上で樂々と飲まう。(鈴を鳴らす)　おゝ、月が出て來た。

二州　愉快だ愉快だ。

精里　愉快愉快。

(三人は緣側に出て、雨後の月を見る。)

(小間使が出て來る。)

栗山　酒をこゝへ持つて來い。さあ兩君、飲み直しだ。ここではいゝ氣持に飲める。

精里　酒あり月あり而して美女あり、豈一詩なかるべけんやだ。

二州　とにかく無禮講が酒が一番うまい。どうもあれには閉口だつた。椅子を見ただけでも足が重苦しくなる。

栗山　君達もよつぽど懲りたと見えるな。この良夜に燈は反つて目ざはりだ。(小間使に)　蘭燈を消せ。

(燈火が消えて、三人のすがたが月光にあらひ出される。)

精里　さつき座敷の椅子に嚴しく掛けてゐた三人は、栗山、二州、精里だが、かうしてあぐらで飲んでゐるのを見ると、彥輔、良佐、彌助ですな。

栗山　はは、面白い。(月を指す)　その三助にいまこの主賓を得た。これで今夜の燕飲は誠に畫龍點睛と云ふべきだ。

精里　――寬政の三助といはれる者が偶々三人會して杯を擧ぐる、また一奇とすべしです。

栗山　われ／＼も同志彌助を江戸に迎へてはじめて三助揃つたが、この三助が手を携へて正學のために氣を吐くのだから、本懷この上なしだ。殊更に酒がうまい。

精里　異學邪説は、月に追はれる闇のごとく藪陰に潛むより外なくなりませう。僕達は官のため世のために、正學の光で日本の隅まで照す責任がありますな。

栗山　この三助が揃つてゐればきつと出來る。良佐、彌助、彥輔――よくも名が揃つたものだ。三助中秋に會し、月に對して異學滅盡を誓ふか。ははは。

精里　その意味で今夜の會飲は、本邦儒學の歷史に特筆大書されるかも知れませんな。ははは。

栗山　時に尾藤君、どうした。ひどく池の方ばかり眺めてゐるな。

二州　いや……。

栗山　水に浮ぶ月影で故鄕の海でも憶つてゐるか。

精里　おい。（二州の肩を叩く）また思ひ出したのか。はは。

二州　馬鹿な。――酒だ、酒だ。

精里　さうだらう。――なみの體ぢやないぢやけに……。ははは。

栗山　なんだ、なんだ。

二州　いやその――ははは。

精里　やつぱり有り難いか。ははは。

（二州と精里は額を見合せて笑ひつゞける。それを見て、意味はわからぬ乍らに栗山も豪傑笑ひをはじめる。中秋明月が三人の寛いだ姿を照らしてゐる。）

――幕――

嫉妬

人

松井　三十二三の會社員
三島　同じ年頃の同僚
伊勢子　松井の義妹、二十位
ばあや　四十五六

時

梅雨晴れの日曜、正午頃

場所

郊外

松井の家。階下の茶の間と奥の間。玄關と臺所は蔭になつてゐる。——二階へ上る階子段の裾が見える。茶の間の前は緣側。一寸した庭。

伊勢子、松井の脫ぎ捨てた洋服を始末してゐる。ばあやがお盆を持つて二階から降りて來る。

伊勢子　（待ち構へて）どう云つて、御飯のこと。

ばあや　あの、お濟みださうです。

伊勢子　さう。さうだらうと思つた。——ねえ、ばあや。兄さんも隨分な汗つかきね。（下着類をまるめて出す）ほら、みんなぐしよぐしよ。

ばあや　（受取つて）——急にまたお暑くなつたんですもの。

伊勢子　（子供らしく袖で額際を拭く）あたしなんかもこんなよ。もつとも、今日あたりネルを着てゐては當り前だらうけど。——今夜こそ縫ひ上げるわ。これぢや溜らない。

ばあや　なんでしたら奧さまの單衣をお出ししませうか。

伊勢子　いゝわ、今日一日の辛抱だもの。それにあたしみたいな太つてうぢや、てんで合ひはしない。借りられるのは寢卷位のものだから情ないわ。（ポケットから手巾を取り出して）これも序にね。

ばあや　はい。ざつと一すゝぎして來ませう、夕方までに乾いて了ひますから。

伊勢子　でも——御洗濯はあとにして、あたし達御飯にしない。——いま漬けてだけ置いて。

ばあや　（柱時計を見て）おや、もう十二時。井戸端へ一寸顏を出したと思つたら、もうおひるですかねえ。

伊勢子　あたしだつて、御掃除をして、髮を結つたつきりよ。——構やしないわ、ばあや。たまに寢坊位はしたつていゝのよ。ゆうべはあんなに遲くまで待つたんだし、

兄さんはまたどつかで好きな事をしてゐたんだから。（ポケットから小箱を出して、あけて見る）からつぽ。
ばあや　なんですか大層綺麗な――
伊勢子　これ。舶來の煙草。――よそへ行つて、こんな贅澤なものをぷか〱吹かして居るのねえ。きつと金口よ。
ばあや　どなたかから御歳暮に頂いたのは、ブリキの鑵に這入つてゐましたが、――舶來のはおいしいんでせうね。
伊勢子　可愛い箱だらう。あたし針さしにしようかしら。
ばあや　（氣がついて）お孃さまの方に、ほかに、何か洗ひ物は。
伊勢子　ないわ。――とにかくおひるにしてね、きまりがつくから。
（ばあやは汚れ物を持つて臺所に行く。）
（伊勢子は松井の持物や買物を奥の間へ片づけてから、縁先へ出て洋服にブラシをかける。）
（しばらく。）
（ばあやが出て來て食膳の用意をする。）
伊勢子　ばあや、洗濯屋がこの頃遲いわね。ワイシャツが二つも行つてるんだから。
（二人食卓につく。）
伊勢子　さうさう。ゆうべの御料理がそつくりしてあつたわけね。
ばあや　晩まで置いてもなんですから、お孃さん召上つて下さいな。
伊勢子　兄さんのお蔭で、あたし達まで御馳走がたべられるわ。ばあやもお上り。一つあたしの手並を見て貰ひたいんだから。
ばあや　いえもう私は――。
伊勢子　あたし一人ぢやたべ切れないから。
ばあや　さうですか。では御遠慮なしにいたゞきます。
（間。）
ばあや　奥さまも今頃は御飯なんでせうね。何を召上つていらつしやるか。――海岸ではお野菜がなくつて、お困りになつてゐませんかしら。
伊勢子　さうね。姉さんと來たら特別野菜好きなんだから。――これが肴好きだつたら文句はないのに。三度三度、生きのいゝところを勝手にたべられて。――手紙に書いてあつたわね、朝晩、地引網を見に行くんだつて。
ばあや　海岸の散歩が何よりの藥だつて云ひますが、もうあちらは大分お暑いことでせうね。東京だつてこんなですから。――奥さんなんぞは、少し日にやけた方がようございますかね。ふだんがあんまりお色が白いから。
伊勢子　あたしみたいに眞黑になつても困るわ。――姉さんだつて、きつと浴衣位は着てゐてよ。この間送つて上

げたんだから。ばあや、あれどう思つて。

ばあや　あの水玉の、かう――

伊勢子　えゝ、あれなら氣に入るわね、少し派手かしら。姉さんはまたいつも地味な柄ばかり着てるんだもの。

ばあや　派手なんて、あれで丁度お似合ひですとも。

伊勢子　ねえ。あれで髷にでも結つて御覽。それあとても粹な奥さんになつてよ。

ばあや　お髮がまたいゝ方ですからね。

（間。）

伊勢子　……きつと朝から待つてるにちがひないわ、今日は日曜だから、宿屋に一人ぼつちで淋しい顏をしてゐてよ。――（二階を見て）いやな兄さんねえ、これで四遍目。

ばあや　………。

伊勢子　姉さんが立つて行つて、まだ二十日そこそこぢやない。それが昨夜でもう四遍目よ、へんな所へ行つたの。よそへ泊つて來て、見舞に行くのをすつぽかすなんてあんまりね。姉さんが可哀相だわ、なんにも知らずに待つてるんだから。

ばあや　ほんたうに。

伊勢子　あたし、もう初めつから、知らせて上げるつもりだつたけど、姉さんに心配させては惡いと思つたもんだから……。いつそ、そ云つてやらうかしら。

ばあや　でも、折角御養生に行つてるところですもの、やつぱりお知らせしない方がよくはありませんか。

伊勢子　あたしどうしていゝかわからなくなるの。なにか、あたし達が行き屆かない事でもしたから、兄さんがそんなところへ行くのかと思つたり。――もしさうなら、あたし姉さんに濟まないんだから。

ばあや　そんなわけがあるもんですか。本當に旦那樣によくして下さるんですもの。

伊勢子　だつて、いくら姉さんが留守になつたからつて、あんまり度々なんだもの。あたし氣がかりで仕樣がないの。うちにゐる、あたしなんかゞ氣に入らないせゐなんだわ、きつと。

ばあや　いえ御孃さん。飛んでもない。――あなたがお氣に入らないなんて――

伊勢子　それでも、姉さんがゐた時こんな事一ぺんもなかつたんだもの。

ばあや　御孃さんがお出でになつてからはさうですが……

伊勢子　――ぢやあ前には、やつぱり時々。

ばあや　よく夜分遲くなつてお歸りになりました。毎晩うちで御飯を召上るやうになつたのは、御孃さんが御支度をして下さるからですよ。

伊勢子　どつかへ御料理でもたべに行つたのかね——兄さん食ひ道樂だから。
ばあや　それが御飯だけで御歸りにならないこともあつて……。だから、お孃さんがいらつしつたので、奧さんもほつとなさいました。
伊勢子　そんな時、姉さんはだまつてゐて。
ばあや　御心配もなすつたでせうが——おとなしい方ですからねえ。
伊勢子　うんとやりこめればよかつたのに。あたしだつたら、それあ云つてやるわ。だつて病氣で寢てゐるのに、良人があんなところへ行くなんて不人情よ。
ばあや　奧さんも、お孃さんにお頼みすればようございましたね。おとなしくしてゐないで。——でも旦那樣方には、いろ〳〵おつき合ひもあつて、どんな方でもたまにはお出でになるさうですよ。
伊勢子　いやねえ、馬鹿なおあしを使つて、女に騙されに行くなんて、——兄さんどうして度々そんな所へ行くんだらう。
ばあや　やつぱり面白い事があるんでせう。
伊勢子　いやねえ。——あたし、兄さんはいつも三島さんと一緒だと思ふわ。
ばあや　お近しくしてゐらつしやるから、さうかも知れませんね。
伊勢子　あたしあの人大きらひ。きつと、あの人兄さんを誘惑するのよ。——ひとり者。それとも奧さんゐるの。
ばあや　もう赤ちやんがゐますよ。
伊勢子　それでゐて——。奧さんと仲でもわるいの。
ばあや　そんな事もないでせうが。（笑つて）奧さんては、三島さんがどつかから拾つて來た方ですつて。
伊勢子　拾つて來たつて。——ぢやあ藝者。
ばあや　なんですか西洋料理にゐた——
伊勢子　あゝ、バアの女給。いやねえ。——そんなだから、あの人どうせろくな人間ぢやないのよ。兄さんをわるい所へひつぱりこむのよ。
ばあや　根がいゝ方でも、お酒の上はちがひますからねえ。
伊勢子　……ばあや、兄さんどこへ遊びに行くか知つてゐる。
ばあや　（微笑）いゝえ、存じません。
伊勢子　あたし、この間わかつた。洋服のポケットを見たらね——別にさがすつもりなんかなかつたけど——
（二階で松井の呼ぶ聲がする。）
伊勢子　ばあや、行つてよ。あたし、いやだから。
ばあや　さうですか。——御馳走樣でした。
（また呼び聲がする。）

ばあや　はい。（行きかける）
伊勢子　三島さん、ひとの顏をじろ〳〵見て氣味がわるいつたらない。
（ばあや二階へ行く。）
（伊勢子は食卓に肘をついて聞耳を立てゝゐる。）
（ばあや降りて來る。）
伊勢子　なあに、ばあや。
ばあや　お番茶を。
伊勢子　入れ替へなくては、もう出ないわ。――ぢやあたし焙じるから、こゝを片づけて。
（ばあやは食卓を片づける。長火鉢で伊勢子が茶を焙じる。）
伊勢子　――二階どうしてるの。
ばあや　お二人とも横におなりになつて――
伊勢子　下らない藝者のはなしでもしてゐるんだわ。――兄さんなんか、なぜあんないやな人とつき合つてゐるんだらう。
ばあや　御近所だつたりすると、自然さうなりますよ。
伊勢子　あたし、あの笑ひ聲を聞いただけでもぞつとする。本當にいやらしくつて。――ばあや、出來てよ。
（ばあや二階へ茶を運ぶ。）
（すぐ降りて來る。）

ばあや　お孃さん、お煙草がありましたかしら。
伊勢子　今度は煙草。忙しいわね。（奥の間へ行く）もう一つもなかつた。
ばあや　まだお二階にも少しありましたが――買つて參りませう。
伊勢子　（笑つて）舶來の煙草なんぞ、買つて來ちやいやだよ。――（蟇口を出しかけて）あたし行つて來るわ。
ばあや　いえ、お孃さん。
伊勢子　食後の散歩。――一寸姉さんの眞似をして見るの。
（庭に立つ）
ばあや　外はお暑いんですよ。
伊勢子　大丈夫、すぐそこなんだもの。
（伊勢子出て行く。）
（ばあやは臺所へ入る、洗濯の音。）
（しばらく。）
（二階で松井の呼ぶ聲がする。）
（やがて足音をさせて三島が二階から降りて來る。上衣を脫いでゐる。誰もゐないので敷居際に立つ。）
（ばあやが庭へ出て來て見る。）
ばあや　お呼びでしたか、ついうつかりしてゐまして。
三島　（わざと快活に）ばあや、水を一杯飲みたいね。（部

屋へ來る）

（ばあやは一たん引つこんで、臺所からコップを持つて出る。）

ばあや　ばちやばちややつてゐたもんですから失禮致しました。

三島　（立飲みして）濟まないが、もう一杯。

ばあや　大變おいしさうですこと。

（ばあやが二杯目を持つて出ると、三島は食卓のそばに坐つてゐる。）

三島　や、有り難う。（半ば飲んで）あゝうまい。うまいねえ。

ばあや　（笑つて）三島さん、お酒よりはうまかないでせう。

三島　どうしてどうして、全く水に限る。

ばあや　お酒を飲んだ後は。――今日は朝から召上つたでせう。

三島　だつてばあや。うちへ歸るには喧嘩の覺悟がなくちやならないから、少し元氣をつける必要があつたのさ。

ばあや　お可哀相にお宅では心配して待つてゐらつしやるのに。

三島　いやうちのヒステリイには困るよ。折角いゝ氣持になつても、うちへ歸ると帳消しにされるから、また飛び出すことになる。がみ〳〵やられて許りゐると、自分の家つて氣がしないよ。

ばあや　奥さんにしたらあたり前ですわ。もと〳〵遊びになんぞ行く方が悪いんですもの。

三島　――とにかく、僕んとこの奴みたいな拾ひ物はいけない。萎びやうが早くつてもうコチ〳〵だ。その上ヒステリイと來てゐる。うちにゐては、女らしい情味なんてものは毛程も味はれないんだ。だから――

ばあや　だからなんて、――三島さんも自分勝手ですね。

三島　さういふもんぢやないよ。――ところがこゝの家はどうだらう。どこの隅々へ行つたつて、かう、暖い潤ほひといふものが溢れてゐる。――富士子さんがゐなくなつてからだつて、伊勢子さんといふものがゐる。やさしい姉妹の手が届いてゐる。

ばあや　それはお孃さんは感心ですよ、よく旦那樣の世話をなさいますよ。

三島　ねえ、女らしい心づかひが何にだつて現れて來るだらう。――それでたまに氣晴らしに行く位のことはよく了解もしてくれるんだから、僕から見れば天國さ。

ばあや　（聲を低めて）お孃さんだけは眞面目に怒つてゐらつしやるんですよ。旦那樣のことを。

三島　へえ、どうして。

ばあや　そんな事をするのは、旦那様の情愛が足りないんだつて。
三島　伊勢子さんらしくつて面白い。姉さんに代つて燒餅をやいてやるんだね。――代理嫉妬か。
ばあや　何と云ひますか。――でも旦那様のお歸りでも遲いと、それあお氣の毒なほど苦勞なさるんですよ。――三島さんなんか、いつも恨まれてゐますから御注意なさい。
三島　だつて僕は何も。
ばあや　嘘仰有い。あなたはまるで信用がないんですから。
三島　誤解だよ、ばあや。――伊勢子さんが此頃へんに他人行儀で、話しかけても逃げを打つてばかりゐるが――さてはそのせゐかな。僕は心底から惚れてゐるのに。
ばあや　まあ、あきれた。あなたみたいな浮氣者なんか、うちのお嬢さんは大嫌なんです。
三島　いや浮氣ぢやない、眞劍なんだよ。僕は伊勢子さんを見る度に、本當に生きてゐる女だといふ氣がする。體ぢうに娘盛りの赤い血が燃えてゐる。そこへ行くと、營養不良の藝者なんか、まるで女の幽靈みたいなものだ。僕はねばあや、伊勢子さんのそばにゐると、生甲斐があるやうに感ずるんだよ。
ばあや　（吹き出す）馬鹿も休み休みお云ひなさい。三島さんつたら、よくもそんな空々しい。――
三島　僕は伊勢子さんに逢ひたいばかりにこゝの家へやつて來るんぢやないか。――え、どこへ行つたの。さつきからちつとも顏を見せないぢやないか。
ばあや　知りませんよ。
（松井が降りて來る。）
松井　何を云つてるんだい、そんなところで。
三島　旦那様の蔭口さ、ねえばあや。
ばあや　あんなことを云つて――
松井　煙草はどうしたの。
ばあや　いまお嬢様が買ひにいらしたんですよ。――下にもなかつたもんですから。
三島　さうかい、煙草屋へ行つたのか。ぢやすぐ僕も追つかけよう。（立つ）
ばあや　ほゝ、不良少年とまちがへられますよ、三島さん。
松井　なんだい。
三島　僕がね、伊勢子さんにすつかり失戀しちまつたのさ。――あゝつまらない。歸らう、歸らう。（縁側へ來る）
松井　歸る。どうせゆつくりしてゐたらいゝぢやないか。
（縁側で）
三島　大がい氣を拔いたから、もう食ひつきもしまい。いやだ、いやだ。（伸びをする）

――ばあや、濟まないが僕の上衣を持つて來てくれないか。

（ばあや二階へ行く。）

松井　（頭を振つて）　僕はどうもへんにいら〳〵して困る。

三島　少くとも女には反つて敏感になるね。さつきもほら、電車で……

松井　――房州行もたうとう駄目か。

三島　（笑つて）　君が泊るとは思はなかつた。あんな妓がいゝのかね。

松井　（笑ふ）　たまにはね。

（伊勢子が急ぎ足で庭へ歸つて來る。敷島のボール箱を持つてゐる。）

三島　いよう。伊勢子さん、あなたの歸るのを待つてゐたところですよ。

（伊勢子上る。）

（ばあやが降りて來てゐる。）

ばあや　お着せしませう。

三島　（着終つて）　伊勢子さんに逢へたから、もう歸つてもいゝ。

松井　さうかい。

（三島玄關から歸る。三人見送る。）

ばあや　暑かつたでせう。

伊勢子　（汗を拭いて）　そんなでもないけど。――八百屋へまはつて來たのよ。晩に野菜サラダをこしらへて見ようと思つて。

ばあや　今日は、あつさりした物がいゝでせうね。――お孃さん、私は一寸洗物を乾して了ひますから。

（ばあやは臺所へはひる。）

（松井は食卓の上にある煙草を取つてぼんやり吸つてゐる。）

松井　伊勢ちやん、さつき二つ三つ紙包があつたらう。

伊勢子　はい。（奥から持つて來る）

松井　富士子の方へ、とにかく小包で出すことにしよう。――買ひ忘れたものがあるかどうか、調べて見てくれないか。

（伊勢子、ヱハガキを出して來て、讀みながら一々品物を引合せる。）

伊勢子　あ、ヘヤ・ネットがない。

松井　さうかい。書いて行つた丈はみんなのつもりだが……つけ落ちがあつたかも知れないな。明日でも買つて來よう。

伊勢子　いえ、こつちで買ひますわ。早い方がいゝから。

松井　ぢやいゝやうにして、あとでばあやにでも出さして

くれ。

（松井は新聞と煙草を持つて二階へ上る。伊勢子は品物を食卓の上に纏める。包紙を疊んで臺所口に立つ。）

伊勢子　ばあや、それが濟んだらお使ひ。

ばあや　（蔭で）もうおしまひですから。なんでございますか。

伊勢子　あとで郵便局へ行くんだけど、その前にね、柏屋へ行つていつものヘヤ・ネットを取つて來て頂戴。――それから、油紙を一枚、小包に使ふのよ。あたしさつき行つた時買つてくればよかつたわね。――ぢやあ御苦勞でも御願します。

（水口の戸をしめる音。）

（伊勢子は部屋へ戻る。）

（奥の間から書簡箋と萬年筆を持つて來る。緣側の隅にある籐椅子に腰かけて、肘かけの上で手紙を書き始める。）

（しかし庭の面を見つめてゐる方が多い。）

（しばらく。）

（松井が大柄の浴衣を抱へて降りて來る。）

松井　そんなところにゐたのか。――これもう乾いたよ。（置く）

伊勢子　濟みません――

松井　（近いて）何を書いてるんだい。

伊勢子　（かくすやうにして）……姉さんへ。

松井　小包へつけてやるんだね。

伊勢子　えゝ。

松井　――さうか、序に、僕のことも書いてくれないか。

伊勢子　…………。

松井　昨日行くつもりだつたが、工合が――體工合が悪いから、來週行くつて。

伊勢子　（間）でも……

松井　それだけでいゝ。

伊勢子　でも。――そんな事書いては悪いわ。

松井　…………。

伊勢子　體工合がわるいなんて云へば、姉さん心配しますもの――あたしからそんな事書いてやれないわ。

松井　（硬張つた表情で）では僕から云つてやらう。その方がいゝなら。

伊勢子　…………。

松井　ばあやは。

伊勢子　柏屋まで――

松井　通の藥屋かい。

伊勢子　え。姉さんのヘヤ・ネットを買ひに行つたんです。

松井　なあんだ、あんな店にだつてあるのか。

伊勢子　化粧品や何かも賣るもんだから。

松井　それなら、初めつからあそこで買へばいゝぢやないか。何もわざ〳〵――

伊勢子　上等なものなんぞないんです。

松井　ぢやあ、ある物だけ買つてから僕に頼めばいゝだらう。丸ビルをあちこち探したり、包をぶら下げて人ごみを歩かなくてもよかつたんだ。

伊勢子　姉さんから、あなたにお頼みして來たものぢやありませんか。

松井　だから買ひ揃へてやればいゝ。

伊勢子　いえ、ちがふわ。――たとひ小包で屆いても、一つ一つ兄さんが買つて下さればうれしいんだわ。

松井　僕は、そんな下らない、面倒な事が大きらひだ。（間。）

松井　（强ひて優しく）伊勢ちやん、今日は少しどうかしてるよ。馬鹿に御機嫌がわるいぢやないか。（わざと平氣らしく）兄さんがよそへ泊つて來たことでも氣に入らないの。

伊勢子　……（突然泣き崩れる）

松井　（肩を抱いて）どうしたの、急に――

伊勢子　ひどいわ、ひどいわ……

松井　でも――

伊勢子　そんな、そんなひどい事をしなくたつて……それぢや姉さんが可哀相だわ。

松井　………。

伊勢子　姉さんが立つてから、もう四遍目よ。そんないやらしい所へ行かなくたつて……そんなにいぢめなくたつて……

松井　いぢめるなんて、伊勢ちやん、僕は――

伊勢子　いえ、あたしなんかいゝのよ、どうされたつていいのよ――でも姉さんが可哀相で――姉さんに濟まない……

松井　伊勢ちやん、どうしたんだ、何もお前を、どうもかうもしないぢやないか。

伊勢子　兄さんあんまりだわ、あんな、いやらしい面當てなんぞしないたつて、あたし歸るわ。（立ち上る）

松井　本當にどうしたんだ、面當てなんて。

伊勢子　あたしが歸ればいゝのよ。（步く）

松井　（引とめて）どこへ行くんだ。

伊勢子　姉さんへ――姉さんへ行つてあやまります。あたしがぼんやりで、馬鹿だからこんなことになつて――あたし姉さんに濟まない。（新に泣く）

松井　何もお前は、馬鹿でもぼんやりでもないぢやないか。

伊勢子　いえ、どうせ兄さんの御氣に入らないのよ。だか

ら、だから――

松井　何を思ひちがひしてるんだ、僕はお前が好きで、好きでたまらないんだ。（腕を握りしめる）

伊勢子　うそよ、うそよ。氣に入らないから、あんないやしい所へ行つて、あたしをいぢめたんだわ。居たゝまれないやうにするんだわ。

松井　（益々迫つて）ちがふ、ちがふ。お前が好きで好きでたまらないから、遊びに出かけたんだ。

伊勢子　いえ、いえ。あたし歸るわ。姉さんにあやまるわ。（もがく）

松井　（熱情を以て抑へる）伊勢ちやん、お前が來た其日から、もう僕は好きで好きでたまらなくなつたんだよ。

伊勢子　（やゝ落付いて）そんなこと。――だつて、もう四邊もあんなところへ……

松井　それが、お前を好きなせゐだ。たまらなく好きだからだ。

伊勢子　だつて――

松井　お前のこの手を、この胸を、この肩を頸も頬つぺたも目鼻も脣も、耳朶から髮の毛まで、體ぢうみんな好きで好きでたまらなかつたんだ。

伊勢子　………。（後へよろめく）

松井　そんなに好きでも、義理の妹を僕はどうすればいゝんだ。わかつたか。

伊勢子　……あたし……。

松井　伊勢ちやん、僕は富士子が、お前の姉さんが病氣なので、もう半年あまり本當の夫婦ぢやなかつたんだ。そこへお前が來たんだ。それで僕は、どうすればよかつたんだ。

伊勢子　それで……。

松井　遊びに出かけたのも――お前が好きだからだ。好きで、好きで、たまらなくなつてだ。（熱して抱く）

伊勢子　（うつとりとなつて）あたしなんか……あたしなんか……

松井　いつまでもかうしてゐてくれ。僕はどこへも行かない。お前さへ居れば、お前さへゐれば……

（二人の接吻は奥の間へ隱される。）

（臺所の水口の戸があく。）

（伊勢子が紙白粉で涙にぬれた顏をなほしてゐるところへ、ばあやが歸つて來る。）

ばあや　たゞいま。ヘヤ・ネットはこれでようございましたかしら。お孃さまのとおんなじだつては云ひましたが。

伊勢子　（離れたまゝ）それでいゝの。――ばあや、何か結はく紐を見つけて頂戴。

（食卓の上の品物を油紙で包みはじめる。）

（なか／＼きちんとした形にならない。）

ばあや　私が致しませう。

伊勢子　いゝわ、あたしがやつて見るから。

（ゆつくり／＼崩したり積んだりしてゐる。）

（ばあやは台卓の上のヱハガキを見る。）

ばあや　お嬢さん、なんでせうか、このつばの廣い帽子は女の人も冠つてゐますんですね。

伊勢子　さうよ。

ばあや　奥さんのゐるうち御伴をして、一ぺんあちらへ參りたいものですね。

伊勢子　あゝ。

ばあや　三人で、こんな帽子をかぶつて濱邊を歩いて見ませうね。

伊勢子　………。

（ばあやはヱハガキを見てゐる。）

（伊勢子は小包に紐をかける。）

（松井が出て來てぢつと其様を見てゐる。）

── 幕 ──

門を毀つ

人

七尾嘉右エ門　町人、五十すぎ
同　養助　その子、二十四五
同　辰五郎　その甥、二十前後
豊後節の師匠　三十二三
その妻　三十位
下婢いと　十六七
大沼倉松　仙臺方の世話人、四十位
裏廻り善藏　二十八九
同　市太郎　二十四五
其他裏廻りの若い者、仙臺藩の兵卒

所

秋田藩横手城下

時

明治元戊辰年八月十一日

その一

横手大町にある嘉右エ門の家の内。廣い臺所。棟木を見せた天井。
中央疊敷きの部分が一段高くなつてゐる。大きい爐が切つてある。
上手は米倉の壁、それに沿うて戸棚や膳棚がある。その前は板敷。
下手は、入口から通つてゐる土間を隔てゝ、内土藏、戸前の所が板敷になつてゐる。
前は廣い土間。所々に藍瓶が埋めてある。
臺所の正面、障子の蔭は茶の間や居間。上手隅に二階へ行く梯子段の裾が見える。
土間や臺所の上に、染物の反物が簇をつけて張り渡された儘である。
諸道具類は片づけられ、家族が立退いた後の空虚を感じさせる。
夕方近い。諸方の戸口が締められて家中が薄暗い。引窓が開かれて臺所の上手だけが稍明るい。

奥羽聯盟軍の横手城攻撃が既に開始されて、家に殘つた者は皆緊張してゐる。
養助は爐邊に坐つてゐる。
辰五郎は臺所の隅で火事裝束に改めてゐる。いとそれ

を手傳ふ。

善藏が下手から河水を汲んで來て土間の側に置いて去らうとする。行き違ひに、嘉右エ門が土藏の鍵を二三提げて這入つて來る。

嘉右エ門　目塗りの土は出來たか。

善藏　新しく二舟こねましたから——

嘉右エ門　よし。（内土藏の戸を締め錠を下ろす）みんな、裏の土藏で休め。

（善藏去る。嘉右エ門臺所に上つて柱に鍵をかける。）

嘉右エ門　辰五郎、なりだけは立派に固めたな。（坐る）もう人も通らなくなつたやうだ。門を締めて來い。

辰五郎　はい。

（急いで土間に下り潜り戸を明けて表の方へ去る。）

（稍遠く二三の砲聲。）

嘉右エ門（聞き澄まして）やつぱり山崎街道だ。山内口ぢやない。——もう着いた時分だな。

養助　いくら女の足だつて、とうに向ふに行つてゐますとも。

嘉右エ門　三左衛門の所に居さへすれば安心だ。——いと、お前も行けばよかつたのに。

いと　………。

嘉右エ門　本當の戰ひはこれからだ。其時こはくなつても知らないぞ。はは。

いと　いえ——（上手流しの方へ去る）

嘉右エ門　兵糧方に泣き出されては困るからな。——養助。いざといふ時は先祖の御位牌を持ち出すのだぞ。それがお前の役だ、忘れるな。

養助　えゝ、支度してあります。

嘉右エ門　外の物は、辰五郎も居るし、どうでもいゝ。俺は最後までこの家を見屆ける。

養助　私らも——

嘉右エ門　いゝ。云はれた事だけしてくれ。——辰五郎は何を愚圖々々してゐる。——辰五郎、辰五郎。

辰五郎（潜りから顏を出して）あの、江戸者の師匠が逃げてくるんです。

嘉右エ門（立つて）豐後の師匠か。うん、入れてやれ。

（挨拶の聲。門を閉ざす音。潜り戸をしめて師匠夫婦と辰五郎が這入つて來る。師匠は大きい布呂敷包、女房は三味線を抱へてゐる。）

嘉右エ門　おゝ。師匠か。どうした。

師匠　へい。近くでどかん〳〵始まつたんで、御助けを願ひに上りました。

嘉右エ門　はゝ、よくやつて來た。——とにかくまあ上れ。さ、おかみさんもゆつくりして。

師匠の妻　御迷惑さまですが、どうぞよろしく御願ひ申します。
嘉右エ門　何の迷惑なものか。俺のところでもこれから籠城の覺悟だ。人數が殖えればいつそ氣が強くなるよ。はは。——辰五郎、お茶でもいれろ。
（養助も辰五郎も、色彩の變つた訪客を得て、一寸息苦しい緊張感から救はれた氣持で共に笑ふ。）
師匠　有り難うございます。ところがとんだ臆病侍で、皆さまの手足まとひになりますばかりで……。
養助　それでも師匠、三味線を持つて來たのは流石だ。武士の魂だからな。
師匠の妻　本當ですよ若旦那、これがおまんまの種でございますもの。
師匠　えゝもう、去年から何度擔ぎ出したことですか。——自分の身が危ぶない時でも、これだけは忘れません。——考へて見ると、一つは慾のさせる業ですね。
養助　いや、その道の道具を尊ぶのは感心だ。人間その心懸けが大事だ。
師匠　へい。（固くなる）
嘉右エ門　さあ困つた。俺は好きで染物屋をしてゐるが、あの藍瓶を背負つて逃げ出すわけには行かないぞ。
師匠の妻　まあ旦那、御冗談を——。でも御商賣道具には算盤だつてございませう。
嘉右エ門　さうか、算盤か。はは。しかしおかみさん、俺は商賣は一向不得手でな、算盤を彈くよりも、淨瑠璃を唸る方がまだうまいつもりだ。はは。
師匠　旦那も若旦那も、義太夫と來たら全く玄人ですよ。——お箱の朝顔日記も、暫く伺ひませんが……。
嘉右エ門　嫌な時世になつたな。折角師匠に來て貰つても、世間の騷ぎに遠慮して、こそ〳〵土藏の中で稽古をする始末だ。そしてたうとう戰爭だ。
師匠　へい、私共藝人渡世の者なんぞ、この末どうなりませうやら。——三味線を彈くのも何だか惡い事でもしてゐるやうで……。
養助　いつ〳〵迄そんな事はないよ。そのうちに世の中が治まるにきまつてゐる。——もう御一新といふものにもなつてゐるのだから。
師匠　早くさうならなければ、私共はもう上つたりです。やつと御當地まで來て、旦那方の御ひいきをいたゞいて、やれ嬉しやと思つて居ましたら、またこんな騷動が始まつて——
嘉右エ門　——養助に義太夫を習はせた時分は、手廻り別家から同じ年頃の子供を呼び集めて、十何人一緒に大騷ぎで稽古させたものだ。——大びらに藝事も樂しめない

やうでは、人の心が段々惡くなつて行く許りだ……。

（砲聲二三、稍近づいて聞ゆ。）

師匠の妻　段々近くなつて來ました。

嘉右エ門　おかみさんも、こんな田舍まで來てこはい目に遭はうとは思はなかつたらうな。――もう少し早ければ、うちの女子達の居るところへ送つて上げたんだが。

師匠　御新造樣方は、どちらへ御逃げになりました。

養助　山內の百姓のところだが――。（嘉右エ門に）さつき市太郎にでも、一緒に連れて行かせるんでしたね。

嘉右エ門　師匠もとうにどつかへ逃げたと思つたからな。――氣の付かないことをした。

師匠　いえ。とんでもない。そんな御心配は。――去年からもうこはい目に遭ひつゞけなので、私共も糞度胸といふんですか、少しは圖々しくなりましてね。今日も、近所の人が皆立退いても、勝手はわからずつい愚圖ついてゐましたが、耳のはたで大砲が鳴り出したので急にあわて出して――

養助　だがわざ〳〵大砲の彈の來る方へ、お城の近くへやつて來るなんて、師匠もよつぽど變り者だ。

師匠　でも旦那の御氣性からして、きつとおうちだらうと思ひましたから、――

嘉右エ門　それがもう少しで締め出しを食ふところだつたな。はは。

師匠の妻　もし皆さまが御立退きの後だつたらと、あたしはもう無我夢中で駈け出しました。大町通りへ來て、目印の御門が明いてゐるのを見た時は――

師匠　こいつは身輕だからどん〳〵先に走つて行きますが、私はこんな大きな御荷物を授つて、目がくらみさうなんです。御門のところで辰五郎さんの姿をお見かけすると、安心して動けなくなりました。

嘉右エ門　まあいゝ。こゝで落付いて籠城だ。――町人には勤王も佐幕もない、正直に家業を守つてゐる者に、攻めて來る敵もあるまい。――流れ彈がやつて來たら、それは時の災難といふものだ。惡い事さへして居なければ、どこの軍勢が押し寄せて來たつて、ちつともこはがる事はない。

（砲聲二三。）

嘉右エ門　たゞな、萬一大砲の彈でも破裂して火でも出たら、精出して消し止めるのだ。こはがつて逃げ出したら、こゝの家だけでなく、隣近所はおろか町中燒けないものではない。――町人は自分の家を守るのが務めだ。……師匠。俺はこの家が灰になるまではかうして頑張つてゐるよ。

師匠　もう私共には、どこがわが家といふものもありませ

ん。どうかいつまでもお側に置いてやつて下さい。

（更に砲聲二三。）

辰五郎　どうして――お城ではどうして默つてゐるでせう。さつきから賊があんなに打つてゐるのに。

養助　軍略にちがひない。間近く寄つて來たら、一時に打ち出すつもりだらう。

辰五郎　でもあんまり靜か過ぎます。あれだけ大砲の彈が飛んで行つたら、大騷ぎになる筈ぢやありませんか。誰も居ないのではないかしら。

養助　馬鹿なことを。――横手中の侍が皆死を決して立て籠つてゐるのだ。――今に見ろ、賊なんか蹴散らされて了ふから。

嘉右エ門　しかし何だな。辰五郎のいふ通りお城が餘り靜かだな。――うん、これは賊方で、嚇しの空砲（からづゝ）を打つてゐるのぢやな。

師匠　空砲ですか。

嘉右エ門　横手の戸村十太夫といへば、佐竹藩の執政として白石會議へ出られた方だ。奥羽聯盟に加はつて會津庄内の救解を願つた方だ。もとは立派な味方だ。――賊だつて、薩長の兵隊は憎くても、お國の人達になんの恨みがある。ましてこの横手のお城だ。流石に攻めたくないのだらう。

辰五郎　さうです、きつとさうです。

養助　そんな事があるものか。――軍略ですよ。――それに賊のひよろ〳〵彈なんか、まだお城へ屆かないのですよ。

師匠　一體――今度の戰爭の事は、私共なんぞには一向わかりかねますが、今日あのどん〳〵やつてゐるのは何處の兵隊なんでせうか。

嘉右エ門　庄内家と仙臺家だ。

師匠　庄内といへば、あの酒井さまの御藩ぢやありませんか。それが――賊になつたんですかねえ。

養助　何も不思議はない。會津と庄内はもと〳〵天朝の征伐を受けてゐる國だ。

師匠　さうですか。わからないもんですねえ。（女房を顧みて）みんないゝ方ばかりと思つてゐたのに。

嘉右エ門　どうしてだね。

師匠　まあ、私共の敵を討つて貰つたやうなものです。――江戸中をあばれ歩いた薩摩の惡侍を退治して下さつたんですから。

師匠の妻　大勢の薩摩つぽうが、市中を荒らしまはつて、それはそれはひどい亂暴を働くので、一時は夜歩きの人もなくなつた位でした。私共は稼業を駄目にされた上に、たうとう近所に附け火までされて丸燒けに遭つたの

です。

師匠　江戸に住めなくなつたのもあの悪者共のせゐですから、そいつを懲らして下さつた酒井さまは正しい有り難い方だと思つてゐました。それが賊になつてこの横手へ攻めて來るとは、世の中は解らないものでございますねえ。

嘉右エ門　いや賊でも官軍でも、その人のいゝ惡いにかはりはないよ。ほんの廻り合せで敵味方になる世の中だ。現に今だつて、一と月前の味方同志の戰ひぢやないか。

師匠の妻　どうしてまた、そんなことになつたのでせうね。

嘉右エ門　わからないね、おかみさん。――養助はいろいろ講釋してくれるが、勤王とか佐幕とかの理窟だけでは、どうしても俺に納得出來ない。――たゞ人の心の持ち樣が亂れて無理が出來たのだとしか思へない。――この奥羽ばかりでなく、日本國中で戰爭が始つてゐるさうだからな。

養助　えゝ。どこでも戰ひです。勤王の大義を奉じない者を亡ぼし盡すまでは、どうしても必ずしなければならない戰爭です。――お父樣の云ふやうな、そんな廻り合せでやつてゐるのではありませんよ。

嘉右エ門　さうかな。戰ひをしてゐる侍ばかりか、町人百姓の難儀まで勘定に入れても、それでもしなければならない戰爭かな。どこかに無理はないかな。

養助　勤王の精神を徹底させるためにはやむを得ない事です。

嘉右エ門　ぢやあ養助、勤王の道理といふものは、ひどくむづかしくつて、えらい人でなければわからないものか。

養助　そんな事はありません。日本の國に生れた者には、日月の如く明かに、おのづからわかる筈のものです。それなのに――

嘉右エ門　まあ待て。――それからお前は、賊軍にはそれ程の道理がわかる人間がまるでゐないと思ふのか。仙臺藩にも米澤藩にも會津藩にも。わかつてゐるのは官軍方ばかりだと思ふのか。

養助　……。

嘉右エ門　それがわかつてゐながら、命懸けの軍さをする賊の方に、まだ外の譯はないのか。官軍方にも何かの間違はないのか。――俺には、今度の戰にどうも無理があるやうに思はれてならない。心の持方さへ正せば、日本國中で戰爭なんかしなくても濟むと考へるがな。

養助　無理――心の持方をどうするんです。

嘉右エ門　誰でも一段上の人を信じて從ふことだ。それが順繰りに一段づつ上の人を信じて行くのだ。――天子樣でも將軍樣でも、上に立つ方に間違のあらう筈はない。

――ところが人といふものは、すぐ一段上位のことはわかつても、三段四段上のことが本當にわかるものぢやない。――ずつと上の方の御心を、一足飛びに飲み込んだつもりの連中が多くなつて幅を利かすと、世の中に無理が出來間違ひが起るのだ。今度の戰爭だつて――

（突然やゝ近く、別の方角から砲聲起る。）

（一同驚いて顏を見合はす。）

辰五郎　一寸、見て來ます。

（下手へ走る。）

（更に別の方角で豆を炒る如き銃聲が起る。）

養助　あ、お城方だ。

嘉右エ門　さうらしい。――鐵砲だな。どうして大砲でどんどんやらないかな。

（辰五郎姿を現はす。）

辰五郎　今度は愛宕山の上から打ち出しました。――兄さんお城でも始まりましたよ。

（續く砲聲。銃聲の斷續。表通りの方で喚聲が上る。）

（皆總立になる。いとも出て來る。）

（やがてかなりの人數が叫びながら走り行く足音。四五の砲車の重い轍の地響。）

師匠　大砲ぢやありませんか。

養助　うむ。山崎街道からやつて來たのだらう。――ボンベイ（臼砲）といふ大砲だ。

師匠の妻　あんな地響がして――怖ろしく大きさうですね。

嘉右エ門　――横手の城下にも、たうとう賊が足を踏み入れたか。（いとを見る）おい、いと。こはいか、こつちへ來い。

師匠の妻　（近づいて）まあ、ねえやさんも殘つてゐたんですか。――みんな一緒だから、こはい事はありませんよ。

嘉右エ門　誰もゐなければ御飯に困るだらうつて、殘つてくれたんだ。仲々これで豪傑だよ。

師匠　感心にねえ。（いとに）うちのかみさんも仲間入りだ。何でも手傳ひますよ。

養助　賊はボンベイを何處へ据ゑるでせう。

嘉右エ門　お城でも威勢よく大きな奴をぶつ放せばいゝに。――（女達に）さあこれからが本物だぞ。びつくりして腰を拔かしては困るぞ。

（銃聲が一しきり聞こえる。辰五郎去る。）

嘉右エ門　あんな物ぢや賊は追つ拂へない。なぜ大きい奴を打たないのかな。

養助　もしかすると――

（近く砲聲二三轟く。）

養助　（女等は思はず耳を蔽うて寄り添ふ。）
さつきのボンベイだ。
（騒音、喚聲が遙に聞こえて來る。）
（裏の方で辰五郎等の聲がする。）
（更に砲聲。）
嘉右工門　お城方はどうしたんだ。
（辰五郎また出て來る。）
辰五郎　賊が、もう川向ふへ渡りました。
養助　大砲はどこで打つてゐる。
辰五郎　川原町でせう――材木の間から煙が見えます。
嘉右工門　お城方はどうした。――まだ打たないか。
辰五郎　鐵砲ばかりです。
（砲聲。辰五郎去らうとする。）
嘉右工門　辰五郎、怪我しないやうに氣をつけろ。
（そこへ善藏が來る。）
善藏　親方。二の丸へ火がかゝりました。
嘉右工門　なにお城が――
（師匠夫婦といとを殘して一同下手へ走り去る。）
（騒音。喚聲が高まる。――段々遠くなる。しばらく。）
（もう薄暗くなつて、やがて引窓から炎の餘映がさしこむ。）
（三人は默つて窓を見上げてゐる。）

（師匠の妻が顔を伏せる。しくしく泣き出す。）
師匠　――どうしたんだ。えゝ。
師匠の妻　あなた、上野のお山が落ちる時も、こんなだつたらうと思ふと……
師匠　うむ。
（いとも何となく引き入られるやうに顔を伏せる。しばらく。）
（養助だけ、音もなく戻つて來る。）
（爐邊に坐つて青ざめた顔をしながら、ぢつと引窓を見上げてゐる。）

その二

同じ場面。
同じ日の夜。「その一」より三四時間後。
土間近く臺所に行燈。茶の間の障子に灯影がさしてゐる。
爐邊には辰五郎と師匠。
内土藏の戸は開いてある。戸前に市太郎が腰をかけ、それを取卷くやうに、善藏其他裏まはりの若い者が三人。藍瓶に腰を下ろしてゐる者もある。
臺所の上手で師匠の妻といとが遲い夕飯を食べてゐる。引窓は締めてある。

板敷には若い者達の膳椀が、まだ片付けずに置いてある。

辰五郎　（市太郎へ）――山内の方へも聞こえたらう。

市太郎　え丶、それはよく聞こえました。（善藏に）どおんどおんつて響いて來ても、賊の方かお城方かわからないんだから、たゞ胸をどき／＼させてゐたよ。

善藏　なあに、あれあ皆賊の打つた奴だ。

市太郎　お城の方は小さいのか。

若い者一　小さいにも大きいにも、大砲なんか一發も打ちはしない。

市太郎　どうして。

若い者一　どうしてだか、鐵砲のバラ／＼玉ばかりだ。

辰五郎　お城には大砲がないのさ。昨日官軍が退き上げる時、一つも置いて行かなかつたんだね。

市太郎　それぢやお城の落ちるのもあたり前だ。

善藏　見てゐて口惜しくなつてな。

若い者二　いよ／＼戰爭が始まつたかと思ふと、もうお城が燃えてゐるんだから。

若い者一　愛宕山から見下しにやられては溜らないよ。――市太郎兄、あの天邊からどん／＼打ち出したんだよ。びつくりして了つた。

善藏　お城の火が見えたか。

市太郎　山内では、ぼうと空燒けしただけだが、街道へ來ると、晝のやうに明るくなつてゐた。

若い者一　どうだ、街道で賊と逢つたか。

市太郎　一人も見ない。道で聞くと、庄内衆は餅田と赤坂へ引き揚げたさうだな。

若い者一　仙臺衆はどうだな――淨光寺にみんなゐたか。

市太郎　役人みたいなのが少し居たきりだ。

若い者二　兵隊は町にゐないんだな。

善藏　市太郎兄、でも淨光寺ぢやこはかつたらう。

市太郎　なあにこはいもんか。たゞびつくりしたよ。……大町通りまで來て、もううちへ歸つた氣でゐると、劍付鐵砲を持つた番兵が「待て」だらう。

善藏　うん。

市太郎　竹に雀の高張を立てゝ篝火を焚いてゐたよ。……「何處から來た。」つて云ふから、「山内から來て親方のとこへ戻る。」と云つた「何處の者だ。」と聞くから「大町の七尾の裏廻り。」だつて返事をしたのさ。そしたら、傍にあの大沼が居てね――

辰五郎　大沼三郎兵衞の息子だらう、倉松と云ふんだ。

市太郎　（頷く）――「あゝ七尾の裏廻りか。」つて合圖したので、すぐ歸されたよ。なんにもこはい事なんかあり

はしない。
辰五郎　大沼はやつぱり仙臺家についたんだな。――この間から、內通してゐるといふ噂があつたぢやないか。
市太郎　えゝ、いろ／＼兵卒を指圖したり、妙に威張つてゐましたよ。
辰五郎　威張つてゐたのかい。
（師匠の妻といとが飯を食ひ終る。）
（いと、灯をつけて上手へ入り、師匠の妻と共に後片付にかゝる。）
（嘉右エ門が茶の間から聲をかける。）
嘉右エ門　――市太郎。
市太郎　へい。（立ち上る）
嘉右エ門　用ぢやない。――一ぱいやつたか。
市太郎　えゝ、いたゞきました。
嘉右エ門　さうか。今日は難儀をかけたな。――明日はまた早く山內へ行つてくれ。持つて行く物はあとで出して置く。――もう裏へ行つて休め。
市太郎　へい。明朝は暗いうちに參ります。
嘉右エ門　――善藏。
善藏　へい。（立ち上る）
嘉右エ門　誰か一人寢ず番を置いて、あとはみんな休ませろ。――（獨言のやうに）もう夜討の心配もないが、火の用心だ。――水だけは十分汲んで置けよ。
善藏　へい。――では御免蒙つて。
（若い者一同が下手へ去る。）
（辰五郎伸びをする。）
師匠　辰五郎さん、今までつい氣がつかなかつたが、ひどく丈夫に固めたもんですね。
辰五郎　（自分の刺子姿を顧みて）　はは。
師匠　しかしあのボンベイといふ奴を聞いた時は、どうなる事かと青くなりましたね。今頃、こんなに伸び伸びして居られようとは思ひませんでした。
辰五郎　なんだか張り合ひ拔けがした。――賊が打ち出すとすぐ落城だ。も少し華々しい合戰があるかと思つてゐたら――
師匠　（手を振つて）　いやこれが、華々しかつた日には大變ですよ。流れ彈か逸れ玉が降つて來ますぜ。また賊が負けてたとしたら只は逃げませんよ。町中火にして行くにきまつてゐます。
辰五郎　川原町に火をつけた位だからな。――戰ひよりも、あの方がよつぽど危ぶなかつた。
師匠　戰ひがこれ位で濟むなら、有り難い方ですよ。――去年の暮は、薩摩のあばれ者とお上の兵隊とが、江戸の町どこかしこで戰ひを始めるので、毎日毎晩おど／＼し

てゐました。そして揚句の果は火まで付けられるんです
から、お話になりませんや。
辰五郎　――あんまりもろ過ぎたよ。
師匠　しかしあれはもとから覺悟の上の落城ですな。人數
から云つたつて賊の方が何層倍も多いのに、大砲一つ持
たずに合戰を始めるなんて。
辰五郎　官軍は皆引揚げて了ふし、お城に殘つてゐた横手
侍と云つたところで、ほんの知れた數だからな。――敗
けるのも、それは無理もないが……。
師匠　三方から大砲を打ちこまれたんですから、大方討死
でせう。――あゝどかん〳〵やられては、どうにもなら
ない。
辰五郎　叔父さんも兄さんも、さつきからそれを案じてゐ
たが――殿樣はじめ、皆がうまく引揚げてゐればいゝが。
師匠　こちらではお侍のお知合ひも多い事ですからな。
（養助、二階から下りて來て爐邊へ來る。）
養助　（茶の間へ聲を掛ける）　お父樣、山內へやる手紙を
書いて置きました。
嘉右エ門　さうか。市太郎は朝早く出かけるさうだ。――
それからな、序に子供のものを何か持たせてやれ。
養助　何がいゝでせう。
嘉右エ門　玩具と、飴でもやるか。――明日から賊が入り

こんで來れば、樣子に依つては十日一週間と歸つて來ら
れないかも知れない。あつちで子供に飽きられたら、だ
ましやうがなくつて女子達が困る。――もう今夜から困
つてるかも知れないぞ。
養助　えゝ、場所が變つてゐるし、きつとまだ寢ませんね。
嘉右エ門　うん。お前に似て宵つ張りだからな。いゝ所が
似ないものだ。はは。
師匠　お嬢さまも、知らない百姓家なんぞへ連れて行かれ
て、どうしたんだらうと思つていらつしやいますね。
嘉右エ門　大人にはたまに不自由させるのも藥だが、子供
は可哀相だ。大なり小なり軍さには誰一人難儀をのがれ
られない。困つたものだ。
師匠　それあ全く。――戰場で功名手柄を立てる方はいゝ
として、民百姓は迷惑ばかり背負はされるんだからやり
切れません。
嘉右エ門　（灯を消して茶の間から出て來る）　合戰だけは
濟んでも、後始末はいつまでかゝるやら。勝つても負け
ても有り難い事は一つもない。（養助に）　俺は土藏から
着類を出して來る。あとで玩具を選つてくれ。（呼ぶ）
いと、いと。
（いと出る。）
嘉右エ門　手燭をつけて、俺について來い。そつちの方は

おかみさんに頼んでな。
師匠　何にも御役にも立ちませんで。――今夜はまた御無理を御願しまして相濟みません。
嘉右エ門　いや、おかみさんみたいな別嬪を連れて夜歩くと、燒餅をやいて、仙臺衆がどんとやるからな。用心に越した事はない。はは。
（嘉右エ門といと內土藏に這入る。）
辰五郎　兄さん、大沼の事は本當でしたよ。
養助　倉松がどうした。
辰五郎　間者だ間者だつて云はれたでせう。――今日はもう仙臺方の世話をして、淨光寺に詰めてゐるさうです。
養助　やつぱり前々から賊に內通してゐたんだな。
辰五郎　（師匠に）うちへなんぞもちよい〳〵來て、何知らぬ顏をしてゐたんだよ。
師匠　へえ、憎らしい奴ですな。お城があんなに早く落ちたのも、一つはそんな奴の手引きもあつたんですな。
辰五郎　間道傳ひで攻めて來たといふから。――それにしても、ひどく呆氣なく負けて了つたもんだ。
養助　何をいふ、横手の侍が必死の覺悟で戰つたんだ。
師匠　多勢に不勢ぢや、どんな强い方だつて叶ひませんやね。
辰五郎　そんなら、初めから人數を澤山にすればよかつた。横手で合戰をやるのはとうにわかつてゐるのに、前の日になつて、官軍がみな引揚げるなんて話はない筈だ。
師匠　まあ、さうです。賊が大勢で押し寄せて來るのもわかつてゐますからね。
辰五郎　……第一薩長の兵隊が、大砲一門殘して行かないのだから、合戰らしい合戰も出來なかつたわけだ。自分さへよければ、ひとはどうでもいゝと云ふ腹なんだね。
養助　辰五郎、お前などの知つた事ぢやない。――軍略なら、仕方がない。
師匠　それあまた、いろ〳〵段取りがありませうからな。
辰五郎　だつて、その軍略だつて、みんな薩長の兵隊がきめる事でせう。あの人達は、どうせ横手を負けるものと踏んで、放つて置いて、みす〳〵見殺しにしたも同然なんです。
養助　下らない事を――お上の軍略に、お前などがとやかく口を挾むことがあるか。
辰五郎　――同じ官軍でありながら、横手が危ぶないのに加勢も來なかつたぢやありませんか。軍略などはどうでも、人情があつたら、急いで馳けつけるのが當り前です。――お城の人達も、さぞ心細かつたでせうよ。
養助　（息苦しく）勤王の大義のため、錦の御旗の下でする戰ひだ。みんな、悦び勇んで、討死を遂げられたにち

がひない……。

辰五郎　私は、きつと官軍の不人情を恨んだと思ひますね。

養助　不埒なことを云ふな。（睨む）

（座が白ける。）

（いとが内土藏から夜具布團を運び始めて戸前に積む。）

（師匠の妻が上手から手を拭き乍ら出て來る。）

師匠の妻　ねえやさん、もう濟みましたが、あと、用はありませんか。

（いと、頷く。）

（師匠の妻消した灯を持つて臺所へ來る。）

師匠　（宥めるやうに）しかし、まあ、過ぎた事ですし、とにかく戰爭も濟んで何よりでございますよ。毎日々々今日のやうにどん〳〵ばち〳〵が續いたら、私共も生きた空がなくなりますからね。早く片付いた御蔭で――

養助　（かつとして）師匠は、お城が早く落ちたのをよろこんでゐるのか。

師匠　いゝえ、そんなつもりぢやありませんとも。たゞ軍さには、これまでもうひどい目に遭つて來てゐるものですから、つい――

養助　お前達は江戸者だ。官軍が德川方に負けると、いゝ氣味にちがひないわけだ。

師匠　そんな、とんでもない。私共みたいな流れ渡りの者には、どこのお國も住めば都になつて、御世話になる土地の味方です。さつきもお城の火を見たら、悲しくなつてこれと二人で泣きました。

養助　なんで味方なものか。――勤王軍の張本薩摩が、お前達の敵だと云つてゐるぢやないか。

師匠　（きつとして）それあ薩摩つぽうなら、官軍でも何でも憎いと思ひますが、御恩を受けてゐる横手の官軍が敗けたのを、なんで悦ぶわけがありませう。若旦那、物のわからない私共でも、そんな犬畜生にも劣る心は持つて居ません。

養助　――官軍に二つはない。

師匠　いえ、ありますとも。薩摩の無法者にどうして正路な事が出來るものですか。勿體なくも錦の御旗をかさに着てゐる惡者です。辰五郎さんも云はれたやうに、義理知らず人情なしです。――若旦那、そんなわからない官軍があるものでせうか。あいつらはにせ者の官軍です。

師匠の妻　（はら〳〵して）あなた――そんな……。

師匠　あんな奴等が幅を利かしてゐては、官軍もきつと人の恨みの的になります。天朝方の名折れになります。

養助　だから、賊の味方をする氣だな。有り難い庄内の手引きでもするがいゝ。

師匠　（涙を浮べて）いかに若旦那でも、あんまりひどい……私が、私がさう見えますか。ひどい……口惜しいんです……（顏を蔽ふ）

（嘉右エ門は少し前から内土藏を出て戸前に立つてゐる。いとに小聲で布團の處置を云ひつけ、手燭をそこに置いて爐邊に來る。）

嘉右エ門　養助。またお前の癇の蟲が起つたな。――師匠もおかみさんも、氣にかけてくれるな。これが惡い持病だ。

師匠　――私共こそ、物を知らない分際で口答へしたりして、どうか若旦那、御勘辨下さいまし。

嘉右エ門　――養助。官軍だの賊だので、よし惡しをきめる癖がまだ取れないのか。困つたものだ。お前はいくら本を讀んでも、それぢや何にもならないぞ。本に讀まれてゐるのだ。官とか賊とか、勤王や佐幕で物事を片づけるのが抑々の間違ひだ。

養助　間違ひだとは思ひません。

嘉右エ門　何だと。

養助　道理にそむく者はいつだつて惡人です。泥棒が施しをしたとて、之を善人だとは云へません。施しはいゝ事でせう、しかしその本の、盜みをする人間を善人だとは云へません。――勤王の大義に從はずに佐幕の軍を起すやうな者は、天理にそむく惡人にちがひないぢやありませんか。

嘉右エ門　云ふ事は立派だ。それで師匠をいぢめたのか。はゝゝ。しかしそれは本の上面だけしか見ない者の議論だぞ、世の中へ出れば死んで了ふ議論だ

養助　そんな事はありません。これが生きて行く上の、唯一つの正しい尺度です。

嘉右エ門　それは道理を計る物さしにはなつても、その奧の善惡を見る役には立たない。

養助　道理より奧に善惡はありません。

嘉右エ門　いやある。

養助　何です。

嘉右エ門　お前の忘れてゐるものだ。人の心だ。人柄だ。

養助　そんな物は――

嘉右エ門　道理の上の善惡よりも、人としてこの方のよし惡しが一番大本だ。お前は理窟を書いた文句に目がくらんで、それが見えない。道理を離れた仕業を、お前は道理の尺度で見ようとするから駄目だ。

養助　道理の尺度でなくて、何で計るのです。

嘉右エ門　人の心を知る目だ。

養助　それは言葉だけです。

嘉右エ門　うん、さう思ふか。それぢや養助、一つお前に

聞く。お城の殿樣をいゝ方えらい方とは思はないか。勤王の旗印を立てゝ、落城を覺悟で賊軍と戰つたのだ。
養助　無論えらい方です。そんなことは――
嘉右工門　ふん。ところが一月前まで、奥羽同盟の意見で藩論を動かしてゐたのは誰方だ。同じ戸村十太夫樣ぢやないか。もし其時薩長の官軍が攻めて來て、今日の逆に賊となつたとしたら、それ丈で殿樣をわるい人えらくない人と本當に思へるか。
養助　しかし殿樣はもと〳〵學問もあり、勤王の志もあつた方です。
嘉右工門　それ程の方が佐幕と見做される同盟に加擔したのは、色々事情があつたからではなからうか。藩の軍費が足りなかつたかも知れない、出來るだけ戰爭を避けて民百姓を苦しめまいといふ御趣意からだつたかも知れない。――とにかく一月前の佐幕でも今日の勤王でも、戸村樣のえらさに變りはない。――師匠がよしんば庄内を慕つて薩摩を憎んでも、道理よりもつと深いものに動かされたからだ。
師匠　何も、庄内を慕ふなどといふわけぢやありませんが……
嘉右工門　――養助。官軍とか賊軍とかで人を片づけるのはよせ。もつと奥に、人の心のよし惡しを見なければならない。取りはづしの出來る看板なんぞのために、誰が命懸けの戰ひをするものか。どこの藩でも勤王佐幕と方針が定まるのは、たゞ廻り合せに依ることだ。それをきめるのは上にゐる人達の仕事だ。下々の知つた事ではない。
養助　――それでも、私らにだつて意見といふものはあります。
嘉右工門　生兵法は大傷のもとだ。たゞ一段上の方を信じるのだ。俺は勤王でもなければ佐幕でもない、どこまでも戸村樣に從ふだけだ。二段三段上の事は、理窟でわかつてもお心までわかるものぢやない。薩長の成り上り武士が、天朝の御意を體した氣でも、諸方で間違ひの種を蒔くのはその爲ぢやないか。天朝は有り難くても、薩長が憎くて賊になる者が出てはゐないか。
養助　………。
嘉右工門　（氣がついて）みんなにえらい說敎を聞かせたな。はは、無禮な奴だ、辰五郞、欠伸してゐるぞ。――さあ今夜はゆつくり休める。おかみさん、あそこへ床を出させた。御座敷は二階だから、いとと行つてうまい工合に敷いて貰ひたい。
師匠の妻　何から何まで御迷惑をおかけしまして、本當にありがたうございます。

（挨拶していと共に二階へ布團を運ぶ。）
嘉右エ門　師匠、こゝの家では世間とちがつてな、親父が下手な義太夫を唸つてゐると息子が子曰くだ。まあしかし、養助が本を讀むのもどうせ一つの道樂だと思ふから、なるべく肩身を狹くしないでゐるが、少し窮屈だ。どうだ師匠、豐後のうんと艶つぽいところでも授けて、養助をやはらかして貰へないかね。全く親父が助かるからな。はは。
（門を叩く音がする。人聲もする。）
嘉右エ門　（坐つたまゝ）誰だ。
（返事の聲がよくわからない。）
嘉右エ門　辰五郎、見て來い。
（師匠の妻が二階から下りて來る。）
（辰五郎、潜り戸の外へ出る。話聲。）
（やがて門を開ける音。）
辰五郎　（歸つて來る）叔父さん――
（大沼倉松が仙臺藩の兵卒を二人從へて這入つて來る。紋提灯を持つてゐる。）
嘉右エ門　倉松さんぢやないか、何だねこんなに遲くなつてから。
倉松　七尾親方、少し用事があつてな。迎ひに來た。
嘉右エ門　ほう、さうかい。
倉松　御苦勞だが、一寸淨光寺まで來て貰ひたい。
嘉右エ門　妙だね。――淨光寺なら阿彌陀樣ぢやあないか。うちとは宗旨ちがひだ。それにまだ俺だつて、お寺から迎ひを受ける程の年でもないにな。はは。
倉松　親方、冗談事ぢやない。お前さんに用のある方がゐるんだ。
嘉右エ門　誰方だね。
倉松　仙臺藩の松枝兵衞樣といふお侍だ。
嘉右エ門　はて、知らないお名前だ。何の御用かね。
倉松　行つて御話を聞けばわかる。
嘉右エ門　商人は儲け話でないと氣が乘らないものだよ。――もし染物の御註文なら、算盤を持つて行かなければ用が足りないからな。
倉松　――松枝樣は短氣な方だから、餘りお待たせしない方がいゝ。
嘉右エ門　まあ折角のお迎ひだ、すぐ出かける。
倉松　仙臺勢の假御本陣だ、武藤折江樣、川上與兵衞樣といふ方もゐる。粗相のないやうにした方がお爲だよ、親方。
嘉右エ門　倉松さんは大層仙臺方のことがくはしいんだね。
倉松　番兵に名前を云へば案內する。では御苦勞だがすぐ

來て貰ひたい。

嘉右エ門　承知した。――お前さんも、よる夜中使ひ走りまでして御苦勞だな。

（倉松等去る。）

嘉右エ門（一座を見て）はは、何も心配する事はない。一寸出かけて來る。――いと、いつもの袴羽織を持つて來い。

養助　いと、俺のも持つて來い。

嘉右エ門　お前なんぞ行かなくてもいゝ。

養助　お父樣一人はやれません。賊の奴等が――

嘉右エ門　養助。俺が留守の時、この上座に坐つて指圖をする役は誰だ。お前はうちにゐろ。

養助　……それでは辰五郎にお供させます。

嘉右エ門　あわてるな、惡い事さへしなければ、神佛だつて怖ろしいことはない。行つて話をして來るだけだ。――辰五郎、いらないぞ。生れた日から、五十年も每日步く大町通りだ。目をつぶつて行つても、怪我なんぞしない。――俺は一人で行く。

（師匠の妻、身支度を手傳ふ。）

（辰五郎、提灯をつける。）

嘉右エ門　どうせすぐ歸るから、寢酒の燗でもつけて置け。今日の草臥れ休めに一ぱいやらう。――ぢやあ養助、行つて來るぞ。

（嘉右エ門出て行く。辰五郎と師匠夫婦が後を追つて見送つてゐる。しばらく。）

養助　辰五郎、辰五郎。

（三人はひつて來る。）

養助　お前後から行け。お迎ひだと云つて外で待つてゐるのだ。變つた事があつたらすぐ知らせに來い。――提灯を忘れるな。

（辰五郎急いで出て行く。）

師匠　若旦那、向うだつて名のある侍なら、無暗な事はしますまい。

養助　さうは思ふが、何しろお父樣はあの氣性だ……。

師匠の妻　元氣に步いていらつしやるんで、賊の本陣へなど行く樣子ぢやありませんものね。

養助　……俺も、無理について行けばよかつた。

師匠　まあ辰五郎さんがゐますから――

（しばらく。）

養助　師匠、裏へ行つて市太郎を呼んで來てくれないか。

師匠　へい。

（下手へ行く。）

（市太郎と善藏とを連れて來る。）

市太郎　親方が、賊に呼び出されたんですか。

養助　大沼が迎ひに來てな。——市太郎、淨光寺はどんな工合だつた。

市太郎　奥の方はよくわかりませんが侍方は本堂にゐるやうでした。——門のところにも庭にも、篝火を焚いて兵卒が立つてゐました。

養助　賊がお前に何か亂暴な樣子を見せなかつたか。

市太郎　別段なこともありませんでしたが、劍附鐵砲を持つてゐるので、氣味が惡かつただけです。

養助　そんな奴が澤山ゐるのか。

市太郎　いえ、みなで二三十人——十人位が所々に番兵に立つて、あとは腰かけて休んでゐました。そして大沼があちこち歩いていろ〳〵世話を燒いてゐました。

（一人一人若い者がはひつて來て、台所の板敷に腰かける。）

（二階から下りて來たいとが、そこへ行く。）

師匠　なあ兄、そいつらは手荒な扱ひなんぞしないだらうな。

市太郎　薩摩の兵隊なんかより、おとなしさうな面付だつた。

善藏　さうおつかない連中でもないか。

市太郎　また大沼だつてところの人間だ。傍にゐて、親方に滅多な事はさせないよ。

善藏　（養助に）でも樣子を見て參りませうか。

養助　辰五郎が行つてゐる——はたで騷ぎ立てると、反つて惡いかも知れないな。

市太郎　大丈夫ですよ。親方が立派な人だとわかれば、相手だつて自然その氣になりますよ。

善藏　行つて、もうよつぽどになりますか。

師匠　まだ。それ程も經たないが。

市太郎　どら善藏兄、表へ行つて淨光寺の方でも見てゐよう。

（市太郎善藏潜り戸の外へ出る。）

（しばらく。）

師匠の妻　（氣がついて）旦那がさうおつしやいましたが、お寢酒の支度を致しませうかしら——

養助　いつ頃戻るかわからないが——さう、歸つたらすぐ飮めるやうにして貰はうか。

（いと師匠の妻、支度する。）

養助　……師匠、も一人誰かやつて見ようかな。

師匠　大抵御心配はないと思ひますが……

養助　用事だけならもう戻つて來てもよささうだ。

師匠　えゝ、さうですな。

善藏　（はひつて來る）こつちへ提灯が走つて來ます。

養助　走つて來る——辰五郎だな。

師匠　何かまた……。
（門のところで辰五郎の聲。すぐ來る。）
辰五郎　いま來ます。――すぐ後から來ます。
師匠　あゝよかつた。
師匠の妻　お歸りなんですか。
辰五郎　どうしても門の內へ入れないんだよ。でも叔父さんが本堂の階段を下りるところが見えたから、すぐ飛んで來た。
養助　何か――變つた樣子はなかつたか。
辰五郎　番兵が立つてゐる丈で、他の者は寢たのか、お寺はしんとしてゐましたよ。
（嘉右エ門はひつて來る。）
養助　お歸りなさい。どうかと案じてゐましたが……
嘉右エ門　つまらない心配なんかするもんぢやない。（市太郎を見て）なんだ、まだ寢ないのか。善藏も裏廻りもゐるな。――さうか丁度いゝ。みんな裏から大槌を持つて來い。
善藏　へえ、今頃大槌でどうするんですか、親方。
嘉右エ門　いゝから持つて來い。
（若い者去る。）
（嘉右エ門上る。）
辰五郎　槌で何をするんです、淨光寺へでも攻めて行くんですか。
嘉右エ門　はは。そんなところだ。今わかる。
養助　用事はどういふ事でした。
嘉右エ門　うん。松枝といふのは仲々しつかりした侍だ。俺も負けさうになつてな。
養助　何か無理難題でも云ひ出したんですか。
嘉右エ門　うん、俺にはどうしても染め上げられない註文だ。――明日から宿をしろといふのだ。
養助　え――あいつらが泊るんですか。
嘉右エ門　誰がおめ〳〵泊めるものか。戶村樣槇手寄鄕十八ヶ町の親御肝煎りまでつとめた家だ。お城に大砲を打ちこんだ敵の高張を立てられるか。五本骨の日の丸扇をかざした門に、竹に雀の幔幕が張られると思ふか。――無論斷つた。
養助　それで――承知しましたか。
嘉右エ門　しつこく、上げたり下げたり、賴むとまで云ふんだ。どうして私の家みたいな破屋が懇望かと聞いたら――どうだ、みな門のお蔭だ。
師匠　御門がどうしたんです。
嘉右エ門　大將株は淨光寺本陣の近くへ泊りたい。そこでうちの門へ白羽の矢を立てた――これなら諸人の目印になるといふのだ。――その時俺はうまい決心がついたよ。

養助　どうするんです、御父様。

嘉右エ門　修繕中だから出來たら貸すと云ひ拔けて來た。——それでいゝんだ、それでいゝんだ。

（若い者達が來る。）

善藏　親方、大槌は三つよりありませんが……。

嘉右エ門　それ丈で澤山だ。——さあお前達、それを力一ぱい振り上げて、門をこはして來い。

市太郎　え、門を——

辰五郎　門を——

養助　お父様、——

嘉右エ門　——こはれた家が出來上らなければ、いつ迄も賊の宿にはならないぞ。鼻をあかしてやるんだ。——さあ愚圖愚圖するな。さつさと門を叩きこはせ。

（若い者外へ行く。）

嘉右エ門　早くこはせ——市太郎、善藏、元氣よくやれ。

（門をこはす音始る。）

養助　お父様、門はどうでも——賊に咎められたら大變ぢやありませんか。

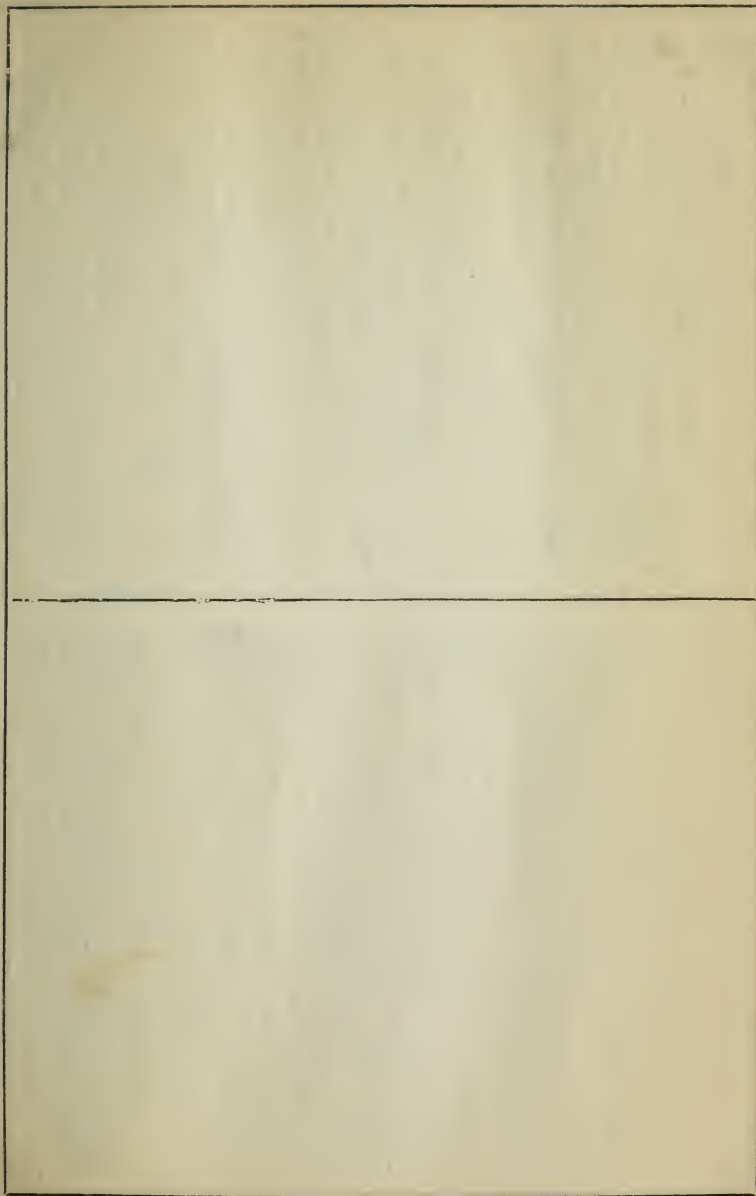
嘉右エ門　ははは、そんな事はとうに考へてゐる。俺は理窟がよくのみこめないから、勤王や佐幕で殿様のお味方に立つわけに行かない。たゞ御恩になつた殿様に刄向ふ奴等は誰でも彼でもみんな憎い敵だ。

養助　もし門をこはして、あとで賊が——

嘉右エ門　侍には弓矢鐵砲の攻道具があるが、町人が自由になるものは自分の家だけだ。これをこはして敵が困れば、もう本望だ。情ないが、俺たちに出來る御恩返しは精々こんなものだ。

養助　……

嘉右エ門　——養助。五十過ぎれば侍だつて戰場御免だ。俺が隱居首を持ち出してやる道樂だ。だまつて見てゐろ。（呼ぶ）おい、もつと力を入れて打つ叩け。塀なんぞ序にぶつ倒してもいゝ、門を滅茶滅茶にこはせ。（一層強い音）——心ばかりの敵討ちだ。あの音を聞いてゐると心が輕くなる。——師匠、さあ一ぱいやらう。これがお城が勝つた晩なら、お箱でも出すのだがな……。ははは、養助。親父が勤王の大忠臣になつた祝ひだ、お前も飲め。ははは。

（門を毀つ音つゞく——）

關口次郎篇

母親（一幕）

人物

松本けい　母
同　浩一　長男
同　勝二　弟
同　美津子　妹
松本進一郎　父、登場せず
後藤せつ　進一郎の姉
吉村はま　同
隣家の下女

東京山の手の松本家の座敷。正面縁側の障子二枚程明け放して小さい庭が見える。下手寄りに押入と二階への段梯子の上り口。左に折れて、障子のはまつた格子造りの腰窓、續いて玄關の間への襖。舞臺上手は襖、廊下を距てゝ別間に通ずる樣になつて居る。

秋の晴れた日の暮方近く。幕あくと、長男浩一大學生の制服をつけて緣側近くに少し膝をくづして新聞を讀んである。暫くして玄關のあく音。やがて玄關の間より襖をあけて、紺絣に袴、高等學校の制服をつけた弟の勝二と、女學校の二三年生らしき年配の美津子が入つて來る。勝二は部屋に入ると壁の帽子かけに、兄の角帽の横へ自分の帽子をかけてから、兄の方に近づく。

勝二　唯今。

美津子　唯今……あら兄さんは今學校から。

浩一　あゝ、會があつたものだから。……病院へ行つて來たのかい。

美津子　えゝ、……あのお母樣は？

浩一　臺所の方だらう。先刻婆やに何か云つてた樣だから。……そして、お父樣の工合は何う、やつぱし變りはない？

勝二　あゝ、ちつとも。何だか餘り良くないらしいや。

浩一　さうか。……（目を外らし）さうだらうね。

美津子　それにお父樣は近頃又痩せちやつたやうね。私何だか今日もぢつとお父樣の顏を見ると、まるで人が違ふやうな氣がして變な氣になつちやつてよ。後藤の伯母樣達もそいつてたけど、本當に變つちやつたわね。

浩一　全く變つて了つた、まだ勤めに出ていらつした時分のことを思ひ出すと、まるで別人のやうだ。然し無理も

ないさ。あゝして病院にもう一年も寢てゐるんだからね。……。(氣を替へるやうに) 伯母樣たちは？

勝二　今日は歸るつて。さうだあの人達も病院へ泊つて二日目だものね……何でも少し話があるから僕達に一足先きに歸つて吳れつて云つてたんだが――もう直ぐ歸つて來るだらう。

浩一　吉村の伯母樣も？

美津子　えゝ、何うせご一緒よ。

浩一　だけど、何うして又お前達と一緒に歸らないんだい。

美津子　えゝ、だつて……(勝二に向ひ)　ねえ兄さん。

勝二　(曖昧に)　ウム。

浩一　何だ、何うかしたと云ふのかい。

勝二　いやね、何だか病院は今日は變なんだよ。伯母樣たちも何だが、お父樣も亦ひどく興奮してゐるんだ……。

浩一　ハア、ぢや又何かあつたんだね。だが何うして又お父樣はこの頃あゝやきもきと怒りぽくなつたんだらう。あれが病氣と云ふものか知ら。

勝二　何方にしてもあれでは病氣は餘り良くはないんだね。何だか先きが……。

美津子　兄さん……。

(三人急に默る。)

浩一　だが、一體今日のは？

勝二　(不愉快らしく)　サア何だか又お母樣のことらしい。伯母樣たちもそんな話をしてたから。何でも今日歸つて來るのもそんなことらしいよ。

美津子　えゝさうなのよ。みんなそのことで、そのお母樣のことで、ひどく云ひ合つてたのよ。お父樣は「彼奴は俺よりも儉約の方が大事なんだらう。俺は見殺しにしてもしまつしてれば好いんだらう。」つて變な目付をして云つてるし、伯母樣たちは又「本當におけいさんの氣も知れない。是非一度云はなくつちや。」とまるでムキになつてるんだし……。

浩一　あゝ又それだ……。

勝二　全く、あんなことを見せられたり聞かされたりするのは堪らないあ。僕はそれで病院へ行つたつて、不愉快で堪らないんだ。……だけれどお母樣は何か本當にそんなにお父樣に冷淡な所でもあるのか知ら。

浩一　まさかそんなこともあるまいと思ふがね。

勝二　だつて伯母樣たちのことを聞いてるとまるでさうなんだぜ。そして僕達にまで變にあてこするぢやないか。僕は其奴が癪に障つてならないんだ。あの人達つたらいやに氣が強くつて大風でその癖僻んでるやうでね、田舍の人つてあんなのかね、僕あんな人達大嫌ひだ。

浩一　そんなことを云ふもんぢやないよ。あの人達だつて

お父様の本當の姉さん達だもの。又種々と心配してゐるんだらうよ。……だけどお父様がそんなに興奮しちや困るね。

美津子　（思ひ出したやうに）　あ、それにね、私何だかよくは聞かなかつたんだけど、今日伯母様たちの話ではお母様が近頃お父様に退院を勸めたらしいのよ。

浩一　退院を――それは又何うしたといふんだらう。

美津子　えゝ。――だけどお父様はそんなに病氣は好いのか知ら。

勝二　ばか。退院だつて何にも好いと許りで退院するに極まつてやしないやね。

美津子　ばかだつて、ひどいわ。本當に兄さんまでこの頃變になつてゐるんだもの。私嫌になつちやふわ。

勝二　だけど兄さんはその退院のこと何にも聞いちやゐないの。

浩一　あゝ、知らないさ。お母さんは何しろあの氣質だからね。自分にだけのみ込んでゐて僕達には何にも話しやしないんだもの。だけど退院を勸めたとすると、伯母様の歸つて來て話されるのもその事かも知れないね。

美津子　えゝきつとさうよ。さうだわ。

浩一　兎に角僕も一遍きいて見よう。それに此間から一度お母様の腹をきいて見ようと思つてたんだ。あんなにお父様の機嫌が惡かつたり、又あの病人を控へて家ん中で口論なんかやつて貰つては堪らないからね。

勝二　あゝあゝ堪らない。堪らない。お父様が病氣になつちやつてから、まるで家ん中が陰氣に不愉快になつちまつた。僕は時々もう家なんか飛び出したくなつちやふんだ。

美津子　本當だわ、この頃の陰氣さつてないわ。お母様は私達には本當によくして下さるけれど、でもお父様が丈夫でいらした時の事を考へるとあの時分は本當によかつたわね。私、この頃時々お父様に連れられて旅行した時のことなんか思ひ出して仕方がないの。

（勝二と浩一、一寸妹の顏を見る、そして默り込んで了ふ。上手次の間の方より母親けい子出て來る。四十五六歳、質素な身裝をしてゐる。理性の勝つたらしい引締つた顏の婦人、然し物腰は凡て、靜な婦人である。）

けい子　オヤ、勝二も美津子もお歸りなさい。何時お歸りだつたの。ちつとも知らなかつた。

（二人とも妙に固くなつて默り込んでゐる。）

けい子　そしてお父様の御樣子は何う。（返事がないので）何うしたの、變に默り込んでゐますね。

美津子　（慌てたやうに）　お母さん、お父様は同じことよ。何だか本當に弱つてらつしやるやうだわ。

けい子　さう。やつぱしいけないんですね。何しろあんなに長患ひだしね。……あ、明日は私が病院へ上る日だが、美津子ちやんは何うします、行きますか。

美津子　え、行くわ。あした日曜だし、お母さんは朝ッからね。

けい子　え〵さうですよ。……それはさうとお前さん達お腹が空いたでせう。さ、すぐご飯にしませう。

美津子　あ、私それよりか先に顔を拭いて來るわ、何だか今日隨分外は風があるのよ。……お母さん、婆やはゐて？

けい子　ゐますよ。だけど今忙しいんだから顔を洗ふ用事なんか位はご自分でなさいよ。

美津子　え〵。（急ぎ足にて去る）

けい子　さあ、勝二もお出でなさい。……（默つてゐるので）まあお前何うかしたの。

勝二　いえ……（と母の顏を見ずに立つて行く）

けい子　まああの子は何うしたといふんだらう。變に默り込んぢまつて。さ、浩一も一緒に行きませんか。

浩一　僕……僕は止しませう。先刻學校の歸りに會で色んなものを食つて來ましたから。

けい子　さう。でも時分時に少し食べといた方がよくはない。

浩一　（少し笑ひながら）え〵、でも今お腹がくちくなつてますから。

けい子　ぢや、まあ。（行きかけて、何か氣に懸るらしく立ち止る）ねえ浩一、美津子も勝二も何だか變ですが何かあつたとでも云ふんぢやないかしら。あの——病院にでも。

浩一　さあ、よくは知りません。然し——。

けい子　え。

浩一　（一寸云ひ澁つたが）いえね、お父樣の工合が變だつたんですつて。いえ容態ぢやないのです。何だか酷く機嫌が惡かつたとかでね。

けい子　（坐りつゝ）まあお父樣が……機嫌が惡いつて、何うしたと云ふんでせう。

浩一　それに伯母樣たちも何だか……。さう、今日もうすぐ歸つて見えるさうですが、何かお母さんに云ひたいことがあるつて云つてゐたさうですよ。

けい子　まあ、あの方達が私に……さう、だが何かしら……。

浩一　（暫く母を見つめてゐて）ねお母さん。お母さんがお父樣に退院を勸められたつて本當ですか。

けい子　退院を？……え〵……その話はしはしましたがね。

浩一　さうですか。――事の起りはそれなんださうです。

けい子　まあ、それが何うしてそんなにお父様を怒らしたといふんでせう――私にや分らない。此の間は、でもご機嫌がよかつたんだからね。そして又それを伯母様たちまでね。

浩一　一體退院とは――何う云ふ譯なんです。

けい子　それはお前…唯私の考へでね……。

浩一　（暫く母を見つめてゐて）私の考へ……（急に興奮した調子で）さうでせう萬事お母さんはその調子なんです。僕達にはてんで打ち明けては下さらないんだから。いえ、それは構はないんです。ですけれどお母さん。お父様だけには何うか良くして上げて下さい。ね、何うか仰しやるやうにして上げて下さい。お願ひです。

けい子　（まごついて）　え、まあお前――。

浩一　ね、お父様はもう何うせ良くはならない方なんでせう。望みのない方なんでせう。院長の角田様もさう仰しやつたんぢやありませんか。右の肺がすつかり駄目で左ももうやられてゐるんだつて、そしてもう二年と持たないんだつて。それにもう一年は過ぎてゐます、だからいくら長く見積つたつてあと一年しか持たないんでせう。本當にもう限られて了つた生命ぢやありませんか。醫者さへもさうはつきり云つてるのに。

けい子　えゝそれは……だから私達は覺悟してゐなくてはならないとね。

浩一　いゝえ、私達が覺悟のことなんかぢやないんです。お父様自身のことなんです。（感傷的に）ねお母さん、お父様は本當にお氣の毒ぢやありませんか。私はあの病人が怒つたり苦しんだりしてゐるのを見てゐられないんです。まして色んな嫌な噂や、蔭口を聞いたりしなければならないなんて、僕全く堪らないんです。考へて下さい。僕達には今お父様のことが第一ぢやありませんか。

けい子　まあお前、何うしたとお云ひなんだえ。そんなことを突然云ひ出して――いえ、それは勿論さうですともさ。だから私にしても今更それを云はれなくつたつて出來るだけのことはしてゐるぢやないかね。しないもんですか。

浩一　えゝそれは勿論さうでせう。然しお父様があんなに――。

けい子　ではお父様が何んなことを云つてらつしやるといふんです。

浩一　それは隨分なことを――（云ひかけて急に又思ひ返したやうに）でも僕とてもあんな不愉快なこと云へません。

けい子　だけどそれではお前、分らないぢやないか。まし

て今日はひどく御機嫌が悪いと云はれたのでは、私は本當に困りますがね――。

浩一　然し――。

（この時玄關のあく音。）

浩一　あ、伯母様たちが歸つて來られたんでせう。何うせ今日は伯母様たちからも話があるでせう。まああの人達から聞いて下さい。僕も此の間から一遍お話ししたいと思つてゐることもあるんですが、又あとにします。

（浩一ぷいと立つて上手に入る。けい子凝とそのあとを見送つたが、立ち上つて玄關の間の方へ行きかける時、その襖あいて、後藤せつ子吉村はま子入つて來る。共に相當年配の老婦人。せつ子は被布姿に切り下げ髮、氣の勝つたらしい容貌、はま子羽織姿特徴なし。二人とも何か興奮してゐることが樣子に現れてゐる。）

けい子　おやお歸りなさいまし　病院でおとまりでは本當にお草疲れでございませう。濟みませんですわね。

せつ子　いゝえ濟まないのは此方こそ。いつまでもご厄介になつてゐましてね。

けい子　まああなた、何を仰しやいます。何にもお構ひ致しませんでして失禮許り……そして矢張り良くはないやうな話ですが、先程子供達が歸りまして――。

せつ子　えゝ、それがね。……本當に困りますよ。

はま子　（獨り言の樣に）考へて見るとあの人も氣の毒な人ですね。

けい子　……。

（暫く沈默。）

けい子　あ、あなた方ご飯は如何でございます。あの何にもございませんけれど。

はま子　えゝ有り難う。私達は病院の方で濟ませて來ましたから。

けい子　まあ、左樣でございましたか……ではお茶でも入れませう。

（けい子去る。二人、被布をぬぎて坐る。）

せつ子　ね、だけどやつぱしさうなんだよ。何うせ死んで行く人にお金をかける必要もないとね。それはもう成程行先きも分つてる病人だから、さう云へばさう云つたものかも知れないけれど、それではあんまり不人情だと云ふものだよ。

はま子　それはさうだとも。第一、そんなことだつたら私達親戚が默つて見てゐられないからね。

せつ子　兎に角一應は話さなくてはね。

はま子　えゝえゝ。だが、何しろおけいさんと云ふ人も根が商人の家の生れだからね。

（けい子茶道具を持つて出て來る。）

けい子　何だかまた曇つて來たぢやありませんか。此の頃のお天氣はちつともあてにはなりませんね。
はま子　秋の空ですか。
せつ子　まあ私達も早く歸つて來てよかつたか知れません。降られたりなんぞしては堪りませんからね。
けい子　本當に嫌な空合です。病人もこれでは嘸不愉快なことでございませう。
はま子　全くね……。
（暫く間。）
せつ子　（急に形を改めるやうにして）所でね、おけいさん。一寸あなたにお話があるんですが――。實は私達ももう此の二三日中に歸らうと思ひます。
けい子　まあ左樣でございますか。本當に御心配ばかりおかけして、……でも本當にそんなに……。
せつ子　けれど此方に參つてからもう一週間になりますよ。……それにそんなにいつ迄もと云ふ譯にも參りません事情もありますしね。
はま子　何しろ國の方がね。
けい子　左樣でございませうとも。女つて者はお互樣に仲仲用事の多いものでございましてね。（低い愛想笑ひ）
せつ子　（氣雜かしく）ですからおけいさん。病人のあとの事は何分よろしくお願ひ致しますよ。……あ、それからあの人は當分退院しないさうですからね。
（けい子初めて。或る感じを相手から感じ出す。）
けい子　あ、退院は……（暫く間）さうでございますか。
せつ子　あなたもご異存はないでせうね。あなたが、病人にお勸めになつたさうですが……。
けい子　えゝそれは……いえ私の方は宅が退院しないと申しますなら別段……（一寸云ひ澁りながら）ですが又何かそんなに容體の方によくないことでも出來たんではございませんでせうか。
せつ子　（じろりと見る）いえ、そんな譯ではありませんがね。（わざと笑ひを浮べながら）だけどあんたはあの病人をそんなに輕々しく見て御出なんですかね。
けい子　輕々しくつて――（驚いて相手を見る）
せつ子　ね、おけいさん。相手があんな病人ですもの。殊に此の頃は全るで見る影もなく病み呆けて了つてゐるぢやありませんか。私なんぞはあの樣子を見ただけで退院とか何とか云へたものではありませんがね。まあ今日も云つてたのですが、そんなことを無理に勸めるなんて、少しお考へが違つてやしないかとね。……今日を最後にお願ひして置きますが、何うかこれからはもう少し病人を丁寧に怒らさないやうに氣をつけてやつて下さいな。殊にあの病氣には氣を立てさせないやうにと呉々もお醫

者から云はれてゐるんですから。……ね何うぞ……。
けい子　まあ私、病人に氣を立てさせるなんてことはちつとも致してゐないつもりなんですが。
せつ子　えゝそれはさうかもしれませんが、然し病人はさうではないんです。例へばその退院の話なんかでも、今日なんか酷く怒り散らしてゐるんですから、私達もあれでは側にゐてはら〳〵させられますからね。
けい子　まあ、さうでございますか。……いえ、その退院の話と申しますのはね。實は此方にも色々の事情がございまして、――まあ一口に云へば暮らし向きのことなんですが、兎に角私共はもう全く現在行き詰つて來て了つてるものですから、決して自ら進んでやりたいことはないのですが、已むをえずあの院長の角田さんとも相談したわけなんでございます。所が院長さんも、何うせ容體は今の儘で急變のない限り同じだし本人も承知なら些とも差支はないからとのお話だつたものですから、一時宅の方に引取つた方が人手の少いことでもあり私の方の都合も好いので、私も何もかも打ち明けて、病人にも相談致したんでございますが、その時は病人は事情をよく知つて、快く承知をして異れたんでございます。「俺もさう思はないではない。何うせ急にはよくはならないんだから、まあ家へ歸つて子供達の顏でも見ながら療養する方が好いだらう……さうしよう。」と云つて異れましてね――。
せつ子　（話を外らすやうに）成程ね。それは又此方にも色々な事情がおありでせう。何しろあの病氣は金を食ふ病氣とさへ申しますからね。然し病人はご存じのやうにあと幾らもない人のことですから、今更もしか費用に事を缺いて病人を見殺しにしたなどゝ云はれてはまあ私達にしてもあとではたの親戚などに顏向けの出來ないやうなことになつては申し譯ありませんからね。
けい子　（少し急き込んで）まあそんなことを！　私にして見ればこれでも私の力にあり餘ることをやつて來た、出來ないことまでも無理にやつて來たと自分は思つてゐるのでございます。考へてもご覽下さいまし、私達の内輪で既にもう一年間といふ長い病院生活を支へて來たんでございますもの。それはその間贅澤こそ何も出來ませんでしたけれど……。
せつ子　いえ、それはね、病人のことですから色々無理も申しませうさ。だが、それは此方も辛抱しなければね、唯私達はね、（つけたやうな愛想笑ひをしながら）病人の氣に逆らふやうなことを云つて貰つたりしたんでは病氣に障りはしないかと心配しましてね。それでなくつてもこの頃のあの機嫌の惡さなんですから、それを考へて

下さらなくつちや。實はそれでお願ひしたわけなんですからね。
はま子　（初めて口を出し取り做す風に）本當におけいさん。萬事どうぞよろしくね。それは色色あなたのお心持もお察しします。又この人も少し云ひ過ぎたか知れませんが、まあそれは何もかも病人を思ふ心からでね。私達も親身の者として本當に心配してゐるんですから。それにもう二三日で國の方へ歸つて了ふとすれば又後々のこともありましてね、つい――。
けい子　（顏をあげず、感情を殺しつゝ、もう切り上げたいと云ふ風に）えゝえゝ、それはもうようく分つて居ります。ですけれどそのことは何うぞご心配なく。私達にしましてもあなた――（淋しく冷たい笑ひ顏を上げて）夫のことでございますもの。
せつ子　何うぞお願ひ致しますよ。（立ち上つて）さあ私達も少し二階で休ませて貰ひませう。何だか疲れが出て來たやうだから……。
はま子　えゝ……ではおけいさん。
（立ち上つて二人とも二階の段梯子の方へ行き、上つて去る。けい子一人沈んで俯首れたまゝ坐つてゐる。庭の方には夕暮の色が段々蔽ひかゝつてくる。稍長き間。突然、右手より浩一つかつかと母の前に來て坐る。既に和服に着替へてゐる。）
浩一　お母さん。
（けい子一寸ふりむく。然し默つて答へない。）
浩一　（すつかり興奮した調子で）お母さん……僕惡かつたか知れませんが何もかも聞いてゐました。伯母樣たちにあんなにまで云はれて堪らないぢやありませんか。それと云ふのも――いや私はお母さんを非難しようと云ふのではありません、ね、斯うなつたら、何うか何もかも投げ出してゞもお父樣のためにして下さい。本當にお願ひします。
けい子　（靜に極めて靜に口を開く）一體何を何うしろと云ふのです。
浩一　（行き詰つて）それは……私には……よく分りませんけれど、お母さんの腹に聞いて下さい。そして幾らもすることが、あるやうに、私には、思へるのです。私には……。
けい子　いゝえ、私には分らない。私は必要なことだけは慥にしてゐるのだよ。そしてその他のこと……あのこの頃のお父樣が唯焦立つて時々我武者羅に仰しやること、それならば、出來ません。……私達はもう出來ない所へ來てゐるのだから。
浩一　然しお母さん。お母さんはご存じないかも知れませせ

んが、お父様のあの言葉を聞いてごらんなさい、伯母様たちも先刻云つてゐられましたが、それは酷いんですよ。「俺が何を造つて呉れ、何を買つて來いと云つたつて、一つだつて碌に聞いて呉れたことはない。一體俺が造つた金を俺が使ふのに、何の遠慮が要るもんか。」つて、又こんなことさへ仰しやるのです。「實にひどい奴だ、一體俺を行先がないと思つて、見殺しにするのか。」つて。一體こんな言葉を私達が何んな氣持で聞いてゐられると思はれるんです。實はそれを今日も勝二や美津子が病院で云はれたものだから、歸つて來て私に訴へるのです。……お母さんは何んな風にお考へなのか、私には分りませんが、餘り情ない話だと思ひます。何のためにそんなに費用を惜しまれて、あの病人の氣を焦立たせてあんなに苦しめてゐられるのかと思ふと、私は……私は全く口惜しいと思ふのです。(啜り泣く)

けい子　まあ浩一、お前も隨分なことを云ふぢやないか。……お前は伯母様たちの言葉は信じられても、私といふものはそんなに信じられないのですかね。

浩一　だつてお母さん、私は……(何か云ひかけてやめて再び俯首れて了ふ)

けい子　先刻お前さんは、聞いてたでせうが、伯母様たちに言つたやうに私達は今はもう何うにも斯うにもならない所へ陥ち込んで了つて居るのだよ。……實は今まで修業中のお前達に何も云ふではないと考へてゐましたが、それならば今丁度よい機會だから云つて了ひませう。私達は貯へといふ貯へ、それから一つの財産であつたこの家、それももうすつかり失くして了つてゐるのだよ。……元々世間からは何う見られてゐるか知らないが、お父様といふ人は、お金といふものに些とも執着のなかつた上、氣の強い方だから自分がこんなに早く病氣で倒れるなんて、まるで夢にも考へてはゐられず、さて今の様な場合になつて見ると何うすることも出來ないのです。——それにもう一年近くあゝして病院に這入つてらつしやるんだらう。それだけでも大抵のことぢやなかつたのです。それは滿更お前だつて察しのつかないことぢやないだらう……。

(浩一一寸默つて母の顏を見る。)

けい子　……それに私にして見ればお前達子供のことも考へなければならず……。

浩一　(急に遮る)いゝえ、お母さん。そこなんです。僕達のことなんか何うなつたつて構やしないぢやありませんか。……いゝえ、そりや心配して下さるのは有り難いと思ひます。だけど何うか打遣つといて下さい。——それだから云はゞ伯母様たちなんかもあんなことを云ふ様

になるんです。自分達後に殘るもの丶身の上許り考へて、死んでゆく人のことは構はないんだなんて、それが餘り不人情だと云ふのです。餘りに打算的だと云はせるんです。ね、何うか僕達のことは構はないで下さい。若しそれが差支るといふことなら僕達は明日からでも學校なんか止して了ひます。いゝえ、もう止して了ひます。そして何でも働かうぢやありませんか。

けい子　まあ、學校を止す? 今學校を止したつて何が出來ると云ふのです。そして何れ程のそれが足しになるといふのです。……いえお前の心持はよく分つてゐます。然し今の世の中は學校を出てさへ一人前になれない人の多い時節なんですからね。唯若い人の一徹から無暗に飛び出したつて、本當に何が出來るといふのでせう――。

浩一　然しそんなことが何です。そんなことは何にも問題ぢやないぢやありませんか。……大事なのはお父様のことです。僕達の身の上よりもお父様のお心持を察して上げて下さいといふのです。……お父様ももう自分で自分の先きのないことを時々沁々と考へるらしいんです……そして時をり「なあ浩一、愈々今度は俺も駄目らしい。だが、もう一遍よくなつて働けたらなあ。」つて僕の顔なんかを凝と眺めながら云はれるんです。そんな時見ると目に一杯涙を溜めて……あゝお父様は何んなに一日でも生きてゐたいと思つておいでなんでせう。――ね、お母さん、せめてもう癒らないものならば生きてゐる間だけは滿足に送らせて上げたいぢやありませんか。僕は家の様子が全體何んな程度にまでなつてゐるのか知りません。お母さんは何にも僕たちには云つて下さいませんものね。けれども、けれども僕達が學校に行つてることに不自由をしない所を見るとまだ餘裕がつけられるんでせう。だから僕達のことを打遣つて――ねお母さん、お母さんは何んなに見てゐられるか知りませんが、私にしたつて勝二にしたつて行先は長いんです。いくら躓いたつて、幾らでも起き上る力も機會もあらうと云ふものです。今の場合、僕達のことを考へるのはまるで餘計なことぢやありませんか。今の僕達の務めは唯、あのお父様をあんなに苦情多くなく平和に死なせて上げることだとはお思ひになりませんか。（衣物の袖で涙をそつと拭く）

けい子　（暫く面を伏せて、凝としてゐる。やがて涙を拭いて）有り難う。よく云つて呉れます。お前の云ふことも些とも無理はありますまい。……けれど私の云ふこともまあ聞いておくれ。私にしたつて何も自分達が生きてゐるからつて、唯あとの人間のことや又伯母さん達の云ふ様に唯經濟だけを考へてゐる人間でもありません。唯私の現在は先刻も云ふやうに何うにも出來ないんです。私

はお前のやうに全るで感情だけで、叉伯母樣達のやうに見榮や義理許りで考へてゐられるのを寧ろ羨ましく思ひます。私はいつだつて、全體のことを考へなければならないのです。家中皆のことを勘定に入れていかなければならないんです。……それはね、成程私は冷酷な人間だ、打算的な人間だと云はれても仕方はないかも知れない。だけれども、私にして見ればその一家の經濟といふことをいつでも眞先きにはつきりと考へて行かなければならないのです、此世の中ではそれで行かなければ行けないんだから。成程伯母樣たちは色んなことを仰しやる。然し一度私達の現在の內輪のことを云ひ出したつて少しも眞身になつて聞いても吳れなければ相談に乘つても吳れないぢやないか。……それに叉私が先刻、お前さん達の行先のことを考へなければならないと云つたのも何も自分の爲にぢやありません。それはつまりお父樣の大事な願ひだつたからです、希望だつたからです。云はなければ分らないが、お父樣の一生で恐らくお前たちの事位氣にかけてゐたことはなかつたでせう。いつも子供達だけは立派に自由に成長させてやりたい。それ許りを口癖の樣に云つておいでだつたのです。現にお父樣があの長い間の教授生活を止して世間の風評も構はず思ひ切つて收入の多い營利會社の方へとお這入りになつたのも、元はと云へば全くお前たちの爲でした。そして全く自分が散々修業時代に苦しんで思ふ樣に勉强も出來なかつたために、肝心の研究時代に身體も惡くなつて十分の働きが出來ないと云つて口惜しがられるにつけても、「あゝ子供達にはこの苦しさは昧はせたくない。」と泌々涙を流して仰しやつてゐられた。がさうして折角、お前達のことを思つて會社へ入つたのも束の間、何の餘裕も出來ない中に間もなくあゝして倒れてお了ひなすつたのです。……ですからお前達を自由に立派に成業さすといふことは全くお父樣の長い間の志であつたことは云ふまでもありません。恐らく今もこの世に殘して行かれる唯一つの心殘りに違ひないでせう。今まで、一年の病院生活の間にも幾度そのことを私にお話しになつたかも知れない。「俺のことはもう何うせ駄目だと思ふ。だから子供達のことだけは賴む……あれらだけは何うか……たのむ（思はず泣く）……」つて幾度も幾度も云はれたんだよ。——（靜に顏をあげて）ね。お前は先刻お父樣の心とお云ひだつたね。然し私の知つてゐるお父樣の心はそれです。それが本當のお父樣を少しも離れなかつた長い長い間のお心の中です。だから—— 私はお前のことも大切に考へないわけには行かないのです。

浩一　（極めて力弱く、唯沈默の長く續くのを恐れると云つ

た調子で）ですけれど、お母さん。お父様は——あんなに……今、いら〳〵してゐられるのが……。

けい子　成程ね、それは私だつて氣にかけないではない。……けれど、私には仕方がない。全く外に仕方がない。それに、私にしたつて出來るだけのことは少しも逆らはずにしてゐるつもりなんだからね。唯一氣なことは出來ない。出來ないんだからあきらめて貰はなければならないと思つてゐます。……（ぢつと物思ひに沈みながら）然し考へて行くと斯うしてぢつとしてゐてさへも、この儘ではいかないでせう。一つの退院を何うするといふ樣な問題、そんなことにいざこざ關はつて居る餘裕もないやうに切迫詰つた時の來るのも覺悟してゐなくてはならないのではないか知ら。ねえ、浩一。

浩一　（すつかり沈んだ調子になつて）お母さん。僕は何とお答へして好いのか分りません。唯、僕はお父様があんなではその爲に病勢を募らせやしないかと夫が心配なんです。それではお母さんの心も知らずに、却つて——。

けい子　私はあきらめて居ます。今の私にはみんな一緒に亡びて了ふか、自分一人を冷酷な非人情な人間としてはたを生かすか二つに一つの路よりないのですから。然し私は一緒に亡びられない、……何うしたつて亡びて了ふわけにはいかない……（漸次興奮して來る）あゝ私は何度思ふか知れない。死んで行く人がお父様でなく、私だつたら何んなに仕合せだか知れないと——。

浩一　（悲しげに）お母さん……。

（けい子浩一力なく頭を垂る。やゝ長き間。）

（突然玄關の戸慌しく人の走り入る音、續いて大きな聲で「松本さん、松本さんお電話です。」と叫ぶ。浩一反射的に立つて急ぎ足に玄關に入る。襖裏にて、）

隣家の下女の聲　御病人の容體が急に變りましたからすぐに來て下さいつて。看護婦さんからの電話です。

浩一の聲　アさうですか、何うも毎度有り難うございます。ハ、イヤぢや直ぐに……。

（この間にせつ子、はま子二階から、勝二、美津子上手の間より驚きと不安の面持にて慌しく現る。勝二は玄關の所までゆく。けい子はぢつと堪へる程緊張せる心持にて坐したる儘、美津子はその側に立つ。言終ると直ちに浩一室内に入り來る。玄關の閉まる音。）

浩一　病院からなんです。容體が急變したから直ぐ來て下さいつて。看護婦から知らせて寄越したんです——。

せつ子
はま子　（殆ど同時に）え、容體が急に變つたんですつて……まあ先刻まで些ともそんな樣子は見えなかつたがね。

美津子　本當にさうでしたわね。ねえ伯母さん、……あゝ

お母あさん何うしませう。

けい子　（つと立ち上つて）兎に角すぐ病院へ參らなければなりますまい。

はま子　あ、すぐに病院へ、病院へ……。

浩一　さうだ、多勢だし自動車を云ひませう。遠いからその方が好いでせう。（一寸氣勢ながら母親を見る）ねえお母さん。

けい子　（卽座に）さうね。その方が好いね。

浩一　おい勝二、お前そこまで駈けて行つて呉れないか。それあの旭自動車でね、何でも好いすぐ一臺來て呉れつて。

勝二　角のだね。あゝぢやすぐ。（玄關から飛び出す）

せつ子　まあ何うしたと云ふんだらう。だから私が云はないこつちやない。あゝ駄目だ、駄目だ、……だから云はないこつちやない。

はま子　あゝ何うしたといふんだかね。

（せつ子もはま子も慌て切つてうろうろして口走りながら、二階へ上る。けい子と浩一は一寸氣になるやうに、その方を見たがすぐ上手次の間の方へ行きかける。）

美津子　まあお母さん、大變だわね、大變だわね、（殆ど泣き聲で）まあ何うしませう。まあ本當にお父様は、何うしませう……。

（けい子はすぐ美津子の肩に手をかけ宥める樣にしつつ皆々上手に入る。舞臺暫く人なし。暫くして、再びせつ子、はま子、前の外出着のコートと羽織姿にてとめをかけながら二階から下りて來て、玄關の方へ行きかける。この時上手から黑つぽいコートを着込んだけい子、少し遲れて浩一も袴をつけて出づ。殆ど玄關の間に入りかけんとする二人を見て、）

けい子　あら、あの一寸お待ち下さいまし。唯今あの浩一が自動車を云ひましたからもうすぐ參るでございませうから。

せつ子　自動車？……（反抗的な調子を露骨に現しながら）私達は電車で澤山ですよ。

けい子　でもこゝから病院までは隨分大變ですもの。もうあすこは郊外に近いんですから。

はま子　でもまあ……電車の方が勝手ですから——。

けい子　だつてこんな時にあなた。時間が——。

せつ子　（一寸顧みて）でもね。自動車なんか贅澤ですわ。

（贅澤といふ言葉を强めていふ）

浩一　（不快げな少し急き込んだ調子で）ね、伯母さん。つまらない事に角を立てゝたつて仕方がないぢやありませんか。ね、惡いことは云ひません、自動車の方になさ

いまし、急場なんですから。

せつ子　（一寸迷ひながら何意地强く）いや私達はやつぱし電車にしませう。（稍捨白の如く）いえ、急場つてお云ひだけれど、もつともつと前の急場に自動車でも贅澤でも何でもして下さるとね。だから私が云はないこつちやない。（はま子を見て）ね、私達は電車で――。

はま子　えゝ、さうしませう。まさか、それで何うなどゝ云ふ譯ぢやありますまい。

けい子　（もう一度懇願的な調子で）ですけれど、ね、あなた……あなた……。

（けい子は追つて行つたが、二人が依怙地に玄關の間に入つて了つたので、その手前で留る。）

（やがて玄關の戸の忙しげに開く音。カタカタと出て行くらしい氣勢。浩一は、チヨッツト舌打して不快らしく無言の儘、緣側の方に行き、ぼんやり庭を見る。けい子、ふり返りて、何か云ひかけたるもやめ、腰窓の障子をあけ外を見る樣子、暫く無言。夕暮の色はもう餘程暗い。浩一暫くして、母の方を見て靜に聲をかける。）

浩一　ねえ、お母さん……。

（けい子靜かに振り返る。言なし。）

浩一　お母さんは今度のお父さんの容體を何う思ひます？

え。

けい子　何うつて、私は――（顏を背け外の方を見る）

浩一　（恐るゝ如く）或はもう今度こそこれつきり駄目なんぢやないでせうか。

（けい子沈默。尙後ろ向きになりて、外を凝と見つめてゐる樣子。稍長き重苦しき沈默。と、俄にけい子、感情激發せる如く咄嗟に手帛にて顏を蔽ひ、聲を立てて泣き出す。浩一驚いて側にかけ寄る。）

浩一　お母さん、お母さん、何うしたといふんです。

（けい子泣きやまず。窓側に身を屈めつゝ、肩を慄はしてゐる。浩一途方にくれて立つ。稍暫くして、けい子、身を起し、後向きのまゝ涙に濡んだ聲で切々に話す。）

けい子　ね浩一……私は……私はきつと、お父樣を苦しめてゐたに違ひないかも知れないね……あゝ本當にひどく……若しか今度お前の云つたやうにでも、ひよつとしてなつたら、……私は……あゝ私は……（感情昂ぶつた樣に、手巾で顏をかくす。暫くして又顏をはなし）ね。浩一若しさうだつたらお前は私を、嘸怨むだらうね……。

（浩一默然として俯首れ、考へ込みしまゝ答へない。）

けい子　だけど……だけど云つておくれ。私は本當に間違つてゐたんだらうか。

浩一　（初めて重く口を開く）お母さん、私にはそれにお答へする資格はありません。唯……唯私は、今お母さんを決して怨みなどすることは出來ないと申し上げることが出來るだけです。

けい子　（つと立ち上つて、初めて、眞面に、浩一の顏を見る。そして何とも云へぬ複雜な表情で、發作的に突立つてゐる浩一の側に寄り、肩にその手をかける）あゝ浩一……（顏を伏せて咽び泣く）

（この時自動車の喇叭の音、同時に家内の電燈ぱつとつく。暫くして玄關の間より勝二飛び込んでくる。）

勝二　兄さん、自動車が來ましたよ、さ早く。

浩一　（母の身體をいたはりて離しながら）さ、お母さん、自動車が來たさうです。參りませう。

（浩一は、壁から帽子をとり、入つて來た當座の光景に怪訝な顏付をしてゐる勝二にも、彼の帽子をとつて差出し、やがて、三人、左手へ去る。殆ど之と入れ替りに、右手次の間より帶締を結びながら、美津子あたふたと出て來る。）

美津子　あら、お母さん、待つて頂戴。待つて頂戴。

（下手へ去る。玄關の表戸をガタガタ云はしてしめる音。――幕下り切つた時分に再び稍遠く自動車の喇叭が聞える。）

青年と强盗（一幕）

人物

青年

强盗

奥深き山中。月夜。秋。

樹かげに、旅裝をした一人の青年が、凝と物思ひに耽つてゐる。瘦せて、憂鬱な表情。傍らにはリユツクサツクが投げ出されてゐる。

暫くして、青年は、何かを決意したもののやうに、すつくと立ち上る。ズボンの後ろのかくしからピストルを取り出す。やがて、それを自分のこめかみの所へ擬する。緊張せる沈默。慄へる右手――。

が、また不意にその手を落す。深い溜息。

間。

と、再び青年はピストルを頭へ持つて行かうとする。が、何故か逡巡して決しない。その中またガクリと手を落して了ふ。

青年　あゝ、やつぱり駄目だ。俺は死ねない。何うしても死ぬ勇氣が出ない。意氣地なし奴！弱蟲奴！……あゝ。

（その儘、暫くそこに立ち盡す。）

（やがてまた悲しげな獨語。）

青年　たゞ指一本、ぐいと引きさへすればいゝものを、それが出來ない。あゝ、哀れな奴！　生きて行く力もない上に、死ぬる力もないとは！……汽車を見れば怖氣がつき、水に飛び込めば死に切れず……あゝ何うすればいゝといふのだ。

（間　考へ込む。）

青年　（顏を上げて）だが、俺のやうな人間は、やつぱり死ぬより外に道はない。こんな意氣地なしで、何一つ仕事をやり遂げようといふ元氣もなければ、何んな人間と爭つたつて、すぐ氣組で負けて了ふ弱蟲の、俺のやうな男が、何うしてこの先き滿足に生きて行けるものか――死だ。何うしても死だ。死より外には道はない。（立ち上る。焦々した風にそこいらを歩き出す）……あゝあせめて何か天災でも起つてくれないものかなあ。地震だつて、崖崩れだつて何だつていゝ。一思ひに俺を殺してくれさへすれば、俺は喜んで死ぬだらう。……だが、駄目だ。思ふ時には、何一つ起りやあしない。死に場所を探して、こんな山ン中までわざわざ來て、野宿までしてゐ

るのに、崖崩れ所か、狼一疋出て來やしないぢやないか……。

（青年は、がつかりしたやうに、焚火の所へ來て、再び頭を抱へ込んで了ふ。）

（と、一方の樹の茂みの中から、一人の物騷な容子の男があらはれてくる。髭むぢやらな顏に汚い頰被りをして、身なりは古びた法被姿に、ボロ外套のやうなものをきて、ジロリジロリと、青年の樣子をうかゞひながら寄つて行く。）

青年　（ふと顏を上げて）あゝ駄目だ、俺はやつぱり自分で自分をやつつけるより——。

（と立ち上らうとする途端、ふと男と顏を見合はせる。青年流石に驚く。男、嘲笑を浮べつゝ口を切る。）

男　おい、若いの。手前、何か食物を持つてるだらう。そいつを出さねえか。

（青年無言。）

男　やい、食物を出せつてんだ。何だつて返事をしねえ。俺が云つてるのが、聞えねえか。

（青年同じく無言。）

男　やいやい、小僧ッ子。まだ分らねえのか。手前の食物を出せつてんだ。愚圖愚圖してやがるとひでえぞ。

（青年なほ無言。）

男　やい、早くしねえか。それとも、手前生命が、惜しくねえとでもいふのか。

（青年ニヤリと笑ふ。）

男　チョツ、笑つてやがる。一體貴樣、食物を出さねえ氣か。（詰めよる）

青年　（煩ささうにリユツクサツクを指さし）食物ならそんなかに入つてゐます。

男　へ、いやにおちついた野郎だな。立ち上りもしねえ。腰でもぬかしてやがるのか。

（云ひつゝ男、リユツクサツクの所へ行き、取り上げて開けようとしたが勝手が違ふらしくまごつく。）

男　じれつてえな。やい、貴樣これを開けろ。あけてうまい物をすつかり出せ。大體、貴樣がそんな所で、ぼんやりしてるつて法があるか。

（男リユツクサツクを目の前につき出す。青年は何か心に待ちうけてゐるやうにわざと動かない。）

男　やい開けろつてんだ。早く開けねえか。云ふ通りにしねえと、生命が危いつて云つてるんだぞ。

青年　（唯向ふを向いてゐる）

男　チョツ、まだ默つてやがる。——やい此方を向かねえか。

青年　（しぶ〳〵其方を向く）

男　ふん、生白いひよろひよろの面をしやがつて、それで俺の云ふことを聞かねえつてゐやがるのか。馬鹿野郎。やい、見損ふな、この俺はな、そんなお優しい人間ぢやねえんだぞ。ちよいと手を出しやあ、貴樣のやうな青二才の一人や二人は一息にばらして見せる人間樣だぞ。さうだ、いつそ手前にきかしてやらう。此の間からこの界隈を荒らして廻つてゐる、噂の高い人殺しの强盗の話を知つてるだらう。俺あその强盗樣だ。（嘲笑を浮かべ）へ、何うだ、少しは驚いたか。ざまあ見やあがれ。

（青年は別に驚かない。じろりと見ただけで俯いて了ひ、一心に何かを待ちうけてゐる樣子である。）

男　（少し氣ぬけの態にて）可笑しな野郎だな。……よし、手前が俺を甘く見てるといふんなら、此方にも覺悟がある。がまあ、今はまづ食物だ。俺は少し腹が減つてるんだ。何しろ二日前から、この山ン中に入り込んぢまつてるんだからなあ。さ、とに角これを開けろ、おい開けろつてんだ　これをよ。

（と男なほ近づいて、背嚢をつきつけて打ちふる拍子に、ずるりとその口があく。）

青年　（顔を上げ）おや、もう開いてるぢやありませんか。

男　なに開いてる？　（見て苦々しげに）ふん忌々しい野郎だ。覺えてろ。……（袋の中をかきまはしつゝ）何だ碌なものは這入つてやしねえぢやねえか。――おや、何だパンか。けちなもんだな。やい、これに何かつけて食ふものがあるだらう。砂糖か何か。

青年　バターがあります。厚い紙にくるんだ罐の中に。

男　何だ、バターだ。バターつて何だ。そんなもの聞いてるんぢやねえ。砂糖があるかつてんだ。

青年　砂糖なら、やつぱり少し大形の罐にはひつてゐます。だが、角砂糖ですよ。

男　よし、どの罐だ。あ、これか。や、これやあ、固めてある奴ぢやねえか。こんなものがつけて食はれるか。馬鹿野郎。貴樣、いよ〳〵俺をなめてやがるな。やい、氣をつけろ。一體こゝを何處だと思つてやがるんだ。

青年　山ン中です。

男　馬鹿。當り前よ。――ぢやあ、俺は何だ。

青年　先刻、人殺しの强盗だと云つたぢやありませんか。

男　チョッ。こいつは一體何だらう。よくよくの馬鹿か、途方もねえ生命知らずだなあ。――ようし、いよ〳〵今に思ひ知らせてやるから。な、この寒夜に、身ぐるみはがれてよ、事によりや序に、生命も貰つてやるんだ。へツ、その時になつてヂタバタするな。

青年　………。

男　ふん、これだけ云はれても、あやまる氣一つねえんだ

な。

青年　だつて、何をあやまるんです。僕は君のくれつてものは上げてるし――。

男　何を。まだ口答へしてやがる。なに、あやまらなけやあ、あやまらないでいゝ。その代りだ、――。

青年　しかし、僕があやまつたら、君は僕を殺さないんでせう。

男　チヨツ、貴様何處までも俺をからかふ氣か。生意氣なことをいふとかうだぞ。（パンを持つ手をふり上げる）

青年　（一寸見上げるだけである）

男　（少し呆れて）妙な奴だな。――よし、ぢやいよ〳〵これだ。（懐から匕首を取り出し）さあこれだ。おい、こゝぢやあ何んなに喚いたつて、だあれも來やあしねえんだぞ。うむ？

（側によつて男は匕首を青年の目の前にぐつとつき出す。青年は、一寸それに目をやると、默つてくるりと横を向く。が、一旦覺悟はしてゐても、矢張り或る恐怖に襲はれるものゝやうに、彼の全體の表情は極めて固くなつてゐる。が強盗はこれを感じない。）

男　をかしいな。まるで感じといふものがねえ。……（思はず青年を見つめる。が、やがて一人で頷く）いや感心だ。それだけ覺悟が据つてゐりやあ、俺にも考へがあるといふものだ。さ、若造、此方を向け。手前に少し聞かしてやることがある。（と彼は頬被りをとり獰猛な面構へをぬつと出し、そこに腰を下ろして、匕首を弄びながら續ける）なあ、お前がさう落ちついてやがるのは全くいゝ度胸だ。それもいゝだらう。何うで遲かれ早かれ、手前の生命は貰ふんだからなあ。何故だと言つて見ねえ、うむ？　實はな、俺ももう今こゝへ追ひつめられてゐる身體なんだ。高飛し損ねたのが不仕合せ、現にこの山の下の警察の奴らも、うんと張り込んで來てやがるんだからなあ。何うせまた青年團か、村の奴等の手をかりて、段々この山を取まいて狩り出さうと待ち構へてゐるんだ。だからよ、貴様もこゝで俺に出遭つたのが運のつきさ。俺の顔を見たからにや生かしちや置けねえ身體だ。俺の身になりやあ、何うせ二人殺さうが三人殺さうが同じだからなあ。は、は、は、何うだ、少しは驚いたか。――やい〳〵、いつの間にかまた其方へ向いてしまやがる。此方を向けつてんだ。此方を。貴樣くたばるまで、何うしても俺のいふことを聞かねえつてのか。

（青年此方を向く。そして相手の匕首を弄ぶのを暫く見てゐると、急にビクツとしたやうに、すつと立ち上る。）

男　（快げに初めて笑ひ）はゝ、急に怖氣つきやあがつた

な。ざまあ見やがれ。

青年　（急き込んで）いゝえ、殺すんなら早く殺して下さい。餘り焦らせると、僕はまた怖くなりさうです。そして、死ぬにも死ねなくなるかも知れません。ね、いつそ早くして下さい。お願ひです、さ、早く、早く――。

（後ろ向きになつて迫る。）

（間。）

青年　（ふり返り）何うしたんです。何故早くやつてくれないんです。――あ、さうだ。（彼は急に思ひ出したやうに慌てゝ、再びポケツトより短銃をとり出し、強盗の前に突き出す）それぢやこの方がいゝ。これでやつて下さい。さ、これで――。

（男きらりと光るピストルを見て、吃驚して飛び退り身構へる。）

男　や、そりやあ何だ。……ふうむ。ぢやあ手前はやつぱり彼奴達の仲間だつたんだな。糞落着きに落着いてると思つたら、そんなものを持ちやがつて。くそツ、俺だつて一ぱしの悪黨だ。手前のやうな青二才にさう容易くは捕まらねえぞ。さ、來るんなら來い。さあ來い。……さあ來い。……（云ひながら虚勢を張りつゝも身をかばふ樹立を探す）

青年　冗談ぢやない。僕が君を捕まへるなんて。――君が餘り文句ばかり云つてゐて、仲々實行しさうにないから、いつそ、これを貸さうと云ふまでだ。

（男暫くけゞんな顔で見る。がまた急にからからと笑ひ。）

男　はゝゝ、貴様は餘ッ程食へねえ奴だな。そんなことで、俺を油斷させようと思つても、誰がそんなペテンにかゝるものか。

青年　をかしなことをいふ人だね、君は、さうぢやないんだ、僕は全く君の手で殺されたいんだ。――いや、君はまだ僕を疑ぐつてるんだね。ぢや斯うしよう。そらこのピストルをそこへ抛つちやふよ。いゝかい……。

（ピストルを抛ると、丁度二人の間へおちる。）

青年　そら、抛つたぢやないか。君自身で拾つてくれ給へ。

男　（青年の様子を窺ひながら）へ、拾へ？　チエッ止さねえか。俺にやあ、ちやんと手前の腹は分つてるんだ。さううまくはいかねえよ。え、おい、俺がそこへ飛んで行く。拾はうと思つて俯く。その隙に飛びかゝるか刃物三昧で行かうつて云やがるんだらう。第一、そのピストルを拾つて見たら、彈丸がなかつたつて奴あ、よくある奴だ。そんな活動仕込の手なんぞにやすく／＼と、かゝるもんけえ。

青年　（呆れたやうに）恐しく疑ぐり深い人だね。僕は先

刻から云つてるんぢやないか。さうぢやないんだつたら。――彈丸はちやんとはひつてゐる。無論、君がそれを拾ひに行つたつて何うもしやしない。第一、僕のやうな弱蟲にそんな力があるものか。僕は、自分でさへ死ねない意氣地なしの男ぢやないか……。

男　おい／＼巫山戲けるのも大抵にしねえか。死にたいだの。殺してくれのつて、誰がそんなことを眞にうけるもんけえ。そんなことで、俺の氣を挫かうたつて、そりや駄目だよ、駄目だ駄目だ。俺あ知つてるんだ。そんなピストル決してとらねえよ。

青年　困つちやふなあ。――（考へて）ぢや仕方がない。もう一遍拾つて、君に渡さう。

男　（慌てゝ）やい／＼、待て待て、何のかの云やがつて、手前それを拾つたら承知しねえぞ。側へでもよつて見ろ、さうすれやあ、俺の方が飛びついて、一思ひにこのドスで咽喉首をさしちやうからなあ。やい、氣をつけろ、氣をつけろ、やい止せつて云つてるんだぞ、やい、やい、やいつたら。

（相手のこの言葉の中に、青年はさつさと行つて、ピストルを拾つて了ふ。しかし男が飛びこんで行きさうな氣勢を見せても身構へようともしない。男、思はずひるみ、相手の正體を捕捉するに苦しんで茫然たる有樣。）

青年　（意に介せず靜に進みピストルを突き出しながら）さ、これを君にやらう。いゝか。

男　（またも慌てゝ）待つた、待つた。待つてくれ、打つ放すのだけは止してくれ。――あゝ（溜息しながら）俺あ、とてもお前さんにや敵はねえ。俺あ參つた。さ、この通り刃物なんぞ捨てちやふ。俺あこんな變な目に逢ふのは始めてだ。全くかう膽が据つてちや敵はねえ。――なあ俺も男だ。何のかの云はねえ。さ、お前さんにまかす、縛るとも何うともしてくんねえ。

（男、意氣地なく出て來て、しよんぼり立つ。青年かまはず、無理にピストルを渡さうとする。男しりごみする。）

青年　困るね。僕はそんな君を縛つたりする人間ぢやないんだつたら。同じことを幾度云はせるんだ。さ、何にも云はずに、これを受けとつて、それで僕を殺してくれ、殺しさへすれやいゝんだ。

男　え、殺す？――本當に。

青年　冗いね、君は。――先刻はあんなに威張つて約束したぢやないか。いつでも一思ひにばらしてやるつて。さあ、そんな意氣地のない恰好をしないで、始めのやうに元氣よく、「何だ生意氣だ、かうだぞ。」と云つて、（ド

ンと一發放して見ろ。男吃驚して飛び退く。）からうして
やつてくれゝばいゝんだ。愚圖愚圖してゐて、また氣が
かはると困るから。さ、早く、早く。
（青年無理矢理に男に拳銃をもたせる。男しげ〳〵と
相手を見る。）
男　本當に妙な人だ。――何故そんなに死にたいんだか
――。
青年　そんなことは何うだつていゝ。さ、早く一思ひにや
つてくれ。
男　駄目ですよ。そんなこと――。
青年　何故。――何うしてだ。
男　あつしやあ、もう何だか氣がぬけちやつた。
青年　（がつかりして）駄目だなあ。何て意氣地なしだ、
さつきまで、あんな大きなことを云つてゐた癖に。二人
も三人も殺した俺だの、顔を見られたからにや、やつつ
けちまふだのつて。――その言葉が本當なら、何でもな
いぢやないか。
男　だつて駄目ですつたら。そりやあ、先刻は全く殺すつ
もりもあつたんだが……。
青年　ぢや尚更君――。
男　所がもうそれがいけないんだ。全くお前さんのやうな
氣の強い男にかゝつちやあ……。

青年　なに？　氣が強い、僕が氣が強い。（突然高く笑ひ
出す）冗談ぢやない。はゝゝ。
（男、その憚る所のない笑ひ聲に、またピクッとした
やうに引き退る。）
男　それ、それがさうぢやありませんか。この山奥で、こ
の眞夜中、あつしのやうな人間に脅されてゐながら、終
ひにやあ、そんな大きな聲で笑つてられるなんてよく
よく膽の据つた氣の強い男でなくつて何です。あつしな
んか、とてももう敵やしないことが分つたんだ。
青年　いゝや、君には分らないんだよ。僕が何んなに意氣
地なしで、何んなに弱い人間だかといふことが。
男　えゝえ、分りませんとも。馬鹿々々しい。――（が突
然調子をかへて寧ろしんみりと）だが何うして、おまへ
さんそんなに死にたがるんですい。え、そんな立派な生
命がありながらさ。しかも、そんなに一本氣で腹が据つ
てゐて、恐らくこれから氣組一つで何でも出來ようとい
ふ若さでゐながらさ。……全く、あつしやに分りません
ねえ。
（青年はそれには答へない。ぼんやり佇んだまゝ、ま
た何か考へてゐる。强盜ふとあたりを見て、パンの轉
がつてるのを見て獨りごつ。）
男　あゝあ、先刻あんなに腹がすいてゐたのに、もう何に

も食ひたくなくなつちやつた。チョッ、何て變な晩だらうなあ。

（暫く間。）

（青年、ふとまた夢から覺めたやうにつかつかと男の側に來り熱心に說きつける。）

青年　ねえ君。本當にこれは僕の唯一つの願ひだ。最後のお願ひだ。何うかやつぱし僕を殺してくれ。ねえ賴むから。

男　（呆れて）まだか、冗談ぢやねえ。そんなこたあもう出來ねえつて、幾度云つてるかも知れねえぢやありませんか。

青年　だつて、僕は何うしても生きてゐたくない。いや、到底その力がないんだ。

男　そんなこたあ、あつしの知つたことぢやねえ。

青年　そんなことを云はないで、賴む。ねえ、君は全く二度も人を殺した男ぢやないか。

男　いくら殺したつてさ。人間さう無暗と人を殺せるもんぢやありませんよ。

青年　だつてさ――。

男　（少し煩さがつて）何がだつてなものか。しかも結局はそれがあつしの罪になるんだからねえ。何うせ死んぢやつたら、お前さんだつて賴んで殺されたんだなんて、證人に立つてくれるものぢやなし、――馬鹿々々しい。誰がそんなことを。

青年　しかし、こんな山ン中で誰がやつたつて分りやしないぢやないか。

男　（つひに憤然として）止さねえか。煩い奴だなあ。それほど死にたけれやあ、自分で始末をしたがいゝぢやねえか。俺あ、そんな死神のついたやうな人間にかゝはるなあ、いやだ。緣起でもねえ。

（暫く間。）

青年　あゝ、何うしても駄目なのか。このまたとない機會にさへ駄目なのか。……そしてやつぱし、俺は生きて行かなくてはならないのか。又してもあの世間の腹黑い强慾な奴共、汚い醜い社會の中に、踏みつけられて、虐げられて……あゝ堪らない、堪らない、考へただけでも堪らない……。

（男氣味惡げに側を離れる。）

男　變だなあ、氣狂ひぢやないかしら。おう寒い。何だかをかしな晩だ。こりやあ、俺にも死神でものり移つて來るんぢやねえかしら。――ぶるつ、桑原、桑原……。

（男益々元氣を失つて遠ざかる、この時、月雲に蔽はれあたり暗くなる。弱くなつた焚火のみ仄明るい。青年、暫く沈默の後、また俄に狂氣のやうな聲をふり絞

つて、暗闇の中に叫ぶ。）

青年　あゝあ、駄目だ、駄目だ。何うしても生きてゐるのは嫌だ。俺は死ぬんだ。――死ぬんだ。死にたいんだ。

（その中にふとまた强盗の姿を見て、忽ちそれに飛びかゝる）さ、君頼むから俺を殺してくれ。何うしても殺してくれ。さ、殺すんだ。殺すんだ。頼む、頼む。

（强盗驚いて飛び退るを、なほも摑みかゝつて、狂氣の如く叫ぶ。）

青年　さ、殺すんだ。殺さなきや、俺が貴様を殺しちまふぞ、さ殺すか、殺すか。――やい俺を殺すか。

男　あゝ死神だ。死神だ。放してくれ、放してくれ。

（强盗は今は唯逃げむとのみ氣を焦り、もみ合ひて後遂に青年をふり放し、思ひ切り突放す。青年倒れる。）

男　あゝ助けてくれ、助けてくれ。

（男叫びつゝ逃げ去る。）

（やがてまた靜に月光照り出す。）

（暫くして、青年ぼんやり起き上る。すつくと立ち上つてあたりを見る。やがて、しつかりした聲で獨語する。）

青年　不思議だなあ。俺はゐる。俺はやつぱり生きてゐる。――だがあの强盗は何うしたんだ。先刻あんなに恐しい聲をあげてゐたが……。まさか、彼奴がこの俺を恐れて逃げて行つたのでもあるまいに。（見廻す）が、やつぱし逃げて行つたのかな。（ふと考へ込む）それとも――俺は本當に弱いんぢやないんだらうか。……あの恐しい人殺しの男よりも强かつたんだらうか……。

（青年はきよとんとして、首を傾げて佇んでゐる。）

―― 幕 ――

次男（一幕）

人物

樫村辰雄　長男
同　靜雄　次男
同　秀子　妹
同　まさ子　母
同　夏子　辰雄の妻
同　新子　靜雄の妻
下男
女中

舞臺、樫村家の離座敷、下手は庭。離座敷は二間つゞきで廻り緣、その一方の奥に出入口がある。部屋は現在秀子の居間になつてゐるもので、一方の小間にある、机、本箱その他の一寸した裝飾などに女學生らしい趣味が表れてゐる。

下手の庭は可なり廣やかな庭の一部に當つて居り、そこには青々とした立木二三本、その下に鉢木植なども置かれてゐる。時は若葉時、午後の明るい日光が庭から緣側の方へ一杯に射し込んでゐる。

なほ、上手に木戸があつて、そこから裏庭廻りに此方に來られるやうにもなつてゐる。

幕あくと庭の方にもう老人である下男が蹲まつて草掃りか何かしてゐる、座敷の方には誰もゐないが、秀子の友達でも來てゐると見えて座蒲團などが二三枚散らかつてゐる。暫くすると座敷への出入口の襖があいて、洋服姿の靜雄、帽子を手にしたまゝつか〳〵入つて來る。年の頃二十五六歳、身裝は、物はさう惡くはないが可なり着崩したものを着てゐる。顏立は上品、然し何處か頽廢的なやつれが見える。少し酒氣を帶びてゐるらしい。然るに態度は亂れてゐない彼は緣側から部屋の中へ入つて、暫く見なかつた家の中を見るといふ氣持で、一わたり一寸懷しげに見廻し、又秀子の机の上の置物をとり上げて見たりしながら、ぼんやりとそこに突立つてゐる。

女中現れて、一寸中を見込む。

女中　おや、此方でいらつしやいましたか。
靜雄　何だ。
女中　いえ、あの——大奥樣は唯今、お客樣で客間の方にいらつしやるんですが。

靜雄　あゝさうらしかつたから此方へ來たんだ。――秀子は？

女中　お孃樣もお友達が見えまして、――おや此方にいらつしやらないんですと、お庭先きの方にいらつしやるんでございませう。何でも二三方、おいでになつてるんでございます。

靜雄　さうか。――だが、僕の來たことはお母樣に話したのかい。

女中　はい。

靜雄　すぐ來さうかい。

女中　はい。お客樣には若奧樣もご一緒に會つておいでなんですから、大奧樣は間もなくお出でになられませうと存じますが。

靜雄　……さうか。ぢや、いゝ。――だが、こゝにゐてもいゝのかな。

女中　さあ。――

靜雄　いゝいゝ。秀子が來たらすぐわかるから。

（女中去る。下男この會話の中に靜雄に氣附き近づく。）

下男　おや、靜雄樣ではございませんか。

靜雄　あゝ爺やか。

下男　隨分お久しうございますね。

靜雄　うむ。――

下男　何うしてお見えにならないんでございます。……大奧樣も時々心配していらつしやいますよ。

靜雄　………。

（間。）

下男　ですが、あなた樣は――何だかお瘦せなすつたやうぢやございませんか。

靜雄　さうかねえ、――さうかも知れないよ。（間）

下男　全くでございますよ。以前のやうに元氣がおありにならない。――何處かお惡いのではございませんか。

靜雄　うゝむ、なあに惡いつてこともないさ。――それよりお前はいつも達者でいゝね。

下男　えゝ、手前は全くお蔭樣で……。

靜雄　あゝ結構だよ。（庭の方を見て）相變らず庭の掃除か。大變だらう。

下男　いゝえ何う致しまして。それに時候がすつかりよくなりましたからね、手前共には全くこの方が氣保養でございますよ。――そしてもうこの頃では何かにつけて樂にさして頂いて居りますから、皆樣、手前が年を老つたからと仰しやいましてね、全く有り難いことでございますよ。

靜雄　さうかい。それは尙更結構だ。

（間。）

下男　（一寸顏色を窺ひながら）ね、靜雄樣、あなた何うしてもお兄樣とお仲直りなさらないおつもりですか。

靜雄　………………。

下男　いつかは、ひどく云ひ爭ひをなすつたやうでございますが、……それでもやつぱり何かにつけて、お兄樣はあなたのことをお氣になすつていらつしやいますよ。――それにあれつきり、こゝをお出ましになつたりしたものですから、大奧樣なんぞは――

靜雄　爺や、その話は止めようよ。そりやあお互にいろんなことがあるんだからね。

下男　でも手前なんぞにはこんなに皆樣、いゝ方ばかりお集りのお家にいらしつて、何御不自由のない身でありながら――別してあなた、大旦那樣がおなくなりになつてからは、もうご兄弟衆ばかりがお互にお力にならなくては――つまり大奧樣もそこをご心配になつていらつしやるんですからね。

靜雄　分つてるよ、分つてるよ。でも今の俺には仕樣のないことさ。いや、お前の心配してくれるのは有り難いがね、まあお前のいふやうなわけにばかりも行かないのさ。

下男　さうでございますかね。――そりや手前なんぞの申し上げるのでは何でございますが……

靜雄　（急に不機嫌になつて）爺や、俺は昔からしちくどいことは嫌ひなんだから。……

下男　へえ、へえ、いえ何うも餘計なことを申し上げましてすみません。――ではまあごゆつくり。へえ、へえ、へえ。

（下男、御辭儀をして上手木戸より去る。突然下手奧に快活な若い女達らしい笑ひ聲が聞える。が、やがて急ぎ足で出て來たのは妹の秀子だけである。彼女は靜雄を認めて稍驚く。）

秀子　あら、靜雄兄さん。

靜雄　おゝ、秀子か。

秀子　兄さん。まあ、いついらしつたの。

靜雄　うゝむ、つい先刻。

秀子　そして、ずつと私の部屋にいらしつたの。

靜雄　今、お母さん達お客樣だし、一寸ね。――（微笑しながら）それに俺の昔の部屋が見たかつたんだよ。

秀子　でも、それぢや、あたしのものなんぞ見てみたんぢやない？　いやだわ。

靜雄　そんなことは、しないさ。

秀子　分らないわ。兄さんは意地が惡いんだもの。――ぢや何よ、今お友達が來るんだからお母樣の方へ行つてらつしやいよ。

靜雄　さうか。ぢやあまあ。（行きかける）

秀子　あら、兄さんの靴下。大きな穴があいてるわ。いやな兄さんね。――誰もつくろつて與れる人ないの。

（と、行きかけた靜雄、急に振り返り秀子と顔を見合はす。その眼には咄嗟だが怒りと詰問の色がありくとある。秀子意外の面持でたぢろぐ。間。と出入口の襖あいて母親まさ子現れる。人柄な普通の老母である。秀子それを機會に兄の眼を避けて。）

秀子　あゝお母さん。――ぢや靜雄兄さんいゝわ。私達やつぱしお庭先の方に遊んでることにするから。お母さんこゝでお話なすつてもいゝのよ。（靜雄の顔を見ないやうにして引き返して行く）

靜雄　あいつまでが、さうだ。

まさ子　靜雄、何を云つてるの。

靜雄　（默つて母の顔を見、急に又目を外らす）

（まさ子、その頭の上からぢつと顔色身裝を見渡し一種の表情。間。）

まさ子　秀子が來ないなら、まあ其方へ入つてお坐り。

（靜雄無言でその通りする。まさ子その側に坐る。）

まさ子　お前、變りはないのかい。……

靜雄　えゝ。別に……

まさ子　でもよく來たね。――然し何處か。惡いんぢやないの。顔色もよくないやうだが――

靜雄　えゝ、いゝえ。……

まさ子　靜雄、お前あの時のことをまだ氣にしてゐるんだね。なあに、そんなことは構やあしないよ。お前達兄弟ぢやないか。それに兄さんだつて、何もいつまでもあんなことを腹に持つてゐることもなし、私だつてお前、お前があれつきり家へ來なくなつたのでは却つて何んなに心配してたかしれやしないんだよ。ね、だからそんなことを氣にしないで矢張り家へおいでよ。さうすりやその中に、何でもなく兄さんとだつて折れ合へて了ふよ。――全くお父樣がなくなつてから、お前達二人がいつまでも仲違ひしてゐるなんて、私の身になつてごらん、第一世間に對しても聞えのいゝことぢやないぢやないか。

靜雄　でも、お母さん。私は今日はそんなつもりで歸つて來たんぢやないんです。――實はね……

まさ子　え？

靜雄　（間、急に感傷的になつて）あゝやつぱり來るんぢやなかつた。何だつて來て了つたんだ、ばかな……

まさ子　何だね、まあ、何を云ひ出すんだね。お前何だか暫くの間に變になつたやうだね。――あ、お前また飲んでゐるね、（嘆息するやうに）相變らずだね。

靜雄　…………。

まさ子　いいえ、それは酒をのむのも無理に留めようとはい

はないけれど、餘り度を過すのは止しておくれよ。お前のはやり出すと可なり無茶らしいからね。――私は身體が案じられるんだよ。――で、その雜誌社とかの仕事もうまくやつてるのかね。

靜雄　え、まあ……

（間。）

まさ子　靜雄、お前何をさう默つて愚圖ついてゐるんだね。折角來て、何か話すことがあるんなら、はつきりお云ひな。

靜雄　えゝ、あの――實はね、新子の奴が……

まさ子　え、新子、あゝあの人、新子さんと云つたつけね、――（何か熱心に）で、あの人が何うかしたのかい。

靜雄　（一寸きつとなりまさ子の眼の中を覗き込む）

まさ子　何うしたの。お前、私達があの人のことを云ふと、すぐむきになるんだね。

靜雄　だつて私には又、家の者が彼奴のことをいふとなると、すぐ何か事あれかしと待つてるやうな氣がするんです。お母さんだつて、あれと私と一緒になることは反對でしたからね、そりやあ彼奴はもと女給もしてゐた女です。ですけれど、それだからつて何もいつまでもそんな眼で人間を見ると云ふなんてひど過ぎると思ふんです。

まさ子　何を云ふんだね、それがお前の僻みといふんだよ、私は今だつて何も――

靜雄　だつて先刻もね、秀子の奴が、私の靴下の破れてゐるのを見て、「誰もつくろつて呉れる人はないの。」なんて皮肉を云ふんです。未だにきつと家の者は私に……

まさ子　ばかな。あの子だつて何もそんなつもりでいふ筈はないよ。だからさ、私にしたつて、そこまでお前の氣に入つてゐるといふなら、何もいふことはないとあの時も云つたぢやないか。――で、何うしたといふの、新子さんが。

靜雄　（少し折れて）えゝそれがね、可なり長い間病氣だつたりしましてね。

まさ子　病氣。それはいけないね。でまだずつといけないの。

靜雄　いゝえ、もうこの頃ぢや起きてゐるんです。けどね、それやこれやで、いろんな費用が嵩んで了つたりしたものですから今全く困つてゐるんです。そりや私もいけないんです。病氣の費用だけなら兎に角、私自身の昔からの無駄使ひの癖もぬけないもんだから、ついいろんなことで滅茶滅茶になつて了つて自分で困つてゐるんですが。――然し又そんなことから氣が焦々して來ると猶のこと酒でも飲みたくなり、飲めば益々氣が荒むと云つた工合で、――意氣地がないとも思ふんですが、自分でも

仕樣がないもんだから。……實はね今も友人の所へ泊つたりして二晩も家を明けてゐるんです。
まさ子　そんなことお前、それではあの人が困るぢやないか。
靜雄　然し家へ歸つても息が詰るやうな氣がして、――彼奴が心配してゐるだらうと思へば思ふほど歸る氣もしないんです。
まさ子　ぢや、社の方へだつて。
靜雄　えゝ出てやしないんです。だけど仕方がないんです。
まさ子　相變らずのお前だね、やつぱりまだ氣儘がぬけないんだね。……（一寸考へて）だが、それはまあそれとして、ね靜雄、お前何うしてもあの小說家になるつもりでやつてゆくのかね。私は今更こんな話を蒸し返さうと云ふんぢやないがね。それでも今のやうな話をきくと、やつぱし私は心配になるんだよ。今の仕事だつてお前はそのためだとお云ひだけれどそんなに日々のことで焦々してゐるんぢや仕樣がないぢやないか。――お前だつてちやんと學校も出た人間だし、何だつてもう少し工合のいゝ仕事もありさうなものだと思ふんだがね。兄さんだつて、お前が危かしいことを止すつもりなら、骨の折り樣もあるし自分の方だつてすることはするんだつて――
靜雄　（遮つて）お母さん、その話はもう止して下さい。私はもう心を決めてゐるんですから。――でもそれでゐて、こんなことを云つてはすまないんですが、何うか先刻のことだけは一つきいてくれませんか。――ね、私だつてあれだけのことを云つて家を出ときながらこんなことを死んだつてしたくはないんですが、新子のことだの自分の焦々した氣持を思ふと堪らないんです。然しもう今度きりです。何んなことがあつたつて、もうお母さんに迷惑かけることなんかありませんから。
まさ子　迷惑なんてことはちつともないがね。――お前のことは可哀さうだと思つてゐるんだから。
靜雄　なあに、そんなことは――でも本當にこれつきりです。私だつてその中にきつと立派に私の仕事をやつて見せます。……きつと……
（この時出入口の襖の向ふで兄辰雄の聲がする。）
辰雄の聲　秀子、秀子……
（辰雄、襖をあけて現れる。年齡三十三四、實直なる市井の人の風にて老けて見える。）
辰雄　秀子はゐないの。――あ、お母さんですか。
（と云ひながら靜雄と顏を見合せ、二人共ばつの惡さを露骨に見せる。と靜雄は俯向き、辰雄は一旦默つて引返さんとする。が、思ひ返したやうに靜雄の方に來る。）

まさ子　(とりなすやうに)　今日は珍しく早かつたね。
辰雄　えゝ、久しぶりに今日は會合もなし、少し早く歸つて來たのです。(靜雄の方を一寸見て强ひて何氣なげに言ひかける)お前近頃何うしてるんだ。
靜雄　(一寸まごつきながら)　別に何うもしてやしない。同じことさ。
辰雄　何とかいふ雜誌の仕事は相變らずやつてゐるのか。
靜雄　食へないからね。
辰雄　ふむ。(相手の反抗的なのに少し機嫌を惡くするが表は笑顏で)……だが食へないといふのもお前のは自分からだぜ。
靜雄　說教なら、もう聞かなくつていゝ。(辰雄まさ子と顏を見合せ、「斯ういふ奴です。」といふ表情をする。)
まさ子　靜雄、お前それがいけないんだよ。兄さんがらやんと折れて出てゐるのに、お前のその返事の仕方は何だね。それだから何うにもならないといふんぢやないか。
靜雄　………。
辰雄　なあに靜雄はまだ誤解してゐるんですよ。ねえ靜雄、俺は何もお前說教をしてゐるんぢやないよ。それは以前からだ。俺はお前に相談してるのだ。
靜雄　だけど、僕のすることには何でも不贊成ぢやないか。僕が小說家志願をすれば危險だといふし、職業として雜誌記者をするともつと違つたことをしろと云ふし、人が結婚するといへば、見もしないでそんな女はいけないといふし、何一つ僕の希望を理解してくれないんだ。それでゐてお互の間が滿足でゐられるか考へて見るがいゝ。
辰雄　いやそれは何も、一々俺が反對するといふのぢやない。只お前の場合が一々餘り贊成出來ないことばかりだつたんだ。そればかりでなく、何處の家庭だつて餘り贊成する所はあるまいぜ。――現にお父樣が生きてゐたら、お前の今やつてゐるやうなことを一つでも許すかね。
靜雄　そりあ許さないかも知れないさ。がそれが何だらう。僕はお父樣がゐたつて同じことはするよ。
辰雄　だけど、お前だつて少しはほたのことを考へたらいい。
靜雄　しかし僕は、人の前で恥になるやうな事をしてゐないつもりだ。
辰雄　だがね、お前だつて相當の敎育を受けた男なら、いつまでも身狀のきまらない唯ごろごろしてるやうな生活は――
靜雄　ごろ〳〵なんかしてやしない　仕事をもつてる。
辰雄　だが、その仕事もあんな雜誌のことなら餘り世間の信用のある方ぢやないぜ。

靜雄　下らない。いつだつて世間だとか何だとかばつかり云つてゐる。自分がいゝと思つたらちつとも構はないぢやないか。

辰雄　それはお前は構はないかも知れない。だが、そのお前の身狀が、俺やお母さん——まあそれもいゝとして、これから先きのある秀子の縁談や何かにまで障つてゐることだつて考へないかね。

靜雄　だつて……

辰雄　ちつとも構はないかね。

靜雄　……仕方がないさ。……

辰雄　(少しむつとして)　それに俺はお前の日々の行狀だつて知つてゐるよ。未だに、そこいらのまるで地廻りの不良少年のやうに、のべつ飲んで歩き廻つてるつてんぢやないか。

靜雄　(冷然と)　そりや人間だもの、少し位は飲みに行くこともあらうさ。

辰雄　だが、——まあそれもいゝ。では、お前のいふその小說を少しは書いてゐるのかね。一體何か勉強はしてるのかね。俺は樫村靜雄なんて名前は、餘りきいたこともないがね。

靜雄　(口惜しさうに)　そりや仕事のある身で仲々さう出來やしないさ。やればすぐやれると云つた手間仕事ぢやないからね。それにね、身內の名譽になる爲に藝術家になつたり、いゝ藝術を作らうなどと云ふんぢやないからね。お生憎さまさ。

まさ子　本當にお前はまあ何て子になつたんだらう。その物の云ひ方は何だね。——一體私だつてお前のその自分さへよければいゝといふ身勝手な考へ方は氣に入らないんだよ。

靜雄　だつてお母さん、みんな、身勝手々々々つて私に云ひますけどね、私はうちの者こそ身勝手だと思ふんですよ。やれ、そんな仕事をしては體裁が惡いの、碌なものにならないのつて、皆貴方方の立場からばかり考へたことぢやないんですか。人間は生きるためには何んなことだつてしなくちやなりません。そして仲々思ふやうに豪くなんてなれるものぢやないんです。親讓りのもので大きな顏をしてのん氣に暮らしてゐるのと譯が違ひますからね。全く何方が身勝手だか考へてごらんなさい。

辰雄　靜雄、それはお前何といふことをいふんだ。お前はさういふ人間なんだ。——俺が財產をうけたからつて、何も俺一人がよければといふそんな考へはない。——ただお前が何處までも俺のいふことを聞入れようとしないものだから。

靜雄　僕は自分の氣に入らないことまでして人の世話にな

らうとは思はないよ。
辰雄　(きつとなり)ではお前は何處までも俺達とは一緒にゐたくない、俺達の云ふ事は聞き入れないといふんだな。
靜雄　さうさ。
辰雄　ようし、それだけの覺悟があるなら結構だ。たしかにそれで行くね。
靜雄　無論のことさ。兄さんの世話になんぞ誰がなるものか。
（間。兩人互に暫く見合つてゐる。）
辰雄　だが靜雄。――そんならお前は何故俺の家へなんぞ來るのだ。
靜雄　この家は兄さんばかりの家ぢやない。
辰雄　ばか云へ、俺の家だ。
靜雄　家はさうかも知れないが、僕はお母さんに用事があつたからだ。
辰雄　なに、お母さんに用事？……ふむ。又それだ。まあお前考へて見ろ、この前家を出て行く時何と云つた。何と云はれてもいゝ、立派に自分でやつてゆく。もう俺は一生家の閾なんか跨がないとまで云つて行つたんぢやないか。それでゐて半年かそこいらで、もうこそ〳〵家へやつて來る。そしてお母さんの甘いのにつけ込んで――
靜雄　つけ込んで？
辰雄　さうさ、つけ込んで來るんぢやないか。用事だつて分り切つてゐる。一體お前といふ男は、そんな大きなことの云へるほど意志の强い男でもないんだ。決心だの覺悟だのと云つて、ちつとも滿足にやり通せない男なんだ。すぐ途中でへたばつて了ふ。俺にはようくそれが分つてゐるんだ。だから、お前の才能とか何とかいふことからでなく、意志の問題からそんな小說家なんてことは危いといふんだ。――現に今のお前の生活を見るがいゝ。その日その日の忙しい雜誌社の好い加減な仕事に、結局いい氣で紛れて遊んでゐるぢやないか、何が藝術志願だ。――それで暇さへあればのんで步いたり騷いだりしてゐて、擧句の果に困つてくると、また啖呵を切つて出て行つた家へのこ〳〵やつてくる。――お前はまた、お母さんに金を貰ひに來たんだらう？
靜雄　………
まさ子　辰雄、もういゝぢやないか。そんなにお前のやうにつけ〳〵云ふものぢやあないよ。まるで、お前達は逢ひさへすれば喧嘩ばかりしてるんだ。
辰雄　いゝえ一度ははつきり云つといてやらなくちやいけないんです。何とかいふと理解がない理解がないの一點張りで、自分達ばかりが一段高い人間のやうに思つてゐ

るんです。いえ、そりやあそれだけの器量のある人間なら別ですが、自分の決心を半年も過すことも出來ないでゐて、たゞ傲慢に構へてゐるだけの人間なんかに遠慮することはないんです。――今日だつて、實は過ぎたことは過ぎたことゝして、そりや私はたゞの商賣人で俗人だけれど、話さへすれば分ることは分るつもりだから、ちやんと落着いてお互のこの先きの話を進めようと思つたんです。ですけれど、この態度ぢやありませんか。人の氣持も分らないで、頭から俺は藝術家だでは話にもならないぢやありませんか。それでゐて自分の中途半端な、誤魔化され易い意氣地のない性分にはまるで感じがないんです。私はこんな人間は大嫌ひなんです。一體靜雄が我々家族の者を一がいに輕蔑して顧みないといふことが許せるなら、我々だつてこんな一種の不具者を無視することも出來るわけぢやありませんか。

靜雄　(ぶる〱身をふるはしながら)　なに、僕が不具者だつて?

辰雄　さうだ。不具者でなくば、無能力さ、お前のやうな意氣地なしに藝術なんて以ての外だ。――また出來たつて輕蔑すべきものさ。少くともお前なんかに出來る藝術なら、俺は一番に御免蒙るね。

靜雄　が、勝手にしろ、兄さんに何が分るんだ。俗物。藝術は兄さん達のやつてゐる勞働ぢやないんだ。たゞ嚙りついて毎日紙に書いてたつて出來るもんぢやないんだ。

辰雄　そこで、カフエで管をまいてゐると出來るといふのか。苦しくなると人の懐ろをあてにするやうな精神から生れてくるといふのか。

靜雄　(僅に自分を抑へてゐるといふ極度の興奮を眼に見せつゝ、兄を眞正面から睨みつけてゐる。が終には何も云へなくなつて到頭そのまゝ腕で顔を蔽つて泣き出して了ふ)

(稍長い間。)

まさ子　靜雄、何もさう氣を立てることはないよ。もういいよ。――けれど辰雄、お前も餘り云ひ過ぎるぢやないか。何も今日久しぶりに來た靜雄にそんなにつけ〱云ふに當らないぢやないか。大體お前だつて兄として餘り思ひ遣りがなさ過ぎる。何もたまにお金を取りに來た位で、――そりや困る時は誰にだつてあるんだから。

(この言葉の途中から辰雄の妻夏子入つて來る。一寸一座の樣子に驚いたらしいが引込みもならずそつと部屋へ入つて片隅に坐つて聞いてゐる。)

辰雄　お母さんはすぐそれだからいけないんです。そりや、何も私だつて金が惜しいの、やつていけないのと云ふんぢやないんです。

まさ子　そんなら何もそんなひどいことを云つて、この子の前から弱い心を叩き潰すやうなことをするに當らないぢやないか。大體、お前は自分が長男で、都合良く行つてゐるものだから——
辰雄　ばかな。そんなことを云へば、私にだつて云ひ分はあります。長男だから都合がよかつたなんて仰しやるが、私が長男のために何れだけいろんなことに頭を抑へられ、掣肘を受けたか分らない。
まさ子　ばかお云ひでない。それは當り前ぢやないか。お前が財産をつぐといふことになれば——
辰雄　財産が何です。そんなものを貰ふより私も靜雄のやうに寧ろ好きなことをやつた方がよかつたか知れない。
勿論、その方が……
夏子　（急に割り込んで）　あなた、あなた、お母さんにそんなことを仰しやつて——
辰雄　默つてろ。お前の知つたことぢやないんだ。
夏子　だつてあなた——
辰雄　（急に氣をかへて）　もういゝ。何も云やしない。今更お母さんなんぞ相手に云つた處が始まらないことなんだから……
まさ子　（怒つて）　何だつて——
辰雄　（まさ子に見向かず）　靜雄、俺は何もお前が憎いからいふんぢやないんだ。お母さんは誤解してゐるらしいが……
夏子　あなた。——
まさ子　まだお前はそんな——
（氣まづい間。）
辰雄　（突然投げ出すやうに）　靜雄、金が入用なら俺がやる、だからお前歸つてくれ。
（靜雄俯向いたまゝ返事しない。彼は先刻からまだ何だかすゝり泣いてゐるらしい。）
（間。）
（と、下男木戶口の方より入り來る。）
下男　（少しまごつきながら）　おや皆樣こちらで。……靜雄樣、實は唯今あなた樣の奧樣がお見えになりまして是非一寸逢つてお話ししたいことがあるからと仰しやいますので、——
靜雄　なに新子が來た。こゝへ——
下男　はい。あなたお一人だと存じましたものですから、此方へお連れ申しましたのですが。（云つてゐる中に新子入り來る。髮はほんの束ねたまゝ病み上りのやつれ見えて一寸傷ましい感じを與へる。然し顏立はごく素直な性質を表してゐる。彼女は遠慮しながら入つて來たが、意外にも座敷の多勢の人々を見て心弱くそこに立ち竦ん

で了ふ。)

靜雄　……何だつてこんな處へ來たんだ。

新子　はい、すみません。あたし一寸申上げればいゝと存じましたのと、それに——皆樣こちらにおいでだとは存じませんものでしたから。

下男　いえ、それは私がつい失禮しましたので……

靜雄　(新子に)　で用事は何だ。

新子　本當に私、飛んでもないことを致しまして。——初めてお伺ひしますのに、こんな所へ突然上つて、それに私、こんな身裝のまゝで、——

靜雄　——そんなことは何うだつていゝよ。それより用事は何だ。何なんだ。

新子　はい、あの——

靜雄　はき／＼云はないか。何をびく／＼するんだ。

新子　いえ、あの——實は、咋晩も一咋晩も、社の方から人が見えて、ちつとも社へお見えにならないからつて、——その、今一番忙しい時だのに大變お障りがあるんだとかで、皆さん怒つて、いえ、心配してらつしやるんださうですから。

靜雄　……そんなことか。

新子　でも、その方が明日は是非出社して頂かなければ主任の方が、——それは大變——

靜雄　分つた。分つた。

新子　でも、明日社の方へおいでになりませうか。そのうちへ見えた方も大變心配して、いらつしやるんですから。

靜雄　分つたよ。——何だ、あんな社なんぞ。二日や三日休んだつてそれが何うしたといふんだ。……仕事だつて何うしたつて手につかないことも、人間にやいくらもあるんだ。……

新子　(凝と靜雄を見つめながら悲しげに)　あなた——。

(と、急に彼女はそこに佇んだまゝ泣き出す。)

靜雄　おい、何うしたといふのだ。こんな所へ來て、困るぢやないか。

新子　すみません。すみません。

靜雄　すみませんぢやない。泣くなつて云つてるんだ。(と云ひながら彼も實は一寸情けない氣になつて來るのを氣配つてゐるのである)

(此時まさ子立つて椽側に出てまだ歔欷く新子に向ひ初めて言葉をかける。其聲は親しみの籠つた穩かな調子である。)

まさ子　あなた、あの——新子さんでしたつけ。まあ此方へお上んなさいな。先刻から餘り何で、突然だつたもんですから、——さあ此方へ。私がその、靜雄の母です。

新子　(幾度もお辭儀して)　いゝえ、いゝえ、もうこゝで

結構でございます。突然こんな裏口から伺つたりしまして。本當にあたくし、何とも失禮な。――
まさ子　まあ、そんなことは――それに何しろこの靜雄は、我儘ものですから時々氣難かしいことを云つてね。――
新子　いゝえ、そんなことはないのでございます。たゞあたくしが餘り長く病氣をしたりして、家の中がつい不愉快なものですから。あたくしも本當にすまないと思つてゐるのでございます。働いて家に歸つていらしつても私のやうな――
靜雄　何を下らないことを云つてるんだ。――餘計なことは云はなくつていゝ。
新子　いゝえ、分つて居ります。分つて居ります。――私が至らないのです。でももう病氣は直つたんですし、私のことなんぞちつとも氣にかけないで、何うぞお歸りなすつて下さいまし。お願ひします。――あたしあなたのお身體が心配なのです。そんなに毎日……いえ私唯それが心配なのです。ね、それでは折角これからのお仕事だつて――
靜雄　仕事？
新子　あなたが長い間お望みになつてらつしやるお仕事のためにだつて、――
靜雄　お前は俺のその仕事を信じてゐるのかい。
新子　えゝ。――信じてゐますわ。
靜雄　（凝と新子の顏を見詰めながら）馬鹿だな、お前は。
新子　でも、あたし……。
靜雄　もういゝ分つてゐる。何だまた泣くのか。――
新子　はい。は、はい。
靜雄　惡いのは、俺だ――俺だ。
（暫く間。）
まさ子　あの本當に、新子さん。此方へお上んなさい。――お上んなさい。
新子　いゝえ、いゝえ、有り難う存じます。
辰雄　（ぼんやり見てゐる夏子に向ひ詰るやうに）おい、お前座蒲團でも上げないか。
夏子　はい。（立つて緣側に行く）あの、何うぞ。
新子　いゝえ、もう何うぞお構ひ下さらずに――
靜雄　（遮るやうに、だが優しく）新子、もうお前はいゝ。俺もすぐ歸るから。――お前、やつぱりそこから出て表の方に待つてゐてくれ。俺はすぐ此方から出て行くから。
新子　はい。（一寸靜雄を見上げて）すみません。――皆樣何うも飛んだ失禮致しました。初めて伺ひまして御挨拶も致しませんで。――何うぞご免下さいまし。
（新子二度ばかりお辭儀をしたあと、愼ましく出てゆく。皆默ってその後ろ姿をぢつと見送つてゐる。靜雄

もさうして凝と立つてゐたが、やがてくるりと後ろ向くと座敷から帽子を取りその儘つか〳〵と向ふに去らんとする。辰雄急に何か云はむとす。が何も云はない。

まさ子が留める。）

まさ子　靜雄、一寸お待ち。

靜雄　（振返り）？……。

まさ子　私、お前に少し話があるんだから。

靜雄　でも……

まさ子　それにお前、あのう先刻の……（間）

靜雄　あ、お金ですか。お金ならばもう要りません。――さうです。やつぱり兄さんの云ふとほりです。私のこの家を賴りたがる心が一番いけないんです、私の生活がだらけて行くのも全くそのためなんです。それが、私の決心を鈍らせるんです。……私はこれつきり、もうだあれも賴りにしません。

まさ子　でもお前、あの新子さんがまだ、あの身體が――

靜雄　いゝえ、彼奴のことより私の根性です。――彼奴も私のためなら辛抱してくれるでせう。

まさ子　けれどお前。

靜雄　（拒むやうに）お母さん、――

（靜雄その時、一寸兄辰雄の方を振返る、二人は一寸眼を見合す。辰雄も何か云ひたげであるがそれよりも前靜雄はつと向き返りつ）

靜雄　さよなら。（その儘行つて了ふ）

まさ子　（あとを追うて）でも靜雄。――これ。

（まさ子も去る。）

（夏子と辰雄のみ殘る。夏子ぼんやりあとを見送りながら、やがてふと辰雄と顏を合す。）

辰雄　（俄かに叱るやうな調子で）何故お前は送つて行かないのだ。――二人ともお前の兄妹ぢやないか。

夏子　（一寸その樣子に面喰つたやうに）はい。

（慌てゝ去る。）

（辰雄その儘暫く坐つてゐる。やがて兩手で眼を拭うて靜かに立ち上り、緣側に來て、俯向き加減に庭土の方を凝と見つめつゝ立つてゐる。）

――幕――

生活の河（一幕）

人物

勝見慶一
絹子　一の妻
一彦　息子
耕平　田舍から來てゐる父
すみ　同じく母
新子　隣りの娘

郊外に近い勝見の住居。
階下の座敷、緣側。少しばかりの庭。貧弱な植木が二三本そこに立つてゐる。座敷の一方は茶の間へ、一方は玄關へ通じてゐる。
春も半ばすぎの或る日の午後。
勝見の妻絹子。座敷の緣側に近く坐つて縫物をしてゐる。隣りの娘新子その傍で婦人雜誌の頁を繙しながら話してゐる。

新子　まあ、きれいな方。――男爵河田信實氏新夫人高子の君、をばさん、この方隨分いゝきりやうね。

絹子　（一寸振り向いて）あ、それ。きれいな方ね。

新子　（頁をまくり）大阪實業家松浪謙三郎氏夫人夏子。――ね、こんな人達平生何をしてるんでせう。

絹子　なにつて、――やつぱし同じでせう。

新子　だつて、お金の心配はなさゝうだし、家の仕事だつて大抵そのために雇つてある人がするんでせう、――ぢやあ何にもすることがないぢやないの。

絹子　さう云へば何だけれど、――でも、何んな人だつて結婚すれば、娘時代とは違ふものよ。

新子　それはさうでせうけれど、――でも、何か事があつて境遇がかはると、この人達何んなになるでせう。

絹子　何んなになるつて――

新子　きつとそりやあ、慘めよ。私、それが見たいわ。いつそ何か一時に變つてさうなる時があればいゝのにね。

絹子　まあ――亂暴ね。

新子　あら、本當よ。私時々そんなことを考へるの。――

絹子　だつてそれぢやあ、その時あなたは何うするの。

新子　私？――私、自分一人で生活出來るやうに何か習つて置くつもりだわ。

絹子　………

新子　ね、をばさん。あたし、今度齒科醫學校に入らうと

思つてるのよ。

絹子 まあ、女の齒科醫。

新子 えゝ。齒科醫學校は女だつて入れるのよ。

絹子 さう。

新子 可笑しいと思つて。

絹子 いゝえ、そんな可笑しいなんて——

新子 私、あれならやつていけさうだし、そんなに惡くもないと思ふのよ。

絹子 …………

(間。)

絹子 段々世の中が變つて行くのね。

新子 えゝ、それは變つて行くわ。

絹子 あたし達の時代には、何にもそんなことを考へなかつた……

新子 何を——

絹子 …………(默つて絲を口で切つてゐる)

(間。裏の方でご用聞きの聲。)

絹子 はあい、三河屋さん?——あ、お酒ならそこへ置いてつて頂戴。

新子 あ、田舍の方、今日は何處ご見物。

絹子 明治神宮でせう。——一彥がついてね。

新子 あら、一彥さんがついて。

絹子 えゝ。

新子 でもよく案內出來るわね。

絹子 まあ、明治神宮なら慣れてるし、あすこなら危くもなさゝうだしするから。

新子 でもほんとに一彥さんはしつかりしてるわねえ。

絹子 そんなでもないのよ。でもまあ、あの子はね。(微笑してゐる)

新子 うちの正ちやんなんぞと來たら、からつきし駄目。何でも姉さんて、私ばかり賴りにしてるのよ。

絹子 それはまだあの年頃ですもの。

新子 だつて、一彥さんと同い年よ。

絹子 さうだつたかしら。

新子 さうなのよ、大變な違ひね。

(間。)

新子 ね、あの田舍の方、勝見さんのお父さん。

絹子 えゝ。——田舍の人丸出しでせう。

新子 それは仕方がないわ。

絹子 時々それは可笑しいことがあるのよ。

新子 さう。

絹子 あ、此間もね、丁度本鄉の方ね、うちの人の出てゐる研究所の前を通り合はしたのよ。するとね、大きな聲で、あゝこれが慶一の研究所かつて、まるであれがうち

の人の持物かなんぞのやうにいふの。何しろ聲が大きいんだし、電車の中の人が皆一時に私達の方を見るんでせう。私氣まりが惡くなつちやつたわ。

新子　（笑ひながら）まあ、さう。

絹子　あれでも困るわね。

（丁度、表の戸のあいたらしい音。）

新子　どなたか歸つてらつしたやうだわ。

絹子　あの方達かしら。

（絹子立つて行く。表の襖をあけて外へ聲をかける。）

絹子　まあ貴方、お歸んなさいまし。（一旦出て行く）

（やがてまた洋服姿の慶一と前後して座敷に來る。慶一は何か物思はしげな氣難かしい顏をしてゐる。新子、一寸會釋する。）

慶一　（ぶつきらぼうに）や、いらつしやい。

絹子　今日は早いんですね、――そんな日だつたかしら。

慶一　いや、今日午前で研究所の方をひいてね、一寸わきへ寄つて來たんだ。

絹子　あ、さうですか。

（その儘、また襖をあけて隣りの茶の間に入る。）

（新子、一寸手持無沙汰にしてゐたがやがて隣りへ聲をかける。）

新子　ぢや、をばさん、私失禮しますわ。

絹子の聲　あらさう。ぢやまたね。

（新子隣りを覗いて會釋して去る。）

（やがて慶一、和服に着替へ帶をしめつゝ出て來る。）

（緣側近くへ坐り、腕組する。側の雜誌をとりあげ、口繪をちよいと見てゐたが、急にまた投り出す。）

慶一　（獨り言のやうに）文化住宅――か。

（絹子來る。）

絹子　あの子つい先刻から、遊びに來てゐたんですの。（云ひつゝ縫物を片づける）あの子仲々面白いことをいふのよ。

慶一　何だつて。

絹子　いゝえ。女の齒醫者になるんですつて。

慶一　（氣のない聲で）ふうむ。

絹子　あんなことを云つてゝ、お嫁に行くのは何うするんでせう。

慶一　（とりあはず）人のことぢやないか。

（間。）

慶一　だが、お父樣達は。

絹子　明治神宮の見物にいらつしたの。

慶一　誰と。

絹子　一彥と。

慶一　一彥と？

絹子　え、、あの子今日學校が午前でひけたものですから。
慶一　あんな子供一人で大丈夫かい。
絹子　あの子なら、間違ひはないと思ひますわ。
慶一　間違ひはないつて、相手は年老だぜ。
絹子　…………
慶一　若し怪我でもしたら何うする。
絹子　まさか、お父樣やお母樣が――
慶一　いや一彥だよ。
絹子　あの子だつて、大丈夫だと思ひますわ。省線も慣れてゐるんですし。――
慶一　誰がそんなことを保證出來る。この間から省線で間違ひのあつたことが隨分新聞にだつて出るぢやないか。
絹子　（心元なく）それはさうですけれど。
慶一　それ見ろ。大體、お前は母親の癖に不注意でいけないよ。もつと氣をつけなきやあ――
絹子　え、、――でも本當に大丈夫かしら。
慶一　何うだか分るもんか。お前がしたことぢやないか。
絹子　だけど、私……
慶一　何だ、いはれてから急に心配し出したりして。ばかだな。――大丈夫だ。
（絹子、ぼんやり縫物をもつて茶の間に入る。）
（間。）

絹子　（茶の間から）あなた。
慶一　――何だい。
絹子　大丈夫でせうか。
慶一　しらないさ。
絹子　…………
慶一　（ふと思ひ出したやうに）おい。
絹子　え。
慶一　それより一寸此方へ來いよ。
（絹子出て來る。）
絹子　（氣がゝりらしく）何ですの。
慶一　一彥のことぢやないんだ。まあ坐れよ。
絹子　え、。
慶一　實は、昨日の話だがね。
絹子　昨日の話？――あのお父樣の方のことですか。
慶一　うむ。――あの補助の件だがね。
絹子　毎月お送りしてゐるあれだけぢや足りないんでせうか。
慶一　何でも今よつぽど困つてゐるといふんだ。何だか冗冗云つてたけど、――兎に角親父のことだから嘘はないさ。尤もこの頃地方の百姓の困りやうは實際酷いんださうだからね。
絹子　東京だつて同じですわ。――私達のやうな生活では

ね。

慶一　それもさうさ。しかし、俺にして見りやあ、何方にしてもお父樣の方のことは、して上げなけりやならない義務があるんだからな。何しろ、ありつたけのものは皆俺につぎ込んで了つた親父だ。

絹子　それは伺つてゐますわ。

慶一　考へて見ると可哀さうなのさ、俺が子供の時、少しばかり學問が出來たといふので、無暗と煽てられたり、俺がまたせがむものだから、親父もたうとう一生に一度の大博奕でもうつ積りで、何もかも投げ出して了つたのさ。

絹子　でもお父樣達、私たちの內曲のことを知つてらつして。

慶一　それは知らないかも知れないさ。俺が十分うまく行つてゐると信じ切つてるらしいからね。

絹子　それなのよ。いゝえ、それも結構は結構ですけれど、それだから、補助を增してくれではね。

慶一　それはさうさ。しかし——

（暫く無言。）

慶一　それにね。これは別の話だが、若しかすると、今度あの研究所も閉鎖されるかもしれないんだ。

絹子　（驚いて）まあ、何うして。

慶一　まだ、はつきり分らないんだが、何でも經費節減の今度の內閣の犧牲になるらしいんだ。

絹子　え、そんなことが——困るわね。ぢやあ、あなたは何うなるの。

慶一　なあに、さう心配することはないさ。研究は又大學の方でゞもさして貰ふとして、生活の方はまあ何處かの教師の口でも探しやいゝ。

絹子　でも——

慶一　まあ、それはそれさ。——兎に角、親父の方のことは、何れにしても何とかしなくちやねえ。

絹子　…………

慶一　いや、それはお前は、內曲のことを云はないでそんなことを、——といふかもしれない。しかし俺にして見ると親父にだけは、何と云はれても拙い面は見せたくない。

絹子　だつて、それは——まして研究所の方がそんなだつたりすると——

慶一　しかしまた俺は、あの親父の折角持つてゐる希望を、何うも破りたくはないんだ。親父は今全く俺にだけ希望をつないでゐるんだからなあ。まして、我儘を通しての今の俺なんだから。僅かな金で、親父の夢がつながれてゐるなら何でもないぢやないか。

絹子　…………

慶一　だから、親父の方のことは、まあさういふことにきめよう。何うせ俺が何とか才覺をするからね。

絹子　…………

慶一　(少し語氣を强め)　何故默つてるんだ。それぢやあ不承知だとでもいふのか。

絹子　いえ、不承知だなどゝいふんぢやありませんけれど、――私、今のやうな狀態で、何うして出來るだらうと考へますの。

慶一　そりやあ、幾らか無理なのは分つてゐる。が、それを何とかしようと云つてるんだ。

絹子　えゝ。――でもそれがね。

慶一　おい、先刻から云つてるぢやないか。出來ないぢやすまないんだつて。

絹子　それは分つてゐますわ。

慶一　分つてゐるなら、何故しようと云はない。

絹子　だつて。――

慶一　何が、だつてだ。

絹子　そんな、無理を云つたつて仕方がありませんわ。――ぢやあ、あなたにそのあてがあるんですか。

慶一　あて?――

絹子　えゝ。

慶一　ばかッ。それはこれからやりさへすれば、何とでも出來るといふのぢやないか。

絹子　だつて、それぢやあ――

慶一　もう止せ。一體貴樣は亭主をやりこめさへすりやいいとでも思つてるのか。

絹子　…………

(間。白けた沈默。)

慶一　あゝあ。嫌になつて了ふ。――何が生活だ。何が學問だ。……

(慶一立つて、緣側の柱の所に行つて力なく倚り懸る。晴れた空をぼんやり見上げてゐる。)

慶一　三十歲にして凡人、か。四十歲にして何だらう。

(稍長い間。)

絹子　あなた。

慶一　…………

絹子　ね、あなた。あなたの思ふ通りになすつて下さい。私、何でもあなたのなさるとほりにしますわ。

慶一　…………

絹子　だつて、先刻は私、あゝより云へなかつたんですもの。何もそんなつもりぢやなかつたんですけれど、私――――(涙ぐむ)

慶一　…………

絹子　ね、またお父樣達がお歸りになつたら、何處かもう少し小體な家でも探しませうか。私達小人數だし、狹くつてもいゝんですから。
慶一　…………
絹子　(考へ込んだ風に)　やつぱし駄目ね。私達のやうな女は。――何んな時になつても、こんなことしか考へられないんですもの。(自ら悄然とする)
慶一　…………
(間。)
慶一　(ふと身を柱より起し、又縁側に腰を下す)　いや、實は俺もね、今日、所の歸りに或る本屋へ寄つて來たんだ。いつかその本屋から、通俗科學叢書といふのを出すから――なあに俗な下らない本屋なのさ――その叢書にね、一部門持つてくれないかつて、賴まれてゐたんだ。
絹子　――
慶一　本屋も下らないんだし、斷るつもりで打ちやつて置いたんだがね、今日また思ひ返して行つて見たのさ。丁度まだ引受け手がなくつて、その儘になつてゐたから、まあ話をきめて來たんだよ。
絹子　(力ない聲で)　さうですか。
慶一　(苦々しげに)　まあそんなことでもやる氣なら、何とでもなるのさ。

絹子　…………
(間。)
絹子　でもあなた、本當に研究所の方がなくなつたら何うなさるおつもり。
慶一　何うなさるつて、だから――
絹子　いゝえ、研究の方。あの論文もまだ途中なんでせう。
慶一　それはさうさ。
絹子　それでいゝの。
慶一　あれだけは俺も困るがね。――だが研究論文を無理に作り上げることなんか、今は何うだつていゝとも思つてるんだが。
絹子　あら、そんなこと。
慶一　俺も初めは熱心に考へてゐた。親父への面目のためにも一生懸命になつて學位なんてものを考へてゐたこともあつたからね。――だが結局今では、意地にだけ縋つてる俺なんだ。
絹子　なぜ。――何うしてなんです。
慶一　考へて見ると、元々俺は學者になるだけの人間ぢやなかつたんだね。
絹子　まあ、あなた――
慶一　(苦しさうに)　頭が駄目なんだ。頭が――俺も、こんな筈ぢやなかつたと思ふんだが、いくら焦つても、い

くら一生懸命になつても、この頃の鈍り様は何うしたといふんだらう――生活のために磨り切れたといふのか、年のために衰へたといふのか……何方にしてもそれで堪へられなくなるやうなら。……俺はやつぱし駄目な人間だといふことになるんだからなあ。

絹子　あなた――

(間。)

慶一　(ふと振返り) はゝ、氣にし出したのか、なあに心配することはないよ。俺はやるよやつぱし研究は續けて行くよ。

絹子　だつて、そんな心細いこと……

慶一　だからさ。――なあに、一寸思つただけなんだ。人間、誰だつて、時にや心細い考を起すこともあるだらうぢやないか。

絹子　でも、あたし……

慶一　おい〳〵、そんな悄氣た顔をしてくれるな、――あ、家のお父様や、お母様を見てごらん。それこそ、一心鐵の如く信じてゐるぜ。

絹子　何をです。

慶一　俺がえらい才能のある學者だといふことをさ。少くとも將來日本でも有數のえらい者になるだらうといふことをさ。

絹子　……………

慶一　恐らくあれだけは、永久に變るまいね。少くとも、親父達の死ぬまではね。

絹子　まあ。――私だつて、さうかも知れないわ。

慶一　?――(一寸振返つて、ふいと立上る。少し疲れた、もう澤山だといふ表情)

(間。)

慶一　(ふとまた空を見ながら) あゝあ、全くいゝお天氣だなあ。――こんな日に、何處かきれいな海岸へでも行つて、砂つ原へねころんでゐたらいゝ氣持だらうなあ。

絹子　のんきなことを云つてるのね。

慶一　いや、本當だよ。この頃は久しく何處へも行つたことがないぢやないか。――おい明後日の日曜がこんなだつたら、一つ皆で何處かへ行かうか。お父様達も、それまではゐるだらうから、ね。

絹子　(氣のない聲で) えゝ。

慶一　あゝさうだ。ねえ、おい、いつかお前柴又の方へ行つたのは丁度今頃だつたね。

絹子　えゝ。でもお父様達、田舍にいらつしやるんだから、あんなところ駄目だわ。

慶一　いや、お前と行つた時のことを云つてるんだよ。

絹子　えゝ。それは――いゝえ、あれは秋ぢやなかつたか

しら、あ、でも草餅があつたからやつぱし今頃ね。

慶一　はつは。女つて、きつと食物のことで覺えてるんだね。

絹子　まあ。さうでもないんだけど——あ、あの時、それからあの、鴻の臺の方へ廻つたでせう。あすこのお宮の處で活動寫眞の實演をしてましたわね。

慶一　實演か、實演はいゝな。

絹子　だつて、實演ぢやないんですか。

慶一　いや、さうだよ、さうだよ。

絹子　あなたつたら、私のこと何でもはぐらかすのね。知りませんわ。（輕く笑ふ。）

（間。）

（又表の戸があく。）

絹子　あ、今度はお父樣だわ。

（出てゆく。暫くして耕平、すみ、一彥を先きに立てて入つて來る。）

一彥　唯今。

慶一　うむ。（父達に）お歸んなさい。

耕平　あゝ、疲れた。何處へ行くにも電車で、今度はのり換へか、今度は降りるのかと、氣が焦々するわい。

慶一　さうでせう。東京はそれで煩さいですよ。——慣れればそれほどでもないんですがね。

耕平　これぢや、東京に住む氣も起らんねえ。

慶一　（笑ひながら）さうですか。

すみ　でも、一彥ちやんは本當にはき／＼と、よく心得たもんだねえ。

耕平　何しろ元氣がよくつて、さつさと歩くので、わしも婆さんも大閉口さ。

絹子　まあ、子供つて仕樣がありませんわね。家でもうまく行けるかと思つて、心配してゐたんですのよ。

すみ　何うして、何うして、しつかりしたもの。とても田舍の子は、眞似もできないよ。

絹子　そんなこともありませんけれど——。あ、お母樣、お顏をお拭きになりません？　外は隨分埃でせう。

すみ　えゝ／＼、それは大變でなあ。——それぢや、ちよつと拭かしてだけ貰ひますかな。

絹子　さあ、何うぞ。今お湯をおとりしますから。

（絹子とすみ入る。）

絹一　明治神宮は何うでした。

耕平　いや、もう結構だつたよ。——わしらは、あゝした廣々とした所が、やつぱし性に合ふんでなあ。

慶一　私も、暫らく行きません。

耕平　やつぱり近いと、却つてねえ。

慶一　えゝ。

耕平　だが、（一彦を見つゝ）あの子は仲々頭の働く子だ。――やつぱし、筋を引くんだね。

慶一　何うですかね。

耕平　（一彦に）なあ、一彦。お父さんも。お前位の時から、仲々利口だつたんだぞ。

（一彦縁側で唯笑つてゐる。）

（絹子茶盆をもつて出て來る。耕平と慶一の前に湯呑を置く。）

絹子　何うぞ。

（すみも出てくる。その前にも置く。）

すみ　えゝ、ありがたう。（絹子去る）――あゝ、すいとした。あんたも何う、一寸拭いて來たら――

耕平　なあに、俺はあとでお湯屋にでも行けばいゝ。

すみ　さうしなさるか。（茶をのむ）あゝあ、いゝ心持だ。

慶一　草疲れませんか。

すみ　いやもう、いかんわい。

慶一　今度の日曜には、私が何處か又變つた處へ案内しませう。

耕平　いや、わし達はもう明日の晩あたり歸らうと思つてるのぢや。

慶一　だつて、いゝでせう。明後日が丁度日曜で私も休みなんですから。

耕平　だが、見る所は大抵見たからなあ。

慶一　しかし――

すみ　いや、もうわしも見物は澤山ぢや、何しろ斯う草疲れては弱るわい。

慶一　ぢやまあ、見物は止しにしても、歸るのは明後日になさい、折角、私も休みなんですから。――

耕平　うむ、それはいゝがね。――婆さんも何だか歸りたがつてるから。

慶一　お母さん。いゝんでせう。

すみ　あゝ、一日位の所は何方でもいゝさ。

慶一　ぢやあ、兎に角明後日になさい。

耕平　（すみに）ぢやあ、さうするか。

すみ　えゝ、（ふと腰をのばして立ち上り）所でと、わしは一寸着物を着かへて來ませう。（表の襖から去る）

耕平　（後ろから）お前、段梯子を氣をつけな。

すみ　（かげで）はい／＼。

耕平　いや、東京の梯子は急ぢやでなう。

慶一　何かにつけて、せゝこましくつて嫌ですね。

耕平　全くこれぢや人間もせゝこましくなるといふもんだね。はゝゝ。

一彦　父さん。僕お隣りの欽ちやんとこへ、遊びに行つてくるよ。

慶一　よし〳〵。――だがご飯前に歸つてくるんだよ。

（一彥頷いて去る。）

（間。）

耕平　こゝの庭は、少し濕氣るやうだね。

慶一　えゝ、少し向ふより低めになつてゐるものですからね。

（間。）

耕平　所で、お前、――（云ひ難さうに）あの話だがね、何うなつたらう。もう歸る日も近いから、返事だけきいて行きたいんだが。

慶一　えゝ、お絹にも話しました。――出來るだけは致します。

耕平　あれも承知してくれたかね。

慶一　承知も不承知もない。元々私がすることですからね。

耕平　それはさうだがね。――いやさうか、それなら俺達も助かる。

慶一　何うか、ご心配なく。

耕平　いや、實はわしもお前に氣の毒だとは思つてるんだ。お前も世間に出るにつけていろいろの物入もあらうと思ふからな。

慶一　………

耕平　しかし俺達も、今まで色んなことはあつたし、あゝして田舍で働いてゐてもこの頃ではね――

慶一　いえ、分つてゐますよ。――その話はもうきまつたんだから、それでいゝぢやありませんか。

耕平　うむ。（手持無沙汰に默る）

（間。稍長い沈默。）

耕平　だがお前、あの――身體は何うだね。

慶一　えゝ、何と云つて――なぜです。

耕平　何だか、その顏色に元氣がないやうだから。

慶一　さうですか。

耕平　何しろ、頭を使ふのが毒なのに、その毒な仕事をしてゐるんだからなあ。

慶一　何を云つてゐるんです。今の世の中に頭を使はない仕事つてあるもんですか。

耕平　それはさうだがなあ。わしはそれが氣になつて仕方がないのぢやよ。

慶一　（笑ひながら）無駄な心配はおやめなさい。

（間。）

耕平　しかし、何しろ、わし達にとつてはお前だけが賴りだからね。折角丹精して、立派になつて貰つたのはえゝが又そのために、何かことがあつては、と、つい餘計なこともも氣にかゝるのでなう。

慶一　（默つて氣の毒さうに見てゐる）

耕平　國でお前の噂が出る毎に、わしも鼻が高いのぢやがな、もう何れ博士樣ぢやとな、いや、皆の者が云ひよるのぢや。（機嫌よく）はゝゝ、全く村の者が、わしの顏を見る毎に、お前の噂をしよるのぢや。
慶一　…………
耕平　いや、わしも今まで實の處、隨分苦勞した。お前の爲になう。お前も知つてる通り、すつからかんぢや。が、わしは後悔もせねば、惜しいとも思つちや居らぬ。本當ぢやよ、いや、そんなこと少しだつて思つちや居らぬ。お前さへ立派になつてくれたら、何うせみんな歸つて來ることだとなう、まあ婆さんとも始終云ひ合つてゐるんだよ。まあ〳〵、何處までも滿足に行つてくれるやうに賴むよ。それがわしらの、唯一の樂しみだでなう。……
慶一　（ふと話を外らすやうに）だが村の人達も變つてゐませうね。
耕平　うむ、村の者か。全くさ。わし達の仲間も段々なくなるし、若い者も仲々立派になり居るが、――でも、よそ土地へ出てそんな出世してゐる人間は誰もゐないよ。
慶一　…………
耕平　あ、あの淺見さん、あすこのあと取りもすつかり放蕩を始めてね。
慶一　あの仙太郞さんが、今になつてね。
耕平　さうさ。――あの淺見さんの旦那が俺に逢はつしやる時に、いつもその愚癡さ。そしてやつぱし、お前の話が出るのさ。
慶一　（少し煩さゝうに）まあ私のことなどは――
耕平　いゝや本當のことさ。本當のことさ。
（この時、二階からすみ呼ぶ。）
すみ　お前さん、一寸來ておくれよ。
耕平　おや、呼んでるな。――何だよ。
（立つてゆく。）
耕平　（階子の下から）え、何だつて、何がないつて――
（上つて行く氣勢）
（間。）
（慶一、ぢつと考へ込んでゐる。急にごろりと橫になる。）
（間。）
絹子　（茶の間から顏を出す）あなた。――あなた。
慶一　うむ。（顏を上げる）
絹子　私、一寸使ひに行つて來ますよ。
慶一　何だい。
絹子　お酢がもう。切れてるの。――一寸行つて來ますわ。
慶一　うむ。
（絹子去る。慶一又橫になる。）

(間。)

(入日が赤い光をさし込んでくる。)

(一彦裏口から歸つて來て、緣側の所へ來て、腰をかける。懐から何か本をとり出して讀み出す。)

(間。)

慶一　(ふと氣がついて聲をかける)　一彦。

一彦　………

慶一　一彦。

一彦　(後ろ向に本を見ながら)　え。

慶一　何をしてるんだ。

一彦　本をよんでゐるの。欽ちやんとこで借りて來たの、小學理科の本。

慶一　(起き上り、側にゆく)　どれ。何んなものが書いてあるんだ。一寸お見せ。

(一彦默つて本を差し出す。)

(慶一、見出しや挿繪をちよいとはぐつて見る。)

慶一　星の科學だね。

一彦　お父様のとこにも、地球の繪の書いた本が澤山あるね。

慶一　お父様とこには、地質學の本が多いんだよ。

一彦　チシツガクつて。

慶一　いや――お前これ讀んで分るかい。

一彦　(默つてゐる)

慶一　面白いかい。

一彦　あゝ。

慶一　ぢや。この繪は何。

一彦　そこ、まだよまないんだ。

慶一　土星つて星だよ。

一彦　さう、だけど、僕地球ならよく知つてらあ。

慶一　地球はこれだよ。

一彦　だつて地圖が書いてないや。

慶一　はゝ地圖か。いやこれは太陽系といふ圖なんだからさ。――第一、お前地球なら、今斯うしてお前やお父さんが、それからこのお家や、お庭が皆立つてゐるこれがさうなんだぜ。これがこのまんま、どん〳〵動いてゐるんだよ。

一彦　(默つて考へてゐる)

慶一　一體、お前、何が學校で好き。

一彦　僕、理科が好きだよ。

慶一　親父の二代目か。

一彦　え？

慶一　ぢやあ、お前大きくなつたら何になるつもりだ。

一彦　(考へつゝ)　僕お父さんみたいになるの。

慶一　(凝とその顏を見ながら)　お父様のやうになつても

困るなあ。

一彥　何うして？

慶一　（まごついて）いや、お父樣よりずつとえらくならなくつちやあ。

一彥　えらくつて。

慶一　まあ何でもお前の好きなものに、一生懸命に勉强するのさ。

一彥　…………

（間。）

（二階から降りて來た耕平、この時靜かに部屋に入つて來る。）

慶一　（父に氣付かず、一彥の肩に靜に手をかけ）なあ、一彥。

一彥　え。

慶一　本當にお前、お父樣よりずつとえらい人間になるんだよ。お父樣のやうに中途半端でなく、もつとずつとずつとえらく……

一彥　（默つて父の顏を唯眺めてゐる）

慶一　本當だよ。それまでは、お父樣も、一生懸命に働いて、お前のためには何んなことでも、してやるつもりだから、ね、きつと一心になつて勉强するんだよ。

一彥　（仕方なしに頷きながら、庭の方を見てゐる）

慶一　（段々感情に迫られながら）お父さんは――お父さんは本當にそればつかりを考へてゐるんだからね。（思はず、しつかりと一彥の肩を抱へる）なあ、一彥。一彥……

（間。）

（と、裏口の開いた音。）

（ふと氣がついて、慶一後ろをふりかへる。父耕平のぼんやり立つてゐる姿を見て、思はず一彥にかけてゐた手を離す。それから靜かに顏を背ける。）

――幕――

姉（一幕）

人物

一枝　姉
春子　妹
母親
大村
山岡

一枝等一家の住居。――秋の日の暮れ方前から。

茶の間と座敷とが並んで、庭の方に向いてゐる。庭には植木の鉢が二つ三つ。あたりはまだ明るい。

座敷の縁側に近く、春子（二十位）と大村（二十七八）が話してゐる。二人の前には澤山の繪葉書が散らばつてゐる。

大村　そつちのを見せてごらん。
春子　これ。
大村　あゝ。――これは何といふ役者。
春子　バーバラ・ラマール。
大村　妖婦役の顔だね。
春子　えゝ、ヴアンプよ。とても素的なの。「心なき女性」つての見なかつた？
大村　見なかつた。
春子　よかつたのよ。私達の仲間では、その人一等人氣があると云つてもいゝわ。
大村　へえ、さうかね。――そつちのは。
春子　これ。
大村　いや、そつちの男の。
春子　バーセルメス？
大村　何だか知らないが。――（受けとつて見て）あんまりいゝ男ぢやないが。
春子　でも、熱情的な所はとてもいゝのよ。ヴアレンチノみたいに、綺麗ばかりぢや駄目だわ。
大村　おやく、恐しく活動通なんだね、春子さんは。
春子　いゝえ、私なんぞ駄目。學校のお友達と來たら、そりやあ通な方が隨分ゐるのよ。――だつて、私なんか餘り見ないんですもの。
大村　さう云へば、僕も隨分久しく活動を見ないなあ。今度いつか皆で一緒に見に行かうか。
春子　えゝ、いゝわね。――でも駄目だわ。

大村　なぜ。
春子　だつて、姉さんが。
大村　一枝さんだつて行くだらう。
春子　でもね。
大村　行かない？
春子　行かないこともないでせうけれど。――姉さんは、あんな所へ行くの。餘り好かないの。
大村　さうかしら。
春子　何しろあの性質ですもの。
大村　さうかもしれないね。
春子　さうなのよ。姉さんつたら、お勤めの外何もないいんだもの。
大村　尤も暇もあるまいしね、吾々と同じでは。
春子　だつて、夜は仕事はなし、日曜だつてあるわ。
大村　所が、さうではないよ。そりやあ一日勤めて歸つて來ると、ぐつたりして了つて外へなんぞ出る氣が起らないからね。日曜だつても同じさ。却つて、一ん日、家にねころんでゐたい位だからね。
春子　……………
大村　だからまあ春子さんも、（冗談らしく）　あんまりせびつたりなんかしちやあ、いけないよ。
春子　まあ、誰が。――私、時々學校のお友達と行くことだつて內證にしてある位なのよ。
大村　その方がいゝさ。
春子　この繪葉書だつて、皆机の抽斗に隱してあるの。――（そろ／＼片附けかけて）　あなただつて云つちやあ嫌よ。
大村　いゝとも、そんなこと云やあしない。
春子　きつとよ。
大村　大丈夫だよ。
春子　（或る眼差を見せて）　分らないわ。大村さんは。
大村　何うして。
春子　姉さんの肩ばかり持つてる人ですもの。
大村　え。
春子　だつてさうぢやない。
大村　はゝゝ。何を云つてるんだ。――だけどさ、何しろ姉さんはあゝして、お父樣がなくなつてから、ずつと一家を背負つて働いてゐる人だからね。
春子　それ、それ。それから斯うでせう。――だから、あんただつて姉さんに十分感謝しなければいけない。學校へ行つてるんだつて、云はゞみんな姉さんのおかげだからでせう。きまり文句よ。
大村　仕樣がないね。春子さんつたらこの頃少し不良の氣味があるね。

春子　まあ。――（ぶりつとする）えゝえ、何うせさうよ。そりやあ私は姉さんのやうに淑德の婦人ぢやありませんから。
大村　おや、また姉さんか。――何もさう事々に姉さん姉さんて――
春子　知らないわ。――あんたが云ふんですもの。
大村　おや、怒つたの。
春子　…………
大村　ね、本當に。
春子　…………
大村　（春子の側に寄り、手をとる）え。
春子　（低く）いやだわ。
大村　（その手を放さず）何うしたのさ、そんなことに怒つたりして。――
春子　…………
大村　分つてるぢやないか。僕は春子さんの外の人のことなんか何も考へちやゐないんだ。
春子　…………
（間。）
春子　だけどね、この頃、姉さんてばね。
大村　また姉さんか。
春子　いゝえ。だつて何だかひどく神經質なんですもの。氣になるわ。
大村　神經質。
春子　私のことだつて。何かにつけて、監視してゐるやうなの。
大村　…………
春子　本當よ。私、何だか堪まらない氣がするわ。
大村　ぢや、何か疑ぐつてゐるらしい？　僕たちのこと……
春子　――さうかも知れないわ。
大村　手紙でも見られたの。
春子　そんなことないと思ふけど。――
（間。）
大村　さうか、いやさうなんだらう。時々は僕にもそんな素振りが見える。
春子　さうでせう。
大村　（ふと考へ込んでゐたが）なあに、何方だつていゝや。分つたら分つた時のことさ。僕の心はもうきまつてるんだ。――春子さんだつてさうだらう。
春子　（微かに）えゝ。
大村　そんなら、問題ぢやないさ。何んなことが起つて來ても、二人の心さへ變らなければそれでいゝんだ。ねえ。
春子　（俯きながら唯頷く）
（と、突然大村は情熱的に春子をひきよせて接吻せん

とす。）

春子　（驚いて）　あらッ、いけないわ。

大村　………

春子　だつて、私――

大村　何を恐れてるんだ。恐れることはありやしないぢやないか。

春子　でも私……

（春子避けて立ち上つて逃げる。大村も立つて縋るやうにそのあとを追ふ。春子は、正面の襖から出ようとして、さつと開く。そこは玄關からの上り口の部屋に通じてゐるのである。）

（が、開けた瞬間、そこに姉一枝が外出歸りの姿で凝と突ッ立つてゐるので、春子思はず驚いて立ち留る。）

春子　あら、姉さん。

（大村も吃驚してそこに立ちすくんで了ふ。）

（一枝は二十七位、何處か理智的な、また獨立婦人らしい固い表情と、生活のための何處か年よりふけた影を持つてゐる。彼女はそこに緊張した形に突つ立つたまゝ、やつぱり何か心の激しい動搖を抑へかれてゐるらしい樣子である。暫くして春子再び聲をかける。）

春子　まあ、姉さん。――いつ、歸つたの。

一枝　………

（一枝默つて部屋にはひつて來る。）

（机の上に包みを置き、坐る。）

一枝　（靜かに春子に）　お母さんは今ゐないの？

春子　（まごつきながら）　えゝ、ちよいと外へ。

一枝　さう。

（間。――電氣つく。）

大村　（誰にともなく間の惡さうに）　僕歸ります。（行きかける）

一枝　（暫く默つてゐて不意に聲をかける）　あの、大村さん。

大村　（ふり返つて）　えゝ。何か――

一枝　………

大村　ぢや、失禮。（又行きかける）

一枝　いえ、ちよつとお話したいんですけれど、やつぱり又いつか。――たゞね、卒業までの春子さんに、あんなことは少し遠慮をして下さいね。

大村　………

一枝　賴みますわ。

大村　いや、實はね。――

一枝　いゝえ、いゝんですの。今は何も。

大村　――ぢや云ひません。ですがね、何うか春子さんには、誤解のないやうに。春子さんに何にも罪はないんで

すからね。
一枝　………
春子　本當だわ、本當だわ。私全く困つて了ふわ。大村さんつたら。あんなこと――
大村　失敬しました。僕少し興奮してゐたものですから。
一枝　（ぢつと大村の面を見る）
大村　（その眼を避けるやうに面を背けて）兎に角今日はこれで歸ります。失禮しました。（そのまゝ去る）
（春子も、やがて間の惡さうに去らうとする。）
一枝　（ふと聲をかけて）春子さん。――春子さん。
春子　え。
一枝　私、すこうしあなたに話があるわ。
春子　――なあに。
一枝　あら、何もそんなに固くなることはないわ。唯私の話きいて貰へたらいゝの。
春子　えゝ。
一枝　何も、今のことなんか咎め立てするんぢやないわ。
春子　姉さん、私何も今、咎められるやうなことしてゐなくつてよ。
一枝　………
春子　だつて、大村さんがあんなことをし出したんですもの。

一枝　分つてるわ。
春子　だつて、姉さんがゐたんぢやない。大村さんの手から逃げてあすこへ行きかけたら姉さんがゐたんぢやない。
一枝　えゝ、さうだつたわ。――まあ、それより此方へいらつしやい。
春子　だけど姉さん。姉さんいつ頃歸つて來てたの。
一枝　………
春子　ずつと前から。
一枝　さう、ずつと前といふこともないけど――
春子　なぜ、ずつと入らなかつたの。――ないことだわね。
一枝　いゝえ、さういふわけぢやないけど、入らうとしたら、何だかばつの惡いやうな時だつたから。
春子　何うして。
一枝　私の噂が出たり、それから……（春子の顏を見る）
春子　………（俯いて了ふ）
（間。）
一枝　でも、私あんな所で立聞きして了つたことは、惡かつたわね。私、それはあやまるわ。
春子　………
一枝　何もそんな氣ぢやなかつたんだけれど――仕方がなかつたの。本當にすまなかつたわ。
春子　………

一枝　でも、それについて、少し聞いて置きたいの。だつて――。ねえ、あんた達の、そのまゝに放つて置いていいといふ話でもないらしいんですもの。

春子　（俄かに探るやうに、又幾らか反抗的な氣持で一枝を見る）

一枝　いゝえ、私、何もあんたの不爲なことなんかしないわ。私、あんたのためには何でもして上げる氣でゐるんですもの。今までだつて――その氣持は分つてくれるでせう。

春子　（微かに點頭く）

一枝　だから、何もかも隱さず云つて頂戴。一度はお互に明らかにしといた方がいゝのだから。

春子　…………

一枝　ね、大村さんとは一體何んなおつき合ひなの。いえ、それはね、大村さんがいつも家へ來ていらつしやる人なことは分つてゐるわ。お父さんが以前隨分お世話した人ですものね。だけど――その以上のことをいふの。

春子　その以上つて。

一枝　いえ、例へば――あんた達手紙のやりとりもしてゐるのね。

春子　…………

一枝　一體手紙では何を書いてるの。

春子　…………

一枝　ね、本當のことを云つて頂戴。

春子　姉さん。

一枝　え。

春子　姉さん、隨分可笑しいのね、だつて手紙のことまで知つてるなら、先刻みんな聞いてゐたんでせう。そんなら何もかも分りさうなものだと思ふわ。

一枝　さう――ぢやあ本當にあなた方は愛し合つてゐる仲なのね。

春子　…………

一枝　それでこの先き何うするつもり。

春子　大村さんは私に結婚してくれといふの。

一枝　え、あんたに。だつてまだ卒業前のあなたに。

春子　だから卒業してから。

一枝　それであなたは。

春子　あたし、――私仕方がないわ。

一枝　仕方がないつて。

春子　…………

一枝　さう。――結婚までね。

春子　…………

（一枝、暫く默つて考へてゐる。何故ともなき深き溜息をする。）

一枝　いゝえ、それならそれでいゝかもしれない。――だけどあたし、云つておきたいことがあるの。
春子　え。
一枝　いゝえ、たゞ一寸ね。でも、それも考へて置かなくちやならないことかも知れないから。
春子　なあに。考へて置くつて。
一枝　ではあんた、大村さんを何處までも信用してゐて、――いえ信用出來る人と思つてゐて。
春子　えゝ。――だけどなぜ。
一枝　…………
春子　なにか、さうしてはならないことでもあつて。
一枝　さういふわけでもないけれど。――いえ實はね、大村さんは前に、或る人に結婚を申込んだことがあるの。
春子　まあ、ほんと？　そしてそれは誰。
一枝　いゝえ、誰つて――でも兎に角本當のことよ。
春子　誰だか云つて。でなけりやあ、私信じないわ。
一枝　信じなくつたつて、事實だから仕方がないわ。
春子　ぢや、その人とは何うしたの。
一枝　それは成立しなかつたの。
春子　何うして。
一枝　その人がことわつたから。
春子　ことわつた。

一枝　餘儀ない事情でね、その人も仕方がなかつたんだわ。
春子　さう。――　（凝と姉を見る）
（間。）
一枝　それがそんなに前のことではないの。それなのにまたすぐ心が外へ移るといふのは少し移り氣だと思はない。
春子　…………
一枝　さう思はない。
春子　でも、――本當に誰なの。
一枝　誰つて――
春子　云へない？
一枝　…………
春子　さう。云へなければ私も別にきゝたくはないわ。
一枝　だつて――
春子　それに、私そんなこと別に何とも思はないわ。そして大村さんの心持だつてちつとも不自然とも思はないわ。
一枝　…………
春子　だつて、事情が何うだつたつて、兎に角その人はことわつたんでせう。
一枝　…………
春子　それならその人は結局愛してはゐなかつたんですわ。――でも私は愛してゐるの。

一枝　…………

春子　だから私、そんな人のこと思はなくつたつて、ちつとも差支へないと思ふわ。問題ぢやないわ。私唯、今の大村さんを信じてゐればいゝぢやないの。（興奮しつゝ）そして私それを信じるわよ。姉さんがいくら反對したつて信じるわよ。

一枝　まあ、私何も反對なんか——

春子　いゝえ、反對してゐるわ。大反對だわ。私には姉さんの氣持はようく分つてゐます。何もかも分ります。——でも私は大村さんを信じるわ。信じていゝと思ふわ。それに、結婚だつて、して見せますわ。えゝえ、きつとして見せますわ。

一枝　まあ、春子さん。あんたそんなこと——

春子　いゝえいゝの、姉さんから見たら、何うせ私は不良少女よ。構はないわ。放つて置いて頂戴。

一枝　亂暴な。私あんたにそんなこと云つたことはないわ。

春子　いゝえ、同じことよ、云はなくつたつて、私姉さんの氣持はようく分つてるんだから。でも私、私はつきりいふわ。私は姉さんと違ふの。だから私姉さんみたいな褊狹な見方に服從する必要はちつともないわ。そんな不純な——

一枝　不純な——

春子　えゝさうよ。ぢやきくわ。姉さんは本當に純粹な氣持から云つてゐて？　ね、私達の心持を本當に理解して云つてゝ？——いゝえ違ふわ。姉さんのは別、それは嫉妬よ。自分の今までの生活から來た偏つた心から、わざとそんなケチをつけるなんて、恥かしい卑怯なことだと思はない。心の狹い嘘つきだと思はない、いゝえ私分つてるの。分つてるの。姉さんの嘘つき、本當に卑怯な嘘つき。（興奮して泣き出す）

（この少し前より、母親外から歸つて來て茶の間へ入つて來たが、二人の間の樣子の唯ならぬのを見て飛んで入つて來る。）

母親　まあ、何うしたといふの。春子、春子。お前はまあ、何といふことを云つてるの。姉さんに向つてその口の利きやうは何です。

春子　（唯泣いてゐる）

母親　本當に仕樣がありやあしない。何かといふと。この頃お前は姉さんに反抗的になつて、——お前は少しでも姉さんのことを考へたことでもあるの。お前さんのために何んなに盡してくれてゐるか。——いくら姉妹だつて、少しは物の辨へといふことを考へるものだ。

春子　（顏をあげて）　私何も姉さんに無理に反抗なんかしてやしませんわ。唯姉さんが餘り卑怯なことをするから、

私、私それを云はうとしたばかりだわ。
母親　それ〳〵、すぐその口調だ。まるで姉さんを姉さんとも思はない。私はそれが氣に入らないんだよ。本當に生意氣にばかりなつて了つて始末に負へやしない。
一枝　お母さん。何もさういきなり怒りつけるにも當らないわ。それにお母さんは何にも今はお知りにならないんですもの。
母親　知らなくつてもさ。春子がお前にそんな反抗的に出るつて法は一つもありません。よしんば何んなことがあつたつて、何一つ云へなくつても仕方がないんです。
一枝　そんな無茶な、そんなことを云つたつてそれは無理ですわ。
母親　いゝえ、無理なことなんかあるものかね。春子、春子、お前少しでも自分の身の上を考へたことがあるかい。お父さんが亡くなつてこの方と云つたら、皆お前姉さんのおかげぢやないか。お前が何もしないで樂々と學校へ行つてるんだつて――
一枝　お母さん、お母さん。そんなことを幾度も云ふ必要はないわ。
母親　いゝえ、云はずにはゐられない。云つてやりますよ。この子は何も苦勞といふものをしたことがないから、いつまで經つたつて少しも身にしみて物を考へることなんてありやしないんだよ。
春子　お母さん。それは餘りだわ。私だつて何もかも分つてゐますわ。姉さんのことだつて感謝することは感謝してゐますわ。
母親　何だつて。――それでゐてさうなのかい。一々口答へをしたり、何かにつけてぷり〳〵したり、私は全くお前には呆れてゐるんだよ。本當に今度から、そんな風だつたら、承知をしないから。
春子　………
母親　だつて少しは姉さんの氣持も考へてごらん。本當に私達のためにつたら、何んな風に今まで一生懸命に働いて來たか、あんな男の中の勤めにも出て――それは何んな辛いこともあるだらうに、それだつて何一つ不平も云はずに、唯わき目もふらずに默つて忍んで來てゐるんだよ。たゞ目をつぶつて、今の年まで通り過ぎて來てゐるんだよ。たゞ働いて働いて――
一枝　お母さん。――
母親　當り前ならもう疾くにお嫁にも行つてゐる時分でゐながら、それでも、そんなことは今まで、一度だつて口にもせず皆心の中にをさめて辛抱して來たのぢやないか。
一枝　お母さん。お母さん。やめて頂戴。もういゝわ。もういゝわ。

母親　だつて、私は本當にすまないと思つてゐるんだよ。私だつて、よくお前の心持は察してゐるよ。先に大村さんが、何とか話をして來た時だつて、お前は私や春子のことを思つて、ことわつて了つたんぢやないか。あの時分の大村さんには勿論私達がかゝるわけにもいかないし、いかなければ、私や春子が何うにもならないと云ふのでね。――私はあの時、お前の心持を思つて泣いたんだよ。だつて私達に何うしやうもなかつた。自分達のことを思つていゝことにして、默つて見て見ぬふりをして來て了つた。――

一枝　本當にもういゝの。お母さん。

母親　堪忍しておくれ。私だつて何もお前の行先を思はないんぢやないんだけど、何うしやうもなかつたもんだから。だけどね、またその中何とかなると思つて――

一枝　えゝ。さうよ。何うにかなつて行くわ、きつと。心配することはないわ。私もそれを信じてゐますの。

母親　…………

一枝　？…………

(間。)

春子　(突然)　姉さん。

一枝　？…………

春子　今お母さんの云つたあれ、――本當？

一枝　…………

春子　ね。(熱心に姉を見つめる)

一枝　えゝ。だけど……私大村さんを何うといふことは――なかつたの。

春子　だつて――

一枝　いゝえ、それは先刻あんたの云つたとほりかも知れない。私、たしかにことわつたんだから。

春子　でも私、――私達……

一枝　いゝえ、それもね、大村さんの心にあることだわ、あの人の心がさうなら――何にも云ふことはないぢやないの。

春子　だつて姉さんの本當の心持が本當は……

一枝　もういゝわ。そんな話。過ぎて了つたことぢやないの。……

春子　だつて姉さん、私、――あゝ私、何うしたらいゝだらう。……

一枝　(俯いたまゝ凝と考へ込んで了ふ)

(母親怪訝な顏をして二人を見てゐる)

(表の戸のあく音。)

(母親慌てゝ立つて行く。)

母親　(襖のかげで)　あ、山岡さんですか。いらつしやいまし。

山岡の聲　や、今晩は。一枝さんはお出でゞすか。
母親　は、居りますでございます。――まあ何うぞお上り下さいまし。
山岡の聲　あゝ、それはよかつた。お差支へはないかね。なあに、丁度一寸前を通つたものだから、はゝゝ。
母親　まあ、さやうですか。さあ何うぞ。
（春子、茶の間へ去り襖を閉める。）
（母親を先きに山岡「五十年配」入り來る。）
山岡　や、一枝さんか。何うもその後御無沙汰して了つてなあ。
一枝　（強ひて笑顔をつくりながら）いらつしやいまし。いえ、此方こそ全く御無沙汰して了ひまして。
山岡　でも、いつもお達者で結構。
一枝　ありがたうございます。
（母親茶の間に入り、春子に囁く。春子頷いて茶道具を出して用意をする。母親座敷にかへる。）
母親　本當にようこそ。
山岡　いやあ。中々靜かなお住居ぢやなあ。
母親　いえ、もう主人がなくなりましてからは、すつかり引き込んでしまひまして。
山岡　然し、一枝さんがしつかりしてやつてゐられるので、結構ぢや。
母親　全く、もう一枝だけが頼りで――それにこれが一心にやつてくれますので。
山岡　いや、さうぢやとも、さうぢやとも。――所で今日お寄りしたのは他のことぢやないんですがね。此間一寸あなたまでお話しをして置いた――
母親　は、あのことでございますか。（云ひにくさうに）實はあの話は、娘にはまだしてございませんのですが。――申譯ないんですけれど、ついこの所おちついて話す機がございませんものですから。
山岡　あゝ、さう。――いや、それは私から何もさう急ぐわけでもないんですが、がまあ、先方もなるべく早く意嚮を知りたいやうでね。
母親　それはさうでございませうとも。……
山岡　何なら、私からこゝで――？
母親　え、――それはそれでも宜しうございますが。
山岡　それぢやあ――いや、一枝さん。實はあなたのことぢやがね。實はあなたをお嫁に貰ひたいと云ふ人があるんぢやがね。――いや、わしの知人でなあ、何うだらうかと思つてなあ。
一枝　………
山岡　いや、その男はね、實は先年細君をなくしてね、そのう、子供も實は二人あるんだがね、なあにもう大分大

きくなつてゐて手はかゝらないし、何しろ金のある家だから、附け人も多勢でねえ、その方の氣兼は少しもいらないのさ。

一枝　……　……

山岡　それにあんたの境遇や、氣質を聞いて非常に感心をして、さういふ人は私のやうな家庭を處理するのに持つてこいだから、是非來て欲しいと、强つて所望してるのさ。

一枝　…………

山岡　たゞ、少うし先方が年が行き過ぎてゐる嫌ひもあるがね。が本人は金もあり苦勞もしないせゐかして、中々元氣でね、なに年は四十、四十一だがね、――何しろそりやあ元氣でとても若々しく見えるし、一枝さんと並んでもさう不釣合でないといふことはわしが引き受けてもいゝがな。それに何しろ名望家で資產はうんとあるんでね。無論、お母さんやお妹さんのお世話も引き受けるにきまつてゐるし――まあ結構な緣と思つてわしもご相談するんぢやがね。

一枝　(唯形式的に頷く)

山岡　斯う申しちやあ何だが、あなただつて、やつぱしいつまでも獨身で、今のやうな勤めをしてゐるといふわけにもいくまいし、それに會社などに勤めてゐても、男と違つて女はね。無躾なやうだが――餘り末始終、大したこともないやうだから。まあ初婚としては、何だけれど、――なに相手がよければやあね。私やあ早くをさまつた方がいゝと思ふのさ。

一枝　…………

山岡　(方向をかへて) それに今はね、お母さん。年の違ひとか何とかいふことはもうちつとも問題にならなくなつた世の中だからね。いや、考へると結構な世の中さ。何なら、いつそわしなんかも女房さへなければ一つ若い人を貰はうかとも思つてゐる位さ。はゝゝ。いやこれは冗談だがね。

母親　まあ何を仰しやいます。――

山岡　はゝゝ。

母親　いえ、それにあのう、その話の方は今すぐ御返事といふわけにも參りませんから、又私から娘に委しく話をしました上で、御返事を致しますから。

山岡　や、そりや無論さうですよ。さう今急にはね。それぢやあ、そこは又あんたから宜しく話して貰ふとして、いや一枝さんも、まあ委しいことはお母さんからよく聞いてね、返事して下さい。

一枝　えゝ、また……

(彼女は唯形式的に重々しい氣分らしく會釋して俯い

てゐる。)

(春子、茶を入れて持つてくる。しとやかに氣取つて挨拶する。)

山岡　いや、これは春子さんか。先刻からゐたのかね。――いやあ、これはいゝ娘さんになつたね。これはまた――

(春子、媚態をつくつて俯く。)

山岡　ほう全くいゝ娘さんだ。若い人は全くきれいだね。もうすぐ引く手數多のお嫁さんだ。はゝゝ。

母親　(姉に氣をかねつゝ)いゝえ、もうお轉婆で仕様がないんでございます。――あ、お前彼方へ行つて。

(春子會釋して去る。)

山岡　全くいゝお娘さんだ。春子さんも一つ何處かへお世話しよう。(考へつゝ)いや降るほどあるに違ひないよ。あんたもいゝ娘さん持ちで仕合はせだね。

母親　いゝえ、何う致しまして。

山岡　いや全くぢやよ。はゝゝ。

(山岡、話しつゞけんとしたが一座の空氣が何となく接ぎ穗がないのでやがて立ちかける。)

山岡　いや、それぢやあ、わしはもうこれで失禮しよう。一寸、寄り道で伺つたゞけだから。

母親　左樣でございますか。でも餘りお愛想なしで。

山岡　なあに愛想も何もあるものかね。また來ますからね。

――それぢやあ、一枝さん。今の話はお母さんからも聞いて、よく考へて置いて下さいね。

一枝　は。(頷く)

山岡　ぢやあまた。(立ち上る)

母親　本當に失禮しまして。

山岡　あんたからも今の話、よろしく頼みますよ。わしは非常にいゝ緣ぢやと思ふしね。

母親　えゝ、よく話しますでございます。

山岡　ぢや失禮。(玄關に消ゆ)

一枝　(送つて出て)失禮しました。ご免下さいまし。

(襖の蔭で夫々の挨拶。山岡は歸つたらしい。)

(母親と一枝出て來る。二人の間に氣拙い沈默。)

(間。)

母親　(取りなすやうに)お前、今の話ね、山岡さんが此間來て不意の話さ。

一枝　…………

母親　久しく來ない人が突然やつて來たと思つたらね。……

一枝　…………

母親　それで、私もすぐお前に話をしようと思つたんだがね。何しろ話がね。――

一枝　…………

母親　それとも、お前何うお思ひだえ。

一枝　…………

母親　何しろ、私達も餘りお前の世話ばかりになつてゐてすまないと思ふし、それにお前もね、いつまでも——

一枝　（不意に遮つて）お母さん。やめて頂戴。

母親　え。

一枝　頼むから、今は何にも云はないで頂戴。

（間。）

（と、一枝俄に衣物の袖で顔を蔽うて泣き出す。）

母親　（驚いて）まあ、お前。

（側に行くが、たゞ困つたやうに立つてゐる。）

（襖を開いて春子も飛んで出て來る。）

春子　姉さん。——姉さん。

（一枝はなほ泣きやまない。やがてつと袖を離すと、春子の方を見ないで靜かにいふ。）

一枝　春子さん。——先刻はつまらないこと云ひ合つたわね。私が馬鹿だつたわ。二人が愛し合つてるなら、あんた大村さんと一緒になるのがいゝわ。——私、今はつきり分つた。私は——たゞ働くの、たゞ働くの。…………

（それから靜かに緣側に出る。が、再びこらへ切れぬやうに、彼女は袖で顏を蔽つて了ふ。）

——幕——

乞食と夢（一幕）

人物

乞　食　甲
乞　食　乙
乞　食　丙　盲目の老人
その他、通行の男、通行の女、支那蕎麥屋

情　景

或る大きな橋の袂。
河岸に、一本の柳。電燈。
雪の降つたあと。
——暮れ方。
橋の袂に、乞食甲と乙とがゐる。
物持風の一人の男が、二人に施しをして去る。
（間。）
中年の女が出て來る。二人またこれに乞ふ。が、女は見向きもしないで行つて了ふ。
そのあとは誰も通らない。
寒さうな風の音。

乞食甲が立ちかゝる。

乞食甲　もう人が途切れさうだ。そろ〳〵歸るとしようか。
乞食乙　うむ。（が、別に立ち上らうとはしない）
甲　おゝ、寒い、寒い。——日が暮れかけると、急に寒さが身にしみるやうだぜ。
乙　うむ。
甲　だが、今日は案外貰ひがあつたぢやねえか。えゝ？——今し方の旦那、大した氣前だつた。
乙　…………。
甲　この雪で、あぶれだと思つたら——（乙を見て）どうしたんだ。お前まだゐるつもりかい。
乙　いや。——さうぢやねえ。
甲　ぢや、立ちねえ。歸るときまつたら、早く行かうぢやねえか。
乙　うむ。
甲　それとも、金を見たら、急にまた慾氣でも出たか。はゝ、だが、今日はもう駄目だぜ。
乙　ばかな。（立ち上る）そんなつもりぢやねえや。
甲　はゝゝ。だが、見ねえ。向ふの河岸ッぷちには、みんな灯が入つたぜ。
乙　おゝ、さうだ。いつの間にか、そんな時分になつたんだね。

甲　これから、あすこぢや、陽氣なことが始まるんだ。
乙　こちとら、寒々と歸つて行くのになあ。
甲　意氣地のねえこと云ふねえ。これでも今日はたんまり入つたぜ。どうだい。今日は歸りに、いくらかおみきでも仕入れて行くか。
乙　いゝだらう。
甲　はゝゝ。お前も大分、この頃あ、仲間らしくなつたねえ。
乙　へん、云つてやがら。
甲　さうだよ。初めの中、俺達の仲間へ來た時にやあ、變にしよぼ〳〵してやがつてさあ……。
乙　いふなよ。そんなこと、もう昔のことぢやねえか。
甲　なあに、つい此の間までのことよ。何とかいふと、俺でも勞働者だ勞働者だつて威張りたがつた、あの時分の穀が、まだどこかそこらに喰着いてるんぢやねえかと云ひてえ所だ。
乙　てやんでえ。
甲　はゝゝ。
（間。）
甲　さ、ほんとに行かうか。
乙　（ぼんやり欄干に手をかけて向ふを見てゐる）
甲　おい。――本當にどうしたんだ。

乙　…………。
甲　いやに、考へこんでるぢやねえか。
乙　なあに。
甲　全く變だ。
乙　だが、何だねえ。
甲　うむ？
乙　――乞食なんてものは呑氣は呑氣だが全く榮えぬ仕事だねえ。
甲　それやあさうよ。
乙　毎日々々、かうやつてゐたつて、貰ひなんか、高が知れてるんだからね。
甲　何だ、そんなことか。
乙　――あゝあ、何かかう、一氣に金持になる運でも廻つて來ねえかなあ。
甲　（乙の顏を一寸見て、急に笑ひ出す）はツはツはツ。
乙　何だい。
甲　何だいもないもんだ。お前、そんなことを考へてゐたのか。はツはツは。
乙　をかしな野郎ぢやねえか。
甲　をかしなつて、そりやあお前のことだ。
乙　何がよ。
甲　お前の分際で。はツはツは。まあ泥棒でもしなきや、

そんな運は廻つて來ねえツてことさ。
乙　………。
甲　はツはツは。
乙　だが、おいら、一度でいゝ。全く、人に物を施す身分にもなつて見てえ。
甲　何を云つてるんだ。
乙　かう威勢よく、ざく／＼と錢をもつてゐてよ。あつちこつちにお前のやうなおこもがゐる所へ行つてよ。
甲　おほきにお世話だ。お前や俺見てえなと云つて貰ひてえな。
乙　いゝや、俺はさうぢやねえ。その時あ金持になつてるんだから。
甲　へん、その面で。大した金持だ。
乙　だが、それは分るめえ。人間いつどんな運が廻つて來ねえものでもねえ。
甲　大きにさうだらうよ。――だが、まづお前、どうして儲ける。
乙　儲けなくつたつて、いゝやな。
甲　儲けなくつて、どうして金持になる。
乙　なあに、こゝで何萬兩とさつ束の入つた鞄を拾つたとして見ねえ。それだつたら……。
甲　おい／＼、夢を見るにやあ、まだ早すぎるぜ。
乙　なあに、俺あ、その日から確かに大分限だ。さうすれあ、ぱツぱツ使つてやらあ。世間の奴ら見てえに、ケチな使ひ方はしねえ。
甲　へん、さうして後ろへ、手が廻るか。
乙　うまく、やれあ大丈夫だ。俺がそんなへマをやるものか。
甲　金を使つて見ねえ。第一、その人柄が承知しねえ。
乙　そこにぬかりがあるものか。第一番に身なりを整へらあ。
甲　大きに人品が上るだらうよ。
乙　當り前よ。さて、そこで使ひ途を考へる。散々ツぱら、うまいものを食つて、りうとしたなりで、お前達の所へも來てやらあ。
甲　有難い仕合せだよ。
乙　そりやあ全く俺あ、氣前がいゝぜ。おい三公、お前に五兩やらう。おい藤八、お前にも五兩だ。
甲　おいらにやいくらだ。
乙　それ見えね。お前だつて欲しいんだ。
甲　チヨツ。
乙　お前には、友達甲斐に十兩やらあ。
甲　何だ、それツぱち。ケチぢやねえか。
乙　ぢやあ、二十兩。

甲　ふん。
乙　ぢや、五十兩やらあ。
甲　手前は、それだから出世が出來ねえ。
乙　何を。
甲　おこもの根性がぬけねえ。
乙　……。
甲　全くだよ。
乙　(口惜しさうに)　そんなこたあねえ。今のは間違ひだ。俺あ、お前に一萬兩やる。
甲　いらねえよ。今更そんなこと云つたつて駄目だい。やるんだよ。氣前よく貰つとけ。
乙　勝手にしろ。
甲　そして、俺らと一緒に何か豪勢な商賣でも始めるんだ。その時あお前、れつきとした家にすんでよ、れつきとした女房をもつて……。
乙　ふん、おありがてえ話だ。
甲　いゝ着物を着て、うまい物を食つて、もうその日その日のおまんまの心配なんざ、まるでいらねえんだ。
乙　考へることが、どこまでもおこもだ。
甲　さう一々茶々を入れるなよ。俺あ話がしにくゝなる。
乙　何が話だ。笑かしやがる。
甲　だつてよ。お前だつてそんなこと、時々考へることがあるだらう。
乙　無えよ。
甲　無えッてことがあるものか。
乙　そりやあ、昔は考へねえこともなかつた。――けれど、今は考へねえ。
甲　だつて、それにしたつて、お前、――人間だ。さうだ、人間だ。やつぱり考へらあ。
乙　いゝや、考へねえ。
甲　嘘云へ。
乙　――叶はぬ願ひだ。
(間。)
甲　だが、それだつて――人間の運だぜ。
乙　いゝ加減にしねえか。
甲　………。
乙　本當に日が暮れちまはあ。
甲　……。
乙　おい行かう。
甲　うむ。
乙　夢なんか見るなあ止しちまへ。
甲　だが、本當に、俺あ、せめて一度、かうぱッぱッと金が使つて見てえ。人に施しがして見てえ。ほんたうのことだ。

甲　ばかだな。……

乙　だつてよ、だつてよ。全く兄哥、お前だつて、どつさり貰ふなあ、いゝ氣持だらう。

甲　やる方が氣持がいゝや。

乙　それ見ねえ、お前だつて、やつぱりそれを考へてるんだ。——だから俺あ、たつた一度でいゝ。人に施しの出來る身分になりてえツてんだ。——

甲　すりやいゝぢやねえか。殊に今日は、可なり身入りも多かつたんだ。

乙　………。

甲　遠慮するこたあねえ。ぱツぱツと器用に使ひねえ。ああ、やんねえ。

乙　（淋しく苦笑する）……

甲　え、そのなりでよ。なあ、嘸かし、みんな喜んで貰つてくれるだらうよ。

乙　………。

甲　はツはツは。

（間。）

甲　おい／＼、本當に、お前行かねえんなら、俺あ先きにかへるよ。

乙　……・…。

甲　え、どうする氣だ。おいらいつまでもこんな所にゐるのはいやだよ。この寒空によ……。

乙　（ぼんやりまだ考へてゐる）

甲　チエッ、仕様のねえ野郎だ。——あ、何だかこんな所に愚圖ついてやがるもんだから、俺あ下ツ腹が痛くなつて來た。——あ、一寸待つてくれ。おらあ、そこまで行つて來らあ。

乙　………。

甲　え、一寸待つてゝくれ。——そこの「共同」までだ。一寸行つてくるからな。

乙　（かへり見て頷く。そのまゝまた欄干にもたれたまゝぼんやり考へてゐる。）

（稍長い間。）

（風の音。）

（所へ、乞食丙「盲目の老人」とぼ／＼と出て來る。）

（ふと、すれ違ひざま、丙、乙にとりすがるやうにして、聲をかける。）

乞食丙　あゝ、旦那様。どうぞ、少しお恵みなすつて下さいまし。もし旦那様、——旦那様。

乞食乙　旦那様？

丙　どうぞ、お願ひでございます。哀れな年老りでございます。お恵みなすつて下さいまし。

乙　おいらあ、旦那樣ぢやねえ。

丙　いゝえ、旦那樣、そんなこと仰しやらずに。ほんの少しでよろしいのでございます。盲（めくら）の年老（としより）なんでございます。

乙　何だ、めくらか。

丙　はい。年老でめくらでございます。この雪に、ねる所もない哀れな者でございます。どうぞ頂かしてやつて下さいまし。

乙　だが、俺あ……。

丙　全く、ほんのお志だけでいゝのでございます。今日は、何も頂けなくつて、難儀をしてゐるのでございます。どうぞ、お惠みなすつて下さいまし。

乙　…………。

丙　年老が助かります。盲（めくら）のこの年老が助かります。

乙　だがお前……。

丙　ほんたうに身寄りのない哀れの年老なのでございます。それに今日は全く、まだ何にも頂かないのでございます。

乙　だが、俺だつてなあ……。

丙　本當に、そんなこと仰しやらずに。ねえ旦那樣。どうぞ、お助けなすつて下さいまし。この寒空に、誰一人たよりにする者もなく、あなた……（泣く）どうぞ、お惠みなすつて下さいまし。頂かしてやつて下さいまし。ほんのお志だけでよいのでございます。

乙　…………。

丙　お願ひでございます。お願ひでございます。

（乙、考へてゐる。ふと、汚い袋から金をとり出し、與へる。）

乙　ぢや、これだけやらう。

丙　へ、へ。（手探りで受けとり）有難うございます。有難うございます。（幾度もお辭儀をし）旦那樣、ありがたうございます。

乙　いや俺あ、本當に旦那樣ぢやねえ。

丙　いゝえ、いゝえ。これで年老が助かります。本當にありがたうございます。旦那樣。本當にご親切な旦那樣。

乙　俺あ、旦那樣ぢやねえッたら。

丙　何を仰しやいます。そんな……。いえ、ありがたうございます。ありがたうございます。旦那樣……。

乙　…………。

丙　（貰つた金を、自分の袋に收めようとしながら）おや、これは銀貨でございますね。穴があいて居りますね。

乙　さうだよ、十錢銀貨だよ。

丙　は、は、さうでございますな。それを二つもまあ、――まあ、旦那樣、この年老を可哀さうと思召して、いや

有難いことでございます。（丁寧にお辭儀をする）

乙　（いゝ氣持さうにたゞ様子を見てゐる）

丙　本當に有難うございます。有難うございます。

乙　ぢいさん、お前ほんたうに身寄りも何もないのかい。

丙　はい、左様でございます。もうこの年に、誰も頼りにするものもない、情けない身の上でございます。

乙　ふうむ。

丙　ですから、こんなに雪が降りましても、やつぱしかうして出歩かなければなりません。——どうにもならないのでございます。

乙　氣の毒だなあ。

丙　いえ。でも、これでやつと今日のご飯にもありつけます。ありがたいことでございます。

乙　何だ、爺さん、まだお前今日飯を食つてゐねえのか。

丙　はい、昨日の晩から。——いえ、お恥かしいことでございますが、何しろ盲のことでございます。人に頼んで食はして貰ふにも、本當に嫌なことでございますよ。——この慘めな年老を、欺したりからかつたりして、折角の貰ひもどうかするとたゞで取りあげられたりすることも、度々あるのでございます。

乙　ひでえことをする奴だなあ。

丙　全く殺生な奴でございます。（そのまゝ泣いてゐる）

乙　どうしたのだ。

丙　いえ、お金を頂いた上、いろんなことをきいて下すつて、——何處の旦那様か存じませんが、涙がこぼれるんでございます。

乙　なあんだな、つまらねえ。

丙　いゝえ、つまらないことではございません。全く勿體ないことでございます。（泣く）

乙　まあ、いゝやな、いゝやな。

丙　本當に、私は、こんな嬉しいことはございません……。

乙　本當にもういゝよ。泣くのは止しな。錢を貰つて泣くつて奴があるものかな。

丙　はい。——はい。

乙　おい、爺さん。これをも一つ、やらうよ。

丙　へ？

乙　これをよ。——（手に渡す）　さ、受けとんねえ。

丙　へ、まだこの上に。まあ、ありがたうございます。へ、へ、あ、これやあギザギザが——あの五十錢でございますね。

乙　先刻、何處かの——なあに、とッときねえ。とッときねえ。

丙　へ、へえ、有難うございます。ありがたうございます。

乙　何だねえ、そんなに禮ばかり云はれたんぢや、俺の方

が困つちまふよ。
丙　いえ、何を仰しやいます。旦那様。こんな有難いことはございませんよ。
乙　そんなに嬉しいかい。
丙　はい、はい、もうそれは。本當に有難うございますよ。旦那樣。
乙　（思はず快げに笑ふ）　はツはツはツ。
（あたりは稍暗い。）
（電燈は、段々明るく照らし出す。）
（ふと、支那蕎麥屋が通りかゝる。）
乙　（急に氣付いたやう）　爺さん。
丙　へ？
乙　お前先刻腹がすいてると云つたなあ。
丙　はい、何分にも昨夜から何も頂いてゐないので。
乙　さうか。――ちよつと待ちねえ。
（乞食乙、つと、支那蕎麥屋のあとを追ひ、側により何か小聲でいふ。）
そばや　え？　（ふり返り乙の身なりを見て）　何だお前か。
乙　お願ひだ。――何でもいゝから。
そばや　いけねえよ。
乙　（更に側により何か頻りにいふ）
そばや　いけねえよ。
乙　だが、頼むから。
そばや　いけねえツたら、いけねえんだ。
乙　チヨツ。
そばや　汚いぢやねえか。
（乞食丙、乙の側にゆく。）
丙　あ、もし旦那。どうか、あつしのためなら止してお呉んなせえ。
乙　……………。
丙　ご親切は有難うございますが、そりやあ、あなたが迷惑なさいます。
そばや　全くだ。汚ねえよ。
丙　本當でございます。私は何も結構なんでございますから。
乙　（なほ、蕎麥屋の側に行き、何かぼそぼそ云ひながら嘆願する）
そばや　いけねえツたらいけねえよ。
丙　本當に旦那樣。飛んでもないことをなさいます。いゝえ、全くご親切はありがたうございますが、どうぞもうそんなことはおやめなすつて……。
そばや　それ見ねえ。向ふだつて斷つてらあな。誰が乞食に……。
乙　（慌てゝ、蕎麥屋の言葉を遮りながら丙に）　ばかだな、

お前は。――お前は默つてりやあいゝんだ。
丙　でも――
乙　默つてなよ。――(蕎麥屋に)　よ、賴むから。なあ、そばやさん。
そばや　何をいつてやがるんだ。汚いやい。
乙　だつて、お前、鉢ごと買やあいゝんだらう。何でもねえぢやねえか。
そばや　いゝや、いけねえ。受取る金が汚ねえからだ。
乙　だつて、お前。
そばや　煩いよ。縁起でもねえ。もうあつちへ行つてくんねえ。
乙　(遂に怒り)　何を云つてやがるんでえ。手前だつて、商賣ぢやねえか。金を出しやあ、此方も客だ。
そばや　何が客よ。此方でことわつてる者が何故客だ。
乙　何を!
丙　もし、旦那樣、旦那樣。私は何にも本當にいらないのでございます。そばやさんも、どうかもう行きなすつて。
そばや　煩さいやい。手前ぢやねえ。此方の奴だ。
乙　(靑くなつて、慄へながら)　チヨツ、覺えてやがれ。
そばや　何を、勝手にしろ。
(蕎麥屋、ぷんぷんして去る。)
丙　(乙の側に來て)　もし旦那、旦那。

乙　……………。
丙　いゝえ、そりやあ、旦那樣のお志はようく分つて居ります。けれど、そんなことは却つて、私にも苦になります。私のやうな者のために、あんなことまでいはれて……。
乙　………。
丙　本當にすみません。飛んだご迷惑をおかけして了ひまして……。でも蕎麥屋さんだつて、無理もございません。全く私のやうな……。
乙　(投げ出すやうに)　お前はばかだなあ。
丙　いえ、それやあ、それにしたつて、蕎麥屋さんが、あんなことを云ふのは酷すぎます。受けとる金が汚いなんて、まるであなたが……。
乙　畜生奴!　あんな奴にまで――
丙　でも、それも皆私のやうな者がゐたからでございますよ。こんな汚い乞食めが。
乙　ばかにしてやがる。
丙　どうぞ、お許しなすつて下さい。本當に飛んだ馬鹿げた目にお逢はせ申しまして。――
乙　お前に云つてるんぢやねえ。
丙　それだつて。
乙　煩さいツたら。――あん畜生め!

丙　…………。

乙　あいつが何だ。高が、夜あるきの支那蕎麥屋ぢやねえか。

丙　へ、へえ。

乙　俺がどうしたんだ。俺だつて――俺だつて、いざとなりやあ……。

丙　………？

乙　ちえッ！（激しい舌打。そのまゝ默る）

（稍長い間。）

乙　（不意に呼びかける）おい爺さん。

丙　へえ。

乙　お前、先刻、俺から物を貰つて嬉しかつたかい。

丙　えゝえゝ、それはもう、何とも有難いと思ひました。何しろ今の身の上を……。

乙　有難いぢやないよ。嬉しかつたかと聞いてゐるんだ。

丙　はい〳〵、もうそれは。

乙　ばかだなあ、爺さん。

丙　はい。

乙　もしかなあ。

丙　はい。

乙　俺が、お前と同じ身分の者だつたらどう思ふね。

丙　へ？　同じ身分と仰しやいますと。

乙　――乞食さ。

丙　へ？

乙　ね、それだつたら――どう思ふ？

丙　へゝゝ、ご冗談を。――何で、乞食なんぞが私にこんなにお恵み下さるもんですか。

乙　だが、さうでないとも、限らねえぢやねえか。

丙　だつて、それあ……。

乙　ぢや、どうして、さうでねえと云へる。

丙　ですから……。

乙　乞食だつて、金はもつてることはある。今の乞食は歸りに車に乘つて歸る奴だつて、あるといふんぢやねえか。

丙　それや、そんな奴もゐるさうですが……。

乙　だからよ。それだつたら、どう思ふつてんだ。

丙　いえ、それだつたら――

乙　それだつたら、どうなんだ。えゝ？

丙　（暫く考へてゐる）

乙　えゝ？　どうする。

丙　…………。

乙　えゝ？――はつきり返事しなよ。

丙　へえ、それだつたら――貰ひません。

乙　貰ひません？――なぜだ。

丙　だつて、乞食からなんぞ。――

乙　だが、お前だつて、乞食なんぢやねえか。
丙　それはさうでございます。でも――この上、同じやうな奴からまで、さげすまれたくはありません。
乙　…………。
丙　本當でございますよ。誰が乞食からなんぞ……。
乙　…………。
丙　はゝゝ。だが乞食なんて者が、呉れるつて筈もありませんから安心ですがね。
乙　…………。
（沈默。）
（稍長い間。）
乙　（突然興奮した調子で）　爺さん、おいらお前にもつと、金をやらう。
丙　へえ。
乙　へえぢやねえ。金をやるつていふんだ。
丙　へえ。
乙　それとも、俺から貰ふなあ嫌か。
丙　いえ、そんなことはございませんが……。
乙　そんなら貰ひねえ。やるつて云つてるんだから。
丙　でも、もう先刻、あんなに頂きましたんですから。
乙　頂いたつて、いゝぢやねえか。俺がもつとやるつていふんだ。
丙　へえ。
乙　愚圖々々しねえで貰つたらいゝぢやねえか。人を馬鹿にしやがつて――
丙　そりやあなた、何を。――私はあなたを何も馬鹿になんぞ……。
乙　いゝや、馬鹿にしてるんだ。馬鹿によ。お前にまで、俺あ馬鹿にされてるんだ。
丙　いゝえ、あなた、決してそんな……。
乙　いや、さうだ、さうなんだ。俺あ……俺あ……。
丙　（少し驚いて）　ど、どうなすつたんでございます。私は何も――
乙　いゝや、つべこべ云はずともいゝんだ。さ、俺がお前に金をやるんだ。え？　お前は俺から貰ふんだよ。俺から――俺から……。
丙　へ、へえ。
乙　だがなあ、爺さん。
丙　へえ。
乙　唯ぢやいけねえ。なあ、唯ぢやいけねえんだ。俺に註文があるんだ。
丙　へえ、へえ。
乙　そこへ坐つて貰ひてえんだ。
丙　へ？

乙　いや、そこの橋の袂の所に坐つて、手をついて、そして貰つて貰ひてえんだ。

丙　………。

乙　一々、手をついて、「ありがたうございます」つて云つてなあ。

丙　へえ。

乙　どうだ。何でもないことだらう。さうすれやあ、こゝにありつきりの金はやつてもいゝんだ。

丙　私はもう別に……。

乙　何だつて。それぢやあ、お前は出來ねえとでも云ふのか。貰ふのは嫌だとでもいふのか。

丙　(權幕に驚いて)いえ、さういふ譯ぢやございませんが……。

乙　そんなら、しねえ。早くしねえ。すれやあ、やるんだ。

丙　へえ。

乙　しねえツてんだよ、早く。何をぐづ／＼してやがるんだ。

丙　へ、へえ。(慌てゝ立つて行つて、それと思ふ邊へ行つて坐る)あの、この邊でございますか。

乙　さうだ。そのへんだ。――何でもねえぢやねえか。俺が金をやるといふのに、……ざまあ見やがれ。

丙　………。

乙　あ、所で、爺さん。金は別々に投げるんだぜ。

丙　へえ。

乙　それに一々「ありがたうございます」つて云ふんだぜ。

丙　へえ。

乙　面倒だつても、まあ、通りがゝりの人間から、一々貰つてると思やあいゝ。何でもねえことだ。

丙　………。

乙　(昂然として)ぢやあ、始めるよ。いゝかい。さあ。

丙　へえ。

乙　一々「ありがたうございます」ッて云ふんだぜ。云はなけあやらねえから。

丙　へえ。

乙　(袋から金を取り出し)投げるよ。そらッ。(投げる)

丙　(拾ふ)ありがたうございます。

乙　さうだ、その調子だ。――そらまた投げるぞ。

丙　(拾ふ)ありがたうございます。

乙　そら、まただ。――何だ。そのざまは。

丙　落ちた所が分らないんでございますよ。

乙　右手の下の所にあるぢやねえか。

丙　あゝ、こゝか。

乙　ざまあ、見やがれ。人をばかにしやがつて……何てざまだ。

丙　だつて、あなた。
乙　えゝ。ぐづ〳〵云はなくつたつていゝんだ。そら、またそこへやるぞ。
丙　へえ、へえ。（拾ひつゝ）ありがたうございます。
乙　そら一つだ。
丙　へえ、ありがたうございます。
乙　どうだ、爺さん。嬉しいか。え？――そらまた一つだ。
丙　へ、へえ。――ありがたうございます。
乙　はツはツは。嬉しいか、爺さん。そら、も一つだ。
丙　ありがたうございます。
乙　俺あ、お前にやつてるんだぞ。え、やつてるんだぞ。
丙　へ、ありがたうございます。
乙　お前は俺から貰つてるんだ。なあ爺さん。
丙　ありがたうございます。
乙　はツはツは。俺あお前に……（無暗に興奮しつゝ）そらまた一つだ。
丙　ありがたうございます。
乙　（涙ぐみさへしつゝ）はツは。そら、そこへも一つだ。
丙　ありがたうございます。
乙　はツはツはツ。
丙　ありがたうございます。
乙　（ふいと急に黙る。黙つて丙を凝と見る）
丙　ありがたうございます。
乙　（投げかけてる手をおとして了ふ）
丙　ありがたうございます。――どうしたんです。旦那。ゐるんですか。
乙　（力なく）うむ。（黙つて無意識のやうに金を投げる）
丙　（音を聞いて、その方へ手をのばし）ありがたうございます。

（乞食甲、あらはれる。）

甲　（その場の様子を怪訝さうに眺めつゝ）おい、何をしてるんだい。
乙　（はつと氣がついたやうに見返り）いや、何でもねえ。金をやつてるんだ。（投げる）
丙　おありがたうございます。
乙　（投げる）
丙　ありがたうございます。
甲　おい〳〵、どうしたといふんだ。
乙　めくらだ。
甲　え。
乙　めくらの乞食だ。
甲　乞食だ？（乙を見る。それから丙を見る）

（間。）

甲　（不意に笑ひ出す）はゝゝ、さうか。それで、お前が

金をやつてるといふのか。

乙　(默つて投げろ)

丙　ありがたうございます。

甲　はゝゝ、こいつあいゝ。お前も中々味(あぢ)な眞似をするなあ。成程、さつきも云つてたからなあ。――はゝゝ、施しか。

乙　(やめろ)

甲　いや、こいつあ、面白え。おいらもやらう。やらしてくんねえ。え、おい。

乙　………。

甲　(乙に構はず)え、おい、爺さん。おいらもやるよ。

丙　ありがたうございます。ありがたうございます。旦那様。

甲　旦那様だ? はツはツは。こいつあ――。(投げろ)

丙　ありがたうございます。

甲　そらよ。

丙　ありがたうございます。

甲　そら、も一つ。

丙　ありがたうございます。

乙　(急に甲を遮り)止(よ)さう。――おい、止せ。

甲　何だ、急に。

乙　止さうよ。――止してくれ。

甲　だつて、お前だつて、やつてたんぢやねえか。俺にももう少しやらしてくれ。

乙　もう澤山だ。止せ、止してくれ。

甲　ちつと位の損は構はねえ。近來にねえ思ひつきぢやあねえか。

乙　(丙の方に向ひ叱るやうに)爺さん、もういゝよ。

丙　へえ?

乙　もういゝから、あつちへ行きな。

丙　へ?――へえ。

乙　行きなつてんだよ。お前も隨分慾ばりだねえ。

丙　へえ。だつて――

乙　いゝ加減にしねえか。行きなつてんだ。

丙　(びつくりして立ち上る)

乙　何を愚圖々々してやがるんだ。さつさと行きなよ。

丙　(權幕に驚いて)へ、へえ。行きます。行き。――驚いたなあ、ちつとも譯が分りやあしねえ。――

乙　爺さんツ。

丙　はい、はい。ありがたうございました。――旦那様、本當にありがたうございました。はい、はい、さやうなら。

(乞食丙、ぴよこ〳〵お辭儀しながら、あたふたとして去る。)

（甲と乙、別々の心で、ぼんやり雨のあとを見送る。）

（間。）

（ふと兩人、顏を元に返して、目を見合はす。乙、急にその目を外らす。）

（間。）

甲　どうしたんだ。

乙　…………。

甲　え、急に機嫌が變つてよ。えゝ?

乙　（つと甲の側を離れて、欄干の方に行く。そしてぢつと向ふを見つめてゐる）

甲　本當によ。――どうしたつてんだ。

乙　…………。

甲　え、なあ。（側による）

乙　（不意に）お前は考へなかつたのか。

甲　…………。

乙　あれが、俺達の姿なんだ。――あれが、俺達の……。

甲　…………。

（乙、急に欄干に突伏して泣く。）

（甲、ぼんやり突立つて、その後ろ姿を見てゐる。彼もまた、次第に涙ぐんでくる。）

――幕――

女優宣傳業（笑劇一幕）

人物

宣傳業店支配人
同　店員
同　給仕
女優A
女優B
女優C
女優D
巡査
新聞記者

時代

いつのことかしらない

場所

或るビルデイング内の一室

二三の事務机、接客用丸卓子、椅子、帳簿、書類棚、電話等普通の事務所と異ならない。唯、あたりの壁へ向けて、女優らしき樣々の姿態をとつた寫眞、若しくは大小のポスタアを一面に張り廻してあるのが、少し違つてゐる位である。

幕あくと女優Aと支配人、丸卓子を挾んで應對してゐる。女優はけばけばしい派手な身裝をしてゐる太つた女。

店員は向ふで帳簿類に何か頻りに書いてゐる。

女優A　（少し考へ込みつゝ）さうねえ。ぢやあ、その案にしませうか。

支配人　えゝ、それがようござんすよ。もうそれなら評判になること受合です。

女優A　でも、何だか仕事の底が見え過ぎてやしないこと。

支配人　何うしてゞす。

女優A　だつて、眞晝中銀座の眞中で、女の私が、男二人を投げ飛ばすなんて、あんまり芝居氣たつぷりだわ。

支配人　そんなことがあるものですか。……男は何うせ、私の方から差し向ける人間ですから、萬事呼吸はのみ込んでゐますし——それにあなただつて、今では立派な映畫女優さんぢやありませんか。そこをうまくやる位は朝飯前でせう。

女優A　あら、皮肉は云ひつこなしよ。何うせそんな藝の達者な女優なら、私あなたの所なんかのご厄介にはなら

ないわ。
支配人　これはご挨拶です。でも此の頃あなたは仲々藝の方でも評判がようござんすよ。
女優A　あらあんなことを云つて。隨分口がうまいのね。
支配人　なあに。たゞ事實を云つてるだけですよ、はゝゝ。やつぱし、人間相當に賣り出してくると違ひますつてね。
女優A　その宣傳も結局あなたの方のおかげ。と云ひたいのでせう。
支配人　無論、少しは私の方も自信をもつてゐますがね。
女優A　まあ。
支配人　だつて、ごらんなさい。現に今の人氣女優といはれるほどの人で、私の方の宣傳の力を藉りなかつたといふ人がありますか？　いはゞ、私の店にかゝつたからこそ、ぢやありませんか。
女優A　相變らずね。でも、私、あなたの店の宣傳をきゝに來たんぢやないのよ。――それより、本當に何う？　私が男二人まで投げ飛ばすつてことがさ。
支配人　いゝぢやありませんか。それにあなたならば格服も立派だし、大して不自然とも見えないでせう。
女優A　隨分いゝご挨拶ね。
支配人　いゝえ、さういふわけでなく、唯その……それに何ですよ。やつぱしそれ位のことをしなければ、宣傳だつて、利目がなくなつてゐる世の中ですからね。
女優A　それはさうですけれど、でも何だか餘りお芝居過ぎて白々しい氣がするんですもの。
支配人　さうですか。――ぢやあ、やつぱし前の方にでもなさいますか。
女優A　自動車から河の中へ飛び込むのね。
支配人　さうです。「美人女優自動車衝突を避けて河中に墜落。映畫そのまゝの活劇」――なんて一寸惡くないぢやありませんか。
女優A　でも、ほんとはちよいと樂ぢやないのね。第一うまくそんな風に行くかしら。
支配人　行きますとも。
女優A　だつて、――
支配人　いゝえ、何うせそのぼろトラックも醉つぱらひも此方から特別のを差し向けとくんですからね。川つぷちの角でそのトラックが正面から來る、避けようとする、醉つぱらひが前でふらつく。まごついてあはや衝突と云ふ時に、あなたが驚いて立ち上り、自動車を出る、拍子に川の中へ落つこちる。これはと驚いて運轉手も飛び込まうとする時、衆人環視の中にあなたが悠々として拔き手を切つて向ふ岸に泳ぎついて上つて來る。一寸人目をひ

くぢやありませんか。
女優A　でも着物が臺なしね。
支配人　着物位——
女優A　いえ、それはね。——でも上つて來るのがぬれ鼠ぢやあ、餘りいゝ圖ぢやないわね。
支配人　いや、そこが却つてつけ目なんですよ。今まで綺麗だつたのが一轉してぬれ鼠になる。その變化だけでも印象が強く、又同情を買ふことにもなるんですからね。
女優A　でも……。
支配人　駄目ですよ。そんなことを云つてちやあ。それ位の意氣込がなくつちやあ、效果の上りやうがないぢやありませんか。宣傳といふものは奇拔なら奇拔なほど、醜惡なれば醜惡なほどいゝんですから。まして、今のやうに——
女優A　いゝえ、本當にもう講義は澤山。それは、うまくさへ行けば、無論私だつて、それ位のことはやるつもりよ。
支配人　大丈夫ですつたら。そのあとは又私達の商賣ですもの　無論、少しだつて手ぬかりなんかありやしません。一旦さうして人の口の端に上つたが最後、矢繼早にいろんな宣傳もしますからね。
女優A　さうを、それならいゝけど、——で、場所は何處にして？
支配人　さあ、それですなあ。——いや、それは何れ運轉手の方と相談して改めて御通知しませう。
女優A　あゝさう。で、日は？
支配人　さう、今度の日曜あたり、お天氣さへよければね。
女優A　えゝ結構。ぢやあ、よろしく願ふわ。本當にうまくね。きつとよ。
支配人　承知しました。有り難うございました。
女優A　ぢやあ、さようなら。
支配人　御免下さい。
（女優A去る。）
店員　あんな太つちよで、幾らか賣り出せますかね。
支配人　でもあの顏にはやけに挑發的なものがあるぢやないか。
店員　何だか變に淫蕩らしい所がね。
支配人　それがいゝんだよ。却つてね。何しろこの商賣にやあ、平凡な縹緻よしといふ奴が一番困るんだよ。
店員　それやあ、さうですね。だがあのスタイルで河へでも落つこちたら隨分見物でせうね。
支配人　ほんとにさ。此方が見たい位だ。はゝゝ。
（支配人、ふと氣附いたやうに机上のベルを押す。）
（給仕隣室の處より顏を出す。）

支配人　お次の方。
給仕　はい。（去る）
（女優B、活潑に入つてくる。とても奇拔な身裝。）
支配人　いやあ、これはこれは、いらつしやいまし。ようこそ。
女優B　今日は、又ご相談に上つたのよ。
支配人　いや、何うも毎度有り難う存じます。
女優B　この間の飛行機の一件は一寸うまく行つたわ。
支配人　さうでせう。だがね。（自分の口を指す。默つてろといふ表情）
女優B　えゝ分つてよ。今度も一つあれ位なのをやつて貰ひたいの。何しろ又一寸素晴らしい寫眞をつくるの。だからその前に一つうんと宣傳して貰ひたいのよ。
支配人　さうですか。――ですが、あなたのは手を替へ、品をかへ、隨分やりましたからね。
女優B　ぢやあもう種切。
支配人　すぐそれだ、あなたは――冗談でせう。手前共で種切なんて藥にしたくもありやあしませんよ。
女優B　でも世間では、あんたとこはこの頃あんまり名案も出ないやうだつて噂よ。
支配人　ばかなことを。だつて、それなら私んとこ以上の店が何處かにありますか。依然として、その權威を獨占してるぢやありませんか。
女優B　相變らずの自家廣告ね。尤もご商賣だから仕方はないかもしれないけれど。
支配人　皮肉を云つてらしたつて、やつぱしあなただつて、お客樣の間は安心してゐますよ。はゝゝ。
女優B　――まあとに角、そんなことは何うでもいゝわ一つ急々に素晴らしいのを考へ出して頂戴。とても奇拔で、全國七千萬の同胞の度膽をぬくやうなのをね。
支配人　いふことが大きいんだから。
女優B　當り前よ。私は望が大きいんだから。
支配人　いやはや。
女優B　本當の話。引き受けられて。
支配人　見縊つちやいけませんよ。出來なくつて、看板に顏を合はせられますか。
女優B　えらいッ。――それでこそ私も刮目して期待してるわ。
支配人　あれだ。上げたり下げたり。――いや降參しますよ。あなたのやうな人には。
女優B　あらいやあよ。そんな――とに角頼んだわよ。二三日中に又下相談に來ますからね。本當に一つ飛切の奴をね。
支配人　承知しました。

女優B　ぢやあ、さようなら。
支配人　失禮。
女優B　（行きかけて一寸ふり返り）　あ、ちよいといゝものあげませうか。
支配人　何です。
女優B　とてもおいしい舶來の飴。
支配人　それは御馳走樣。（受取つて食ふ）
女優B　いゝお藥になるんですつて。
支配人　（わざと驚いた顔をして）　え。何の。
女優B　ほゝゝゝ。さようなら。
（女優B去る。）
店員　相變らずですね。
支配人　本當にね。だが、あれでゐて、變にコツを心得てゐるんだから始末におへない。
店員　全くでさ。とても一條縄でいかない奴でさ。
支配人　尤もそれだけ賣出してゐるんだがね。だが結局、此方もあんなのは始末はいゝよ。
店員　全くね。――ですが、飛行機つて、此間の冒險飛行の一件でせう。
支配人　あゝさう。同乘の替へ玉の一件さ。あいつあんなことすばすば云ふんだもの。おどかされるよ。
店員　全くですね。
支配人　あれだけは何處までも秘密にね。
店員　よござんすとも。
（支配人、ベルを押す。）
（給仕來る。）
支配人　あとがゐるのかい。
給仕　はい。
支配人　來て貰つて。
給仕　はい。
（給仕去る。）
（女優C來る。いやにしやならしやならしてゐる。）
女優C　（變に氣取つた色つぽい調子で）　あの、私、ちよいとお願ひしたいんですが。
支配人　さあさあ、何うぞ此方へ。
女優C　は、ありがたうございます。（しなを作つて）　あの、あなた樣が、支配人樣でいらつしやいまして。
支配人　は、私がさうです。
女優C　あら、さよですか。初めまして……私、かういふものなのですが、あのう、ちよいとやつぱりあの方のことでお願ひしたいと思ひまして。
支配人　（名刺を一寸見て）　は、やつぱしご宣傳の方。
女優C　は、さやうでございますの。
支配人　今、何方にお出勤ですか。

女優C　は、あの「赤い花」演藝座附でございますの。
支配人　はあ、あのボードビルの方の。
女優C　は、さよですの。
支配人　さうですか。では踊子さんの方。
女優C　いゝえ、あの一寸した喜劇の方へ。
支配人　さうですか。――で、その宣傳の方ですが、何うした程度、性質のものがようございますかね。
女優C　あの、程度とか、性質とか申しますと？
支配人　いや、方法にも種々あるものですからね。かう大仕掛けのや、簡單なのや、それに奇拔なのや、深刻なのや、それからかうちよいと綺麗事で行くのや、それとも色つぽいのとかね。
女優C　あら私、色つぽいなんて……
支配人　いけませんか。
女優C　だつて、私、あの初心は娘役ばかりしてゐるのですもの……
(支配人一寸店員をふり返る。店員くすりと笑つて向ふを向く。)
支配人　いゝぢやありませんか。娘役なら尙更。色つぽいのは可なり有効なんですよ。殊に藝術界の名士か何かと浮名が立つてごらんなさい。忽ちにして名女優です。
女優C　あら、――でも、私見たいな者と、そんなことになるなんて方……
支配人　なるんぢやない。するんです。尤も浮名でなく、喧嘩にしたつて、別れ話にしたつていゝのですがね。
女優C　だつて、そんなこと、私……
支配人　ぢやあ外のにしませう。お嫌なら……
女優C　あら私、何も嫌だなんて、あの――ちつとも……
支配人　まあ、それぢやあ、何か簡單な綺麗事の方でご相談しませうか。
女優C　いゝえ、あのう。……
支配人　あゝ、さうさう、以前ね着物の各部へですね。滅茶滅茶にリボンをつけ散らして、ねり歩いた人があるんです。
女優C　あのリボンをですつて。
支配人　さうです。洋裝をしてね、帽子、傘、手提袋、靴、それに着物は襟口、袖口、腰廻り、どこもかもびらびらさして、毎日毎日しやなりしやなり、人出の所をよつて歩き廻つたのです。
女優C　まあ。
支配人　一寸外國人にだつてない服裝ですからね。流石に目に立つて、忽ちに人目をひきつけました。そこでいゝ仇名が出來て了つたんです。
女優C　仇名ですつて。

支配人　「リボン孃」。さういふんです。一人が云ひ出すと皆それに應じて、到頭「リボン孃」「リボン孃」つてそりやあ受けましたよ。

女優C　まあ、「リボン孃」。いゝ名前ですことね。あゝ私、其時分、まだ田舎にゐたんですけれど――でもちよいとそんな話をきいたことがありましたやうに思ひますわ。

支配人　無論その人のことですよ。そして私の方の店の考案です。所で何うです。何かさう云つた式のものでは。

女優C　よござんすわね。私も、そんな風のなら出來るやうに思ひますわ。少しは氣耻かしいやうだけれど。――

支配人　いや、そんなこと云つてちや駄目です。引込思案が一番いけないんですよ。大膽に、何處までも押し强くやるんです。何んなことでも構はないから、やり出したらばね。結局向ふがまけて、此方が押し切るといふ所まで行くわけですね。

女優C　はあ。でも、何かそんな案があるんでございませうか。

支配人　丁度、此間今の件から考へついて、簡單なのですが、まだ何方にもお話ししてないのが一つあるんですがね。

女優C　はあ。

支配人　つまり何です。色とりどりの豆電氣をネ、極めて奇拔な圖案によつて、着物へ裝置して、歩くに從つて身體の諸方で光つたり消えたりさせるんです。つまり、裝身イルミネーションですね。それでもつて夜の公園とか、靜かな散歩路などを歩き廻るんですね。それも一日や二日でなく十日でも二週間でも、人がもう「またあれか」と煩さがるほどね。その中にはきつと若い新奇好みの靑年達が「夜光る」女なんて、きつともてはやすに違ひありませんからね。

女優C　さうですかしら。

支配人　凡て見た眼にきれいで、變つてゐて、手取り早いつてのが、現代的要求ですから。

女優C　それはさうですわね。

支配人　何うです。やつてごらんなすつては。只今丁度持ち合はせの中では、最も早手廻しな出ず入らずの案として、これなどが至極恰好かと思ひますがね。

女優C　でも、それで一躍有名になれませうか。

支配人　さあ、一躍なんてことは、少々無理でせうけれど、相當の効果はきつとあると思ひますよ。まあ、こゝいらから仕立て上げて行つたら何うです。一旦一寸でも人の目についたら、もう占めたものですからね。あとはもうずつと樂ですから。

女優C　さう？　――ぢやそれにお願ひしようかしら。

支配人　お衣裳並びに裝置は、私の方で充分工夫致しますし、宣傳の方は諸方の新聞とも連絡をとつて大々的に整頓してをりますから。

女優C　ぢやあ、いつそそれにしませうか。

支配人　お氣に入らなければですが――何ならそれになすつたら。

女優C　さうですね。

（女優C考へ込んでゐる所へ、不意に女優D飛び込んで來る。みすぼらしい身裝、興奮した顏。）

（給仕追ひ縋るやうについてくる。）

女優D　いゝえ、いゝんです。（給仕をふり放し）　私はぢかに支配人さんに逢ふんです。

給仕　でも順が來るまでは、いけないんです。

女優D　私は、宣傳なんぞ頼みに來たんではないのよ。談判があつて來たんです。

給仕　何方にしてもいけないんです。順番が來るまでは。

女優D　だつて、あんたはてんで私を取り次がうともしないぢやありませんか。

給仕　そんなことはありません。たゞ……

女優D　いゝえ、分つてゐます。あんたは私の身なりを一目見て、急に冷淡になり出したんです。私にはよく分つてゐます。

支配人　（給仕に）　困るぢやないか。今來客中なことは分つてるぢやないか。

給仕　いえ、それは幾度も云つたんです。だから順番を待つて下さいつて。だけどこの人はまるで聞かないんです。

支配人　そんな無茶な。――（不愉快らしく女優Dの方へ向ひ）　若し、何の御用か存じませんが、何分今この通り來客中なんです。それに私の方の店の性質として、凡てご相談は絶對秘密を保たなくてはならないんですからね。そこへ無斷でさうづか〳〵お入り下すつては困るのですが。

女優D　でも、私は是非一時も早くあなたにお目にかゝつてお話したいと思つたものですから。

支配人　ですから、御用ならば、ご順をお待ちになつて下されば。――

給仕　さうです。順番があるのです。私は順番以外にお取次することが出來ないんです。

女優D　だつて私は――。

支配人　（仕方なしにと云つた風で）　では一體、ご用事は何なのです。

女優D　いゝえ私は、あなたにご忠告したいと思つて參つたのです。少しあなたの反省を求めたいと思つて。

支配人　忠告？――反省！――何を。

女優D　まあ一言で云へば、あなたにすぐ、こんな職業をおやめになつて頂きたいと思つてゞす。

支配人　飛んでもない。商賣をやめる？

女優D　さうです。一體あなた方の今やつてるご商賣といふものは何ですか。實に輕薄な、出鱈目な仕事で藝術のためにまじめな努力を怠らない本當の女優といふものを擧つて邪道にひき入れるやうな職業ぢやありませんか？

支配人　一體あなたも女優さんなんですか。

女優D　さうです。私も眞の藝術を志す女優の一人です。その立場から、私はもう默つてゐられなくなつたのです。いかに宣傳の世の中とは云へ、あんまりなことだと思ひます。

支配人　だつて、仕方もないでせう。それがいはゞ時代の要求なら。

女優D　でも、それが非常な害毒を流すといふ結果は許せないぢやありませんか。ですから、私は直接あなたに相談して、自分でその非を悟つて頂き、思ひ切つてやめて頂きたいと思つて來たのです。

支配人　亂暴ですな。が、然し私の方にしても立派にその筋の認可を得てやつてゐる仕事ですよ。それにやつてるにはやつてるだけの理由もあれば、必要もあるんですよ。

女優D　それはさうでせう。けれどあなたの決心一つで世の中の多くの女優達の墮落を少しでも防ぎうるとすれば、あなたも、少し考へたつていゝぢやありませんか。

支配人　（苦笑しながら）大變なことになりましたね。が、まあ、あなたも考へてごらんなさい。一體、今の世の中に何んな事業だつて宣傳といふことに力を入れないやうな事業家は一人もありませんよ。早い話が、宗教だつて、古來布教と云ふことをやつてゐるんですからね。

女優D　いゝえそれとこれとは違ひます。あなたの所などは力量があらうとなからうと、そんなことはまるつきり構はない。唯ばか〳〵しい好奇心を煽つて賣り出しさへすればいゝ。それだけぢやありませんか。

支配人　だつて、そこが私の方の商賣なんですよ。第一お客樣がそれを望んでるんですからね。私の方は唯その手足となつて手續きの上の事務をお引き受けしてゐるに過ぎないんです。

女優D　ですから、その手足がなくなつたらきつとその根性の曲つた人達も仕方なく、もつと自分の本當の立場を反省するだらうと思ふんです。

支配人　それは嘸かし結構でせうが、では私の方はどうなるんです。

女優D　あなたの方なんか元々事業の性質を考へないんですから。

支配人　何を云つてるんだ。勝手な……。

女優D　でも、いかにあなた方だつて商業道德といふことは考へるでせう。だつて、ごらんなさい。唯澤山のお金を拂つて、耻も外聞もなく、唯卑しい宣傳だけに浮身をやつす極く下等な人達だけが結局認められ賞讃され、世間にもてはやされて行くなんて……。本當に思つても堪らない。何といふやくざな嫌な世の中になつて了つたものでせう。私それを思ふと全く口惜しいと思ひます。情けない氣がします。本當に私……

支配人　とに角私の方の意嚮はさうです。幾度仰しやつても。まあ、さう愚痴をこゝでお並べになつて下すつても私の方では致し方はないのですから。何うぞもういゝ加減にお引きとりをお願ひします。

女優D　えゝ。默つて下さい。何が愚痴です。この悲しむべき事實を嘆いてゐるのが何が愚痴です。あなた方のやうな良心のない方には、私達の心は分りますまい。分るもんですか。

支配人　又別に分る必要もありませんしね。

女優D　何て人だらう。よろしい。あなたの方がそのおつもりなら、私達にだつて覺悟があります。私達は何處までも自力で賣り出して見せます。世間に認めさして見せます。何處までも藝術の力で。藝術そのものゝ力で。

支配人　結構です。何うぞ、御隨意に。が、こゝでそんなことをいくら仰しやつても仕方がありませんよ。私の方ではお客樣でない方の宣傳は致さないのですから。

女優D　本當に、本當に、何といふ人達だらう。あゝ本當に私は、この良心のない墮落した……。

支配人　もし、もし、こゝでそんな大きな聲をなさらないで下さい。このビルデイングにだつて近所はあるんですよ。

女優D　いゝえ、します。しますとも。そんなことが何ですか。私がこゝで少し位大きな聲を上げても、あなたの所の商賣が齎らしてゐる害惡に比べれば、ずつと〳〵罪は輕いのです。

支配人　ばかなことを仰しやるのも大抵になさい。私達はあなたが婦人だと思つて隨分こらへてゐるんですよ。さ、もうお聞きすることはありません。出て行つて下さい。

女優D　いゝえ、行きません。私は云ふだけのことは云ひます。

支配人　こゝはあなたの家ではありません。出て行つて下さい。

女優D　いゝえ。行きません。

支配人　出ておいでなさい。そんなばかなことがあるものですか。（店員に）君、この方をおつれしてくれ。

店員　は。――（Dの側により）さ、お出で下さい。

（女優D、見向きもせず坐つてゐる。）

店員　さ、おいでなさい。

（店員手をとらんとす。女優D激しくその手を拂ふ。）

支配人　おい、少し手荒でもいゝ。出て貰つて了へ。

店員　はい。さ、お立ちなさらないと、無理にでも出しますよ。

女優D　いやです。いやです。私はいふだけのことをきいて貰はなければ動きません。

店員　ばかなこと。出て下さいッ。

（店員手を取つて引き出さんとして女優ともみ合ふ。給仕も加勢する。が女優D意地になつて居据わらうとし、引きずられて行きながら頻りに逃げ廻り、そこらのものをあたり構はずにしがみついて片ッ端から落したり、壞したり、破いたりする。帳簿類小棚、灰皿、ポスタアの破れ、電話機、裝飾品、凡てあたりに散亂す。戸口の所では、遂にガラスを破壞しながら、なほこれにしがみついて離れず。店員と給仕手こずつてへとへとになる。女優C驚いて逃げ出して了ふ。）

支配人　何て強情な女だ。おい給仕、下の巡査を呼んでこい。巡査に引渡して了はう。

（給仕去る。）

支配人　いつまで頑張るつもりです。巡査が來ますよ。

女優D　巡査が來たつて、何が來たつて、構ひません。私は云ふだけのことはいふのです。

支配人　もう云ふだけのことは云つたぢやないか。

女優D　いゝえ、私は私一個の女優として來てるのぢやないんです。眞面目な女優全體のために來てるんです。こんなことでおめ〳〵引き下れません。

支配人　チョッ、ばかな。ぢやあ勝手にするがいゝ。だが、もうわしはあんたの云ふことなんか聞かないから。

（給仕巡査をつれて上つて來る。巡査の後ろからこつそり帽子を被つた青年がついて來る。彼は默つて後方からこの場の樣子を眺めてゐる。新聞記者なのだ。）

巡査　何が起つたといふのですか。

支配人　いえ、この婦人が、滅茶苦茶なことを云つて怒鳴りこんで來て動かないんです。

巡査　はあ。何か强請（ゆすり）にでも來たんですか。

（女優きつと巡査を睨みつける。）

支配人　いえ、さうではないのですが、突然やつて來て、私の方の商賣をやめろなんて飛んでもないことを云ひ出すんです。そしていくら説得しても何うしても聞かなくつて、果てはこの亂暴です。まるで無茶です。

女優D　いゝえ、亂暴はあなたの方です。あなたの方がす

るから、こんなことになつたのです。私にいはせるだけのことをいはしてさへくれゝば――

支配人　そんなことといつまで云つてたつて同じことぢやないか。人を馬鹿にしてる。商賣をやめろなんて。

巡査　一體、この婦人は何なのです。

支配人　やつぱり何處かの女優さんなんださうですがね。私の方の、女優宣傳の仕事を不都合だと云ふんです。餘りしつッこいので、營業の妨害になるから歸れといふと、やめるまで歸らないと云つてこの始末なんです。

巡査　それは少し亂暴だね。（女優Dに）君、君、そりやあ君が無理だ、そんなことを云つたつて、こゝの事務所だつて立派に鑑札を受けてやつてゐる仕事だからね。

支配人　それごらんなさい。誰が考へたつてさうです。

女優D　いゝえ、許されてる、許されてないの問題ぢやないのです。元來がこの商賣そのものが不都合だといふのです。

支配人　然し私の方は何も詐欺や不正を働いてるわけぢやない。

女優D　いゝえ、詐欺や不正も同然です。こゝの店の宣傳の結果として、何れだけ女優といふものゝ眞價が不平等にされてゐますか。しかもさうしたことから、今ではどの女優もどの女優も、本來の藝術などといふものを全るきり考へもしないで、唯人氣の前に、又その人氣を賣るための宣傳のために、もう何物をも犧牲にして顧みないといふ有樣です。人氣のためには、一にも宣傳二にも宣傳で、血眼です。そして、滔々と墮落して行くのです。それといふのも全くかういふ商賣が存在するからです。火元は慥かにこゝなのです。

支配人　ばかなことを云つては困る。それはその人達の心柄ぢやないか。何も私が惹き起したことではない。

女優D　いゝえ　これが弊害を一層助長してゐるのです。煽つてゐるのです。

巡査　だが、やつぱりそれは人が悪いやうだね。とに角そんなことは寧ろ劇場か、撮影所にでも歸つてから云ふことだらうな。

支配人　さうです、さうです、さうですとも。

（靑年記者、支配人の側によつて來る。）

記者　一體あの婦人はいつ頃から來てるのですか。

支配人　なに二三十分前から來てるんですがね。

記者　さうですか。何處の女優ですか。

支配人　まだそこまで聞いてゐないんですが。

記者　名前は。

支配人　いいえ、それも。（がすぐ不審を起し）があなたは何方ですか。

記者　いや私は――太陽新報の記者です。
支配人　記者？
記者　えゝ。
支配人　何うして又こゝへ。
記者　なあに、一寸下の事務所へ行つてると警官を呼びに來られたものだから。
支配人　いゝえ、さういふことでなく、――實はこの事務所は一定の方以外に、無斷で入つて頂かないやうにしてるんですがね……
記者　さうですか。それは何うも――（一寸顏に不快な表情を見せ、默つて女優Dの方へ行く）
支配人　あの、若し、……
（記者に呼びかけるが、記者はその儘支配人の方に向かない。）
巡査　（女優Dに）兎に角こゝを出たまへ。ね、本當にこの商賣の邪魔になることだから。
女優D　でも私、餘り口惜しいんです。こんなばかなことが世の中に……
巡査　いゝぢやないか。そんなことは又他の雜誌か新聞にでも云へばいゝことで、こゝでのことぢやないんだ。
女優D　いゝえ、でも私は、こゝでだつて藝術のために、私達正しい女優のために默つておくわけにはいかないのです。
巡査　そんな小難かしいことは、まあ兎に角出てからにしたまへ。出てからに。
女優D　だつて私――
（愚圖々々してゐる所へ記者口を出す。）
記者　失禮ですが、あなたのお名前は。
女優D　私の名前？　鎌井しん子です。えゝ、私は何も個人的な問題で來てゐるのではないんですから。何も名前をかくす必要はありません。
記者　結構です。所で鎌井の鎌は鎌倉の鎌？
女優D　えゝさうです。
記者　ご出勤の先きは。
女優D　プランタン撮影所。
記者　はあ、プランタン。で、ご出身地は。
女優D　出身地。
記者　えゝ。失禮ですが、東京では――
女優D　ありません。越後です。
記者　あゝさう、越後。で學校は。
女優D　えゝ女學校は卒業してます。
記者　何處？
巡査　君、君、もういゝぢやないか。こんな所でさう何も、
（女優Dに）さ、もういゝ、出たまへ、出たまへ。

女優D　いゝえ、一寸待つて下さい。いえ、出ます。出ます。出ますけれども一寸、一寸だけ待つて下さい。
巡査　だが、幾度云つたつて同じことぢやないか。
女優D　でも、全く腹が立つんですもの。何うしたつて默つてゐるわけにはいかないんですもの。こんなにまでなつて來た時代、こんなにまで人氣を爭はなければならないなんて、これでは全く議會も同樣ですわ。私達決して代議士なんか笑へませんのよ。
巡査　（思はず笑ふ）云ふことが變つてゐる。
女優D　何を笑ふのです。全く私達にとつては今や眞劍の問題ですのよ。眞の藝術の向上や、少しでもその發達を考へてゐるものには、實に、實に……
巡査　（遂に憤然として）もういゝつたら。しつッこい奴だな。さあ、出ろ、出ろ、譯を云つてるのが分らないのか。
女優D　だつて、私は云つてるぢやありませんか。藝術のために、本當に眞面目な私達仲間のために、まだ〳〵私は……
巡査　いゝ、出ろ、出ろ。（無理に引き出す）
女優D　（悲鳴を上げて）だつて、私、藝術のために藝術の藝術の……
（遂に扉の外に二人とも消える。記者も思はず茫然として見てゐたが、ふと氣附いたやうに腕時計を見て、）
記者　あッ、夕刊の締切だ。
（といひ様、飛び出して了ふ。）
店員　（漸く吾に返つたやうに散亂せるあたりを見廻しつつ）やれ〳〵、飛んだ奴に舞ひ込まれたものだ。
給仕　（同じくあたりを見廻し）まるで嵐のあとだ。
（二人とも思はず顏を見合はせて、吐息づく。）
支配人　（不意に）しまつた。一杯、してやられた。
（店員給仕、思はずふり返る。）
兩人　何です？
支配人　立派にあの女の宣傳をしてやつて了つた。
兩人　？……
支配人　宣傳の本家へ暴れ込んで――チエッ、上には上を行く奴がありやあがる。
（三人茫然突立つてゐる。）

――幕――

秋の終り（一幕）

黑　川
とも子　妻
鍛冶　友人
看護婦

黑川の病室。日本間。――秋の日の午後の明るい光が靜かにさし込んでゐる。――秋の日の午後の明るい光が

黑川の病室。日本間。――秋の日の午後の明るい光が靜かにさし込んでゐる。看護婦が時計を見ながら脈をとつてゐる黑川の枕許には、看護婦が時計を見ながら脈をとつてゐる。すむと、病人の身體から體溫計をとり出しすかして見る。それから默つてそれ〳〵、溫度表につけこむ。

妻とも子入つてくる。

とも子　篠崎さん。お茶をいれましたから、――あちらで。

看護婦　ありがたうございます。

とも子　何うぞ。

看護婦　は。

（看護婦、會釋して行く。）

とも子　（側に來て）少しおやすみになれまして。

黑川　うむ。

とも子　ご氣分はいかがですの。

黑川　………。

とも子　お顏の色はずつといいんですよ。

黑川　今日は朝から少し氣分がいいやうだ。

とも子　さうでせう。……段々よくなつてゆく證據ですわ。

黑川　子供は？

とも子　まだ、お晝寢からさめませんの。

黑川　………。

とも子　ほんとによくねる。をかしい位ですわ。

黑川　あいつもこの頃、丈夫になつたらしいね。

とも子　夜なんか、暴れどほし私、夜中に幾度蹴られて起されるか知れない位ですのよ。

黑川　（微笑）

とも子　目方だつて、この頃ずつと違つて來ましたわ。

（間。）

黑川　……あいつの大きくなつた所を見たいなあ。

とも子　見られるぢやありませんか。何故？……駄目、あんたは。何うしてそんなことばかり仰有るんですの。

黑川　………。

とも子　芳澤さんだつてそれを仰有つてらつしやるんです

わ。自分で餘計な神經を惱ますのが一番いけないんです
ッて。……
黑川　分つてゐる。自分の身體だもの。……
とも子　ぢやあ尙更ですわ。
黑川　だが、俺は何もそれを氣にしてるのではないのだ。
とも子　つまらない。……それよりお藥は上つたんですの。
黑川　先刻のんだ。
とも子　さうですか。ぢやあ夕方まではいいんですのね。
黑川　…………。
とも子　今日は、外もそりやあ溫かなんですわ。空だつて
それやあ、きれいに晴れてゐますの。當分いいお天氣が
つづきさうですのね。
黑川　（外を眺める）
とも子　今の中ね。……この時候のいい間に少し氣をおち
つけて養生さへなされば……
黑川　…………。
とも子　くさくさなさることなんかないわ。もう暫くの辛
抱……さうすれば何もかもよくなるの。……
黑川　小鳥が來て鳴いてるな。
とも子　あらさうですか。（見ろ）――四十雀らしいのね。
先からあの梅の樹へはよく小鳥が來ますのよ。……
黑川　本當にいい天氣らしいなあ。……

とも子　…………。
黑川　人出が多いことだらうなあ。
とも子　……　……。
（間。）
黑川　だあれも來ないね。この頃。
とも子　ええ。……やつぱり、少し離れてもゐますしね。
黑川　鍜冶もあれつきり。……やつぱり病人の側に來るの
は嫌なのかなあ。
とも子　…………。
黑川　和田や木村。あれは分つてゐる。だが。……
とも子　お忙しいんでせうよ。みなさん、夫々。……
黑川　忙しくなくつても、來ない奴は來ないさ。後藤や中
村。……一邊だつて來てくれない。
とも子　…………。
黑川　だが結句、この方がいいにはいい、……斯うして一
人で靜かにねてゐる方が、心持がしみじみとして、氣が
おちつく。……
とも子　…………。
黑川　段々人にも會ひたくなくなる。……もつとも段々生
きてゐたくなくなりもする。……
とも子　あなた。
黑川　……　……。

とも子　駄目よ。そんな。――

黒川　よし、もういはない。――一生云はなくつてもいい。――一生たつてもう何程もないんだ。

とも子　知りませんわ。ばかな。……それよりよくなつたら、何處へ眞先に行くのかでもお考へになるといいわ。

黒川　さうだ。それもいいだらう。――何處へ行く。

とも子　さあ、何處へ。――靜かな、溫かい、やつぱり溫泉ね。

黒川　さう。矢張り溫泉だね。信州か、それとも伊豆の。……。

とも子　何うしても伊豆だわね。溫いのは。

黒川　それも、人の餘り來ない、ずつと南の方へ行くんだね。伊東か、もつと南へ行つて蓮臺寺か。……いつか伊東の訥子の別莊で見た梨の花はきれいだつたぜ。

とも子　訥子。役者の？

黒川　ああ。それから、海岸の方のお寺にさいてゐた椿の花。……四月だといふのに、宿の貸浴衣に羽織で寒くない時さへあつた。……

とも子　まあ。……私あつちは知らない。でも伊香保へ行つたことがあるの。

黒川　潮の匂がつんとして。……だが、今家は何うなつてるんだい。

とも子　え？……

黒川　俺がこのままで永引くとしたら。……叔父さんの方の話は何うなつた。

とも子　そんなこと。……

黒川　そんなことではない、若し……

とも子　いいの。それは、何うにでもなるわ。

黒川　旅も矢張り駄目か。

とも子　………。

（長い間。）

とも子　（不意に笑ひ出す）いや、あんたは、すぐ、そんな方へ話をもつて行くんぢやない。自然に落ちて行くの。

黒川　もつて行くんぢやない。自然に落ちて行くんだ。

とも子　話を替へませうね。ぢやあね、よくなつたら一等さきに召上りたいものは何。私にとつては、その方が先決問題だつたかもしれなかつたわ。

黒川　………。

とも子　ね。こんな時、却つて、本當に自分が何が一等好きだつたか分るでせう？

黒川　さうかなあ。

とも子　だつて、一等印象の深いものが一等先きに思ひ出せる筈だと思ひますわ。

（間。）

黒川　駄目だ。
とも子　なぜ。
黒川　何を思ひ出したつて皆まづい。いやまづくなつて了ふ。一等好きなものまでまづくなつて了ふ。止してくれ、そんな話は。
とも子　………。
黒川　俺の食慾のまるでないのを知つてる癖に。……止してくれ。
（間。）
（不意に表に人の訪れるらしい聲がする。）
とも子　（直ちに立つ）何方か見えたらしいわ。……一寸。
（それをしほに立つて行く。）
（とも子歸つてくる。）
とも子　鍛冶さん。
黒川　さうか。
とも子　今日は——
黒川　一寸逢ひたいなあ。
とも子　いいんですの。
黒川　とほしてくれ。少し頼みたいこともある。
とも子　さうですか。——でも、餘り長くはいけませんのよ。
（とも子去る。）

（鍛冶とも子と共に來る。）
とも子　ようこそ。
（座蒲團を出して、出て行く。）
鍛冶　隨分暫く。ご無沙汰して。
黒川　いや。
鍛冶　來よう、來ようと思ひながら、つまらない用事で忙しいものだから、……つい失敬しちやつて。……
黒川　………。
鍛冶　工合は何うだね。いくらかいい？
黒川　うむ。まあ。……
鍛冶　顔色なんかいいぢやないか。
黒川　いいのがいけない。
鍛冶　ばかな。——よくつて悪い奴があるものか。
黒川　ふむ。——まあいいさ。
（間。）
鍛冶　みんなからもよろしく。逢ふと矢張り君の噂が出る。
黒川　さうか。——だが誰も來ない。
鍛冶　——やつぱりね。——何のかんのッて忙しいからね。
黒川　………。
鍛冶　石川はこなひだ、支那へ行くと云つてたし、河合も暫く關西の方へ旅行してゐたやうだ。
黒川　……さうか。

鍛冶　僕も、暫く何處かへ旅行でもして、息を拔きたいと思ふ位だ。

黑川　僕なんか、まるで山家にゐるやうだ。段々世間とも遠ざかつて……

鍛冶　いいぢやないか。さういふ時におちついて物を考へるんだね。僕なんかも思ひでもしたら、今の慌しい氣持が少しはなくなつて、物も少しはまともに考へられるかもしれないと思つてる位だ。

黑川　…………。

（間。）

（とも子、菊の花を一杯花瓶にさしてもつて來る。）

とも子　鍛冶さんに頂きましたの。それから御見舞も……。

黑川　さうか。有難う。――（目でさしつつ）そこいらあたりへおいてくれ。

とも子　え？　ここ？――ここ？

黑川　あ、そこだ、そこらへんへ。

（とも子花瓶を枕許近くにおいて立ち去る。）

黑川　きれいだね。此間から少し花を欲しいと思つてた所だ。

鍛冶　さうか。それやあよかつた。

黑川　花だの子供だの見てゐりやあ、結局何も惱みはないんだね。

鍛冶　それやあさうだ。――今の君なんか一番それがいいんだから、さうしてるんだね。今急に焦る必要もなしさ。

黑川　…………。

鍛冶　さうして、呑氣に暫く養生さへしてゐれやあ。……

黑川　分つてゐる。……だが、それも淋しいもんだ。

鍛冶　それは君。――

黑川　誰も段々訪ねてくれなくなる。女房と子供との聲だけをききながら、一つ事を考へつづける。……

鍛冶　……

黑川　先きのないことを先きのないまんまに考へてゐる。……

鍛冶　いけないね、そんなに悲觀的になつちやあ。……

黑川　だがね、君だけは來てくれる。……僕はそれだけは感謝してるんだぜ。

鍛冶　困るよ。さうセンチメンタルぢやあ。

黑川　然し、君、君は一人切りになる氣持、――ただ一人だけ置かれてゐるといふことでなしに、誰からも離れて一人切りこの世界から放り出されて行く氣持を考へたことがあるかい。つまり死さ。自分だけが息が絶えて、何の感じもなくなつて、燒かれて、粉々になつて、……このいろいろの物を見た眼も、いろいろの物を食つた口も、それからこの自由に振り舞はしたり、溫い人の手を握つ

たこともある手も、……さうだ、幾人も幾人もの温い。……それもこれもみんなばらばらになつて、かけらになつて、一緒くたに一つの甕に。……

鍛冶　君、君、止し給へ。ばかな、何て想像だ。君は、ねてゐてそんなことばかり考へてゐるのかい。

黒川　アルチバアセフの短篇にあつたね。幾つか。……死後に埋められて、腐つて、蛆蟲が全身を匍ひ廻る所を想像する。……

鍛冶　おいおい、いつまでもそんなことを云つてるなら僕はもう歸るよ。

（間。）

黒川　さうだ。いはない約束だつた。一生だつていはない約束だつた。

鍛冶　なに、一生なんて誓ふ必要もないがね、兎に角病氣の間、そんなこと考へてるなんて全くいけないよ。

黒川　一生つて長いかね。

鍛冶　そりやあ吾々年輩の者にとつては、まあ。……

黒川　全くだ。君達は當然さう思つてゐられるんだから。

鍛冶　本當に歸るよ。

黒川　まあ、待つてくれ。まだいいんだ。まだ。もう少うしゐてくれ。

鍛冶　だつてさ。

黒川　今歸られたら、僕はたまらない。このままで放つていかれたら。……

鍛冶　君が下らない話を止しさへすれば、兎に角。……

黒川　止す、止す。本當に止す。だから。……

鍛冶　ぢや、そんな下らない考へは追拂つちまつて。——さうだ。暫く花でも見てるんだね。

黒川　花？……うむ。

（長い間。）

黒川　（不意に）俺に金を貸してくれるやうに誰かに頼んでくれないか。

鍛冶　金？

黒川　うむ、俺は癒りたい。どうしても。……癒るには今……。

鍛冶　どの位。

黒川　二三百圓。……

鍛冶　二三百圓？

黒川　ああ。……癒れば無論働いて返せるし。……でなければ、香典で返すさ。

鍛冶　縁起でもない、何を云ひ出すんだ。——よし、それはいいが、兎に角そんなばかげたことといふのだけは止してくれ。

黒川　………。

（とも子入つてくる。）

とも子　（茶を差し出しながら）　何うぞ。

鍛冶　ありがたう。――ここは日當りがよくつて結構ですね。

とも子　ええ、午後までずつと當りつ切り、それだけはいいんですの。

鍛冶　何よりです。（黒川の方を見）　こんな日當りのいい所にゐて、君のやうな暗い考へをもつなんて不思議だね。

黒川　…………。

とも子　何か申したんですの。また。

鍛冶　氣の滅入つたことばかり云つて仕樣がありませんよ。

黒川　……君達には分らないさ。

鍛冶　分らないことがあるものか。だが何方にしても氣を引き立てなくつちやあ。世の中が一つの戰だと同樣に、病氣だつてさうさ。元氣のいい方がかつのさ。弱氣では戰はずして敗れて了ふよ。はツはツは。

とも子　本當ですわ。此方がしつかりしてれば病氣なんかねえ。

鍛冶　でもあなたがお達者で何より。――黒川の病氣がよくなつたら、今度は一つあなたがねて了つて、あべこべにうんと介抱させてやるんですね。

とも子　ほんとですわ。ほほほ。

鍛冶　ははは。

（間。）

鍛冶　（黒川に）　所で、君いつかスツポンのソツプが何うだとか斯うだとか云つてたね。あれを一つ今度こしらへて貰つて來ようか。

黒川　いや、そんなものいらないさ。

鍛冶　あれの效能をのべ立ててゐたのは君ぢやないか。たしかあの家は淺草だつたね。

黒川　いいよ、君んとこからは隨分遠い。……

鍛冶　遠い位。何を云つてるんだ。僕は病人ぢやあなし、――なあに平氣さ。それにあのすぐ近所には河合もゐるんだよ。今度引張り出して來よう。

黒川　河合。河合か。……あいつも何うしてるかなあ……久しく逢はない。

鍛冶　とに角やつてるさ。この頃はかなり調子がいいらしい。

黒川　あれがね。あんな奴でも賣り出してくるのか。彼奴の小說なんか、なつてないやうに思つてたがね。

鍛冶　さうでもないさ。まあ勉强家だつたからね。

黒川　勉强したつて仕樣がない。あんな奴。何うにもならない凡くらだつたぢやないか。

鍛冶　（ぢつと相手を見てゐる）
黒川　それぢやあ、石川は何うなんだ。この頃。
鍛冶　それも同じさ。大したこともない。
黒川　でもあいつの方が受けがよかつたぢやないか。支那へ行くんだつて？
鍛冶　あ、まあ、そこいらを見物して來るだけだらう。
黒川　その外に仕様がないさ。あいつに何の支那の知識があるものか。――大方上海の淫賣の研究でもして來やがるんだらう。
鍛冶　あ、森がね、君には少しよくなつたら、また何か書いて貰つてくれと云つてたよ。今「新時代」の編輯をやつてるんだ。
黒川　森？　あいつがね。
鍛冶　病中雜記か、何か。……いろんな構想や何か、ねてゐて考へないかね。
黒川　考へるもんか。……森がか、さうか。道理で、あの雜誌にあいつの創作みたいなものがのつてるのをいつか廣告を見たやうに思つた。……俺ん所へ遊びに來てゐる時分、何て下らないことばかりいふ奴だらうと思つてたがね。
（間。）
鍛冶　奧様。赤ちやんは何うです。
とも子　ええおかげ様で、あれの方は、丈夫過ぎる位で。
黒川　君。ぢやあ野澤は何うしてるね。あいつもいつも不平ばかり並べてる奴だつたが何だか近頃書いたものが評判がよかつたんだつて。……
鍛冶　そんなこと誰に聞いた。
黒川　誰だか、この前來た人間が云つてたよ。
鍛冶　なあに、仲間ほめさ、あいつのものなんか。――
黒川　さうだらうね。何うせそんなことだらうよ。
鍛冶　さうとも。（とも子に）赤ちやんはたしかこの春でしたね。
とも子　えゝ、さうなんですよ。
鍛冶　早いもんだなあ。
黒川　早いもんだよ。――しかし君、あの西田。――
鍛冶　君、そんな話はもう止さうよ。云つたつて面白いことも何にもないんだよ。何うせ、この頃大して才能のある奴も出てゐないんだからね。
黒川　それはさうさ。どん栗の背比べ時代なんだから。……
鍛冶　ははは。それほど分つてれや文句はない。
黒川　あんな富田みたいな愚論家でさへ、ひとかど物を云つてる。
鍛冶　あいつは馬鹿だよ。
黒川　才かち頭の、俺をみれや目の敵にしてやがつた……

あ、あいつは何うだ。
鍛冶　あんな男の書いた物、誰もよまない。
黒川　だつて、あんな奴だつてまだ何か洒唖々々書いてるんだらう。
鍛冶　食ふためにさ。當人側から見てやればそれも仕方がないさ。
黒川　………。
鍛冶　奥様、それぢや、僕もそろそろ失禮しませうか。餘り長くつても却つて……
とも子　さうですか、それぢやあ、いつも失禮致しまして。
鍛冶　ぢやあ。――君、失禮するから、お大事に。あの方のことは承知したから。（立ちかける）　ぢやあ、おちついてね、養生してくれ給へよ。
黒川　（不意に興奮した聲で）俺は養生なんかしたくない。
鍛冶　冗談ぢやない。今が大事な時ぢやないか。
黒川　……………。
鍛冶　焦々しないでね。また近い内來るから。……
黒川　（遮るやうに）　いや、來ていらない。わざわざ愚弄しになんか決していらない。
鍛冶　愚弄？
黒川　さうぢやないか。まるで、噓ばつかり吐いてゐる。君達は元氣だよ。幸福だよ。分りすぎるほど分つてる。

鍛冶　何うしたんだ。急に。……
黒川　まともに云つてる時はまともに返事するがいい。俺は何も嫉妬心や何かから聞いてるんぢやないんだ。それだのに少しも本當のことを云はない。俺のために皆をやつつける。惡口を云つて片附けて了ふ。
鍛冶　ははは。それは君の方ぢやないか。
黒川　その心持を先くぐりして――見え透いてるよ。その裏からお前はもう何程も先きのない病人だ。さう云つた目付が鼻の先きにぶら下つてるぢやないか。
鍛冶　困るなあ。そんな馬鹿なことを云ひ出しては。僕は何も……
黒川　初めつから、この世の者として應對してやしないんだ。歸つてくれ、歸つてくれ。君が來ると、俺は胸くそが惡くなるんだ。その丈夫さうな世間を樂しみ切つて落ち着き拂つてる顔をぶら下げて、入つて來る時から俺は積に障るんだ。歸つてくれ。歸つてくれ。
鍛冶　……　……。
とも子　まあ、何うしたといふんですの。急にそんな――そんなことを云ひ出したりして……
黒川　默つてろ。お前に云つてるんぢやない。鍛冶に云つてるんだ。何だ、親切ごかしな大きな顔をして。歸つてくれ、歸つてくれ。

とも子　あなた、餘りなことをいふもんぢやありませんわ。そんな失禮な、――

黑川　お前だつてさうだ。何だ、鍛冶の話の中にのせられて、まるで、ポカポカしたお天氣の日に散步でもしてる氣で物を云つてる。

とも子　あなた。……あなた。……

黑川　俺には、分るんだ。皆分るんだ。勝手にしろ。皆俺の敵だ。俺のひとりぼつちを、死んでく者のひとりぼつちをはつきり分らしてくれる殘酷な奴ばかりだ。あつちへ行つてくれ　鍛冶、もう二度と來てくれるな、彼方へ行つてくれ、行つてくれ。（咳き入る）

とも子　あなた。――あなた。――困りますわ。そんなに興奮しちやあ。一番いけないんですつたら、それが。……

鍛冶　兎に角僕失禮します。（黑川に）君、すまなかつた。失敬する。來るのがいけなかつたら、いつでも止す。ね、だから怒らないで、そんなに怒らないで……

黑川　彼方へ、……彼方へ……（眼を瞑つて手を振つてる）

とも子　何うぞ、（鍛冶に目配せする）

鍛冶　ぢやあ。……失禮。（あたふたと去る）

とも子　さ、氣をおちつけて、氣をおちつけて。……駄目ですよ、そんなに興奮しては。……

黑川　ばか。……ばか。お前も彼方へ行け。彼方へ。俺の側へなんか來るな。皆家を出て行つて、賑かに暮せ。明るいお天陽樣の下で、わあわあ笑つて暮らせ。行つちまへ。行つちまへ。……

とも子　（おろ〳〵して）あなた、あなた、私、困りますわ、困りますわ。……

黑川　行つちまへ、……行つちまへ。……

とも子　篠崎さん、篠崎さん。

（看護婦慌てて入つて來る。）

看護婦　まあ、何うしたんですの。……何うしたといふんですの。

とも子　急に興奮しちまつて……何を云つたつて、まるで……

黑川　行つちまへ、行つちまへ、お前なんか彼方へ行つちまへ。

看護婦　そんなこと仰有るものではありませんわ。氣をおちつけて、氣をおちつけて……そんなに、そんなに興奮するのが一番毒なんぢやありませんか。

黑川　早く……早く、死んぢまひたい。（咳き入る）

看護婦　奧さん。（目配せする）

（とも子頷いて急いで立つて行く。）

看護婦　さ、お氣を愼めて下さいよ。いけません、いけません。――暫く辛抱して。

（酸素管を枕許に引張つて來る。）

看護婦　本當に暫く辛抱して、おちついてゐらして下さいよ。ね、——後生ですから。……

（黑川、そのままぢつと目を瞑る。）

（看護婦、ぢつと樣子を見てゐる。）

（黑川、ふと蒲團を被つて了ふ。……）

（看護婦、そこいらを片附けて、靜かに立つ。）

（長い間。）

（とも子、入つて來る。枕許に靜かに坐り、病人の樣子をぢつと眺めてゐる。いつともなく自分の物思ひに耽つて行くらしい。）

（夕日が赤く差し込んで來る。）

（間。）

（黑川、そつと蒲團を額からのける。）

黑川　お前か。

とも子　ええ。

（間。）

黑川　鍛冶は歸つたかい。

とも子　ええ。

黑川　あれからすぐ？

とも子　ええ。

（間。）

黑川　鍛冶は怒つてたかい。

とも子　いいえ。

黑川　ちつとも？

とも子　ええ。……却つて心配してらつしやいましたわ。

（間。）

（不意に何處か遠くから樂隊の音が小さく聞えてくる。）

黑川　樂隊だな。

とも子　ええ。

黑川　……………。

とも子　停車場の近くに、また新しい酒屋が出來たらしいから。——あすこの店開きかもしれませんわ。

（間。）

黑川　だが、——お前は、何とも思はなかつたのか。

とも子　私？　……何をですの。

黑川　…………。

とも子　あ、鍛冶さんの時？

黑川　…………

とも子　思ふもんですか。あんなこと位。……

黑川　…………。

（間。）

黑川　さうか。誰も怒つてはくれないのか。ちつとも？

……人並に……本氣に……
とも子　……………
黑川　俺があんなことを云つてるのに。あんな無茶なことを云つてるのに。……
とも子　だつて。……
黑川　分つてゐるんだ。だからいふんだ。なぜ、みんな怒つてくれないのか。なぜもつと本氣に。……もつと當り前に。……何うせ、俺は……俺は……。
とも子　……　……
（稍長い間。樂隊が矢張り聞えてゐる。）
黑川　（不意に）花をくれ。その花を。
とも子　花？……これ？
黑川　（頷く）
（とも子、默つて二三輪をとつてやる。）
（黑川それを片手で受取つて貪るやうに眺めてゐる。）
（と急にそれを額にひしと押しあてて目を瞑る。いつの間にか手がその花をもみくちやに押しつぶして了ふ。）
（とも子、思はず顏を背ける。）

——幕——

證據（一幕）

人物

中年の紳士
若い妻
若い男
通行の若夫婦
百姓とその女房
郵便配達夫

海沿ひの山の、中腹を廻る崖上の路。
下手から少し勾配になつた路は、上手に突き出た崖の一端を廻つて向ふに續くらしい。その崖の曲り角のあたりには、自動車などの危險を防ぐためか、片側に太い角石が柵代りにずつと置かれてゐる。向ふは廣々とした海、そこへ青々しい岬が幾重にも突き出てゐるのも美しい景色である。
五月の日の午後、もう十分初夏の氣を孕んだ明るい日光、冴え〳〵した小鳥の聲。

下手から和服の若い夫婦連れがやつて來る。女は丸髷關西風に裾をからげ派手な長襦袢の裾を見せてゐる。男は鞄、女は袋包を提げてゐる。

男　（ふと向ふを見て）あ、あこや、あこや、もうあない近いとこに見えたある。
女　あゝ、あこだつたか。
男　あの坂んとこに、ずうと家が並んだるやろ、あれが皆溫泉宿や。
女　さうか、中々えゝとこだんな。
男　きまつてるが。わいがつれてくとこや。
女　へ、まるで自分のとこみたいだすな。
男　はゝゝ。
女　ほゝゝ。（二人去る）

（上手から一人の郵便配達夫來る。小鳥の聲に聞き惚れるやうに、ちよいと上を見上げたゞけで默つて下手に去る）

（間。）

（と、また上手から洋服を着た少し老けて見える中年の紳士と、男とはかなり年の違つた、派手な身なりの若いその妻らしい女とがやつて來る。）

（女は綺麗な洋傘をさしてゐる。先きに立つて少し坂道を下りかゝると、）

女　まあ、いゝ景色だこと。——まるで油畫のやうだわ。
夫　——
女　あの海の色から空の色、素的ぢやないこと。
夫　うむ。
女　本當に初夏の五月つて感じがするわね。
夫　うむ。
女　少しこゝで休んで行きませうよ。私草疲れたわ。（柵代りの石を手巾ではたいてかける）あなたもおかけなさいよ。
夫　うむ。（なほ海をぼんやり眺めてゐる）
女　あなた。おいやなの。
夫　いや。かけるよ。（側に行く）
女　いやね。——何か私にお氣に入らないことでもあつて。
夫　何もないさ。
女　だつて、先刻から何を云つたつてたゞうむ／＼つてばかり氣がないつてありやあしないわ。
夫　さうかね。
女　さうかねえだつて、私知らない。（外方向く）
夫　おい／＼。——だつて俺はそんなつもりぢやないんだよ。
女　ぢやあなぜ、そんなに私に冷淡なの。
夫　冷淡かい。

女　きまつてるぢやありませんか。
夫　困るなあ。
女　あら、困るのは私だわ。
夫　ぢやあ、何うすればいゝんだ。
女　まあ。
夫　お前の氣に入るのには？
女　知りません。
夫　それでは困るぢやないか。
女　あなたは馬鹿ね。
夫　さうかね。
女　まるで感じといふものがないんだわ。
夫　……………
　（間。）
女　（一寸氣をかへて）ねえ、あなた。
夫　うむ。
女　先刻逢つた人達ね。
夫　あの若夫婦。
女　えゝ。——あれ何と思つて。
夫　何とも思はないさ。
女　それぢや話にならないわ。——ねあれ、新婚旅行ぢやないでせうか。
夫　さうではないらしいね。——まだ結婚してからさう經

つてもゐないらしいが。
女　…………
夫　…………
女　ねえ。
夫　何だい。
女　私達、新婚旅行つてものしませんでしたわね。
夫　さうだね。
女　今度の旅行が、結婚して始めての旅行ですわね。
夫　さういやあ、さうだね。
女　ならまあ、新婚旅行ですわね。
夫　うむ。
女　それとも、そんな風に考へるのはおいや。
夫　いや、それもいゝだらうよ。
女　はつきり仰しやいよ。そんな頼りない返事をなさらないで。
夫　うむ。
女　うむでは分らないわ。
夫　でもね。——
女　えゝ。——
夫　…………
女　ねえ、なあに、でもねえつて、仰しやいよ。何か云ひかけたんですから。

夫　いや、さう開きなほられては困るが。
女　いゝぢやないの。私是非それを伺ひたいわ。
夫　いやなあに、——唯わしにしちやあ二度目の結婚だしするから、といふことさ。
女　まあ、二度目ぢやいけないの。新婚旅行つていふものは。私には初めてよ。
夫　それは、さうだがね。
（間。）
女　（つんとして）あゝ、さういふおつもり。いゝわ。何うせ、それは私なんぞつまらない女ですもの。
夫　なにを云つてるんだ。
女　それは先の奥様はようございましたでせうからね。
夫　おい／＼、まるで話が違ふぢやないか。
女　いゝえ、ようございますよ。だから、私はこんなに構ひつけずに放つたらかしにされるんでせう。
夫　違ふつたら。
女　違ひません。
夫　そんなばかな。
女　ばかでございます。私は。
夫　仕様がないね、——第一、先の女房なんてお前新婚旅行の柄か、あれはいはゞ糟糠の妻——
女　結構でございますよ。

夫　いやさうぢやないさ、弱るなあ。俺が糟糠の妻と云つたのはさ、そんな意味ぢやないんだよ。あれは、お前俺が田舍で貰つた女だよ。俺がまだ東京へ出て一旗上げる前の。――その田舍者のあれと俺とが新婚旅行なんてする柄かい。
女　…………
夫　考へたつて分るぢやないか。
女　でも、それを無殘念だと思つてらつしやるんでせう。
夫　ばかなこと。
女　いゝえ、ばかなことではないわ。本當にあなた始終思ひ出していらつしやるんでせう。
夫　新婚旅行のことを？
女　いゝえ、先の奥樣のことを？
夫　（うつかり）　それは時々。
女　それごらんなさい。それだけ伺へば澤山ですわ。
夫　さうぢやないつたら。
女　今更云ひ直したつて駄目ですよ。
夫　だけどさ。
女　もう何にも聞きたかありません。私はつきり分りましたから。
夫　おい／＼、困るねえ。そんな誤解をしちやあ。
女　何が誤解なものですか。それに此の頃の仕打が何よりの證據ぢやありませんか。
夫　證據？
女　えゝ、さうですとも。
夫　俺の仕打に何の證據がある。
女　ぢやまああなた、考へてごらんなさい。此の頃のあなたの私に對する熱情のない、冷淡な外々しい態度を。
夫　しかし、俺は斯うやつて、お前と旅に出て、お前の好きなやうにしてゐるつもりだがなあ。
女　えゝ、それはさうよ。でも、それだけぢやありませんか。
夫　それだけつて。
女　ねえ、あなたのは、さうして私を旅に連れて來てやつたといふつもりだけなのよ。だつて宿にゐたつて、たゞ私と一緒に泊つて一緒にご飯を頂くといふばかりぢやありませんか。せめて浮々して愉快さうに話し一つして下さるぢやなし、――
夫　でも俺は無口の方だからね――
女　それにしたつてもです。もつとなさり方があるわ。まるで私を打つちやり放しで、暇さへありやあ、手紙を書いたり、始終東京へ電話をかけたり、でなければ新聞といふ新聞を買はして來て、經濟面ばかり讀み耽つてゐるかでせう。まるで、私なんぞゐるんだかゐないんだか考

へても見ないつて風ぢやありませんか。
夫 そんなばかなことはありやしない。
女 でも事實さうなんですもの。
夫 困るなあ。――しかし、俺も相當忙しい人間だからね。
女 それは分つてゐます。
夫 分つてたら、少しは察してくれ。
女 ですけれど、それぱかりぢやないんですもの。
夫 何故さ。
女 いゝえ、先の奥樣をお思ひ出しになるのにも忙しかつたと云ふことですよ。
夫 困るね、そんな無茶を云つちやあ。
女 無茶ぢやありませんよ。私こそ、いゝ面の皮だわ。
夫 だがまあ、それも人情だからさ。
女 あらそれが。又私は現在の妻にこそ渾身の愛を注いで下さるのを人情だと思つてよ。
夫 それは分つてるさ。
女 でもあなたは、さうぢやないのね。
夫 ばかなことを。俺は何よりもお前を愛してゐるさ。
女 噓仰しやい。今、先の奥樣を思ひ出すのが人情だと云つた口の下から。
夫 しかし、それは話が違ふさ。
女 違ふもんですか。
夫 ぢやお前は、女房なんぞ死んで了つたら一度だつて思ひ出しもしないやうな男が好きだと云ふのかい。
女 ………
夫 たとへばお前がもし假りに先きに死んだやうな場合にも?
女 ………
夫 俺はそんな男になりたくないよ。
女 でも生きてる私に。
夫 だから、俺は、こんなにも深くお前を思つてゐるといふんだ。
女 でも私、あなたの仕打を見てゐると――
夫 信じられないと云ふのかい。
女 えゝ。だつて、證據がないんですもの。
夫 又證據か。
女 その上、今の處では、みんな反對の證據なんですもの。あなたの愛情が薄いと云ふ――
夫 さうかねえ。
女 さうかねえではすまないわ。
夫 ぢや、何うすればいゝのだ。
女 だから、その證據を見せて下さい。
夫 ………
女 あなたが本當に私を思つてるといふ證據を。

夫　お前はそんなにも證據を欲しいのか。
女　えゝ、さうよ。それがなくつては私、あなたの愛情を
　信じないわ。
夫　信じない？
女　えゝ。
夫　こんなにお前を愛してゐると云つても。
女　でも、それは口先きだけの言葉だわ。
夫　言葉ぢやない。事實だ。
女　駄目。何と云つたつて。――私はあなたの證據を見た
　いんですから。
夫　…………
　（間。）
　（夫、凝と女を見てゐたが、ふと彼女の側により、彼
　女を抱擁して强く接吻せんとす。）
　（女、すげなくそれを避けて。）
女　駄目。そんな月並なこと。私、そんなことぢや嫌だわ。
夫　…………
　（夫、氣拙げに退く。）
　（手持無沙汰な沈默。）
　（間。）
　（下手の方から一人の若い男、細いステッキを振りな
　がら出て來る。型のハイカラな洋服を着たきやしやな
　男である。）
　（ふと立ち留つて女を見る。女も人の氣勢に氣付き、
　急に形を改めてさりげなくちらと見返る。二人顔見合
　せて稍々驚く形。男が言葉をかけるのをためらつてゐ
　る。女も何となく夫の方を窺ふ。夫無關心に男の方を
　見てゐる。）
　（と、女何か急に思ひつきたるものゝやうに若い男に
　聲をかける。その面には俄に媚笑が浮んでゐる。）
女　まあ、若山さんぢやありませんか。隨分暫くでしたわ
　ね。
若い男　（相手の言葉に勇氣を出して）やつぱしたか子さ
　んだつたんですか。本當に暫くでした。
女　お變りなくつて。
若い男　えゝ有り難うございます。おかげ樣で。あなた
　も？
女　えゝえゝ、相變らずですわ。――あ、あなた、まだ御
　紹介しませんでしたわね。宅ですの。――（夫に）あな
　た、この方は若山さんと云つて、私の以前のお友達。
夫　あゝ、さう。初めまして。
若い男　僕若山です。何うぞよろしく。
　（雙方機械的に會釋する。）
女　（若い男に）まあ、あなたも此方にいらつしたんです

か。ちつとも存じませんでしたわ。いつ頃から。

若い男　えゝ、二三日前から。

女　まあ、さうですか。――あら、あなたもこゝへおかけにならない。（女すぼめた洋傘をわきへよせる）

若い男　（喜んで）えゝ有り難う。――すみません。（側へかける）

女　でも全く、本當にこゝいらはいゝ景色ですのね。あなた始終此方にいらしつて。

若い男　始終つてこともありません。

女　さう。でも本當にいゝ處だわ。

若い男　そんなにお氣に入りましたか。――そしてお宿は。

女　この下の吾妻屋の別館ですの。

若い男　あゝ新築の、結構ですね。離れてゐて。

女　でもつまりませんのよ。

若い男　なぜ。――何うしてゞす。

女　だつて宅は隨分忙しい身體でせう。ですから此方にゐましても、まるで東京にゐるのと同じなんですもの。

若い男　そんなことはないでせう。

女　いゝえ、さうですのよ　毎日用事ばつかり。それは溫泉に來てるんだか、事務所にゐるんだか分らない位ですわ。ほゝゝ。

若い男　まさか、（夫の方を見る。夫苦笑して默つてゐる）

女　（構はず）本當に、あなたでもちと遊びに來て下さらない。

若い男　えゝ、それは有り難うございますけれど、お差支は――

女　あら、差支へなんぞちつとも。――私だけはいつも一人ぽつちで退屈してるんですから何うぞご遠慮なく。

若い男　いえ、お差支へさへなければ喜んでお伺ひしたいんです。

女　それに以前のお友達のことも伺ひたうございますわ。

若い男　あのダリヤ詩壇社の連中ですか。

女　えゝ。――隨分皆様變つてらつしやるでせう。

若い男　えゝ。それはもう隨分。

女　さう？――さうでせうね。

若い男　第一、あなただつてさうぢやありませんか。

女　ほゝゝ、まあさうね。

夫　（他意なく）おい、もうそろ／＼行かうか。

女　あら、まだいゝぢやありませんか。折角若山さんもいらつしやるのに。

夫　さうかい。

若い男　（急に立つて）いえ私ももう失禮します。

女　あら、何うして。私達構ひませんのよ。

若い男　でもまた、改めてお伺ひしますから――

女　さう。でもまあ、これぢや失禮ですわね。（と云ひながら立ち上ろ途端、石の上においてあつた洋傘を崖下におとして了ふ）
女　あらツ。
夫　何うした。
女　あれ、かさを落して了ひましたわ。
若い男（覗き込んで）あれ〱、あんなに遠くに落ちて行つて了つて。
女　あら、あんな所に留りましたわ。
夫　おゝ、崖の途中だね。
女　困りましたわね。何うしませう。
若い男　でも、あすこなら、餘り急な崖でもないから、取りに行けませう。
女　さうでせうか。
若い男　僕が行つて取つて來ませうか。
女　いゝえ、いゝえ、危うございますわ。
若い男　大丈夫ですよ。
女　いゝえ、いゝんですの。取るんなら宅に取つて頂きますから。
夫　うむ、あすこなら、取れないこともないね。
女　ぢや取つて來て下さる。
若い男　いや、僕が取つて來て上げませう。

夫　いや、わしが取つて來てやりませう。
若い男　しかし危うございますよ。
夫　なあに、大丈夫です。家内のものにあなたのご迷惑かけてはすみません。
（夫、石を越えて降りかゝる。）
女　あなた、大丈夫。
夫　大丈夫だとも。俺だつてこれ位のこと幾度もやつてゐるからね。（見えなくなる）
女（下を覗き込みつゝ）あなた、危うございますよ。あら、もう早から滑つちやつて――そんなに急がないでもいゝのよ。氣をつけて――あら又滑つちやつた。
（間。）
女（突然大聲に）危い！　そんな石持つからだわ。本當に大丈夫なの。あら、また滑つちやつた。もう三度よ。あれでうまく傘の所まで行けるんでせうか。
（間。）
女　まあ、若山さん、ごらんなさい。あのおつかな吃驚の樣子つたら、滑稽な位だわ。――ね、あれぢや餘り大丈夫な恰好ぢやないわね。ほゝゝ。
（間。）
女（以後殊更に媚態的な動作を以て）一寸若山さん。あなたも少し此方へ寄つて下さらない。

若い男　え、寄るつて。
女　私の側まで。
若い男　（近づきつゝ）からですか。
女　もつと私に近附いて、私につかまらせて頂戴。もつと下を見るんですから。（肩につかまりつゝ）よくつて？
若い男　えゝ〳〵、構ひませんとも。
女　しつかりしてゐて頂戴。
若い男　えゝよござんすとも。
女　（よりかゝるやうにしつゝ）あら、でもまああんな下の方まで行きましたわ。――あら、また滑つてゐる。本當に恰好つちやないわね。
若い男　…………
女　まるで熊か何か轉がつてるやうだわ。あらツ、帽子をおつことしちまつて。――あれ〳〵今度は帽子があんなに下まで行つちまひましたわ。
若い男　…………
女　まあ、ごらんなさい。あんな困つたらしい顏をして見上げてゐますわ。（手を振りながら大聲を出して）えゝ見えてよ。困つたわねえ。
若い男　こんな所からそんな聲を出したつて聞えるもんですか。
女　でも、あの情ない顏つたら。――あゝ、でも又降りて――あゝ、たうとう洋傘の所まで行きましたわ。
若い男　今度は帽子ですね。でもあんなに遠くに行つちまつてお氣の毒ですね。
女　あら、洋傘だけもつて上つて來ちまひますわ。
若い男　帽子はとらないつもりなんでせうか。
女　さうと見えますわね。――あの若山さん。
若い男　え
女　あなた手を貸して下さいな。
若い男　手を。
女　えゝ。私、もつとのり出して見たいの。（男の手をとりつゝ身體をのり出す）
若い男　でも、餘りのり出すと危いですよ。
女　大丈夫よ。
若い男　でも――
女　いゝのよ。それよりもつとしつかり握つてゐて頂戴。
若い男　（にら〳〵して）あれ、しかしそんなにのり出しちや、二人で手を握り合つてるのが下に見えるぢやありませんか。
女　（素知らぬ風で）あれ、まだあんな所だわ。上るのは中々骨が折れると見えますわね。
（若い男、この時分から女の樣子をぢつと見つめ始める。）

女　あら、まだ滑つてるのよ。上つては滑り、上つては滑り、ほゝゝ。

若い男　(突然) 奥さん。

女　上つて來たらきつと、洋服のあつちこち泥だらけにしてゐるに違ひありませんわ。

若い男　(熱心に) 奥さん。

女　洋傘一本のために飛んだことになつて了ひましたのね。帽子はなくするし――餘計な心配はするし――

若い男　(愈々熱心に) 奥さん。

女　だつて本當だわ。さうぢやないの。

若い男　奥さん。――僕こんなに云つてゐるのが聞えないんですか。

女　(初めて向き直り) あら若山さん、なあに。

若い男　僕、あなたに伺ひたいことがあるんです。

女　まあ、何ですの。

若い男　僕眞面目に伺ふんですがね。

女　えゝ。(男の語氣に少し尻ごみする)

若い男　あなたはやつぱしあの方を愛してはいらつしやらないんですね。

女　宅を。――何うして。

若い男　でなくて、そんな輕蔑的な口吻は出ませんもの。

女　…………

若い男　あなたは、やつぱし世間の云ふやうに不幸な境遇にいらしつたんだ。(興奮して) 本當に僕お察しゝます。心からお察しゝます。

女　…………

若い男　表にそんな風に快活になすつてらつしても、お心の中には何んなに苦悶の多いことでせう。本當に心からお察しゝますよ。――尤も誰が考へたつて、あの方とあなたとが共鳴出來るとは思へませんからね。――あなたは本當に優れたご婦人だのに、あの人はいはゞ唯一個の平凡なる俗人ですもの。ご無理もありませんよ。

女　…………

若い男　でも僕は嬉しいと思ひます。奥さん、今日初めてはつきりと僕はあなたの心が分りました。あなたは僕をやつぱし親しい昔の友人と思つてゐて下すつたんですね。あんなにまで遠慮のない言葉や、信頼し切つた素振り、――奥さん、しかし僕も本當に心からの以前の友人だといふことを申し上げますよ。それこそ本當に最も忠實な――いや、いつそ打ち明けることを許して下さるなら奥さん、僕は實は何年か前から、何んなにかあなたを戀してゐたのです。愛してゐたのです。

女　(驚いて) まあ、何を仰しやるの。

若い男　いゝえ。奥さん、本當です。本當です。今になつ

て、そんなに白ばくれるのは止して下さい。僕だつて、もう何もかも打ち明けて云つてゐるのですから。（思はず女に手をかける）ねえ。何うか。何うか、僕の心も察して下さい。（引きよせんとする）

女　あら、そんなこと、いけませんわ。

若い男　僕は決して嘘を云つてゐません。眞實です、本當です、ですから……

女　あら、いけませんつたら。夫が來るぢやありませんか。

若い男　でも僕は――僕は――本當に……（激しく女を抱きよせて接吻せんとする）

女　（身をもがきながら）何をなさるんです。失禮な。離して下さい、離して――いけませんッたら。離して――あの人を呼びますよ。離して、いけませんッたら、――あなた、あなた――

（若い男と頻りに爭ひながら、力抗せず思はず、女が男の腕にがつくりと抱かれる所へ。）

夫　おーい。

（と云ひながら洋傘を先きに立てゝ夫顏を出す。上つて來る。帽子はなく薄禿げた頭を見せ、服は所々泥だらけにしてゐる。若い男、思はず女を離す。夫は默つて側に寄つて來る。）

夫　（眞面目な顏付で女に）この態は何うしたといふんだ。

（女默つて青くなり俯垂れてゐる。）

夫　（若い男に）何うしたといふんだ。君。

若い男　（これも青くなつて）いえ――

夫　何がいえだ、はつきり云ひ給へ。

若い男　………

夫　君は、これがわしの妻だといふことは知つてゐるんだらう。

若い男　………

夫　何といふ無禮なことだ。

若い男　すみません。すみません。――全く僕が、惡かつたんです。僕が一時の興奮から、すみません。すみません……

夫　（女に）お前は何も云はないのか。

女　………

夫　おい、お前はこのわしに何にも云ふことはないのか。

女　………

夫　おいッ。

若い男　（思はず出て）いゝえ。奧樣に何も惡いことはないのです。僕が惡かつたのです。僕が――

夫　默り給へ。

若い男　でも僕が……

夫　默れつたら。――いや君のやうな人間の禮儀を辨へな

い男と話すのも汚らはしい。今度のことは許してやるから行つて呉れ給へ。行つて——行つて了ひ給へ。

（若い男、夫を暫く凝と見つめ、やがてすご〱と去る。）

（間。）

夫　（再び女に）おい、お前はこの俺に何と挨拶する氣だ。いや、何の言譯もあるまい。何といふ態だ。何といふ不倫なことだ。——

女　（漸く顔を上げて）あなた、——

夫　いゝや、俺はもう何もきかぬ。そのお前の仔細らしい口から、何を云はれたつて信用はしまい。

女　いゝえ、あなた。あれは全く若山さんが——

夫　いゝや、若山ばかりぢやない。お前も承知の上だ。ぐるだ。お前達は初めつから俺を欺いてゐたのだ。

女　そんなこと、そんなこと斷じてありません。私はたゞ——

夫　駄目だ。事實が證明してゐる。

女　いゝえ、いゝえ違ふんです、そんなこと。——確に若山さんが、私を無理に抱きすくめたんです。

夫　いゝや、二人は同罪だ。

女　でもさうなんです。さうなんです。

夫　ぢや、その證據があるか。

女　證據。

夫　さうともお前は先刻あんなにも證據々々と云つてたぢやないか。

女　でも、それは——

夫　ないではすまさぬ。其上俺にはもつと〱事實を證明する外の證據はいくらもあるんだ。

女　…………

夫　俺は何もかも始めから見てゐた。お前達が二人で樂しさうに寄り添つてゐたのも、肩に手をかけたり、手をつなぎ合つたりしてゐたのも、——お前達は私を見て、笑つたぢやないか。人を洋傘一本の爲にあの下までやつておいて、——あれだつて初めつから魂膽があつたのかしれない。

女　いゝえ、そんなこと決して、——

夫　いゝやさうぢやない。しかもその擧句お前は急に見えなくなつたんだ。長い間。かなり長い間。——そして最後に俺が見たのがあれだ。

女　…… ……

夫　それでも初めからお前達が潔白だと云へるか、云へるなら云つて見ろ。

女　だつて、私。——本當に決してそんなつもりはなかつたのです。いやそれは確に私もあんなことはしました。

けれどもあれはたゞ、あなたのためにして見たのです。
夫　俺のために？
女　さうです。私、あなたが本當に私を愛してゐて下さるか、試したかつたんです。あなたのお心が見たかつたんです。
夫　ばかなことを云へ。
女　いゝえ、本當です。それを若山さんが感違ひして——
夫　それは云ひぬけだ。今になつてそんなことを云つたつて駄目だ。
女　いゝえ、いゝえ。私が——この私が——そんな嘘を吐くものですか。
夫　だから、その證據があるかと云ふんだ。
女　そんなことを云はずに——
夫　いゝやいふ、證據が必要だ。
女　私の潔白を信じて下さい。
夫　證據がなくつては信じられない。
女　信じて——
夫　駄目だ。證據だ。
女　證據——
夫　さうだ。
女　あゝ。
夫　賣女！　嘘つき！

（女、突然身を地面に投げて激しく泣き伏す。）
（夫冷然とそれを眺めてゐる。）
（長い間。）
（と夫不意に、聲をあげて笑ひ出す。）
夫　（優しく）はゝゝ。もういゝ、もういゝ。——おい、起きろ、起きろ。
女　（猶泣いてゐる）
夫　おい、起きろといふに。（手をかけて起す）もういゝと云ふんだよ。
女　（訝かしげに又恐しげに顔を上ぐ）
夫　はゝゝ。もう泣かなくつてもいゝ。起きて、行くんださ、立つた。
女　？……（無意識に立つ）
夫　いや、心配することはない。俺はお前を疑ひなんぞしやあしない。
女　………
夫　俺は初めから信じてゐたのさ。お前の潔白を。
女　（漸く安心し）でも——
夫　また、その證據かい。
女　………
夫　はゝゝ、煩さい女だな。なに入用なら證據もあるよ。
女　？……

夫　お前の言葉、お前の顏付、それでもう十分ぢやないか。
女　でもそれが何うして――
夫　その言葉の調子、その、俺をまともに見る瞳の中に、
　俺はお前の眞實を十分によみ取つてゐるよ。
女　……　……
夫　わしにとつて、それより以上の證據はない。
女　（凝と夫の目の中を見つゝ）　あなた！……
夫　はゝゝ。また泣くのか。泣くのはお止し。お互にもう
　ようく分つたんだから。
女　（突然甘えるやうに男の胸に顏を埋めて）　私本當に馬
　鹿でしたわ。すみません、すみません。私――私……
夫　（優しくその肩を抱きながら）　もういゝ。もういゝ。
　はゝゝ。（靜かに笑ふ）
　（下手から一臺の荷車を曳いた百姓が來る。車の後ろ
　を、赤ン坊をおぶつたひつゝめ髮の女房らしい女が押
　してゐる。女房は來かゝつてふと先きの夫婦に見とれ
　始める。百姓氣付いてふり返り怒鳴る。）
百姓　ばかッ、何見てるだ。――車が重くつて仕樣がねえ
　ぢやないか。
　（女房吃驚して車を押出す。）
百姓　もつとしつかり押さねえかよ。
女房　押してるでねえか。

百姓　こゝは坂だよ。もつとしつかりよ。
女房　（踏んばつて）　うんとこしよ。
　（車緩かに坂を上つて行く。）
　（暫くして、）
女房　（押しながら）　父ッつあん。
百姓　何だよ。
女房　お前の股引、尻の所あ、えらく擦り切れてきたゞね
　え。
百姓　さうけえ。
女房　歸つたら、すぐつぎあてとくべえなあ。
百姓　うん、さうしてくんろ。
　（その儘、うん〳〵車を押して崖の後に曲つて了ふ。）
　（見送つてゐた女と夫、思はず顏を見合して笑ふ。明
　るく。それから女夫の側により泥をはたく。夫女に洋
　傘をとつてやる。女ふと夫の頭を見る。）
女　あら、あなたのお帽子。
夫　（一寸てれて）　なに、いゝよ、いゝよ。――はゝゝ。
　（女申譯なさゝうにちよつと夫を見る。間。がまた女
　甘えるやうに少し媚を含んで笑ひながら、華かな洋傘
　をさしかけ、ぴつたりと寄り添ふ。やがて無言の中に
　二人揃つて歩き出す。日は麗かに小鳥の聲は頻りであ
　る。）
　　　　　　　　　　　　　　　　　――幕――

差配の親切（一幕）

人

六藏
おきた　その女房
宗八
野村

或る長屋內の一軒。
おきたが茶の間の長火鉢によつかゝつてゐる。
時計六時をうつ。

おきた　――もう六時だよ。
（時計を見上げ、また見るともなく片隅にある膳部に眼をやる。表の格子のあく音。）
おきた　（坐つたまゝ）どなた――お前さん？
野村　いや、今晩は。
おきた　（立つて行つて上り口の障子をあける）おや野村さん。
野村　六藏さんは。
おきた　まだですの。今あなたがさうかと思つたんですよ。
野村　あはゝ、さう。
おきた　何かご用でせうか。
野村　何、用といふこともないんだが――一寸六藏さんに話したいと思つてね。
おきた　さうですか。もうすぐ歸ると思ひますけれど。（笑ひながら）廿五日だししますからね。
野村　あ、給料日かな。
おきた　まあお上りなさいまし。
野村　いや、お留守なら、また――。が、六藏さん、やつぱしこの頃、宗八を連れて來ますかい。
おきた　えゝ。
野村　相變らずのまして。
おきた　さうなんですよ。
野村　困つた人だね。
おきた　全く、あれだけにはね。
野村　何しろ、相手が大酒のみの浮浪人と來てるんだからら。
おきた　えゝ。でもせめてあの人が――宗八さんが、少しは此方のことを察してくれゝばと思ふんですけど。

野村　何うして何うして、あの男が。――滿洲支那を股にかけて歩いて來た奴だといふぢやないか。あの男は。
おきた　さうですつてね。何うしてまたあんな人を呼んでくるんでせう。
野村　身許でも知らないのかね。
おきた　いゝえ、よく知つてるんですよ。始終その話ばかりしてるんですもの。
野村　分らないね。
おきた　分りませんわ。――だけど、たゞね私……。
野村　いや、そのことですよ。一寸六藏さんに、話したいと思ふのは。
おきた　あら、さうですか。それはまあ有り難う存じます。
野村　第一、あんたが氣の毒だ。
おきた　………
野村　無論、六藏さんのためだつて、碌なことはありやしない。
おきた　本當に、あれだけは何うにかして欲しいと思つてるんですけどね。
野村　いや、安心しておいでなさい。是非、何とか私が話をつけて上げるから。
おきた　有り難う存じます。さう願へれば何んにも私な仕合はせだか知れません。
野村　いや、いゝとも、いゝとも。それがまた私の役目だからな。
おきた　本當にすみません。全くなにかにつけて、あなたのやうな方がお世話をやいて下さるので、近所の人も何んなにたすかるか知れません。皆さう申してゐるんですよ。
野村　いやあ、さういふこともないが、――何しろ、わしはかういふことを默つて見てゐられぬ性分でね。
おきた　本當にお禮を申しますわ。
野村　何の何の、――ぢやあ兎に角、後程また改めて。
おきた　左樣ですか。何うもすみません。
野村　さやうなら。
おきた　ご免下さい。
（野村去る。おきた障子をしめて火鉢の側に戻る。）
（間。）
（再び表あく。）
おきた　本當に何をしてるといふんだらう。
六藏の聲　いゝぢやねえか。入えんねえ、入えんねえ。ここまで來て何だね。――おうい、歸つたよ。
（おきた、又立つて障子をあける。）
（六藏と宗八がゐる。）

宗八　今晩は。
おきた　(氣のない聲で)　今晩は。(六藏に)　何うしたのさ。遲かつたぢやないか。
六藏　なあに、ちよいと宗さん所へよつてたのさ。(上る)　おい宗さん、上んなよ。今日はまた暫くぶりで一杯やらうよ。
(宗八上る。)
六藏　おい、酒の用意をしてくんな。
おきた　あ、お前さん、先刻野村さんが見えたよ。
六藏　野村さんが、差配の。——何故。
おきた　何だか、お前さんに一寸話したいと云つてね。
六藏　へえ。——話、何だらう。こちとら、拂ふもなあちやんと拂つてあるぢやないか。
おきた　とにかく、またあとで來るとさ。
六藏　ふうん。まあそんなこたあ、何うだつていゝや。酒を早くしてくれ。
おきた　でもお酒はもうほんの少しつきやありやあしないよ。
六藏　なきやあ、買つて來ねえな。金はあらあ。(財布をなげる)
おきた　——だがお前さん。この頃少し上りすぎるやうだね。
六藏　まあ、餘計なことは云ふな。
おきた　いゝえ、餘計なことぢやないよ。たゞお前さんの身體を思ふからさ。ねえ、宗八さん。
宗八　(默つてゐる)
六藏　何を云つてやるんでえ。
おきた　何だつて。
六藏　ま、まいゝや。分つてるよ。それより酒を早くよ。
おきた　はいはい。(澁々立つ)　でもね、餘り醉拂ふのは止しておくれよ。近所が煩いんだから。
六藏　近所なんか何でえ。なにも近所の金でのむんぢやなし——
おきた　さうはいかないよ、お前。
六藏　もういゝよ。早く行つて來てくれ。
(おきた出かける。)
六藏　おいおい。お前行くんなら、家にある奴を出して行つてくれないか。
おきた　お前さん、分つてるんだから自分でやつておくれな。(去る)
六藏　チヨツ、相變らずだ。(立ち上り臺所に行く)
宗八　六さん、すまねえなあ。
六藏　なあに。
宗八　それに、おきたさん、大分怒つてるやうぢやねえ

か。

六藏　何が、そんなこと。ありやあ彼奴の癖だあね。

宗八　でもさ。

六藏　何だね、お前にも似合はねえ。お前飲まねえと、から意氣地がねえんだなあ。

宗八　はゝゝ。

（六藏來り、燗德利を銅壺に入れる。）

六藏　本當にお前、何にも氣にすることなんかねえぜ。お前は俺がいつも無理に引張つて來るんだ。

宗八　そりやあ、お前の氣持は分つてるさあ。

六藏　そんなら何にも云ふこたあねえぢやねえか。

宗八　うむ。

六藏　本當だぜ。俺あお前とのむのが好きなんだから。誰とのむより好きなんだから。

宗八　（笑つてゐる）

六藏　え、宗さん、お前いつものやうに機嫌よく醉拂つてくんねえ。本當だぜ。俺あそれが何より嬉しいんだ。（云ひつゝ燗德利の工合を見る、取り上げて）さあ、何うだ一つ。まだ少しぬるいかもしれねえが。（盃をさす）

宗八　あ、こりやあすまねえ。――何かと云ひながらすぐ手の出る奴さ。はゝゝ。

六藏　いゝつてことよ。はゝゝ。所で、肴は――と。（あたりを見て、片隅の膳を持つてくる）ま、けちなものだが、これでもつゝいてくんねえ。

宗八　結構だとも。さ、それよりお前酌だ。

六藏　や、これは。

（以後互にさしつさゝれつする。）

六藏　だが、人間つて奴あ、不思議なものさね。

宗八　ふむ。

六藏　俺のやうな人間が、お前のやうな人間とうまが合つてよ。かう、いゝ氣持でのみ合つてるなんざ。

宗八　さうさね。（笑ひながら）すまねえ次第さ。

六藏　俺は餘りのめねえんだ。それでゐて、お前とだといくらかはのめる。いゝ氣持さ。酒はやつぱし相手だね。

宗八　冗談ぢやねえ、たぼさ。たぼでなくつてお氣の毒さ。

六藏　止してくんな。お前は何うもはぐらかしていけねえ。

宗八　いや、はぐらかすわけぢやないさ。がお前さんの話はまた、少しまつとう過ぎるからな。はゝ。

六藏　全くだ。何しろ俺あ、お前のやうに諸國を歩いて來た人間ぢやねえからねえ。

宗八　いやあ、これは一本參つた。

六藏　いやいや、そんなつもりぢやねえのよ。俺と來たら

お前、まあ三十年も小使ひを勤めようといふ人間ぢやねえか。

宗八　だが、俺はまた支那滿洲まで股にかけて流れ歩いて、揚句の果てが食ひつめ者の人間だからね。

六藏　だが、それが何うしたといふんだ。俺にして見れば、却つてお前を羨ましいと思つてるんだぜ。

宗八　飛んだことだ。

六藏　いや、さうぢやねえ、全くだ。考へて見ると、俺なんぞ全く意氣地がなさ過ぎて話にもならねえ。

宗八　ばかなことを云ふぢやあねえか。

六藏　いゝや、さうださうだ。さうに違えねんだ。まあ、考へて見ねえ、口にこそ何でもねえが、三十年といやあ大した長さだ。

宗八　そりやあさうだ。

六藏　その長い間をよ、俺あ、何一つ面白い眼もせずに暮らして來た。何か間違ひでも仕出來しやしねえか。人から叱られやしねえかと、びくびくしながら、いつもかも人から使はれて暮らして來た。――使はれて、使はれて、たゞそれだけで過ぎて來て了つたんだ。

宗八　………

六藏　見ねえ。そして俺あもうこの姿だ。あと何が出來るといふんだ。俺あ全く意氣地なく一生を棒に振つて了つたんだと、この頃つくづく思ふのさ。

宗八　愚痴だぜ。そいつあ。

六藏　さうだ。愚痴だ。だが、俺あ結局この年になるまで愚痴だけしか殘つてゐねえ人間だと思ふと情けねえぢやねえか。

宗八　………

六藏　それに俺あ子供もなし、毎日あてのない日をぼんやり送つてゐるより仕方がねえ。今日びになつたつて、ちつとも變つた日を見るぢやなし、毎朝會社へ行つて、人の草履を出して、お辭儀をして、使ひッ走りをして、揚句ががみがみ叱られるか、うまく行つたつて、當り前のことだと云つて俺らなんぞにや見向きもしてくんねえ。それが俺の毎日だ。これから先きの毎日だ。……

宗八　もういゝよ、いゝよ。六藏さん。そんな元氣のねえこと云はねえで、もつと景氣のいゝことを話さうぢやねえか。

六藏　いや、これやいけねえ、全くだ。すまねえ。

宗八　いやあ、すむもすまねえもありやしねえ。俺あご馳走になつてるんだからな。

六藏　皮肉は云ひつこなしにしようぜ。だがまあ、俺の話と違つて、いつだつてお前の話は面白いや。

宗八　聞くお前さんにやあ、さうかも知れねえが、これで

その時あ、やつぱし隨分苦しい思ひをしたことも度々なんだぜ。

六藏　そりやさうだらうさ。だが、お前のは仕放題のことをして、散々面白い日を見ての上のことぢやねえか。ちつとやそつとは當り前さ。

宗八　さうばかりでもねえぜ。

六藏　なくつてもさ。俺達と來たら、お前のして來たほどのことは、たつた一つだつてありやあしなかつた。

宗八　だつて、そりやあお前土地も違ふしね。

六藏　女のこと、博奕のこと、喧嘩。珍らしいことだらけだ。それに錢儲けだつてお前、そんな命賭けの荒仕事なんか、俺なんざあ、考へて見たこともありやしねえやな。

宗八　だが、お前から見たら、恐ろしい馬鹿げたことだらうぢやねえか。

六藏　一應はさうだ。だが今の俺にやあ、さうぢやあねえよ。いゝや、素晴らしいことだ。いや全く、羨しいことだ。

宗八　脅かすなよ、六さん。俺あ、吃驚するぜ。

六藏　いゝや、本當だよ。俺あ、お前の話をきいた時にやあ、あとでつくづく思ふんだよ。だつて人間、誰だつてそんな氣持は持つてゐるんだ。成程、惡いことだとか何とかかんとかはいふ。が一生の中にやあ、その亂暴な、無茶な、惡黨がかつたことだつて、やつて見たいと思ふことは誰しも幾度かあるだらうと思ふんだぜ。

宗八　お前、大分醉拂つて來たね。

六藏　大きなお世話ぢやねえか。飲んだ酒なら醉ふのが當り前だ。

宗八　お、お、これやあお株をとられさうだ。

六藏　はゝゝ。だが、俺の云つてることは本當だよ。冗談ぢやねえよ。全く人間、誰だつて、あると思ふんだ。ま、一寸した話が見ねえ、小癪に障る奴だよ。畜生、この野郎！　と思つた時にやあ、目の前で叩き斬つて了ひたい氣にだつていくらもなるぢやねえか。その時ならお前、すつぱりやつたつて、氣持のいゝことこそあれ、嫌な氣持だなんてする氣遣ひはねえ。そんならお前、無性に物が欲しくなりやあ、泥棒だつて、人殺しだつて、また何處かで逢つた女だつて……。

宗八　亂暴だね、こいつあ。何も俺あ、そんな大泥棒見ていなことばかりして來やしねえぜ。

六藏　いや、ま、ま、たとへがだよ。兎に角誰にだつて、そんな氣は時々起るものだといふことよ。

宗八　お前にも、そんな氣が起ることがあるのかね。

六藏　長い一生だ。俺にだつて無論あらうぢやねえか。ま

して、お前、かうやつて毎日ぎうぎう人の足の下に踏みつけられて何一つ自分の氣持らしいことをやつて見たことのねえ人間にはよ。

宗八　そんなものかねえ。――驚くなあ。

六藏　そりやね、無論、俺はそんなことは一度もやりはしなかつた。またこの俺に出來る筈もなしね。

宗八　そりやまあ、さうだなあ。

六藏　だがまあ、それだけにお前さんの話をきいてると面白いよ。かう、自分の出來ねえ、無鐵砲な素晴らしいことを、すばすばやつてるやうでね。まるで自分がやつてでもゐるやうに、胸がすうつとするやうなんだ。

宗八　いやはや。

六藏　（眞劍に）本當なんだ。本當なんだ。だから、俺あお前、人がお前のことを何といはうとも、俺あ何とも思はねえ。それが俺にや面白いんだから。――何一つ自分の一生に思ひ出す事のねえ今の俺には、そのお前の思ひのまゝに振舞つて來た話をきくのが、まあ、たつた一つの樂しみだと云つてもいゝんだ。

宗八　（ぼんやり相手の顏を見ながら）變な男もゐるんだなあ。

六藏　（苦笑しつゝ）變でも何でもいゝや。だからよ。まあ遠慮なしに、酒でものんで變つた面白いお前の話をうんと聞かしてくれよ。

宗八　うむ。……

六藏　何だな、變にぼんやりしちまつて、さ一つ景氣よく飲んで、いつもの元氣を出してくれよ。

宗八　何だか今日は何うもお前の方が上手で……

六藏　何を云つてるんだ。さ、さ、つがう、つがう。のみねえ。――や、もう酒はねえのか。チヨツ、おきたの奴、やけに遲いんだなあ。何うしやがつたんだらう。

宗八　なあに、いゝやな、さう急がなくつたつて。もうすぐ歸つてくらあな。

（この時表のあく音。）

六藏　おや、噂をすれば影かな。

宗八　樣子が違ふやうだぜ。

六藏　誰だい。おきたぢやねえのか。

野村の聲　わしだ。わしだ。六藏さんゐるかね。

六藏　（障子をあけ）おや、野村さん。

野村　今晩は。――先刻も一寸お寄りしたんだがね。

六藏　はあ。（氣のない返事）

野村　（上つて來て）おきたさんは。

六藏　一寸使ひに出たもので。

野村　宗八さん、いゝご機嫌だね。

宗八　いや、はゝゝ。

六藏　今恰度始めた所でさ。――何うです、一杯。
野村　いや、わしは酒はやらんのだ。
六藏　でも、一つ位。
野村　いや、わしはいゝ。
宗八　だが六さん、酒はおつもりなんだぜ。
六藏　あゝ、さうだつけ。――おきたの奴何うしやがつたんだらう。仕様がねえなあ。
野村　なあに、何方にしたつてわしはのまないんだから。――所で何かい、宗八つあんはこの頃、何かやつてるのかい。
宗八　なあに、相變らずでさ。――だあれも雇ひ手がねえんでね。
野村　そいつあ、いけないね。
宗八　………
野村　それでお前さん、何うするつもりなんだね。いつまでもそのまんまでゐるつもりかね。
宗八　さあ。
野村　何とか口が見つからないもんかね。
宗八　それがさうもいかないんでね。
野村　だが、わしは思ふに、お前さんのやつぱりわが身からだと思ふがね。
六藏　しかし何ですよ。人間それぞれ氣質つて奴がありますからね。向ふでよくつたつて此方でいけなかつたり、難かしいもんでさ。
野村　だがそりやあ贅澤だ。それも遊んでゐられる身分なら知らないことだがね。
六藏　でもそれが氣質なら仕方がねえでせう。
野村　いや、さうはいかないよ。別して、それが他人にまで迷惑になるといふ場合にはね。
六藏　いや、やつぱし酒がなくつちやあ、話が理に落ちますね。――本當におきたの奴あ、何しやがつたんだらう。
（間。）
（表あく。おきた歸つてくる。）
六藏　（おきたに）何をぐづぐづしてやがるんだ。もう先刻から野村さんだつて見えてるんだぞ。
おきた　あ、さうですか。――でも買物だつて、かゝるだけの時間はかゝりますよ。
六藏　（きつと見る。がそれは一寸で又氣を直したやうに）まあいゝ。何よりお燗だお燗だ。それから何か肴を見繕つて來たかい。
おきた　いゝえ。
六藏　買つて來ねえ。
おきた　あゝ。
六藏　ばか。何があゝだ。十五や六の小娘ぢやあるまいし

人が來て酒をのむといふのに、何といふ氣の利かねえ奴だ。

おきた　（ついと臺所の方へ行き）　使にやられたり叱られたりか。

六藏　何だと。

野村　まあまあ六藏さん。何だね。さうむきになつて。

六藏　ばかにしてやがる。

おきた　何方が馬鹿にされてるか、しれやしない。

六藏　何を。ふざけたことを云やがると、承知しねえぞ。

おきた　何がさ。――へん、何うせお前さんは大盤ぶるまひの出來る結構なお大盡さまさ。

六藏　チヨツ、もう一度云つて見ろ。

（六藏立ちかゝる。野村とめる。）

野村　ま、まあ、待ちなつたら。歸つて來るなり喧嘩もみつともないぢやないか。

六藏　だつて、あいつの云ひ草が、餘り癪だから。

野村　まあ、まあいゝつてことよ。

（野村なだめて坐らせる。）

宗八　（つと立ち上り）　六藏さん、飛んだお邪魔しちやつた。俺あ、これで歸して貰はあ。

六藏　まあ、待ちねえ、折角のみかけたんぢやねえか。いや、俺あ、ついカアツとしたもんだから、がみがみ云つちやつて――

宗八　いや。それに野村さんも、何か用事らしいし、俺あやつぱし歸るよ。

六藏　だつてお前。

宗八　なあに、また來らあ。

六藏　さうか。すまねえな。折角樂しみにしてゐたのに、すつかり臺なしにしちやつて。

宗八　ぢやご免なよ。――おきたさん、いつも迷惑かけちやつてすまねえなあ。惡く思はねえでおくんなさいよ。

おきた　………

宗八　ぢや野村さん、ご免なさい。

野村　いや宗八つあん。お前さんにも少し話したいことがあつたんがだね。

宗八　あつしに？

野村　あゝ。――だが又、何れあとでお前さん所へ行つて話すがね。

宗八　何の用なんです。

野村　いや用事。つてわけぢやないんだがね。

宗八　へえ。

野村　兎に角、長屋の何處にか、かうしたことの起るつてのも、一つはお前さんのやうな人のゐるせゐだといふことが分らないかね。

宗八　…………

野村　本當だよ。少し人のことも考へるがいゝぢやないか。

宗八　…………

（間。）

宗八　（六藏の方に向ひ）　六藏さん。ぢやさようなら。

六藏　すまなかつたなあ。

（宗八去る。）

野村　（見送り）　仕樣のない奴だ。――所でなあ六藏さん。話といふのは他ぢやない。あの宗八のことだがね。あれとつき合ふことだけは止したがいゝと思ふんだ。

六藏　――

野村　ねえ、お前さんだつて、あんなやくざな奴とつき合つてゝ、いくら損をしてるか自分で分りさうなものだと思ふんだがね。

六藏　…………

野村　ねえ、全くだぜ。あんなお前……

六藏　いや、あんたの言葉だが、まあこれやあ、あつしだけのことですからね。

野村　いやそりやあね。餘計な差出口かも知れないが、みすみす他人の不爲を默つて見てゐられないのが、わしの性分でねえ。それにまた、おきたさんだつて隨分氣の毒ぢやないか。

六藏　いや、彼奴は承知してるんです。

野村　だつてお前さん、……いや、なあに、それにしてもだね。まあ、あの怠け者の何の稼ぎもしねえで、それでゐて人の酒なら一杯でもありつかうといふ奴を相手にして、一體まあ何の得があるといふんだね。

六藏　まあ、あんたにやあ分りますめえ。

野村　冗談ぢやない。分るも分らないもありやしない。それに彼奴は、前身が大した代物だといふぢやないか。この堅氣な人ばかりの長屋内に、いつの間にかあんなのが入り込んぢまつたと云つて、この頃皆やかましくつて仕樣がない位なんだ。實際わしも何うにかしなければならないと思つてる最中なんだよ。

六藏　…………

野村　ねえ、それをあんな男にお前さんが取つ捕かまるなんて、餘り馬鹿馬鹿しいよ。――それにお前さんだつて他に道樂のある男ぢやなし、あんな奴とのべつ附き合はなきやあ、出る物だつて隨分違ふぢやないか。それを皆あの大酒喰ひにつぎ込んぢまふなんて、そんなお前ばかな……

六藏　なあに、それもわしの一つの樂しみならね。

野村　何が樂しみなもんか。苦勞だよ。

六藏　そりやあ、人のことばかり苦にしてるあんたにやあ、さうかも知れねえ。だが、あつしにやねえ。
野村　ばからしい。
六藏　ばからしくつても仕方がありませんさ。それがあつしにはせめてもの氣晴らしなんだから。
野村　ばかな。世の中にやあ、もつといゝ樂しみがいくらもあらあな。
六藏　所が、生憎とあつしにやあ、ないんでね。
野村　なあに、やつてごらん。すぐと出來るものだよ。
六藏　何うですかね。
野村　いゝえさ、碁でも將棋でもいゝぢやないか。何ならわしが相手になつて上げようぢやないか。
六藏　止して貰ひませう。誰が――
おきた　まあ、お前さん。折角ご親切に云つて下さるものを何て口の利きやうだね。
六藏　默つてろ、貴樣の出る幕ぢやねえや。
野村　それそれ、まただ。――なあ、六藏さん。全くだよ。まあ、たまにやあ老人のいふことも聞くものさ。
六藏　子供ぢやあるまいし、自分のこと位自分で分別がつきまさあ。
野村　それなら、尙更のことぢやないか。
六藏　だから、あつしのことは私に任しておいておくんなさい。
野村　だが、みすみす不爲なことを、わしとして――
六藏　いえ、そのことは分りましたよ。
野村　それぢやあ、聞き入れて下さるか。
六藏　……　……
野村　たゞ、あの宗八を近づけさへしなければいゝんだね。さうすれば、おきたさんも何んなに喜ぶかしれないし、お前さんのためにだつてよし、まあ家の中もまるく收まるといふものだね。
おきた　本當にさうですわね。そりやあ宗八さんも惡い人ぢやないかもしれないけど、何もあの人だけしかゐない世の中ぢやなし。
六藏　默つてろ、手前は。
おきた　ものゝ理窟がさうぢやないか。野村さんの云ふことだつて一々……
六藏　うるさいッ。
野村　まあさうおきたさんばかりに劍つく食はさないで。ねえ六藏さん。本當だぜ。惡いことは云はないから。さうしなさい。あとで、きつと思ひ當るよ。
六藏　何うもありがたうござんす。
野村　えゝいゝかい。聞いてくれるかい。えゝ六藏さん。
六藏　分りましたよ。

野村　ぢやあ、宗八にはね、わしからもまたようく云つとくからね。――全く、あんな男がゐるばつかりにこんなことになるんだからなあ。ぢや、おきたさん。わしはこれで失禮するからね。
おきた　まあ、さやうですか。何うもお愛想なしで。本當に種々ご親切にありがたうございました。
野村　いやいや、何もお互様だ。ぢや、わしはこの足で一寸宗八の所へ行つて來よう。
（野村行きかける。）
六藏　野村さん。本當にこれから宗八さんの所へ行くんですか。
野村　あゝ、何しろあいつが元だからね。
六藏　でも、何もさう急に。
野村　いや、何とか早く片をつけてしまはなくては、わしの氣がすまんから。
六藏　…………
野村　ぢやあ、ご免なさい。
おきた　本當にご厄介ばかりおかけしまして、――お前さん、歸んなさると云つてなさるんだよ。
六藏　…………
（野村去る。おきた送り出す。）
（再び席へ歸つて、六藏の側に坐る。）
（沈默。）
おきた　お前さん。
六藏　…………
おきた　お前さん。怒つてるの。
六藏　…………
おきた　ねえ。
六藏　當り前よ。（と云ひ様、足で膳を引繰り返す）
おきた　まあ、何をするの。
（六藏。わきを向いて默つてゐる。）
おきた　お前さん。お前さんつたら。あんな宗八さんなんかとつき合ひするなと云はれたのが、そんなに腹が立つの。
六藏　…………
おきた　お前さんてば、私のことなんか、何とも思つてくれやしないんだね。
六藏　…………
おきた　餘りだわ。餘りだわ。
六藏　やかましいやい。
おきた　（きつと顔を上げて）本當にお前さんつたら、私が何うならうと構やしないんだね。
六藏　うるさいッ。
おきた　（泣きながら）あゝあゝ、私の心持なんか少しだ

つて思つてくれやしないんだね。

六藏　手前はまた俺の心持を思つて見たことがあるか。

おきた　何だつて、――思へばこそぢやないか。お前さんの身のためを思へばこそ、あゝして――

六藏　野村の奴に賴んで俺の樂しみをとり上げてくれたのか。

おきた　馬鹿々々しい、あんな宗八さんなんぞのことが何も……

六藏　いゝや、俺にはあれでも樂しみなんだ。それともあゝして、氣樂に面白くのむ相手が外にあるとでもいふのか。

おきた　あんな相手なんかなくつたつていゝぢやないか。酒だけなら、私だつて何も嫌だと云つてやしないんだし……

六藏　ふざけるな。手前のやうに人さへ見りやあがみがみ突掛つてばかりゐる奴を相手にのんだつて何が面白いんだ。

おきた　そりやあ何うせ私ぢやあお氣に入らないでせう。勝手にしやがれだ。憎らしい。

六藏　それそれすぐその調子だ。

おきた　何を云つてるんだ。お前さんが云はせるやうにするんぢやないか。

六藏　だが、宗さんのことだつて、一應はお前にも話してあるんだらう。それを手前はきかれねえ奴なんだ。俺の氣持の分らねえ奴なんだ。

おきた　だつて、あんないけ圖々しい奴、いつまでも默つてゐられないぢやないか。お前さん彼奴に欺されてるんだ。

六藏　欺されたつていゝぢやねえか。俺がそれでいゝんなら。

おきた　馬鹿なこと、誰が！……

六藏　…………

おきた　だつて、さうぢやないか。さうぢやないか。

六藏　あゝあ。

おきた　何があゝあだ。

六藏　(急にきつとした勢ひにて詰めより)　おい、先刻の金入を出せ。

おきた　(吃驚して帶を抑へる)

六藏　出せ。

おきた　…………

六藏　出せつてんだ。――出さなきや出してやる。(掴みかゝつて曳出さんとす)

おきた　いけない、いけない。いけない。いけないつたら。

六藏　いけないも糞もあるものか。

（爭つた揚句、六藏遂に引き出して、おきた縋りつくをつき飛ばし、默つて出て行かうとする。）

おきた　ま、お前さん何處へ行くの。

六藏　何處へ行かうと勝手ぢやねえか。

おきた　だつて、お前さん、お前さん。

六藏　喧しいや。何うせ手前だつて俺の氣持は分つてくれねえんだ。俺だつて手前の氣持を察しる必要はねえ。

おきた　だけど、そりやあお前さん、私ばかりぢやなく、野村さんだつてあゝ云つてるんぢやねえか。

六藏　何が、あんな野村のいふことなんぞ。理窟は何うだらうと、俺にやあ俺の理窟があるんだ。なあ、少し位は何であらうと、それで俺の氣がなぐさみやあ、またそれで働きにも出られようと云ふものだ。誰が、糞面白くもねえ俺のやうな仕事に、毎日たゞしかめつ面して勤めてゐられるもんけえ。

おきた　だつて、私はたゞお前のことだけを思つたんだもの。

六藏　だからよ。――いやもういゝや。な、考へて見るがいゝや。手前のはな、俺のためぢやねえ、手前自身のためなんだ。

おきた　そんな、そんな、私――

六藏　兎に角、俺あな、これから何處かへ行つて、氣の晴れるまでのんでくらあ。何處かに俺を慰めてくれる所のあるまではなあ。――手前はまあ家で一人でよつく考へてゐるがいゝや。

おきた　お前さん、ま、待つておくれよ。頼むから、私が頼むから。

六藏　知らねえや。（出かけてふと立ち留り、ふり返ると）あ、さうだ。それからあの差配さんにもなあ云つとくがいゝや。おかげで、うちの中もまるく收まりましたつて。（捨鉢な笑ひ）　はゝゝ。

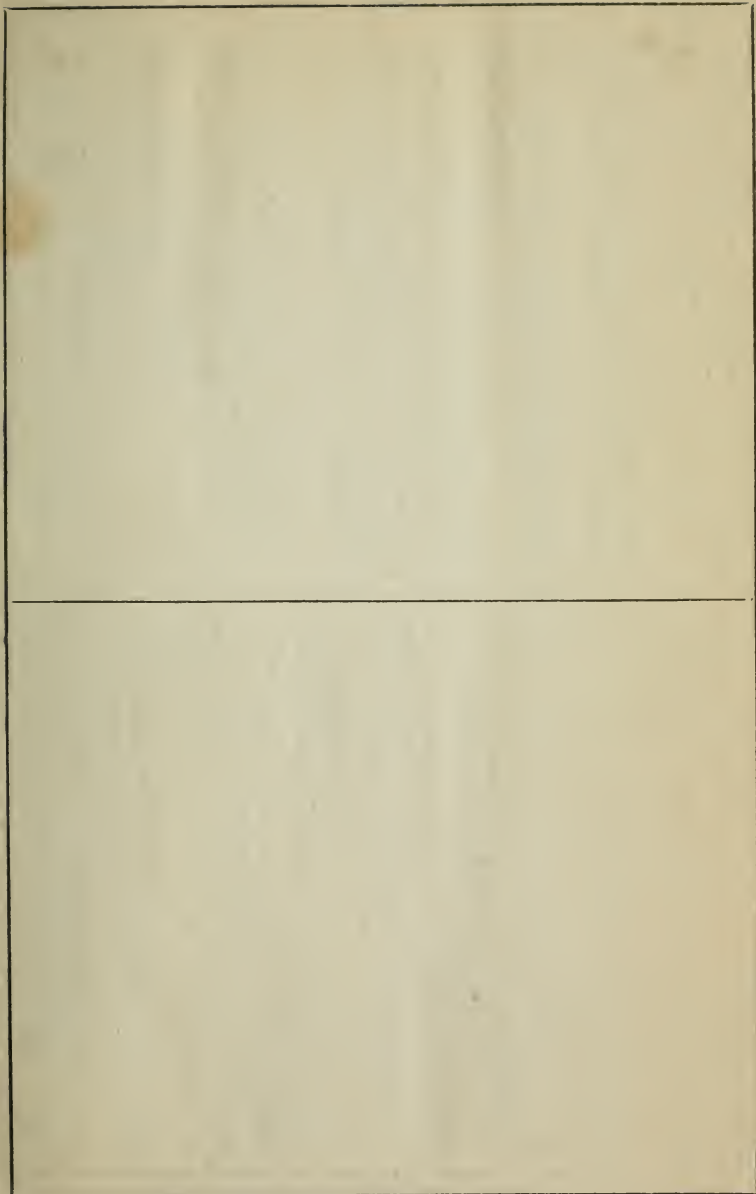
（六藏去る。）

（おきた慌てゝ追つて出る。）

おきた　お前さん、お前さん、お前さんてば……。

（上り口で立ち留る。ぼんやり突立つてゐる。暫くして氣がついたやうに不意に泣き始める。）

――幕――

解說

此戯曲集は大體に於て震災のあつた大正十二年前後から活動し始めた戯曲家の作品を收めて居る。

勿論六人の作家は各ゝその個性を明瞭に持つて居るので、之等の作家に共通な特色といふものを大まかに擧げたりすることは困難である。然し之等の諸作家がその活動を始めた時代の戯曲界に一つの著しい傾向があつたといふことはいへないこともない。それは戯曲が舞臺上の寫實主義から脱け出さうといふ努力である。イプセンに始まつた寫實主義は、當時の所謂近代劇を嚴重に制限する一つの鐵則であるかの觀を呈して居た。これを何等かの方向へ超越しようといふ惱みがその時代の新しい戯曲家の悶えであつたやうに思はれる。理想主義的に、浪漫主義的に——要するに客觀的から主觀的に戯曲界は一つの轉向を取らうとして居た。

從つて此集の作家の多くは此空氣の中で戯曲家としての發足をしたともいへれば、此集の作家のある人たちがさういふ空氣を釀成することにあづかつて居たとも考へられる。

讀者は本集の繙讀に際して以上の事實を一應頭へ入れて置く方が便利である。

岸田國士篇解說

岸田國士氏は明治二十三年十二月二日東京に生れた。父君が軍人であつたので、同じく軍人となるために、幼年學校を經て士官學校に入り、遂ひに少尉に任官した。けれども氏の文學に對する熱情は既に士官學校在學中から燃えて居て、任官後もそれが衰へる處か寧ろ益ゝ旺になるといふ有樣なので、氏は到底乾燥なる軍職にとゞまるに堪へなくなつて了つた。そこで氏は父君の强硬な反對を押し切つて軍籍を退き、かねて憧憬の的であつた佛蘭西文學を研究するために東京帝國大學佛蘭西文學科に入學した。學業を卒はると任を上海に得て先づ故國を離れ、更らに香港、安南と次第に放浪の旅を續けて、漸く氏はかねて志す佛都巴里に着し、長くこの地に留つてフランス文學特にフランス戯曲及劇場の實際の研究に沒頭した。今日の戯曲家岸田國士氏は實に此間にその基礎を築かれたものである。そして大正十二年に歸朝し、同十三年三月第一次演劇新潮にその第一作「古い玩具」を發表するや氏の名は忽ちにして日本劇壇に燦然として輝くに至つたのである。

岸田氏は浪漫主義の作家であるといはれる。夢に生きようとする作家であると評せられて居る。そして寫實主義からの解放といふ劇壇の新傾向を刺戟した第一人者であると目されて居る。氏の作品がフランス現代戯曲から最も強く影響されて居ることは、その經歴を見れば寧ろ當然である。氏のフランス的な極めて輕快な表現、機智に富んだ明るい白、全體に溢れて居る華やかな才氣、これらは從來何れかといへば露西亞、北歐、獨逸等の文學的影響の多くを受けて來たわが文壇劇壇には極はめて特異な色彩として映じたのはいふまでもない。新鮮なきび／＼した作家——詩にみちた作品「古い玩具」、「チロルの秋」、「紙風船」、どの一つを取つて見てもさういふことが出來る。朗かな浪漫主義者が輕やかな足どりで舞臺に現はれて來た、さういつて文壇は一齊に拍手した。

拍手するのはよい、——だが、朗かな浪漫主義とだけで拍手するのはどうか、編者の見る處によれば、それは岸田國士氏を眞實に知らない拍手のしかたである、着て居る絢爛な衣裳に眩惑されて、それにつゝまれた人そのものを見誤つた見方であると信ずる。何故か、岸田國士氏の「冷さ」を見落して居るからである。

大正の末年時代の戯曲界が寫實主義から浪漫主義への復歸の傾向を取らうとして居たといふことをさきに述べたが、一度世界的な自然主義の洗禮を受けた文學界の如何なる分野に於てでも舊來のまゝの浪漫主義が再生するといふことは絕對に不可能である。ハイネもキーツもロセッチも自然主義以後の文學界には其儘でその呼吸を續けることは出來ない。寫實主義、自然主義以後の浪漫主義の內にはおのづからそれらの影響が何處かに殘つて居ることになるのはまた止むを得ざることである。

岸田氏の浪漫主義に就いても同樣のことがいへる。そして編者は氏の浪漫主義に包まれて居るものを「冷さ」であると言ひ度い。これは氏の作品の核心をなす最も本質的な特色であると思ふ。「チロルの秋」を見よ、「葉櫻」、「溫室の前」、「ゼンマイの戯れ」を見よ、其處には殘酷なまでに透徹した冷さが人生をその底の底まで貫きつくして居るではないか。氏の作中の人物は屢ゝ夢を見て居る、夢に醉つて居る、いや夢を見ようと努め、夢に醉はうと試みて居るのである。然しそれらの夢は常に忽ちにして果敢なく現實の前に色褪せる夢に過ぎないのだ。夢見る人は、落寞たる人生に絕望して甲斐なき夢に敗殘の身を託さうとして失敗する人にほかならない。夢の美しさに希望を繫いで居るのではなくて、希望を失つて夢に遁れようと踠いて居るのだといふ方があたつて居る。作者はさういふ見方をして居るのだと思ふ。「紙風船」、「屋上庭園」、「溫室の前」、「ゼンマイ

の戲れ」を讀んだ人の心は重く暗い筈である。

岸田氏は冷い心をみぢんも動搖せしむることなしに、絕望の人生を、輕快なタッチと朗かなポエトリとに包んで、知らぬ顏で舞臺上に展げて見せる詩人である。

何はともあれ、氏は今日劇壇第一の人氣作家で、「チロルの秋」、「紙風船」、「驟雨」、「動員挿話」その他が既に帝都各處の劇場で上演されて居る。

佐藤春夫篇解說

佐藤春夫氏は明治二十五年四月九日和歌山縣新宮町に豐太郎氏の長男として生れた。生家は代々醫を業として居たが、氏の文學に對する志望は既に縣立新宮中學校に入學する頃から燃えて居た。從て中學生時代にして早く文學書を耽讀し數理系統の學課の成績は思はしくなかつたといふことである。明治四十三年中學を終はると上京、生田長江氏に師事し、與謝野寬氏の門に出入して詩歌の批評を受けた。次いで永井荷風氏に私淑するところから慶應義塾大學文學部に入學したが、早く此頃から散文小品詩歌等の執筆を怠らなかつた。大正二年に至つて慶應義塾を退學したけれども、實は既にその二三年以前から單に學籍を置くといふだけで講義には出席して居なかつたのである。爾來具さに文學的修養の辛酸を甞め此間一二の作品を發表したが未だ文壇的に確實な基礎を築くに至らなかつた。氏が文壇に名を成すに至つたのは實に大正七年八月雜誌「中外」誌上に小說「田園の憂鬱」第二稿を發表してからのことであつた。當時文壇には自然主義の餘威未だ衰へず、武者小路實篤氏等の人道主義漸く旺ならんとする時に當つて氏の浪漫的香氣の豐醇なる作品は、大いに一世を驚倒するに足りた。佐藤春夫の名は忽ちにして文壇の頂點に立つた。

以上のやうに氏の作家としての活動は岸田國士氏などよりも遙かに早く始まつて居たのであるが、これは小說家としての氏の活動であつて、戲曲家としての氏が働き始めたのは偶然にも全く岸田氏と同じ大正十三年であつて、此年三月氏はその處女戲曲「暮春挿話」を發表したのであつた。「暮春挿話」は浪漫主義の戲曲である。そしてこれは本質的に詩人である佐藤氏の作品として當然の歸結であると思ふ。此戲曲を讀む人は其處に一種の神秘的色彩の縹渺として居るのを見遁がさないであらう。戲曲全體は美しい「詩」につゝまれて居ることを認めるであらう。

岸田氏の作品は詩の衣を着て居ると言つた、然し佐藤氏はより本質的に詩人である。「春風馬堤圖譜」を見よ、「燕」を見よ、「彼者誰」を見よ、それらはそのまゝに一篇の詩ではないか。

然らば佐藤氏は如何なる傾向の詩人か。「憂欝」の詩人である、「神秘」の詩人である、「厭世」の詩人である。讀者はその「憂欝」を「日光室の人々」、「五月晴」に、「神秘」を「暮春挿話」、「彼者誰」に、「厭世思想」を「巢父犢に飲ふ」、「屈原」に、見出すことが出來るであらう。

かういふ傾向の作家であるから、波瀾萬丈の大葛藤をその戯曲の材料として取扱はうとはしない。日常生活の斷片のうちに戯曲を見出して行かうといふ傾きがあることは岸田氏の場合に於けるとほゞ同樣である。「五月晴」、「燕」、「彼者誰」等のうちに讀者はこれを看取し得る筈である。

編者は氏の諸作のうち特に「燕」の一篇を愛する。此作には甘くほのかな純情としみ〴〵とした詩情とが實に美しくあらはされて居るではないか。

ともあれ、佐藤春夫氏の戯曲家としての仕事はまだ始まつたばかりである。從つてその作品の數もまだあまり多くはない。我等はこれからの氏の戯曲に多くを期待し得るに違ひないと思ふ。

犬養健篇解說

犬養健氏は明治二十九年七月、東京牛込に生れた。有名なる政治家犬養毅氏の息である。學習院卒業の後帝國大學文科に學んだ。

氏も亦戯曲家としてよりも小說家として、名を成して居る。氏の作品の特色はその透徹せる觀照と高雅なる氣稟とに在る。武者小路實篤氏等の所謂白樺派の人々と共に擡頭して、年少旣に朗かなる風格をもつ作家として認められた。

本集に收められた二篇の童話風の戯曲は恐らく氏の戯曲の總てであらうと思ふ。然し其處に盛られた內容は實によく氏の本質を語つて居るといはなければならない。

「家鴨の出世」を讀むと、我等は運命に從順でありながら、その運命の中で常に最もよく生きようと努めて居る主人公の美しい魂に強く擊たれずには居られない。どのひとりにも行き渡つて居る作者の愛の深さ。かういふ作品は讀むものゝ心に人生の希望を吹き込むものである。

犬養氏の二つの戯曲は、戯曲といふよりは對話といふ名に寧ろ適はしいものである。この二作のみに依つて戯曲家としての氏の手腕を判斷せんとするは少しく早計のやうに感ずる。

田島淳篇解說

田島淳氏は明治三十一年一月十九日、横濱の商家に生れ

た。そして大正八年早稲田大學英文學科を卒業して以來、專心劇作に從事して居る少壯戲曲家である。

氏の出世作ともいふべきは、本篇の卷頭に收められた「能祇」であつて、これは「能祇と泥棒」の名で、氏が卒業後間もなく發表され、次いで帝國劇場に於て上演されたものである。

氏の作品の基調をなすものは「純情」の一語に盡きる。明るい純情に生きようとするのがこの作者の態度であつて其處には懷疑の暗い翳は少しもなく、淨瑠璃の人情といふ言葉によつて聯想される情感に共通する古風な詠嘆の俤さへある。「能祇」、「如皐と默阿彌」、「歲末挿話」、「夕立」、その何れを見ても、作中の人物はあるがまゝの世相に無力に押し流されながら、其處に頼りない詠嘆の聲をあげて居る。力強く世相、運命に働きかけようとする意力はない。これがやがて作者の態度だと見ることは敢て間違ひではないやうに思はれる。氏は素直な「人情」の作家である。

「月の出るまで」の一篇に於て、田島氏は社會批評的な一面を開拓しようと志して居るやうに見えるが、少くとも此作品に於ては作者は新しい時代に壓迫される幽靈たちにより多くの同情を拂つて居る。此方面に於ける氏の傾向が果してどういふ形を取つて來るかは今後に俟たなければなるまい。

水木京太篇解說

水木京太氏はその本名を七尾嘉太郎といひ、明治二十七年六月十三日、秋田縣横手町に生れた。鄕里の中學校を卒業後上京して慶應義塾大學文學部に學び、業を卒へて後は資生堂化粧品部の囑託となり、傍ら飜譯等に從事した。その後三田文學の編輯を擔當し、同時に母校慶應義塾大學に敎鞭を執つた。然し此間勿論創作の筆を絕つて居たわけではなく、既に數篇の小說を物して居た。そしてその戲曲的活動も岸田氏あたりより少しく早く、同氏が「古い玩具」を發表する以前に「家」(三部作)、「淺瀨」等の戲曲を公にして居る。今日では氏には恐らく二十篇以上の戲曲があるであらう。

本篇に集められた六篇の作品を見ても解るやうに氏の戲曲は多面的である。然しそれらの作品は批評的哲學的であるといふ點に一つの統一を持つて居るやうに思はれる。第一の「淺瀨」が既に極めて批評的なものであつて、「自分はこれまで人生の淺瀨を歩いて來て居る。」といふ主人公の自己批評が作品のテーマをなして居るのである。「殉死」に就いて作者自身の書いた文章を見ると、これは所謂プロレタリア戲曲のパロデイであるといふことである。「ブルジョワ

階級の下らないことを寫した一くさりよろしくあつて、幕切になつて主人公が爆發し、お尻をまくつて社會革命を叫ぶのがおきまりになつて」居る定式を追つたものであるが、その尻をまくつて氣焔を吐く英雄も同じく下らないものであるといふ考へから、浪人石川主水に切腹させたのであるといふ。

此二作だけに就いて考へて見ても、氏の劇作上の傾向の大要は十分に覗へる。ところが此二作は共に批評的傾向の強い作品であるのにその手法に至ては全然相違して、前者は嚴正な寫實主義であるに反し、後者は極めて自由な技巧に依つて扱はれて居る。これは「殉死」が一つのファルスである以上當然なことであるとはいへ、其處に作者の心の大きな動きがあることは見遁すことは出來ない。この動きは他の諸作の間にもそれ〲觀ることが出來る、そして此點から我等はこの作者が旺に流動し成育しつゝあるのだといふことを強く感ずるのである。然し編者は「嫉妬」にあらはれたやうな鋭い心理解剖が結局氏の最も得意とするところではあるまいかと思ふが、果してどうであらうか。「殉死」は大正十五年七月、淺草松竹座に於て、井上正夫、大東鬼城、柳さく子等の手に依つて上演されたものである。

關口次郎篇解說

關口次郎氏は本名二郎、明治二十六年六月、福井縣敦賀に生れた。京都第一中學校、第一高等學校を經て東京帝國大學獨逸文學科を卒業した。爾後大阪朝日新聞に二年、東京朝日新聞に三年記者として勤務した。氏の戯曲家としての活動はほゞ大正十二年震災前後に始まつたものと言つてよい。

關口氏の戯曲は多く寫實主義の作品であつて客觀的色彩が濃い。「母親」、「次男」、「姉」、「秋の終り」等がそれを示して居る。けれども客觀的とは言ひながら水木氏に於けるやうに批評的精神がはつきりあらはれて居るのでなくて、作者の生活感情が作中の人物の內で呼吸して居るのである。たゞそれ等の人物に氏は客觀的存在を與へようと努力する。此目的のために氏の周到にして堅實な寫實的手法が役立つて居るのである。

けれども氏の戯曲の總てが寫實主義の作品であるとは勿論いひ得ない。「青年と强盜」、「乞食と夢」その他には寫實を越えて作者の主觀を燃燒せしめようとする意圖が覗はれる。

氏の作品には以上のやうに大體に於て二つの傾向が見られるが、その何れの場合にあつても氏は樂々と書いて行く

方の作家ではない。刻苦して作品を築きあげて行く、さういふ行き方の作家である。從つて、今までの處ではさう大規模の作品はないやうであるけれども、さういふ種類の戲曲をも將來に期待し得る作家であると信ずる。

その思想的傾向に就いては、平凡人がその平凡を乘り越えようとする苦悶といふやうなものを全體の作品から感ずるやうに思ふのであるが、今仔細にさういふ點に就いて考察する暇のないことを遺憾とする。

附言、本篇の解說は井汲清治氏が執筆して下さる筈であつたところ、急に同氏に差支が起り、止むを得ずさし迫つて編輯部で間に合はせなければならない事になつた。何の準備もない上に時間の餘裕もなかつたために、かくの如き不十分な解說しか附けられなかつた點を謝します。

編輯校訂
責任

吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戲曲全集・第四十八卷
現代篇第十六輯・第四回配本

著作權者代表者檢印

禁無斷上演

昭和三年六月二十五日印刷
昭和三年六月二十八日發行　（非賣品）

著作者　岸田國士
　　　　佐藤春夫
　　　　犬養健
　　　　田島淳
　　　　水木京太
　　　　關口次郎

發行者　和田利彦

印刷者　島源四郎

製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二　四四一五
振替東京一六一七

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷